木呂子敏彦著作集

鳥の眼・みみずの目

木呂子敏彦著作集刊行会

刊行のことば

木呂子先生は公人としての活躍だけではなく、私人としてもその探究心、発想力、社会的公正、情熱、行動力、どの点からも十勝の生んだ大先達だということに異論はないと思います。この本はそう思う人達二百人の発意で出版が決まりました。改めてページをたどると、教育、森、農業、土づくり、文学、歴史、まちづくり、まさに特異な「木呂子ワールド」が無限に広がっていき、とどまるところがありません。その広がりをどう構成していったら良いのか、悩んだところですが、随筆、書簡を除いて先生の軌跡そのままに、年代順に書かれたもの、語られたものを並べることとしました。年譜も示しましたが、どの一文もその時その時の思い入れ、息吹きに溢れていることを感じていただけるでしょう。

先生は九十歳を迎えました。まさに十勝現代史の証言としてこの一冊をまとめることができたうれしさとともに、協力いただいた皆様にお礼を述べさせていただきます。この本が糧となって、次代の木呂子先生が輩出してくることを願わずにいられません。

木呂子敏彦著作集刊行会
刊行委員長　杉浦　壽

目

次

1930年代～1960年代

朝日輝やく……14
槲の木……16
千家元麿さんの死と思い出……19
教育の前進のために～教育委員二ヵ年の体験より……23
北斗を憶う……36
光を掲げた人……40
技術革新と教育……42
定時制農業教育の進展～木呂子構想の展開……67
村づくりと教育～教師のために……83
北海道の学校と建築～学校はハコではないこと……125
水と空気は日本一～近代都市へ歩むわが帯広の自慢……130
昭和初期の伏古……135
北海道開発二眼レフ論……140

1970年代

ヨーロッパの地域開発……144
チューリッヒから……160
土地を生かす農業……164
青少年の師父……171
農民的酪農経営を実現しよう……175
江差追分や子叩き唄がブルガリアにあった……183
わが魂の中の山河……201
賢治記念館を建てよう……204
校歌制定の思い出……207
誰かこの「若者」中原悌二郎に惚れる者はいないか……211
十勝から北海道を考える……220
はみだし先生の思い出記……233
街の中から電柱を追放できないのか……237
活力ある大地に起つ農業発展の道を……244
〈宮沢賢治〉との出会い……254
「近代主義の精算」を指摘～保田与重郎の創作時代について……257

1980年代

ブルガリア始末記……262
鳥の眼・ミミズの目から……270
私の土地利用「開眼」(1)……283
私の土地利用「開眼」(2)……306
口は目ほどにモノをいい～私の観光論……326
石勝線への提言……328
森林の中に農場あり・東ドイツ農業と矢島理論……330
小規模な農協をめざして～北海道中札内村……338
弱肉強食の論理から棲み分けの論理へ～地域主義の変貌……352
農民なくして食べものなし～アメリカ農業視察報告……366
水資源と私達の生活……388
アメリカ農業の沿革を考える……398
宮沢賢治の卒業研究……412
知事公館の椅子……422
女性は生産の根元……424
柳田国男・北海道の旅を(上)……442
柳田国男・北海道の旅を(中)……462
柳田国男・北海道の旅を(下)……474

カール・ベック邸について……502
森が土を作り水を作る……514
もう一つの連絡橋……546
仮説「北海道芸術工科大学」学長の誕生……549

1990年代〜2003年

水耕思想の土壌肥料学から地球に優しい土壌肥料学へ……554
ソ連抑留について語る……611
至誠至純の人倉田百三先生……632
地霊……636
賢治結縁……639
流転人生「私のなかの歴史」……643

いのちの大地に、いのちの食べものを……666
生命力溢れる大地を……678
忘れ得ぬ農人前橋真八郎翁……680
西帯広工業団地について……686
至軒寮の人々……700

随想……707

続馬喰一代・708
もう一人の知事・710
無期懲役・712
青年企業家・714
安孫子賞・716
手前筋子・718
次郎物語・720
地方文化（ぢかたぶんか）・722
教師の船・724
三笑亭・726
続三笑亭・728
フラワー・ストリート・730
造園学部の設置を・732
賢治と豊彦の童話・734
小鳥の来る日・736
新しい北海道人像・738
自由な大気・740
野草園にて・742
十勝平野の上空・744
スウェーデンの燐寸・746

うばぐるま社会・748
アメリカの鍵・750
カリフォルニアの土・752
シスコの海岸にて・754
幻の大地・756
緑の週間・758
万物は流転する・760
柳田学の展開を・762
オールド・トリーズ・イン・タウン・764
証言・太平洋戦争・766
石坂洋次郎先生騒動記・768
永六輔に物申す・770
天田愚庵のこと再び・772
パリの石畳・774
北京の歓談・776
永六輔の返事と江政敏・778
川村秀雄先生を悼む・780
萬葉僧仙覚律師のこと・782
萱野茂「アイヌの碑」によせて・784
エエンネエンヌプリの異相・786
畑ちがい（1～9）・788
独言独語……805
注釈……824
木呂子敏彦年譜・872
執筆年譜・874
お礼のことば・876

1930年代〜1960年代

朝日輝やく
槲の木
千家元麿さんの死と思い出
教育の前進のために〜教育委員二ヵ年の体験より
北斗を憶う
光を掲げた人
技術革新と教育
定時制農業教育の進展〜木呂子構想の展開
村づくりと教育〜教師のために
北海道の学校と建築〜学校はハコではないこと
水と空気は日本一〜近代都市へ歩むわが帯広の自慢
昭和初期の伏古
北海道開発二眼レフ論

朝日輝やく

（十勝農業学校研究科寮歌）

一、
朝日輝く柏ケ丘
太く雄々しくそそりたつ巨木
遥かなる希望　遥かなる希望
強く生きよと　おおその姿

二、
光り溢るる十勝平野
いや果て広ごる豊けき実り
歓喜の努力　歓喜の努力
汗に生きよと　おおその平野

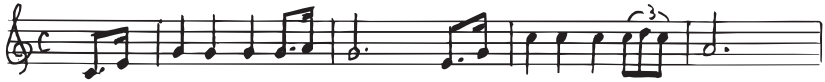
三、
清く流るる十勝川
ゆるくささやく久遠の真理
絶えざる学業　絶えざる学業
学びに生きよと　おおその流れ

四、
遠くそびゆる大雪山
深くいただく千古の白雪
限りなき向上　限りなき向上
一路たどれと　おおその高峯

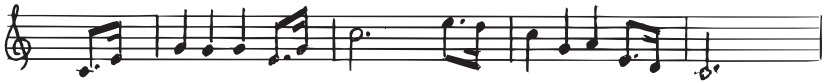
昭和九年

朝日輝やく

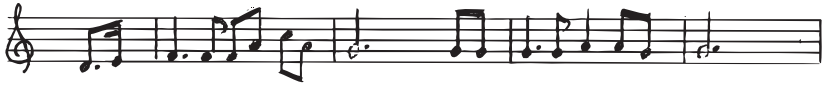
木呂子敏彦　作詞
畠山　正芳　作曲



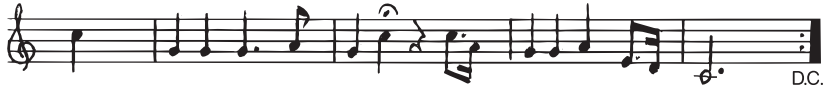
1、あさ　ひかがやーく　かしわがーおーか
2、ひか　りあふるーる　とかちへーいーや
3、きよ　くながるーる　とーかちーがーわ
4、とほ　くそびゆーる　たいせつーざーん



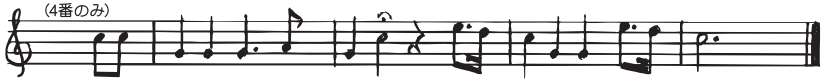
ふと　くおおしーく　そそりたつきょぼく
いや　はてひろごーる　ゆたけきみのーり
ゆる　くささやーく　くおんのしんーり
ふか　くいただーく　せんこのはくせつ



はる　かなるーきぼう　はる　かなるきぼう
かー　んきのーどりょく　かー　んきのどりょく
たー　えざるーがくぎょう　たー　えざるがくぎょう
かぎ　りなきーこうじょう　かぎ　りなきこうじょう



つ　よくいきよと　おおそのすがーた
あ　せにいきよと　おおそのへいーや
まな　びにいきよと　おおそのながーれ



いー　ちろたど　れと　おおそのたかーね

槲の木

皆さんは、十勝に住んでゐますね。ですから皆さんの心の中には知らない中に「十勝魂」といふものが芽生えてゐるのです。その十勝魂をよくあらはしてゐるものは、何といってもあの節くれ立った槲の木ではないでせうか。

本居宣長翁が歌はれた。

敷島の大和心を人問はゞ
　　朝日に匂ふ山桜花。

が大和魂をあらはすものならば、

蝦夷の地の十勝心を人問はゞ
　　朝日にそびゆ槲の巨木。

とでもいってよゐでせう。

では槲の木が最もよくあらはしてゐるといふ十勝魂とはどんな魂でせう。
二年生のとき皆さんが「しひの木とかしの實」でおそはった、あのどんぐりの堅い皮の中にひそまれたまけじ魂こそ、あの天にそゝり立つ大木となったのです。
西條八十さんの詩に、こんなのがあります。

こゝろが寂しくなったとき
こゝろが小さくなったとき
僕は山へ登るんだ
　長い草を踏みしだき
　くらい並木をかけぬけて
　僕は山へ　登るんだ
　山の　てっぺん　青空だ
　遠くの町は豆粒だ
僕は大きく　どなるんだ
　「見てゐろ今に　豪くなる」
　するとこだまが返すんだ
　「見てゐろ今に　豪くなる」
僕のこゝろは軽くなる
　たとへ　みんなが知らずとも
　山のこだまは知ってゐる

僕のこころを知ってゐる

此の小さいどんぐりも、「今に見てゐろ」きっとかう叫んだでせう。そしてあの槲の大木となったのです。
然し、大木になるまでの幾百年を考へてごらんなさい。大風もあったでせう。大雨も大吹雪もあったでせう。
一滴の雨も降らなゐ日照り、零下何十度の酷寒、さては雷鳴の轟、野獣の咆哮、かうした苦しみにたえて、
一日一日伸びたのです。

ごらんなさい、あの槲の皮はだを、なんとがんこなことでせう。節くれ立って鋼鐵のうろこのやうにごつごつしてゐます。げんこでなぐると、かえって皮はさけ、血が流れ、骨もくだかれてしまひさうではありませんか。其の根はしっかりと大地にはって、其のひげねの一つ一つが地中へ深く喰ひこんで、まるでたこの足のやうにひろがってゐます。其の枝はがっちりと節くれだち、丁度天を支えてゐるような姿、

「天よ落ちて来い、どっこい支へてやるぞ！」

かうがんばって高く高く大空へ伸び上ってゐます。
そして其の梢の小さな芽は、一つ一つがいきいきとみんな大空をむゐてゐます。又寒い冬にもなほ褐色の葉を梢につけてかさかさ音をたててゐる様子は、全くねばり強いものですね。皆さん、此のどんぐりの持つ大きな希望、苦しみに耐へて上へ上へ、又下へ下へと伸びひろがっていくあの姿！　これがほんとうの「十勝魂」ではないでせうか。

昭和十一年一月　芽室町郷土読本　芽室村教育研究会

千家元麿さんの死と思い出

もう詩人千家元麿＊さんといっても、知っている人は少ない。私たちの中学時代の教科書には詩がとりあげられていて、ホイットマン＊風の作風は私たちを憧れさせ、事実作品にホイットマン讃仰の詩がいくつかある。

武者小路実篤さんの評を以てすれば、

「実際彼は日本現代に生きていながら、天才達の世界に住み、自分の想像の世界に住んでいて、彼にとってはこの世も楽園であり、詩の国であり、あばら家も夜の宮殿になる。白鳥が高貴な存在になり、下肥の車が天からおりて来、星は天で神秘の宴会をひらくのだ。彼は現世では貧しい詩人にすぎないが、想像の世界では高貴な詩人であり、自然や人間や動物や植物を讃美するために、生きているような詩人である」。

勿論、ここで武者小路さんのいう現代とは敗戦後の混迷の中にあった現代のことである。その千家元麿さんが亡くなられたと新聞は報じている。私にとっては忘れがたい詩人のひとりだ。

昭和十三年、私はその頃東京で小さい雑誌の編集の仕事をしていた。詩欄を担当し、毎月詩人を訪ねては詩の原稿を依頼し、その原稿を手にすることを至福の時間としていた。白樺派の詩人では何といっても千家さんであった。あの丈（たけ）の高いヒューマニズムは、私たちの魂にやさしく再生と快癒の喜びを与えてくれた。

池袋から東上線に乗って板橋近く某駅で下車、武蔵野のいかにも新開地らしい郊外の道をたどった。街は新しくポツポツと商店らしい家が何軒かあり、街を外れて千家さんの家はあった。もう夏の真盛りであった。白いワイシャツはぐっしょりとぬれていた。「御免下さい」と戸を開けると、大きな丸まげ姿の奥さんが出てきた。家の奥までずっと見えて、ここが詩人の住居かと思われるような、ごたごたした当時私の住んでいた神田あたりのしもた家風と変らない様子で、畳もだいぶ疲れているようであった。

それまでたずねた高村光太郎＊、萩原朔太郎＊、尾崎喜八＊さん達の、まず玄関のベルを押してのとは、およそ勝手が違った訪問であった。出てきた詩人は蓬髪の体格雄偉、しかも自然と人を和ませるような風貌の人であった。

この方が千家さん、一瞬そう思った。というのはこの水銀柱が昇りきったような暑さのなかをドテラ姿だ。それも煙草の火をこぼしてか、あちこちに穴があいて、ボロ綿が無数にはみ出している。ロシアのムジーク＊も着ていないようなドテラ姿であった。しかし、詩人は少しも気にしていない様子であった。

私は少年の日から千家さんの詩に親しんできたことを語り、私の編集する雑誌のことを語り、詩の原稿を書いて頂きたいことを述べる。詩人は圓らな目を細めて話を聞いてくれた。

奥さんが子供に命じて使にやったらしく、氷水の通い箱をかかえて帰ってきた。「さあ暑いでしょう。おあがり下さい」とすすめられて、飾らないこの家の空気に私は感動してしまった。「私はね、昨夜すっかり酔って帰ってきて、近所のドブに落っこちて、気がつかないまま危なくお陀仏になるところだったのですよ」と詩人は何事もなかったかのように、笑って聞かせてくれた。ドテラ姿はこの始末であった。

こうして千家さんとは初対面で、詩の原稿は頂くことになったが、あれから十年、この間に千家さんは奥さんを亡くされたばかりか、あの時の御子さんを敗戦の前年にビルマ戦線で亡くされている。

悲哀の戦後を迎えられた千家さんの詩が『心』誌八月号にのっている。絶筆の詩といってよいが、千家さ

んの面目がそのままである。

静かな墳墓

私は死が迫って来るまで
愛のあるかぎり、生命の尽きないかぎり
私の胸の火が燃えているかぎり
私の胸の中にヒューマニティが存するかぎり
人の世が不正であろうが不正でなかろうが
悪かろうが　善かろうが
地上の生物に愛の火が消えないかぎり
人間に宗教心があるかぎり
宗教心を嘲罵する者が多い現代でも
私は宗教を讃美し　祈祷も怠らず
地上に善を救うために生きるのだ
愛とあわれみが私に残っているかぎり
私はむやみに自ら生を無意味には出来ないのだ
僕の祷りは燃えるのだ
それが人間の義務なのだ
同胞や社会のため義務をつくしたいのだ

僕の愛で全地球をつつみたいのだ

千家元麿さん

何という偉大な愛の詩人であろう。これからも、千家さんの詩は若い諸君のために魂の賜物を贈り続けてくれるであろう。日本にもホイットマンのような素晴しい詩人がいたことを覚えてもらい、千家さんの詩を愛してほしい。

よく合唱コンクールのテーマ曲に選ばれる「川」は千家さんの詩だ。あの合唱のリズムを思い出していると、魂の詩人千家さんと出会った日のことが思い出されるのである。

（昭和二十三年春シベリアより復員したばかりの春、頼まれて母校帯広中学講師として毎週土曜日教壇にたった。生徒のつくる同人誌『柏葉』のために、寄稿の求めを受けて復員してはじめて書いた原稿である。）

昭和二十三年　『柏葉』帯中三期生の同人誌

教育の前進のために

―教育委員二ヵ年の体験より―

教育行政の民主化

そもそも教育委員会は教育の民主化のために、公正な民意により地方の実情に即した教育行政を行うために生れた機関であります。

しかし実際に教育行政に従事する諸君が、案外この簡単な立法の精神を見落としている。また見落としがちなのであります。

長い間の中央集権的、官僚的な教育行政の枠の中で垢じみてきた諸君が、今なお依然としてその慣習から抜けきらないのであります。

私はこの官僚化と、外部の権威又は権力に依存しようとする傾向に対して戦ってきました。単に教育委員会が生れ、教育委員が選出されれば、教育行政の民主化が図られるというものではなくて、従来の教育行政の機能の中から完全に事大主義が一掃されない限り、教育への民主化は実現されないというのが私の信念であります。

教育基本法にも明らかに、教育行政は教育の目的を遂行するのに必要な諸条件の整備確立を目標として行われなければならない、と規定しているのであります。

昭和23年教育委員になって間もなくの頃、豊似にて
右から林さん、坂本直行さん、三人目木呂子

教育行政が指揮監督命令等、種々なる権力行為の一かたまりではなくて、教育のための条件を整えることであると規定してあることは、極めて意味の深いことであります。

いってみればあくまでも、教育行政は一人一人の児童や生徒たちの成長発達のために、奉仕するためにあることに気がつかねばならぬと思います。

総合開発と教育行政

教育委員会が生れ、教育行政が一般行政より独立したということは、一般行政から無関係の地位におかれたという意味ではなく、不当なる政治的支配や官僚的な統制を排除するという原則を貫くためのものであります。

したがって北海道総合開発の如き道政の基本であり道民生活の基礎的な問題から、教育行政が無関心ではあり得ないのであります。

日本の再建は産業の再建です。正しい産業の起らないところに、文化国家も平和国家の建設もありません。

北海道の総合開発は、日本の産業再建の一環として非常に重要な意味を持つものであって、国家の施策としてとりあげられているのも、この点からであります。

北海道の総合開発は、本道のまだ開発されない多くの資源を開発して、産業の振興をはかるにある訳ですが、資源を開発し産業を進展させてゆく力は、ただ経済だけの力ではなくて人間の技術とそれを正しく生かす能力であります。

人間の術と能を開発し、育成してゆくものは教育の仕事であります。教育行政が総合開発計画に対して、正しい計画をもち、緊密な協力なしには北海道の産業の進展があり得ないことは申すまでもありません。

明治の当初本道の開拓事業が、日本で最初の札幌農学校の開設と共にはじまったことは意味の深いことであります。

農業教員の養成

今日まで私が、農村における高等学校の開設に努力いたしまして、もっとも困難に逢着いたしましたのは、何といっても立派な教員を得られないということであります。真に農村を愛し、農村を理解し、新農村建設に骨折って下さる先生の得られないということであります。

殊に昨年、教職員免許法なる悪法が制定されて以来、一層この問題の解決を困難にしているのであります。全然ぬけ道のないこの法律によって教員採用の門をせまくし、本道のようにただでさえ小中学校の教員補充に困難している地帯におきましては、実に困ったものであります。

教員待遇の問題、住宅の問題もありますが、教員をやって頂く資格のある方がまことに少ない。この失業難の叫ばれている時代に奇異のようでありますが、実はこうした大きな壁の出来たことであります。

これに対し政府は何をやっているか。農業教員の養成については、本年ようやく帯広畜産大学に農業教員養成科を設け、僅かに二十名の募集であります。しかも何等の予算措置なく、既決予算のワク内でやっているのであります。しかもこの人々が教員として教壇に立つのは四年後の話であります。

本道二七七町村。一町村に中学校高等学校を通じて二名の教員を配置するとして、五五四名の農業教員を必要とするのであります。政府は何年かかったら、この教員の充足が出来ると思っているのでありましょうか。算術的に考えても二十八年を要するのであります。まことに馬鹿々々しい話であります。

新教育はもはや、農業関係の大学を卒業したからすぐに使いものになるといったものではありません。昔のような教壇の上で、通り一ぺんの講義式の教育方法の時代は去りました。真に地についた実際的な農業生活の中から、新しい農村のあり方、農業のあり方を体得させる農業教育には間にあわないのであります。

ここに何としても、北海道総合開発の観点からも、中等農業教育の振興のためには、農業教育大学もしくは農業教員養成機関の設置が不可欠であります。これを政府又は道にやって頂かねば、農村における高等学校は、単に青年学校的な存在となってしまうのであります。まさに農村教育の前進ではなくて、明らかに後退であります。農業教育の危機と申しても差支えないでありましょう。

この問題は、ただ単に農業教員の養成だけではありません、工業、商業、水産、林業、家庭のすべての職業科教員の養成についていえるのでありまして、北海道総合開発の関連において、計画されねばならぬ急務であります。

職業教育助長法の制定

シャウプ勧告＊により税制が改められ、したがって今まで実業教育振興費として計上されていた政府の予

算は、平衡交付金にくりいれられ、正体のつかめない量となってしまいました。

しかもこれが今日職業教育の危機といわれている際でありますので重大な問題であります。

アメリカは御存知のように連邦国家でありまして、文部省というものがなく、教育行政は一切州政府の権限の中にあります。連邦政府は州の教育行政には一切干渉しない立場にありますのに、驚くべきことには一九一七年以来既にいち早く連邦政府はスミス・ヒューズ法＊によって、農村及僻地の職業教育助長のため、莫大なる金額を年々州政府に対して支出しております。

この助成は、都市に出て商工業に従事する青少年諸君は何れも農村の出身で、義務教育費は只でさえ経済負担の重い農村によって支払わられているのであるから、助成ということで還すという考えであります。

この助成は農業、工業、商業、家庭科の教員の待遇向上、施設や設備の改善になされます。ですから農山漁村に有能なる教師がどしどし入ってくるようにはかられてあります。

この助成は、農漁村で農業についてばかりでなく工業、商業、家庭についての教育をうけられるもので、第一次産業といわれる農業を高度の近代的農業に発展させ、次三男の青少年諸君が高い資質と智能を以て、どしどし都会の商工業に従事するという高遠なる理想から行われています。

この法律が作られた一九一七年（大正六年）とは、実に第一次世界大戦のさ中で、アメリカ工業の発展時代であり、更に一九三七年（昭和七年）ルーズベルト大統領のニューデール政策がはじまったアメリカ産業再編成時代に、ジョージ・ジーン法＊によって、この職業教育の助成等が大幅に引上げられたことは、注目に値するところであります。

日本の経済と産業自立をはかり、世界の先進国に劣らない産業を建設しなければならないわれわれは、何としても職業教育助長法を作る必要があります。

殊に北海道総合開発の推進のためにも、この職業教育助長法は何としても必要であります。

教育行政と素人

あまりにも専門家である教育者は、正しい社会の動きを見落としがちであります。これは従来の師範学校教育の弊でもありましょうが、殊にすべての事柄を抽象化する「教育哲学」なる化物にとりつかれているために、平凡な社会の事実や日常性の上にたって、仕事を進めるということに極めて臆病であります。

戦後の新教育と称する動きを仔細に検討してみますと、まことに仰言っていることはもっともでありますが、少しも地についていません。努力が空まわりをしているのであります。

この点、素人は大胆であります。教育委員会の委員をいわゆる教育の素人から選ぶということになったのも理解できるのであります。素人である教育委員の教育行政に対する正しい勇気こそ、教育の革新をもたらすものでありましょう。

学校植林を法制化せよ

地方財政にとってもっとも重い、もっとも苦しむのは学校建築費であります。橋梁や道路もさることながら、地方自治体や父兄の悩みは学校の建築費であります。

私はこの解決の方途として今日実施されている学校植林を法制化することを提唱します。学校に植林事業を付帯し維持することを国家の業務とするのであります。一切の費用は国家の手によってまかなわれるべきであります。

学校植林法は、わが国当面のもっとも切実な国土の緑化、治山治水の一助ともなり、樹木の輪廻はおおむね学校建築の輪廻と一致しますので、どれほどか地方自治体の学校建築負担を軽減するかもしれないのであ

ります。

従来地方で紛争の種となっている学校植林と農地問題、契約林に伴うところの戦時中に似た学徒動員化を解消し得るのであります。

学校は施設であって法人でないところから、植林の成果に対するアイマイ性も解決することを信ずるのであります。

学校植林が法の保護によって行われると、町村は今後安心して植林の更新から森林の果実によって、学校の修改築が出来るでありましょう。

今日、本道の各地に地名として残っている学田とか学林、このわれわれの先輩の遺した立派な構想を生かさねばなりません。

六・三制の完全実施

新しい学校教育制度がしかれて、何といっても一番困難で、一番苦労していることは、新制中学校の校舎の建築であります。

昭和二十四年四月当時、全道の馬小屋、お寺其他の仮校舎、廊下、物置、運動場、講堂などの仮教室でおこなわれていた学校の教育坪数は三万一六〇坪、二部授業をして間にあわせていた中学校を解決するために必要な教室坪数一万二六四〇坪、合計四万二九〇〇坪でありました。

しかし政府が建築補助の目標としている学童一人当坪数〇・七坪（北海道では〇・八坪、寒冷地条件として二割増になっている）の水準に達するには、十二万九五八一坪の建築を必要とする訳です。

昭和二十四年度のドッジ案＊にもとづく超均衡予算は、ついにこの大切な義務教育の整備については、一

銭も予算を組まなかったのであります。これに対しわれわれはじめ全国のほうばいたる輿論として六三予算獲得運動がおこり、昭和二十四年度補正十五億、昭和二十五年度四十五億、合計六十億円の建築整備費が計上されました。

この結果、本道は昭和二十四年度補正において、一万一六三坪、昭和二十五年度四万六三九三坪合計五万六五五六坪の割当を獲得することができました。

国民の正しい輿論の勝利は、本道の馬小屋教室や二部授業を完全に解消する、明るい見通しにたつことができた訳であります。

しかし問題は、新教育という新しい看板をかかげて馬小屋や廊下におしこんで授業を続ける、あるいは酷寒の地の二部授業という馬鹿気たことはなくなりましても、学童一人当〇・七坪という応急水準に達するためには、本道としては、なお七万三〇〇〇坪の教室面積の不足であります。

国は新制中学校の教育が正しく行われるためには、学童一人当一・二坪の教室面積が与えられることを理想としているのであります。ましてや応急最低水準〇・七坪をみたすに、なお七万三〇〇〇坪の教室をたてねばならぬのであります。

われわれはこのために、昭和二十五年度補正として十八億、昭和二十五年度四十五億、合計六十三億円の六三整備予算獲得運動をおこなっている訳であります。これは国民の正しく強い輿論の支持がなくては獲得できません。新教育を正しく軌道にのせるための何としても必要な予算であります。

以上の通り、われわれは北海道の新中整備費として、補助起債あわせて約八億六三〇〇万円の金額を獲得した訳でありますが、今後この問題の解決点として、第一に補助の対象となる学校の規模についてであります。

政府は十一教室（学級）以下の大きさの学校は補助の対象にしない原則に立っています。これはおよそ本

道の実情を無視したもので、新制中学校一一八四校のなか、二学級以下の中学校が七十一・五パーセントに及び、まして政府のいう十二学級以上の中学校は僅かに十パーセント、全道の九十パーセントの中学校に対しては一銭も補助が出ないということになる訳であります。

実際は行政折衝によりこの点を打開緩和はいたしておりますが、何としてもこの原則を訂正して貰わねばならぬのであります。

北海道を除く府県の小中学校の単級複式学校は十二・九パーセント、本道は五十八パーセント、すなわち四倍半の数値を示し四十五・一パーセントの開きを示しているのであって、本道のかかる実態を無視した措置に対しては、断乎として打破してゆく覚悟であります。

第二点は、本道の如き寒冷積雪地においては屋内運動場を必要欠くべからざるものとするのであります。この所用坪数十五万坪、これに対し全国九一六一坪の枠の中、その三分の一の三〇〇〇坪を本道分として獲得いたしましたが、十五万坪に対してまことに雀の涙でありまして、今後の努力を必要とするものであります。

第三点は昭和二十二年以降本道の新制中学校自力建築分は七万四六七一坪、金額といたしまして約十億五〇〇〇万円、全国では一〇〇億円を超しております。このため正直者が馬鹿をみるといった市町村理事者を窮地に陥れ大きな政治問題と化しております。これは政治に対する不信をますものであって、本道においては配分上相当考慮はいたしておりますが、政治的に当然解決すべき責任を政府は負うべきであります。

教員の待遇改善

国家公務員の給与について、人事院は八〇五八円ベースを支給するよう政府に勧告いたしました。しかし

政府は、現在の六三〇七円ベースから大体一〇〇〇円程度のはねあがりを見込んでいるようであります。

いったい現在の六三〇七円ベースとは、決して人々が仕事をしながら生活をまかなえるという給与ではなくて、政府が給与にあてうる財源をあちこちからかき集めて、それを人間の数で割って出されたものであります。丁度現在の農産物生産者価格が、農民がそれで生産費をつぐない、生活をまかなってゆくことから割り出した値段ではなくて、いろいろと他の経済条件から割り出して、最後にしわよせにして、これでなければ買ってはやらんぞ、しかも自分の作った生産物を自由に勝手に売ってはならんぞといった、人々の人格や生活を無視した価格の決め方とまったく同じなのであります。

人事院が勧告している八〇五八円ベースとは、現在民間の会社や団体の給与を平均してみると、八〇五八円になるからというのです。これは民間の給与水準にせめて同じにしようという真意であって、これさえも生活がまかなえるという計算の上に立っていないのであります。

今日官公吏の汚職事件が雨後の筍のように流行っておりますが、公僕といわれながら、その待遇が正当でないから、こうした事件がおこることに気がつかねばならぬと思います。

最近東京大学の原田教授が、世界的大学者でありながら、五人の家族をかかえて一万三〇〇〇円の月給でしかも月々一冊何千円もする書籍を買って学問をしなければならないため、立派な仕事をされながら、ついに病気にかかり、その医療費もなくて、自殺をされました。この大学者の本箱はリンゴの空箱であったことは、新聞の写真に出ていた通りであります。学問を粗末にし、学者を殺すということは、まことに日本の将来にとって悲しいことであります。

教員は公務員として社会の公僕であります。また先生という仕事は天職だともいわれています。公僕として、天職者としてその生活態度、品位は保たれねばなりません。共に苦しまねばならない今の世でありますから、先生だけが楽をしてよいというものではもちろんありません。

よい教育をして貰うためには、つねによく勉強もして貰わねばなりませんし、その品位も立派に保って頂き、教育者なるが故にかえって自己の子弟の教育もできないといった待遇は何としても間違いであります。

昔はといっても、今から十年前までは学校の校長先生の方が、町村長さんより月給が高かったことを考えれば、今の先生方の待遇の悪さも分ることです。

殊に北海道では千数百名もの先生が農村で欠員になっています。私は北海道は北海道独自の教育の待遇を考え、本当に立派な先生が、へんぴな農村や漁村にどんどん入っていって下さるような給与体系を必要とすることを痛感します。

今日の給与が南は鹿児島から北は宗谷の果まで、同じ俸給であることは間違いであり、しかも大都会は三割も月給を高くしてあることはあやまりです。北海道の中でも、政府の生計費調査では、道南の函館江差では五人世帯で八八〇〇円、釧路では一万四四〇〇円かかっているといった、実際かかる生活費にこんなに開きがあります。

先生の待遇をよくするということは、ただ月給をあげるだけではなくて、こうした地域差による不合理をもなおさなくてはならぬと思います。

教育と財政

教育委員会は、教育の自主性と民主化の確立のために生れたが、財政的には無能力である。まったくだらしがないといわれています。

私はその通りとお答えしています。それは教育委員会法という、教育委員会制度を定めた法律がそうなっているからであります。教育委員会には予算をたてる権限はありますが、財源は知事に握られています。つ

まり財政権はありません。

教育財政の独立、標準義務教育費法を作れとか、教育税を設けよといった議論はそこから生れてくる訳であります。中国では政府予算の十五パーセントは必ず教育費とするという天引予算であります。

しかし教育税の設定や教育費の天引予算は、必ずしも教育そのものを理解しているという証拠にはなりません。かえって教育の無理解からくる、権力による擁護とも考えられるのであります。

教育の民主化は、あくまでも人々の教育に対する理解によるべきであります。理解の上にたたない教育財政の確立は何でありましょうか。教育財政の確立は権力や法のかくれみのの中での仕事ではなくて、人々の理解と納得の上に立つべきです。

本当に教育のあるべき姿や計画が、常に人々の理解と納得のいく広報なり啓蒙を、果して教育委員会は努力してきたでありましょうか。教育のあるがままの姿を、その欠陥を、その進むべき方法を、いかに具体的に、道民のすべての人々に理解を得るように努力してきたでありましょうか。

教育は民衆のものであります。民衆が教育を理解し教育委員会を支持する時に、財政権のないことは何ものでありましょう。教育の民主化は、人々のよき理解の上にのみ、その発展が約束されるものであります。

教育は、あくまで教育専門家のものとし、人々には理解しがたいもの、近よりがたいもの、おまかせしておくべきものとするかぎり、教育財政の確立などどうして望まれることでありましょうか。

現在北海道における教育予算はどうなっているかといいますと、本年当初予算において総予算中三十四・四パーセントを占め第一位であります。産業経済費が農工商水産を含めて二十三・五パーセント、第二位であります。其他の予算をついでに紹介しますと次の通りであります。

道　庁　費　　九・八パーセント
保健衛生費　　四・五パーセント

土　木　費　　一・八パーセント
財　産　費　　一・八パーセント
公　債　費　　二・〇パーセント
社会労働施設費〇・七パーセント
統計調査費　　〇・六パーセント
選　挙　費　　〇・六パーセント
議　会　費　　〇・七パーセント
諸支出金　　一・五パーセント
警察消防費　　〇・一パーセント

しかしこれを全国的にみた場合、鹿児島四十二・二二パーセント、奈良三十九・八〇パーセントに遠く及ばず、児童生徒一人当り教育費をみれば広島四七四〇円、山口四五六七円で北海道は三五五五円となっています。

北海道の教育予算は、いわゆる標準義務教育費の算定基準を以てすれば決して低くはなく、基準より予算は約四億五〇〇〇万円上まわっており、基準によればかえって低くなるというのが実態であります。

われわれは、あくまでも教育の進展は人々のよりよき理解の上に推進することを熱願するものであり、道財政の三十四・四パーセントを占める教育費をいかに正しく、真に児童生徒一人一人の幸福と教育のよい効果をもたらすかに努力せねばならぬと思うのであります。

昭和二十七年　同盟情報

北斗を憶う

彗星の如く現われ
彗星の如く消え去った
違星北斗＊
アイヌの石川啄木といわれた
違星北斗は
その青春多感の日を
自己民族の研究と復興のために
魂も　血も　肉も捧げつくした。

北斗逝いて二十五年
その悲しいまでの志は
永久に地下のものであって
よいだろうか。
彼の中途に於て挫折した志は

我々今日、日本人の当面する
民族的課題でもある。
平等を希い、平和を求むる心
それは自主と独立よりないことを
北斗は喝破している。

北海道の大自然に育まれた
明治の先覚内村鑑三も
我々に自主と独立との
道を示した。
平和は何処よりくるか。
「吾れアイヌ也」と叫んだ
違星北斗の
血みどろの生涯は
我々世代に
その全身全霊とを以て
強くよびかける。
自主と独立とをこそ。

違星北斗年譜

明治三十四年　余市に生る。祖父万次郎はアイヌ最初の留学生として東京芝の増上寺清光院に留学し、後に北海道開拓使の雇員となった。姓の違星は、明治六年祖父に苗字を許され、アイヌにとって家紋ともいうべきエカシシロシが※であったので、これをチガイに星「違星」と宛字をしたものという。北斗は号で、本名は瀧次郎である。一歳。

明治四十一年　尋常小学校に入学。担任の奈良直彌先生に愛せられ、終生その精神的指導と影響を受く。八歳。（帯広にゆかりの深い画伯能勢真美は奈良先生の実子である）

大正三年　同右卒業。十四歳

大正六年　夕張線登川附近に木材人夫として出稼ぎ。十七歳。

大正七年　足寄町大誉地に出稼ぎしたが、病をを得る。十八歳。

大正八年　石狩鰊場に漁夫として出稼ぎをしたり、登村に柴刈に働きに出かける。十九歳

大正九年　畑を借りて茄子作りする。途中で病気再発。二十歳

大正十一年　徴兵検査に甲種合格。二十二歳。

大正十二年　朝里等に落葉松伐採に従事。病気をする。

七月　旭川輜重隊輜重輸卒として入隊。八月　除隊す。

上京を計画するところあったが、関東震災のため中止。二十三歳。

大正十三年　沿海州に出稼す。二十四歳。

大正十四年　西川光二郎＊氏及び高見沢清＊氏を頼って上京。その世話で東京市場協会事務員に就職。金

田一京助＊氏、後藤静香＊氏、松宮春一郎＊氏等の知遇を受く。二十五歳。

大正十五年　アイヌとしての自己の地位に深く苦悩し、民族復興の使命を痛感し、十一月飄然として北海道に帰る。二十六歳。

昭和二年　平取村に英人バチェラー＊氏の創立せる幼稚園を手伝い乍ら、日傭等の労働によって生活の資を得、アイヌ研究に従事す。余市の同族青年中里篤治と共にアイヌ青年の修養会たる「茶話笑楽会」を作り、その機関誌として『コタン』創刊号を出す。十二月から翌一月にかけ小樽新聞紙上にて、フゴッペの洞窟中に発見された奇形文字をめぐり、小樽高商教授西田彰三氏とその所見を戦わす。二十七歳。

昭和三年　売薬行商に従事。四月発病のため余市の実兄の許に身を寄せ、遂に病床の人となる。郷土研究家である医師山岸礼三氏の好意ある治療を最後まで受ける。二十八歳

昭和四年　一月二十六日永眠。二十九歳。

昭和五年　五月、余市小学校訓導古田謙二＊氏により蒐集整理された資料に基づき、希望社の後藤静香先生の手により遺稿集　『コタン』出版される。

昭和四十三年　平取町二風谷小学校校庭に違星北斗歌碑竣工、執筆は金田一京助先生、設計田上義也＊氏、除幕は北斗の旧友・吉田（旧姓平林）ハナ女史によりアイヌ振りにて除幕式。司会は貝沢正氏。

昭和二十九年八月　違星北斗遺稿集　違星北斗の会

光を掲げた人

二風谷小学校にある北斗の歌碑

まだＮＨＫがラジオ放送しかやっていない時代、昭和三十年代、日曜日ごとに朝の九時半から三十分間、日本の各界発展のために、心を砕き生涯を捧げ、道を開いてきた代表的日本人を取り上げて、「光を掲げた人」というシリーズを、毎回放送していました。

しかしそれは、代表的日本人といっても和人（シャモ）ばかりでアイヌの人はとりあげられませんでした。

丁度その頃、私は平取町二風谷というアイヌコタンの小学校が、十勝沖地震で損壊したのを頼まれて、復旧と建設のお手伝いをしている最中でした。あわせてアイヌの啄木とうたわれた違星北斗を顕彰するための歌碑建設の計画を進めている時でした。「冗談じゃない。アイヌは先住の立派な日本国民だということを忘れているのではないか」と義憤を感じ、小此木さんという当時ＮＨＫ札幌放送局の放送部長を訪ねて談じこみました。すっかり共感して頂き、この番組となって実現し、全国に放送されたのであります。

違星北斗の生前中、北斗の志に共鳴し、経済的にも支援の手をさしのべ、しかも没後残された遺稿をとりまとめ、遺稿集『コタン』を発刊したのは、希望社の後藤静香先生でありました。北斗の枕もとにあった原稿類をとりまとめ後藤静香先生に届ける労を取り計らったのが俳誌『緋衣』の主宰者古田謙二先生で、古田先生は北斗にとり、俳句の師匠でもありました。

後藤先生は私にとっての大恩師ですが、この放送実現を喜び、放送を聞き乍ら涙を流されたそうです。小説『次郎物語』の著者下村湖人先生からも激励のお手紙を頂いたりして今にして感慨無量のものがあります。

「違星北斗の歌碑から」

沙流川は昨日の雨で水濁り
コタンの昔囁きつつ行く

平取に浴場一つ欲しいもの
金があったら建てたいものを

昭和三十年　ＮＨＫ放送台本から

技術革新と教育

―戦後の急激な産業の変革に対して勤労青年教育をどのように対抗させていくべきであろうか「教育の質と構造」の問題―

ご存知のように今日の日本国憲法は第二十七条にうたっておりますように、われわれ国民は働くことによってメシを食ってゆくのだということ、即ちすべての国民が勤労の権利を有し義務を負うのだということを日本の国民的立場として、基本的人権の確立の基礎として、意義づけています。

そうした意味で勤労青年教育というものを考える時、教育の系列の中での特殊な存在である、傍系的なものであるという考え方はそもそもおかしいのではないかと思うのであります。

私は、すべての教育が働くものの教育でなければならず、働くものの教育こそが教育の基本であると信じます。

このような立場から第一に考えてみなければならないことは、戦後の日本の産業が国際情勢の中で大きな変動に左右せられ、第二の産業革命が行われているということです。

今や世界の産業は、人工衛星を頂点とする科学と技術の下で急激な変革の途上にあり、われわれが全く予想もしなかった新しい姿で、その質と内容が変化しつつあると思うのです。

このような事実に対し、今後の日本の産業を背おっていかなければならない働くものの立場を、どのよう

に対応させていくべきであろうか。

われわれは意識するとしないとにかかわらず、これを教育の問題として受けとめ解決を迫られているのだと考えたいのであります。

昨日、私は偶然のことから『出口なき犯罪』というドイツ映画を観て痛感したのでありますが、それはソ連で八年間の捕虜生活をおくり、祖国に帰ってきたドイツの一青年が、戦後の急激なる産業の変革に対応するところの新しい技術教育をうけていないがために、新しい職場を得ることができず、遂には恐るべき犯罪を犯すに至ったというストーリーです。

そこにはドイツの新しい産業発展の景観や、その中で働く人々が、戦後の新しい産業技術に対応できないで苦悶する姿が、実によく現れているのであります。

このような現象は、日本の産業中枢においても、すでに現れているのでありまして、特に私どもが外国の資本と技術の導入によって設備されている工場を見学して痛感しますことは、戦前のいわゆる熟練工といいますか、古い経験と技術の上に立った労働者の諸君が、新しい産業のシステムに対する遺和感を感じて、不安を感じているということです。

この事実は、単に日本産業の中枢部のみならず、今やすべての産業に広がろうとしているのでありまして、この問題を放置しておくならば、日本の産業は外国の産業から全く立遅れてしまいます。

いいかえるならば、働く者の技術が工業の変化に対応し、適合するような「教育の質と構造」を形成してゆかなければ、教育というものが全く妙な超越的な存在になり、ひいては産業を基盤とする国民生活の発展を阻害する結果になるのではなかろうかと思うのです。

第二の問題は、日本の産業におけるところの、特に第二次産業の職場内における対人関係が著しく変化したということであります。

戦前はご承知のとおり、労働組合の立場が憲法により保障されていなかったのでありますが、今日においては、労働者の団結と、それによりますところの団体行動の権利が、憲法の第二十七条によって明らかに認められ、職場における新しい民主的な秩序が漸次成長しつつあります。

ところが今日の勤労青年教育、特に北海道のような広範な地域の中で進められている教育では、これらの民主社会の環境に順応し、馴染んでいくような人間を育成することが非常に困難なのでありまして、われわれが勤労青年の教育を考える場合には、特にこの問題について考慮する必要があると思うのであります。

農漁村は胎動する

第三の問題は、日本の産業におけるところの二重構造の問題です。

私は定時制教育を見つめている立場からお話したいと思います。とにかく現在の日本産業の現状は、一方において非常に進んだ近代工業がある反面、一方には非常に生産性の低い農業や林業や鉱業が配置されているのが事実でありまして、これが日本の産業の発展、ひいては国民経済の発展を阻害している原因となっているのであります。

特に北海道の場合はこの傾向が強く、工業の中にも遅れた工業と進んだ工業とがお互に矛盾した形態で存在しているのではないでしょうか。

単に素材を供給するといった程度の零細な企業が他方に彪大にあるかと思うと、一方には室蘭の日鋼や富士鉄とか、あるいは、砂川の東洋高圧のような近代的な工業が発達しています。

また、農業の中にも遅れた地帯と進んでいる地帯があるという問題がありまして、これが農村の内部におけるところの階層分化をもたらす大きな要素となっているのであります。

現在の日本農業を全般的に見ますと、いわゆる兼業農家がどんどん増えつつあり、その比重が今日非常に高まってきています。

北海道では昭和二十八、二十九、三十一年の冷害凶作で、天候異変を単に冷害としてのみ受けとらざるを得なかった農家が非常に多かったところに、今日寒冷地農業の確立の必要が叫ばれる理由があるのでありまして、この北海道農業の弱点が今後の重要な問題となる訳であります。これが昭和六、七、九年の冷害凶作当時を通じて考えてみますと、北海道が冷害凶作の場合には、必ず東北地方も冷害をうけていたのですが、これが今日、北海道だけが冷害に絶えず苦しまなければならないところに、北海道の農業問題があると思うのです。

私は、昨年山形県の飽海郡の庄内、特に酒田市を中心とした地帯の農村の実状を見てまいりました。既にこの地帯ではお米の反収が四石取り、即ち十俵の収穫をあげることが一般農家の技術になっておりますし、また長男以下の子弟を大学に通わせることが常識となっている程、農家経済の程度、教育の程度が進んでいるのであります。

次三男も、どんどん大学に入学させる、これは特に昭和三十年前後からの変化でありますが、昭和三十年以前は、大体農家で次三男を家族の手間として働かせる場合には、経営主であるおやっさんは必らず一年間に十万円を貯金してやらなければならないという形に、大体村の仕組がなっていたのです。十年間で一〇〇万円、一〇〇万円あれば次三男はなんとか一本立で新しい職業に転換できるのでありまして、これによって農業の零細化も防ぐことができる訳です。

これは二十年の歴史を有する次三男連盟とか青年団に次三男部というものがあって、これが次三男の地位を確立し、更には農業経営そのものの発展にも寄与してきたからです。

私は農村にまいりまして、いつも実例としてお話するのでありますが、酒田の郊外遊佐町では二十年以上

も前から一貫して町長、農業協同組合、農業委員会、農民団体、青年団体、婦人団体、教育委員会等が合議をいたしまして、年間八十五日の農家休業日を設けました。

今日、最低賃金法等で問題になっております勤労者の労働条件では、年間二八五日から三〇〇日の労働日数が妥当であるという考えに立っているのですが、少なくとも飽海郡一帯の農村では既にこの水準に達しているのであります。また、最近秋田、山形県地方の青年がこの庄内地方に年雇労働として入ってきていますが、これらの青年が経営主と団体交渉をいたしまして、一週四十八時間の労働条件を獲得し、しかもこれらの勤労条件の下で、経営者と労働者の双方の生活水準がどんどん向上しつつあるのであります。

このような事実をみて、私は北海道の農業は、まだまだ人間の労働条件というものが浮きぼりにされていないところに、多くの問題があるように考えさせられました。

どうも仕事が農業の関係なので農業の話になりますと詳しくなるのですが、いずれにいたしましても農業の中にも非常に遅れた農業と進んだ農業があり、その中にもいろいろの問題が含まれているということが第三の問題点であります。

村づくりと人づくり

第四の問題として、私は、特に農漁村の立場で考えているのでありますが、農漁村の青年諸君の帰村率の問題であります。

昭和十年前後に東京教育大学の野尻教授が『農民離村の研究』という膨大な研究報告を発表しているのですが、これは農漁村の青年諸君が都市の新しい職場に就職しながら、その新しい職場の生活に適応できないために再び村にもどってきて、農漁村の潜在失業者になっている事実について調査したものです。

この調査によりますと農村の場合では、一〇〇人の青年が村以外の職場に就職しますと、そのうち三十三人が村に帰ってくる。いわゆる帰村率が三割三分、漁村の場合は、これが六割八分という数字が統計の上に現れているのであります。

私は、今日の農漁村におけるところの勤労青年の教育構造についても、これらの事実を足場にして考える必要があると思うのです。

いいかえるならば、農漁村の青年諸君が働く意思と体力を持ちながら、新しい産業の発展に対して、十分寄与し得ることのできるような教育の機会と場所が与えられていないという問題があるのです。

第五の問題は、中学校、高等学校の卒業生の、農業における追加労働力の実態についてであります。

昭和二十九年に文部省において、日本の農村におけるところの追加労働力の実態調査を実施しております。わかりやすくいいますと、中学校なり高等学校を卒業して、農業に従事される青年諸君が毎年いる訳ですが、これらの青年諸君の中学卒業生と高校卒業生の割合を調査しました。この調査によりますと、高校を卒業して農業に従事される青年の全国平均が二十九・五パーセント、約三割でございます。ところが北海道の場合は、十七・八パーセントという数字になっています。

全国で一番この割合が高いのは、長野県でありまして五十六・八パーセントであります。長野県では高等学校を卒業しまして農業に従事される青年諸君の方が、中学校を卒業して農業のお手伝をする青年よりも多いという事実であります。

戦後、農業の生産力において異常な発展をみせております北陸、東北地方の数字をみますと、一番遅れているといわれている青森県でさえ、高校卒業生が十九・八パーセントです。その他岩手県二十三・五パーセント、宮城県二十七・三パーセント、秋田県二十五・五パーセント、山形県二十二・九パーセント、福島県二十五・四パーセント、富山県三十・九パーセント、福井県三十パーセント、石川県二十九・四パーセント、

新潟県二十三・八パーセント、兵庫県二十七・五パーセントで山形県については、先ほど飽海郡一帯の進んだお話をいたしましたが、一方においては村山郡一帯のような経営の規模の小さい地帯があるため、平均の数値が非常に低くなっています。

北海道の定時制高校が一町村一校の形で非常に普及しておりながら、高校を卒業して農業に従事する青年諸君が少ないということは、北海道の定時制教育の持っている重大な問題ではなかろうかと思うのであります。これは一面から考えると、北海道の定時制教育は、農漁村の青年諸君の都市への流出を助長こそすれ、その地方の産業の底力たらしめる方向には進んでいないということを物語っているのであります。私は農漁村の青年諸君が、都市の産業に新しい職場を見つけていくことについては、敢えて異論を持つものではありませんが、一面において今日の定時制高校が、町村の苦しい財政によって維持されていることから考えあわせてみて、この教育投資が村の底力として還元されていないことについては、なんとしても問題があるように思うのであります。

翻って、これを都市の側から見ますと、都市の教育財政は、農村の教育財政のおかげで、安上がりの労働人口をどんどん吸収しているのだという、逆の関係がでてくるのであります。

丁度戦前におきますところの義務教育が農民の重い負担によって行われ、その義務教育を受けた子弟が都市の労働市場に吸収されていったのと同じ状態が、今日の勤労青年教育の一つの主流である定時制教育の上にも現れてきているように思うのです。

以上のような問題に対して、私は今後の定時制教育というものが、村づくり教育であると同時に新しい産業の発展に対応していくような、働く者を育てる教育の場に変えていかなければならないものと考えている次第であります。

都市と農村

農漁村から新しい天地に職場を求めて離村していった青少年が、農村では三割三分、漁村では六割八分が、又再び出戻ってくると申し上げました。これは新しい環境に対応能力の少い人たちばかりが戻ってくるということです。

結局、農漁村がこうした人たちの吹きだまりになってしまうというところに、問題がある訳です。おどかしを申し上げているのでなく、統計的事実をお伝えしている訳です。

しかもこうした青少年諸君が持っている非常に大切な隠れた能力をひき出す環境と条件が、所在する地域社会に十分に整えられていないということになると、農漁村はいったいどういうことになるのでしょうか。しかもです、今日の日本経済の客観的条件からいって、農漁村経済というものは決して明るい見通しに立ってはいない。そうした中で、少しでも生き抜き、農漁村を高めてゆく、あるいは支えてゆく農漁民の能力育成の機会と条件がないということは、青少年の前途にとって容易なことではありません。

ここで一つの実例を申し上げます。

ある村のことですが、農業青少年クラブの活動がものすごく活発で、農林大臣から表彰を受けたくらいよくやっておったものでありますが、二、三年もすると風船の空気が抜けたように音沙汰がなくなってしまいました。

どうしたものかと調べて見ますと、その青少年クラブのリーダーをしていた青年が非常に優秀であった。周囲の少年たちをぐんぐん引っぱっていたが、たまたまご本人の経営農地は僅か一町歩足らずの零細経営、どんなに工夫してみても農業としては成り立ってゆかないことがわかり、遂に農業に望みを絶って、ある大会社の採用試験を受けたらたちまち採用されてしまいました。しかもこうした青年でなければ、近代企業が

採用してくれないところに深い意味があるのです。
工業は、優秀な能力と資質の高いものだけを農村から労働力として吸収してゆくところに、問題があると思うのであります。
又、東京川崎を中心とした京浜工業地帯では、こういう傾向があらわれています。
今から五、六年前に国立教育研究所が中心となって、勤労青年の実態について追跡調査をやられた。それは川崎あたりの大企業になりますと、採用されるのは都市の子弟が大部分になってしまって、東北あたりから出てくる子弟を使ってくれない。これらの子弟はどこに吸収されるかというと、最近の国会でも話題になっている、最低賃金制度を立法化しなければならないといって騒がれている、系列産業の下請中小企業であります。低賃金でしかも近代的な労働条件がまだ確立していない、労働組合もできていない、五人か十人かの労働者の企業にしか採用されていないという事実であります。詳しいことは、五冊に及ぶ報告書になって文部省から出されていますから、関心をお持ちの方は是非ご一読をおすすめいたします。
それ程工業労働の世界では、目ざましいいろいろな変化がおこっています。当然農業漁業の世界も、併進はできないまでも追いついてゆく、距離をせばめてゆく努力がなければならない訳であります。
かつて柳田国男＊先生が、今から二十数年前に『都市と農村』という本をお書きになっています。
今日再び、技術革新を中心にして、都市と農村、工業と農業という問題が、あの当時と情勢はちがいますが、事実として深刻化し切迫化しつつあることであります。
昭和のはじめ、都市と農村の関係はどういうことかといいますと、結局軍備を拡張し、戦争にもっていって解決するという方向に動いていきました。農村から一銭五厘で青少年を兵隊に召集して戦場に送りこむ。満州を占領して少年義勇軍を組織して、開拓団として殖民するといったことが行われ、それからズルズル日本は敗戦まで悲劇に追い込まれていった訳であります。

英国の農業

さて、ここで話題をちょっと変えまして、英国のお話をしてみたいと思います。

今から何年か前、英国の雑誌『エコノミスト』が「英国は考えなおすべきだ」という論文を発表して、英国はもちろん日本の新聞にも紹介され、心あるものの関心をよんだことがあります。それはこういうことであります。

第二次世界戦争以前は、英国は地球のいたるところにユニオンジャックの旗をひるがえした植民地を持っていて、そこから安い食料や原料をもちこみ、それをモトにして本国で工業を発展させ、逆にその植民地を有力なる商品市場として、工業製品を特権を持つて高く売りつけるということを長い間やってきた国であります。

産業革命が進むにつれて、従来の食糧生産を中心とした農業は止めてしまって、主として畜産を重点とした牧場的なものに切りかえてしまいました。

アーサーヤング＊を中心とする近代農業を方向づけながら、その後の国際農業の発展の中心には遂になり得なかった訳であります。（飯沼二郎著『農業革命論』）

しかし、種畜の改良には依然として伝統的な強味を持っており、牛では、おなじみの「ジャージー」とか「ゲルシジー」、「エヤシャー」といった、豚でいえば「ヨークシャー」、「バークシャー」、「ハンプシャー」、「ジュロックジャージー」といったいずれも英国の地名でありますが、今でも日本の専門家は種畜を買うのなら英国であると考えているぐらいであります。ところが農畜産物はどうかというと、小麦はカナダから、バターとかハムベーコンといったものは近くのデンマーク、紅茶はセイロン、綿は印度、羊毛は濠州から持ってくるといった具合であります。

しかし今度の戦争が終ると、そうはいかなくなりました。印度やその他の植民地は独立する。カナダとか濠州も自主性をもち出すといった具合となりますと、今までのような調子にはいかない。あくまで互恵平等といった通商の原則が主張され、特権をいつまでもふりまわしている訳にはいかない。

そこで英国では、戦後の工業の復興に努力しながら食糧を海外から買いこむ訳ですが、工業の発展に伴って工業の製品のコストが下る程、必ずしも農産物のコストが下らない。いいかえるなら、工業が発展すればする程、工業製品のコストは下るが英国の労働者は余計に働いて割高の食糧を買いつけなければならないという矛盾にぶつかる訳であります。

それればかりではありません。二度の大戦争を通じて島国である英国は、食糧のある程度の自給力の必要性を身にしみて感じさせられました。工業も発展させなければならないが、農業も工業の発展に遅れないように発展させてゆかなければならないのだというのが結論であります。

この考えについては英国でも大いに異論があり、われわれの立場から見てもいろいろ問題がありますが、とにかくこうした考えがもとになって、英国は工業、農業の飛躍的発展のために一九四六年に教育制度の大改革をやり、新教育法を制定したのであります。

その中でもっとも特長的なことはカウンティ・カレッジ（地方大学）＊の制度であります。

カウンティ・カレッジ

内容は「すべての人にもっと教育を」（Further Education!）ということをスローガンにして、満十六才から十八才までの、全日制の教育を受けたいすべての青少年のために、定時制のカウンティ・カレッジに行くことを義務制にしたことです。

日本の為政者や学者は、自分に都合の悪いことは口をつぐんで言いませんので、あまりこのことは紹介されていませんが、これは非常に革命的なことであります。これを日本に紹介したのが、労働科学研究所の桐原葆見＊博士です。英国から帰られてから、朝日新聞に紹介されました。

当時はアメリカの占領下で、アメリカの教育制度でなければ夜も日も明けない当時でありますので、文部省からも、英国の新教育制度が資料として出されても少しも注目されないでしまったのです。

詳しいことは、桐原先生が『生産教育』というパンフレットにまとめておられます。

このカウンティ・カレッジの中でも、農村におけるカレッジに最も重点をおかれていることは、まことに意義深いことであります。この農村カレッジはどうかといいますと、農業の機械化と工業における熟練工の育成機関として考えられているのであります。

第一に農業の機械化を押し進めて、労働生産性の高い農業を実現するために、農業機械の知識技能と機械化農業の経営を教育する。

第二は、農村青年教育の中心施設として、専門熟練工を育てる。農村青年に就職前の職業教育を与える。熟練工の公認試験の準備教育をする。このネライはどういうことかというと、将来の農業自営者に対しては農業を機械化していく方向に押し進めるため、農業経営とその担い手の新しいタイプを打ち出していく。いわゆる農業経営というものをまったく無視した技術のコマギレ販売といった、これが農業教育ですといった従来の農業教育のやり方を徹底的にブチこわしてゆく。従って、学校施設の中心は学校工業（ファーム・メカニックス）と図書館と物理化学、生物、製図といった各理科教室であります。

この施設は、同時に、農村の中で、あるいは農業に自分の将来の職業選択の道を求めない青年たちに、新しい職業技術と職場への進出の道を開いてやろうというものであります。でありますから設備も相当高度のものでチャチなものではありません。

先程の『エコノミスト』の考え方やこうした教育が進むことによって、現在の英国農業のあり方に大きな変化をおこしつつあります。

われわれが北海道にいても、それは事実だと感じとる証拠を申し上げたいと思います。

最近、農林省は、営農機械化セットの現物融資をやっていますが、その結果、北海道に入ってきているトラクターはどうかというと、その大部分は英国製であります。「フォードソン」とか「ファーガソン」とかいっていますが、ジーゼルエンジンで米国製ではなくて、英国の会社が製作しているものであります。米国のフォードとかインターナショナルは頑固にガソリンエンジンしか生産していません。英国がこうした農業機械に非常に力を入れていることです。

もうひとつは、昨年私の先輩本名代議士がスカンジナビヤ航空の北極圏空路の開始に当って、三笠宮と一緒にデンマークに行かれましたが、デンマーク農業の生産物が大部様子が変わってきていることを申しておりました。変る筈です。デンマーク農業は英国市場に大きく依存しているのですから、英国でどんどん農産物の自給をやりはじめて海外依存を低めますと、デンマーク農業もその生産や経営を変えていかなければならないのが当然です。

デンマークでは最近、畑に成長度の早い針葉樹、おそらく樅の種類だと思いますが、これをいわゆる促成栽培してクリスマス・ツリーとしてヨーロッパ諸国に輸出をしている。植樹が農業になっているのであります。あるいは高級野菜に力を入れ出している。農民団体が自分たちで野菜専門の農学校を建てて技術教育をやっている。

日本などは情ないもので、教育はすべて道庁におまかせ主義、先生という商売人におまかせ主義、そして授業料を払って五十年も遅れているような農業教育が行われている事実について、別に腹もたてなければ、ありがたいこったと思っているのですから、百姓もメデタイものです。冷害だ凶作だといって騒ぐのがあた

り前です。もう東北地方では冷害凶作はなくなってしまいました。北海道よりまだ北極圏に近い北欧では、冷害は百年も前からありません。災害といえば実はカンバツで苦しんでいるのが事実であります。

便所の改造も教育事業

話を戻しまして、農村のカウンティ・カレッジは、全部校舎は新築であります。臨時に従来の建物を利用することは禁じられています。これは高校定時制としてばかりでなく、ちょうどＹＭＣＡのような青年センター、成人学級、農村工芸指導所、職業補導所として利用するといったやり方です。実習工場は、木工、金工、機械工作、鋳物、溶接、農業、建築等、女子のためには家事実習室、紡織染物、その他の手工業的作業の実習もあります。

北欧は、どの国でもそうでありますが、工業製品ばかりでなく民芸品の輸出に相当の力を入れております。みなさんは、日本に先頃まできていたバーナード・リーチ＊のことをご存知と思いますが、日本にまできて、英国の陶芸、家具、染織物等の工芸品の技術指導には非常に力を入れております。

また、カレッジの施設で非常に感銘を深くしたのは、便所の施設基準が定められていることであります。最新式の高級基準によって規定されていることであります。従来の便所は街の暗くてキタナイ共同便所とどこも変りがないというのが実態でありました。これを一流のホテル並の便所に施設をしろというのであります。これは非常な着眼です。あんまり便所がキレイなので用を足すのが楽しみで学校に出かけてゆくなんてよいじゃありませんか。人間というものは面白いものでキレイな便所を使いつけていると、キタナイ便所に入ると気がひける。そういうものです。まして上等なトイレット・ペーパーを備えつけている水洗便所に入りますと、気がスーッとして、便秘がなくなり勉強しても実習してもミが入るというものです。

私は数年前、平取の二風谷コタンの小学校、十勝の士幌駅から三里半の山奥にある下居辺小学校、阿寒湖畔の小、中学校と何れも水洗便所のあるへき地のモデル学校の建築についてお手伝いたしました。へき地に水洗便所の学校ができて悪いという訳がありません。先生方がいかに衛生教育や健康教育を口をスッパクしてお説教しても駄目です。それよりも清潔な教育環境を作ることです。キレイな便所を使いつけると、とてもわが家のキタナイ便所に入る気がしません。自然に部落の中の便所がキレイになってゆくと思うのです。手も洗いましょう。爪もきりましょうということになります。

私は今、道南の臼尻漁業高校（定時制）のお手伝をしていますが、これは水が不便なので糞尿分離式の便所にしました。大体人間は男も女も道具は小便は前の方に、大便は引力の法則により下の方にオッコチるようになっているのに、幸か不幸か日本人は大小便が同時にでてしまう。小便は小便、大便は大便と、催す時が画然と分かれていません。そのためにタメ方が大小便がゴッチャなのです。ひどいのは小便器の朝顔の方まで、大便槽につないでいるというやり方が当り前だという一大迷信にとりつかれてきました。

ところが本州の農村では一大革命がおきています。南は九州から北は青森県まで、目ざめた農村部落ではみんな糞尿分離式便所にかえています。大体、蛔虫の卵の方は、小便の中からでてきません。あれはウンコの中にあるのです。大小便を別にしない限り絶対に蛔虫駆除ができないということを神奈川県の衛生研究所が気がついたのであります。偉大なる産業革命であります。糞尿分離をやっている農村からでる野菜は即効性肥料の小便と堆肥しか使いませんから、清浄野菜として、蛔虫卵のない野菜として値段が高く売れるのであります。生活改善がちゃんと経営改善に結びついていることであります。

学者の調査によりますと、大体毎日の小便の量は大便の量の十倍です。大小便を区別すると、便所の汲み取りは一年に二回とすると、五年に一ぺんやればよいことになります。小便の方は土管で引っぱっていって畑の真中に溜るというやり方であります。ポンプで汲んで畑にまけばよい。ところが学校の場合は大変です。

大体、小便は大便の二十倍から三十倍です。ですから学校の便所をかりますとパチャン、パチャンと必ず撥返えりをやられるのです。しかも都会の学校は汲取りがあるからよいのですが、田舎はそれがない。学校の先生は、便所の汲取りは大きらい。もちろん汲取りのために先生になっている訳でないから当り前のことですが、夏休みなど学校に行って見てごらんなさい。うす茶色の液体が、何か色のついた新聞紙や何かを浮べて便槽から校庭にあふれでている。私など教育委員をやらされていた当時は、大体この便所まわりを調べて、おおよその学校評価をやっていました。

北海道では、まだこの問題を衛生部も建築部も教育委員会も取り組んでいません。このへんに北海道の後進性がはっきり現れていると思います。便所の改造は教育事業であり、総合開発だという認識が全くないことであります。

話が飛んでしまいましたが、英国の勤労青年の教育施設が便所にまで心を配っていることを知り、これだと思いました。教育というものは、本当にこういった深切なものでなければならないということです。学校の玄関や校長室ばかり立派にして自慢しているような教育施設には決してろくなものはありません。英国は本気になって、新しい英国再建のために勤労青年の教育に努力していることが、以上申し上げたカウンティ・カレッジ制度のご紹介でおわかり頂けたかと思うのであります。

農漁村の中で工業教育を

私は、農漁村における定時制高校のあり方は、まず青年教育によって、青少年の持っている資質と能力を啓培することによって生産力の高い、労働生産性の高い農業や漁業を実現してゆく、そうすることによって今日の工業の生産力水準との較差を縮めてゆく、これが農漁民の持っている貧乏をなくする重要なカギであ

ると考えます。農業の生産力が低い限り、高度の生産力によって生産される肥料とか農具、農薬との間に相対的な価値の較差がでてくる。それだけ農民は、自分の労働の価値を引き下げて商品の交換をしなければならない。

そこには、蓄積が生れてこない。これは今日のアメリカでもソ連でも農業工業における大問題なのでありますが、その較差を縮めない限り、農民の相対的な生活水準の向上はない訳であります。この較差をなくすることを実現したのは目下のところ英国だけです。

第二は、農漁村の中に工業教育をもちこむことによって、農漁業生産の近代化を押し進めるだけでなく、第二次産業を起していくような近代企業の担い手にふさわしい企業能力、労働能力を育成してゆく。北海道の周辺部は別ですが、中心部に関する限り、寒地農業の確立と経営安定の問題は、経営規模の適正化が重要なカギになっています。

北大農学部の矢島武＊先生は、水田単作では三町五反以上、純畑作では七町歩以上なければ、生産力を発展的にもってゆくことはできないという結論をだされています。これを農村の中で本気になって考え、問題を提起すると波瀾が起きるものですから、みんな口をつぐんでごまかしています。ここのところを押えてかかって、しっかり目を据えて村づくりをやらない限り、また行き詰まってしまう訳であります。

先頃、新聞でご存じのように稲葉秀三＊さんが『稲葉論文』なるものを発表して、いろいろ話題をまいていますが、この説明会で稲葉さんがこういうことをいっています。

「これからの北海道の工業は、重化学工業を中心にして工業開発を進めなければならないが、それにしてももっと道内に消費財工業がおこってもよいのではあるまいか」と提言しています。

なぜ、消費財工業がおこらないのか。私の見解によれば、農村における経営零細化の問題がごまかされ、農漁村における村づくりが巾の広い立場で、村の指導者も村民も真剣に取り上げていない。消極的、停滞的

傾向が重要な理由の一つと考えているのであります。

相当前の話ですが根室の羅臼村にまいったことがあります。今まで電気のないところに電気がついた。そうしたとたんに漁船機関の修理工場ができた。誰が始めたかというと村の人ではなく函館から乗り込んできたのです。それまで羅臼の船は皆根室の港までわざわざ引っぱっていって修繕していた訳であります。

こんなところに案外、村づくりの盲点があることに気がついていないのであります。

その点、臼尻村には敬服しています。北海道からでている国会議員、それも全道区の参議院議員の先生が、そんな村は北海道の何処にあるのかと聞かれて、かえってこっちが面くらったのでありますが、私が七年前にお訪ねして見た時、漁港が四〇〇トン級の船が入るように、どんどん工事が進んでいる。冷凍倉庫がある。製氷工場がある。造船場がある。水道がついている。こんなへき地でありながら、漁港とはどんな機能を持つべきものであるかということを、ちゃんと掴んでいる。大概は中途半端なところが多いのであります。

私は、今から二十年前に水産講習所の杉浦保吉＊先生から日本の漁村のあり方について徹底的に教育されました。その当時から抱いていた夢が、ここでは本気になっている。そこで、私のお手伝いする漁村はここだと思ってやり出したのが、臼尻南茅部の漁業高等学校です。日本で漁業高等学校というのは、たった一つここだけであります。

私は、漁村教育の革命史はここに始まっていると思っているのですが、海は学校であり、船は教室であるという考え方にたって練習船を二隻持っています。村立高校で一一七トンの鋼鉄船と二十トンの木船の練習船があるのです。これが国会議員の先生が北海道の何処にそんな村があるのかと申されるような村ですから愉快であります。

今、素晴らしい鉄筋コンクリート建ての校舎建築がどんどん進んでいます。とにかく機関科課程が置かれている。日本の漁業で一番不足している船員は機関士なのです。

北洋漁業は、法律では甲海面といって甲種の免許状がなければ漁業ができないことになっている。ところが資格者がいない。しかたがないから無資格者を仮に認めてやらせている。能力が足りないからどうしても海上事故をおこすのです。

余市の水産試験場長の大垣光平先生は、「北海道の漁民はみんな資格者であるように勉強させろ」というのです。そうでなければ安全操業はできない、漁業も近代化してゆかねばならないと申されています。

しかし、臼尻の機関科は単なる機関士の養成だけを担っているのではありません。この施設を充実して、漁村で工業教育を盛んにしようというのであります。

十勝の上士幌高校では、一一〇坪の高校工場を持っています。士幌高校、中札内高校、夫々特色のある学校工場の充実に非常に力を入れております。

何れも、村の底力となる農業の近代化を推進する青年を育成すると同時に、村にあるいは地域に工業その他の産業を育てあげてゆく人材の育成を担ったものであります。

このような構想が今後の定時制高等学校のあり方とならねばと思うのであります。

今日、炭坑地帯では青少年の不良化の問題が重要問題になっています。これは、労働基準法で満十八才にならないと重労働や危険作業に従事できないことになっている。又満十六才にならないとやれないような仕事が多い。そうすると満十五で中学を卒業してしまいますから、どうしても一年間がブランクになる。おまけに坑内作業の機械化が進んでおりますから、親子代々ヤマを故郷にして働きたいと思っても、職場はますます せまくなるといった結果になる訳です。こうした炭坑地帯における働く青少年教育をどうするか、私は私なりに構想を持っていますが、ただお役人式の考えでは、炭坑地帯の勤労青少年教育の問題は前進しないことを申し上げたいのです。本気でお考え下さる炭坑地帯の町村があれば私もひとつお世話をしたいものだと考えている次第です。

農業コースをどう考えるか

先日たまたまある町で定時制高校の校長さんとお話合いをした時のことですが、この町の高校は農業科ということで認可になっているが、さっぱり生徒が集まらない。普通科の課程に切りかえるべきだと考えていると申されるのです。

ともするとこういう風に単純に割り切ってぶつかってくる考えの校長先生は「俺を定時制の高校長にまわすとは何事か」という訳で、定時制をやめて全日制に切りかえ、猛烈な運動をして道立高校移管にもっていって、早く全日制の高校長になりたいものだという方が多いようです。

「高校教育とは全日制が原則なのだ。定時制は変則なのだ。変則な定時制教育によって、勤労青少年の教育もへったくれもあったものではない。何でもよいから全日制にしてしまえばよいのだ」というのであります。実にあっさりした割り切り方です。まるで定時制とはオマケ教育みたいなもので、もっとひどくいえば貧民救済施設ぐらいにしかお考えになっていない。お邪魔をしてみますと立派な独立校舎をもって、町でも相当力をいれていることがわかる。しかし実習農場もない、馬もいない、牛もいない、どうして定時制とはいえ農業教育ができますかというのです。更に、教室も足りない、屋内体操場もないではないかというのです。ところが案内された校長室は二十坪の新教室一つを占領しているのには驚きました。

私は、定時制には定時制としての独自の教育的位置づけがあると思うのです。

教育基本法をふまえ、学校教育法をふまえて、なおかつ高校教育の本筋としての定時制教育の姿があると考えているのであります。その点はこういう表現をしています。

一　社会をそれ自身の社会として、社会と共に成長してゆく教育

二　社会の機能と学校の機能とを正しく強く結びつけてゆく教育

この教育を実現できるのは定時制教育以外にはないのだと確信しているのであります。

第一に、その校長さんは「農業科を志望する生徒がいない」ということを仰言るが、町の農家戸数は一三〇〇戸。この中第二種兼業を除くと約一〇〇〇戸、農家の経営主交代を二十五年一サイクルとして、毎年四十戸の経営主の更新が必要であることが算術的に出てきます。そうするとこの町の農業の発展のためにはどうしても四十人や五十人の将来の農業自営者を育ててゆかねばならぬ論理が成り立つ訳であります。ましてや未来の農民夫婦ということを考えると、男女あわせて五十名の生徒も集められないということは、何かそこに問題がある、ヌケたところがあるのではないですかと申し上げたら、「ああそうですね」と申しておりました。

これは村に残る、村の底力となるべき人々が、一応農業の経営者であり関係者だという限定の上に立っての話であります。しかも私は農業科の教育というものが、従来考えられていたせまい意味の農業技術教育であってはならないと考えています。

今日の北海道農業における農民という主体的立場からみて、農家のオヤジはいるが、農業経営者としての立場が欠けていることが大きな問題点であります。

教育の評価を民衆の前に

私の村の上士幌高校の卒業生にN・K子という女の子がいます。彼女は十七の時に父を失いました。病弱な母親と、一つ年下の妹（この子も高校生）が主要な労働力です。畑は十二町歩、これをどうするか、これからどう暮らしてゆくかということになったのであります。

十勝は有名な豆作農業地帯です。

家の周囲の便利がよく、土地のよい所は豆とか金の儲かりそうなものを作り、堆肥も使い、金肥もいれるといった経営集約区といっていますが、そのまわりに馬の飼料になるような燕麦とかあまり手間もかけない、堆肥も入れないといった経営粗放区ができる、更にその外側の遠距離で、地力もよくないところは永年牧草地のような、ただで草がとれるのがモウケものだといった経営掠奪区ができ上がっているというのが、典型的な十勝農業の姿です。

農業経営の原理とは、土地、資本、労働をうまく組合わせて、最小の費用で最大の収益をあげることであります。K子は家のまわりの土地のよいところに牧草を作った。逆に経営掠奪区といわれる不便なところには豆を作っている。草取りも口クにしないから草ぼうぼうです。これは十勝農業に対するレジスタンスです。豆作農業は除草農業といってよいぐらい、婦人がこのためにこき使われ、もっともひどいめにあっています。

K子はどうしたかというと単位当り労働力の節減に着眼し、草地養豚をやり出した。エサを煮ないで牧草とサイレージで豚を飼うことをやり出した。村の指導者は惰農であるといわんばかりに白い眼で見たり、笑ったものです。ところがどうです、昭和三十一年の大凶作には鼻の下にツマカワつけていばっていたオヤジどもが冷害だ借金だと騒いでいる時に、K子の農業経営はビクともしなかった。経営の原理を貫いたからであります。今は豚三十頭、ニワトリ二〇〇羽、乳牛二頭、馬二頭の家畜編成で、劣弱な労働力で立派に経営をこなしていっている。いいかえると典型的な豆作中心農業を否定して家畜を中心にした農業に経営を切りかえたのです。全部、家族が小さい弟妹に至るまで責任分担制です。夕方などそれぞれが豚だ、ニワトリだ、乳牛だといって世話をしているのを見ていると、頭がジーンとしてきて、思わず涙がでてきます。K子は背丈は四尺六寸ぐらい、美空ひばりのような可愛い、そして非力な娘さんです。その子が大人も顔まけする経営をこなしている。馬のような体力だけで、農業はモウかる経営はできないということを大人たちに教えてくれたのであります。

これは定時制農業教育の勝利です。

どうして学校に実習農場が必要でありましょうか。村の中の農家の一軒一軒の農場が、生徒の家庭の農場こそ定時制高校の実習農場なのです。

定時制農業教育の評価は、民衆の前に、村の農家の農業経営の中において実現してゆくんだと考えるべきだと思うのです。四ヵ年は八十五単位の修得でもなければ、紙ッコに印刷されベッタリはんこのおされた卒業証書ではありません。

農業自営者として子供の全人格全能力の中に、教育の成果が評価されるべきだと思うのであります。

農業コースをもっと巾広く

最近光文社という本屋から『経営学入門』という本が一五〇円ででています。われわれ素人でもわかりやすく書いています。ちょっとその目次をご紹介いたしましょう。

一　科学的管理法―企業繁栄法の初歩
二　フォードシステム―経営者の合言葉として
三　人間関係の理論―人間には情熱がある
四　現代企業と人事の仕組
五　人間関係の諸技術―人の気持のつかみ方
六　オートメーション―人類の敵か味方か
七　販売市場の調査―商品を売る現代感覚
八　現代企業が要求する計算技術―経理こそ扇のカナメ

私はこの目次に対して『現代農業経営学入門』と題名をかきかえて何もオカシクないと考えています。今日のオーソドックスな農業教育に何か心棒が欠けているとすればこの農業経営の教育が欠けていたのであります。それは何も農業教育だけでない、商業、工業教育に抜けている心棒そのものであります。今から一五〇年も昔に二宮金次郎という貧農の小倅は『二宮翁語録』という本の中にこういうことをいっています。「農業技術というものは鎌のようなものだ。鎌は鎌のままでは稲も刈れない草も刈れない。鎌には農業経営という砥石が必要である。いいかえると技術というものは経営という人格的なもの智能的なもので絶えず砥がなければ、メシは食っていけないのだ。単に馬のように働くだけでは駄目だ」と教えています。封建制下のわが日本の農民の中に、アダム・スミスとほとんど変らない時期に「資本蓄積の理論」を立派に体系づけていることは、われわれはもっとマナコをでっかくして考え直してよいのではありますまいか。特に二宮先生に感心するのは日本農業の発展は、企業としての農業経営と家計経済を分離しろと教えていることであります。

これは今日の中小商工業の発展のためにもあてはまる原理であります。こうした考え方の農業教育は、単に「指導要領」の示す農業自営者並に初級技術者の育成以上によい教育の成果が生み出されるのではありますまいか。

教育予算は投資的支出

第二に、今日教育財政といえば消極的支出であると教育者自身もそう思い込んでおり、地方当局の理事者もそう思っています。

定時制には是非充実した各種の工業的実習施設の必要なことを申し上げましたが、これは生徒の実習ばか

りでなく全村民、全町民に開放されるべきであると考えています。村の農業の発展に必要な、個々の農業ではできない施設設備、能力といったものを高校に集中するべきであり、それを開放すべきであります。

私は、これを教育の社会的迂回再生産と申しております。生徒ばかりでなく、農家の人々が学校にきて、自分の農機具をなおしたり、畜舎の設備をつくったり、豆腐を作ったり、お菓子を作ったり、ウドンやソバを作ったり、罐詰、ビン詰を作ったり、よいじゃありませんか。但し、この施設設備を利用しての営利を認める訳にはいきません。下手な補助金で農民の利己心を釣ってやってゆくような産業行政の時代は終りました。

むしろ教育的迂回生産こそ今後の産業行政の方向ではなかろうかと考えているのであります。定時制教育というものを真面目にお考え下さる方々のためにご参考になったならば幸であると考えます。

北方農業　北海道農業会議

定時制農業教育の進展

―木呂子構想の展開―

戦後の北海道農業教育の中でもっとも特筆すべきものの一つは、この期における市町村立定時制課程で行われた教育であろう。一般的に定時制高校教育は、それまで機会に恵まれなかった勤労青少年に対し、広く高校教育の門戸を開放することを目標としてつくられたが、特に北海道の農村地帯の季節制定時制教育は農業に従事する青年に対し、高校進学の機会を与えることに貢献した。

当初定時制農業教育は、伝統もあり、また施設設備を比較的豊富に持つ全日制農業高校の教育に対し劣等感をもち、また社会的にも「仮の施設」という印象を与えていたが、先進国アメリカのホームプロジェクト教育＊の導入にさいして定時制教育は全日制教育よりも導入し易く、また成果を挙げえたことに意を強くして、自信を持つことができた。さらに「一町村一高校」の思想のもとに、季節制定時制の農業課程を設置する町村が多くなり、ここに季節定時制農業教育は、数的にも質的にも定着するようになった。

しかしこのことは、全道いずれの地区においても同様の成果をあげたということではない。たとえば、道南地区では、元来この地域が漁業中心であるだけに、農業教育としては必ずしも好ましい成果をあげるに至らず比較的低調に留まった。

道央稲作地域では、すでに中等教育が比較的整備され、必ずしも定時制農業教育による教育機会の拡大は大きくなかった。しかもこの地域は水稲栽培技術は学校での実習レベル以上の水準に達しており、ホームプ

ロジェクトによる経営技術の改善もあまり期待できなかった。こうしたことから、地域農民の定時制教育への熱意も大きくはなかった。

オホーツク海岸地域は、元来中等教育普及の遅れた地域であったので、この時機を好機として季節定時制を設立する市町村も多かったが、農業依存率の高い内陸地帯と水産業その他への依存率の高い沿岸地帯とでは、別々の道を歩み、前者は農業教育の面で活発な活動を展開し、後者は比較的早く全日制転換または普通科転換を行った。

以上の三地域にくらべ、道東畑作地域の定時制教育は活発であった。ことに十勝ではそのほとんどの町村が定時制農業課程を設置し、ホームプロジェクト教育を採用し、いわゆる村づくりの教育を展開した。それらの中でも上士幌高校は、「地域社会学校（コミュニティスクール）」の思想のもとに、精密な地域実態調査を行い、また各種の画期的実践を行い成果をあげた。その結果、上士幌高校は単に北海道ばかりでなく、広く日本中に「村づくり学校」として宣伝され、農業教育の一つのモデルとして後々まで影響を残した。

上士幌高等学校の実践

上士幌高等学校は、昭和二十五年五月、川西農業高等学校の分校（夜間定時制）として開設されたものであるが、翌昭和二十六年一月、「青少年教育はすべての産業施策に優先する」という合言葉の中に上士幌高校（季節定時制）として独立した。同年三月、山花豊校長が赴任するとともに、この学校の目的を地域社会の開発、すなわち開発の遅れた山麓の農村上士幌村を文化の香り高い農村に発展させることに置き、そのための学校の在り方を深く研究し、その実践をはかった。

上士幌高校の新しい在り方の研究と実践は、当時の教育の実情からいうと、まことに画期的といえるもの

であったが、その特質をあげてみると次のようにまとめることができよう。

一、上士幌村内にある糠平に水力発電による電源開発を行うことが決定され、これに伴う各種の関連地域開発事業（たとえばオリベ地区四六〇〇ヘクタールの開発など）が予定された時期であり、また村の財政が“国定資産税”の急増により著しく改善される予想の立った折りでもあった。すなわち、地域社会を改善するための学校の在り方を研究、実践するのにはまたとない好機をとらえたものであった。

開校当初使われた馬小屋改造教員室

民家を使った間借校舎

二、上士幌村は、いわば大雪山麓の「僻地」であり、それまで近代的文化にきわめて縁遠いところであった。それだけに、新しく設立された高校に対する村民の期待は大きく、高校は主要産業である農業の改善と進歩の中心であるとともに、住民の生活文化向上のためのセンターとなるべき使命と責任を担うことになった。したがって、ここで行われる教育の内容方法は、従来のような地域社会と住民の要求から遊離したものでなく、それらの必要に深く根ざし、その要求に応えるものでなければならないとされた。そのために校長、教頭などは、北海道大学教育学部の部長城戸幡太郎、教

授三井透の指導のもとに、内外の教育理論、とりわけ「コミュニティー・スクール（地域社会学校）」や、「生産主義教育」の理論、また東京大学教授太田堯の主張等について深く研究を重ね、また農業教育の面においては、東京教育大学助教授厚沢留次郎、帯広畜産大学講師田島重雄等の助言協力を得て、独自の「全村教育」方式を確立・実践した。

三、学校の本格的活動開始を前にして、上士幌町の現状、将来の開発の方向、村民の意識、青少年の現状等、新しい学校の在り方を研究するのに必要な具体的資料を収集するため、二年間にわたり、精密かつ膨大な実態調査を行った。このため学校内に「農村教育研究部」という特別な組織を設けたが、これは当初ばかりでなく、後々の教育成果の確認や改善にも活用された。

四、地域社会の詳細な実態調査にもとづき、教育目標、教育内容、教育方法等に独創的な展開を行ったが、そのほか、学校建築の在り方、施設設備の内容、配置、その運営方法、教育組織等に斬新的な考え方を導入し、単に在学中の生徒ばかりでなく、村内の婦人・青年等に対して特別なコースや講習等を開催しサービスできるように、またそれらの地域社会の人々が、学校施設・設備を活用しうるように十分な配慮を行った。

五、地域社会に活躍する第一線の技術者（農協、普及所、保健所等の技術者）を非常勤職員に発令し、いつでもその生きた知識・技術・経験を学校が活用し、また、生徒指導や学校運営に協力が得られるよう手配した。

六、学校教育と普及事業の連携をはかるためのモデル・スクールとなり、多くの成果と好ましい影響を残した。

コミュニティ・スクール（地域社会学校）への努力

上士幌高校の実践の背景には、二つの理論があったが、その中の第一のものは、コミュニティ・スクールの理論であった。同校の建設を事実上リードした山花校長、森本教頭等は、北大教育学部への留学をはじめとして、あらゆる機会を通じ、近代的教育理論とその実践の手法の研究に当ったが、二人のもっとも関心をひいたのは、当時学会の注目を受けはじめていたデューイ＊（John Dewey）やオルセン＊（E.G.Olsen）理論であった。

上士幌高校では、そうしたデューイやオルセンなどの理論ならびにその実践を十分研究し、独自の「全村教育」方式を立案、実践に移した。

まず、学校教育の目標として、次のようなものを掲げている。

一、個　性　学校は、生徒のよい個性を発見し、これを育てよりよい社会の発展に奉仕する。

二、文　化　学校は、現在および将来を通じて、生活の中からよりよい北方文化を創造する人物を育成する。

三、健　康　学校は、生徒の健康を保持し、増進し、寒地に耐える快適な生活を営みうる能力を育て、これによって町民の健康増進に奉仕する。

四、公民性　学校は、生徒のよい町民となる資質をのばし、上士幌町を明るく平和な郷土に建設するために奉仕する。

五、産　業　学校は、町の産業を発展させる生徒の意欲と能力を培い、町の産業の発展に資する。また地域社会学校の性格をさらに一段とはっきりさせるため、次の「学校経営の原則六ヵ条」を定めた。

一、学校は、すべて郷土の自然や社会の実態から出発して経営する。
二、学校は、行うことによって学び、学ぶことによって行う教育につとめる。
三、学校は、施設をつとめて郷土産業に役立たせる。
四、学校は、施設をつとめて村民の生活向上に役立たせる。
五、学校は、施設を村の小学校や中学校の教育に役立たせる。
六、学校は、村の造形美の中心として永久性ある施設とする。

そして、さらにそうした学校の目標や経営原則を具体化するための校舎や施設の設計整備について、精密な研究を行った。

校舎の建設については、四つの観点が考慮に入れられた。その第一は美的配慮であった。これは北の風土から生れた純然たる北方文化の象徴、美の殿堂としての在り方の追究ともいえる。北海道に住む著名の建築家が上士幌の現地に招待され、村の自然や社会をスケッチし、上士幌にふさわしい造形美を探った。これらは最終的に北大工学部による設計が採り入れられた。

第二の観点は経済的・技術的見地であった。たとえばこの土地に無制限に存在する安価な資源の「火山灰又は火山礫」利用のブロック製造の可能性の検討が行われた。そのため町内各地に産出する火山灰、火山礫が集められ、それを材料とするブロックの製造が試みられ、試作品はすべて北大工学部に送られ、その強度の試験が行われた。そしていくたびの試行錯誤の末に最適な火山礫、そしてそれと砂・コンクリートとの混合比等が確かめられた。またそれとともに土地産の火山灰ブロック利用のさいの各種建築技術も開発され、郷土の耐寒住宅、畜舎等の設計建築の改善に貢献することとなった。

第三の観点は教育的配慮であった。このため、校舎は機能の点から五つの部分に分けられた。これは単に在学する生徒の教育のみを配慮するのではなく、広く地域社会の住民（特に農家の成人）に対する配慮も

（第四の観点）も含められていた。いま、ここにいう五つの機能部分としては次のものがあげられている。

（一）公民館活動部分

これは図書館を中心として、小会合室、体育館、音楽室が連なり、植物園がこれを囲んで総合グラウンドに続く形に作られた。

（二）生活科学の研究・教育・普及部分

これは、衛生室、食生活研究室、同実習展示室、衣生活研究室、同実習展示室等があり、特に洗濯室は女子生徒が中心になり、非衛生的な農村の被服を電力によって能率的に洗濯し、配達する。そしてこれを基軸として、衛生教育が農村全部落に入ってゆくようにする。

（三）産業の研究、普及部分

これは、産業及び生活気象研究室、木工建築工場、電気鍛冶室、製図室、農業改良展示室、土壌肥料研究実験室、農業生物研究実験室、家畜衛生研究実験実習室などからなり、また圃場実験室も含まれる。

（四）基本教科の学習部分

基本教科の学習時には、社会科教室、国語教室などと教科ごとの教室にするが、それ以外は開放し、町民に自由に聴講させ、かつその教科に関連する村の問題は、意味ある表現として展示する。

こうした計画は、すべてが実践された訳ではなかったが、その相当部分が実践された。特に注目すべきことは、たとえば衣生活や食生活研究室では、農閑期を利用した農家主婦のための衣食住講座が開催できるよう配慮されていたし、機械工作室、木工工作室、農産加工室などは（原案にはなかったものであるが、後で入れ換えられた）農民が、馬車で直接それらに乗りつけ、たとえば農機具の修理を学び、またはそれを実際に行いうるように配慮されていたことである。（馬車通過用の通用門や通路が設けられ、入口の扉など、馬車がそのまま入りうるよう、大きさも考慮されていた）

生産主義教育

上士幌高校の実践の背景となる第二の理論は「生産主義教育」であった。元来上士幌町は、大雪山火山群の東端にあり、その土地の七十五パーセントは海抜二〇〇～五〇〇メートルの山林傾斜地であり、わずか二十五パーセントが農耕地であった。また農耕地の土壌もその全部が養分に乏しい火山灰地であった。したがって農業経営の立地条件としては、気候的にも、土壌的にもまことに不利ないわゆる「低位生産地」といわれるものであった。また住民の生活も旧態依然であり、文化的生活とはおよそ縁遠い生活を余儀なくされており、人々もそれに甘んじていた。そのための学校の目標としては、まず農業生産を高めることが急務であり、そのことなしでは豊かな農村の建設はありえないという考え方であった。

当時教育学部を創設し、活発な活動を開始していた北海道大学の教授城戸幡太郎は、「北海道の開発、いや日本の国土開発は国民の生活安定と生活文化の向上を目標とするものでなければならない。そして教育は生活中心主義の教育であり、新しい学校は生活中心でなければならない。そして現代の生活が生産を基礎とするものである限り、生活教育の中核をなすものは生産教育であり、生産教育の中心をなすものは産業教育である。」（注1）と述べ、生産主義教育を主張しており、上士幌高校に対し、理論的、実際的助言と激励を惜しまなかった。

こうした上士幌町の実態からの必要や教育学者達の支持のもとに、上士幌高校の生産主義教育は次第に理論的・実際的に生長を遂げていった。

まずどんな人材を育てるかということについて、「紙とペンをもって仕える人間ではなく、頭脳と手の働きに科学性をもち、しかも人々の福祉への配慮をもって前進してゆく人々を、地域に満たさなければならない」（注2）とした。これは自ら労働に従事しない高等遊民をつくるのではなく、あくまでも自らの労働をも

って物を生産する人、そしてそれは単に体を動かすだけでなく、「科学的精神」をもって生産を改良し、しかも、単に自分や自家のためだけでなく、社会全体、地域全体を意識し、その向上を願う精神の持ち主を上士幌に満たそうというのであった。そしてその具体的手順としては、生産と生活の「環」、つまり農業生産を高めることにより生ずる経済的余裕、経営管理を合理化することにより生ずる時間的余裕、営農工作を取り入れることにより生ずる支出減等をすべて豊かな農村生活の向上に向けようとするのであり、それを通じ、究極的には「定住心の涵養と雄渾な開拓精神の振起（この地に生きる心の養成）」を養成しようとしたともいえる。

そして、こうした方向は次第に具体化されていった、たとえば、町内土性調査による合理的施肥設計の推進と、それを基礎とした生徒のホームプロジェクトを通じての作物家畜の生産向上、農業工作室の活用による農機具の修理・補修ならびに自作の推進、地域内火山灰利用のブロック製造法の開発、廃鶏の燻煙利用法の開発、衣食等の研究室を村内婦人に開放し、野菜加工、貯蔵法の改善等を指導し、食生活の改善をはかることなどである。

このように、地域社会の必要にもとづき地道な、しかも創造的な研究と教育の積み上げは、次第に「生産主義教育」の成果として認められ、各方面に強烈な印象を与えることになった。

注1　城戸幡太郎『北海道総合開発計画と教育計画」産業教育、第二巻第十六号、十二～十五頁。
注2　上士幌高校『農村地域社会学校としての高等学校の在り方』第一報、三頁。

農村教育研究部の活動

上士幌高校は、「北方山麓型農業経営の確立と北方山麓型農家生活様式の創造」を目指したものであるが、その目的を達成するために絶えざる研究を積み重ねることが必要であり、研究の積み重ねによってのみはじめて目的が達成できると考えていた。上士幌高校が、校内に他校に類例のない「農村教育研究部」を設置したのも、そうした研究活動推進の必要を強く意識したところに出発している。

そのようにして設立をみた農村教育研究部に対して、上士幌高校は次の二つの具体的任務を与えている。

a　学校経営の在り方と方向を与える農村教育に関する研究機関たらしめる。

b　地域の改善について教育的な方法で働きかけると共に、改善方策を制度化するように努める。

上士幌高校はこうした農村教育研究部の活動を具体的に推進するため、十の研究室（施設）を設けている。すなわち、「農村教育研究室」「産業気象研究室」「土壌肥料研究室」「農業機械研究室」「農産製造研究室」「生物実験室」「図書室」「衣生活研究室」「食生活研究室」「住生活研究室」などである。そして全職員をそれぞれの研究室（施設）に配置し、昭和二十八年から同三十年までの年次計画を立てさせ、実態把握→改善立案→実施→成果吟味のサイクルの繰返しの中に、目的の達成をはからせた。

農村教育研究室は、この中でも特に総轄的役割を担い、各研究室の案出した地域課題解決策を総合し、教育計画の前進をはかり、またその実施については、町の各機関に提出し、必要なものは制度化するよう手配するとともに、各研究室の成果を取りまとめ、また次の研究推進の中枢としての機能を果させた。

またその他の研究室（施設）での研究も、あくまでそのテーマを地域の生産や生活の課題解決のために精選し、その研究過程を通じて、学校の生徒のみならず、地域の人々を広くとりこみ、ともに学習を進め、単なる学校教育の狭い範囲に留まらず、地域社会改善の拠点として学校を位置づけようとした。

またこのようにして生れてきた研究成果をたえずカリキュラムの中に吸収し、教育計画をその目的達成のための最良のものとして常に維持していこうという努力も払われた。

以上のような農村教育研究部の目的、構想、組織、内容、成果等は、すべて昭和二十八～三十九年にわたり発刊された上士幌高校研究報告『農村地域社会学校としての高等学校の在り方』第一号～第十号に取りまとめられている。

農業改良普及事業との連携

上士幌高校で行われた「全村教育」のうち、特にホームプロジェクト指導や学校農業クラブ指導は、当時着々と整備されつつあった農業改良普及事業のホームプロジェクト指導や４Ｈクラブ＊指導とほとんど類似していた。またその対象となるべき青少年も、在校中か卒業後の別はあるとしても、同じ町の青少年であった。したがって学校農業教育と農業改良普及事業がまったく別個に行われるということは矛盾や重複、そして競合さえ生むのであり、逆に両者が連携をはかれば、教育効果は数倍化するという状況にあった。この時はちょうど全国的にも両者の連携問題が採り上げられ、文部省と農林省が連携のための研究指定を行っていた時であったので、上士幌高校は、北海道における第一番目の研究指定となった。

昭和三十年十二月六日連携のための第一回の協議会が正式に開かれ、基本方針が決められた。その結果、高校教員、普及員、農業技術員、役場職員の町内指導者などで構成する上士幌地区農業教育および農業者普及協力会が設立され、プロジェクト指導を協力して行うこと、クラブ活動の行う行事などを合併して行うこと、あるいはそれらの日時の調整を行うなどが決定された。

こうした連携の動きは、上士幌を出発点として全道各地に拡がった。他方、道段階の連携の成果として、

全国的に例をみなかった「普及員と教員との免許状の交換付与」への努力が払われ、また道農務部発行の『農業改良普及資料』の農業高等学校への配布その他が実現することとなった。（北海道農務部農業改良課編『改良普及員資料』第五巻第三号、昭和三十一年十月）

上士幌高校の成果と教訓

上士幌高校の実践の生んだ成果は数々あるが、その中で特に注目に値し最大に評価すべきことは、そのいっさいに創造的精神がみなぎっていた点であった。これは具体的にいうと、上士幌という地域に根ざし、その必要と将来に応じる新しい上士幌型の「全村教育」方式を生み出そうとしたことである。

幾多の成果の中で、創造的であり、結果がはっきり現われたもののみをあげてみても、以下の数例があげられる。

一、農業教育計画の立案に必要な地域社会調査方法を考案・実施したこと。これは構想としても壮大であるが、他方、その内容は精緻をきわめており、他地域の類似調査に対してよいモデルとなるものであろう。

二、生徒家庭の調査に出発した土壌調査はついに全村をカバーし、村内農業の耕種栽培改善の基礎となり、村役場・普及所等により活用された。この方式は後に南幌高等学校その他にも導入され成果をあげた。

三、村の農家生活改善の意図の下に開始された火山灰ブロック研究は、地元産の火山礫の中の最適のものを見い出し、北十勝地方の火山灰ブロック製造を促進し、かつ火山灰ブロック製の耐寒住宅、畜舎等の普及に貢献した。また燻煙による廃鶏利用法を工夫し、また新しい野菜の保存法、加工法等の考案普及を行った。

四、学校建築並びにレイアウトを、教育学的見地、社会教育的見地、地域社会サービスの見地、更に美学的見地等から見直し、斬新的な設計を行い、かつそれに沿った建築を行ったこと。特に図書館を中心におき、問題解決的学習を行いやすいように、また農民や農家主婦が学校施設を利用しやすいよう配慮し、また学校を村の文化のシンボルとして美の殿堂たらしめようと種々工夫したことなど、他校の例に全く見られない特色である。

五、総合農業のカリキュラムを完成しその実施を計ると共に、ホームプロジェクトの実践において成果をあげ、全国最優秀賞を受け、ついに生徒の一人を日本代表としてアジア農村青少年教育会議（昭和三十一年二月、バンコク開催）に送るまでになった。

六、学校教育と普及事業の協力の仕方を内容的に制度的に工夫し、他町村の協力方式のモデルになったこと。これは後に道段階の協力までに影響を与え、全国的にもまれな「教員に対する普及員資格の自動付与」までに導いた。

こうした上士幌高校「全村教育」の成果の数々は目覚ましいものがあるが、その成果をもたらす要因は何であったろうか。それらを要約すると以下の点が考えられる。

1、実態調査はもちろんであるが、その他あらゆることに対し研究的態度を失わず、記録し、分析し、反省をなし、改善につとめたこと。

2、あらゆる事項について周到な準備を行い、実態をはなれず、しかも教育の理想達成につとめようと努力したこと。

3、あらゆる知識・情報源に対し謙虚に協力を求め、そこから得られる知識情報を最大限に活用したこと。

4、新しい教育思想・教育技術に積極的に取り組み、研究し、消化し、各種の創意工夫を加え、その効果の拡大深化をはかったこと。

上士幌高校での土壌分析の実習

5、教員の採用については、広く日本全国より適切な人材を求め、待遇・住居等に深く配慮し、その能力発揮につとめたこと。

しかしながら、以上のほかに特に強調したいことは統轄に当った校長の卓越したリーダーシップ、教頭の企画力と実践と生徒指導に全力を傾注した教職員一人ひとりの努力である。これらがあったからこそ、北辺の僻地において、しかも苦渋にみちた戦後の混乱直後に、一条の明るい光を高校農業教育に投げこむことができたように思われる。

このようにして上士幌高校は、まだ基盤の確立していなかった道内各地の定時制農業高等学校及び農業課程に対し、大きな激励を与えるとともに、その将来の方向を暗示するのに役立った。またそれは単に道内ばかりでなく、おそらく日本全体に、あるいは世界のコミュニティースクール運動の一つの先例として礎石を残したとも考えられ、その努力と成果は讃えられ、末永く記録されてよいものであろう。

（北海道上士幌高等学校『農村地域社会学校としての高等学校の在り方』第五報、昭和三十二年三月）

その他の実践

上士幌高校の目ざましい実践に刺激され、おもに畑作地域の定時制高校でホームプロジェクト学習を中心として特色ある教育実践がみられるようになった。

それは、地域社会の農業上の課題、たとえば、低位生産土壌の改良の基礎調査、農家養豚を普及するため

の優良子豚の繁殖の工夫、豆蒔機械の改善などを採り上げ、それを中心としてプロジェクト教育を展開したことである。

士幌高校における実践

士幌高校は、川西農業高校の分校として他の御影、上士幌、大正などと一緒に設立された。第二代校長森本宮幸は上士幌高校の体験もあり、町、農協等の協力を得て、地域社会学校として特色づけることに努力した。その中で特に注目をあびたのは、校内に火山灰ブロック製造工場を設置し廃鶏利用のスモークド・チキンを生産したことであった。それに至るいきさつは以下のようである。

森本校長は上士幌高校在任中各種の調査を行ったが、学校所在地の上士幌、士幌地域で住民の当面する最大の問題の一つは、住宅問題であることを知った。文化的生活の基本は住宅にあるが、この地域の住宅は寒地の住宅としてはきわめて粗末なものであり、燃料の消費量も莫大に上るにもかかわらず、保温の点からみて効率は低かった。

北大教育学部の城戸部長なども「寒地生活の基本は住宅だ。オンボロ住宅に住んで何が北方文化か」といわれており、この地方の住宅改善の研究は焦眉の急を要することであった。当時上士幌高校においては、地元の火山灰地を利用したブロック製造の研究とその利用が相当程度に進展をみたが、森本校長は士幌赴任後、ブロック製造機械の入手に努力し、学校敷地内にブロック製造工場を設けた。生徒はこれによって実際のブロック製造はもちろん、いかにしてブロックを積み、堆肥舎、豚舎などを作るかを学び実習することができた。生徒達は単に学んだばかりでなく、ホームプロジェクトを通じて、実際に自家の農場に堆肥舎や豚舎を建築した。こうしたブロック製造や利用の学習はたちまち地元の深い関心を呼び、多くの見学者や実習希望

者を集めた。たとえば帯広畜産大学の総合農学科や草地畜産別科なども、その正規の教育課程の一つとしてブロック製造実習を採り入れ、学生達は毎年士幌高校に赴き同校の教師の指導のもとに実習を行う位であった。

廃鶏を利用したスモークド・チキンの生産とその指導もブロック製造と同様、地域社会の関心を集めた。これは当時、採卵養鶏が相当広く普及していたのであるが、当然生じてくる廃鶏の効果的利用方法がなかったので、地元から喜ばれ活用された。士幌高校はこうした地域の未解決の問題を採り上げ、その解決方法を具体的に示し、あるいはその指導を行うことによって、地域社会学校としての在り方の一端を実践したといえる。

またこの時期には、農村の生活改善が農村の中で大きな課題であった。たとえば食生活改善なども大きな関心事であり、そのために野菜栽培とその利用法の研究、蛋白質摂取を積極的に行うための廃鶏利用法、また地域の住宅や畜舎施設等改善のためのブロック製造方法の指導・普及など、地域の生活上の課題が相次いで学校教育の内容に採り上げられ、その解決がはかられた。他方、地域の課題とは必ずしも関係が深くなくても、一定の技術を中心にすえ、それを徹底的に練磨し、生徒にはっきりとした技術的自信を与える方式も案出された。

このような特色ある実践は、たとえば川西農業高校定時制、士幌高校、幌加内高校、美唄南高校定時制などにおいて目立った。

昭和三十二年三月　上士幌高校『農村地域社会学校としての高等学校の在り方』第五報

村づくりと教育

―教師のために―

はじめに

「村づくりと教育」について、特に資料を中心として書けとのことでありますが、ここでは特にお許しを願って、私見を中心として資料やケースワークについてふれてゆきたいと思います。

しかしその村づくりは、行政町村の村づくりのことではなく、農村や漁村の部落、かつては「むら」といわれ、教師の立場からすれば、校下といってる部落に視点をすえて記してみたいと思うのであります。それは、部落こそが、農民や漁民にとって、生産や生活についての喜び、悲しみがもっとも強く、もっともいきいきと息づいているところだからであります。

こうした立場に立って、「村づくりと教育」を考えてみる場合、それは農村や漁村の中で暮らす農漁民が、生産のこと、生活のことの上で、「農民もまた人間であり、漁民もまた人間であるんだ。」そして、その人間らしい生活の確立のためには、どのような矛盾と問題点をもち、その解決が急がれているのであろうか、農漁民にもまた基本的人権が確立されるためには、教育はどのように、これに対応してゆくべきものであろうか、こういう理解の仕方をしてみたいのであります。

教育は確かに社会形成の基礎として、人間形成に参与する重要な仕事でありますが、しかしそれはあくま

でも社会的機能の一部として、現実の社会に対して対応してゆくべきものであり、抽象的な人間形成に参与する仕事ではありません。例えば、ある開拓者の奥さんですが、まだ三十前だというのに子どもが五人もあって、その顔といい、そのからだつきといい、どう見ても五十の年がらみに見えるのです。結婚してからお腹に子どものいなかった月日を計算してみると五ヵ月にしかならない。子どもの傾斜生産です。その傾斜生産された子どもたち、その具体的な人間の形成に参与するのが教育なんだと、深く理解されねばならぬと思うのであります。

いつか、北大の留岡清男＊先生が、十勝の豊似部落で開かれたオッカさんたちの懇談会で、大場さんのオッカさんの発言「私はこの年になって農業に完全に希望を失いました」ということばに、背中をなぐられたような思いをしたとも書かれ、これを読まれた石附先生がまた、非常な感銘をもって私に語ってくれたことを思い出します。こうしたオッカさんたちの子どもをあずかり、その人間形成に参与するという教育が、どう具体的に対応していったらよいのであろうか。そこのところを、真面目に、しかも粘りづよく考えてゆくべきではないでしょうか。

よく全村教育ということがいわれます。

いつか、ある村の中学校の先生の、全村教育研究と銘うって発表された部厚いプリントを見せていただいたことがありますが、それは著名な外国の教育学者たちの見解を並べたてて、最後に町役場とか学校を中心としたいくつかの全村教育の機能図解例をのせているというものでありました。これには私もまったく恐れいりました。この膨大なプリント、悪くいえば、抜粋録を作るために町役場から研究費が出、町の教員組合文教部からもおカネが出ているというのですから、参ったというより他はありません。当然この発表が行われるまでには、個人の私的研究として放任されていたとは考えられません。指定校がきまり、テーマに対して教師の間で、あるいは教員組合の内部でも、方法論や実践的展開の具体的討議が重ねられたものと考えね

ばならぬ訳ですが、あらわれた結果としては、ひどすぎるというより他はありません。しかも聞くところでは、この発表会の席上では、市街地の先生方が一方的に吹きまくられたということであります。全村教育とか生産教育とかいうことが教育界の中で論じられる時、とかく陥りやすいあやまちがこうしたところにあるのではないでしょうか。

さて話を前にもどして、農民や漁民たちが生産や生活の中で持っている矛盾、いろいろな問題を掘り下げていき、これを今日の社会制度、資本主義経済の仕組の中にいっさいの結論を導き、そこにシリを持ち込むというやり方はここでは避け、そうではなくて今日的社会の現実の中で、農村の人びとや漁村の人びとが、どのように生産や生活の中の矛盾に対応し、どのようなあり方が、「農漁民もまた、人間である」という立場の確立を妨げているのであろうか、そこのところに理解の目を向けたいと思うのであります。

人間であるという立場

ではこの場合、「人間であるという立場」それはどういうことでありましょうか。常識的にいって、人間の一日を二十四時間として人間労働として最良の条件のもとで八時間働き、八時間の休養と教養の時間を持ち、八時間の睡眠をとり、しかも日曜日・祭日等の休業日が認められ、この労働の結果にもとづいて社会的な平均労働収入の獲得と、家族を養い、子どもには教育の機会を十分に与え、疾病や労働機会の喪失に対して社会的保障が与えられるという立場、これこそ、基本的人権としての今日的最小の規模ではないでしょうか。今日の都市勤労者や教師にとっては、このことは当然のこととして理解されているのではないでしょうか。

しかし農民や漁民にとって、このことはどうでありましょうか。たしかに土地を持っています。これとて、

勝手に動かしたり、自由にできるというものではありません。住宅もあります。いろいろな財産も持ってはおりましょうが、しかし基本的人権、「人間であるという立場」がどこに実現しているでしょうか。なまじっか多少の財産を持って、農業や漁業を営んではいるけれども、家族が総がかりで、朝早くから夜おそくまで働いてもなおかつ、「人間らしい生活」が実現されないという不合理を、今日の農民や漁民の生活は持っているのだと理解するのがホントウのところではないでしょうか。一面において、一年間の一人当りの総労働時間数を計算してみますと、都市勤労者の年間総労働時間数よりも足りないこと、しかし家族全部の総労働時間数では、逆に勤労者の労働時間をはるかに超過して重い労働であり、しかも「人間らしい生活水準」が実現しないということ、これはなぜでしょうか。どのようにしてこの矛盾を着実に解決していったらよいのでしょうか。ここに村づくりと教育の出発点があり、帰着点があるといえるのではないでしょうか。

私はここに、基本的人権としての人間らしい生活の確立という主張点をおいた訳でありますが、もし、人間というものは高等動物であるという理解で問題を進めてゆくことを許していただけるなら、農民や漁民の生活の仕組、あり方というものは、今日的水準でいえば、はっきりいって下等社会の仕組であり、あり方だという判断が成りたつのではないでしょうか。

なるほど新聞は写真をのせて、上川・空知の農村風景でありましょうが、若い農村青年が年の暮れも迫る雪道を、豊作の昭和三十年以上に作がよかったという表情に、老母とともに電気洗濯機やテレビをのせて、馬橇の軋りも心地よいものとしてこれをとらえ報道していますが、米の豊作を喜ぶ気持は、実は生産者よりも消費者であって、消費者大衆こそが、あの食糧の絶対的な不足な時代を痛切に身にしみて感じているのであります。たまたま米というものの価格が維持米価であり、自由経済の原則の中にさらされていないというだけのことであって、もし米が自由市場にさらされたらどういうことになるでありましょうか。

米以外の農畜産物の今日の価格は、どう動いているでしょうか。米作以外の畑作農家の生活水準はどうな

っているでしょうか。畑作農家でも生産基盤の安定した農家は、自由経済のもとでは、凶作こそかえって喜ぶべき現象であり、それは、他人に収穫がまったくなくても、自分に収穫があれば、それだけ高く生産物が売れるからであります。問題は、自然現象の変化を冷害として、また凶作としてのみ受けとらざるを得ない農家が大部分であるということであります。

農民の社会に問題があるのを手近で端的に物語ってくれたのが、今度の農村の指導者といわれる人びとによってひきおこされた北信連事件＊であります。北信連とは、農民の自主的経済協同組織である農協の金融面についての道連合体であります。ここでいうのは事件の内容ではなく、解決の過程についてであります。まず、「関係した理事者が辞職すべきではない、職員の不始末であるから、あくまでとどまって事態の収拾をはかるべきである」という議論が行われ、反転して総辞職ということになり、「旧理事はいっさい再選すべきではない」ということでしたが、更に反転して、「旧理事は再選しても差しつかえない」ということになりました。さすがに旧理事の主だった人びとは、再選されませんでしたが「あの人はかわいそうだ」、「あの人物はもったいない」、「あの人には世話になっている」ということがその考えの根底にあります。これがほかならぬ農村信用機関とはいえ、経済組織団体でのできごとであります。

これと対比できるのが、近江絹糸の有名なスト事件であります。近江絹糸のワンマン社長といわれた夏川社長は、その会社の創設者であり、しかも同族資本の上にのっかっていた社長が、一度つまづくとどうでありましょうか。金融機関が、夏川社長による近江絹糸の再建を絶対に拒否しているではありませんか。近代資本企業は、資本があくまで優先し、そのための企業的能力と経営者的適格性が人間として高度に要求されることであります。

おもしろいことには、今日の農民の自主的組織といわれる農業協同組合は、農民の協同資本によって独占資本と対決し、農民の経済的地位の向上をはかるのだというのがそのスローガンとなっております。こうし

た農民の代表的機関である経済団体の動きを見てもいかに農民の自主的組織とはいえ、およそ独占資本と対決してゆけるシロモノではなく、まさに、近代的企業のありかたからすれば、課題の多い段階だといえるのではないでしょうか。たとえ株式資本ではなく出資金による協同資本であっても、対決するとなれば、株式資本以上にいっそうの経営者能力が高度に要求されると思うのであります。

農民の経営者的適格性

私は、ここから次の二点について問題をひつぱり出し、話を核心に近づけてゆきたいと思います。

一、農民の企業的能力、経営者的適格性ということは、農村ではどのような位置づけをもっているのであろうか。

二、農村では、全購連事件といい、「私は何も知りませんでした」というような理事者が浮かびあがってきて、経営者としての適格性が優先するというあたりまえのことがなぜ通用しないのであろうか、ということを考えてみたいと思います。

一、と二、にはからみあいがあります。この二点を掘り下げてゆくと、なぜ農民にとって今の農村では、農業の経営が「人間らしい生活の確立」を妨げているかを解明してゆく手がかりともなるからであります。

まず経営者的適格性についてでありますが、京都大学の大槻正男先生が、『農業経営の基本的問題』（岩波書店刊）という本の中で、こういうことをいっておられます。

「農業の生産要素には、労働と資本用役と土地用役と物財、この四つがある。農業の生産力を高めるためには、この四つの生産要素をもっとも適正に結合させてゆくことが眼目となる。この四つのうちで、質的にも量的にも、一番不十分にしか与えられていない生産要素が、全体の生産力を左右する。」

これがよくドベネックの養分樽＊で説明される「最小の法則」であります。

これはリービッヒ＊の法則といわれ、作物成育における最小養分律を樽板に例えて、作物の生長にはいろいろな肥料要素を要求されるが、樽に水を入れた場合、樽板のいちばん低いところの線にとどまって、そこまでしか水がたまらないように、要求するすべての肥料要素量のうち、もっとも不足にしか与えられていない肥料要素を基準にして、作物の生育量が決定されるというのであります。大槻先生は、同じように農業の生産力もまた、生産要素の中もっとも劣っている生産要素を基準にして、その生産力は決定されるのだというのであります。

そこで大槻先生はこの考え方から、議論を次のように展開されるのであります。

「では日本の農業経営での最小要素とは何であろうか。一般には土地が足りないのだといわれているが、実はそうではない、労働がいちばん不足しているからこそ農業の生産力が低いのだ。それはどういうことかというと、労働には二通りある。一つは筋肉労働で馬なみの労働である。これは確かにありあまるほどある。不足しているいま一つの経営者労働、つまり農業経営を組織しこれを経営目的のために運営してゆくための労働、この経営者労働が、日本の農業経営にいちばん不足しているのだ。」というのであります。

これは、農業教育でもいちばんの盲点であります。北海道でも大部分の農業高校では、横井時敬＊先生以来の農業教育の考え方から一歩もぬけ出ていません。依然として作物各論、汎論といったやり方であり、農業経営についての教育がいまでも足りません。だいたい、農業経営について、自信を持って教えることのできる先生がいないのであります。農業改良普及員にしてもそうでありました。技術の切り売りが主であって、経営指導のできる人が少ないことであります。改良普及事業もこれではいけないということに気がつき、農業経営についても真剣に勉強されるようになりました。まだ農業高校あたりは居眠りをしています。「俺の学校は農業自営者になるものが少ないのだから」ということで、「月給取りの養成だから技術的智識の方が

たいせつだ。」などと考えておられるようであります。
　近代的企業では資本と経営と労働とがはっきり分離しています。戦後は三井とか三菱とかいうような、同族資本によるコンツェルン式の独占資本はなくなりました。同族資本による企業もあることにはありますが、やはり大きな金融資本によって系列化され、経営者といえども、経営者としての適格性においてのみ、その存在が認められている訳であります。資本と経営との明確な分離は、いわゆるヤトワレ社長とか、三等重役とかいう新語を生み出したのであります。

　さて農業はどうでありましょうか。
一、日本の農業は、家族の労働力を主体として農業経営が営まれているということ。
二、農業経営では資本と労働と経営とが分離していないということ。
　これであります。したがってすべての農業経営主が、大槻先生のいう経営者労働をやっているかというとそうではありません。近代企業でありますと、使用している労働者に満足に給料も払えない、メシも食わしてゆけない経営主であれば、今日の企業競争の中ではいっぺんに企業主としての資格喪失であります。農業の場合は、働くものの生活を困らせるような経営主でもクビになる心配はなく、それは家業であって資本ではなく、先祖代々の万世一系ともいうべき家の財産としての農業だからであります。農業経営の不適格者もまた、経営主として、容易に動かすことのできない土地にしがみついておれるということであります。
　財産や家業としての農業を父祖から代々の家長が受けついで、次の代に渡してゆくのだという伝統的な「いえ」、これが日本の農業経営を支配しているのであります。そこで尊重されるのは過去であり、伝統であるといった面が強く、だから農家の場合、長男がたとえ一人前になって農業経営を積極的に創意工夫をこらしてみたいと思っても、親父が家長として頑張っていてどうにもならない。単なる筋肉労働者として我慢を

しなければならない。人間も四十過ぎると人としての伸びが止まってしまい、その頃になって経営権を譲られても、もうどうにもならない。結局長男は考える農民として経営者労働のできる適格性を失なってしまうということが、くりかえされてきたと思うのであります。

家長制の強かった日本の家族制度のもとでは、農業経営における経営者の性格を、とくにそのように強めてもきましたし、戦前の日本における社会のあり方を支えてきた重要な柱が、実は農村のこうした側面であり、この故にこそ、農村における美徳の根源をここにあるとして賞讃されてきたのであります。しかし、戦後社会の変化はもうこうした考えを許さなくなりました。

民主主義という考え方が進んできて、一番不安におそわれているのは、ほかならぬ農業経営主なのであります。いったい自分が握っている経営権をうっかり息子に渡してしまうと、あとの自分たちの生活をみて貰えるのであろうか。家のくらしの中でじゃまもの扱いにされるのではなかろうか。昔とちがって、古い固定観念の上から経営主としての地位を譲らないというのではなくて、自分の老後の生活安定、これに対する不安という面から経営権を渡さないという傾向があらわれてきました。このことは一面、経営者の若返りがある程度行われていることも確かでありますが、そのかげには、姑と嫁の関係ではありませんが、自分がかつてそうされたことを息子もそうあるべきだという、本能的といってよい経営主の考え方も、根強く残っていることも見のがせません。

とにかく経営権を握る経営主の発言がまだまだ強く、実際の農業は家族労働が主体であって、主婦や息子、娘たちにもっとも重い労働がおおいかぶさっているにもかかわらず、経営管理に対する発言権が弱いといえるのではありますまいか。「跡とり、売りもの、用心棒」という言葉があります。跡とりは長男、売りものは娘のこと、用心棒とは次三男のことですが、とくにひどいのは次三男で、「猫のシッポとオヂ（次三男）は、あってもなくてもよいものだ」といわれていることであります。深沢七郎著『東北の神武（ズンム）た

ち』という映画化された小説があります。東北農村の部屋ずみの次三男が不完全就労者としてばかりでなく、世帯ももつことができず、性的失業者としての存在をえがき出したものですが、今日もまだ残っている悲劇的事実であります。

農村の現実の仕組やあり方は、まだまだ職業選択の自由を妨げる多くの要素を持っていることであります。それだけではありません。家長的家族制という考え方が農村ではまだ強く働いているために、個人が家の中に埋没してしまって、個性化の自由というものを押しひろげてゆく環境に、きわめて乏しいことであります。したがって、経営が能力の分化の上にたって、積極的に発展させてゆくのだという前進化が絶えず抑えられているともいえるのであります。このことは、東大教授福武直先生の『日本農民の社会的性格』『日本の農村社会』、『農村』、『社会学入門』等をお読みくださるとよいと思います。

農業労働を支える人びと

次に『農業経営―理論と普及』（全国農業講習所協議会刊）という本がありますが、この本は、全国の農業改良普及員の講習テキストとして出されたもので、非常に実例が多くとりあげられ、学者の本とちがって理解しやすく書かれており、農業経営を理解する上に役立つ本です。この本に、こういうことが書かれています。

「日本の農林業従事者（十四才以上）の中で、婦人労働従事者の割合が、戦前の昭和五年には四十五パーセントであったものが、戦後はどうなっているかというと、最近発表された農林白書もいっているように五十二パーセントに増えてきている。地主的土地所有制度のもとで、もっとも農村が暗かったといわれる昭和当初でさえ、婦人従事者が四十五パーセントであったものが、逆に増えてきている。戦後の農業以外の産業

での婦人の労働従事割合は、婦人労働が基幹となっている繊維産業をふくめても僅かに二十八パーセント、日本の農業が半数以上も婦人の家族労働の参加を得て、なおかつ生活水準が低いのでありますから、今日の農業経営というものが、いかに遅れた体質の産業であるかがわかります。

これを更に外国の農業における婦人労働の参加割合に見ますとアメリカの二パーセントにはじまって、イギリス、カナダ、オーストラリヤ、オランダ、デンマーク、ベルギーの順で最高が十五パーセントであります。その国の農業労働に対する婦人の労働参加の割合こそ、実はその国の農業が進んだ農業であるか、遅れた農業であるかの実に的確な指標であります。それほど日本の農村婦人たちは、はげしい農作業に長い時間を耐えて働かねばならない。それ程日本農業が、経営主が『ワレは一家のオヤジである』といい気になっている農業経営のやり方をやっているという事実であります。」

日本の農業が全産業の中で大きな分野をもち、しかも二重構造として非常な発展の遅れがあることが、日本の産業全体の発展にとっての重要な課題であるといわれています。実はこの二重構造の端的な指標は、オッカの働きも、娘の働きも、徹底的にこき使うことによってやっと農業が成り立っているのだという事実の中にあらわれていることを、農民の現実の生活の中に注視しなければなりません。

農業労働から婦人の労働がだんだんと減ってきて、その労働力に対する期待と依存の度合いが少なくなることこそ、日本の農業が発展していっているのであって、単なるオヤジの農業経営から経営者的経営に、変化し成長していっているのだという理解がされなければならぬと思うのです。この目的達成に向っての努力こそ、「農民もまた人間である」という、農業のあり方の実現過程であると理解されねばならぬのであります。農村婦人の本質的開放の方向は、ここにあると思うのです。

旭川市厚生病院の藤井先生が全国農村医学会で、農村にも労働基準法を設けるべきだと主張されました。人間の労働力はタダなのだ、おカネはかからないのだという考えは農村に根強く残っています。そこに農婦

病といわれる農村婦人特有の病気をもたらしています。北海道でも農村地帯を周辺に持つ都市の病院で、なぜ産婦人科の病院が繁昌しているかを、真剣に考えてみるべきではないでしょうか。

農村の生活改善ということが理解され、非常に進んできておりますが、上川管内のある村で聞いたように、カマドの改善はできたが、家族制度のもとで、ヨメがだらだらと台所仕事をすることによってようやく一息ついていたものが、「台所が便利になったのに、能率をあげて仕事のキマリを、さっぱりつけないではないか」と、逆に家族から白い眼でみられ、せっかくの台所改善も、実はヨメの解放にはならないという話は、本当にまじめに考えてみたいことであります。

まだどこかの農家の納屋のスミにころがっているかもしれない籾落しの道具に、「せんばごき」というものがあります。これは徳川時代に発明されたもので、「後家倒し」の別名があります。それまでの籾落しは「こきはし」といって、竹を真中で箸のように二つに割り、節のところを結びあわせ、そのまたに穂をひっかけてしごき落すというやり方でした。殿様から年貢の早出し催促があると、家内の手間だけでは足りなく、隣の後家まで動員してやったものが、「せんばごき」が発明されてから、いままで頼まれていた後家さんが真先に失業してしまったので「後家倒し」といわれるようになったとのことです。いまわれわれが真剣に考えねばならぬのは、農村の婦人を農業労働から解放する、「オッカ倒し」の道の探究でなければならぬと思います。

その国の農業の生産力が高いか低いかを考える指標として、全就業人口に対して、農林漁業に従事している就業者の割合があります。それは、その国の国民生活の安定感として、食糧の供給がどれだけの割合の農民によって支えられているかということです。農業の就業人口に対する婦人の就業率は、農業経営の質をあらわす重要な指標でありますが、同時に、全就業人口に対する農林漁業就業比は、産業全体の中で農漁業が

バランスのとれた発展の仕方をしているかどうかを示すものであります。

とにかく欧米の国々では、農業人口の占める比率が、だいたいこの二十〜三十年間に二十パーセント前後に落ちてきていることであります。それだけ農業も非常な発展をしているが、他の産業も発展しており雇用度と人口吸収率を高めているものと考えられます。

日本は以前は五十パーセント以上でありましたが、ようやく四十二パーセントまで落ちてまいりました。ところが北欧の農業国といわれるデンマークでは、同じ期間に四十六パーセントから二十四パーセントにまで下がってきていることであります。イギリスが五パーセント、アメリカ十三パーセント、オランダ二十パーセント、西ドイツ二十三パーセント、カナダ十三パーセントといった具合であります。

これを今日本とデンマークで比較してみますと、日本で四十二パーセントの農民が働いて、五十八パーセントの他の産業に働く人びとの食糧を供給するのですが、なお食糧が全体の二割も不足し、貴重な外貨を使い輸入をしているありさまです。ところがデンマークでは、農民が二十四パーセントと半分に減っても、食糧の生産力はますます高まり、依然として農畜産物の輸出国であります。しかもそのデンマークの農民の生活水準は、ぐんぐん良くなっているばかりでなく、立派な工業国に変貌しつつあるということは、どうしたことでしょう。鉄も、石炭も、電力もない国がりっぱな工業国として発展しているのです。電力は海峡を渡ってスエーデンから供給を仰ぎ、鉄もまたしかりであります。

ここ四、五年のあいだに、函館の近在の日本セメントの工場で、セメント製造の巨大なプラントが、デンマークから二回にわたって輸入されている事実には、驚くばかりであります。

湯川博士や亡くなった仁科博士は、いずれもコペンハーゲン大学教授ニールス・ボーア＊先生のお弟子さんです。今日、科学の飛躍的発展として注目されている原子力科学について、世界ではじめて筋道をつけられたのがボーア先生であります。デンマークは小国でありますが、科学に、工業に、素晴しい発展を見せて

いることを忘れてはいけないと思います。

適格者だけが農業を引きつぐデンマーク

デンマークでは、農民は農業経営をもはや家業として考えてはいません。はっきりした近代的な職業として理解されており、農業の適格者だけが農業を経営すべきものだという考えに変わってきております。「百姓は馬鹿でもできる」、「慣れた仕事だからまあ百姓でもやってるさ」という考えは、もう許されないようです。農業生産における国際競争に負けないよう、たえず努力していることであります。

最近北海道の乳業会社が、デンマークから新しいバターやミルクを作る機械をかなり輸入いたしました。いままでの北海道の乳製品工業では、昭和三十年の時点での例をあげますと、八十石の牛乳を処理するために八十人の人が働いておりました。ところがデンマークでは、八十石の牛乳を処理するためには、わずか四人の人しか働いていないのであります。そのことは、その工場の能率が二十倍のひらきがあることを示すのであります。こうした機械が日本で生産されないで、わざわざ、農業国といわれるデンマークから買ってきているのです。これでは外国のバターの値段がさがると、乳業会社はたちまち生産者である農家の乳価をさげてしまう訳です。おまけに機械は外国から買い入れるから、その資本償却のために、バターの製造コストは思うようには下がらないということになります。

デンマークでは、乳製品その他の農畜産工業が農民の手によって経営されていますから、その合理化には、いかに真剣であるかがわかる訳です。もちろん自分たちの農業経営の合理化、機械化が非常な速度で進められています。北海道の酪農で問題になっている人口受精による空胎のことも、受精率がデンマークでは一・五回、北海道では三回。一人の人工受精士が受けもつ乳牛の頭数は、北海道が六〇〇頭、デンマークでは一

八〇〇頭といったぐあいに、農業生産性の上で非常なひらきを見せています。これでは北海道の有畜農業が国際競争に勝てる訳がありません。

こうしたデンマークの農村では、ひろく職業に対し選択の自由が確立されてきました。経営主は老後の養老年金制度が確立されていますので、百姓をやるという息子がいなければ、さっさと農場を他の経営適格者に売り渡してコペンハーゲンのような都市に出かけ、安楽にアパート暮らしで老後をおくるということができるようになりました。しかもきわめて重要なことは、一九四八年の農業法の改正で、土地の売買価格、その経営規模の基準というものが、政府によって決定され、土地のみだりな拡大、または切り売りはいっさいできないことになっており、農業を経営しようという適格者には九十九ヵ年という、長期の低利資金の融通の道が開かれていることであります。

「農民もまた人間である」という筋道の確立、そのためにはまず農業経営が、経営主という立場ではなく、経営者労働の適格者として営まられなければならぬということを、特に強調して申したいのであります。

いまの農村は、古いかたちのあり方が少しずつ変わってきて、経営主が経営権をひきわたすことからくる、老後の生活についての不安を感じ出してきています。それを変えるためには、老後保障の道が早く開かれなければならぬのであります。教師に恩給があるように、養老年金制度の確立がたいせつであります。このためにはどういう解決の糸口をつけてゆくべきであろうか、真剣に考えてみたいものであります。

農林白書は、婦人労働の割合が五十二パーセントに増えているばかりではなく、農家人口の中で、十四才以下の幼少年層と六十才以上の老年層が、都市に比較して非常に重くなってきたことを示しています。農家の家族構成における老幼化の進行を指摘しているのであります。これは大変なことです。ここにも婦人の就労比率の高まりが裏付けされるのであります。農村の老人に対する社会保障制度の確立、農村に置き去りにされた膨大な老人層を日本の農業がかかえてゆかねばならぬとしたら、せっかく起ちあがろうという農業の

発展に対する、腰だめであると考えざるを得ません。

幼年層の問題でいうと、たしかに戦前は農村こそ貴重な人口給源、いや日本の産業発展のための低廉な労働給源とされ、農民は重い租税公課に苦しみながらその負担に耐えて、やっと義務教育を終えさせたかと思うと、都会の産業が安い労賃でこれを労働力として吸収し、不景気になったり、結核その他の悪い病気になると、農村にまた送り返してよこすという不合理をあえてしてきたのであります。都会はその義務教育の負担をまぬがれて繁栄してきたともいえるのであります。こういうばかなことを農村の父兄がくりかえしてよいでしょうか。

りっぱに育てあげ、教育し得る子どもの数だけ産むという計画産児、この徹底こそ大切だと思うのであります。婦人としての地位の向上のためにも、母性としての能力の正しい伸張のためにも、そうあるべきではないでしょうか。これは農地の零細化、分割化についても関係があり、何としても大切なことであります。

今まで農村調査でくりかえし調べてきた結果によりますと、日本の場合でも外国の場合でも、三十才までに経営者的責任を与えられたものと、三十才以後において与えられたものとでは、その農業経営が前進型であるか停滞型であるか、あるいは後退型であるか、その経営能力の較差をはっきりと表しております。

更に学歴と職歴についてでありますが、特に学歴の高い者の多い部落と、低い者の多い部落との比較でありますが、これまた、学歴の高い者が多い部落の方がはるかに農業生産力の高いということが、調査の結果に表れています。

職歴についてでありますが、新技術の導入に対する関心度について調べた調査がありますが、これは農家として前向きな前進型の農家以上に、帰農者であるとか戦後に分家したものの方が新技術に対する反応度が高く、進取的な身構えをもっており、一般農家に比して、慣行技術を破ってあえてあり得べき失敗をも負担してゆこうという、開拓者的な性格が表れております。

農業者教育のひずみ

さてここで重要な事実をお伝えしたいのであります。文部省の統計速報から計算したものですが、昭和二十九年三月における各府県の男子高校卒業生で農業に従事したものの数と、同じ年に高校中学校を含めて男子の農業に従事した者の数に対する割合を調べて見ると、どういう結果になっているかといいますと、農業県で低位生産県といわれる東北地方、青森で二十九・八パーセント、岩手二十三・五パーセント、宮城二十七・三パーセント、秋田二十五・五パーセント、山形二十二・九パーセント、福島二十五・四パーセント。教育県とよばれる長野がだんぜん全国で最高の五十六・八パーセント、最近非常な生産力の発展を見せ、停滞を打ち破っている北陸の諸県、富山三十・九パーセント、福井三十パーセント、石川二十九・四パーセント、新潟二十三・八パーセント、生産力の停滞期に入っているといわれる近畿の諸県でも最低が兵庫の二十七・五パーセント、全国平均二十九・五パーセントであります。

ところが、北海道の場合はどうでしょうか。驚くなかれ全国で最低の十七・八パーセントであります。

つまりこれはどういうことかといいますと、毎年春になって義務教育である中学校を卒業し、または学校を卒業して農業に従事する若い労働力を一〇〇人として、長野県では五十七人が高校卒で中学卒が四十三人という割合、青森では高校卒が二十人中学卒が八十人、北海道では高校卒が十八人で中学卒が八十二人であるということを意味します。

農業の生産力発展には、経営主の経営者労働、企業能力がきわめて大切なことであることを先に申しました。北海道では、青年就農者に中学卒が圧倒的に多いからといって、本道の農村における中学校教育が長野県のそれに比して、非常に高いということを誰が保証してくれるでありましょうか。

このことが今後十年、二十年後において、先進諸県と本道との農業生産力の発展のテンポの上に重大な影

響を持つものと考えざるを得ません。しかも注目すべきことは、全国的には高校卒業者の就農率が高まりつつあるばかりでなく、短大卒業者（旧専門学校）の就農率が非常に目立って伸びてきていることであります。

本道の高校は戦後目ざましい普及を見せ、殊に定時制教育は一町村一校主義という理想のもとに普及し、進学率も東北諸県にくらべるとはるかに高いはずであります。その点から考えていくと、これはまたどうしたことかということになります。もし今日の高校教育、特に定時制が単に農村からの人口流出に対して一方的に役立っているものとしたら、ちょうど義務教育と同じように、農業地帯である地方町村の重い経済負担のもとに、また父兄の経済負担のもとに、人口の都市集中化に対し相対的に協力しているのだという結論が出てくるのではないでしょうか。少なくとも高校所在地の農村では、雇用の場がきわめて狭いというのが私の長い間の観察の結果でありますから、いっそうこのことを裏づけるというよりほかはありません。

はたしてそうであるとするならば、今日の北海道の定時制高校教育のあり方が、村づくりに寄与することの極めて少ない、農業に就業しようという青少年にとってきわめて魅力のない、あるいは縁のない教育が行われているのではないでしょうか。本道の農業が、寒地有畜農業として高度の技術と経営能力を要求する重要な転換期にある時に、いったいこの事実はどのように考えるべきでありましょうか。私は道の教育行政当局に公開質問としてその見解を問いたいのであります。高校卒業生の農業就業率の低いということは、何としても北海道農業の発展にとって、重要な教育行政のあり方として責任があるのではないでしょうか。

私は常日頃から村づくり教育としての農漁村の定時制高校教育のあり方について、一つの夢を持ってきたものであります。ここでその立場から課題を出しておきたいと思います。それは東京教育大学の野尻重雄先生が、「農民離村の実証的研究」として膨大な調査と研究をされております。それによりますと、農民の場合一〇〇の離村者（出稼ぎではない）に対して、帰村者の割合が三十三パーセント、漁民の場合は六十八パーセントに及んでいることであります。これは戦前の数字でありますが、戦後もこの傾向はあまり変わって

はいないと考えております。

この事実こそ、農漁村における教育の機会均等化の実現の度合いを示しているものと考えるのであります。漁村は農村以上に教育の場がせばめられていることを物語っています。また農漁村から都市に移動していった労働力が、その生活環境や、労働条件に適応してゆくことの困難性の指標でもあります。漁村青年の方が農村青年にくらべて、いっそう適応性が低いことをも示しています。そこにこそ農漁村における教育の機会均等がいかなるかたちで実現しなければならないかの、重大な示唆をこの数字は物語っているのではないでしょうか。単なる職業教育、職業に対する理解の教育ではないのであります。

今日の都市産業は技術革新を中心としてものすごい質的発展と変化とをとげており、農漁業の産業としての質的較差をますます広げていることが一つの点であり、その職場には労働組合が結成され、近代的労働者としての位置の確立と新しい人間関係がつくりあげられていることです。

それは家父長的農業に対応させた職場の古い人間関係が消えて、まったく異質の、「労働者もまた人間である。人間らしい生活と健康が維持されるべきものだ」という新しい労働者の位置づけが行われ、この人たちを無視しては、近代企業というものが経営としてなりたたないというところまで進んできていることと、まがりなりにも最低賃金制がうちたてられようとする職場に変わってしまったということであります。人間の労働はタダだ、ただ一所懸命に働けばよいのだという労働ダンピングの人間観では、近代企業の職場の中ではかた時も呼吸しておれなくなったという重要な事実の変化であります。

こうした農業にも漁業にも要求される企業としての産業発展の重要な動因、それが労働力が移動してゆく都市職場の中にすでに体系的に確立されていることについて、農村や漁村では、どのように教育の機会が与えられているでしょうか。それは理論ではなくて、生活として、思考の方法として、行動様式として与えられるものでなくてはならぬと思うのであります。

家族の仕組を変えるもの

家長的家族制という考え方は、農村の中ではまだまだ強く働いていると申しました。ことに農業の経営は家族の労働を主体として行われていますから、家族の生活の仕組、生活のあり方というものは、経営のあり方や発展の方向に非常な影響力を持つものであります。肉体労働ではなくて、人格的労働であります。ここに農業の発展にとって強く要請される教育的側面がある訳であります。

それは、「農民もまた人間である」ための側面であります。農業教育ではなくて農民教育の問題であります。留岡先生の主張される継続教育の場があります。農村においては、農民の幸福のために農業の発展にとって、他の産業社会以上に漁村を含めて、特に特に大切な教育活動を盛んにしなければならぬ場がある訳であります。

留岡先生が真剣にこのことをお考えになり、裸になって農漁村にとびこみ、教師や農漁民とともに「村づくりと教育」について、もっと本気になって見つめようではないかとおっしゃっていることについて、私は深い深い感銘と共感を持つものであります。

家長制の強い家族労働を主体とした生産生活の中では、個人というものが、「いえ」という目に見えない枠の中に埋没して、個性の自由、個性の発展を押しひろげてゆくということを環境的に絶えずこれを抑えようとします。したがって人間の能力の分化が行われず、その上に経営が発展的に前進してゆくという生産様式の近代化が阻止されることになる訳であります。

いいかえますと家族の仕組、生活のあり方が変わるということは、農業労働のあり方に変化を及ぼし、経営を、生活を、変化させてゆく大きな動因であるということであります。家族の仕組、生活のあり方が変わるということは、家族の中における人格の位置づけ、人格の関係が変わるということです。ここのところが

変わってこなければ、農業の新しい発展と「農民もまた人間である」という立場の獲得は、出てこないのではなかろうかと考えるのであります。

ここに一つの事例を紹介したいのであります。これは教師が自己の教育活動の中から、一つの静かな、そして大きな革命を引きおこし、それが教師とか学校の外にあって、農村の中で大きな波紋となっている事実であります。

それは釧路の白糠町西庶路部落の松倉十郎家の家庭会議であります。松倉さんが山形県から昭和二十四年にこの部落に移り農業をはじめた時は、馬鈴薯が反収九俵という、非常にみじめな地味の悪い土地でありました。昭和二十八年から耕土改良をやってやっと反収三十五俵というところまでこぎつけました。所有面積は十三町歩、経営面積はわずかに六町歩。丹頂鶴が近所に住んでいるという釧路特有の泥炭地帯ですから、農業の苦労、生活の苦労も容易でないと思うのであります。広い農地を持って、畜産業をやっているといった農家ではありません。

家族の構成は、経営主十郎さん（五十一）、妻マサさん（四十五）、長女千可子さん(二十)、次女久良子さん（十八）、長男外史君（十六）、三女静子さん（十一）、四女順子さん（八）、次男久君（五）といった八人家族であります。

昭和三十一年ごろＮＨＫが『青いノート』といって、家族会議をテーマにした連続ドラマを長い間ラジオ放送していたことがあります。これを松倉さんの家族たちも興味を持って聞いておりました。ところが当時小学四年生の静子さんが生徒会の役員をしており、会議の運営に興味をもち学校でも先生から家庭会議の話を聞いて、自分の家でも家庭会議を開きたいなあと考えておりました。

今年（昭和三十二年）のお正月に、静子さんが家族の前で「うちでも家庭会議をもとうではないか」と提

案しました。このことが動機となって一月以来家庭会議が開かれることになり、はじめは月一回であったものが、三月本別の道立農業講習所で勉強していた長男の外史君が卒業して帰ってきてからは、月二回の開催となり、以来一回も欠かさず開かれているのであります。しかも長女の千可子さんが書記として、この家庭会議の議事録をていねいにつけておられることです。

このごろ生活記録ということがいわれていますが、これは立派なわが家の生活記録です。これを読ましていただいて、松倉さんの一家がどんなふうに変化し、経営や生活が変わってゆきつつあるか、簡潔な議事録の中に実によく浮きぼりされていることであります。

いま、参考にその議事録の一部を紹介したいと思います。

昭和三十二年一月十六日
会場　松倉家茶の間にて
役員選出
　会　長　一名　松倉　静子
　副会長　一名　〃　順子
　書　記　一名　〃　千可子
議　題
一、石炭は大事に利用すること
一、起床と御飯たきは五時半とする
一、会長は議題を進行すること

二月一六日　土曜日　晴

第二回定例家庭会議　　七時四十五分　全員出席

議　　題

一、久はもう少し大きい人のいうことをきく。また、おとなしくすること

一、自分のものはきれいにせいとんすること

一、牛を飼ったことに大賛成……とともに、家庭内のものとともにかわいがること

一、起床について、おそい人がいる、もう少し早く

一、各自の仕事分担

朝の清掃はかあさん

家畜の世話―父と千可子

ここで父よりことしの営農計画の発表あり

一、こんどの家庭会議は、外史も加えて三月二十日を予定している

一、御飯の後始末はすぐしまうこと。女一同にて

〈閉会　八時二十五分〉

三月二十日　水曜日

今晩は、外史も加えてはじめての家庭会議。父さんより何故家庭会議をするか？　との目的の話を外史に告げる。（開会　七時半）

議　　題

一、役員改選

新役員　会長　　外　史
副会長　　静　子
書　記　　千可子

一、毛布と母さんの手袋を買うことに賛成
一、男物の長靴一足買うこと
一、人間のいる場で尻から音を出さないこと
一、久の幼稚園に入ることについての買いものは、園から通知があってからにすること
一、赤痢がはやっているので納豆を大いにたべる
一、献立をつくること
一、食後は必ずすぐ後かたづけすること
一、計画をたてて実行すること

五月十六日　木曜日　晴
第六回家庭会議　開会八時　全員出席
一、茶碗かご、こんど文ちゃんが釧路へ行く時頼む
一、緬羊の毛の用途について
おとなもののカーデガン六枚交換すること
一、外史、自分の布団は自分でしいたりたたんだりすること
一、緬羊がふえたのでどう処分するか
現在八頭いる緬羊の処分は次のように

牝三頭、仔一頭、親若一頭とする
一、食費は主食のほかに副食費の予算をみてほしい。炊事当番に一任
一、前回できまった仕事の分担
とうさん―ふん出し、牛馬手入れ
外史―牛馬の飼い付け、牛乳運搬
かあさん―豚、鶏の飼い付け
静子―家事の助手
久良子―炊事、清掃など
久―幼稚園にゆくしたくは自分でやる
順子―牛の引きつけ手伝いをする
これらの仕事は確実にまもるようにする

〈閉会　九時十分〉

このように松倉さんの一家の中では、記録を読み進んでいくといっそうはっきりするように大きな変化が生れていっています。

一、農業経営の大切な柱である労力配分のことが、それぞれの能力によって計画的に、絶えず再検討されながら進められており、お互いが決めあった仕事を責任を持って処理していく。このことを基本にして、やった結果についてお互いに反省し検討しあっていく。これはたいへんなことであり、もっとも近代的な労働の秩序がここから生れ、育っていることです。

二、生活と経営がつながっているところに農業生活の特徴がある訳ですが、絶えず両方の側面からそのあり

方が検討されて、その合理的な結合を考えておられることです。家計の一々のこまかいこと、教育のこと、健康のこと、そして経営の内容化について、牛や豚の購入飼育から豚、緬羊、羊毛の処分にいたるまで、小さい五才の久君までが加わって討論が進められていることです。

そこでは新しい家族ぐるみの農業のやり方の発展が進んでいることです。家族のめいめいが自主性と独立性の上に人格の自由を確保し、育てながら、農民もまた人間であらねばならぬという、生活の目標に向って、目に見えない変化があらわれ着実に進展していっているのであります。この秋には、松倉さんの家では牛舎ができあがりました。サイロもできることでしょう。わが家もここまでできたと父親の十郎さんは家族のひとりとして、またリーダーとして、きっと明かるい年を迎えることでしょう。

家庭会議。それは教師や学校の外のことでありましょうか。教育とは無縁のことでありましょうか。教師や学校がこの重要な事実について目をつむり、耳をとざしてよいものでしょうか。これこそ教師と学校が村づくり活動について寄与し得る、もっとも手近なことではありませんか。これこそ農業経営の基本をゆすぶり、農民の生活に新しい進展を約束する農村革命への道ではないでしょうか。

農村や漁村の教師の方々、学校にお願いしたいことは、どうかこうした意味の家庭会議がひらかれることについて御協力願いたいことであります。これは北海道の農業が、農村が、農民が、もっと良くなるためにどうしても大切なことであります。農協に緬羊の毛を集めたり、クミアイマークの購買とりまとめに協力したり、家庭薬の配給に協力することではありません。家庭会議を開かせていくこと、これは教育の根本にかかわり、農村生活の根本にかかわることであることを御理解ねがいたいのであります。最近のＮＨＫの放送を聞いておられる方は、スポットニュースで家庭会議を開こうと農民によびかけているのにお気づきのことと思いますが、そうした呼びかけの意味もまたこうしたところにあるのであります。

この機会に、教師や学校の活動がどのように農民の生活と結びつくかということを、もう一つ実例を紹介

したいと思います。青森県弘前市の郊外に狼森（おいのもり）という部落があります。ここの部落は水田とリンゴ畑が半々という、農繁期が重なりあって、そのため特に婦人に重い労働がおおいかぶさって病人が多く、その他にも蛔虫やトラコーマなど、農村特有の病気がガンとして農民の生活に根をおろしている村でありました。

ところが今では、「明るい健康農村」といわれ、簡易水道ができ、ペーチカがあり、自動耕耘機がもちこまれ、病人がいなくなったという部落の生産や生活の様式が一変した村になりました。

それにはこういうことがありました。学校の先生が子どもたちに「お前らは晩の九時になったら、こっぱずかしがらずに家の中でどこへ向ってでもいいから、カチャ九ジダとドなるのだ」と教えたのであります。子どもたちは正直であります。さっそくその通りにやりました。「カチャ九ジダ」とは、「かあさんもう夜の九時だ寝なさいよ」ということであります。母たちは子どもに叱られていやいやながら寝につくようになりました。

父親もどっかと横座にあぐらをかいて、酒をのんでいても給仕が寝てしまってはしかたがないので、盃をかたづけて寝てしまうという結果になります。このことはどのような変化をもたらしたでありましょうか。

まず母親の変化であります。休養を十分にとり、疲労感がなくなるから顔色がよくなりツヤツヤしてきました。いいかえれば色気が出てきて、オヤジが妙に青春を感ずるようになり、夫婦の生活が円満になったことであります。次に子どもが神経質でなくなり、明るい性格に変わってきました。母親は寝不足をしていないから、朝起きてもイライラしない。子どもたちにガミガミとあたりちらし叱らなくなったからであります。子どもは学校にいる以上に家庭にいる時間が長いのです。家庭における子どもの生活が明るくなると、自然学校での学習態度に変化が出てきます。私はこのことに着眼した教師こそ立派だと思うのです。

家庭における子どもの生活、そのおかれている環境をきり離して学校だけで、教室の中だけで本当によい

教育ができるものでしょうか。農村や漁村の子どもたちの教育は、より多く家庭での生活の中に人間形成の大きなかかわりのあることに目を向け、本当の村づくりと教育とはどういうあり方をすべきか、教育哲学とか学説の紹介以前のもの、役場とか、学校の村人との関係機構図、組織図以前のものに、目を向けなければならないと思うのであります。

農漁村社会の仕組を変えるもの

福武直先生は『日本の農村社会』という本の中で、農村社会の仕組の特質として社会の機能が分化していないということを規定づけ、

一、農村の部落をかたちづくっているのは、個々の人間ではなく、「いえ」であること。だからあくまでも「××家の人」として承認される。

二、部落の地域的限定と、生活の場所としての部落と、生活の資を得る生産の場所との一致から、社会関係が全人格的な永続関係にあること。したがって人と人の接触が人格的に多面的であり永続的である。

しかも多くの場合、顔をつきあわせての面接的な関係である。

三、部落の生活関係が分化していないばかりか集団が重層型である。都市における近隣集団、職場集団、文化的集団というものは一人の人格に対する作用は完全に分化しているが、農村ではこれらの集団が分化していないばかりか、積重なっている。もともと農村の集団は数が少ないばかりでなく、部落という地域社会の上に重なりあっている。そこに部落意識という集団的な拘束力として部落規制が生れ、しかも極めて強力な働きをするのだと解明されています。

映画『気違い部落』の原作者きだ・みのる氏は、日本の農村社会の特質を「日本文化の根底に潜むもの」

に、例のきわめてユーモラスな筆致で「農村ばかりじゃなかろうが、日本の文化の底にはこうした農村の部落意識、部落生活の持つ働きが、常に根強く残っているのではなかろうか」とえぐり出しています。

この事実を歴史的、実証的に研究されている本に、柳田国男先生の『日本農民史』『都市と農村』があり、日本の民俗学者の積上げてきた仕事として「おのれ」を知るためにも、農漁村の生活を理解するためにもよい手がかりであります。

さてここで問題としたいのは、農村や漁村における部落の、集団の重層性とその規制力の問題であります。このことこそなぜ農村では無能な指導者の存在を許し、近代社会に対応し、対決してゆくという指導者の出現を妨げているのであろうかということや、農協でも市町村行政でも、農村の部落をとりまくあらゆる指導機関や団体、支配体制を、自主、独立、協同という、もっとも好ましい農業の近代化を押し進めてゆくために必要な農民の徳性をひきのばす方向に、「農民もまた人間である」という生活の立場を確立する方向に、農民が前進することを阻止しているか、ということの問題点なのであります。

プラオで畑を耕す場合、毎年同じ地下十センチなら十センチのところをプラオの底があたる畑おこしのやり方をやっていると、ちょうどそこのところがだんだん固くなって盤ができるようになります。これを犁底盤といっております。いわゆる浅耕、多肥、掠奪といった農業のやりかたは、このかたい犁底盤をつくりあげ、作物の生育基盤である土の物理的化学的な働きを悪くするばかりか生物性を悪化させ、悪いガスが地中にたまり、根の発育と作物の生長を妨げる訳であります。ことに根は犁底盤につきあたると、それから下に伸びてゆけずに横に伸びていきます。大根であれば朝鮮人参のようなかたちに変化し、まっすぐ伸びないものと考えればよい訳です。それだけではない。春の融雪期には排水が地下浸透が行われ難いことから、表土の流亡を速めたり、ガレを作り出します。

したがって作物の養分吸収は浅い耕土の中で行われますから、地力が早く収奪されます。しかたがないから、肥料をたくさん使って作物をとろうとします。いったん冷害だ、凶作だということになりますと、その肥料代がたちまち借金として残される訳であります。こうした悪循環を断ちきるためには犁底盤をこわし心土耕、俗に天地がえしをやらなければいけないということが言われるようになったのであります。

犁底盤の下には新鮮な土壌が、利用されないかたちで眠っているのであります。天地がえしをすることによって老朽化した土壌が若がえり、そこに新しい生産力が生れてくるということで、強力なトラクターによる耕土改良が行われるようになりました。これも年がたてばまた天地かえしの必要があり、耕土改良ということは一時的なものではなく、絶えずくり返されてゆかねばならぬものといわれています。土壌を作物生育の最良の条件におくということは、農業を営む要件であります。

実はこの犁底盤に当るものが、農村の部落の仕組の中にある集団の重層性と、その部落規制力であるといいたいのであります。農村の犁底盤、これが壊されなければ、これを基盤として発生してくるあらゆる農村の停滞も収奪も、無くすることができないのではなかろうかと思うのであります。「農民もまた人間である」という位置づけの確立は、絶えずここで阻止されているのであります。

この農民にとって、身近な悲しみも、喜びも生活共感の場である部落集団の仕組が、天地がえしをされて犁底盤としての役割をすて、逆に働く農民すべてにとっての生活課題を結集しこれを解決してゆくための組織として新たに組替えられる、そういう方向に向かって前進すべきであるというのが「農民もまた人間である」ための第二の問題点であります。

一、部落の農民集団というものは働く農民として個人の集団ではない。「いえ」の集団であって、部落の会合に集まってくるのは、「いえ」の代表者としての経営主であること。オヤジを中心とした集団であると

いうこと。婦人や息子が出席したとしてもそれは、「いえ」の代表であって、個人としての農民のそれではない。

二、ところが、「いえ」にはフチョウがついているのであります。これは岩手県のある農村地帯のことですが、経営主の呼び方に次の五通りがあるといいます。「とうさん」、「とッつあん」、「おどッつあ」、「おど」、「どど」。これが戦前には、「とッちゃん」、「おどッつあ」、「おど」、「とど」、「てで」、「どオ」、「でェ」の七種類があったのです。戦後の農地改革にともなって、七つの階層差が五つにまで縮少されたことを意味します。それでもまだこうした呼びかたによって、階層が五つにわかれていることを示しているのであります。

これは経営主だけではなく、例えば婦人の呼び方にも、「おかみさん」、「おっかあ」、「ががちァ」、「かがア」、「あッパ」と五通りに、同じ農村婦人でありながら呼び方が違うのであります。こうしたことはいわば「いえ」のフチョウのようなもので、息子であろうが娘であろうが、まずこのフチョウによって人間の価値が区分されてしまう事実であります。

こんな笑えぬ話があります。ある帰村者の未亡人が子どもに「おかあさん」とよばせるようにしたら、トナリ近所の人びとから、「いつのまにかあッパからおかあさんに昇格したんだ」とささやかれ、実に苦しい思いをしたそうであります。

三、部落の集団がこうした経営主、「いえ」、フチョウのついた者同士の集まりであるということが問題になってくるのであります。金銭の貸借とか、世話になった、世話をしたといった貧富や、その他の力の関係が正面からものをいって、フチョウのついている「いえ」と「いえ」との秩序関係を、現状のままに維持しようという力が働く訳であります。

「隣に蔵がたてば腹がたつ」ともいい、「隣の蔵が倒れれば鴨の味がする」といった農村特有の心理は

見のがすことができません。

四、何といっても部落集団の中でもっとも根強い力を持っているのは部落自治機能集団であります。治安、道路、祭典、結婚、死亡、扶助を中心にしたこの集団が「いえ」の集団として、部落的規制の中心であります。

町村行政の末端として、農協運営の窓口出先としてこの組織が使われるのであります。そのかぎりにおいて、町村行政のありかた、農協運営のありかたというものは、この部落自治機能集団の上に乗っかっているのだと判断してさしつかえないのであります。言い替えるなら、形式的には近代的な組織である町村自治行政とか、農民の自主的経済団体といわれる農協も、もっとも古いかたちの未分化な部落機構に対応して働いている事実を直視しなければならぬのであります。

五、農事組合とか生産組合とかいわれる部落生産活動体も、実は部落自治機能集団の中に吸収され、重層的に配置されているのであります。農事組合とか生産組合というものは、もともと農政支配の末端として作られたもので、日本の農業が官僚の指導支配による補助金行政の窓口として農事組織が奨励され、特に戦時中の食糧の作付強制、食糧供出の道具として強化されたものが、戦後は同じ食糧の供出あるいは予約割当、税金の請負賦課、農業共済の損害評価と割当機構として生きのびているのであります。税金とか供出、共済という法律制度の上では個人を対象としているものが、実は農村では部落集団というものが公然と法律執行の機能の中に割り込んで、有力な作用をしていることは見逃せないことであります。

農業生産の機能集団としての部落農協、農事組合、生産組合といったものが、部落集団の重層性、その支配的現状維持的秩序のもとに押しつぶされて、生産基盤を拡充しあらゆる生産手段の収容力を高め、農業の生産力を発展させ、「農民もまた人間である」という、地位の確立に向って前進して行かないということは、実はこの「いえ」の集団であるからだと断定せざるを得ないのであります。

支配的な部落自治機能集団も農事活動集団も、「いえ」の集団から、婦人も青年もふくめて働く農民の集団として変貌しなければ農村の自治機能も変わってこないし、生産活動の機能も変わってこないと思うのであります。

六、実は農村における町村の理事者とか、あるいは議会議員、農協の理事監事、その他農業団体の役員というものは、こうした「いえ」を単位とした部落集団の働きの中から立ちあらわれてくる訳であります。町村のこうしたあらゆる指導層を母胎として、北海道段階、あるいは国の段階で、政治経済に関与するところの指導者が立ちあらわれてくるのであります。

こう考えてきますと、全購連とか北信連の汚職事件というもののそもそもの根源は、農民みずからが作りあげている、身近な部落集団のあり方の中にあるのだという理解が成りたつのではないでしょうか。

農漁民にとっての身近な部落集団が新しい秩序のもとに生れ変わらなければ、逆にこれを支配の道具として、収奪の秩序として利用されていることを許し、しかもその傾向がいよいよ露骨に具体化してきて、その力に抵抗してゆくことはできないのであります。

さらに重要なことは、今日の技術革新を中心とする第二の産業革命ともいわれる産業の発展は、当然農業の生産手段とその技術に変革を迫っております。

そうした生産手段や技術の進歩というものが、今日見るがごとき農業の個別的経営と経済の個別化の仕組を、いつまでその存在を許しておくかということであります。技術そのものが個別的経営に対応するのではなく、技術の社会化が個別的経営の社会化を押し進めていくのだということであります。

私は最近霞ガ浦に注ぐ新利根川流域の大湿地帯、アシやマコモが生いしげり、二間竿がもぐるという湿地の一角が、周囲にえん堤を築いて大動力による機械排水を行い、水位を地表から一尺まで押しさげ、干拓開墾をやっている実態を見てまいりました。

荒涼たる景観のまっただなかにいくつかの入植団地ができあがり、そこには緑の牧草畑、カンナが咲き乱れ、すでにいちぢくが実り、土堤には乳牛の群が草をはむ姿が見られ、稲刈の終った田圃ではすぐにトラクターが起しにとりかかっていました。

これら六十数戸の農家は、いずれも敗戦後の祖国にほんとうに着のみ着のままで、リュック一つ背負って引き揚げてきた満州開拓者の人びとであります。それはイデオロギーではなく、生活として「農民もまた人間である」という立場の農業の確立にはこれ以外に進むべき道はないのだという立場から、個性の自由と能力の分化の上にたった協同経営が行われているのであります。

この近くは映画『こめ』によって描き出されたところでありますが、数百年の伝統と慣行の上に行われる既存農家の農業が、いまなお一毛作の米づくりより脱却できない時に、早くも開拓者たちは二毛作を実現し、水稲反収においてもはるかにまさっている事実こそ、新しい農業のゆくてを物語っているのではないでしょうか。この開拓者たちのリーダー上野満＊氏の『新利根開拓農協の共同経営論』こそ、実に感銘の深い多くの示唆を持つものであります。

カマドの改善が牛を育てた

農村の犁底盤として働いている部落集団の仕組がどう変わってゆくべきものであり、婦人も青年も参加しての仕組とはどんなありかたのものでありましょうか。この革命的意義を、単に婦人も青年も参加しているからというのではなく、農村生活の社会化への新しいありかたとして示してくれたのが、熊本県菊池郡菊池町（旧迫間村）の市の瀬部落のおかあさん達であります。

昭和二十四年のこと、熊本県庁の生活改良普及員である水上さんが何回か部落を訪ねて、主婦たちと農民

の生活について語り合ったのです。語り合っているうちに、あれも改めねばならぬ、これも改めねばならぬという気持がだんだん高まって、話し合いの仲間になり、やがて実践仲間として生活改善グループができました。

グループが最初にとりあげたのがカマドの改善であります。しかしそこには、二つの壁がありました。それはおカネであり、一つは老人の無理解でありました。おカネは、隈府（現菊池市）という町まで野菜や花を売りに出て毎月一戸一〇〇円の共同貯金を行い、無尽式におとすことに決めました。

ところが市の瀬は地名が菊池町であるように、昔の有名な菊池一族が拠ったところで、ものすごく封建的な、農民武士の遺風を残しているところであります。例えば、洗濯のタライからほしもの竿にいたるまで男女の別があるなど、ちょっと想像もつかない生活習慣が残っています。

カマドはどうかというと、焚口はあるが煙の出口がないという、苦土でたたいたへっつい式のものであります。またこのカマドの数の多いことが、その家が人よせできる人数が多いか少ないか、ちょうど座敷の大きさを自慢するようなもので家々の誇りであります。いかに合理的であるからといってこのカマドを壊すということは、いわば大黒柱をいらないというようなもので、老人たちが頑として反対するのも無理からぬことでありました。

このカマドで煮たきするのに、藁をたく、松葉をたく、木の下枝をたく、といっても煙突がないから煙はすべて焚口から吹きもどります。これを火吹き竹で吹き吹き、上手に燃やし煮たきをするのでありますから、主婦の苦労も並たいていではありません。これを何とも思わないで何百年もやってきた訳です。

家の中は煤だらけで真っ黒、窓がないから採光が悪い。主婦はかがんで働き、ただでさえかがんで働く農作業が多いのに、家の中まで腰をかがめる無理な姿勢で仕事をせねばならぬのでありました。

しかし老人の無理解も定例の集会を各家庭持ち回りでやっているうちに、多勢に無勢といいましょうか、

数の多い主婦たちにとり囲まれて無言の説得といった格好になり、一つ、二つとカマドの改善が行われるようになりましたが、ここにたいへんな革命がおこってきたのであります。

台所が明るくなり、カマドが煙突のついた合理的なものに変わったのはもちろんですが、それよりも農業経営に変化がおこってきたことであります。それは今まで燃料として灰にしていた藁が余るようになり、カマドの改良と平行して、育成牛として牛が増えてきたことです。いわばカマドの灰の中から牛が生れてきたことになります。

村人たちは意外な発見をした訳です。生活改善ということは主婦たちの道楽じゃない、農業そのものの改善だということが理解されました。このことから男子の壮年層によって昭和二十五年に市の瀬農事研究会が生れ、生活改善グループは婦人部として活動するようになったのであります。

市の瀬農事研究会は、普通作部、園芸部、畜産部、山林部、加工部、土木部、婦人部、衛生部とにわかれ、青少年クラブも加えて部落の全ての人びとが、老も若きもどれかの部に属し、いわば一人一研究、一人一役といった部落集団が能力によって分化し、個性の自由な発展の上に生産や生活を高めようという姿に変わったのであります。

昭和二十五年から第一次三ヵ年計画、第二次三ヵ年計画と、着々新しい家族ぐるみ、部落ぐるみの村づくりが発展していったのであります。

一、家畜がふえるということは水の使用がふえるということであります。牛飲馬食といって牛を飼うためには水が必要となります。簡易水道ができることになりました。水道ができれば台所の水仕事が楽となり、家事労働の合理化が実現する訳であります。

二、家畜が従来の二倍以上に伸びてきたので、畜産部では部落の中央を流れる菊池川の川原に牧野改良を行って共同放牧場を設置しました。

三、今までこの部落の農道は畑のあぜ伝いといった巾のせまいもので、牛や馬のすれちがいも困るものでありました。牛に引かせる車がありますが、下肥樽を縦にならべてのせる四輪車ですから始末が悪いのです。むこうから車がくると、どちらかの車が後戻りをしなければなりません。引いているのが牛ですから気長なものです。

もう五十年も前から部落の人びとは何とかせにゃならぬと思いつづけてきたものが、いっきょに解決することになりました。道巾三メートルという農道が二・五キロメートルも、全戸の協力によってできあがったのであります。堆肥運搬も収穫物の運搬も、リヤカーで自由に運搬できるようになりました。すれちがいも可能になった訳であります。

四、今までなかった公民館が建ち、児童の遊園地もできあがりました。

五、徹底的な蛔虫駆除にのり出し、全戸が糞尿分離式の便所にかわり、下肥の使用をやめ尿だけを利用しますので、市の瀬の野菜には蛔虫がいないということで、清浄野菜として隈府の町の人は値段も高く、安心して買ってくれます。ここでも生活改善が営農改善に結びついたのであります。

糞尿分離式の便所とはウンコとオシッコとの出口の違い、出る向きが違うという人間の特性を利用して、便器を糞尿が分離されるようにし、糞は二槽式にして完全に分解腐熟させるというもっとも進歩した便所の構造であります。小便にはバイ菌が極めて少なく、蛔虫の卵が絶対に出てこないということに着目したものであります。

六、献立をたてての食事でありますから子どものお昼の弁当が栄養的に考えられ、全戸が下着三枚主義を実行しているので、学校では市の瀬の子どもはどことなく違う。身なりがさっぱりして、いつでも清潔であるといわれるようになりました。

このようにいろいろと新しい成果が生れてまいりましたが、特に注目したいのは部落の中での人間関係の

きわめて著しい変化であります。その特長的なことは次のようであります。

一、部落全体が各専門別に分化したグループの集まり、連合体になったこと。

二、今までの縦の支配的従属的な人間関係が姿を消して、各人は平等であるという人間関係に変化したこと。

三、グループは話し合いによる問題解決のグループとして、その実践は課題の協力的な解決であるという立場に立ったこと。

四、他人のことは自分が考える、自分のことは他人が考えるといった、今までになかった新しい社会倫理の誕生。これは複眼でものを見、複数でものを考え複数で行動しようということであります。例えばAの家でニワトリを飼いたいという場合畜産部がその問題をとりあげ、A家の養鶏計画をたて、鶏舎の作り方からヒナの導入まで心配してくれることであります。またBの家で果樹をやりたいということになると園芸部がこれを取りあげ、計画を立て、開園から苗木の購入まで世話をするといったやり方であります。

こうなりますと、部落のなかの農業生産というものが、絶えずトップレベルまで引き上げられる努力が続けられ、階層分化が押さえられ、今までの「いえ」というものが部落の生活から自然に解消していったこと。さらに「いえ」と「いえ」との間の壁がなくなったこと。

五、農地改革によって生産手段（土地）の所有関係に変化がおこり、さらに人と人との関係、人間関係に変化をおよぼし、さらには生産関係にまで変化をもたらすにいたったこと。生産関係の協同化の以前にすでに農民意識の協同化、人間関係の協同化が実現したということ。（中田正一『村づくりと青年運動』）

書いただけでは、極めて簡単なことのようでありますが、農村社会にとってこれは大変なことなのであります。「農民もまた人間である」という立場の確立にはまず身近な部落農民集団の中から、支配と被支配の体制の秩序をなくし、人間の関係が縦の関係から横の関係に変わることであります。農民の人間関係、生産関係の協同化は、自主性と独立性のないところには絶対に進まないということです。個性の自由と能力の分

化の上にこそ生産協同体制の花も咲き、実を結ぶものと断ぜざるを得ないのであります。

「村づくりと教育」のことを考える場合、教育がいかにしてこうした「いえ」や「むら」（部落農民集団）の人格的側面に働きかけて、そこに人間の個性的自由の実現と、支配と被支配の関係の排除を実現してゆくかということが、実は重要な課題であると思うのであります。村づくり教育といえば全村教育とか、全村学校とかの構図が、とかく安易に考えられやすいのでありますが、そうではなくて人間関係をゆがめている生産関係、生産関係をゆがめている人間関係、この通路の中に立ち入って農村の前進をはばみ、「農民もまた人間である」という立場の確立を妨げている「いえ」と「むら」、それは教師にとっても、また、学校にとっても、もっとも身近な踏みこめる距離にあるものであります。この「いえ」と「むら」の持つ教育的課題の解決について、教育の力の参加を願ってやまないのであります。与えるのでもなく、押しつけるのでもなく、農民の持つ矛盾を矛盾とし、農民の立場にたって一緒になって解決に向かって努力していく、そうお願いしたいのであります。

農民も又人間であることの実証

農村の生活が、農民の生活が、人間らしい生活に「農民もまた人間である」という生活がうちたてられるということは、近代企業の中で労働の原則として認められている八時間労働、これで人たるに値する生活を営むための必要をみたすべきものが保証される、この方向に一歩一歩近づいてゆくべきものでなかろうかと前にしるしました。職業選択の自由、能力の分化ということも、農村の生活、農業の生活が、重苦しい灰色の労働の生活から―詩人宮沢賢治は、かの灰色の労働を燃やせといっています―もっと人間の個性の自由が認められ、能力を創造的発展的に伸ばすことを許すような環境、条件に変ってこなければいけないのではな

かろうかともしるしました。

暉峻義等（てるおか・ぎとう）＊先生は、『農業の労働科学序説』で、「結局は農村における農業が最良の労働条件において営まれるということ、もっとも適度な労働を、最大限度に、年中を通じて平均的に発揮する条件を作りあげるべきではないか。それは農村が本当の意味の緑の工場となり、農民とはそこで働く勤労者であるといった方向にわれわれは努力するべきではなかろうか。」と述べています。

一、八時間労働という原則は、今日の近代企業の中では、労働者が長時間働くということは疲労の蓄積となり、かえって一時間当りの生産量を少なくし労働は不正確となり、生産品質をおとし、原料、資材、動力などの浪費となる。また欠勤者の増大、病人災害の増大はかえって生産費を高くし、労働力の消耗は資本企業の立場からいって儲からないのだということが認められ、世界の国々で採用している労働の原則であること。

農業労働が家族的協同労働であり、賃金が支払われないから、労働力の搾取がないから、労働基準法―これは働くものの基本的人権を定めたもの―の適用はいらないのだという根拠はない。八時間労働制は人間の生活と、近代的労働における文化的基準であるということ。

二、工場労働には安全衛生基準が定められている。機械器具、有毒有害な原料または材料、粉塵から起る危害を防止するために、必要な施設設備をしなければならぬことを規定づけている。違反をすれば罰せられる。未経験者に対して危険作業につくことの禁止、あるいは安全衛生教育を施すことの義務化、年二回の定期健康診断の実施を定めている。農業では、その労働についての安全と健康についての危害防止はいっさいが農民個々にまかされている。農業の機械化が進み、化学肥料の使用の増大、病虫害防除のための危険な農薬、クスリではない将に危険な農毒薬の使用、これらに対する生命と健康の安全は放置されてよいのであろうか。

工場労働者の職業病には国家が補償するようになっている。農民のこれらの職業病に対しては、施設の義務はあっても補償を受ける権利が認められていない。

三、婦人と年少労働については工場では満十五才未満の児童の使用は禁止され、十八才未満の青年は男女を問わず労働時間八時間の超過は禁止されている。婦人は満十八才以上でも深夜業の従事は禁止されている。婦人と満十八才未満者の重量物運搬、有害有毒物の取り扱い、危険作業の従事などについても禁止されている。

産前産後の婦人には前後六週間ずつの有給休暇があり、乳児を保育する婦人には一回三十分、一日二回の授乳が認められている。月経時には生理休暇を要求する権利さえ与えられている。

およそこうした人間解放の基本的要件は農村を素通りし、特に年少者と婦人にとっての基本的人権が守られていないということ。

四、ニコヨンといわれる日雇労務者に対してさえ健康保険制度が確立しているのに、国民健康保険さえない農村がまだまだ多い。弱小な農村国保では施設の利用が限定され、医療体制がきわめて弱体であること。

養老年金、失業保険といった制度もない。軍人や官吏に恩給があって、農民にはこうした離農失職時に対する、また老後に対する保障の道がまったく開かれていない。

これらのことは、八時間労働制とともに工場労働者の基本的人権として法によって認められているが、農民に確立されていないところに「農民もまた人間である」という立場の確立を妨げている重大な要因となっている。この人間としての権利の確立は、実は「いえ」と「むら」をつくりかえ、働く農民の農業への前進を開く道でもある訳であります。

「村づくり教育」は、これらのことについて目を閉ざすことは許されないと思います。北海道のある農村ではこうしたところまで目をすえて、着々と村づくりが進んでいるところがあります。農漁村の社会はすで

にあるもの、現にあるものですが、またそれは人びとの手によって作り代えてゆけるものであります。そこに絶ゆまざる努力によって支えられる、村づくり教育の方向と道があるのではないでしょうか。

昭和三十三年　『北海教育評論』一月号

北海道の学校と建築

―学校はハコではないこと―

学校建築はハコのようなものであればよいのだという一大迷信が、今まで長い間われわれを支配してきたのではありますまいか。いかにも今までの学校は、兵舎のようでもあり、倉庫に窓を大きくあけたようなものでもあり、また、病院にもよく似ております。地方当局の理事者はもちろん、父兄もそのように考えており、教師もそれをもっとものように受けとってきたところに、学校建築が単に施設として、教育財産にすぎないのだという不合理をあえてしてきたように思います。

学校建築は教育建築として、建築そのものが教育機能の一分野であり、教師の参加すべきものであり、教育科学の領域として位置づけられてこなかったのであります。およそ現在の大学における教育学部で、学校建築とその設備についての講座のあることを聞いたことがありません。教育行政という講座がありますが、その教育行政の中ですら、学校建築ということはとりあげられていません。教育機能の重要な部門でありながら、それは建築専門家にまかせっぱなしの仕事として放棄されてまいりました。

戦前の学校建築が、あまりにも兵舎建築の構造に似ていることに驚くのでありますが、戦前の日本の学校教育が果たしてきた役割をかえりみる時、そこに何かつながりはなかったでありましょうか。極端にいえば、便所の設計、配置までがあまりに兵舎建築に似すぎていることであります。はるかに寺子屋時代の施設のほうが庶民的な民衆につながる共感があったと思います。

昭和30年建築家田上義也氏との共同作業で建てた阿寒町のまりも校舎

われわれは、社会科の教育で必ずといってよいぐらい建築文化史に触れますし、子どもにそれを教育しています。いいかえるならば、建築は文化の表現であり、文化そのものだということであります。とすると当然学校建築の歴史というものは、教育という文化活動の建築史的表現であって、それ以外の何物でもないということであります。法隆寺の建築を教え、藤原貴族の建築を教えている学校教育が、今日みずからの教育作用を営む学校建築について、何らの関心と反省がないとしたら、これはおよそどこか心棒がぬけているといわざるを得ないのであります。

わたくしが学校建築に興味をもち出したのは、僻地教育に目をむけてからであります。それに僻地における学校は、単なる施設ではありません。少なくとも北海道においては、そこに土着する住民の立場からすれば、そこに学校があるということではなくて、明らかにコミュニティセンターであることは、過去も現在も変わりがないということであります。教師が用いている校下という言葉は、住民にとって

昭和31年建設当時の臼尻漁業高校

は一つのコスモスを意味していると思うのであります。それにしては僻地の学校施設はあまりにも惨めでありました。

ところが、従来の僻地学校は、都会や中心市街地の学校とはちがって、粗末であってよいもの、バラックでよいもの、安上がりのゴマカシ建築で、それも地域住民の労力奉仕でさらにコストをおとし、なるべくツッカイ棒で支えてあるようなところが、僻地の実感があってよいのだという、妙に投げやりな通念が働いていたことは、否めない事実であります。そこにはコミュニティセンターとして、コスモスの安定感として重要な機能を果たしているという事実を見落としてきたと思うのであります。

ことに小中学校では、情操教育の重要性がいわれていますが、当然施設としての学校そのものが、造型として美的な制作として表現されねばならぬと思うのであります。まず兵舎建築からの脱出でなければならぬのであります。さらに児童生徒の健康教育という立場から考えれば、当然施設設備そのものが、健康衛生のしつけをもたらすような理想をもったも

のでなければなりません。

北海道では田中敏文知事*が就任以来、寒地建築の普及を提唱し、道が寒地建築指導所まで設けて努力してまいりましたが、当時道立高校が一ヵ年に十三件も火災を発生し消失している状況の中で、知事の奨励している耐火耐寒建築による復旧について、そもそも反対したのが道財政当局であり、建築部であったことを思うと、官僚のセクト主義に恐れいるばかりであります。このことが実現するためにはなお数年の月日が必要だったのであります。

この間にあって北大建築学科がわりあいに意欲的な仕事を市町村と取組んで、小中学校において実現してくれたことは感謝してあまりあると思うのです。しかし道立の高校においてはまだ造形的にも、教育建築として意欲をもったものは一つも実現していません。ことに義務教育に関係のある盲ろう学校のごときは、戦後のまったく新しい分野であるにもかかわらず、実に特殊児童の生活そのものを無視したひどいものといわざるをえません。これは結局が、学校建築がまだハコであるという考え方から脱却できず、教育建築として理解されず、お役所式に処理されていることの証左であります。将来は是非一校ぐらいは日本で一流の建築家といわれる設計家に依頼し、これに教育の各専門グループが参加して設計をまとめるといった、先駆的な学校建築が実現してよいと思うのであります。

わたくし自身、僻地小学校のいくつかを手がけてまいりましたが、水洗便所のある学校三校、入浴場のある学校一校を実現しました。つめを切れ、手を洗え、便所はきれいにしろ、体にあかをつけているなとお説教するよりも、そういう行動様式を自然に身につけさせるような学校でなければならぬと思うのです。最近道南の南茅部漁業高校（旧臼尻漁業高校）の設計にも協力いたしましたが、ここの便所は北海道でも初めての糞尿分離式の構造を試みました。普通家庭では大便一小便十の割合の分量ですが、これが学校になると大便一、小便二十五〜三十の割合になります。学校の便所ぐらいパチャパチャはねて始末の悪いものはありま

せん。小便ははじめから分離して、土管で遠く校庭外に集中貯溜し、これをポンプでくみ出し、速効性肥料として利用しようというものです。ネライは漁村における生活改善、生産改善であり、蛔虫駆除やはえ発生防止の徹底的効果をねらっているものであります。

学校煖房も、集中煖房のできる都市は別として、僻地学校ではどうするかという立場から、熱風炉を装置した学校を二校実現してみました。これは火気の集中管理をネラったものであり、教室のスペースを最大に生かそうというものであります。われわれの子どもの時代のように学校に餅を持ってきて焼くといった楽しみ、或は十勝石をストーブに投げ入れ熱すると、中からガスが抜けて軽石になることが分るなどの楽しみはなくなりますが、新しい学校における採暖様式であります。もっと建築の耐寒性ということばかりでなく、煖房その他の設備についても、一歩も二歩も研究を進める必要があるのではありますまいか。

わたくしの手許に一九二六年（大正十五年）発行のアメリカにおける学校煖房についての資料がありますが、すでに自然対流式の熱風炉が用いられていることを知り、北海道の学校がホントに百年一日のごとく、明治初年ケプロンによってもたらされた投げこみストーブが、依然として学校煖房のすべてであることを思う時、北海道の教育行政が、こうした方面まで幅広く目を向ける必要があると強く思うものです。これからの教育行政が、学校建築というものを、単に建物としての理解でなく、教育科学の一分野として、教育行政そのものとして、つかみとっていってもらいたいものと念願するのであります。

昭和三十三年『教育新潮』第九巻第六号

水と空気は日本一

―近代都市へ歩むわが帯広の自慢―

十勝の水瓶日高山脈

圏谷から雪どけの水

雑穀のまちとして知られる十勝平野の中心都市帯広が、伊豆の人依田勉三のひきいる晩成社によって開拓の鍬がいれられてからことしで八十年目に当たる。勉三は慶応義塾の出身、北海道で企業的農業を実現しようとやってきたインテリ開拓者だが、彼が当時わざわざ北海道の奥深いこの内陸地点を選んだことは、いまにして考えると地元民にとってずいぶん幸運なことだった。

というのは、この帯広の空気、地下水が日本有数の優秀なものであることが最近の調査で明らかにされたからである。

ノーエ節の歌の文句にあるように、富士の白雪がとけて流れて三島の市中に湧出（ゆうしゅつ）し、女郎衆の化粧の水となって東海道上り下りの鼻下長族を魅了したことは衆知の通りだが、帯広の地下水はかつて二度にわたって訪れた氷河時代に、氷河のため深くえぐりとられた日高

山脈の圏谷（カール）から流れ出る雪どけ水が、伏流水となったものである。日高山脈が十勝平野の西をかぎって美しい連峰景観をみせているのも、その山脈のいただきが氷河によって削り出されているからである。

夏は冷たく冬は暖か

昨年末、その地下水の調査を通産省地質調査所の小西博士、北海道立地下資源調査所の山口博士にお願いした。工業用水としての帯広盆地の地下水の性格をはっきりさせようと思ったからである。

両博士の報告によると、日本で地下水の最も豊富な地帯は富士山ろく、大垣周辺、富山平野と、わが帯広盆地だという。口径十二インチの深井戸で、水位降下一メートル当たりの揚水量は、富山平野で六〇〇トンだが、帯広でも五〇〇トンと非常に豊富なものである。また工業用水として問題になる水温も、一〇〇メートル深度で本州方面より五～七度低いことも特徴的である。

晩成社が入植した帯広発祥の地に水光園という小遊園地がある。両博士の滞在中に、そこの湧水が四季を通じて摂氏四度であって世界的にも珍しいものだという話が耳にはいったので、さっそくお願いして調査していただいたところ、四度というのは盛夏のことで、厳寒期には逆に十六度にもなることがわかった。

両博士のいわく、「これは帯広から四十～五十キロはなれた日高山脈の春先の融雪水が、夏の暑い盛りになってこの地点に到着して湧出し、逆に盛夏季の暖かい水が冬になって到達、湧出するものである」と。カールの水が帯広扇状台地の下を四ヵ月も五ヵ月もかかってくぐりぬけてくる勘定になる訳で、地図を広げて説明を受け、なるほどと感心したものである。

水質の方も最高級

地下水の豊富なことはわかったが水質の方はどうかというに、これまた富士山ろく、関東西北部、大垣周辺、大井川下流とならんで最高級という折り紙がつけられた。

電気比抵抗による水質調査によると、富士山麓が一二〇オームメートル、大阪四十オームメートル、札幌三十三オームメートルなのに対し、帯広は一〇〇オームメートルと、ほとんど富士山麓に匹敵するほど不純物の少ない水であることが明らかにされた。

話は飛ぶようであるが、帯広の近郊に御影という小駅がある。昔はアイヌ語そのままに佐念頃（さねんころ）と称し、浦幌の町には下頃部（したころべ）という駅があった。いずれも邦訳をはばかるような意味を持つうえ、日本語としてもどうも「さねんころ、したころべ」と駅が続いては風俗公安に害があるということで、それぞれ「御影」「新吉野」と改称した。

御影と改称したのは付近から花崗岩（かこうがん）、俗にいう御影石が産出されたからである。日高山脈の十勝側は狩勝峠から始まってエリモ岬に至るまで、花崗岩層によっておおわれている。エリモ岬にいたる黄金道路に現われている花崗岩の断がいは、天下の絶景である。

神戸の灘や西宮の酒水が日本一すぐれているのは、背後にある六甲山の花崗岩台地に関係があるといわれているが、帯広の水がすばらしく良質なのも、日高の花崗岩層と関係があると考えていいのではあるまいか。

自噴の深井戸数十

帯広市内には大きな小学校が七校あり、どの学校にも本格的な二十五メートルプールが設けてある。盛夏

には子供天国となって父兄を喜ばせ、深夜ともなると、仕事帰りの夜の蝶（ちょう）が絶好の浴場として利用し、これまた父兄?を喜ばせるが、それももとはといえば防火用水池から発展したもので、すべて深井戸の自噴水によっている。他都市ではちょっと真似のできないことであり、全国にもその例がないのではあるまいか。

市内にはそのほか、数十ヵ所にわたって自噴の深井戸があり、未利用水はそのまま排水溝に放流されているありさまである。

この点については、調査に当たられた両博士から強くご指摘を受けた。「日本国中さがしてもそうない貴重な水資源をむざむざ放流するとはなにごとか、今日では地下水を必要なだけモーターでくみ揚げて使用するのが常識だ」というのである。日本にただ一つ残された水資源のためにも、自噴をやめてモーターアップに切り替えようと思っている。

空気は清浄に乾燥

たまたま工業用水調査が終わったころ、帯広測候所の構内に、なにやら美しく彩色されたものがならべてあることに気がついた。それが全国的な鉄片の暴露試験であるとは知らなかった。太平洋沿岸（御前崎、枕崎）、日本海沿岸（輪島）、内陸（高山、帯広）、工業地域（川崎、東京）と全国各地区が選ばれ、さる三十四年以来、二四〇数種の鉄試片によって比較研究されてきたものが、気象研究所の神山恵三技官の手によってまとめられていたのである。その結果、サビ止め（塗装）したもの、しなかったものとも、その腐植度は帯広が全国最小であることがわかった。

これは鉄のサビ（酸化）の原因となる空気の湿度、ばい煙、排気中の亜硫酸ガス、海の塩分といった要素

が、帯広の場合きわめて少ないことを物語る。乾燥していて清浄だということだ。
このことは帯広の誇りとしてよく、今後の産業構成の方向を性格づけたものと考える。機械金属精密機械、農業機械や高度食品などの工業に、水よし、空気よしで、好適であることが裏づけされた訳である。

ふさわしい産業を

吉村帯広市長＊は数年来、「近代的田園都市」を都市づくりの目標としてきた。これには「全国の都市が工場誘致に血まなこになっている現在、肥だめ臭い都市づくりとは」という批判を受けたが、工場ならなんでもと誘致して、町中をばい煙でよごしてしまう時代はすぎた。
これからは最も貴重な資源を生かしてこそ近代都市になる、ということのアイロニーとして受けとられるべきだろう。その点、大分県鶴崎の工業開発について、工業立地研究会がその提案の第一に「工場公園」の構想をうち出していることは注目してよい。
わが帯広は質量ともすぐれた水と空気、日高山脈、大雪山、阿寒の景観にかこまれた緑の広い大地、発展する交通網を組み合わせて、十勝の大平野にふさわしい産業の開発をめざすべきだと考えている。

昭和三十七年四月二十七日　『日本経済新聞』

昭和初期の伏古

昭和四年ごろのこと、私はそのころ伏古の青年たちと、野原さんの座敷を借りて相互修養会というものを開いていた。当時の中心人物は野原重雄さんと慶産君である。慶産君は帯広中学で私の一級下で真面目な青年だった。行男君はまだ小学校か鼻たらしでなかったろうか。

また月のはじめ一日は早天修養会を開いた。私は自宅が池田でありながら、前の晩は野原さんの二階に泊めて頂く。午前四時、野原商店前に集合、青年たちは白鉢巻で、朝の静かな当時の石狩街道を駆け足で十号の伏古神社まで走る。神前で修養会をやるのだ。

私はその頃、今の言葉で言えば「ヘンな外人」でなくて「ヘンな中学生」であったといえる。だいたい帯中の三奇人として名が通っていたのであるから、無理もあるまい。

中学生でありながら、管内のどこそこの町村にでかけていって、農村青年と交友を深めている。これが後の冷害凶作、農業恐慌の嵐の中で、十勝興村同盟＊となって発展し、産青連（産業組合青年連盟の略称）＊よりもさらに急進的な農村青年運動になっていったのは、今でも思い出深い。

今から考えれば、日本の農業は当然そういう方向にいかなければヌケ道がなかった訳で、結局敗戦が農地解放をもたらすことになった。

ただ当時の各町村の中堅となって青年団や産青連で活動していた若い人々が、戦争が終わってみると、誰

彼と戦争で尊い生涯を捧げられ、あの人が生きておれば、あの町やこの町の村づくりがもう少し変わっていたのでないかと思うフシがあって、今は亡いそのころの若者の顔がマブタに浮かんでくる。今でいえば単なる農地解放ではなく、農業の構造改革をお互いに意識し、目標としていたのであるから立派なものである。

戦後４Ｈクラブというものが米軍の占領下にあって農村のなかにもちこまれたが、そのころわれわれが百姓クラブと称して、稲作、養豚、養鶏、酪農といった実学クラブを組織し、活動をもちこんでいたのだから、案外やることはハイカラで、御用青年団の体質改善をやっていたあたり立派といってよいだろう。まだその頃宇都宮高農の学生だった佐藤武夫が、アメリカの４Ｈクラブの活動紹介したものを佐藤から入手していたのである。佐藤は後年稲葉秀三のグループのメンバーとなる。

伏古駅前にあった野原商店

右から野原重雄さん、慶産さん、行男さん、ふゆ子さん

日曜日には行男君あたりの子供たちをつれて、今のつつじ沢から一帯を歩きまわって、キキョウ、オミナエシの野花をつみ集めて、盆の花にと帯広の町を行商して歩いたことを覚えている。どこの誰様が買ってくれたものか忘れてしまったが、とにかく子供たちが売

十勝興村同盟発足時のメンバー。前列左から本家氏、杉村氏、飯島弁護士、藤本（与）氏、後列左から木呂子、西川（忠）氏、松枝氏、森（哲）氏

りにきたので買ってくれたものであろう。

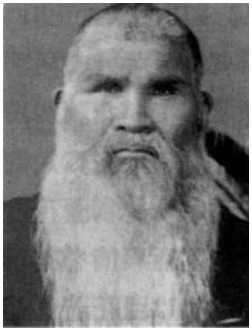
野花はちゃんと切りそろえて、わら縄でしばり、水あげといっていったん熱湯につけて急に冷たい水にいれると、花がしぼまないものだということを覚えたのもそのことのせいである。

伏古の入口に伏根弘三＊さんというアイヌの古老がいた。私が伏根のじいさんと仲良くなったのはキリスト教聖公会である。日曜の礼拝日にはちゃんと聖書を入れた小袋をさげてやってくる異国風の白ひげのじいさん。賛美歌（聖歌集）も、お祈りも実に立派なこと、とにかくこのじいさんを私は好きになって、よくついて歩いた。

いつかのこと、これは六丁目の杉村元四郎翁の「鹿の湯」だったと思うが、一緒に風呂に入ったことがある。同じ子供がタオルを風呂の中にもちこんで体を洗ったり、顔を洗うのを見て、そういうことは日本のサムライのすることではないと、ピシャリと注意するのを見て、強く感動したことがある。

いちどじいさんの手伝いをして大失敗をした。それは伏古の会館でウタリの人ばかりのために、九ミリ半のパテーベビー映写機をもちこんで映画会をやった時だ。漫画や劇もののフィルムを借りて、私が映写技師

でやったのはよいのだが、うっかり焼酎のことをアイヌビールとやったからたまらない。
少しアルコールの入っていたニシパの癇（かん）にピンとさわった訳だ。アイヌビールとは何だ。映画をやめろ、文句があるということになった。
何しろ無声映画の悲しさで、映画説明に調子がつきすぎたというものだ。大声でわめかれ出したものだから、映画どころではない。
この時はまったくあやまった。伏根のじいさんが一同の前で制してくれ、「この子供の鉞弥じいさんというのは、わしと同じにバチェラー先生の弟子だ。若い時は大酒のみで大失敗をやらかして、それがもとでバチェラー先生から洗礼を受け、酒を断って今は立派な人になっている。そのじいさんの孫で子供の時から禁酒のクギがききすぎてかくは相成る次第、わしに免じて今の失言はかんべんしてくれ。いおうとしていることは本当のことをいっているのだ。アイヌが深酒で身をもちくずし、働かないことはよくないことだ」と映画会がたちまち、伏根じいさんの禁酒講演になった一件は、私の生涯にとって忘れられないことだ。
後年平取の二風谷コタンに、トンガリ帽子の時計塔のある、水洗便所や、広いタイル張りの浴場のある小学校を建てる手伝いをしたのも、アイヌの石川啄木といわれた違星北斗の歌集をまとめたり、ＮＨＫの全国ラジオ放送で『光を掲げた人々』という番組に違星北斗の生涯をとりあげる骨折りをしたのも、伏根じいさんの感化からきている。


伏根弘三氏

庁立日新小学校跡地はもう町の中に埋まってしまおうとしている。この小学校はそのころの帯広中学校の生徒たちにとって、毎年行うマラソンレースの折返し地点であった。当時のバラス道の石狩街道を、オベリベリの学校から全校生徒がいっせいに走りだすのだ。両側はカラマツの並木道であった。子供の足には決して近い道ではなかった。

日新小学校が廃校になってからもずい分古いことになっているから、もうかれこれ四十年の月日がすぎている訳だ。吉田巌＊先生が平取の荷負から転ぜられて、ホントウに腰を据えてコタン教育に油の乗り切った時代だと考える。先生の献身的なお姿が今も思い出されてくる。

さて私にとって数々の思い出のある伏古も、今大きく変わろうとしている。否、変わりつつある。

帯広工業団地の計画はようやく進んできて、陸運事務所の団地移転も見通しがついてきた。国鉄の貨物駅や操車場が日の目を見るのも、そう遠くはあるまいと思っている。既に造成もなんだかんだで進んでいっている。見ずして信ずる者は幸いなり、といっても現実はそんな生やさしいものではないことは先刻ご存じの通りである。

しかし日本の道というものは、椎の葉にメシをもらねばならぬ旅人の踏みつけていった道から、今の国土を西に東にと通ずる立派な道路となったのだ。われわれの今走る国道三十八号線は僅々七十年の歴史だ。産業とか技術とか、人のよってたつ暮らしのたてかたは急速に変わっている。七十年の仕事は十年でも五年でも解決つく時代になった。しかし一瞬の間にということは、今日の科学でもできないことだ。やはり今日の時代が規定する時間は必要だ。その歩みはたゆむということはないのだ。

もう一つの大きな思い出を、西帯広と今は名前の変わった伏古地区に持つことを、心から楽しんでいるものである。

昭和四十一年四月八日　『想い出の像・友ちゃん』記念誌

北海道開発二眼レフ論

―拠点開発から面的展開へ、二十一世紀の可能性持つ道東―

根がこやし臭い農業育ちのものにとって、およそ勝負ごとというものがはだにあわない。そんな人間でも、碁や将棋というものが「けい」がなければ勝負にならないことは知っている。軍人は戦略戦術行動を鍛えるために、兵棋というものをやる。一種の図上演習だ。そこでは空間と力の関係の法則が働く。それを楽しむものだ。

開発という仕事は、農業もそうであるように、国民的立場からの国土の高度利用であり、国民の生活福祉とどう結びつけ実現するかということだと考えている。

こんどの三期計画を粗読してみて感じたことは、計量経済学的手法によりはじき出された数字に、いささか金しばりになっているのではないかということがひとつ。座標軸が開発庁とか道庁とか管理機能の集積拠点にしばられて、日本列島における北海道ぜんたいの国土利用を、大雪山上空三万フィートから視点を見据えて戦略をたて、国土利用の戦術を展開するといった北海道らしい野望と気宇にいささか欠けているのではなかろうか。かつてわれわれの先人はすでに札幌開府のあとでも、旭川に上川離宮＊造営のことをはかったことを忘れることはできない。北海道第二世紀の門出にあたっての三期計画であればこそ、二十一世紀の未来に向っての展望を含むものでなくてはならぬ。

開道百年といわれ、和人による維新開拓以来の開発活動は、北海道地図の上にいくつかの軌跡をつくりあ

げた。この軌跡の数々の中から大雪山的視点にたち国土利用、開発戦略の基本軸を想定してみる。

第一図形は、札幌を基点として旭川、北見、帯広、札幌に戻る見事な平行四辺形のダイヤグラムだ。第二図形は釧路を基点として北見、旭川、帯広、釧路に戻る、これまた美しい平行四辺形があることだ。この二図形は旭川、北見、帯広の三角形で重複して、大雪山塊を、畏敬（いけい）と調和をもって守ろうとしていることだ。この二つのダイヤグラムの描く基幹軸を基盤として、道北、道東、道南の面的関連をどう意義づけるか、ここまで盤面の石が埋まってくれば、勝負の先は見えやすいというものだ。

従来の拠点開発の発想法は、とかく「むら意識」、自治体エゴイズムに執着して、点開発かせいぜい線開発構想にとどまっていた。しかし先日、室蘭から洞爺湖、羊蹄山ろく、中山峠と札幌までバスに乗って見て、札幌、苫小牧、室蘭、札幌といった三角形の面的展開が生れていることを知った。そこには内陸、臨海、余暇、学術、情報、管理、空港といった開発要件のすべてを備えた面的展開がある。これを北海道の西部開発面区と仮に名づけておく。

それでは、道東部開発面区とはいったいどこだ。帯広を基点とし十勝港に結び釧路につなぎ帯広に帰る三角形が描かれる。これこそまったく札苫室札の西部開発面区と見事に対応している。大胆な表現を許してもらえば帯広は札幌に対応し、十勝港は苫小牧に対応し、釧路は室蘭に対応するということだ。ここでは二十一世紀の可能性が秘められている。この可能性を地球儀の上に、日本列島図の上に読みこむことこそわれわれの使命だと考える。

アメリカにおける東部の光栄は去り、西部の繁栄に移り変わったように、日高造山帯をはさんで北海道東部にようやく東雲の赤らみ、太陽がのぼってくる息づかいを、力強く感ずるものである。

昭和四十四年十二月二日　北海道新聞

1970年代

ヨーロッパの地域開発
チューリッヒから
土地を生かす農業
青少年の師父
農民的酪農経営を実現しよう
江差追分や子叩き唄がブルガリアにあった
わが魂の中の山河
賢治記念舘を建てよう
校歌制定の思い出
誰かこの「若者」中原悌二郎に惚れる者はいないか
十勝から北海道を考える
はみだし先生の思い出記
街の中から電柱を追放できないのか
活力ある大地に起つ農業発展の道を
〈宮沢賢治〉との出会い
「近代主義の精算」を指摘〜保田与重郎の創作時代について

ヨーロッパの地域開発

ヨーロッパには中世があった

今回のヨーロッパ視察で訪問した国やまちが、イタリアのローマだけが北緯四十一度五十四分でほぼ帯広の北緯四十二度四十分に近く、他の諸都市はすべて北方都市であったことは、私にとってまことにありがたいことであった。

特に、ヨーロッパ大陸では、セーヌ川をルアンからさかのぼり、延長一三〇〇キロメートルのライン河を源流のチューリッヒから河口都市のロッテルダムまで順よく下るという、ローマの版図から西ローマ、神聖ローマ帝国と、地中海文化からヨーロッパ文化に移行してゆく中世史成立の舞台である都市を中心として、地域開発を見て歩いたことになる。

それは又、我々が今日まで西洋とし、あるいは西欧として受けとってきたものの源流の地であり、第一次産業革命、資本主義の成立、傭兵制からナポレオンの国民軍編成を背景として、近代国民国家の体制を創出し、明治以来一〇〇年にわたり追いかけてきたものの故郷でもあることだ。

今日まで、ヨーロッパとアメリカを等質性の上において欧米という概念を用い、欧米一般の実態があるかの如き考えで理解してきたことが、それは誤りであることがわかった。ヨーロッパとアメリカとは全く異質

なものである。否、その異質度を深めているといってもよいともいえる。

ヨーロッパの近代には中世があることだ。アメリカの近代には中世が全く欠落していることである。

ヨーロッパの産業革命には、中世社会の基底となっていたギルドが、その産業構造に、また都市構造の中に離れがたく今なお癒着していることである。彼らの階級性というものは、実は階層性に結びついているものであり、産業労働の組織の中に生きのこっており、また同じように都市の仕組のなかにギルドホール＊として、都市の中心部に、都市の凝集力として市民性と景観を支えているものである。

ヨーロッパ諸国が植民地支配の時代を経て資本の国際性を身につけ、事実その国際性は少しも損なわれていないのであるが、その本拠である諸国の産業構造そのものは、もっとも民族的な香りのする中世が、がっちりとからみついていて、資本の無国籍性による無惨な都市破壊というものは、まったくなかったといってよいと思うのである。

我々の観念のなかにあって近代産業発展の延長線上に描いていた未来論的な考えは、ものの美事にストップをかけられたことである。

都市は屹立している

ヨーロッパからアメリカに渡り、そこに感じたことははっきりいってヨーロッパとの断絶であり、アメリカには中世の経験、歴史というものが全くないことであった。

新大陸の開拓経営は、他人に迷惑をかけなければ何をしてもよいという、アメリカンデモクラシーの上に、農業時代から産業革命への転換が進み、全く異質の行動原理の上に進められてきた。アメリカの自由とは、中世を克服しての自由ではなくて、中世欠落からの自由であることであった。

ブルガリア・ソフィア市のローマ時代の遺跡

そのことは、アメリカの国土利用の上にまことにあざやかに投影されている。国の歴史の浅いこと、国土の広大であることのもたらした実に乱暴な国土利用は、都市構造の上に端的にあらわれており、実に愚劣極まるものであることがわかったことである。ニューヨークといい、シカゴといい、ロスアンゼルスといい、こんな白痴的都市が、よくも世界の大国といわれる国の都市とは、まったく無惨な思いがのこるだけである。

逆に、すでに老成しきって退行期に入ったといわれるヨーロッパに、その国土利用の合理性と調和が見出され、観光ルートの蔭にかくされて、ちょっと想像もつかないような、しかも息のながい偉大な再生と創造の、たくましい開発事業が進められており、その底力に驚きいった次第である。

ヨーロッパは、都市が厳然として、数百年の歴史を背負って、アルプスのように屹立していることだ。そこには、都市が成立した後に、近代国家が成立していった経過を、現地の景観のなかにみることができる。このようにヨーロッパの都市は、頑固に都市としての自己を主張していることだ。

そのいちばんよい例は、都市と道路の関係にあらわれている。アウトバーン＊は絶対に都市の中には導きいれられていない。国道は都市の外側を走らせ、自己を頑固に主張することによって、そのスプロールをア

ウトバーンによって救済していることだ。

日本の国道一号線が銀座の真中を走っていたり、サンフランシスコの中央を通りぬけるアラスカカナダへのフリーウェイのありかたなど、都市と道路の関係は、その国の都市の性格によるもののように思われた。

日本の都市は宿場町の街村からの出発であり、アメリカの都市もまた幌馬車時代の街村形式から出発し成立したまちとして、その発足当初の性格からいささかも解放されていないことを意味する。道路の都市に対する合理的な結合の方式を見出すことが重要な時代ではあるまいか。

背線美

ルーブルのミロのヴィナス像を見つめながら気のついたことは、ヨーロッパの造型には正面から見る美しさ以上に、背中の美しさ、側面の美しさが強調されていることである。布が腰にまとわりつつも、まさにズリ落ちるのではないかという一瞬の緊張と筋肉の動きの美しさは、むしろ背中から見なければわからない。その腰の筋肉の動きが背線をずっと伸びあがっていって首筋におよんでいる。どこから見てもそれぞれ美しく、その部分の美しさの強調がまた全体の調和のとれた美しさとなっている。日本の仏像の美しさは正面の美しさがあっても、背中の美しさとうものをもたない。前から拝礼合掌するもので、裏側は楽屋裏のようなもので、実にむなしいものであり、美に対しての参加というものがない。舎利塔とか洞窟内の壁からはずされて、堂内に安坐しているようなポーズをとっている、もっともギリシャに近い定朝作の宇治平等院の雲中供養菩薩ですらその枠からは出ていない。

ヨーロッパの都市を構成している美意識というものは、非常にミロのヴィナス像の持っている美しさに似ている。どこから見てもまちは美しくあらねばならないという都市意識が、どこそこの街角にたたずまいと

して生きている。その都市に近づく場合、何となく農村から都市のただなかに導かれるという、その移りかわりにあいまいなものがない。

都市は、まわりの農村につねに都市を主張しており、凝集的で、まわりのあらゆる農村から見られる都市としての景観がかたちづくられている。

ミレーの「晩鐘」の絵にあるように、若い農民夫婦の夕べの祈りの遠景に教会の塔が見える。あれは集落の教会ではなくて、どこかの都市のノートルダム寺院＊であろう。そうした息づかいがどこの都市からも感ぜられる。

都市は、あらゆる方向に対してシルエットを持っている。それは夕暮のアウトバーンを車で走って見るとよくわかる。ルールからボンへの帰りみちに車窓から見たケルンは、大寺院がどこまでもどこまでもシルエットとして見える。しかしアウトバーンはついにケルンのまち中には入っていかない。そのうちケルンを離れてボンの方にむかって走っている。その都市景観と道路のありかたは、都市の凝集力に対して道は対応し従順であり、決して私意的でないことを物語る。ドイツの道路設計のすばらしさである。道も都市景観に参加していることがよくわかる。

管理されている都市景観

我々の訪問したヨーロッパのあらゆる都市で提示された話題は、アーバン・ランドスケーピング（土地景観管理）ということであった。都市経営の基本になる考えかたとして必ず強調されたことが、非常に印象深かった。

これこそ日本の都市計画に全く欠落している思想であり、これこそ日本の都市を貧しくしており、都市の

無惨さを物語るものである。

逆にいうなら、ヨーロッパの諸都市には、市民が市民自身の力で守らなければならないという、その歴史と風土の上にたった固有の都市景観というものがあるということである。

よくヨーロッパは石の都市であり、日本は木と紙の都市であるという人がいるが、寺院とか教会、あるいは宮殿、王宮、古城とか公共建築は、なるほど石造であるが、古い都市ほど、ローマのような地中海型都市は別として、中世からのヨーロッパ都市は木造建築が基本であり、日本でいえば間壁にあたる部分を石や煉瓦で積みあげているだけのことで、構造体とか床組は決してスラブうちではなく、木造である。オールド・タウンの古い面影の残っているところほど、こうした建築を今でも大切にのこして使用している。すべてが煉瓦づくりのように見えるアムステルダムの中心街でさえ、老朽化した商店街の改築中の工事現場をのぞいたら、依然としてもとの木組どおりの建築をしている。フランスのルアンの中心部の商店街を歩いていたら、なるほど商品はハイカラな衣粧品店でありながら、軒並み木造の四階建で、せこもち風に二階、三階と少しづつ道路にとび出してくる、よく写真で見なれた建築ばかりである。

ロンドンとかパリは例外で、ロンドンは大火にあったり、ペストの流行で困ったり、あるいは都市が革命や戦場となって、戦火にあった被災経験から石造化が促進されたもので、せいぜい二〇〇年とか古くても三〇〇年ぐらいのものである。ボンのまちなかのベートーベンハウスなどそのよい例である。まったくの木造だ。

ここでいいたいのは、都市景観管理がやかましくいわれるのは、石造文化だから、木造文化だからといった違いからではないということである。

アメリカは、ニューヨークをはじめとし、都市における都市景観管理の思想の欠落していることは、日本と全く同じである。アメリカにおける都市のむなしさと貧しさはここからくることに気がついた。

アメリカの諸都市には、市民にとって守らなければならないといった誇りとなる貴重な都市景観など、はじめからなかったのである。都市景観を組立てているものは、たとえばニューヨークのエンパイヤ・ステートビル、シカゴの石油櫓に似たジョン・ハンコック・センター・ビルのような成金趣味で、市民共有の都市景観などといえるものは何もないということである。その荒涼たる鉄筋コンクリートのバラック街の姿に一驚したのである。

なるほど書店にはアーバン・ランドスケープの書籍は並んでいるが、それは商品としての学問で、それを守ろうとする市民のいない都市に、都市景観なぞあろう筈もない。はじめから都市は破壊しようが建設しようが、都市民にとっては無頓着なもので、心の貧しい市民の都市であると感じた。金さえ儲かればよいという国の無惨さを感じとった。

アムステルダムの宿舎、ボンの宿舎で、そのロビーや廊下に五〇〇年前、六〇〇年前といった日の、古いまちのたたずまいの姿が、エッチングとか絵画にして掲げられているし、市役所を訪問すると、都市計画の説明には、古くからの都市景観の歩みや、古い市街地図の説明からはじまり、必ず都市計画の歴史性の上にたって説明が行われることに、心から感動した。彼らは都市の歴史性から、都市計画の未来を語ろうとしていることだ。その計画というのも、西暦二千年までの計画がどこにいっても用意されているのには、いよいよ驚かされたのである。アメリカではこんな場面にはついにぶつからなかった。

このことは、アメリカの歴史ははじめからエミグレであり、ピリグラムであったことだ。すなわち脱出であり、漂泊者であって、可能性の大きい国土の中で、未だに放浪者として、定住者文化というものをついに築くことも出来ず、一挙に廃虚となることを計算してつくっているような都市であり、国であると思った。十三州の国から南北戦争で統一国家となって、僅かに一〇〇年しかたっていない幼稚の国であることは勿論である。ことに西部の都市の工業化が進んだのは太平洋戦争からであり、航空産業の立地を見ればよく、日

本の太平洋沿岸ベルトの工業化と比較してみても、僅かに十五年ぐらいのズレにすぎないのである。

今日、日本の動向のなかにアメリカの文化とか学問の尻馬にのってアメリカ一辺倒であることには、非常な疑問をもったものである。

都市には「へそ」がある

ヨーロッパのまちには中世が息づいていることを述べたが、その中世の都市成立にはどこのまちにも「へそ」があるということだ。その「へそ」が実はプラザ（広場）である。

加藤秀俊＊の論にゲルマン共有地の延長としてのパーク（公園）と、地中海文化としてのプラザ（広場）との対比が論ぜられていたが、どこの都市にいってもプラザがあり、都市の「へそ」として、今日的な機能をはたしていることに驚いた。

ヨーロッパの都市構造は、結局ギルドホール、シティホールにとりかこまれたプラザが都市の「へそ」として息づいており、ギルドホールの様式美は北欧のストックホルムに於ても同じである。ただ都市のなかに十九世紀的変容を受けて、郵便局（ボン）、コンサートホールや百貨店（ストックホルム）のような場合もあるが、ブラッセルのギルドホールの軒並みはその典型的なものとして、まことに感銘に値する美しさを誇っている。

プラザは市民にとって交流と対話の場であり、土曜、日曜の休日には昼間は花市がたつ。果物や小鳥の市もたつ。ストックホルムと、雨の日であったがブラッセルの花市を見ることができた。夜は照明され、市民のいこいの場でもある。ボンではここにベートーベンの銅像がおかれていたり、ストックホルムのオールド・プラザには、昔の給水場の遺跡がのこっている。プラザの趣きは諸都市によって異なるが、そのプラザ

の持つ雰囲気は、どこの都市でもあまりといってよいぐらい共通したものを感じさせる。アメリカでも、ボストンとサンフランシスコのプラザを見たが、ことにボストンのオールド・タウンのプラザが唯一例外のヨーロッパ的プラザの構成手法をとっており、曲線状に美しく弧を描いてプラザをかこむショッピング・センター、これまた都市の美しさの中に調和した新しい市庁舎、プラザの立体的構成の処理のしかた。片隅に美しくとりまいて流れ踊る水の芸術。地下鉄、駐車場、バスなど交通機関のジャンクションのとりこみの巧みさは、パリのデファンスの国際見本市会場の前の人工地盤プラザと共に、プラザのもっとも近代的なものとして印象に深く感じとった。

プラザは市民社会による都市成立の歴史をおもかげとして残し、市民自治による自由と自治の都市の栄光を、今もなお市民の心によびかけているように感じた。

都市の土着性

歴史学者としてのライシャワーが述べているように、日本が明治以来一〇〇年の間に、目を見はるような近代化の展開を進めてきた基底には、幕藩体制三〇〇年間の封建制度のなかにその主要な理由が求められており、日本にも中世の成立があり、西欧との歴史的な同質性があったとすること。すなわちアジア的専制から早く脱却した開明性が、実はアジアで唯一の近代化をなしとげた国家たり得たとする理解である。

このように、同じように中世を経過し経験しながら、いちはやく近代化をなしとげたヨーロッパの都市には、今なお中世を色濃くのこし、中世の都市機能が近代都市のなかにいきいきと息づいているのは何故か。また日本では無惨にも、中世的都市機能の壊滅的破壊を通じて近代化を進めたというのは、これ又どうしたことかという深い疑問がのこる。アメリカにはもともと中世がなかったのだから当然としても、日本の場合

はどうしてなのだということだ。それは石と煉瓦の文化と木と紙の文化との相違だという論では困ることは、先に考えた通りである。

日本の幕藩以後の封建制というのは、意外にも官僚制というか、サラリーマン的な封建官僚の支配体制でなかったかということである。親藩の御三家とか薩長といった外様大藩は別として、つねに参勤交代と国替制度の中での支配機構であったことである。支配者である武士階級は、地域に根をおろした土着性というものをついにもたなかったのである。御家の一大事という世襲制のサラリーマン集団が大事だったのである。明治以後のサラリーマン官僚が、きわめて能率的な官僚として、近代化を進めるにあたり能力を発揮し得たのは、実は幕藩時代におけるサラリーマン官僚支配の三〇〇年の歴史的な経験を通じて、適応能力が十分に準備されていたからだというのは、司馬遼太郎の考えなどに代表される見解であるが、それは幕藩体制における封建支配の非土着性を物語っているのだ。

逆に、世界史の上において近代化の創出をなしとげたヨーロッパの封建制は、日本とは異なり意外にも土着性の強いものであったことだ。また十六世紀以来のヨーロッパ各国における自由市民による自治都市の成立と発展が、この封建都市群の中に、ジグザグに併存し、古い都市機能の上に市民都市を建設したのであるが、これらの自由都市は、実はギルド制がその基礎をなしており、一層土着的なものであったことである。

このことが、西欧の近代化が中世都市の機能をのこしており、日本の近代化が中世の都市機能を、無原則に容易に破壊し消滅させることになったのではないかといった感慨を深くするものである。

都市は緑に包囲されている

フランクフルト空港で降りて、車はアウトバーンにのる。このアウトバーンの両側には約五十メートル、

時には一〇〇メートル近い巾で緑の林が続く。この林が、日本のように落葉松とか白樺の単純林ではない。ちょっと見にはブッシュのようには見えるが、そうではないのだ。

かならず喬木と潅木との組みあわせで、樹種をたしかめてみると、非常に豊富な樹種のくみあわせだということがわかる。これは騒音その他の公害防止のための配慮であると判断した。またこうした緑がつねに変化のある林相を示し、ドライバーに対しては、景観の変化として心理的に変化を与えることにもなる。

都市に近づいても、この緑の包囲の中を走るので、動物園とか競技場といった標識が見あたるが、施設は緑の奥にあって見ることはできない。まちに入ってから地図を求めて見て、その位置をたしかめ、これらの施設の規模の大きさに驚くといった調子である。スケールからいって国際オリンピックが何時でも開けるのではないかと思われた。日本のまちであれば、車のなかからその施設の概要は見て歩けるのだが、ヨーロッパでは、この緑のおかげで車を近づけてみないとその施設が確認できない。まちは緑でつつまれているからだ。

ジュッセルドルフからルールの重化学工業、並に炭坑地帯の視察に出かけていった。このあたりは良質の石炭の資源の賦存とライン河の舟航とが共存して、近代ドイツの発展をささえてきた工業地帯である。

この工業地帯の農業が意外にもビートの栽培地帯である。その栽培単位も見た目で二十ヘクタールに近い広面積である。工業化のもっとも進んだ地域にこそ、もっとも進んだ集約農業が発達するという事実の発見である。工業化の発展が、農業の生産条件の工業化を促し、工業による労働力の吸収は、農業の経営規模の拡大を可能にするからである。問題は農業的土地利用について、このことを可能にする制度条件が一方に於て用意されていなければならない。いったいドイツではどうなっているのか、しかし調査する手がかりはない。とにかく、私にとって身近なビート畑が、つぎつぎと車窓にひろがってくるばかりでなく、都市の近郊まで整然と栽培されており、その圃場管理の美事さは、これが十月上旬の畑であるのかと驚いた。又、大型

トラックのビート運搬をする動きをひんぱんに見ることができたことはうれしかった。

ある市街地の真中に車をとめられて、ここがルールの炭坑地帯だというのであるが、我々の頭の中にある炭坑風景は、北海道の赤平や芦別といった俗に炭住といっている長屋住宅、それは石炭の煤煙でうすよごれた、どこか退廃した感じのする住宅地風景であらねばならぬ。ドイツと雖も炭坑は完全に斜陽であり、ドイツ政府は力をつくして撤退作戦を展開中の筈である。

ところが、ここは住宅のまわりが緑と花につつまれた三〜四階建の美しいアパート群である。これが炭住だといわれても、狐につままれたようなものでピンとこない。ジュッセルドルフやエッセンの郊外住宅風景と何ら異なるところがないのである。

なるほど、この住宅群の裏手を見ると、たしかに炭坑地帯だ。竪坑特有のマキの車輪が見える。日本の炭坑のようなズリ山が見あたらない。見えない筈だ。すべて水平にならして、レールが敷かれ鉄道が走っている。これらは一定のものになると、緑がすっぱりつつみ、いずれはハイデ＊のような景観に変化していく筈である。

ここで掘られた石炭は、鉄道や河船で他に輸送されるものもあるが、抗口に近接して化学工場が設けられており、染料その他の化学工場にエネルギー、あるいは原料としてコンビネートされているのが実情のようである。

工場がむき出しで見られたのは、ジュッセルドルフからボンに帰る途中のライン河沿岸に集結している国際資本の石油化学工場群であった。これらはまだ建設中のものもあり、いずれはこの工場群も緑につつまれて、道路の景観の中から遮蔽されてしまうことであろうと察せられた。

この判断は誤っていなかった。帰国してから東京大学農学部園芸第二研究室の井手久登＊氏の「西ドイツにおける自然保護、景域保育の歴史的展開」というレポートを読んで釈然としたのである。関係のところを

引用する。

景域保育（Landschaftsplege）とう考えかたには、都市景観の管理も含まれるものである。この思想が行政に定着するまでには、いろいろと歴史的経過をたどっているのだ。

十九世紀の後半から第一次大戦までの間に産業革命が促され、急激な工業化が進んだ。大都市、中都市といわず（木呂子註1）都市の景観はまったく無視され、都市環境は次第に悪化するばかりであった。都市と農村とは全くちがった原理の上にたって対立を深め、都市の庭園は道路につぶされ、貸長屋がいたるところに長蛇の列をつくりあげ、市民生活の不満はいよいよ増大するばかりか、社会緊張をいやが上にも高めるようになった。

このようなヨーロッパでの都市環境の悪化に対して、一八六四年にSchreber＊による市民菜園の提唱（木呂子註2）、一八九八年E.Howard＊の田園都市論の提唱、一九〇四年イギリス最初のDresden市郊外におけるL.Migge＊の二十世紀庭園文化建設の提唱など、産業革命の進行による都市破壊、生活破壊に対する有識者の深い反省と熱心な提案と運動が進められ、都市における公共緑地計画の重要性に対する認識が次第に高まっていった。

こうした動きを背景として、造園家と都市計画家との協同体制が生れ、緑地計画が都市の重要な課題となるようになる。（木呂子註3）

一九一一年（大正元年）に、ジュッセルドルフ市に緑地委員会が設けられた。これが今日に及んでいるルール炭礦地帯住宅地区組合（Sield Lungs ver band）の前身となるものである。ここにはじめて、緑地帯が「連担都市および市区の間の緩衝地帯、乃至は緑の肺臓（Grune Lunge）」として農林業的利用による景域部分（Landschaftsteil）として理解されるようになったのである。（木呂子註4）

この都市自治体および住民運動によりうちたてられた緑地計画（木呂子註5）は、ドイツにおける空間配置計画（Raumordnung）と国土計画（Landesplanung）の発展基盤となり、景域保護は他の専門計画、たとえば交通、建築、水利、工業等の計画と同じレベルで考えられることになった。この考えは、一九六四年にドイツ空間配置法（Raumordnungsgesetz）の冒頭前文の趣旨ともなったのである。

（註1）

ドイツの場合、人口一〇〇万以上の大都市はベルリン、ハンブルグ、ミュンヘンの三つだけで、中小都市の方が多数発達している。

（註2）

市民菜園の風景は、最初アムステルダムで見つけ、ストックホルム、ロンドンは勿論、ドイツの諸都市で見かけた風景で、このような古い歴史があるとは知らなかった。

（註3）

造園家と都市計画家との協同ということは、都市景観管理（ランドスケーピング）とあわせて、ヨーロッパでは深く感銘した都市の風貌でたしかめることができた。日本で造園学科のある大学がいくつあるか。ましてや北海道のような府県と気象その他の条件の異なる地域で、この講座がないことは、北海道の都市人材の育成からいって、冷汗の出る思いである。

また、林学に於ても、ドイツでは森林美学の講座があることを聞き、美しい緑の生れ出る背景がわかったが、いったい日本では森林美学があるのだろうか。

緑は紙パルプ資本のための緑化であったり、産業追随の林学はあっても、人間とのかかわりあいに於て緑の美しさをとらえる林学、都市のための林学というものは日本に欠けているのではないだろうか。

金もうけのため、財産造成としての林学ではなくて、地域や都市協同の林学があってよいのではないのか。

（註4）

これで、我々が見たルールの諸都市な並びに工業地帯が緑につつまれていることに対する疑問、何故このようなことが行われているのかという謎がとけた訳である。

ドイツでアウトバーンを包む森林

（註5）

日本では緑化という思想はあるが、緑地建設という思想は都市計画の中にも確立されていない。まだ日本では、花いっぱい運動といった行政のアクセサリーの段階で、住民運動も公害騒ぎにとりつかれているという幼稚の段階であると痛感したのである。時務論としての緑地計画ではなく、都市の本質に根づいた緑地計画が進められるべきでないのか。

少し長いが敢て引用したのは、我々がアウトバーンの車窓から、あるいはルール地方の諸都市で見た緑の意味とその歴史的経過を明らかにしたかったからである。ことを簡単にいってしまえば、ドイツだけでなく、一般にヨーロッパの諸都市は既に五十年以上も前に、第一次産業革命の都市破壊、生活破壊からくる都市の廃頽を痛烈に感じとったばかりか、破壊からの再生と回癒の道が何であるかを、都市自治体並びに市民運動のなかで、はっきりと認識されたということである。都市再生の歩みは、両大戦の戦争破壊による瓦礫の中でも見失わなかった。ヨーロッパの緑は決して数百年の緑ではない。そういう緑もあるにはあるが、見るかぎりでは、たしかに五十年そこそこの樹齢のものが多いと見うけられたことがこのことを裏づけている。

飛行機から見たオランダはじめ、ヨーロッパの国土利用の景観が、その国土の地質学的生成と気象条件によるばかりでなく、その国民の土地利用の歴史と現在の姿勢を示すものとして、その辿った歩み、それを支えている制度的条件について、さらにつっこんだ学びかたをする必要を痛感したものである。

日本でも大正から昭和のはじめにかけて、柳田国男、小田内通敏＊らの郷土教育とか郷土運動は、こうした産業革命による都市と農村の生活破壊、すなわち物質文明による人間生活の破壊に対するアンチテーゼとして、ヨーロッパ諸国にまきおこった各種の運動に触発されたものであることは、今にして思えば思いあたる節が多い。しかしこうした日本の先覚が日本的な土着に発想した努力が、ヨーロッパのように都市の自治や住民活動の中に定着しなかったということが考えられる。日本の近代化に対する欲求があまりに強すぎて、こうした先覚の警告も耳に入らず、それこそ花も嵐も踏みこえて、ひたすら近代化への道を走りまくったということになる。

中世を欠落させた日本の近代化推進は土着を徹底して破壊することにつとめ、むしろ中世をもともたないアメリカの近代化の方策に熱中した日本の近代化の道に、日本の都市悲劇の原因がありとそう思えてならないのである。連続性のあるヨーロッパの近代と、非連続性のアメリカの近代にははっきりした相違があると見たのは、私の偏見であろうか。

昭和四十六年　工業立地二月号　日本工業立地センター

チューリッヒから

バーンホフ通りに面した小公園にペスタロッチ＊の銅像がたっている。これはどうしてもカメラに納めておきたいと通りを急いだ。

チューリッヒとはペスタロッチ生誕の地だ。わが少年の志の日から、ペスタロッチは深く私の心に刻みこまれているからだ。貧民救済者、スタンツにおける戦争孤児たちの父、ブルグドルフにおける教育者としてのペスタロッチは世に広く知られているが、学生運動家として、農民運動家としての彼はあまり知られていない。

当時「自然に還れ、自然にしたがえ、自然は正しい」を強く主張したジャン・ジャック・ルソーは、カルビンによる神政共和制の都市ジュネーブで政府より逮捕状が出され、逃亡の身であった。これにいち早く反発したのがペスタロッチをはじめとするチューリッヒの学生運動家たちであった。

青年神学者ミューラーが『農民会話』という、ルソーを弁護したジュネーブ政府を批判する小論文をまとめた。学生運動家たちは、この論文に非常に感動し、この原稿を無断で持ち出し、印刷してバラまいた。これがたちまち市民に大きな反響をまきおこした。

ミューラーは驚き、身の危険を感じとり、ある夜ひそかに学生たちを避けて、自らチューリッヒのまちを脱出してしまった。（後にベルリン大学教授となり、ニーベルゲンの歌を紹介して、ドイツ文学界に大きい

影響を与えた）

ペスタロッチたちは、市政府参事会により危険な革命家として逮捕され、彼らの発行する週間新聞『警醒者』の発行停止と、一切の集会禁止の命令が出された。ミューラーは学生運動家として、永久に追放するという布告が出され『農民会話』は広場に積まれ、死刑執行人の手により火が放たれ焼却された。学生たちに対しては、彼らの拘留中に政府の要した費用と、ミューラーの著書の焼却に要した三束の薪代を支払うべしという判決文が裁判官により厳かに宣告された。

こうして、ペスタロッチは法律家になることを断念し、ルソーの感化のもとに農民運動家たるべく、農村に奔（はし）るのである。

ペスタロッチ

写真をとり終わった私は、ペスタロッチ広場を離れ、彼の少年時代の家を探すべく、地図をたよりに、リマト川に向う裏街の通りに入っていった。日は西に傾いているので、山峡の日没の早さに気づかいながら急いだ。

ふと、エッチングを飾ってある小さい店を見つけ、珍しいと思い入ってみた。出てきたのはその店の主婦らしく優雅な婦人であった。地図を示しながら私は日本よりやってきた。ペスタロッチの家を訪ねたい。道筋を教えてほしいと伝えた。彼女は紙を出し、道筋のディテールと、通りの名と住居番号を書いてくれた。

私は、さらにペスタロッチに関するエッチングは

あるかと訊ねた。あるという。私の前に出された一枚の絵はまさしくペスタロッチが学生時代をすごした二度目の家であった。

私は、日本にあって十五歳の時にペスタロッチの偉大な生涯を知り、彼に関するあらゆる文献を学び、私が農村問題に深く関心を持つようになったのは彼の影響であること。さらに私は、日本におけるペスタロッチ研究家長田新＊（おさだ・あらた。広島大学学長、その著書は玉川学園大学より出版されている）より多くの教示を受けたこと、この一日本人長田博士の墓は、このスイスの地にあるペスタロッチの墓のかたわらにあることを伝えた。彼女は私に握手を求め、エッチングを丁寧に包装してくれた。

もう家には灯が点った。にぎやかな広場のある橋を渡って、それから右に車が一台やっと通れるか通れないかという狭い石畳の路地を選び、家々の扉の上にはってある住居番号を追っていった。

示された番号の家はあった。このあたりは想像していたような清潔なものではなかった。このミュンスター・ガッセ二十三号は、彼がチューリッヒ大学の学生時代に母親と共に移ってきた家であり、この家の銘は「神のみを崇めまつる」と書かれている。これは昔の住居表示のようなもので、どの家にも、その家にちなんだ家の銘がしるされているのが面白い。この家は一六〇〇年の建造となっている。

外側から見た二階には窓が四つあって、窓と窓の間の壁には、メモリアル・ハウスとしての絵が描かれている。いちばん左の壁にはドイツ語の装飾文字で説明が書いてあり、ドイツ語の判らない私にはまことに不得手で、早速手帖にたどたどしく写しとった。

要約すれば一七六二年より六八年まで、ハインリッヒ・ペスタロッチが学生であった時代にこの家に住んでいた。キルホルベルグ、次いでミュウリンゲンと一農民として暮すまでこの家に住んでいたと書かれていると解された。

残りの三つの壁には、左右に男親と子、女親とその子、中央にはまさにスタンツ時代における戦争孤児た

ちにかこまれたペスタロッチの姿が描かれていた。
一階の玄関のドアをあけてみたら、そこは紛うことのないパチンコ・ゲームのホールであった。このあたりは先程のリマト川の橋の広場に通ずる、「飲み屋街」といった感じのする場所であることがわかった。
私はもうすっかり夜景に変わってしまった川のあたりを歩き出し、昼間に訪ねた陶器博物館になっている昔のギルドホールのあるストラッセに足を向けた。

昭和四十八年七月　月刊『季節』週刊政経情報社

土地を生かす農業

私と農業のかかわり

私と農業のかかわりは、昭和六年、まだ十七歳でしたが、農村の代用教員として働いたことであります。

大正七年の米騒動以来、日本政府は米の増産のために北海道にまで造田熱をあおりたてました。北海道に北海道拓殖銀行という特殊銀行を作って、そこからお金を貸しつけ、地主に水田を広げさせたのです。たとえば北海道の十勝の士幌、鹿追だとか北見の斜里のような火山灰地のこんな所と思う所にまで田んぼを作らせた訳です。

下人舞の代用教員時代

ところが水もれのひどい底抜け田んぼをいくら作っても、なかなか成果は上がらない。地主がつぶれると土地は銀行が差し押さえてしまいます。いくら水田を作っても小作人の得にならない。

北海道の作付限界地まで米を作らせるということは、限界地生産費を上げることになります。米価は限界地生産費

を基礎に決定しますから、本州の米はそれだけ高値に維持され、本州の米作の底上げを支持することになる訳です。

北海道の米作はこのような政策事情がからんでいました。

私がたまたま入った土地は、十勝開墾会社＊という渋沢栄一の小作地でしたが、川向こうには農場長が住んでいました。岡見聞多という方です。この方はデンマークに行って酪農を勉強してきた人です。そこで私はこの方のデンマーク農業に影響を受けて、水田をやめて中小家畜酪農をやるべきだと水田をつぶす運動を始めた訳です。

自然に合う農業

私は「五の日の会」という塾を始めました。農業の方向を同じ土地利用でも、水田から中小家畜を含めた酪農に方向転換させようとしたのです。自分の部落ばかりではなく、隣近所の集落からも総勢一五〇人くらいも集まったでしょうか。

二年間いろいろ説いて回ったのです。ところが、私はまだ若いものですから長老たちとの摩擦が大きく、あともう少しというところまでいったのですが、とうとう山の学校に転任させられました。

山の中の新しい赴任地は海抜三三〇メートルくらいでした。そのあたりの耕作地は平野部の猿真似をして小豆やインゲン豆を作っていました。

傾斜地の耕地には犁底盤というのができると、春の雪解け水が下に浸透しないで、表面を走り流れます。一番肥料分があり、腐食のたまった土を下流に押し流してしまうのです。その上、風が吹いたらニオに積んだ豆がみんな飛んでいってしまう。だからカラマツを植えて風を防ごうとしていました。

そこで私は、豆を作るのはおやめなさいと言い出したんです。そのかわりに牧草で豚や牛を飼うことをすすめました。

草地養豚はその当時まだ知られていませんでした。みんなヨークシャー種という鼻のぺしゃんこの豚しか知りません。猪の血統が残っている鼻の長い豚を飼えば、その豚がラデノクロバー＊や菊芋＊を掘って食べて糞をする。それが肥やしとなって牧草がはえる。要するに畑は耕起しないで農業をしたほうがよいことを提案して回ったのです。

いくら学校で子供に教えていても、腹がへっていては何にもならない。大人も子供も人並みの暮らしにならなくちゃ。そのためには、まず親が土地に対する考え方を改めて、農業で家族が食っていけるようにならなくてはいけないと思ったのです。

平地では米を増産しろという時に米を作るな、山では豆を奨励している時に豆を作るなと、お上の学者や技術者が言うことの逆を言っていたんですから、私は変り者と見られていたかもしれませんね。とにかく米を作ってちゃんとお米が食べられないのですからそれはどこかおかしい訳です。

代用教員をしていたこの三年間、直に自然を見て、どのような土地にどのような農業が合うのかわかってきたけれど、多少は学問の裏付けがなくてはならないだろうと思いました。そこで今の帯広畜産大学の前身になる農学校の研究科に入って勉強し、さらに一年間助手として実習を積んだのです。そしてここで本格的に、北農試の経営部長をしていた大澤徳治先生を研究科主任として迎え農業経営の勉強をしました。今の帯広畜産大学のキャンバスで、三十ヘクタールの研究科の農場があったところです。当時ですからテキストは伊藤清蔵の『農業経営学』でした。

自立する農業をめざす

デンマークの農村社会は日本とは随分違っています。子供を扶養する義務は十五歳までです。十六歳になると男子はカールという徒弟に、女子はピーアという女中奉公に出ます。そして十八歳になると一年間国民高等学校に入り、あるいは農学校でもいいのですが、卒業してから親から農場を買って農業経営者となるのです。

しかし子供には、徒弟として働きに出ていた時貯金したとしても、それ程の貯えはない訳でしょう。その足りない分は、政府が低利、あるいは無利子で子供に貸しつけるのです。国民高等学校を卒業するということは、その資格を得るということです。

現在は扶養の義務は十五歳から十八歳に引き上げられているということですが、こういう話を聞くと、ヨーロッパにはまだまだ中世の社会制度のよい意味の遺産が残っている感じですね。

日本では親の水田、耕作地を何の苦労もなくそのまま子供が引き継ぎます。農業者が安易に流され易くなっている原因はここにもあるのでしょう。日本では、農業者が自分の意見を持たないで、体制の言うとおりに左右されてしまう傾向があります。あるいは日本全体がそうなのかもしれません。

それは官僚組織も労働組合も変わらない。上のほうが変わらない限り、下にいる人間も動かない。ところがトップが変わると下もコロッと変わる。そんな例をたくさん見てきました。

しかしそれでも日本各地には政府に頼らないで、土地をうまく生かしている行政や人たちがいます。

たとえば大分県の大山町は、米作を奨励していた昭和三十年代から逆に米作りをやめて、梅や栗を植えている。山の中では米作りがむつかしいからです。今ではそれが成功しています。大山町の青年たちは、毎年イスラエルに研修に行っていますね。

それから耶馬溪の下郷農協。最初は十二、三戸から始めた開拓酪農がきっかけで市乳を始め、北九州市に生協を作って供給していたのですが、いまでは久留米の消費者と直結しています。「食と健康を考える会」というお母さん方と協力して牛乳を配っています。農協が消費者を組織して生協をつくらせたという珍しい例です。中札内では逆に農協の購買店舗を廃止して生協をつくって農民、その他村民も含めて生協を組織して成果をあげています。

政府の指導から外れても、その土地にかなった農業でちゃんと採算が取れるように努力している在野の隠れた人たちがたくさんいます。移動大学では、北海道から青年たちを連れておじゃまして教えていただいているのです。

物質を循環させる農業

日本農業は全般的に土地の生かし方がうまくありませんが、しかし、江戸時代までの農業のやり方は決して悪くないのです。十九世紀のドイツの農学者リービッヒも日本の農業は最高だと述べています。

江戸の周辺農村から、隅田川などの川舟あるいは荷車で野菜やお米や炭、そういったものが江戸の町に入ってくる。帰りはその空車、空船に屎尿を積んで帰って自分の田畑に戻している。

各村々の道端には、旅人が小便する樽も置いてある。勝手にあちこちでさせないで一ヵ所にためてそれぞれを畑や田んぼに返す。山からは刈敷をとってきて田んぼに入れる。イギリスに比べて、山が多く耕地面積も少なく、人口は倍もあるのに食糧の輸出までしているとリービッヒは書いています。事実明治二十年までは米も若干輸出していました。

かつての日本の農業は、物質がその地域でうまく循環するような都市と農村の関係があり、農村でも土地

をうまく利用していました。今の東京は町並がべったりと周囲に広がっています。各都市の間が離れていないで互いにくっつきあっているから、物質の循環が機能していません。

酪農の場合、デンマーク方式のいい点は物質が循環しているということです。デンマーク方式というのは、要するに混同農業です。牛もいるし、豚もいるし、畑も耕す。畑の作物は自家消費にもなり家畜の飼料にもなる。家畜の糞は肥料として使う。経営は必ずしも大きな規模である必要もありません。

戦前北海道十勝地区では、一人あたり平均五ヘクタールの土地が耕地利用に当てられていました。親子三人なら十五ヘクタールです。それで畜耕手刈りの状態でした。それが戦後樺太や千島や満州からの引き揚げ者が北海道に入ってきて、五ヘクタールから三・五ヘクタールまで減りました。これが昭和三十五年まで。ところが、三十五年から高度経済成長で都会に労働力が引っ張られるようになります。四十年に入ると、求人列車で出ていくようになり、離農が進み、今度は耕地規模の拡大が始まります。昭和四十三年から四十五年くらいには農耕馬が姿を消し、完全に機械化の方向に変わっていきます。

そして昭和四十五年以降は、乳牛を四十頭、五十頭多数導入して飼い始めます。デンマーク方式からアメリカ方式への転換です。デンマーク方式だと、混同農業だから物質循環がちゃんと成り立っていますが、畜産専業となると、家畜の糞尿を返す畑もない。養豚業者も養鶏業者も糞公害に悩まされているのが現状です。

アメリカで行われているから日本にも取り入れようということなんでしょうが、そのアメリカではもう行き詰まっているのです。アメリカ農業の基本的な考え方は、畜産もお米も外国に売るために作っている訳です。自分のところで消費しようとして農業をしているのではないのです。

もちろんアメリカは、農業に対してもさまざまな考え方が混在しています。しかしそれにしても略奪農業が基本でしょう。今ではアメリカでも農業のやり方に対する反省が生れて、有機農業法という法律もできています。

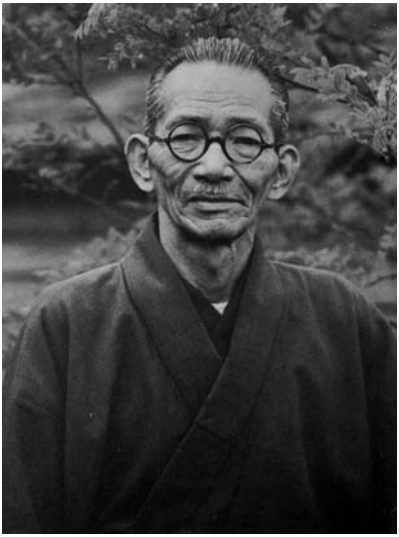
今はもうデンマークの農業も大規模になったようで、北海道の農業の手本にはなりません。デンマークでは花も野菜もすべて温室栽培に変わってしまいました。ただ参考になる考え方は残っています。

デンマークやオランダの空港はよその国の空港に比べると断然きれいですね。周りに牧草地が広がっているのです。農業と飛行場は騒音や人の出入りなどで、お互いの環境には合わないと感じる人が多いと思います。けれどオランダの空港を見ると、両者が仲良くなれるということがわかります。ジャンボ機が出現するまで、滑走路の近くまで乳牛が放牧されていました。クリークがあるから心配ないのです。農業を無視しないで、農業と共存できる。そして環境が保全されるのです。

要するに、土地を無駄にしないということ、さらに生産緑地を残しておこうという政策が大事なのです。

『農事組合だより』　北海道農業自立推進協議会

青少年の師父



下村湖人先生

湖人、下村虎六郎＊先生を北海道の奥地、羽幌という漁村の町までお迎えしたのが昭和十一年の夏のことであった。先生は当時、浴恩館・青年団講習所長をしておられ、青年幹部講習会の講師としておい出ねがったのである。先生は、すでに雑誌『青年』に次郎物語を執筆されていた。その頃『家の光』が、賀川豊彦＊先生の「乳と蜜の流るゝ郷」を連載し、非常な発行部数の伸びを見せていたころで、雑誌『青年』の「次郎物語」とはまことに対照的なものであった。もちろん『青年』が何とか『家の光』の発行部数に追いつこうと非常な努力をしていたのである。

先生の講義はしみじみと心にしみ通るようなお話ぶりで、今も瞼にうかんでくるのである。失礼な表現であるが「これはホンモノだ」というのが私の直感であった。青少年の指導者と称する人の中には、本当に青年がうちこんでぶつかってゆける人が少く、ちょっとつっこんでゆくと底が割れる人が多いだけに、先生の人格に接して、私はすっかりつかまれてしまったのである。先生に対する私の敬慕はこの時から始まった。

昭和十三年春、私は北海道庁学務課を辞して、加藤善徳＊氏のすすめで上京。駿河台の新興生活館につとめ、雑誌『生活』の編集を手伝うことになった。そのころ先生は、すでに青年団の内部に及んできた軍国的勢力のため、『青年』に執筆中の「次郎物語」を中止するの止むなきに至り、先生自身また青年団を辞するに至ったのである。その後は自由な文筆生活に入り、鈴木徳一氏の主宰する壮年団中央協会に関係されるようになった。壮年団は新しい発足だけに、そこには古顔の青年団の同志が中心となっていて、比較的自由の空気があった。

そのうち私の編集している雑誌『生活』に、先生の作品「若き建設者」を連載することになった。毎月原稿を頂きにお宅に伺うようになってから、私は一層親しくお近づきをさせて頂いた。お宅は山手線新大久保に近く、ガードに沿うてすぐのところであった。

先生は、特に当時の時局を憂えて、混迷の日に真に祖国を愛するものの処生について話がふれることが多かった。『次郎物語』の第一部を脱稿され、先生は加藤氏に托して岩波書店からの出版を期待されたが、半年もたって駄目であるという話。岩波文庫ではどうかと再度交渉にでかけた加藤氏のこと、原稿は雑誌に連載された部分は原稿用紙にはりつけて整理されてあり、後から完成のため執筆された部分とにわかれてまとめてあったことをはっきり記憶している。私も岩波ともあろうものが、この作品をとりあげないとはあまりにも商業主義だ。よし覚えていやがれと、大いに義憤を感じてこの原稿を持って出版の売りこみに歩いたが、これまた徒労に終ったのである。

『生活』の編集長・加藤善徳氏

それが、昭和十六年、私が応召することになってから、小

山書店が遂に引受けて出版することになった。こうして世に出るべくして出なかった『次郎物語』が、戦時中にもかかわらずどうであるか、一躍してベストセラーにのしあがり、嘗ての『小島の春』にもまけない売行きを示し、小山書店の地位も『次郎物語』の一冊できまってしまったからすごいものである。そして早くもその年の中に映画化され、私が朔北の陣中にあって戦塵にまみれている日に、先生から感謝の手紙と、映画『次郎物語』試写会の案内を頂戴したのは、今に感銘深いものがあるのである。

この『次郎物語』が遂に第五部までに発展し、空前の教養小説として成長したのであるから素晴しいと思う。しかもこの作品が非常に息の長い作品として、戦後に及んでその売行きがいささかも衰えを見せないから不思議である。青春の書として、日本の青少年に将来にわたって長く愛読されるであろうことは確かである。文壇の主流から離れて、これ程普及されている小説は全く珍しいのではあるまいか。

先生の御再起不能のことは、昭和三十年正月加藤氏からの便りで承知いたし、私は暗然としたのである。

実は昭和二十九年、アイヌの啄木と謳われた義人違星北斗の歌碑建設について、趣意書として印刷した遺稿集をお送りしたところ、先生から早速現金千円と共に次のようなお便りがあった。

拝啓、北斗遺稿集御恵送感謝いたします。今度歌碑が出来るそうで何よりに存じます。同封のものその費用の一部にお加え願えれば幸甚に存じます。

小生どうやら満七十を迎えました。命だけはもう少し延びそうです。

十月十三日　　湖　人

先生の御入院が十一月八日であるから、そのころ先生は田沢義鋪＊伝の最後の校正に心血を注がれ御苦労されていたのではあるまいか。今にして思えば、先生の絶筆に近い貴重のお手紙である。私は、先生もすで

に古稀をお迎えになられたが、弟子によって当然古稀のお祝いをして然るべきだというのが、お便りを拝見して私の心に浮んだことである。「命だけはもう少し延びそうです」と仰言る先生が、正月早々再起御不能とは夢にも考られないことであった。

四月五日夜、私は加藤氏と共に、下村先生の枕頭にお見舞する機会を得た。先生はまだ意識はしっかりしておられ、田沢先生伝に『この人を見よ』と名づけられたことについて、「私は何べんといってもいいすぎではない、田沢こそこの人を見よと断言していいのだ」とくりかえしくりかえし申されていた。しかし病状は意外に悪化していることを私は知った。私が地方選挙の応援で飛びまわっている最中、四月二十一日の新聞は先生の死去を報じた。

先生今や亡し。しかし、先生はひたすら若き青少年の前途に心をかけられ、祖国の未来を信じ、教壇にたたない師父として、その生涯を文筆によって全うせられたのである。中学校長も、台北高等学校長も、青年団講習所長も、先生の一貫した孤高のバックボーンの故に、何れもその地位を去られたが、文筆によって、何人にも妨げられない筆者として、自ら教育者として、青少年の師父として、その生涯を静かに終られたのである。

私はここに、下村先生より賜った御指導を、心から感謝すると共に、先生の志をわが生涯の日に何ほどか実現することに努力いたしたいと考えている。それが先生に対する唯一の報恩であると信ずるのである。

昭和五十年　下村湖人全集序文

農民的酪農経営を実現しよう

―久保先生の講演を聞いて―

今から十数年前までは、一般の農業者が外国の農業を視察に出かけるなどは思いもよらないことでした。その頃の農協の役員さん方の農業視察といえば温泉地めぐりが中心で、観光旅行みたいなものでした。我々はヨーロッパの農業も勉強したいが、その前にまず日本の農業を、ホンモノを勉強して歩こうではないかと日本農業の縦断旅行を考えて、村づくり移動大学がはじまったのです。

講演する久保先生

第一回の移動大学で久保政夫先生＊にお目にかかることができました。先生にお会いして私は率直にいって「この人は人間だ」、表現はおかしく聞こえますが、人の人たる人に会えたという感じでした。今度十数年ぶりで再度お目にかかりました。とても七十一才とは思えぬお元気さで、今もまだご自身の農業を建設中であります。この一日本人の持続力、これは大変なことです。いつも私の心の中に久保先生が生き続けています。

久保先生に何故人間を感じたのでしょうか、いちばん深く感じたのはこういうことです。むらの中で牛を飼っている農家は瓦ぶきです。

牛を飼っていない農家は依然としてワラぶきだというのです。それで瓦ぶきの農家をお訪ねしました。それは男手のいない腰の曲った老婆と未亡人の二人で守っている家でした。入口をはいるとすぐ右手が、むかしは和牛を飼っていた牛小屋です。その古い牛小屋に砂谷牛といわれる久保先生がつくり出した、北海道の牛より一まわり体型の小さい二頭のホルスタイン種の乳牛がいました。皮膚は非常にうすくて、栄養吸収力の高い、改良された牛ですが、ちゃんと仔牛の時に角を薬で焼いて除いてあります。とても目がやさしいのです。どうしてこんなに牛がおとなしく人なつっこいのかよくわかりました。それは角がないからです。

牛には角がある、当り前のことです。ところが人間の方がこのために危険だと感じて警戒のまなざしをする。牛の方も人間の目つきがおかしい、この野郎と感ずる、ひとつおどかしてやれということにもなる。しかしはじめから牛に角をなくしておくと人と牛の間に融和ができる。人の目が優しいから牛の目も優しく、おとなしい牛に育っていくという関係がなりたつことを、私は教えられました。

だから久保先生の牛舎では、御承知のように内地の牛飼いは北海道とちがって鼻環で飼っているのですが、この中に牝牛も種牛もロープでつなぎとめてあるだけで、自由に動けるように、ルーズバーン的＊飼い方をしていました。スタンチヨン方式＊ではないことです。牛がおとなしいからこういうことができるので、同じホルスタインでありながら、北海道の種牛ではこんな取扱いはできない筈です。結果的にはマキ牛的＊飼いかたをされていました。

もっと驚いたことがあります。先程の農家の台所を見せて頂きました。台所は改造されていて窓が南に向けて大きくとられていました。ホームポンプで水道式になっていました。「かまど」はプロパンガスが使われて、クドというかまどがありながら、薪や藁をたくやり方はやめていました。いちばん驚いたことは「流し」が腰のまがったお婆さんが木の台に腰かけて台所仕事ができるように、ぐっと下げて出来ていることでした。人間の働きかたが頭に入って、働きよさがその働く人のものになっていなければ、どんなに人からす

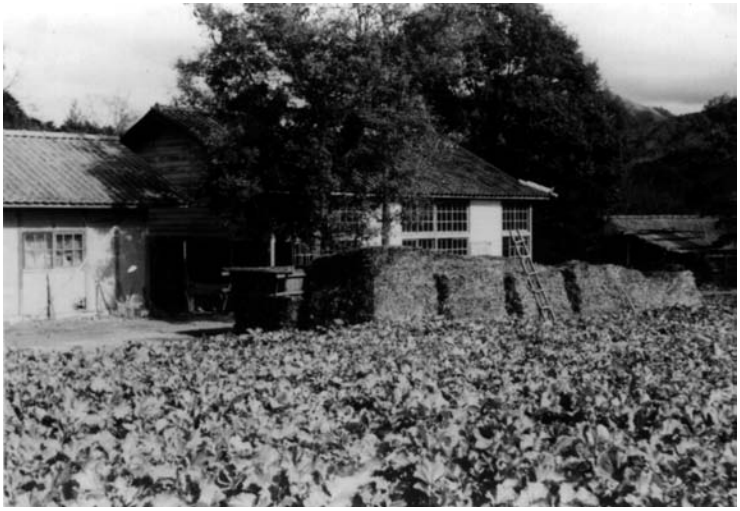
すめられても、古い古い伝統のある、こうした山の中の農家の主婦に実現できる筈のものではありません。他人まかせの近代化、見てくれの台所改善ではこういうことにはなりません。これは人間の働く台所だなと思いました。屋根も瓦にしたり、燃料もワラをたくことをやめたのも、恐らく土地に力をつけることの方にワラ類をまわす合理性の結果だと思いますが、久保先生の無言の影響がこんなところまで現れているのだなと、久保先生に人間を見、心から敬服したのはこのためであります。

久保先生と上野満先生には共通したものがあります。

第一には、農民として農業に農村に深い深い思想を、実践の中からおもちになっていることです。

第二には、うまず絶ゆまずの持続性です。絶対に途中で投げ出さないで完成を知らない求道的実践です。

第三には、基盤としての土地づくりです。お二人とも実に大胆な自然改造をおやりになっています。わざわざといってよいぐらい条件の悪いところに飛びこんでいって、その条件の悪さを逆手にとって最良の条件に変革されていることです。帯広から東京への飛行機は必ず上野先生の新利根農場の上空を通ります。冬の関東平野が茶っぽく冬枯れた景色の中で、いつも鮮やかな緑の部分をかたちづくっているのは、この新利根の協同農場だけです。



久保農場では堆肥をひと山千貫を五山作り、
これを一反の土地にに入れて圃場にする

第四には、お二人ともいかに一団の農地の取得に苦労されておられるかということです。並たいていのことではありません。このためにどれだけムダな精力を費しているかということは、日本農業のひとつの問題点を示しています。

第五には、お二人とも官僚中心の今の日本農政に対しては強い批判を持っています。農業の理想実現のためには、官僚農政に邪魔されこそすれ益なしとお考えになっているのではないでしょうか。特にアメリカ農業の猿真似と追随には深い疑問を出されています。

私は砂谷牛に教えられて、ある方に、農民的酪農のためには、除角飼養をすすめられないかと話しましたところ、「とんでもないことだ、牛の値段が叩かれる」ということで、軽くいなされてしまいました。牛を売りつける立場でのモノの考えかたで、酪農するというものの立場では全くないことに驚きました。こういう人たちが官僚と手を握り、共進会中心の金儲けを企らみ、酪農民の正しい酪農の進歩を邪魔していることがわかります。この頃になって多数頭飼育ということで除角飼養が進んでいますが、今更の感がいたします。

私は砂谷で久保先生からいろいろお話を伺いましたが、そのお話をお聞きしたのが今から十数年以上の前のお話ですが、昔の農業教育の中で教わらなかったことで、私にとってこれこそ大変な御教示であったことが二点あります。その一は不耕起栽培＊のお話です。もう一つは、作物栽培における栄養成長と生殖成長の問題です。

第一の不耕起栽培のことですが、そのころでも先生のところには六千冊以上の本がありました。お部屋の片側がびっしり本で、床から天井まで五間以上もある壁が本で埋まっており、奥さんが「主人は毎晩のように開いた本を顔に覆うたまま寝てしまうのですよ」と言い乍ら、側から話かけて下さったのを覚えています。この時先生の口からマリツェフ＊の土壌理論の話が出ました。マリツェフの邦訳文献といえばまだ北海道の

開拓者連盟で出したものくらいしかないころです。後にフルシチョフがマリツェフの理論をうのみにして耕地拡大、西シベリヤの開拓地に小麦作を進めて美事に失敗し、失脚の原因をつくり出したその土壌理論です。要は土壌中には無数の多種の微生物が棲んでいる。表土には好気性バクテリヤが、心土には嫌気性バクテリヤが棲んでいてこれがそれぞれ土壌条件に有効に働いているのだから、無暴な深耕を行うことはかえって土壌の生物的改良効果を破壊する。だから、従来の単純な深耕をやめて作土耕と心土耕を区別して行うことにより土地の肥力を有効化できるというのです。

久保先生の土地づくりはお話にあるように、西南暖地の農業は雨が多い、日照が強烈豊富だから土壌中の有機質の分解が早い。雨の多いことはこの分解された土地の肥質を、傾斜地のままにしておいたのではどんどん流亡させてしまうことになる。だから雨と光線を共に結びつけるためには土地を平坦にすることと、雨を十分地中に縦浸透させ保持することの可能な土地の条件を整える必要があるというのです。

だから山を削って谷の低いところを埋めるという大胆な開墾の仕事が生れた訳です。ところが現地をご覧下されば分りますように、瀬戸内海の白砂青松というのが花崗岩による白砂であるように、中国山脈のこの地帯は花崗岩の風化によって出来た砂礫土であります。北海道でいえば千歳市附近のあの火山灰礫土であります。あれとそっくりです。山を削ってしまうのですから有機質などあろう筈もありません。しかも母岩の性質上酸度が強くＰＨで四・五度ぐら

久保農場の飼料作物

いあります。だから堆厩肥を五千貫も一万貫も最初からたたきこむ努力をされたり、広島の海岸に無数に産出する蠣蛎の貝殻石灰をたたきこむやり方が生れてくる訳です。それは逆に劣悪の土壌を変じて最良の土壌づくりに転じ、貝殻に附着している海藻類が土壌中の微生物活動のための最良のエサとなり、土壌環境を時間をかけて、ゆっくりゆっくりつくりあげることになります。だからいったんそういう土ができ上ったら変に毎回反転耕耡を行わない方がよい。短冊式の散播栽培のためには自動耕耘機による覆土でよいということになり、これが不耕起栽培だという説明になる訳です。

第二に栄養成長の問題です。これには私の体験があります。戦時中に私は応召して樺太の南端にある西ノトロ岬におりました。私は食糧自給の担当をやっていて、乳牛八頭、豚三十頭、畑二十ヘクタール、その他に木炭製造、漁業などもやっていました。ここでの野菜は全部旭川附近で求められ、稚内から発動機船で運ばれてくるのですが、海上がしけるとたちまち船が出ませんので、いつもイキのよい野菜など食べたことがなく、大根など秋口に稚内で凍ってしまったり、スが入ったりして、それはひどい沢庵しかつくれないで困っていました。そこで私は農業を学んだものとしていろんなことをはじめた訳ですが、十勝の人間ですから野菜づくりは苦手です。この時の師匠が小樽の奥沢町で野菜づくりの体験を持つ藤田軍曹です。この西ノトロ岬は宗谷海峡に面して冬は流氷、夏は濃霧の日が多く、当時豊原気象台におられた有名な田沢博先生がこられて、気象表を調べて日照その他の条件からいって上敷香と同じ気候条件だ。そのつもりで工夫して農業を考えなさいよと注意してくれました。

藤田軍曹の野菜づくりのやりかたは全くの驚きでありました。先ず、豚舎から出た未熟堆肥ですがこれを三十センチメートルの高さに積んで広げます。これに上から下肥をかけて、さらにさっとうすく土をかぶせます。そしてホーレン草（当時マンモスといわれた品種）の種子を散播して、またうすく覆土して鎮圧する

訳です。四間ぐらいの温床づくりをしたようなもので、別に型板や障子を使わないだけです。

川から細い水路を導いて、野菜畑の処々に四升樽を埋めこんで、川のところで水をひきこめば灌水用の水がこれらの樽に次々にあふれて流れて、水かつぎをしないで随時灌水を怠らない訳です。このやりかたにはさすがの私も目をむいて驚いたものです。

ホーレン草が発芽し成育をはじめると、久保先生のやり方です。大きいのからどしどし間引して食べていくのです。とうとう樺太で三十日以上もホーレン草を食べることができ、最後は腰までの大きなものになりましたが、それでも実に柔かいホーレン草で、いかにしてトウをたてないか、逆にいえば花を咲かせ実をならせないかということを工夫すればよいことで、とに角土を酸性にしなければいくらでもとれることを発見したのであります。大根でも白菜でも、キャベツでもビートでも皆同じです。要は、穀実を収穫のネライとするものでなく、栄養成長をネラうものであれば、堆肥の上でつくれるものだ、窒素質の堆厩肥はいくらやってもやりすぎはないのだ、作物の種類によって多少の工夫はあるが、基本的な原則は同じであることを学びました。キャベツなどは生理温度は二十度以下ですから、タマのかたい、じつに素晴しいものが出来たことを記憶しております。

久保先生のところで、栄養成長作物と生殖成長作物の区別と、従来の実どり農業を中心にした偏った土地利用の私の考えかたの誤りであることを腹の底から思いしらされ、「そうだ、樺太でやったあの体験と工夫こそ貴重なものだ」と深く感じいった次第であります。

最後に、久保先生のお話をよくお聞きしておりますと、今後の酪農経営の方向を、年間放牧に徹しきって牛のエサといえば草と塩とせんいがあればやっていけるのだ、そのことを可能とする土地づくりと技術体系の確立、機械化条件をつくることが理想で既に成算もあるのだという風に、話の中からうかがえたのであります。これは日本酪農の上で大変なことであります。北海道酪農こそがこのことを実践実現すべきものであ

ろうかと思うのであります。ブリーダー屋的酪農からは何ものも生れないこと、農民的酪農経営とは何かを、先生のお話から切々と感じとれた次第であります。

追記

この久保先生の理想とする酪農経営を戦後山形から旭川市に入植した青年が、別にお手本によることなく、別に書物で勉強した訳でもないのに、最悪の岩石（花崗班岩）のごろごろした山地に入って、自然と対話し乍ら美事に素晴しい酪農経営を実現しました。今になって北大や酪農学園大学の先生が現地にはりついて草作りの秘密を研究しています。旭川市の神居共栄の斎藤晶＊さんです。北大の先生がいいました。「どこのゴルフ場にいっても大変なお金と労力をかけて芝草の管理をやっているでしょう。どうです、この山牧場で岩石がごろごろしているのに、牧草の生え方はまるでゴルフ場の芝草の様に、むらなく美しくそろって生育しているでしょう。この秘密を探り出そうと研究しているのです。これは大変なことです。一〇〇ヘクタールの山牧場が隅から隅までこうした牧草管理が行届いていることは大変な酪農経営といってよいです」。

十勝の足寄町でもようやくアメリカ型の酪農でなく、放牧酪農に目を開き、斎藤晶さんを招いて草地放牧酪農を実現しようと動き出しました。

今日の農業動向からいって、戦後開拓で十勝農業も耕境を拡大してきましたが、いよいよ放牧酪農の適地が増加することが今から予測されます。アメリカのエサに頼らない自給力の強い酪農が進むと見てとれることは興味深々です。

『農事組合だより』　北海道農業自立推進協議会

『江差追分』や『子叩き唄』がブルガリアにあった

〈上〉

私は北海道の民謡（アイヌの歌唱をふくめて日本の北方民謡といってもよい）は、カナダ・アラスカのエスキモーにはじまり、ベーリング、アリューシャン、カムチャッカ、オホーツク、アムール河、大小興安嶺、アルタイ・サヤン山脈の森林地帯とステップの境界線を辿って、いわゆるシルクロードのはるか北側を、カザフ山地に出てウラルの南部低地をかすめて、カスピ海の北部低地を大きく迂回して、黒海に出て、そこからバルカン半島、小アジア、パレスチナからエジプトに入り、モロッコからスペインのモレナ山脈の南部に至る、地球を帯状にとりまく歌唱文化の一環であるという仮説をたてている。

音楽家の服部竜太郎氏は、モンゴル民謡が、中国と全く異質なものであり、音階のうえから日本民謡に似ているのに気づき、モンゴルの研究をしているうちに、民謡研究がいつの間にかモンゴル探検史に踏み迷って、遂に『モンゴル探検史』―シルクロードの起点と終点―（新人物往来社刊）―という著作を書くに至った。これに刺激されたのがＨＢＣの脇哲氏で、江差追分の発祥地はモンゴルであるという説をたて（脇氏は江差の出身）、そのことを昨年の北海道新聞の夕刊に書かれている。

ＮＨＫの放送で、平取町二風谷の貝沢正さん、札幌の成田得平さんらが中国訪問の際、内モンゴルのパオ

の中で採録してきたモンゴル民謡のいくつかを聞く機会もあった。江差追分というより、北海道の民謡との共通性のあることはたしかである。

私自身、十勝農学校在学時代にモンゴリアンの留学生ソエルト君をあずかって一年間起居を共にしたばかりでなく、後に上京してからも神田に住んで彼との交友を続けた体験があるので、話はよくのみこめるが、わが北海道民謡がモンゴルを終点とするような、そんなスケールの小さいものでないことは、うすうす気づいているのである。

冒頭に述べた仮説は、少し風呂敷を広げすぎているようにも思われるが、そうではない証拠はいくつか私としては分明のこととしている。しかし何しろ音楽的才能がない身なので表現に苦しむのであるが、逆に素人だから、耳に入ってくる歌唱や素朴な楽器を見つめていると、実に素直にわかってしまう利点もあろうというものである。

暮しに採録する民族の音

人類の歌唱、民族の音楽というものは歴史的にさかのぼろうとしても、考古学のような土の中からモノを掘り出して調べるといった具合にならない。逆に民俗学的手法によって、現にそこに住んで暮していて、その暮しの中に何気なく歌われている歌唱や音楽の中から採録し、考察し、体系づけていくよりしかたのないものである。

さりとて、今更このことのために体をはって裏づけていくといったことも、気がつくには年令的におそいのである。まあ問題だけをぶつけておいて、あとは若い人で関心を持つものが出てきて、少しはバッハとかモーツアルトとかベートーベンだけではない、人類融合の道を跡づけていくような民俗学的音楽研究に、探

検の道に踏み出してみようという人が一人でも、二人でも現れてきて貰えればメッケものである。

自分で音痴だときめてかかっている私が、いつの頃から民謡に関心を持つようになったのか、考えてみるとどうも兵隊時代ということになる。

昭和十六年の夏、東京で赤紙を受けとって、函館の要塞部隊に召集になり、そこで新しい部隊が編成されて移動したところが宗谷岬であった。この年の十二月にはじまる太平洋戦争のための戦略的配置であった。宗谷岬は日露戦争のあと、ポーツマス条約によって軍備をしない約束になっているので、軍機保護法による要塞施設だ。したがって部隊も覆面ということになる。

兵舎といっても倉庫である。前は宗谷の海だ。冬は流氷である。このあたりになるとシベリアからの季節風がいきなりぶちあたるので、流氷の輝きの何とすばらしきことよなどと、のんきなことはいってはおれぬ。雪と流氷と寒風に吹きさらされる毎日のくらしだ。

兵士の大部分は道南、函館を中心にした漁村出身者が多い。日曜日になると出かけるところとてない。海に面した山中では、僅かな酒保品の酒で歌が出る。倉庫の中の居住では分隊区分はあっても、室に仕切りがないから、そこここに車座ができ酒を酌みかわすということになる。

豆と馬鈴薯づくりしか知らない十勝出身の私にとっては、同じ生産者といっても、漁民の生活感覚というものは、定住的農民とはちがって、また実に興味が深い。海中の無主物である魚介を、こちらから船で出かけていって、網で獲ってくるという、手間ヒマだけで勝負がきまる仕事であって、広い海のどこそこに魚が必ずいるという保障は何もない。風と潮にまかせてのくらしだ。だから歌う唄にもどこか無常感のつきまとった節まわしが多い。

この漁村出身の人たちとつきあっていて、深く感動したのは、自活のために船で沖に出た時だ。普段は兵

士としてはグズとしか思われないような人が、いざ船上の人となるとガラリと人間が変わってしまう。実にやることなすこと手際がよく、人間が大きく見えるのが不思議であった。

腹に滲みる仕事唄の節

それと唄だ。「オーシコイ、オーシコイ」の櫓こぎ唄にはじまって、北海道にはたくさんの浜唄がある。この唄が、私どもが酒宴の席などで聞き知っているような唄とは、調子が全くちがう。それは仕事唄として、日常生活に密着している節回しであり、体で歌う唄だからだ。この唄が歌えねば、仕事が一歩もはかどらぬ仕組の唄であるからだ。

我々と酒をのんでの唄とはいえ、人に聞かせる唄ではない。歌い手は自分は今仕事をしているのだという、感情をこめての唄で、聞いていてズシンと響いてくる唄である。

踊りもまったくちがう。鰊網にべっとりとからまった白子をおとすので『子叩き』といわれる唄がある。これは戦前まで江差地方の盆唄だったもので、この踊りなど、この人たちの唄にあわせて踊っていると、あきらかに霊迎えの踊りだということがひしひしとわかる。素足で砂浜の地面を強く踏みつける踊りだ。すぐそこの海の波頭にたつ水煙を見つめながら、「よう、祖霊よ還ってこいよ」と、地面を足でけるといってよいのかもしれない。そういう風に踊らないと調子もあわないし、サマにならない唄なのだ。

戦後のこと、短い期間であったが北海道の教育長をされた鎌塚扶先生がおられる。先生は新十津川の出身だが、広島大学の教授をされていたのを、私が長田新学長に無理無理お願いして北海道にお迎えしたが、途中で病気をされ、任期半ばで辞められた方である。つい先頃まで成城大学の教授をされていたが、最近ようやく高令の故を以て引退が認められたという碩学の士である。

この先生は家庭が恵まれないため、幼少時代を奥尻島ですごされた。この先生の『子叩き唄』とその踊りは、地の唄であり漁民の踊りである。戦後は江差でも子叩きの盆踊りは見られないだけに、先生の唄と踊りの動きを見ていると、こうでなければ、祖霊が盆の日に彼岸からこの世に戻ってくる訳はないと、今でも私は思っている。ズバリいって、それだけシャーマン的な面影を強く持っているのである。

それでは、お前それをやってみろといわれても、腹には入っているが、それはそれ音痴の悲しさで、表現できないのが残念である。

昨年の三月、アドニス合唱団＊の子供たちに随行してブルガリアを訪ねることができた。出かける直前から民謡のレコードは買い求めてくるぞという考えはあった。

ソフィアに着いてから、子供たちの歓迎レセプションが作曲家協会のホールで行われた。玄関を入ろうとして隣を見るとレコード・ショップがある。これはついているぞと、早速とびこんで、何でもよいから民謡のレコードを二十枚ばかりとりそろえてほしいと伝える。英語の通訳がそばにいたが、全然こちらの意志が通じない。英語でダメならロシア語でと私がやり出したがこれでもダメだ。こちらはラベルに書いてあるキリル文字＊は読めてもロシア語とはちがうから意味がわからない。赤毛套振りで手真似足真似で、とにかく十五枚ばかり汗をかきかき手にいれたが、日本に帰ってくるまで、どんな歌唱であるか、遂にたしかめる機会もなかった。とにかくレコードをかき集めてきたぞという満足で、これが王将と出るか、飛車と出るかは帰ってからのお楽しみということである。

しかし、このことは追々滞在中にわかったことだが、出版とかレコードとかの発売は、国営であるから発売されてからのある期間中は在庫があるが、売切れてしまうと次の再版までの期間は全く入手が不可能なのである。たとえばイングリッシュ・ブルガリア語辞典を求めることはできたが、ブルガリア・イングリッシ

ュ辞典は、滞在中ずい分書店をのぞいて歩いても遂に見ることはできなかった。結局この次の出版までまたねばならぬということなのである。

〈中〉

ソフィア、タルノボ両市のコンサートを了えてから、いよいよ私たちは、今回のアドニス合唱団をブルガリアに招請してくれた、ドナウ川に面した由緒ある河港都市ルーセ市に出かけたのである。

ここでまず、国際音楽祭の実行委員ライチェフ氏（ソフィア国立音楽学校教授）をホテル・ドナウの事務局に表敬訪問をした。この時、ライチェフ教授から日本の音楽、とくに日本民謡についての話が出た。教授が日本民謡について関心を示されたことに私は深く感銘し、即座に民謡全集とレコード全集を寄贈することを申し出た。教授から貴重な教材として活用したいとの感謝の言葉があり、あわせて、日本の子供たちのために、新しい歌曲をつくってプレゼントして下さることを約束された。

こうして、ルーセ市に着いた早々から民謡について話しあえたことは、この町で大きな収穫があるにちがいないとの予感を強くしたのである。私たちのホテルは新築間もない清潔なホテルで、朝は山鳩の啼き声で目を覚ますという、緑ゆたかな都心の中にあった。部屋にはラジオが備えつけられている。スイッチをいれてみる。放送の種目は多彩で、主として音楽とニュースであるが、これがブルガリアの歌唱や音楽だけではない。ロック・ミュージックもあれば、ブルガリア語でカンツオーネと思われるものもある。日本でいえばあきらかに漫才と考えられる掛合ばなしもあって、さかんに人を笑わせている。なかなか面白いものがあると思っていると、ブルガリア歌唱であるが、きわめてアジア的な趣のある民謡が引き続いて流れる。

そのうち、「これは聞き覚えのあるメロデーだ」「はて、何の唄だったかな」と、聞き耳をたてていて気が

ついた。「ああ、そうだ。これは江差の子叩き唄だ」「あづきこわめしの豆もやし」のリフレーンまでが、まったくそっくりではないか。子叩き唄は現在『いやさか音頭』＊として引きつがれているが、ブルガリアの子叩き唄には、「アア、イヤサカサッサ」のはやしがないだけで、まずメロディは誰が聞いても、これなら子叩き唄だと思われるぐらいよく似ている。

私は大いそぎで、トランクからテープレコーダーをとり出してセットしたが、録音は間にあわなかった。しかし私の素晴しい収穫に対する自信と期待はいよいよ深まるばかりであった。

左・カバールと弦楽器

夕食に出かけるレストランには小さな舞台があって、夜になるとそこでちょっとした演奏が行われる。バンドも若い人々に人気のあるロック・ミュージックだけでなく、民謡音楽のバンドも舞台にたつ。この民謡音楽の楽器が非常に変わっていて、カバールという木製の堅笛（たてぶえ）である。これが日本の尺八によく似ていて、かたちも吹奏のしかたも、音色も実に似ている。われわれの知っているヨーロッパの管楽器とは、よほど異質のものと考えてよいものである。

もうひとつは、バイオリンに似た絃楽器であるが絃の数が多く、奏法は胡弓のひきかたと同じでありズボンの革帯にひっかけ、たてて演奏する。メロディも胡弓に似ている。こういう場面にぶつかると、一緒の仲間たちに多少迷惑をかけて申訳なかったがこちらは釘づけになって、カメラとテープどりで夢中になるという始末であっ

た。

アドニス合唱団のルーセ市でのコンサートは三回催されたが、国際音楽祭参加のコンサートではじまり、最後の日曜日には、昼夜二回のコンサートがあった。音楽祭コンサートはブルガリア国内の音楽関係者ばかりでなく、ヨーロッパ各国の音楽家も出席しており、しかも全国向けの生放送のためにテレビカメラがもちこまれていて、テレビどりが行われるというものなので、聴衆も選ばれた聴衆ということになり、非常に立派な素晴しいコンサートであった。

しかし日曜日のコンサートは聴衆は一般市民であり、会場には家族連れが多く、リラックスした雰囲気があふれていた。はたせるかな、第二部の着物姿での日本民謡を中心にした歌唱では、熱狂的な拍手がくりかえされ、そのうちに歌のリズムにあわせて、聴衆が手をうって拍子をとり出すという盛り上りになってしまった。聴衆は舞台と完全に一体となってとけこみ、民族とか言葉とかの違いというものはここにはなく、あるのは音楽を通しての人間同士の共感だけである。音楽というものはこれほどまでに、言葉のちがいをこえて人々を深く結びつけるものだと私はその時はっきり感じとった。私はその興奮の渦の中にまきこまれている自分を見出した。アドニスの子供たちは、帯広を代表し、日本を代表し、はるばるとブルガリアの北東の国境都市ルーセに来て、立派に友好親善の使命を果たしたのだ。ブルガリアの人々、ルーセの町の人々はいつまでもいつまでも、日本の子供たちとその歌声を忘れないであろうと思った。

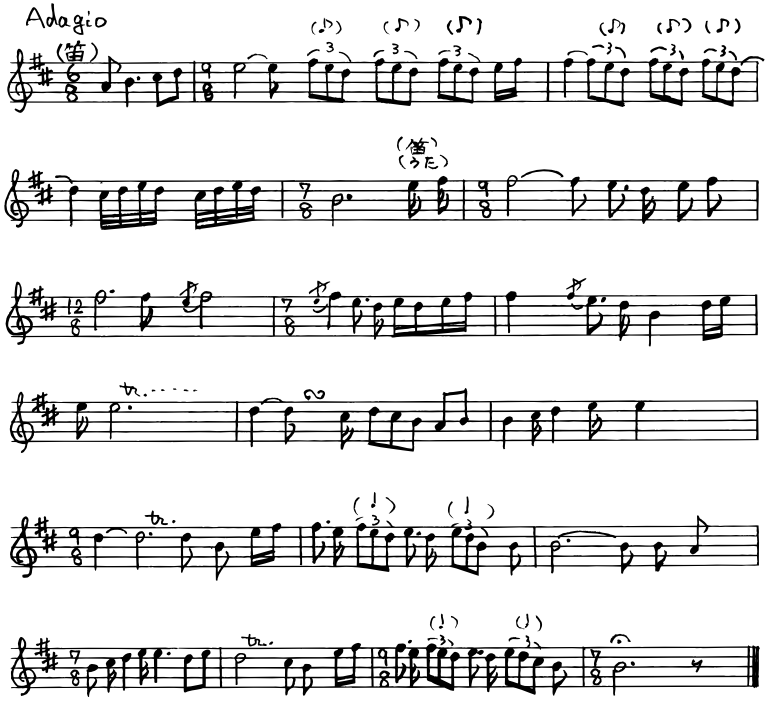
コンサートは終った。観客席の後方にいた私は、少し頭を冷やそうとロビーに出てきて、煙草に火をつけ、今しがたの感激をかみしめながら、ふと気がつくと、頭の上のラジオから音楽が流れている。私はそのメロディを聞いていて「あッ」と思った。これは正しく『江差追分』である。私は手にしたテープレコーダーをセットし、ラジオのスピーカーにマイクを向けた。

流れてくる尺八の響きに似たカバールの吹声、歌の小節のきかせかた、揺りのかけかた、まことに江差追

Български Народна Песен

ブルガリア民謡

（1975年3月採譜）
岩　井　照　清



ブルガリアの江差追分。テープ録音に成功したブルガリアの「江差追分」を岩井照清氏に特にお願いして、非常に苦労して採譜して頂いたもの

分にそっくりだ。ついに私はブルガリアの江差追分をつかまえることに成功したのである。アドニスの子供たちは、私の挙動を見て不思議に思ってか笑いながら「小父さん、何してるの」と声をかけながら通りすぎていく。私にとっては真剣そのものであった。とにかく音をつかまえること、それだけの一念である。やがてブルガリアの江差追分は終り、曲目は一変した。

しかし、このブルガリアの追分とか子叩き唄は、原曲名を何というのか。どの地方で歌われているものなのか、どうい

う伝承の経路をたどり、どういう人々によって担われてきたものなのか、深く追究してみたいのであるが、もう私どもの日程はそういう余裕を許さないところまで来ていた。これから私自身が時間をかけて自ら解明していかなければならない課題となってしまったのである。

ブルガリアは、かつて紀元前の古典ギリシア時代のマケドニアでありまたトラキヤ＊の地であった。マケドニアは都市国家群にすぎなかったギリシアを統一国家に止揚し、ヨーロッパ、アジアにまたがるヘレニズム世界をもたらしたアレキサンダー大王の出身地であり、トラキヤは、アポロンの子でたて琴の名手として鳥や獣も聞きほれ、木や岩をも動かしたという、数々神話的伝説を持つ楽神オルフューズの出身地である。音楽の神話と伝説の国としてブルガリアの人々の誇りとしているものである。また、この国はアレキサンダーの遺した東西文明の交流融合の宿命を刻みこまれた土地でもある。

それはローマ、ビザンチンによる征服、そしてトルコによる五〇〇年にわたる支配、トルコより独立して一〇〇年、今は社会主義国家として新しい国づくりにいそしむ、数千年にまたがる民族と文化の重層した国である。

ブルガリアの目ざましい近代音楽隆盛の基底には、長い歴史の集積した文化の生んだ伝統的歌曲、歌唱、演奏楽器が、立派に息づいていて、大衆の生活の中にとけこみ、現にアドニスのコンサートにおいてそうであったように、ブルガリア民謡の中に、日本の民謡と共通し、共感し得るものが底深くあることを確認し私は深い感動を覚えたのである。

〈最終章〉

北方圏を考える

ヨーロッパ音楽といえば、ヘブライもヘレニズムも含めて集大成したといわれる「グレゴリオ音楽」＊の伝統の上に、私どもが民謡と言っている民俗音楽といえども、すべてそうあるものと思いこんでいたものが、そうでないものがあることがわかったことは、私にとっては大変な発見であり、当然の驚きであった。（このことは、黛敏郎の『題名のない音楽会』で、ユダヤ・シナゴーグ＊における宗教歌、イスラム歌唱などにはグレゴリオと異なるものがあることを説明してくれた。現に私がブルガリアで手にいれたレコードの中に、これでも民謡というものであろうか、あきらかに仏教の称名に類するもので、曲名はと見れば恋の歌になっている面白いものがある。）

ヨーロッパ文化といえども「相違」だけではないのだ。「共通」するものが存在するということであった。こうした我々と共通するもの、似通った文化要素、例えば音楽などはどのようにして、東と西に離れていても、今日に於てお互に存在し得ているのか。このことを考えてみることは楽しいことであり、そこには何か相互に結びつけるものがなければならないと考えた。

さらに考えたことは、これからの国際社会に於て文化交流を考えていく場合、交流の幅を広げていくことが必要だ。伝承文化、特に民謡とか民舞というものは、土着の大衆の血と、日常のくらしの中で伝承されてきたものだ。コンサート・ホールとか、オペラハウスの中にあるものではないものだ。生活と生活とのぶつけあいだ。土着民と土着民との肌のふれあいである。国際文化の交流もここまで広げていくことが、ほんとうの交流となるのではなかろうか。

帯広に帰ってから早速、十勝民謡連盟の萩原会長にブルガリアの江差追分をテープで聞いて頂き、帯広・ルーセの姉妹都市計画が具体的に進んだ時は、是非、十勝の民謡をルーセに持って出かけようということで話しあいもし、お願いをしている。

こんなことを考えていたら、ＮＨＫのスタジオ１０２で、丁度私どもがブルガリアに出かけていた前後に、越中富山の麦屋節＊保存会の方々が民謡と踊りをもって、チェコ、ハンガリー、ユーゴスラビアを演奏旅行をし、非常な好評を博して帰ってきたというニュースを見た。しかも話の中で、日本の民謡という伝承音楽が、いかに訪問国の人々から、強烈な共感と感動を持って迎えられたかということが語られたことは、私には率直に理解できた。それは、これらの国の人々の伝承音楽の中に、日本の民謡と共通する要素が沢山あるからなのだ。ある筈なのだ。それをお互が、まだはっきりと知りあっていないだけなのだ。

その後私の注意は、このことについて機会ある毎に心を向けていると、面白いもので、いろいろと手がかりが出てくるものである。

十月二十八日の北海道新聞夕刊に、ＨＢＣの脇哲氏が「江差追分はモンゴルの流れか？」という題で記事を書かれていた。江差追分は新潟を経てきたものといわれているが、その起原は信州追分宿の馬子唄からだというのが従来の定説であった。ところが現地の郷土研究家の手によって、「昔、小諸にあった奈良時代の望月の牧に、モンゴルから馬が輸入され、その馬の飼養と調教を指導するため、来朝したモンゴル人がそのまま住みついた。この人たちがもたらした音楽が追分節のモトで、現在もモンゴルに伝わる横笛（リンパ）による『駿馬（しゅんめ）の曲』がそれである。」ということをつきとめ、先年、日本歌謡学会で発表して話題となっているというのである。

脇氏は、この二分八秒のモンゴル音楽「駿馬」というリンパによる曲の旋律を中心に、服部龍太郎、小泉文夫、司馬遼太郎、小諸の人々、江差の追分関係者を登場させて、ＨＢＣの三十分番組として、全国民放ネ

ットにのせて放送されたのである。私はこの記事を興味深く読みもし、放送を聞くことができた。私の方から早速ブルガリアで録音した江差追分のテープを提供し、今後の共同課題として勉強していくことをお願いした次第である。

林屋辰三郎、梅棹忠夫、山崎正和三氏による『変革と情報』という本がある。（昭和四十六年中央公論社刊、現在は『日本史のしくみ』と改題、中公文庫に収められている）この本の中に「古代の原理」と題する討議がある。

要約すると、大陸の渤海国＊については、奈良・平安時代を考える時絶対に見落とせない国であって、八世紀に日本で編纂された『懐風藻』という詩集にあるように、当時の日本人は渤海人に対し「古人にまみゆ」といい、旧友旧知に会う思いだという漢詩をつくっており、両者に強い同族意識が働いていて、言葉も通じていたらしく、通訳を用いた形跡がないというのである。

この渤海国は、その版図は遼東半島から沿海州、アムール河の河口にまで及んだ国で、日本への遣使は、現在のウラジオストックの南ポシエット湾から船出して、日本

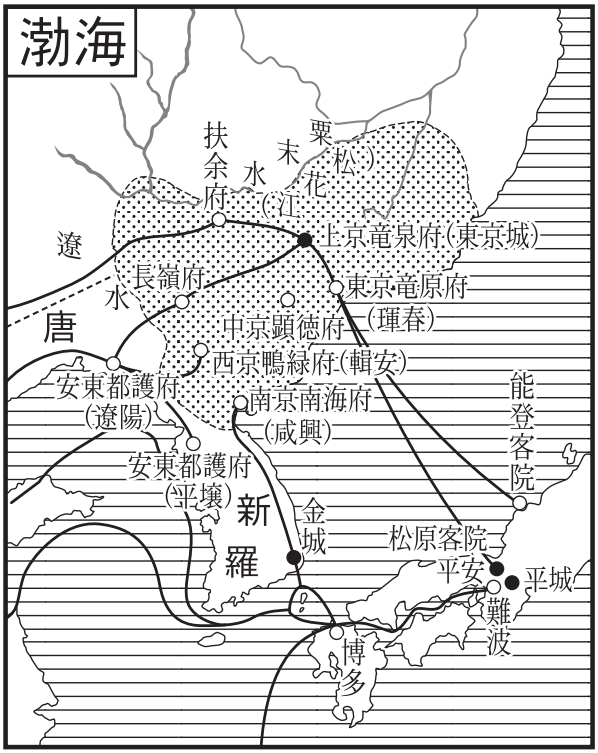


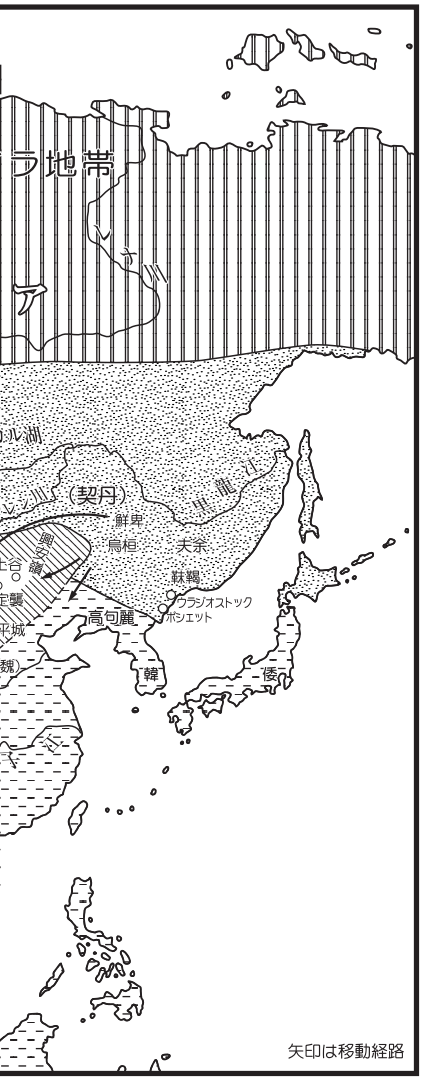
図1　三省堂編修所編「地図対照日本史年表」―改定増補版より

海を渡り、能登半島に来着している。この接迎のため、日本政府は能登に客院を常設していた。

しかも遣使のはじまりは、神亀三年（七二七年）に出羽国に来着したと記録があるから、能登だけでなく、裏日本であれば新潟だろうと、富山だろうと、どこにでも来着できたということである。（中国でおきた唐末の安禄山の乱の知らせは、逸早く、当時渤海に出かけていた日本人によって日本政府に報告されている。）

しかも、梅棹忠夫氏は、江上波夫氏の唱えた騎馬民族征服王朝説の弱点を補強するため、ツングース水軍による大和王朝説を提出しているのである。たとえば神武東征が、畿内に入るため、水軍によって瀬戸内海を東向したという伝説は、それを裏づけるものであるというのである。私にとってこのことは、最近ＮＨＫテレビで見た悠々として流れるアムール河のほとりに、狩猟、漁猟によって逞しく生活するツングース系諸部族の姿が、その背景にちらちら見えてしかたがないのである。

この騎馬水軍一体民族説は非常に興味深いもので、現に海の騎馬民族といわれたヴァイキングが全くそれであって、スカンジナビア半島から突出したノルマン族によるロシア征服は、騎馬水軍一体の軍事力を発揮し、東スラブ族を統一し、ノボゴロド公国、キエフ公国を樹立している。実は、ブルガリアの建国事情も、これに似ているのである。ブルガリア族は、フン族の西方進出に伴い、その支配下にあった遊牧騎馬民族であって、アツチラの歿後、ボルガ川の中流にボルガルという王国をつくってい



た。その一部がさらに西に移動し、ドナウ河を南に渡って黒海に近く、土着の南スラブの諸族を統合して、六七九年に都をプリスカにさだめて、第一次ブルガリア王国を建設したといわれているのである。

護雅夫氏

アジアの地理的区分と古代の騎馬民族（江上波夫著『騎馬民族国家』中公新書より）

の『遊牧騎馬民族国家―蒼き狼の子孫たち―』（講談社現代新書）と、これに触発されて書かれたかのように思われる江上波夫氏著『騎馬民族国家』（毎日出版文化賞受賞、中公新書）は、日本の皇室即位儀礼と、大陸の遊牧騎馬民族国家の君主即位儀礼とが本質的に一致していることを、具体的な事例をあげて実証しているのである。従来活字にしるすことが禁忌とされていたようなことが追々明らかにされて、新しい民俗学上の見解を聞くようになった訳である。これはシャーマニズムと深い関係があって、調べれば調べるほどシャーマニズム儀礼は、それが遊牧民であろうと、狩猟民あるいは漁撈民であろうと、またそれらを支配した騎馬民族国家に共通していることに、深く感動するのである。シャーマニズム儀礼は、当然音楽と歌唱を伴うもので、騎馬民族自身の移動によって、音楽と歌唱も共に移動し伝承されたと考えてよいと思うのである。（私はブルガリアで、ブルガリア人が自らのブルガリア正教をオルソドックスと称し、ビザンチン・ローマのギリシャ正教を極端に否定することは、トルコに協力したビザンチン教会のあり方に対する反感もあるであろうが、それ以上にブルガリア正教の上に深くシャーマニズムの影を落としているのであるまいかという感じをつよくしているものである。）

ドニエブル、ドン、ボルガ河の下流地帯、黒海、アゾフ海、カスピ海の北側にひろがる南ロシア平原、さらに東に続くキルギス平原に、紀元前八世紀に早くも現れた最初の遊牧騎馬民族がスキタイ族＊であるといわれている。（前五世紀のギリシャの歴史学者ヘロドトスは、東方への交通路として、ドン河口からボルガ流域の森林地帯を経て、ウラルを越え、天山、アルタイに達するルートがあったことを記録している）前三世紀のはじめマケドニアの王フィリップ（アレキサンダーの父）は、スキタイ族より二万頭の馬を輸入し、その騎馬術を採用して、烏合集散のギリシャ諸都市を統一国家にまとめあげ、これをひきついだアレキサンダーは東方のペルシャを一気に征服して、遂に西トルキスタンからインドにまで軍を進め、アレサンドリア・ポリスを各要地に建設したのである。これが後々のシルク・ロードの道を用意するのである。例えば上

野の国立博物館にあるガンダーラの釈迦像を見れば、一見してギリシャ人による彫刻であることは誰の目にも明らかであり、法隆寺の南大門、唐招提寺金堂のエンタシス列柱にギリシャの面影を見つけることができるのがそれである。

遊牧民族から遊牧騎馬民族への変身は、青銅、次いで鉄の文化を獲得したことによるものとされ、特に馬のくつわとあぶみの発明が重要で、青銅文化がこれを容易にし、馬の利用を一変したといわれる。これを発明したのがスキタイ族であるというのが今日の定説である。この騎馬文化は、早くも前三世紀には北アジアの匈奴に将来され、遊牧騎馬民族国家を形成した匈奴は、当時の中国の北辺に大きな脅威を与えることになる。やがて後三世紀になると匈奴は、ヨーロッパの草原地帯にフン族として姿をあらわし、ゲルマンの大移動をもたらし、民族移動の玉突現象をひきおこすことになる。その末裔がハンガリー（マジャール）、フィンランドである。

スキタイ、匈奴（フン）、鮮卑、突厥（チュルク、トルコ）、のちのモンゴル（蒙古）族といった北アジアにおける有力な遊牧騎馬民族国家の出現は、その発祥をいずれも、アムール河の上流オノン・ケレルン川の高原、あるいはバイカル湖に注ぐオルホン・トフ川の上流高原であるとされ、不思議と一致するのであって、金、鉄といった資源と関係し、進んだ製鉄技術がこの地帯にあったからだともいわれる。チンギス・ハンは蒼き狼の子孫としてこの地に誕生する。チンギス・ハンの西域征定は遠くロシア平原に及び、バツウ・ハン（抜都汗）はボルガ河の下流、サライに都を定めてキプチヤク汗国を建設する。

サライは現在のボルゴグラード（戦前のスターリングラード）附近である。モスコー公国、キエフ公国は共に二〇〇年の長きにわたってその支配隷属下におかれることになる。（中国の支配者となった元王朝は僅か一〇〇年にすぎない）

さらにつけ加えたいことは一二二三年、五ヵ年にわたる西域征覇を指揮したチンギス・ハンは、東のモン

ゴル草原に帰還するにあたり、シル・ダリアの草原に狩猟を楽しんで休養をとる。後の元の世祖となった孫のフビライがここまで出迎えにきていて、この狩猟に加わった。時に十一才であったが、一匹の兎をしとめた。チンギス・ハンは非常に喜びモンゴルの慣習にしたがい、殺した兎の肉と脂を、孫の手の中指に塗って天神に感謝を捧げたといわれる。このことはイギリス貴族が最初の狐狩で獲た狐の尾を切り、その血を子供の顔に塗る慣わしがあったといわれ、同じ頃一一九三年（建久四年）征夷大将軍となった源頼朝が、富士の裾野に巻狩を行った。嫡子の頼家はこの時十一才であったが見事に鹿を射とめた。喜んだ頼朝は直ちにその場に山神を招請して、これに獲物の鹿と射とめた矢とを捧げて祭事を行ったという記録は、政治事件ではないので、一般には記録にのこりがたいものであり、習俗としてうけつがれていくべきものである。これらの事例は、ユーラシア大陸の北部と、東から西に結ぶ、森林地帯とそれに接する草原との間に生活する狩猟民の間に行われるシャーマニズムの狩猟儀礼として、共に生き続けてきた何ものかがあったことを、深く感ずるのである。

私はドナウ川のほとり、ブルガリアの国境都市ルーセで嫋々（じょうじょう）たるカバールの旋律と共に、極東の島北海道の『江差追分』や『子叩き唄』に似た歌唱と音楽を聞くことができたことは、決して偶然ではないのであって、長い歴史の移り変りの中で、常民の文化として結ばれているものがある筈だと考えるのである。

昭和五十一年　月刊『ユマニテ』二～六号

わが魂の中の山河

昭和六年春帯広中学を卒業したものの、あまり勉強に身をいれていなかったため、これから性根をいれかえて大学受験のための勉強をしようと考えていた矢先、当時河西支庁の視学をされていた高橋正男さん（私にとって希望社という修養団体の先輩格）から突然呼び出しがあって、中学生時代の素行をよく知っているものですから、「お前代用教員をやってみないか、受験勉強ぐらいは教員してでも出来るよ」と説得されました。履歴書も書いて出さないのに、いきなり発令で、きまった任地が下人舞小学校でした。今の年でいうと十七才の春でした。これがのちのち、私の人生行路を一変させ、六十二才になる今日までついに就職のために履歴書をただの一度も書かずじまいになり、下人舞での生活の二年間が生涯の基底となり、今もなおその土台の上に郷土十勝を考え、ものを考える人間になってしまいました。

赴任の時、もう四月というのに雪はまだ八十センチ以上も残っていたことを記憶していますが、清水駅に下車して見ると、人舞産業組合の集乳トラック（その頃としてはハイカラなフォードのＶ８トラックだったと思います）が駅まで出迎えに来ており、助手席にのせて貰って、社会人として私の最初の舞台である人舞の地に落ちつくことになりました。

この年が昭和初期の農業恐慌に引続く、典型的な冷害凶作のはじまりの年でありました。昭和八年は豊作でしたが、七年、九年と冷害が続くことになります。

校長は佐々木文雄先生で、私は首席兼代用教員兼小使さんということでしょうか、新しい生活が始まりました。在籍児童数はたしか一〇三名ぐらい。校長先生はご病気がちのため、奥さん（坂上先生、札幌庁立高女専攻科出身の訓導の資格を持っておられました）のお手伝いも頂きましたが、よく一年生から六年生の授業をするため、二つの教室の間を走りまわったことを記憶しております。

しかしよく考えて見ますと、当時の教え子の六年生が十二才、こちらが十七才ですから、ずいぶんアンチャン先生だったと思います。まだ社会経験の未熟な人間でしたから、若さと情熱だけの体当たり教育をやっていたことになり、気概はありましたが、父兄の皆さんははた目にずい分ハラハラさせたことも多かったことでありましょうし、省みておはずかしい限りです。

先日、当時の須田福太郎君、鳥海力男君と話しあっていたら、子供たちがいっこうに言うことを聞かなくなり、しまいに私の方が怒ってしまいプイと教室を飛び出し、丘の上に登って、そのまま仲々帰ってこないため、さあ子供たちの方が大変なことになったと心配した思い出を語ってくれました。私は忘れてしまいましたが、ありそうなことだと思いました。とにかく下人舞二年（十勝清水町下人舞）の暮らしというものは私にとり、わが青春の「疾風怒濤の時代」です。私は全身全霊をもって、ここの二ヵ年が自らの一生涯であるような生き方をしていましたから、やることなすこと、とにかく今でも私に近い年輩の人々にとっては、話題に事欠かない暮らしぶりであり、生きざまだったと確信しております。

思い出話の酒の肴には十分なるのではないでしょうか。

昭和六年は満州事変、血盟団事件といったことがおこり、農業の困難性はいよいよ深まるという情勢の中で、冷害年にぶつかり、米作農業の不安定、土功組合の困難、産業組合運動（今の農協）が金融資本商業資本と真向から対立、反産運動（産業組合をつぶせという運動）がおこってくるという時勢でありました。

私の目には、子供たちの教育だけではダメだ。子供たちの前途に横たわる農村の環境をよくし、もっと力

清水-熊牛を結ぶ河西鉄道とSL

強い逞しい農業をうちたてないといけないのではないか。狭い学校教育の枠の中だけでなく、地域全体の教育を考えていかないと農村と農民の向上はあり得ないのではないかと、父兄たちと深く交われば交わるほど、そう思うようになりました。あの河西鉄道の鉄橋を自転車でわたり、よく開墾会社農場長の岡見聞多さんのところに通い、あの方の学んできたデンマーク農業の経営のあり方、国民高等学校教育の話を聞きに通ったものです。

上級進学のことなど忘れてしまい、農村建設のこと、農村教育のことが人生行路の転変の中で一貫して、今も続けている仕事になってしまいました。

戦後復員して間もなく菊地栄光君を中心として農村同志の方々が、私のようなものを北海道の教育委員に当選させて頂いたのも、下人舞の生活のおかげです。「歳月は慈悲を生ず」と申しますが、この年になって本当にそう思います。生きることの有り難さであります。

合掌

昭和五十一年　下人舞小開校五十年史『谷地坊主』

賢治記念館を建てよう

昭和五十年のこと、札幌在住の岩手物産の中村方人さんと、千歳の詩人斉藤征義さんとの出会いが宮沢賢治文学展開催の発願となり、私どもにもご相談がありました。

そして全道で七会場、三万五〇〇〇人の方々に賢治文学の背景と賢治精神に触れていただくという空前のことが実現できたのであります。たまたまこの年、花巻の賢治ゆかりの農学校跡地に市の文化会館が竣工し、その記念事業として賢治文学展が行われました。その際の出典物をそっくり拝借できたことが、道内の賢治愛好者にとってまたとない機会に恵まれたことになり、まことに意義ある催しを持つことができたのであります。

私は数年前賢治の実弟であり、賢治のよき理解者、協力者である宮沢清六＊さんを花巻にお訪ねしたことがありました。その時旧太田村山口部落の高村光太郎記念館にご案内をいただきましたが、立派な不燃建築の本館とともに、旧山荘には鞘屋（さやおく）がかけられて、光太郎在りし日の姿をそのままに、目のあたりにすることができました。

このように賢治を因縁とし、東京から戦災を避け花巻に移られた高村光太郎が、隠棲の場所として選びすごされたところに既に記念館ができており、花巻に生れ、花巻に育ち、花巻の土に帰した賢治には、まだ記念館ができていないということに、どうも私には落ちつかない感情のたかぶりを覚えたものであります。

賢治が亡くなってもう四十年近い月日が流れています。賢治を愛好する人々は、世代の重なりとともに、ますます多く広がっています。集約されたかたちで、賢治の生涯、精神、作品を学ぶことができる記念館ができてもよいのではなかろうか。非常に強く、そして素朴にそう思いました。

そんな時清六さんが何気なく、「先ごろ穂高町の碌山美術館＊を見てきましたよ」とポツリと申されました。私は昨年ようやく機会があって碌山美術館を訪ずれることができましたが、そこの玄関の大扉に、「この館は、二十九万九〇〇〇人の力で生れたりき。一九五八」と、感銘深い言葉がしるされていました。

賢治百年祭のとき宮沢清六さんと宮沢家にて

この話の時は、私はまだ碌山美術館のことは知りませんでした。今思ってみますと、清六さんの頭の中には、賢治記念館もまた、ひとりひとりの小さい志の石を積みあげて、賢治精神に共感するもの

の手によって建てられる、そのような夢を描いていたのではないでしょうか。

実は、そのころから地元で、記念館建設の検討がはじまっており、北海道で賢治展開催のころには、計画が相当煮つまっていることを知りました。私ども各地賢治展開催の主管者は、とりあえず実現促進のためにもといささかではありましたが、基金をお届けいたしました。

その後、本年六月、花巻市の手により、正式に記念館建設のことが決まり、既に格好の用地の確保も終り、さらにこの機会に、賢治を愛し、賢治の精神に共鳴する方々に広く呼びかけ、浄財をつのろうということで、財団法人宮沢賢治記念会が設立されたというご案内をいただきました。

私どもは、賢治を深く親愛する人々が、全道各地にいかに多くおられるかということを賢治展開催の仕事を通して、身をもって知っております。いかにも賢治にふさわしい、充実した賢治記念館実現のために、協力いたしたいものと決意しております。お力添えを切にお願いするものであります。

昭和五十一年　ベーリング市通信

校歌制定の思い出

昭和三十年、上士幌高校の創立五周年記念を前にして、校歌を制定したいとのことで、当時の山花校長先生から私にご相談がありました。

現在の帯広農業高校の校歌をつくる際も、私に母校からお話があって、高村光太郎先生と相談して、詩人の田中令三先生におねがいしてつくられた経過がありますので、山花先生はそのことを御承知の上でお話があったのでしょうか。士幌高校の校歌も私がお手伝いいたしました。

それまでの卒業式では、増谷龍三先生がベートーベン交響曲第九「合唱」に、先生が作詞をされて歌われていたことを記憶いたしてます。仕掛人は私だったように記憶いたしております。高校の卒業式にベートーベン第九シンフォニー「合唱」が歌われたということは、少なくとも十勝はじまって以来の文化的大事件だと思うのです。このことは、永く永く記憶さるべきことだと思います。

私は、私の畏友で在京の金子智一＊と相談して、大木惇夫＊先生に作詞をお願いすることにいたしました。大木先生は今年八十一才でまだお元気です。先生は、はじめ若山牧水の影響を受けて短歌をはじめたのち、三木露風を知って詩に転じ、大正十年、北原白秋から才能を認められてその門下となり、大正十四年、白秋の序を得て第一詩集『風・光・木の葉』を刊行以来今日もなお詩筆をすてることなく、戦後、昭和四十年には詩集『失意の虹』を出されています。北原白秋門下の最後の叙情詩人であります。

映画ロケ、右から金子智一、中山正男（『馬喰一代』の著者）

歌曲で有名なのは東海林太郎の名と共に、オールドファンに耳なつかしい、「橇の鈴さえ、寂しく響く、雪の広野よ、街の灯よ、一つ山越しゃ他国の星が、凍りつくよな、国境」といえばすぐピンとくる、あの『国境の街』の作詩がそれであります。

歌詞については、先生と作曲者の飯田信夫先生を交えて東京でお目にかかり、お話あいをいたしました。「荒地」という言葉が各節に出てきますが、この意味は、人手のまだまだ行届いていない、自然の力がまだそのままでのこっている、若い土地のことであります。

『二宮翁夜話』の「荒地は、荒地の力で興せ」に由来しています。二宮翁の、「天道即自然、人道即農業経営」、あるいは科学、技術の哲学に発しています。自然は作物も育てるが、雑草も繁茂させ、病害虫も発生させる。酷寒の冬もあれば、灼熱の夏もある。慈雨があるかと思えば旱天もある。これが天道だというのです。

それでは人道とは何かというと、「音もなく香もなくつねに天地（あめつち）は書かざる経をくりかえしつつ。」という翁の歌に的確に表現されているように、声を以て語ることなく、香りを以てその所在を教えることもないが、天地自然の運行変化の中に、文字に書きあらわされていない真実、真理を学びとり、科学し、技術

をうちたてて土地改良を施こし、雑草が生えたらそれを抑制するようにし、病害虫を除去し、作物生育の好適条件をととのえて、天地自然の力を最良のかたちでいかしていく、その努力をすることが、天道に対する人道であると申しているのであります。農業機械だってモノであるから、人間のつくった自然なのです。機械は使えば疲労するし故障もおきる。その故障の原因は機械に聞かねばならぬ。その機械＝自然に聞いて最良の使用状態に整理をする。これも人道だといっているのであります。冷害だ、凶作だと、人は騒ぐが自からの人格能力や、頭脳の冷害凶作であることを忘れてはいないだろうか、と翁はいうのであります。

したがって、かたちの上では荒地のように見えても、無限の力が荒地の中に潜在しているのだから、その最良の能力を社会協同の力でひき出し、社会協同による繁栄をはかるべきだという意味のことを申しているのであります。

このことはひとり農業だけでなく、他の産業についても同様であります。学問の基本であります。東京に東京の文化があるように、上士幌に上士幌の文化があるべきだという意味にも通じます。凍結深度が一メートルもあるのに、家の土台を五十センチメートルしか掘らなければ、家が凍上でまがってくるのは当り前です。一年で日照時間が一番短い十二月に、ギリシャの太陽の都といわれるアテネより、日照時間が長い上士幌に於て、この豊富な日照を最大に利用しないということはいかに損失であるかがわかります。しかし昼夜間の気温差が大きいのも上士幌での特長であります。とするならば、昼間に得た太陽エネルギーを夜間に於て逃さない工夫が必要であります。

消費流通のことについても、現地の力で解決していかなければならないことが沢山あります。要は、猿真似では駄目だ。自主創造、独立自由の、草の根の民主主義による、社会協同実現のねがいが、この歌詞の中にこめられています。

また「努むるものに救いあり」「耐え待つ者に光あり」の歌詞はゲーテの有名な詩劇『ファウスト』の言

葉であります。

前述のベートーベン第九『合唱』の原詩、「歓喜の歌」こそ、詩人ゲーテの親友シラーの詩であります。ゲーテもシラーも詩と文学を以て、ドイツ国民に世界的な共感と、人類的自覚を促すことに努めた詩人であります。

さて、作曲者の飯田信夫先生でありますが、高村光太郎作詞の『歩くうた』の作曲者として、戦前に国民歌謡の格調高い作曲を沢山つくられています。「歩け、歩け」の歌は今でも歌われている歌唱で、飯田先生は、「シャリアピンが歌った有名なボルガの舟歌のリズムが、自然にああいう曲にできてしまったのだ」と、先日もＮＨＫの放送で申しておりましたが、この校歌の作曲も、私どもが上士幌高校校歌のことを中心に語りあった数時間のうちに、歌曲のイメージが出来上がったと申されていました。

私にとっても思い出多い曲であります。

昭和五十二年　上士幌高校定時制閉課記念誌

誰か、この「若者」中原悌二郎に惚れるものはいないか

大きな荷をおれに負わせて
あいつは去った
よし　この荷は
おれがひきうけよう

ゲーテ『西東詩集』

私が中原悌二郎＊の「若きカフカス人」（大正八年、三十一歳の制作）をはじめて見たのは、昭和三十九年の秋、札幌の道銀本店のホールに於てであった。ただこの一点がポツンとおかれていたのであるが、この作品のなんとおそろしいまでの迫力よ。ベートーベン、第五シンホニーの、さっと指揮棒がふりおろされた瞬間、ダダダ、ダーンと、「運命」のモチーフがからだ全体をつきぬけていく、あの感動と同じように、私はつかまれてしまった。

しかも、この作者は明治二十一年、まだ開拓途上の荒々しい時代の北海道、釧路に生れ、旭川に育ち、札幌一中を中退して上京。はじめ絵を志し、途中から彫刻に転じ、大正十年、僅か三十三歳でこの世を去ったという。この中原の名も、作品も、この時が私の最初の出会いであった。

戦後になって、私はエゾ・ライトといわれた建築家田上義也と親交し、加藤顕清＊、山内壮夫＊、本郷新＊などの作品は彼とのつきあいで、ずい分丁寧に見ており、彫刻についても、お互いに語りあってきたつもりであるが、一度として中原の話、この作品の存在について聞き及ばなかった。

しかも戦前、私は高村光太郎に許されて、団子坂のアトリエに出入りしていて、宮沢賢治に開眼させられたのであるが、中原のことを聞くことはなかった。このような大変な作品が、日本人の手によって制作され、存在していることを、まったく知らなかっただけに私にとって感動と、この衝撃は大きかった。

二度目に「若きカフカス人」に対面したのは、何年前であったろうか、こともあろうに、山口県宇部市役

若きカフカス人

所の前庭であった。宇部市都市計画部長の山崎さん（千葉高等園芸出身、満州国新京市の都市計画に参画）に教えられた。このブロンズのかたわらには、芥川龍之介の文字で（おそらく原稿から写真拡大したものであろう）

誰か、この中原悌二郎氏の、ブロンズの「若者」に
惚れるものはいないか
この「若者」は、いまだに生きているぞ

と、昭和二年、芥川が文芸春秋社の北海道の講演旅行からの帰途、新潟で二、三日の休養をとり、旧制新潟高校でこの作品に接した時の、文章が刻まれている。

まさにこの作品には、深沈として凝縮された、内部からの生命の促迫を感じさせ、見れば見るほど、つかまえられてしまう。「惚れるものはいないか」の芥川の問いかけに、「惚れているぞ」と私はどなりかえしたい衝動にかられた。

三度目は、旭川の博物館であった。昔の第七師団の偕行社＊が、補修され整備されて博物館となった。新装開館して間もないころ、ここを訪れたのである。中原悌二郎と加藤顕清のために、特別展示室が設けられていた。

私にとって「若きカフカス人」が中原のすべてであって、この作品がこうして旭川の地におかれている、その事実が大変重要なことのように思われた。ある精神がなければ、いかに「ふるさとの旭川」とはいえ、この作品はここに存在する訳はないのだ。

それは愛だ。芸術に対する愛がそうさせたのだ。旭川市民の、中原芸術に対する熱愛が「若きカフカス人」

を、歿後五十年にして旭川に引き戻したのだ。中原は、これでようやく自分のふるさとに魂を鎮めることができた。その事実に私は深く感銘させられたのである。

私はこんどの帯広展を機に、臼井吉見の『安曇野』（筑摩書房）と、匠秀夫の『中原悌二郎』（木耳社）を読むことができた。遺稿集『彫刻の生命』は中央公論美術出版社より復刻出版されているが、まだ手にすることができないでいる。

これらの本の中から、若い世代のために、中原のことについて二、三を紹介したい。

悌二郎は、明治四十一年七月から九月まで徴兵検査のため、二ヵ月ばかり故郷の旭川に戻っている。

この四ヵ月前の三月には、碌山荻原守衛がパリでロダンの知遇を受け、ロダンより激励を受けて日本に帰ってきている。

碌山は、はじめパリで油絵を勉強していたが、ロダンの「考える人」を見るに及んで、断然その魅力にとりつかれ、彫刻に転進した人である。ほとんど同じ頃、悌二郎は親友の中村彝（ツネ）＊と共に、太平洋画会研究所＊で絵画の勉強に励んでいた時代であるが、夜店をひやかしていて、ふと、ロダンの「考える人」の写真版を手に入れた。

悌二郎は、その翌日、ツネにこう語っている。

「これはどうだ。聞いたこともない彫刻家だが、まるでミケランジエロのように獰猛だ。この線を見ろ。この山のような線を見ろ。これが分らんような奴は、死んでしまうがよい。俺は、昨夜一晩木炭で描写してみたが、いくら描いても描いても、大きくなるばかりで、ついに木炭紙を二枚つないでもまだ入りきれないのだ。この山のような線はほとんど無限に近いように、感じられてしかたがない」

だから荻原守衛の帰朝を知ると、悌二郎は、すぐに中村ツネと連れだって、碌山のアトリエを訪れている。

ロダンの作品集に触れ、彫刻の話を聞くうちに、いよいよ彫刻への意欲をかきたてられつつあった年である。

そうした中で旭川に戻った悌二郎であるが、彼が終生熱愛した国木田独歩の『武蔵野』が読みたくて読みたくて、この本を送ってもらうべく、友人に依頼の手紙を出している。その一節。

「ここの柏の木は、素的に大きなものだ。二丈も三丈もの高さがあって、天空を摩している。太い奴になると、幹のまわりが二かかえもある。この木の根方に腰かけていると、湿っぽい風が、すうっと吹いてきて、何ともいわれぬカビくさいような匂がする。この匂は、山林特有の匂いで、僕は大好きだ。……

君、察してくれ。僕はこの山に、ひとりで寝転んでいるのだ。そしてカビ臭い山林の匂をかぎながら、柏の葉をもれる日光をながめているのだ。歌うも泣くも、誰はばかるものとてはないのだ。……

人ありて僕に、北海道の風景はどんなだと聞いたなら、僕は言下に只一言『荒涼たる風景だ!』と答える。

……

人は、わが北海道の風景を見て、放らつである。不規則である。殺風景であるというであろう。しかし、クラシカルな典雅な趣味に飽き、虚飾偽善を蛇の如くに嫌う我々青年の心には、この赤裸々なる風景は、いかにひびくであろう。実に烈々たるはげしき自然の威力は、わが北海道の風景において、痛切に、これを感じることができる。

色を見給え。ひと口にいえばナマである。生々しい色、これが、いかにもわが北海道の風景に調和して、力強く、胸を圧するのである。木は緑である。川は藍である。空は真青だ。空気は透明であるから、色は鮮やかで、しかも強い。」

既に二十歳の悌二郎のこの一文を読んで、私は直ちに、内村艦三の言葉を思い出す。

「世間ではよく、私たちをはぐくみ育てたのは、札幌農学校の教育であり、クラークなどといっているが、

とんでもない話だ。私に、生涯の感化と影響を与えたのは、北海道の荒々しい山野であり、自然である。私こそ、北海道の自然から、大なる恩恵を享受したのである」と。

この二人のふるえるような、若き魂の感受性と、北海道の粗野なる自然との感応交感が、彼らの人間形成の土台にあったことの告白であると私は受けとる。

高村光太郎の詩に「荻原守衛」がある。

単純な子供荻原守衛の世界観がそこにあつた、
坑夫、文覚、トルソ、胸像。
人なつこい子供荻原守衛の「かあさん」がそこに居た、
新宿中村屋の店の奥に。

巖本善治の鞭と五一会の飴とロダンの息吹とで荻原守衛は出来た。
彫刻家はかなしく日本で不用とされた。
荻原守衛はにこにこしながら卑俗を無視した。
単純な　彼の彫刻が日本の底でひとり逞しく生きてゐた。
……
四月の夜ふけに肺がやぶけた。
新宿中村屋の奥の壁をまっ赤にして
荻原守衛は血の塊りを一升はいた。
彫刻家はさうして死んだ—日本の底で。

註・「かあさん」とは、中村屋の相馬黒光夫人。守衛の秘かな黒光への思慕は、絶作「女」となって、現在長野県穂高町碌山美術館にある。

この詩にあるように、新しい彫刻の道を開いた荻原守衛であるが、帰朝後、僅か二年足らずの活動で、僅かの作品を遺して明治四十三年四月、三十一歳の生涯を閉じ、彗星のように消え去ったのである。

ロダンの彫刻に開眼し、かねて内部醗酵させていた悌二郎は、あわただしい守衛の死に直面し、ついに彫刻に転進することを決断する。二十二歳のことである。

新聞配達をしながら生活の資を得てのそれからの美術修行は、実に悲惨の一語につきるといってよいものであった。詳細は、匠の『中原悌二郎』に譲るとして、当時の官展彫刻は、幼稚なモデルによる外形描写か、愚劣な文学趣味の題名をつけ、曰くありげな主題性にとらわれた彫刻が彫刻とされていた時代である。そのような澱んだ空気の美術界の中で、新しい茨の道を進んできり開いていくことになる。

そして大正五年、悌二郎は戸張孤雁＊と前後して、再興の日本美術院に所属を移し、そこで平櫛田中＊、佐藤朝山＊、石井鶴三＊などと知り合う。この年、石井鶴三像によって樗牛賞＊を受け、院友に推薦され、さらに親友中村ツネの推挙で、今村繁三＊から毎月十円の援助が得られることになる。ようやく生活に安定の道が見え出す。

大正七年、三十歳。この年かねて婚約の伊藤信と結婚する。秋には平櫛、石井らと共に京都方面の旅に出て、多年念願の古都奈良における寺院建築、仏像を見て歩く機会にはじめて恵まれる。彼はそのことで、次のように述べている。

「新たに彫刻に対する面白味が加わると同時に、はかりしれない、自然の深さと、神秘さに面して、ほとんど手の下しようがなく、自分自身の無智と、貧弱さにあてもなく苦しめられる。

古代の彫刻家たちが神に対してもったような、謙遜な愛情をもって、我々は自然に対さなければならぬ。この無限の豊富と、神秘さをもっている自然に対しては、我々は小学校の一年生にもあたいしない。

何事も、新たに学ばなければならぬ。自然に対する我々の狂喜と、熱誠と、讃嘆とが芸術になるのだ。

現代の如く、趣味の廃退している時代に於ては、真の芸術家はまったくみじめなものだ。けれども、我々はそう失望しなくともよい。我々の民族においても、かっては偉大な文化をもっていた時代があった。それは奈良朝時代だ。

あの時代の文明が、多く支那、朝鮮を経て伝来したものであったにしても、天平時代に至っては、あきらかに日本的のものになっている。それは、日本民族でなければ、作り得ない偉大さと、秀麗さをもっているのだ。

あの時代の文化が、建築と彫刻に結晶されて、我々が、現代にそれをもっているということは、実に至上の幸福といわなければならぬ。

奈良朝時代の建築と彫刻の研究は、非常な興味をもって自分をひきつける。我々の民族の間に、ふたたび王朝時代の文化が復興せられることをのぞむ……。」

彼の自然に対する熱愛と、古代芸術に対する愛情の深さが推察されると共に、自らもまた、千年の歴史の重みに耐える美の構築に挺身しようとの、決意がうかがえる。

大正八年、三十一歳。漂泊のロシヤ青年ニンツアーが東京に来たいからと、当時ハルピンにいた友人から相談の手紙があった。悌二郎は、新宿中村屋の相馬黒光女史なら、ロシヤ語もできるし、碌山の住んでいたアトリエも空いているからと、相馬夫妻に面倒を見て貰うことを相談したところ承諾が得られた。

二十五歳の、無口で、沈うつな、しかし精力的、野性的な風貌の青年ニンツアーをモデルにする機会が与えられた。ニンツアーは制作中の粘土を見て、中原は鬼をつくっているといって嫌い、「壊す、壊す」と云

中原悌二郎

ったという。さいわい愛情こまやかな信夫人がかたわらにあって、ニンツアーをなだめすかしもちこたえた。僅か二週間の制作期間であったが、彼は破壊をおそれ、秘かに自宅に持ち帰り、手早くブロンズにとってしまった。これが、今日のこる「若きカフカス人」の誕生である。

モデルの関係で未完成になったが、彼の制作熱の最高潮に達し、技巧も最盛期に入った時期のもので、悌二郎作品の白眉をなす代表作である。

中原悌二郎という北海道の生んだ、偉大な彫刻家の生涯は短く、ロダンと同じように、意にみたない作品は片っ端から叩き壊したという。そのため、彼の遺された作品の数はまことに少ない。

しかし、その作品の背景をなす生涯に於て、織りなしていく青春群像と、厚い友情を中心とした人間まんだら模様は「若きカフカス人」以上に、私の魂をゆさぶるものがある。

「わだばゴッホになる」と叫んだ棟方志功が津軽に生れたように、十勝の自然風土の中から、第二の中原悌二郎の生れ育ってくることを、心から祈念してやまない。

昭和五十二年　中原悌二郎展パンフレット

十勝から北海道を考える

―戦後北海道農村の民主化をふりかえって―

一、宮沢賢治観音と横山村長

昭和五十年に宮沢賢治展を開くということで、千歳の斎藤征義という詩人が、花巻の宮沢清六氏の紹介で私を訪ねて参りました。賢治展は留萌・旭川・苫小牧・千歳・帯広・釧路・札幌の道内七ヵ所で開き、三万五〇〇〇人ほどの入場者がありました。

横山正明穂別村長

たまたま賢治展をやりましたのを機会に、私が胆振穂別村に宮沢賢治観音があることを斎藤氏に話したことがあります。このことを世に知らせたかったからです。この賢治観音と関りをもった方が穂別村の横山村長＊さんです。戦後の公選（昭和二十二年）で、はじめて村長となった方であります。この方は熱烈な賢治きちがいで、賢治精神で村づくりをやるんだと考え、村おこしをやっておられました。とにかくたいへんな情熱家で、浅野晃＊の詩集を村費で創ったり、成田れん＊という歌人の歌集を、戦後復興期の財政乏しい村の予算で刷るなど、村長としては奇抜すぎる方

でありました。

横山氏はリリエンソール＊の『ＴＶＡ』という本を札幌の丸善でみつけ、読むうちにすっかり魅了されてしまったのです。丁度その頃、富内と振内間の鉄道トンネル工事（ここは蛇紋岩層にぶつかりとんでもない所だったのですが）が行われていまして、電気のない村へ、辺富内線の延伸工事のために電気をひっぱってきていました。また、夕張のもみじ山という所の炭層が穂別側へ抜けており、ここに北炭の新登川炭鉱が開発され、やはりそこの電力を一部もらい、村の電化がはじまりつつありました。しかし、トンネル工事の終了と、炭鉱閉鎖によって電力施設もまた停止となり、村の電気がひきあげられることになっていました。「ＴＶＡ」構想にとりつかれた横山氏はそれなら村の力で発電所をつくろうと決断する訳です。

穂別町の賢治観音

電気がなければ、山にいくら木材資源があろうと、原木で出してそのまま指を喰わえていなければならぬ。エネルギーがなければ製材産業、木材加工産業を起こそうにも手が出せない現状から脱出しようと図る訳です。

また、日高の土壌は石灰岩や蛇

紋岩があって、十勝平野と同じ火山灰地もありますが、非常に良い訳です。良質の牧草が育つため、ひずめの硬い優良馬があそこらでは産出するのです。日高山脈も造山活動のおかげで日高方面にはゆっくりと裾を長くひいています。そういう土地柄でポンプで川から灌漑揚水し、土地改良をし村に水田の拡大を図ろうと考えました。昭和三十年頃までは、食糧増産というので時節柄非常に大きな村の課題でしたし、ランプ生活から抜け出しラジオを聴くためにも電気はどうしても必要でした。そこで横山さんが目をつけたのは、暴れ川の鵡川でした。そこに発電所を造ろうと考えたのです。

私が横山村長とお会いしたのは、十勝沖地震（昭和二十七年）であの辺一帯の学校が損壊し、隣村平取の二風谷コタンに、お風呂と水洗便所のある学校を建てるために通っていた時なのです。それで宮沢賢治のことならこっちが先輩だという気持もあり、横山氏のお宅へうかがったのです。

その時横山さんの口から出たのが、スクールバスの話でした。これはおそらく日本のスクールバスの第一号といえると思います。この穂別というまちは、鵡川に沿ったフンドシまち、渓谷に沿った狭長のまちで、それで学校はやたらにある訳です。

そこで横山さんが考えたのは、村の一体性を保持するには、道路を整備し、川の右岸左岸に点在する集落や農地を橋により連結し、学校の統合を図ろうと考えた訳です。

また、アイヌとシャモとの問題がそこには存在する訳です。平取の二風谷はアイヌが圧倒的に多い地域として深い意味があったのですが、横山さんはアイヌだのシャモだのと分離した教育はいけない、むしろアイヌもシャモも一体化した形の義務教育を実現すべきであるというのが彼の発想の中にあり、それもスクールバス設立の一動機なのです。それで私が横山さんの所へお邪魔しますと、さかんに道路の保全をやっている訳です。旭川などの都市部ではもう消滅しているかもしれませんが、道路を部落全体で保全維持しようという思想が、道路愛護組合＊としてまだ十勝周辺では生きています。自分が米・小豆等を運ぶ道路にはわりと

無関心なんですが、子供のことがからみますと親は黙ってる訳にはいかないものです。そこで横山さんはその点をついて、村民の道路愛護組合を動かした訳です。これは村づくりをする上で非常に大切な点なのです。戦前より存在する道路慣習を結びつけ、バスが通るような道路整備をやる。そこを走るのは営業バスではなく、子供のためのバスだという処に村民と行政当局との対話が生れるのです。これが横山さんの道路問題に関する着眼点であり、私としては非常に素晴しいと思った訳で、それでたまたま調べていますとアメリカでもこの方式をやっているのです。ルーズベルトのニューディールまでは、全米にルーラル・スクールといって小さな単級複式校が無数にあったのです。公共投資により経済の浮揚効果を出そうというのがニューディールの考え方であり、その対象となったのは道路だったのです。道路の利用効果をへき地の人間にも理解させたのはスクールバスであり、横山氏はその時点でルーラル・スクールの統合をやってのけた訳です。彼のとった方針と、アメリカの政策がぴったり合う訳で、非常に説得力があることだと私も感じいり、道の教育委員の一人としてスクールバス協会を設立し、文部省に働きかけて制度化しました。

また横山さんは、昭和二十二年の戦後の最も苦しい時に村長をやっていた訳で、食糧がない、あっても強制的にもっていかれてしまう。しかも交通は不便で、電力エネルギーもない。

そんな中で苦闘しつつも、彼はこの時点で早くも老人問題をも考えていました。現在穂別老人ホームがありますが、これは長屋で、兵舎のような長廊下のある造りで、食事を配る仕組になっている。しかし、横山さんが発想したのはそんなものではなかった。年寄りに一軒一軒家をもたせ、野菜畑をつくって貰う。とれた野菜は役場が市場へ出し、小遣銭を稼がせるという形で、生活保護により養ってもらう生活から、自分も生産し町の生活の中で社会的位置づけをもち、そこから少しでも収入が入るといったシステムをとろうというのが彼の発想でした。これは実現できずに亡くなられましたが、しかし、こうした考え方はたいへんなことだと思うのであります。

それから、横山さんは無税村を目標として、そのために植林事業をはじめました。戦時中、日高・大雪は軍用木材として目ぼしい木材は収奪された地帯ですから、ここに分収林を大々的にはじめたのです。しかし、発電所建設資金導入のため村有林を担保にしたことが、後に村議会を二分することになりました。

発電所の導水路の問題がこれにいよいよ拍車をかけた訳です。発電所の位置はいいのですが、導水路が全部蛇紋岩層の地に敷かれるために、蛇紋岩の性質上一夜のうちに導水溝が動いてしまい非常な難工事でした。これが横山氏の命を縮めたというか、非難のもとになった訳です。それで昭和三十一年、彼は健康も害しており村長を辞めたのです。

この人の伝記をまとめようという声が私にもかけられまして、それがきっかけで賢治観音を知りました。高村光雲＊の高弟で明治の三雲の一人山本瑞雲の弟子で、花巻在住の佐藤瑞圭氏が横山氏の依頼をうけ、賢治三十歳の面影を写した観音像を彫る訳です。横山さんは、この観音像を十日ごとにお守りして下さる家に移し、移る度にそこのお宅で賢治の村づくりの精神を説くという、これはひとつの組織論ともいえそうなことを行ったのです。しかし、横山さんが村長を辞した後は、観音像も農協倉庫、役場の物置きなどあちこちを流転し、不遇の途をたどるのですが、昨年富内の老人クラブに落ち着き、今は立派に保存されています。

宮沢賢治の詩に次のようなのがあります。

ブルジョアジーでもプロレタリアートでも／おほよそ卑怯な下等なやつらは／みんなひとりで日向へ出た草のやうに／潰れて流れるその日が来る／やってしまへやってしまへ／酒を呑みたいために尤らしい波瀾を起すやつも／じぶんだけ面白いことをしつくして／人生が砂っ原だなんていうにせ教師も／いつでもきょろきょろひとゝ自分とくらべるやつらも／そいつらみんなをびしゃびしゃ叩きつけて／その中から卑怯な鬼ど

もを追い払へ／それらをみんな魚や豚につかせてしまえ／はがねを鍛へるやうに新らしい時代は新らしい人間を鍛へる／紺いろした山地をも砕け／銀河をつかって発電所もつくれ……

『サキノハカという黒い花といっしょに』より

横山さんの発電所というのは、日高山脈を背景として、蛇紋岩の峡谷のせまった所で、本当に銀河にかかる発電所になった訳です。

横山さんが存命中に三本ほど法華経の御写経をされたものが、静岡県下田にいる遺族の方から観音様のもとへ送られて参りました。その最後の処に、願文がしるされているのです。「村の学校や橋を永久構造にしたり、住民の年寄りの問題を是非解決しなければならぬという悲願をこめて、この経を写した」ということが記されてありました。病躯でありながらも、端正で少しも字が乱れていないのです。一見してふるえるような、こちらの胸がグッとつまるような、そういうものでありました。とにかく横山正明という人は、すごい人だったのです。とにかく発想が幅広く執念を以て志の実現に生涯をかけた人であります。

二、地域集団から機能集団への町づくり三十年―中札内

見失われる原点の確認

土着の住民の立場に立ち、ひとつの町をつくりあげていくということは、三年や四年じゃできはしない。持続性というものが非常に重要になってきます。持続的でなければ、そんなものはできはしないのです。いま中札内の問題を考えているのですが、三十年目にして中札内の仕事の仕方というものを見つけて、農林省

昭和三十四年中札内の村づくりが始まった記念の夜。右から太田村長、梶浦組合長、中央木呂子、左から二番目は上野満先生。梶浦宅にて

や道がワイワイ云い出し、そして国の構造改善事業は中札内がそのお手本となっているのです。

中札内がそうなるまでには約三十年の年月がかかっています。戦後の独立自治体いわゆる一町村一農協の形態になってから三十年。たまたま、この中札内の場合は組合長も村長も議長もずっと変わらずやってきたことが、現在のような格好をもたらしてきている訳ですが、しかし、少しく優等生になりすぎたという危惧が生じてきています。未完成と思っている間は、何クソっていうものがありますが、周囲から優等生といわれるようになると、ここに危険な落し穴が潜んでいる訳です。骨格を組み立てるには長い年月を要するが、崩壊するのはいとも簡単なものです。

今まで住民をひっぱってきたリーダーたちの老齢化に伴い、新旧交代の機にかかってくる。今のままいって、いよいよ老齢化が進みどうにもならなくなった時点で、若い世代にバトンタ

ッチしたのでは、今度は若い連中がナスのボケたのみたいになり使いものにならぬ、いわゆる動脈硬化の症状を呈してしまう訳です。リーダーたちが三十代の時に村、農協、議会の実権を握り、振り回してきたように、そこら辺まで戻していかなければ回転が鈍化してくる訳です。それで、これまでの地域集団から機能集団への移行は、どの時点でもっていけばよいのかという問題があります。産業構造から農業の仕掛けまで、村の生産の仕掛けを地縁的なもの、あるいは地域的地縁集団から完全な機能集団へと移行すること。これがかたまるにも、やはり二十年の月日が必要だったといえます。

中札内においては養鶏部会、養豚部会、酪農部会、畑作部会などの部会制というものが中心となり、これらの機能集団が村の意思決定をし、生産の方向づけをやる訳です。ここでは、農協など要らないといった考え方でやってきたのです。農協というのは過去においては、農民を支配するための道具にすぎなかった。しかし、ここではそれを農協にしばられず逆に利用してやろうといった形をとっていこうという、地域の経済運営が最終的な目標になっているのです。そのため農協という看板はなく、ただ農業管理センターがあるだけです。

また全ての農民が組合に加入していますし、またここでの生産は全て法人会計であり（個別でも法人として仕組まれてしまう）、複式でやるため税闘争はない訳です。役場・農協が法人システムになっているので、そのかわり胡魔かしは利かない訳です。コンピューターでハッキリと出てしまいますから、最初は法人化には反対が出ました。村の税金が減るということで、議会でも問題になりました。だが、今では逆になっています。税金がどんどん上がるし、かけひきなしの確実なものが出る訳ですから、はじめ法人は、税の胡魔かしだとかなんとか揉めたのですが、やはり他の町村のような従来のつかみどりの税申告のやり方では、それがもとで村が割れたり、分裂したり、従来の部落が三軒とか五軒にバラバラになるといった馬鹿馬鹿しい事態をひきおこしたので、そうではない生産者の仕組みを作ろうということでやってきているうちに、こんな

風になってしまった訳です。今までの集団というのは地域集団でしたが、それが産業別機能集団へとなって行く訳です。

中札内では、地域集団の中で機能集団を育んできて、今ようやく地域集団と機能集団が、質的分離をはじめ、これからまた動き出さなければならないといった時点にさしかゝっている訳です。

村が豊かになり、またレベルアップが進むにつれ、そもそもの原点が見失われてゆくということ、これが優等生となった中札内にとり、最も怖ろしいことだといわなければならない。金の使い方を知らないということです。金が出来た時それをいかに巧く地域社会へ還元するかということです。現在、中札内一戸当りの所得は年に一五〇〇万から二〇〇〇万で、実質所得で六〇〇万から一〇〇〇万ぐらいという農家が相当いる訳です。しかし、その地域社会における有効な金の使途といった教育は誰も行わない。とにかく、所得を上げようということを、皆で一生懸命やってきたが、豊かになってくると、貧乏だったということは忘れてしまうんです。この原点を見失ってしまうことは、たいへん怖ろしいことです。どうすればよいかといったお手本が結局ない。これがひとつの問題であるといわなければなりません。

それから、畑作輪作の問題があります。これが個別経営の技術としてあれば、十年で片づいてしまうんですが、これが地域技術となるとそうはいかない訳です。個別経営の場合なら、篤農家の技術というのは、十年みればきちんと軌道にのるものです。早い人なら五年の場合もある。しかし、地域技術となると、村全体を落ちこぼれなく仕上げなければならないので、二倍から三倍の時間がかかる訳です。しかも、較差というものがなく平らな状態を呈する訳で、この村全体としての定着をみるには、行政の対応、行政がどうあるべきか、経済団体との絡み合いも考えねばならない。中札内の場合は三十年間リーダーが変わらなかった点で強みがあったといえるのです。しかし、今後酪農における通年サイロの問題とからめて、輪作の基盤がひじょうに大きなものとなってくる。そうなると土地の利用が片寄ってくることが、問題となって出現するのは

必至であります。このことはまだ、システムとして検討はされていないが、とりあえず現状の枠の中で五年輪作を六年輪作へ転換し、確立しようとしているのです。

中札内の場合の出発点というのは、資本主義というものは資本協同のことであり、その経済の中に農業が置かれている。農業もそういう資本協同でやっているシステムと対抗できる背骨がなければ、市場経済に巻きこまれた時、農業は非常に零細分散で弱いものであるから、吹きとばされてしまうというところにあった訳です。ですから、共同化、法人化など様々なシステムがあり、それらが互いに絡み合い、それを技術面までおろして新しいシステムを見出していこうという考え方でした。それは、土地・資本・労働が基礎であり、外部資本でやるんじゃなく、内部資本と内部資源を従来のフロー的なものから、だんだんにストックしていこうという姿勢です。この様々なシステムが存在すること、この点が中札内の面白みともいえるところです。

三、コミュニティ問題

生身の「人間」からの出発

昭和三十四年に、北海道畑作経営技術研究所＊というのを、中札内に設けました。これをやりながら、いろいろと考えるんですけれど、大学というのは単に学生から授業料をとり、学校を運営していくばかりで地域社会とはさっぱりかかわりをもっていないと思うのです。

北海道の開拓は、札幌農学校からはじまった訳ですが、それが五十年ないし一〇〇年の年月が流れた現状を実際的にみた場合、それは本源的に土の中に根っこをはやし、地域社会に貢献しているとは、けっしていえない訳です。後身の北大は、ウィスコンシンとかマサチューセッツなどの大学と連係を持つため、相互に

交流を深めている訳ですが、交流を深めるのは結構だが、そればかりではなく、現行の在り方とはもっと異ったやり方での交流を図ることが要求されるように思われるのです。「アメリカへ行ってみたらこうだったよ」とか、「よかったよ」とか、そんなもので終ってしまうのでは全く意味がない訳です。

地域社会におけるたてまえ的なものではなく、本源的な仕組みというものも判らずに、農政がどうの、農業の方法がどうあるべきであると並べてみたところで、実際的にそんなことでは役に立たない。農民というのは人間であり、生きた社会であり、生きているものだから、色々と複雑な訳です。それであるから、単に学問書にこう書いてあるからというような、字づらに頼るのではなく、現場で実地にやってみて、実質的に自分の肌で、そして手を汚してやってみなければ、本当のところは絶対につかめないのです。

それでなくても農民心理というものは複雑なのです。様々な人間がぞろぞろとうごめいているのですから農村というのは、けっして綺麗事ではない訳です。生きた社会なのであるから、このドロドロとした状態の中へ、どっぷり頭までつかって、色々といじくりまわし、こねくりまわして、はじめて農業経済学なり、経営学なりの学問が生気を帯びはじめ、そこから活力が生れてくるものです。学問の活性化というものは、そういうところから図られるものであると考えるのです。

農学というのは、横文字を縦に並べてゆけば、おおよそのまとまりはつく訳ですが、経営学となるとこれは具体的な学問であるから、なかなか簡単には解決されない。とくに経済の基盤というものが流動的であり、国際関係においても、色々な問題がある訳です。絶えずゆさぶりというものがかけられてきますから、原理原則の応用をきちんと筋道をたてていくためには、常にパイプがつながっており、相互に活性化されていくような交流・友好の拠点を持つことが非常に大切なのです。

現地調査を行うにしても、三日や四日の日程で出掛けて、自動車に乗っかり、申し訳程度に牛小舎のぞいたり、作物のハッパをなでてみたりするぐらいのことではだめだと思うのです。肝腎なのは、人間同士の対

話であり、これがひじょうに重要な意味をもっている。農村で病気や怪我で寝ている人に訊ねてみること、こんなことでも、全て農業につながっていくのです。農業の労働の実態や技術ということと絡んで、病気とか怪我とかいうものは出てくる訳ですから、とにかくひとつも手を汚さず、字づらと数字づらによって帳じりを合わせようとするような方法ではだめなのです。生身の人間とぶつかってみて、そこではじめてその実態というものが把握できるものだと思われる訳です。これも、村づくりと同様で、短時間で勝負がつくといったものではない。

また、経営および技術指導に当る場合にも、ただ理論をふりかざすばかりでは、農民はけっして納得しない。理論をぶつける前に、まず慎重に考え、現場を見て見て見抜いて、様々な農家の体験を、情報を集め、よしやれる、やってみようといった結論に到達し、はじめて受け入れられる訳です。ただ、活字どおりにやればよいといわれても、農家だって怖ろしい訳ですから、けっして手を出そうとはしません。やるからには学者自身も責任を負うつもりで、ぶつからなければだめだと思います。

それから、日本のサラリーマンというのは、すぐに官僚になる。農協官僚・役場官僚などみんな官僚である。この官僚制をいかに叩き壊していくかという、いわゆる、自己革新の問題があると思う。たとえば、町村官僚・自治体官僚といったところで、自治体というのは住民があってはじめて成立する訳で、そこへ還元すべきシステムとはいったい何であるのかといった場合、ただサービスということだけで愛想をふりまけばそれでいいというのではなく、これは、もっと大きな人間と人間との地域的かかわりの中においての、自分の位置づけといったものをはっきりさせるということが、ひじょうに重要な意味をもってくると思います。

村づくりにしても、コミュニティづくりにしても、その発想とか着想とかいったものの、その流れの根底には「人間」というものがおかれていなければ、結局それは無意味なことなのです。そして、地域社会の住民として自分に責任を負うと同様に、地域に対しても責任と義務を負う人間としての生き方の理想、いわゆ

る経済倫理・生活倫理といった、お互いに合意できる何ものかがなければならないと思われるのです。これが存在しなければ、たとえ存在したとしてもバラバラの状態であるのならば、その部落の中での地域経済の歯ぐるまはかみ合わなくなり、大袈裟に云えば崩壊へと結びつく訳です。

中札内における、豊かになった時点で金の使い方が判らないといったことも、ここにつながってくると思われるのです。農産物の収入は、固定的なものではなく流動的なものである。現在は良くとも、来年のことは判りはしない訳だから、そういう中で地域全体のストックとしてその豊かさを、住民のお互いがいかに処理していくかという点に問題がある訳です。

また、地域社会をひっぱっていくリーダーの問題ですが、これも、自分からガツガツと突っ走るばかりではなく、そこにひとつの運動体として、地域全体を動かしていくといったような、ある種のかけひきめいたものが要求されてくると思われるのです。いずれにしても、「持続性」といったことが、ひじょうに肝腎であり、要求されるのである。そして、単に画一的な見方で視るのではなく、上からは鳥の目をもって、下からはミミズの目をもって視るということが、新しい地域の問題点を引き出す誘導弁の役割を果すように思います。

昭和五十三年　地域研究所年報第一号　旭川大学地域研究所

はみだし先生の思い出記

剣岳を前に、旧上旭小学校

私が教師として上旭小学校にお世話になったのが、昭和八年の春から翌九年の春まで僅か一ヵ年です。それまでは下人舞小学校の二ヵ年でした。下人舞時代は佐々木校長がご病気のため、一一三名の一年生から六年生までの二教室を一人でこなしてきました。教師としてばかりでなく、農村、農業の変革を夢みて、いささかはみ出したことが原因で、西川興三氏に引導をわたされて上旭に追放されたのです。連年の冷害凶作で苦しんでいる中で、農業が安定し、農家のくらしが落ちつかなければ、子供たちのためによい教育はできない。農村教師は親も子も丸かかえの教育活動でなければならぬと思ったからです。

上旭は私にとって流刑地であった訳です。農村改革は老人支配をやめさせることだと、校下の老人たちを味方にしなかったことが失敗だったことに気がつきました。上旭校の一年は、また受川校長がご病気がちのために、二教室、八十数名の生徒を

対手に、ひとりで奮斗しなければなりませんでした。これは私にとっての因縁です。着任早々、春の運動会が大変で、妹（帯農校長をやった山花の家内）をよんで手伝って貰いました。オルガン弾きが必要だったからです。

掘立ての教員住宅に剣峰山岳麓寺と秘かに名づけて、朝の六時からお経をあげていました。芽室の東光寺まで往復二十四キロの道を、ある時は自転車で、ある時は徒歩で坐禅に出かけました。家庭訪問に出かけて頼まれれば仏教の話をしたり、仏壇掃除もいたしました。しまいには隣の渋山あたりの報恩講に、本山布教師の前座を勤めて阿弥陀経の講話もし、御布施を頂いてきたことがあります。これは老人を味方にしなければ、農業、農村の改革ができないことがわかったからです。仏教の話の中に農業の話をいれていくのです。農業もまた大地をモトにして光合成で目的を達する因果応報の循環の仕組になっているからで、実によくわかりやすいのです。身体を使ってだけの農業では、農業は発展しないのです。

農民もまた人間である。人間として解放されるような農業農村のありかたは、いったいどういうことか、私の追求です。特に下人舞時代から、自らよってたつ自然風土を正しくつかみ、それにかなって農業のやりかたをしなければ、農業は安定しない。それを無理して土功組合をつくって米をつくらせる小作農業の誤りに気がついたからです。下人舞でも上旭でも自分のところの自然風土をつかんでいない。平場で手亡をつくって儲けているから、山麓傾斜地でも手亡をつくらせる。山麓が平場の隣農業をやっている訳です。地主は小作料が目的で、米味噌を貸して往復ビンタで儲ければよい訳です。

私は上旭は草地農業以外には安定できないというのが結論でした。裸地農業ではダメだ。できれば不耕作農業を考えることだと思いました。傾斜地ですから耕起をすると肥料をいれた肥えた土が高い方からどんどん流亡してしまう。長い間に土地はやせていっても地力の蓄積ができる訳がないのです。このことを私にいっそう確信させる災害が、果たしてやってきました。昭和八年十一月三日、当時の明治節＊です。午前の式

は無事に終って子供たちを下校させましたが、午後の二時ごろから猛烈な吹雪です。忽ち銀世界で、しかも雪嵐です。まことに季節のただならぬ異常さを感じさせました。畑にはまだほとんどの落し物がニオ積みされたままでありました。十一月七日から八日の朝にかけては大風であります。真暗な夜に、剣岳の頂きが真二つに裂けて、その地底から轟々の大風神が躍り出て、まるで如意棒をふりまわして叩きつけるような風の吹きかたで、この世の終りを想像させるものでした。夜が明けてみるとどうですか、住宅の裏の柏の大木がぶっ倒れていてもう三十センチというところで、危なく住宅もろとも押しつぶされるところでした。沢の中に、風呂場と物置きを一つにした小屋がありましたが、それがモノの見事にそっくりそのまま、八メートル以上も高いところにある通学道路の上に移動していました。とてもとても想像もできないような大風の力です。

上旭の代用教員時代。卒業式

学校附近でそうですから上の部落が心配で家庭をまわって見ると、幸い怪我人はなく、子供たちはムロの中にひそんで不安な一夜をすごしたそうです。畑は見るかぎり大変で、手亡のニオが吹きとびいちめんに豆が白く散乱し、雪が降ったようでした。いちばん驚いたことは、その頃豆落としに使っていたドンコロが、農家から三十メートルも風

におされて転がっていってたことです。
しかもこの年の北海道は大豊作で、住宅のまわりだけで南瓜を五十以上もとって、南瓜もこんなになるものかと驚いたぐらいの年で、昭和六年、七年の冷害凶作、やっと八年の豊作だというのにこの有様でした。九年はもっともひどい凶作の年です。この山麓農業は完全に追いこまれた農業をやっていた訳です。山麓のありかたに大転換の必要な日がおいおい迫っていたと思います。
この上旭の地を、何故一年で辞めお前なりにへばりついて努力しなかったかということになりますが、ちょうどこの年の暮れに十勝農学校が火災にあい、制度が変り研究科が設けられ、佐上長官＊の方針で晴耕雨読の実学教育をやるというのです。
上旭で家庭訪問に出かけて驚いたことは、水田地帯では見ることが出来ませんが、小学校の三年生、四年生の男の子がちゃんとプラオがけをやっているのです。今の子供たちには想像もつかないことですが、こうやって子供の時から農業を身体で覚えてしまっているのです。子供たちのために、農業を豊かにし、農村を住みやすくしようとするなら、子供たち以上の実力をつけなければダメだとさとりました。「自分ももっと勉強しなければ」。そして覚悟をきめて一年で上旭を去ったのです。あれから四十数年の月日が流れました。子供たちにのこした壁書きの言葉「柏の巨木の如く、太く、たくましく、雄々しく、強く」は、今も私の心の中に上旭の生活と共に、忘れていません。

昭和五十三年　清水町上旭小学校閉校記念誌

街の中から電柱を追放できないのか

かねがね、街の中から電柱や電話柱を追放したら、もう少し、街が美しくなるのではないかというのが私の主張です。

それはいつか、自分のまちの市勢要覧にのった、中心街を紹介する「駅前通り」の写真を見ていて、特に望遠レンズを使って撮ったようでありますから、「通り」は何のことはない、電柱と、それにペタペタとはりつけられた広告看板のかさなりで、それはひどいもので、まちのたたずまい、建築の景観など味わうこともできません。特に、近年は、まちの立体化、高層化が進み、電柱上の変圧器が大きい容量のものとなり、いよいよ無粋さをましています。

私はこの写真を平然と市勢要覧にのせた編集者の無神経ぶりに驚くとともに、あらためて、まちづくりにとって、これら過去一世紀間にわたる、都市設備の近代化を表現する事物としての電柱、電話柱といった存在が、これからの都市にとって何であるかについて、気づかされたのであります。

考えてみると、このあたりで無電灯地帯の解消、あるいは農村電化といって、農村の各家庭にも電気が通じたのはまったく戦後のことでありますし、ラジオも有線放送で行われていたものが、やがてテレビ、電気洗濯機、冷蔵庫といったことから、灯火としての電化がくらしの変革としての電化にかわり、私どものような畑作酪農地帯では、牛乳冷却装置、ミルカーなどを中心に産業電化まで一挙に進むことになりました。し

かしそれでも街続きになった農村地帯で、つい十五年程前のことですが、零細兼業のせいか農村電化の重い分担金に堪えないといって、石油ランプ生活をしていた農家が五軒もあったことを思い出します。

こんなことですから、当然電柱、電話柱が、文化の表現として、我々の心の中に頑固に、抵抗なく生きつづけてきた訳であり、それが人口十五万人のまちの都心部まで、存在の主張を続けている訳です。そこにあることに疑問をもたない訳であります。

本来まちにとって「通り」とは、日本の古都はもちろんのこと、海彼の都市でも「街区」の思想をふくみ、生活実体としてのまちを意味している筈のものです。

ところが、都市計画という仕事をあずかる地方政府のお役人の手にかかると、市民とその生活にとっての「駅前通り」ではなくして、たちまちにして、たとえば「道（府県）道○○停車場線」といった表現になります。「通り」ではなくて、単に物理的な土木屋的発想の、線上の一本の道路として取扱われ、車輌交通を重点とした道路ということになります。

一日の車輌交通量がどうだとか、パーソントリップ＊がどうだとか、あるいは交通規制のための信号機の位置づけとか、右左折がどうだとかいったことが焦点として論ぜられ、電柱とか電話柱の存在などは、一切、問題の対象とされません。それはたかだか道路占用料徴収の対象であっても、まちづくりとか、都市計画上の問題ということにはならない訳であります。

そこにどうしても歯車のかみあわぬものを痛感するものです。まちづくりの総合性といった観点がぬけおちてお役人の縄張り意識が、まちづくりの末端までをしばりつけているような気がしてならないのです。

一九七〇年に、ようやくヨーロッパやアメリカなどのまちまちを、とにかく三十五日間勉強する機会がありました。驚きました。どこのまちにいっても、電柱や電話柱など、ただの一本も見あたらないのです。あるのは街路灯とか道路灯だけです。多少うるさく目につくのが、市内電車とかロータリー・バスの架線ぐら

いのものでありました。

私は帰ってから、人の顔さえ見れば「電柱をまちの中から叩き出そう。まちの素顔が見えるようになり、まちは必ず美しくなる。街路樹ものびのびと、そしていきいきとして美しくなる。まちの素顔が、電柱にかくされている限り、まちの景観を見る目が、いつまでたっても無神経ですごしていれる。電柱がなくなると、生活の場としての〝通り〟の機能も、必ずいきてくるようになる。」と主張してきました。

特に電力会社に対して、「独占と公共事業にあぐらをかいて、その手段はどうあろうと、単に電力という商品を供給すればよいのだ、売ればよいのだという考えかたには承服いたしかねる。まちのなかを電柱で埋めつくして、よくも平気でいれるものだ。だいたい、十勝沖地震の時にどうであったか忘れていない筈だ。現に変圧器があちこちで電柱から叩きおちて、市民生活の安全をおびやかしたではないか。ヨーロッパでは、どこのまちにいってもまちの中には電柱など、ただの一本もないぞ」と機会あるごとに、毒舌をはいて今日までしめあげてきましたが、まあ蛙の面に小便といったところです。私はしまいには、「日本の国辱だとあなたがたは思わないのか」といいました。いや私は、そう確信しているひとりであります。

なかには、革新を呼号する労働組合の幹部をやっている若者曰く、「ヨーロッパのまちに電柱がないのはあたり前だ。彼らは早くから植民地を多数もち、そこから搾りあげて富を築いてきたから、そこまでいったのだ。日本とは事情がまったく違う」などといって、電力会社に加担までする始末です。こいつらまでが、よくもこんな考えで平気でいれるものだ、と、いよいよ腹に据えかねるものを感じていました。

たまたまひょんなことで、一昨年ブルガリアをまるまる十五日間、数多くの都市を訪ねて歩くことができました。ブルガリアは、北海道を一まわり大きくしたぐらいの国で、人口密度は北海道と全く同じの平方キロメートル当り六十八人であります。しかも国の中央を東西にバルカン山脈が走り結構山岳部の多い国であります。

出かける前には、東欧圏でもルーマニアとブルガリアはもっとも遅れた国で、生活程度は低く旅行は大変だぞと驚かされていきました。いって見て驚きました。どこのまちを訪ねて見ても、まちに電柱がありません。途中の農村集落でさえもあまり見かけることがありません。

いちばん驚いたことは、どこの農村集落でも下水道が完備していることです。私はソ連で抑留生活をしていますので、モスクワを中心にした農村の実態は知っているつもりですが、このことにはまったく驚きました。ただし使用しているトイレット・ペーパーや、便坐など必ずしも立派なものとはいえませんが、農村にも下水道が普及している事実の前に、心から敬服いたしました。（都市の一般市民のアパートでは古いかたちのビデを見つけ出し、もうパリやローマでも見ることが出来ないものだけに、珍しいものに出会ったものだと感心しました。）そればかりではなく、国内のすみずみまで鉄道電化が終っていることでした。いったい今の北海道の鉄道電化の実状を考えれば、何という相違でしょうか。

そこで帰ってから、「ブルガリアのまちでさえ、まちに電柱は一本もないぞ、だからどこのまちも実に美しく見える。まちの緑が実に美しい」と又熱弁をふるいました。ドナウに面したルーセのまちなど、まちなかのホテルで、朝、目をさますのは山鳩の啼き声でした。どこのまちでも、まちのどこそこがそのままカメラの対象となります。ヨーロッパとアジアの文化の接点として、建築様式も画一的でなく、とにかくカメラの対象となる面白い材料が、あまりに沢山あることに驚きました。日本の若い絵を志す人々が、すぐフランスとかスペイン、イタリアといったところをねらって出かけますが、それ以上の絵になる風景が、この小さなブルガリアに沢山あることに驚きました。

しかもこのブルガリアという国は、トルコに四〇〇年間も支配され、国家として独立してまだ一〇〇年しかたっていない国です。第二次世界大戦後は、社会主義の国としてようやく近代化の道を踏み出したばかりの国です。したがって植民地があって、そこからの搾取と集積があって、都市景観から電柱や電話柱をなく

するまちづくりを進めたという論理は働く余地のない国であります。

こうしてみると、ヨーロッパでは、あらゆる国がまちは美しくあらねばならぬということが常識になっていて、そのためには、まちの景観を阻害する電柱があるということは、市民感情として許されぬという信念のようなものが根底にあるような気がいたします。

この場合の常識とは、日本語の語感からくる日常の知識という意味とは全くちがったもので、やはりコモン・センスということで、市民共有の感覚、市民共有の情緒といったもので、もう電柱や電話柱がつったっていることが膚にあわぬ、がまんがならぬ、といった強いものと思われることであります。

ブルガリアでは小さな街でも電柱がない

電力会社が、資本の論理でどう動こうとも、市民の生活感情として、その存在を到底許さぬという強いものが市民の側にあるから、こうしたことが当然として行われ実現できているのだと思うのです。

しかも、ヨーロッパの各都市を訪問してそうであったように、ブルガリアのように政治体制のまったくちがった、しかも小さな国の中でさえ、それぞれの都市の代表者が、自分のまちが他の都市にくらべていかに美しく、いかに暮らしやすいまちであるかを、頑固に主張することでありました。事実、

まちによっての個性のちがいは、たしかにまちの景観の中に、建築造型の上で膚で感ずることができました。それぞれのまちの造型意志といったものを感じとり、旅の楽しさを味わったものです。

こうした点からも、どうも私共日本人のまちについての考えかたがおかしいのではないか。電柱や電話柱が苦にならない市民の生活感情が、とにかくおかしいと思うのです。（トイレット・ペーパーであれだけ大騒ぎする市民のエネルギーからいって、どこか狂っているとしか思えません。）

電力資本の恣意を許しているということ以上に、都市計画にあずかるもの、市民運動を口にするもの、市民自身の考えかたに、欠落しているものがあるのではないかと、強く強く痛感するものであります。

特に、最近のように、我々のような地方都市でさえもまちの立体化、高層化が進んでくると、防火活動にも大きな支障を来すようになってきており、ある都市のホテル火災でハシゴ車の活動を妨げ、救出が遅れて、死傷者を多くしたという事例さえ出てきています。

美しい都市をつくるために、私にとっては国辱とも思える初歩的な電柱を追放する運動が、都市計画を論ずる人の側から、強く声が出てきてよいのではないでしょうか。

昨年は新中国を訪れて、帰ってから写真を現像して見て、中国のまちまちでさえ、電柱はあるが、それでも日本のように、都市景観を台なしにするような電柱のひどさでない意外さに驚きました。

さいわい電話柱の方は、ここ数年来、この帯広のまちでも目抜通りから、ようやく計画的に姿を消して地下埋設に変ってきてますが、電柱の方は依然として、われわれの常識（コモン・センス）の領域の中に入ってこないことに、非常に歯がゆいものを感ずるのです。

だいたい市民運動とか消費者運動というものも、電気料の値上げといったことには、おしゃもじ族以下、当の電力労働組合まで一緒になって、猛烈な反対運動をくりひろげますが、市民自らの生活環境浄化の中のまちの電柱については、まったくの無関心でいられることがどうしてもわかりません。

まちから電柱をなくすることが、電気料の値上げにでも通ずると思っているのでしょうか。私は海外の諸都市を調べてみて、電柱をまちの中からなくするために、電気料の値上げをやったなどという話は、ただの一度も聞くことはありませんでした。いやむしろ、日本の家庭用電気料が、他の諸外国に比べていかに高いかを思い知らされたぐらいです。産業用電力偏重の電気料金体系や、電気事業法そのものに、いろいろ疑問を感じたぐらいです。

パリのような、公共下水道をお手本にした集中溝といったことまで、地方都市で考える必要はないと思います。どこの国でも集中溝まで考えてやっている訳ではありません。それでも、まちからは完全に電柱は姿を消しています。

まちづくりの新しい動きの中で、せめて電柱をなくすることが片づかない限り、よい都市づくりは出来ないのではないでしょうか。

昭和五十三年　都市計画三月号　日本都市計画学会

活力ある大地に起つ
農業発展の道を

食糧の前に土の安全保障を

食糧の安全保障をいう前に、土の安全保障を重視するのが私の立ち場である。

健土健民を唱えた人がいたが、健土があって健食があり、健食があって健民があるという立場に私はたつものである。たしかに農業は産業として自立しなければならないが、他の産業とちがう原理を含む産業であることを強調するものである。それは本来、人々の生命を支える「食べもの」を生産する産業で、生命系産業であることを強調するものである。

今日の経済思想では、生命系のことを捨象して、他の産業社会の商品生産、商品としてのモノを取扱う手つきだけで、これを考えようとするところに基本的なあやまちをおかしてきていることである。だから土が見えてこないのである。

玉野井芳郎＊（経済学者・東大名誉教授）は次のように指摘する。

「土と水を母胎とする生態系と生命系に立脚してはじめて、農業あるいは第一次産業を正しくとらえかえす視座が出てくるのではないか。『第一次的』に『生きているもの』を扱う産業という意味で、第一次産業といえるのである。

これまでのアダム・スミス以降の経済学は、二、三の例外をのぞけば、（勿論マルクスも含めて）工業と市場の視座からしか農業をとらえていない。しかし工業的拡大の論理からは、本来のリサイクルの論理は出てこない。言葉をかえれば、工業の延長上に農業は決して出てこない。脱工業化といってもその中に農業は入らない。しかも重大なことは、農業と工業をどこで区別し、どう規定するかという視座がない。」

だから、シューマッハー＊は云っている。「われわれの時代における土地にたいする主要な危険は、同時にまた農業ばかりか文明全体に対する危険は、工業の原理を農業に適用しようとする都会人の決意から生ずる」と。私にいわせると、シューマッハーだけでない。無機栄養説を唱え、今日の近代農業の基礎を築いた化学者リービッヒでさえ次のように指摘する。「農民は、（掠奪農業の結果）もはや自分を養わなくなった土地を見棄て、新しい土地を求めて移動するように、国土の状態にしたがって、国民の文化も文明も移り変る。一つの民族は、国土の肥沃性に比例して興隆発展し、国土の消耗と共に確実に滅亡する」と。これが化学者リービッヒが、その著『農業及び生理学の化学の応用』（一八四〇）で既に指摘していることを忘れる訳にはいかない。

社会システムの基礎に生命系のシステムを

玉野井の言葉を続ける。

「生命系を念頭において自然を考えると、自然には二通りの自然があって、『生きた自然』と『そうでない自然』とがある。『生きた自然』に基礎をおかなければ、人間によって構成されているこの社会の存立は成り立たないのではないか。つまり、今までの経済学は、これを捨象して考えを進めていたために、先に述べたような欠落がおきてきた。言葉をかえれば、人間と人間との社会関係の基礎に、人間と自然との関係を

おく、つまり社会システムの基礎に生命系のシステムをおくということである。

生命系をなりたたせているものは、植物→動物→微生物（土壌）→植物という食物連鎖なのだが、それを媒介とする環境としての水と土という二つの要素が、もっとも重要な要素として浮び上ってくる。社会システムを考える場合にも、その基礎には『土』と『水』を考えねばならぬ。

私が『土地』をいう時は、その土の生物を含む、生きた自然としての表層土壌を強調する。これまでの経営学では、土地はいきなり『生産の要素』として、生きていない生産の材料と同じ手つきで処理されてきた。しかし土は、目的のための手段ではなく、それ自身が目的をもっている。土はその土粒のすき間に空気と水がいりこんで、無数の土壌微生物が棲む環境であり、有機的廃物を無機物に化する役目を持つものである。

また水は、土と共にある時は、出発点において有機的廃物によって汚れていても、自浄作用を持つものであり、表土や地表の廃熱を吸収する。資源物理学の槌田理論では、地球は水循環を利用してエントロピー＊を系外に捨てる開放定常系であると規定している」と。

粘土鉱物と腐植は水の惑星・地球の特産物

私はさらにここで補足して、吉田武彦＊（国立道農試副場長）の所説をつけ加えたい。「水と生物のないところでは土壌の生成はない。何故か、土壌の重要な二つの成分、『粘土鉱物』と『腐植』は、ともに水と生物の存在にかかわっている。単なる岩石の風化物ではない。だから月には土壌はない。粘土鉱物と腐植は、『水の惑星』地球の特産物である」と。このことの持つ意義は重いのである。

農業経済学者の矢島武（北大名誉教授）はすでに昭和四十九年の『北方農業』誌十月号に於て、「生態系・地力・農業経営」と主題して、次のように貴重な考えを述べている。

「われわれが地力という場合、同一投入に対し、土地によって産出に差異あることに着目し、産出の高い土地を然らざる土地に対し地力が高いと称する。しからばある土地が他の土地に比してなぜ地力が高いか。農学者は、『地力』をこれに機能する諸要素に分解し、これら諸要素の総合力としてとらえる。例えば土はドロと空気と水が一定の割合で存在する場合においてのみ生産力を持つ。

土地から作物をとるということは、この土地に内在する一定のバランスを崩す作用を持つ。作物によってそれぞれ特定の成分を収奪する性質があるからである。収奪された成分を補完しないことには、従来の地力は維持できない。わが国農業の多肥多収は、化学肥料に強く依存していることは、地力の補完が不完全にしか行われていないことに注意すべきである。ことに土壌有機質の欠乏が指摘される。この有機質は堆厩肥の給与にまたねばならない。

もともとわれわれの食べモノの主体をなす含水炭素は、水と炭素の化合物で、水は雨水によって供給され、炭素は空気中の炭酸ガスを光合成によって吸収したものに外ならない。これらは何れも地力を構成する要素ではない。したがって含水炭素をいくら生産したところで地力の低下をおこす筈がない。

問題は、含水炭素と共に、他の要素を圃場から奪い去ることである。だから茎幹類や籾、ぬかの類はつとめて圃場に戻す工夫が必要であり、このことが地力維持の基本といわねばならない。

一方、生産廃棄物や生産廃棄物を分解する細菌類も、こういった有機物がないことには十分に繁殖することができない。廃棄物はバクテリアによって分解され、その分解されたものが地力を構成する成分要素となり、さらにこれら要素が作物に摂取されて農産物となり、この農産物を人間や家畜が摂取することによって生命を維持するといった生態系が成立する。しかるに今日、こういった生態系が大きく破壊されてきていることに大きな問題がある。

かかる生態系の維持は特に北方農業において重大である。なんとなれば、北方では単位面積の受ける太陽

エネルギー量は南方にくらべて少なく、気温も冷涼であるため、土壌中の分解細菌の活動もそれだけ鈍い。したがって、いったん低下した地力の恢復も、南にくらべて緩慢といわねばならぬ。この欠点を補正するためにも堆厩肥の施用が一層重要であり、家畜の存在が前提となり、家畜の存在には草の生産が前提となる。

又北方農業では、奪われた地力を作付体系の中で自己補完しうるような体制が一層必要である。即ち北方農業では、合理的な輪作体系を基底としなければならぬ。前述の通り、われわれの主要なエネルギー源である含水炭素そのものは、地力の内容をなすものではない。しかし蛋白質を構成する窒素は、明らかに地力の構成因子である。これを補給するために無機の窒素質肥料を多投しているのが現状であるが、これは完全な地力補完の役目を果さず、かえって有害な副作用をもたらしている。空気の成分の大きな部分は窒素であり、荳科作物の根粒菌はこれを捕捉する。荳科作物が輪作体系の重要な一環をなしている理由である。土壌の物理的バランスの補完のために禾本料、荳科、根さい類が輪作体系の基本である。この補完捕捉が農業経営の内部循環として、無費用的に成立していることが重要なのである」と。ここまではおおむね、農業にかかわるものとして周知の通りである。以下次の発言が重要である。

草地の重要性を認識するなら規模拡大必然

「しかるに、伝統的な経済学の発想は、人間の経済活動の系があたかも無限の環境の中で、なんらの制約もなしに行われ得ると前提してきた。即ち従来の経済及び経済学の立場は、人間の経済システムが、自然、生態システムから自立し、全く独自の論理で構成できると思いこんできたのである。それは化石燃料である石炭、石油（地質学的時間の中での過去の太陽エネルギーの蓄積）を食いつぶし、効率化を追求する工業的原理にもとづき、生物的原理を無視し、人間的リズムと相容れざる面を露呈するに至ったのである。

ところで、かくの如く、農業経営がいわば自己完結的な生態系を前提としているとすれば、それ相当の規模を持つものでなければならない。このことを輪作体系の確立という側面からとらえても結論は同じである。零細過小な農地を前提として輪作体系を導入することを企図することは、技術的にも極めて困難である。事実、輪作は相当規模以上の農業者においてしか実施されていない。また北方農業における、生態系維持に対する草地の重要性を認識するならば、経営規模の拡大は必然的要請といわねばならぬ。しかも北海道では、さいわいに農業的土地利用を拡大しうる余地は大きく残されていることである。

経営面積規模の大型化という量的変化は当然、経営の質的変化を予想している。科学的農業の創始者であり、また農業経営学の創始者といわれるアルブレヒト・テーア＊の考えかたには二つの柱がある。一は『農業重学』といわれるもの、他は経営目的を『最高の持続的純収益の実現』にあるとしたことである。彼は最高の持続的純収益をあげるための基礎的前提として『農業重学』を設定したことである。『農業重学』とは要するに『地力均衡の理論』ということができる。

経営の内部循環を主軸に地力の維持増進を

ところで純収益は、粗収益から経営費を差引いたものに外ならない。純収益の最大をめざすには、粗収益を大きくし、経営費の増加を抑えねばならない。（最小の費用で最大の利益）ところで粗収益は単収に単価を乗じたものだが、農産物の単価は、経営にとって与えられた条件（一物一価の法則）であるから、経営にとって粗収益の増大は単収の増加による以外に道はない。しかもそこに経営費を増加させないという条件（コストを徹底して下げる）があるとすれば、経営の内部循環を主軸とした地力の維持増進が当然の帰結となるのである。

こうみてくると、テーアの提示した二本の柱、即ち純収益説と地力均衡とは論理的に不可分の関係にある。純収益説を肯定する限り、地力均衡説を肯定しない訳にはいかない。そして純収益説を肯定することは『農業経営』を『企業』とみることに外ならない。そこでもし、北海道の農業経営が企業性の高いものであり、かつそうでなければならぬとすれば、地力均衡が最大の課題とならざるを得ない」と断じていることである。

このように、二人の碩学は期せずして農業における土地（生命系・生態系における土壌）の役割を、強く深く重んじられていることに、私は共感し同意するものである。

ところで私はすでに再三にわたって次のような記事を書いて、告発の手をゆるめていない。

「もう何年も前のこと、芽室の国立農試の西潟畑作部長が、農民を前に、『もう地力還元の必要はなくなった。堆肥も緑肥も不要である。農業機械、化学肥料と農薬、除草剤だけで農業のできる時代になった』とオポチュニストな講演をして歩き、あろうことか出世して国立道農試の場長に栄転していった。世の中に恐ろしいのは、この愚劣な専門バカばかりが多すぎることである。もっともっと総合バカがふえて貰わねば困る」と。これはこの場長の農業講話を聞いて、卒直な憤りであり、私がかつての先輩たち、試験機関リーダーたちの慎重な発言と指導の態度を知りすぎているからである。試験研究としての無肥料、連作、無堆肥試験はアメリカでも、イギリスでも一〇〇年以上にわたって行われている。私は化学肥料、農薬、除草剤のみによる試験研究は徹底して行うべきであり、しかもそれが長期にわたることがのぞましいと思う。化学と技術の前進のための研究なればこそ必要である。しかし短期の結果を直ちに過信して、しかもいやしくも場長たるものがナンたることかというのが、当時の私の単純素朴な憤りであった。

ところがである。これは一試験場長の思いつき発言ではなく、非常に巾広い組織的発言であったことを最近になって知り驚いているのである。しかも地力維持的試験研究について、学界的にも、組織的にも圧力が加わり、予算の配分、試験研究の実施にまで、その手が伸びた一時期があったことを知り驚いたのである。

（これはおよそ学究のとるべき道ではなく、そこに謀略的癒着があったのではないかとの疑念さえわいてくるのである）。

私はあるレポートをまとめるため、たまたま手にした農文協刊行の『土づくり講座』全五冊の中の、『土づくりの原理』（昭和五十一年刊）に、金野隆光＊が「地力否定説」の登場として、北海道の畑作農業の例をあげて紹介しているのにぶつかり驚いたのである。

「戦後第二期は、工業部門を中心とした高度成長を反映して、農業でも労働生産性向上が技術目標とされた。労働生産性向上という面から、堆きゅう肥に依存しない農業の方向が、次第に強く打ち出されていった。それと軌を一にして、堆きゅう肥無用論などの『地力否定説』が登場し、地力増強技術の後退に拍車をかけることとなった。

北海道の畑作農業を例にとって、地力否定説が登場する経過を見てみる。北海道の畑作農業が目標としたものは、開拓以来、畑作と酪農とを結合させた有畜農業であった。穀物（ムギ類、マメ類など）と飼料作物と特用作物（テンサイ、亜麻など）とを組みあわせた合理的輪作を組み、緑肥と堆きゅう肥の施用が重要であるという考えかたである。北海道畑作は開拓以来、戦後第一期においても地力重視説を基礎とし、輪栽式農法の確立を目標としていたのである。

ところが、戦後第二期にはいると、地力否定説が登場する。農薬が進歩し、防除技術が発展したのだから、輪作にしばられることなく、収益の高い作物の作付を増やすことができる。連作も可能である。また化学肥料が進歩し、施肥技術が高度になったのだから、堆きゅう肥のように労力のかかるものに依存する農業でなく、化学肥料だけで高生産をあげる農業を目指すべきだ。緑肥の効果も化学肥料でおきかえられるという考え方である。

要するに、輪作による拘束や、緑肥、堆きゅう肥による地力維持を否定する考えで、地力否定説という。

この地力否定説を基礎として、輪作をしなくても、堆きゅう肥がなくても、あるいは有畜農業でなくても、畑作農業は発展できるのだとされ、さらに、行政的にも農業の近代化がおしすすめられ、北海道の畑作は、畑作専業と酪農専業の二つの方向に分化していったのである。専業化したほうが生産性が向上するし、近代化農業が実現するとされた。大型トラクターの導入、規模の拡大、主要作物の転換、多肥多農薬栽培など著しい変化が起きたのである。

北海道の畑作農業は、『輪栽式農法』から『超輪栽式農法』＊へ移行しつつあるとされた。超輪栽式農法というのは、商業的農業の発展、専業化の進展に対応して、輪栽式が発展したものとされた。超輪栽式農法の特長は、作付けが特定作物へ集中すること、連作技術の発展、地力維持の中心が化学肥料と土地改良に移ること、トラクターによる一貫作業体系が確立することなどである。

要するに、戦後第二期の北海道畑作農業は、『地力否定説』を基礎として『超輪栽式農法』を目指したのであった。輪栽式農法が輪作と堆きゅう肥による地力維持を重視して有畜農業を目指したのに対し、超輪栽式農法は、地力維持が工場で生産される農薬や化学肥料におきかえられると考え、畑作専業、酪農専業を目指したのである。しかし、最近になって、畑作専業でも酪農専業でも、それぞれ問題が生じてきた。畑作専業では、施肥量や農薬散布量が増え続けているのにもかかわらず、収量が頭打ちであり、また病虫害の発生も多くなってきている。さらに、農薬公害が社会問題となっており、ふたたび地力維持、土づくりが重要視されるようになった」というのである。以上が地力否定説あるいは超輪栽式農法論が、農業基本法のいう選択的拡大展開の道として、怪獣の出現の如く暴力的に、ある意志を以て推進されたことを物語っているのである。

金野は結論として「栽培技術の進歩による収量の増加は、適切な地力維持対策をともなわない限りは、地力の収奪をより激しくするものである。化学肥料が登場した現在でも、堆きゅう肥施用はいぜんとして重要

な役割をになっている。日本の地力増強技術は、戦後いちじるしく発展したが、最近になって急激に後退した。科学的で合理的な地力維持方式の確立は、個々の農民や技術者の努力だけで達成されるものではない。国家の科学的な施策があって、はじめて達成されるものである」と結んでいる。

さて、以上が北海道畑作農業における地力否定説の登場とその後の経過であるが、地力否定説は決して克服されてはいない。この怪物はいついかなる場所でも頭をもたげてくるだろう。指導機関の側がどうあろうとも、収奪農業の道は容易であり、もっとも安易な道である。市場経済の原理がそれを許すのである。かつてもそうであり、今もそうである。狭義の経済学とその市場原理からは、生命系・生態系のことは見えてこないのである。

「資源多消費型」の社会の持続は許されない

私たちは、私たちの子孫の未来を食いつぶす、資源多消費型の社会を持続し、拡大する道は許されないと思うのである。両碩学の指摘するところに、謙虚に心をかたむけ、持続性の許される農業発展の方向を探り、実践し展開していきたいものである。

『農事組合だより』　北海道農業自立推進協議会

〈宮沢賢治〉との出会い

―光太郎から学んだ巨像―

岩手県の花巻にある高村光太郎記念館に、宮沢賢治の弟、清六氏と一緒に出かけたことがあります。疎開中の山小屋をのぞいて驚きました。

厠の戸に「光」の字が、透かし彫りされているのです。厠を使いながら、しゃがんで、丁度、目の高さに、その位置があるのです。私は、その字の透き間から、中をのぞきこんで光太郎らしいフモールを感じ、心から感動しました。

宮沢賢治の存在を私に教えてくれたのは、光太郎なのです。昭和十三年、『婦人之友』という雑誌三月号の、「新日本娘読本」という特集頁に、「宮沢賢治の詩」という、光太郎の一文がありました。北海道にいて、賢治を知ったきっかけであります。

「永訣の朝」と「松の針」の二篇の詩について光太郎はこういっています。「賢治という人は、足を棒にして、郷土の土に終始した実際家である。彼は、厖大な夢をもち、真の意味における科学者の魂の所有者であり、宇宙自然の機微に参入し、殆ど無我の大にまで到達した、一個の全球体をなす人間であった。（数多くの作品については）その真価の発揚はすべて未来に属する。」きっぱり、いいきっているのです。まさに、今日の宮沢賢治の位置づけを、いいあてているのです。

それから光太郎を訪ねました。団子坂を上って、森鴎外の観潮楼のあったあたりを右に折れて、二丁ばかり歩くと、光太郎のアトリエです。玄関にぶらさがっている紐をひくと、内側の鈴がなって、脇の小さな覗窓が開き、ぬっと光太郎の顔が現れます。大きな声で来意をつげると、待っていたかのように、ドアをあけてくれました。

賢治のことが話題の中心で、何か自分の中にたまっていたものを吐き出すように、お話したような気がします。その後、再三お訪ねしても、賢治以外の話をしなかったことが、今になって、光太郎の世界の大きさ、広さを考えると、なんとも不思議な感にうたれます。それだけに、自分の稚なかったことが反省させられます。

宮沢賢治

その頃、盛岡には菊池暁輝＊氏が主宰して、賢治研究会があり、既に機関誌『イーハトーヴォ』が出されており、私も早速、会員にさせて頂きました。既に江別の小田邦雄氏が、熱心な研究者であることが誌上で判りました。札幌に立寄った時、小田氏をお訪ねし知遇を得たのもその縁です。

昭和五十二年、雑誌『ユリイカ』の「宮沢賢治特集号」を、本屋で手にし、パッとめくったら、特別資料「賢治友の会研究座談会―昭和十五年五月二十三日記録―」が目につきました。冒頭に自己紹介とあって、「私は神田の木呂子敏彦です」という文字が、いきなり出ているのです。一瞬立ちすくむ思いにかられました。

「私が宮沢賢治に対し非常に興味をもち、学びたいと思うのは、今の日本が文化史の立場からいって、世界的方向を辿らねばならぬ重大な時期だと思うからです。そうした意味で賢治のもってい

る芸術的作品、それから思想の内容というものは、世界史的な日本のために、最もふさわしい条件を充分に備えているお方だと思うのであります」と。

そのころ、私はある小さい雑誌の編集の仕事をしていましたが、二十五歳の若さのせいとはいえ、ずい分口はばったいことを申したものです。読みながら、思わず顔が赤くなりました。会場は代々木の日本青年館の一室です。その頃、賢治の親友で、花巻女学校の教師をしていた藤原嘉藤治＊氏が上京し、日本青年館に籍をおいておりました。第一回の研究会を開くということでお誘いを受けたのです。

中島健蔵＊、谷川徹三＊、増谷文雄＊といった錚々たるメンバーの集いで、集まったのは十四、五名だったでしょうか。速記がとられていてその当時の発言が、四十年の月日を隔てて、活字としてめぐりあうとは、夢にも思いませんでした。

賢治の故郷花巻に、ようやく賢治記念館がたつことになり、今年から工事が進められています。かつて、信州穂高の荻原守衛のための碌山記念館がそうであったように、賢治を親愛する多くの人々に支えられて完成されることが関係者の念願です。九月二十一日は賢治の命日です。道内からも記念館建設に対する多少のお手伝いが出来ればと思うものであります。

昭和五十四年九月二十日　北海道新聞

高村光太郎の元アトリエ前にて、木呂子

「近代主義の精算」を指摘

―保田与重郎の創作時代について―

著者の神谷忠孝は、昭和四十一年、帯広『市民文芸』に「亀井勝一郎＊論」を書いて市民文芸賞を受けている。私はこの時はじめて神谷忠孝を知った。

「亀井勝一郎論」を一読して、それがかつての日本浪漫派で亀井の同志である保田与重郎＊との位相との相違を、的確にしかも鋭く批評していることに、強く興味をひかれ、かつ驚いたのである。

私は戦前早くに、保田の『日本の橋』を手にし注目、爾来神谷のいうように毒を十分に受けているので、保田与重郎に深い関心を持つ若い世代が身近なところに出現したことに驚き、非常に嬉しさを覚えたのである。

神谷はこの地に生れ、帯広三条高校を経て、北大文学部国文科を卒業。大学院に進み、その間帯広大谷短大専任講師をしていて当時、地元の『市民文芸』誌に文学評論を発表している。その後中央大学助教授を経て、現在北大文学部助教授をしている。

私が亀井のものに注目するようになったのは戦後であって、その著『島崎藤村』からである。戦前は若い女性にファンの多いことは聞いていたが、手にすることはなかった。

神谷が「亀井勝一郎論」を発表した頃、亀井はライフワークといってよい『日本人の精神史』という大河評論を何部かにわけて書き出していた。これに対し保田は、芸術新潮に『日本の美術史』を書き出した。こ

れはまったく別個の評論のように見えるが、読むものにとっては、亀井の論ずるところを、保田が実は何気なく片っ端から潰していってるようにしか思えないものである。そういう読みかたをしていた時だけに、神谷の亀井に対する強い批評態度に、私なりの理解するところがあった。

神谷は、『保田与重郎論』との取組みについてこういっている。

「橋川文三＊の『日本浪漫派批判序説』を最初に読んだ時の感動を私は憶えている。それまで読まされていた進歩主義的近代文学史の無味な内容に嫌気がさし、いっそのこと文学などとは縁をきるにしかずと思いはじめていた私にとって、橋川の緒論は、日本の近代が内包するカオスへのダイナミックな挑戦と映じた。……学部の卒業論文に横光利一＊をとりあげていた私は、戦後の否定的横光論をいやというほど読まされ、戦時下の文学状況を自分でたしかめねば、横光利一の持つ意味を解明できないと思いはじめていた。その時日本浪漫派が大きくクローズアップしてきたのは当然であろう。……中略……

ここ十年来の日本浪漫派をめぐる動向は再検討から再評価という様相を呈している。その中心はもっぱら保田与重郎である。……誤解をおそれずにいえば、日本の近代が保田与重郎という存在をもったことはさいわいであった。それは芸術的豊饒をもたらしたばかりでなく、ことばの真の意味における日本の近代化が実現されていないどころか、前途なお多難であることを明確にした」

保田与重郎

神谷は、本書の序となっている「まず、したたかに毒を」（昭和四十三年論文）に右のようにしるし、「日本浪漫派のはたした役割、その実態がどんなものであるかということになると、それはまだ解明されていないという方が正しい」と指摘するのである。

『保田与重郎論』には、今まで雑誌に既発表の論文のほかに書きおろし論文として「保田与重郎の小説」「初期の評論」「昭和十年代の転換」の三篇がある。保田については、著書で接する機会しかなかった私にとり、初期のもの、殊に創作の数篇があることを知り、まことに楽しいものがあった。

保田がその著『エルテルはなぜ死んだか』の中で、「ゲーテが、即ち若いゲーテが、一つの試煉として読者に与へたものは、『エルテル』の中でエルテルは死んだが、類似の経験をもったゲーテは死ななかったという絶対的な事実である。かういう云い方なり態度に、近代の価値といふものの様相を見るのも一つの方法である。ゲーテはエルテルに発狂の恐怖状態を与へずに殺してゐる。これは現実から云って不合理であろう。即ち、その死に生理的原因はないと云へるからである」といっているのを引用し、神谷は「ここで保田与重郎がゲーテの作品に読みとっていることは、そのまま、保田与重郎と小説との関係にあてはまるというのが私の考えである。……『今からいえば、ゲーテはもっとも残忍な新ヨーロッパの虐殺ををここに敢行した』『若いゲーテには意識過剰を虐殺する必要があった』といういい方もされているが、これらのことを含めて、保田与重郎における創作時代は、うちなる意識過剰、近代主義の精算であったということができるのである」という指摘はまことに見事であり、神谷の発見に感謝するものである。神谷のいうように、青春の「邂逅は、それ自体運命を決定する」ものと思う。

昭和五十四年十一月十五日　『読書北海道』

神谷忠孝著『保田与重郎論』

1980年代

ブルガリア始末記
鳥の眼・ミミズの目から
私の土地利用「開眼」(1・2)
口は目ほどにモノをいい〜私の観光論
石勝線への提言
森林の中に農場あり・東ドイツ農業と矢島理論
小規模な農協をめざして〜北海道中札内村
弱肉強食の論理から棲み分けの論理へ〜地域主義の変貌
農民なくして食べものなし〜アメリカ農業視察報告
水資源と私達の生活
アメリカ農業の沿革を考える
宮沢賢治の卒業研究
知事公館の椅子
女性は生産の根元
柳田国男・北海道の旅を(上・中・下)
カール・ベック邸について
森が土を作り水を作る
もう一つの連絡橋
仮説「北海道芸術工科大学」学長の誕生

ブルガリア始末記

（上）

帯広のアドニス少年少女合唱団が、ブルガリアのルーセ市で開催の国際音楽祭に参加、招待が決まり、私に市民代表の立場でぜひ同行してほしいという話がもちこまれたのが、出発まであと二週間しか余裕がないという随分無茶なことであった。それもルーセ側からの帯広市長あて書信に、そういった人物をつけてよこせという強い要請があったが、誰も引受け手がないから何とか頼むというのである。散々いろんな人にあたったが、いわばお前は、トランプのババ抜き遊びのババ役を引受けてくれということである。これにはオマケがついていて、それではと同行することに腹ぎめをしてから「俺が断ったのでお前に番がまわったのだぞ、有難く思え」とわざわざご挨拶された青年会議所の議員がいたことだ。これには恐れいって二の句がつげなかった。帯広の若者の中には、物のいい方も、礼儀も知らないものがいるものだと痛感した。

日通航空の久保所長に訊くと、もう子供たちのパスポートは全部揃っているが、お前のパスポートは手に入るかどうかわからないぞ、ということである。観光旅行でないから、ブルガリア大使館の査証を予めとらねばならぬから心配だという話。しかも旅費はすべて手弁当で出かけてほしいとのことである。たまたま、私の場合、帯広とルーセの姉妹都市ばなしには、市に在職中、ブルガリア大使館に二度ばかり顔を出してお

り、かの国の資料については多少とも集め勉強してきた経過もある。しかも駐ブルガリアの日本大使は、美唄出身の岡田春夫代議士の実弟晃氏である。実は私の祖父の鉞弥は、先代の岡田春夫（今のは二代目）代議士の選挙参謀みたいな立場にあって、明治四十三年、一族の十勝移住に加わらず、昭和のはじめまで美唄の我路に居住、祖父からよく聞かされていて親しい間柄である。

昭和50年ソフィアのブルガリアンホールでのアドニス少年少女合唱団

二月頃、東京から友人たちがきて札幌で落ちあい、今年は東欧を含めてヨーロッパの農業視察をやるからそのコーデネーターを引受けてくれという話が出ていて、特に東欧はまだ見ていないので気はひかれるが、少しは準備をさせろといって、その話合いが続いている最中であったことだ。このための予備調査ということも考えられる。

こうしたことから、異邦の地に、今帯広の子供たちが出かけていくのに、この私のような者がついていってやることも多少の役にはたつかもしれないと、弟や家内とも相談して出かけることに決心した。話をもちこんできたのは、道議の熊谷さんと、指揮者の岩井先生、父兄代表の山口先生である。

だいたいアドニス合唱団といわれても、私にとっては何ものかもわからない。帰国して子供たちの会合に出かけるようになってから、岩井先生が中心になって、はじめ「サイロの会」合唱部といったかたちで発足し、現在のアドニスに発展してきたことなどをやっと承知したような始末で、その合唱

の素晴しさも、ベオグラードの空港ロビーでリハーサルするのを、しんみり聞いたのが初めてというお粗末さなのである。もともとアドニスのブルガリア招待の実現は、帯広市とルーセ市との姉妹都市交流についての公文書の往復から生れてきた話なのだが、私が出発するまで、遂に市の理事者からは一言の挨拶もなかったので、市民代表と称してついていくにはいささか心苦しかったが、山口先生から托されたルーセ市長あての手紙には、私の名前が明記してあるという話なので、まあそれだけが手がかりみたいなものであった。

パスポートは自分で道庁に出かけていって秘書課長の植村さんに会い、何とか間にあうよう手配をしてもらった。岡田春夫さんに電話をかけてみたところ、弟の大使は四月の異動内命で既に帰国しているということなので（このことは後に触れる）、外務省に出かけて岡田大使から山崎臨時大使あての書状を書いてもらうことができた。池田の丸谷町長からは、ブルガリア貿易公団のゲオルギ・ムラデノフさんあての紹介状を書いてもらった。また池田の町では、ワイン・ツアーでブルガリアを訪問している人が既に六十人以上もおり、ワイン研究所の伊東所長はかの国のワイン工場で、一年間の研修生活をしてきた体験の持主であることをはじめて知った。伊東さんは早速我々のために一週間もかかって、ブルガリア語の会話集の原稿を書いてくれた。その他、現地事情のわからない我々のために、気候風土とか、食物、水といった当面心得ておくべきことなどを教示ねがったので、突然出かけていくものにとっては、まことに有難いことであった。

なお、東京ではブルガリアとの貿易商社東京丸一商事の紹介で、虎の門にあるブルガリア観光センターのマリヤ・アルソバ女史に会うことができた。アルソバさんはマケドニア人で、「私たちはアレキサンダー大王の子孫である。現在のギリシャ人と称する人たちの多くはトルコとの混血で、マケドニア人こそヘレーネ文化を開花させたギリシャだ」という。ブルガリアとの交流に就て話合いをした。

（中）

ＮＨＫ前会長・前田義徳氏（旭川市出身）の夫人はブルガリアのプロブディフ出身、すなわちトラキヤの出だという。昔古典ギリシャ時代、現在のブルガリア地域はトラキヤとマケドニアであった。ギリシャ神話に出てくるセイレネスという、顔は女性で身体は馬の姿をしたものが、黒海に浮ぶ岩礁の上に棲み、その声を聞くと恍惚感にうたれオールを漕ぐのを忘れて海に溺れたという。ユリシーズは耳に臘をつめてその声を聞かぬようにして事なきを得たが、トラキヤ陣のオルフューズは竪琴の名手で、その微妙の奏楽の音に、魔神セイレネスの方が逆にうっとり聞きほれて自らの声を失い、オルフューズは何事もなく海を渡ったというのである。そのためブルガリア人は今に至るまで音楽の国、歌唱の国なのだという話を聞かされて、ギリシャといえばアテネとスパルタしか知らない私にとって、この話だけでブルガリアに出かけていくことがすっかり楽しくなった。

ものの本には、ブルガリアという国は、東欧共産圏の中でもソ連に対しもっとも忠実な国で、最大の優等生といわれている国だと書いてある。こちらは戦後ソ連に抑留され、ご丁寧にもソ満鮮の国境近いポシエットから約一ヵ月貨物列車の二段積にのせられ、はるばるウラル山脈を越え、ドン川源流のタンボフと、翌年はボルガ上流のカザンと足掛け三年暮してきた体験があるので、エライ窮屈な国に出かけていくものよと思っていたのが、だんだん話を聞いているうちに、自由主義国よりも自由な国、結論をいうと人々が根っから親切で明るい国民性で、旅行者にとって安心して旅のできる国だということが分ってきた。過去の経験ではアメリカは世界でもっとも治安の悪い国で、夜などは自由に外出できない国であること、日本に帰る最後の日になって、ハワイのアラモアナ・ホテルでは爆弾騒ぎがあって、私はパールハーバーに慰霊のため出かけていて無事だったが、他の仲間はパンツ一つで風呂から飛び出し、避難したというオマケまでついた国であ

る。

旅では何といってもこうしたトラブルが最大の心配である。何しろ五十一人という多数の子供たちと同行するということなので、できるだけの情報を集め、万が一のために、あちこちわたりをつけて万全を期してあげたいというのが、僅かの日数しかなかったが、私の心配りであった。現にブルガリアに渡ってからのいちばん早いアドニスに就ての情報は、貿易公団が東京にうってくれたテレックスが池田町に連絡されて、新聞に報道されたのである。岡田大使からはテレックスの利用法を教示されてでかけたのだが、英文タイプの打ち方から知っていなければならないので、心にかけてはいたが、それさえできなかったのが実情である。

とにかくこうして、三月二十五日にブルガリアの首都ソフィアに着き、四月八日ソフィアを離れるまでの十五日間、ソフィア国立放送少年少女合唱団の指揮者ネデイヤリコフ氏の親身も及ばぬ手配りと、ルーセ市を代表して全日程を付添ってくれた責任者のステファン氏、同じく通訳のジョセフ氏の心細やかな世話と、勿論、土谷団長以下子供たちの元気な行動力によって、私の心配は全くの杞憂に終り、トラブルなしにすごすことができたことは幸いなことであった。しかも合唱団の五回に及ぶ公演は何れも大変な成功であって、第一回の三月二十九日のソフィア公演には、ブルガリア作曲家同盟の元老たちが来聴し、わざわざ楽屋まで賞讃と激励の言葉を述べに来てくれたことである。日本大使館の山崎臨時大使以下館員その家族の方々も来聴され、子供たちのためにわざわざ手作りのお握り、卵焼き、お茶の差入れがあったことは、感謝の一語につきる次第であった。また東京丸一商事の駐在員元成さんが、ブルガリア貿易公団のムラデノフ氏を案内して

ルーセ市ドナウ川河畔にて

みえられた。元成氏は学生時代、合唱団のメンバーだった由で、アドニスのすばらしさを激賞して下さった。ルーセでの国際音楽祭での公演は、テレビで全国中継放送が行われ、新聞の論評も非常に高く評価されて報道されたようである。トルノボでも、ルーセでも、音楽好きのブルガリア人は、熱狂すると立ち上がって大きな拍手で反応するので、公演中にそういうことに慣れていない日本の子供たちが、あがってしまい立往生しないようにとの注意が特にあった。ルーセ公演の最終日は日曜日であったが、会場に溢れるばかりの聴衆が合唱のリズムにのって手を打って拍子をとり出し、舞台と聴衆は完全に一体となってしまい、その感動はこれこそホントウの音楽というものだ。音楽には国家とか民族とか、言語とかの相違を超えていくものがある。私は深く深く感じいった次第である。

さらに私はこのルーセで驚くべきことを発見したのである。ホテル・スプレンデイットという、新築間もないホテルが私たちの宿舎であったが、部屋にラジオがあるのでスイッチをいれると、民謡が流れている。聞くともなしに聞いていると、どうも聞き覚えのある音楽だ。どう考えても北海道の江差で、戦前行われていた盆踊唄のメロディである。俗に『子たたき唄』といわれているが、そのリフレーンのやりかたから囃（はやし）のいれかたまでそっくりなのだ。

（下）

これはどういうことだろうと私の好奇心と感動をさそった。このためルーセ滞在中、とにかく民謡といえばホテルといわずレストランといわず絶えず注意し、テープレコーダーとカメラを一緒にもって歩くことにした。そして遂にラジオから採録できたのが『ブルガリアの江差追分』である。笛は尺八に似た竪笛で、カバールといいその吹き方までよく似ている。歌も声のひきのばしかた、小節のきかせかたまで追分とぴった

りである。こうした民謡は、今までのヨーロッパ体験では全く考えられない異質のものである。まさにこれはアジアのものである。さりとてソ連にも朝鮮にも中国にもないものである。ヨーロッパの極東と、アジアの極東北海道とが、民謡に於てピッタリと呼吸があっていることを発見したのである。このため帰国してからいろいろ調べてみたが、分らない。書いたものではダメで、音で聞いて調べていくより道がない。遂に東京の音楽家の園部三郎＊先生の存在を知り電話をかけ、私の採録したテープを電話で聞いてもらった。先生曰く、「そういう追分節や子たたき唄に似た唄なら、ブルガリアだけで一〇〇以上もある。」という。「お前がそんなに熱心なら、さいわい六月十四日に羽田を発ち、ブルガリア文化相の招待で七月まで滞在する、テープを送ってよこしなさい。」という訳で、私は早速採録してきたかの地の追分と、北海道の追分をテープにして園部先生に送り届けた。これが機縁になって両国の民謡、そして民族音楽の交流が行われることを心から楽しみにしている。この話は民謡連盟の萩原会長にももちこみ、機会が熟してくれば、民謡交流をぜひ実現させようと二人で意気ごんでいる。またソフィア音楽学校＊のライチェフ教授（ルーセ国際音楽祭の実行委員長）とは、日本民謡のレコードと曲譜を寄贈する約束をしてきたので、目下日本の民謡全集にブルガリア語の五十音表でルビをつける作業をはじめている。根気のいる仕事であるが、将来の民謡交流の手がかりになると思って進めている。

ソフィアの日本大使館に挨拶に出かけ、山崎臨時大使から、ブルガリアの国情に就て種々話を伺うことができた。日本とブルガリアの貿易は年々伸びていて、既に総額一億ドルになったが、ブルガリア側が五〇〇〇万ドル以上の入超で、日本が輸入する商品が少ないので困っている。昨年、中曽根通産相（当時）がこられて、ソフィアに日本のホテル・ニューオータニを建設する話がもち上がり、黒川紀章氏の設計で敷地も決まり、黒川氏がこのため数度にわたって出かけてきているという話で、これは初耳だった。アムステルダムには既にホテル・オークラが完成していたが、日本のホテル業界が世界に進出していることは楽しみなこと

だ。

ブルガリアは農産物の輸出国だけに、植物防疫に非常に神経質であるが、岡田大使の在任中に交渉がまとまり、日本の桜の苗木を百本、ソフィアの公園に植えることができた。贈呈式はまだで、公表はしていないという。私はこの後、市当局の案内で、約三〇〇〇ヘクタールの都市林と公園の数々を視察することができたが、たまたま西公園（二〇〇ヘクタール）で、管理人が私が日本人であることを知って、岡田大使が植えた桜だといってわざわざその場所に連れていってくれ、カメラにおさめることができた。

大使の話では、東欧共産圏で最も親日的なのがブルガリアだそうで、七十年の大阪万博にはブルガリア館を出し、大統領以下閣僚が十八人も交互に来日されたという。本年一月にはボネフ国会議長が来日、この六月二日にはムラデノフ外相が来日して、宮沢外相との間に日本ブルガリアの文化協定が締結される話しあいがまとまった。これからは政府機関による文化、芸術の交流ができるようになった訳である。秋には外国貿易相が来日するそうであるが、これで岡田大使が無任所のかたちでいて多忙な意味が理解されたのである。

今回のブルガリア訪問は私にとって突然のことであったが、はからずも東欧圏を視察する機会が与えられたことを感謝しており、その機会を与えてくれたのはアドニス合唱団のおかげである。アドニスの招待訪問に就ては、指揮者の岩井先生の今日までの努力、訪問旅行実現のために多くの苦労と負担を意とせず協力をされてきた団員の父兄の方々、これを援助するために努力された関係者の各位に心から敬意する次第である。

昭和五十五年六月二十一日・二十二日・二十四日　十勝日報

鳥の眼・ミミズの目から

―日本の土地利用を考える―

土地利用は、……土地を経済的生産に利用する場合にかぎられ、しかもその経済的生産は、農、牧、林、漁業に限定される。

土地利用そのものが、一つの生物経済学的な、循環過程の一環を、形成するものにほかならない。

土地利用は、人間と土地とでつくる、系の形成のしかたである。

梅棹忠夫／吉良竜夫編『生態学入門』

私はあくまで国土資源としての土地利用の万全の上にたち、豊かな自然と農村と国民生活の安定感としての農業のことを考えているものです。またこの頃の農政の混迷ぶりといい、食糧政策の論議といい、国民生活の土台である農業的土地利用を軽視し愚弄してかかった論議や、またそうした政策の横行に対し、まことに腹だたしい思いをしているひとりであります。そこではつねに短期的な問題の解決に終始し、長期的な展望にたった、農業的土地利用を土台にしての論議が出されることがないのです。

空飛ぶ鳥がいない

昭和五十一年の秋のことです。戦前の中国体験をまったくもたない私でありましたが、多くの中国体験者から、長いあいだいろいろ聞かされた情報だけは頭の中につまっています。その頭をかかえて、北海道農民友好訪中団のひとりとして初めて中国を訪問いたしました。

実際に見聞したのは、省でいえば、江蘇、山東、河北、遼寧、山西の五省にすぎませんが、素晴しい農業努力のあと、農村生活の安定と向上ぶりに驚き、感銘しました。中国の農業は、建国三十年のあいだに驚くべき発展をし、私には、遅れている農業どころかむしろ学ぶべきところが非常に多かったと思います。

しかし、何としても最後まで心にひっかかったのは、森林植生の見るべきものが皆無であるという実態です。その農業を成立させ、支持している国土と自然に対する総合的配慮において、いかに五〇〇〇年の文明を支えてきた風土とはいえ、「問題があるぞ」という思いがつのるばかりでした。

雀と蝿がいないという報告は、いやというほど聞かされていたので別に驚きませんでしたが、事実は農村に入れば、雀も蝿も沢山うるさいぐらいいました。むしろ、犬も猫もついぞ見かけないばかりか、空飛ぶ鳥も見かけないのです。「からす」もいない。あれほど聞かされていた「かささぎ」の姿も見えない。私は、考えてみて、「からす」や「かささぎ」が巣をつくるような樹林、あるいは樹木がないからだということに気がつきました。

たしかに、都市、農村、あるいは沿道には並木の緑があります。しかし、山々も丘陵も緑に乏しく、植林の努力の跡は確かめられましたが、それがせいぜいここ四、五年生といった感じのものばかりで異様な不自然さです。新中国になってすでに三十年もたちながら、十五年とか、二十年の林相を探し求めてもついに見ることができませんでした。

中国を去る日、中国農学会の招待がありましたので、下手な所見を述べるよりもと思い、こちらを出かける直前に発刊されたばかりの、講談社刊行の、京都大学の四手井綱英＊先生の『森の生態学』（ブルーバックス）を持参していきましたので、それを進呈して是非勉強して下さいと学会の皆様に申し上げました。

中国が注目しはじめた生態の均衡

さて今年になって、私の中国を見ての疑問に答えてくれる論文がはじめて目にとまりました。『北京周報』の一月二十九日号、「農業の指導思想をめぐる討論」という論文で、題は「農業経済構造の改革」、筆者は国家技術委員会副主任童大林とあります。これはずいぶん長いあいだ、中国側の発言として確かめたかったものです。

曰く、

「新中国が誕生して……農業は大きな変革はしたが、しかしその変化は、生産関係の変革であり、農業経済構造と生産力の状況を根底から変えるものではなく、二〇〇〇年来の穀物を主とする小農経済の影響から抜け出すものでもなかった。われわれが農業生産の面で提起したスローガン、方針、方法も、依然としてモノカルチャー経済の範囲内にとどまり、一面的な発展を深めたにすぎない。（中略）

生態の均衡は、現代の科学技術の発展が農業理論に提供した新しい概念である。人類は、地球上で自然界と斗うのに、相互関係の問題を解決し、人間と自然界との、および自然界内部の均衡体系を確立しなければならない。生態の均衡を破壊すれば、人類は懲罰を受けることになる。（中略）

中国の黄土高原は中華民族の発祥の地であり、また、われわれの祖先が、生態均衡という科学的条理を知らなかったため、災いをもたらした物証でもある。中国の多くの地域の生態均衡がはなはだしく破壊された

ため、いまわれわれは苦しい目にあわされている。

われわれは、近代農業をおこすのに、生態の均衡という、この新概念をうち立て、新しい生態的均衡体系を確立しなければならない。

われわれが穀物を主とするモノカルチャー経済構造を変更しようとするのも、生態均衡という、自然発展の法則に適応し、この自然法則を利用し、農業生産のテンポをはやめるためである。

生態の均衡は非常に複雑な問題であり、諸分野にかかわりをもっている。現在のところわれわれは、森林の保護、営林、造林の問題を特別強調しなければならない。建国三十年来、われわれは、ばく大な財力、物力、人力を使って水利をおこし、かなりの成果をあげた。

しかし、森林を乱伐したため、多くの川や湖の水位がいちじるしく下がり、井戸やダムが枯渇して使用できなくなったものもあり、いまだに、かんばつや洪水に見舞われる地域が少なくない。

この三十年間に、もし水利工事に投じた人力の一部をさき、植樹、造林、緑化にまわしていたなら、われわれの生活は、いまよりははるかに好転していたにちがいない。

現在、われわれは、全国的規模で森林を保護し、植樹、造林、緑化運動を展開し、これを数年、十数年、数十年と続ければ、祖国の緑化が可能となろう。こうしてこそ、もっともたしかな生態均衡の基礎がうちたてられるのである。」

私は、中国の山野の森林植生の上に、建国も早い時期、ことに毛沢東の大躍進時代に行われた土法のための燃料として森林乱伐が進んだことが、深く影をおとしているのではないかと見ていたが、それに近いことが行われたことを裏づけてくれたようです。

中国は、農業の近代化、食糧の増産増収を進めるためにも、生態均衡の上にたった森林の回復再生による、

新たな土地利用について気がついたようであります。このことが人口、食糧、エネルギーの問題とあわせて、どう具体的に実践展開していくものか注目したいと思います。

わが国の森林植生の現状

私は、国内国外を問わず、つねに森林と農業を中心とする土地利用の関係を、深く視察することを習わしとし、学習してきたつもりです。

中国と違い、まだ生態的均衡の失なわれていないわが国の森林植生の現状は、どのようなものでしょうか。私の判断については、四手井綱英さんの『森の生態学』に次のような的確な指摘があります。

「林業家は、わが国の自然を守り続けてきたのは自分たちだというが、森林が、国土の七割近くも残ってきたのは地形のせいであって、決して林業家の努力のせいではない。地形の急峻さが林業ばかりでなく、多くの開発の手を阻止してきたのにすぎない。その証拠に、土木工作機械や伐木機器が発達した戦後は、経済成長に便乗し、たちまち林業家自らが森林を破壊し、開発業者たちの破壊を、なんの抵抗もなく許してきたではないか。

しかも林業では、伐木による丸太生産の利潤をあげることに汲々とし、林業技術的に最悪とされている皆伐人工造林をいちじるしく大面積化して、数年のうちに流域を裸にしてしまうような、暴挙ともいうべき林業を推進してきたなど、林業を、自然破壊として位置づけさせた最大の原因でないかといいたい。（中略）

大面積に裸地化された流域は、豪雨ごとに表土侵蝕が広範囲に生じ、河川に土砂を流出させるばかりでなく、洪水波を高め、鉄砲水による……下流への災害度を強めることになる。これはスキー場、ゴルフ場などの開発も同様である。

土木技術の発達した現代、こうした災害は下流域の堰堤（ダム）、築堤などにより防止できるものとし、森林の持つ水に対する諸機能をまったく軽視している。はたしてそうであろうか。明治以降、堰堤はますますその数を増し、堤防はいっそう高さを増して、とどまるところを知らない。」

これが、青年期から長いあいだ日本の森林を歩き、フィールドワークを土台にして森林生態学者としての地位をかためられた四手井先生の、告発に近い発言であります。

新中国が、今日、農林業の総合的視野にたち、国土利用について深刻に反省し、新しい道を歩もうとしている時、わが国は中国五〇〇〇年の自然破壊の愚挙を、明治以降わずか一〇〇年の歩みのなかで、特に戦後のこの二十年ぐらいの中で、加速化して国土破壊の深い傷跡をのこし、経済発展のかげにかくれて滅亡の道へ歩みを進めようとしているのではないかと思われてなりません。これは思いすごしでありましょうか。

日本の場合、やれ国土庁だ、環境庁だ、農林省だ、林野庁だ、建設、厚生省だと、すべて権限を中央に集中させた、末端までタテ割のバラバラ行政です。いろいろ網をかぶせていながら、そのスキ間から破られるようにできており、問題は、現場に近いその地域地域における総合的な窓口、土地利用をチェックする機関がないことであります。

森林に囲まれて共存する工業と農業

かつて欧米十ヵ国の工業立地視察団に加わり旅行した際、西ドイツではルール工業地帯を見るということになり、「いまさら斜陽の石炭産業を見てなんの益があろうか。」とタカをくくって出かけたのですが、なんといちばん深い感銘を受けたのがこのルール地方でありました。

実に森林が豊かに造成されており、土地利用が厳重に規制されていました。しかも、その森林は単純林ではなく混交複合林で、工場という工場が、森林のなかにすっぽりつつみこまれているのではないかと見えたほどです。

どうしてこのようになったかというと、一九二〇年に、「ルール炭礦住宅地区組合」という、ルール地域の諸都市が集まって土地利用を明確にし、大規模な緩衝緑地を計画的に造成する市町村連合体ができました。そこでは、景観管理・自然保護・植生研究所が附設されて、行政とは別に独立した立場で、植物、動物、土壌、地理といった常設の、各種の科学者によって構成される研究調査機関があり、地域内の精密な地図が作製されていて、これによりチェックしていくのだということでありました。そしてまた産業革命と急激な工業化、それから第一次世界大戦による悲惨な國土破壊や退廃を前にして、人間生存機能の回復を図らなければならないことにいち早く気づいたことが、こうしたことを実現させたものと思います。

しかもこのルール工業地帯こそ、なんと、西ドイツでももっとも高度に集約化された畑作農業地域であったのです。さしずめ日本の場合であれば、こうした地域の農業がいちばん先に退廃化が進み、崩壊がおこるのが常識とされていますが、これがまったく逆なのです。

ここでは北海道の十勝と同じように有数のビート（砂糖大根）の主産地で、大根から砂糖をとっています。北海道の製糖工場がせいぜい二〇〇〇トン規模の工場であるのに対し、ここでは八〇〇〇トン工場です。ちょうどビートの収穫期にぶつかり、工場の原料搬入の最盛期でしたが、その風景はこちらのそれとまったく同じでした。道路の路面が、ビート畑から直接道路に出るので、ビート運搬車のタイヤの跡でよごれていて、北海道と同じだと思わず口にでました。

ビートの栽培単位が最低二十ヘクタール以上で、ヘクタール当り収量が六十トンといっていましたから、砂糖を国外に輸出するだけのコストを実現できるのももっともでしょう。圃場管理がまた美事で、都市林の

足もとまで、収穫後の秋耕がただちに行われていることなど、さすがに国内必要食糧の八十パーセントの自給を確保している国の農業であると理解できました。これが西ドイツの国土面積の一・二パーセントに人口の十・三パーセントの集中する、ルール地方の土地利用であるだけに感心した訳です。

アメリカのように国土が広く、耕作放棄なり休耕地を大規模にやっても少しも困らないという、馬鹿げたやりかたの国とは、同じ先進国といっても、国土の背負っている荷重がまったくちがう訳です。しかもアメリカぐらい森林を乱暴に扱った国はないことを、J・S・コリスは、『森』（邦訳、玉川選書）のなかで指摘しています。

再編成を迫られるわが国の土地利用のあり方

さて、日本の既存農用地は約六〇〇万ヘクタール。これが国民栄養の基盤であり、食糧安全保障の土台であります。ところが今日、生産構造の上で大きな転換点にたち、国民栄養の消費構造と関連し、生産の基礎をなす土地利用のありかたが再編成を求められるにいたりました。

日本農業の歩みは水田稲作を中心として発展を続け、ながい歴史と伝統に支えられ、わが国の風土にもっとも適応した土地利用形態として今日にいたり、非常に完成度の高いものとなっています。しかも収穫量も安定し、ここ二十年のあいだに、全国平均の反収も十アールあたり四〇〇キロから五〇〇キロ、将来は六〇〇キロも不可能でない、という最高の水準を示すにいたっております。

これにはあらゆる保護育成の手が加えられてきたことはもちろんですが、育種、肥料、農薬の進歩のほかに、この二十数年のあいだの驚くべき機械化の進歩と普及で、移植式水田稲作の機械化が体系的に完成に近づき、地域別の技術も統一され、また作りやすくなり、労働時間も二分の一以下に減ってしまったことなど

が考えられます。ところが一方で戦後食生活の洋風化が進み、戦前までの日本人にはまったく考えられないほど米に対する価値観が変化し、消費性向の上で米ばなれ現象がおこっています。わずか二十年のあいだに、一世帯あたりの一般消費で、昭和三十五年九十九キロが五十三年には四十九キロと半分に減り、米生産に直接あたる農家消費量までが同様の事情といいますから、大きな変動といわねばなりません。

こうして食管会計が七〇〇万トン以上の過剰米をかかえこむようになり、ついに昭和四十五年にはじまる第一次生産調整、昭和五十三年にはじまる第二次生産調整と、農政史上はじめての「米退治」に手がつけられた訳です。これは二十年前の水田稲作面積約三〇〇万ヘクタールを二〇〇万ヘクタール以下に押えこみ、三分の二とし、米の生産量を一〇〇〇万トンの需要見込みにすりあわせるという、日本農業はじまって以来の出来ごとであります。

この一〇〇万ヘクタールに及ぶ従来の水田稲作土地利用から、他の作目への転換は、広い広いといわれる北海道が、一〇〇年かけた農業開拓の結果達成した農用地一〇〇万ヘクタールと同面積ですから、これは大変なことです。

一方、穀類だけの自給率でいうと、二十年前に八十三パーセントであったものが三十四パーセントに減り、国内産小麦の自給率では、二十年前の約四十パーセントがわずかに四パーセントと完全に安楽死させられてしまっております。

このため海外から小麦の五七〇万トンをはじめ、二八〇〇万トンの穀物を輸入する結果となっています。これはあきらかに、第一次生産調整で、全国一律の画一的な一割減反の時点から進んだ土地利用度の低下と、機械化に伴なう品種作付の単純化、就業者の激減などがかさなり、従来行われていた裏作などが完全に放棄された結果と考えられます。

しかし休耕といえば聞こえはよいが、それは多大な奨励金つきで荒しづくりを、結果として強行奨励した

ことです。「金の番ならできないが土の番ならできる」という農民精神、土づくり精神に、日本政府自らツバキをかけたことです。日本国中に、見るも無残な農地荒しを公衆の面前にくりひろげ、しかもそのことを公共財政の負担で行うという、歴史はじまって以来のことを政治が強行し、土に対する価値観に打撃を与え、農業べっ視の風潮をつくり出したことです。

また四十年以降の農地価格の連続高騰は農地の流動化にとどめをさし、専業農家率は戦後の五十パーセントから十パーセントに、一種兼業が二十パーセント、二種兼業七十パーセントとなり、しかもこの二種兼業によって農用地の五十パーセントが土地利用を固定化され、八十パーセントは専業従事者を欠いているものとみられています。

農業基本法が策定されたのは、農地改革で解決できなかった経営規模の零細性を打破し、生産性の高い、国際競争力のある自立経営を実現することがねらいであったはずです。この当時の基本問題調査会のメンバーである大内力氏が、最近になって何と発言しているか。「その当時、考えておりました自立経営というのは、せいぜい二・五ヘクタールとか、三ヘクタールほどの普通作経営で考えてました。……しかし今日では……水田を中心にした普通作経営では、小さくとも数ヘクタール、大きい場合は二十〜三十ヘクタールというところが適正規模になりつつある訳です。」（農業問題研究会議『農業問題』一九八〇年一月号）

二・五ヘクタールの水田稲作で国際競争力のある個別自立経営ができるものと、農政の権威を任ずる人々が、大真面目で考えていたのです。当然、土地対策というものを基本法農政はまったく考えていなかったことになります。元農林官僚東畑四郎氏の『昭和農政談』（家の光協会）を一読しても、同じことが読みとれます。戦前からの支配的な農政思想における土地利用の考えかたは、一貫して小農経営を目ざしたものであったのです。

各地域の特性に応じた土地利用条件の整備を

ここで私は、私の尊敬する農業技術研究所の吉田武彦氏の提言を紹介します。

「目下、国が米の第二次生産調整のなかで進めている水田利用再編対策は、……水田と畑を峻別する（日本農政の誤まった）伝統に固執して、転作水田の永久畑地化を図っていることである。

私は、こうした考えかたでは、……『総合的な食糧自給力の強化』は、とうてい達成できないと考える。伝統ではあっても、科学的ではない、水田と畑との固定的な区別をやめ、稲作と畑作をともに発展させる可能性をとことんまで追究すべきである。

そのためには、水田と畑とを統合した耕地にする。つまり、どちらにも使えるように、耕地の汎用化に踏み出す必要がある。次に、汎用化した耕地の上で、水稲と各種の畑作物をどういう順序で、どれだけ作るか、わが国の風土と社会的要請に適した、輪作方式の開発をはかることである。

さいわい、わが国の気候条件は、水稲はもちろん、広範な畑作物にも適している。飼料穀物もふくめて、輸入されている食糧の大部分の品目は、わが国で立派に作れるのである。

麦や大豆の栽培技術も、食糧輸入政策で壊滅させられるまでは、……劣っていた訳ではない。

減反という受難の時代でさえ、稲作における技術革新を行い、収量も、労働生産性も飛躍的に向上させた日本の農民である。

汎用化した耕地で、水稲を含む輪作を行うことは、もう一つの利点をもっている。水田期間と畑作期間の交代で、土壌の堪水、乾燥条件が繰りかえされると、土壌の性質がよくなり、雑草の発生量が減り、水稲と畑作物ともに収量の向上することが、すでにこれまでの田畑輪換の研究から分っている。

さらに、地域ごとにこの輪作を、畜産とうまく組みあわせることができれば、……廃棄物の相互交換をつ

うじて、耕地における物質循環の再建も可能となる。」（富民協会『農業と経済』臨時増刊―産業構造の変化と日本農業）

すでに北海道の畑作もまた、各種作目の機械化は体系的に完成に近づいているので、私はこの吉田提案は、労働配分の上からいっても、今日的にいっても可能であると考えるものです。わが国の恵まれた気象条件からもこの土地利用の高度な集約化、複合化は可能です。

「集約稲作と集約畑作を、多毛作で結合した集約型のもとで、しかも行き過ぎた化学化を抑制し、本来の日本型中耕除草農業にひき戻す見通しも開けてきている」とする吉田氏の判断は正しいと思います。問題は、各地域地域における最良にして最適な、水稲、畑作汎用化のための土地利用条件の整備にあると思います。

これらの新しい土地利用構造を進めるにあたっては、今日の空洞化した農地法の基底にある小農的自立経営の呪縛から解放されることが緊要であります。農地は、生産手段であると共に労働対象であることによって、非農地とは全く異質のものであることを明確にし、土地法学者の迷妄を爆砕し、その所有権の性格を法律的にも新しい位置づけを行うべきです。

したがって、農地は農民的土地利用者集団や公益的共有法人の管理所有するものとし、企業における法人の株式資本と法人資産との明確な分離の発想を導入し、農地そのものが私有財産として移転することを排除すべきであり、その上で耕作権、利用権を正しく保護し、その移行過程について検討すべきです。全国画一的農政を排し、農業振興地域その他農用地に対し、土地利用上、一種から三種以上の用途別指定を水系的に行った上で農地の汎用化を進めることがのぞましく、補助政策によることなく、低利、九十九年の長期融資によるべきものと考えます。今流行の経済特区として展開する、勇気ある町村長はいないものでしょうか。

今日までの農政は小農思想と米中心に偏重し、農協勢力と野合し、真剣な農民努力を無視し、生産費を国

際的視野から低減を化する努力を阻止し、資源配分の合理性の貫徹を妨害してきたことは歴然としています。農業の機械化方向は、今後さらにセンサー化、エレクトロニクス化によって作業の精密度を増大し、エネルギー・コストを低減するものと思われますので、日本型体系の完成を進め、あわせて農地の汎用化のなかで土地利用形態と調和させ、徹底してコスト低下に寄与さるべきものと考えます。

われわれの国土、町や村の山林も、農地も動かすことのできないものです。その土地利用のありようのすべてこそが、生活する人々の至福実現に結びついている訳です。

それはまた国民全体のくらしや、食糧安全保障とも深くかかわっています。そのことは不可能ではない。自然的生態的循環と経済的社会的循環を正しく結合させ、町づくり、村づくりのありようを、自主と創造をもって建設する筋道をたててゆくならば、必ず道は開けていくものと確信するものです。

昭和五十五年　『技術と経済』　科学技術と経済の会

私の土地利用「開眼」（一）

「ひとり自分の先祖の生活のみではない。異（こと）なった民族の、自分らとぜんぜんちがった生活なども、おのれを空（むな）しくして見なければ、実はわからぬので、この練習をつんだうえでないと、自分たちの現在の生活も、正確には、意識することはできぬものである。

歴史とは、かくのごとくにして、我われの大いなる修養であり、また、未来を功究するものの、必要な準備である。

我われが、自然の変遷と名づけているもののなかに、じっさいは、この同情が足らず、注意をおこたり、忘却したために、無意味に破壊し、分散してしまったものが、ないとはいわれぬ。

将来にむかって、このような破壊を防ぐことは、その道理を、ふかく知れば知るほど、いよいよこのことを心がけずにはおられぬであろう。

要するに、自然に対する、人間のかかわりかたの研究ということが我われの学問の、いちばんの眼目ということであろう。」

柳田国男著『日本農民史』昭和六年

一、西ドイツの森林景観

今から十年前（一九八一年）ですが、はじめてヨーロッパ八ヵ国と、アメリカ、カナダと海外の旅をして、勉強する機会が与えられました。そこで気がついたことは、「聞くと見るとは大違い」で、聞いたり読んだりしてきたこととは、だいぶ事情が違うということであります。とくに、次に申上げる二つのことは、私にとって大変なことでありました。

一つは、我われが、明治以来百年のあいだ近代文明、近代国家のお手本として、追いつき追い越せとやってきたヨーロッパが、近代のかたまりみたいなものとばかり思いこんでいたものですから、それがまったくの思い違いで、そこで発見したものは、近代ではなくて中世であったことです。その都市構造といい、生活原理が、中世の文化が、いきいきとして生き続けていることに驚いたのであります。偉大な中世の発見であり、中世を含めて歴史の連続性の上にたった文化であることを知ったことであります。

従来、あらゆる場合、口を開けば「欧米では」と、ヨーロッパとアメリカをひとくくりにして、あたかも「欧米一般」の実体が存在するかのような記述、説明に、我われはだまされつづけてきました。これはとんでもないことで、アメリカ文化は、中世の完全な欠落であり、歴史の非連続性の上にたった文化です。

アメリカは、中世の克服過程をもたない逃亡者であり、脱出者の文化の国です。あの愚劣な、狂気の都市構造、その土地利用を目のあたりにして、私は考えこんでしまいました。中世の歴史を経てきた、経ていないの違いが歴史の連続性と非連続性の上に、文化景観の様相の違いとしてあらわれていることに、気がついたのであります。

もう一つは、特に西ドイツで気がついたのでありますが、土地利用の考えかたが、まったく我われとは違った思想の上にたち、違った手法で行われていたことでありました。

実はドイツの場合、ルール工業地帯の視察が主眼とされていたものですから、いまさら斜陽の炭砿地帯を見てどうするものか、学ぶべきものなしと、まったくタカをくくり、フランクフルト・アム・マインでは、ゲーテの生家と「詩と真実」にえがかれた少年期の跡を偲んだり、あるいはボンのベートーベン・ハウスを訪ねたり、ボン大学にカントの面影を偲び、ジュツセルドルフではハイネの生家を訪ねて見たいなど、そんなことに肩の力をいれていました。それと、父なる川ラインの流れ一三〇〇キロメートルを、その源流ともいうべきスイスのチューリッヒから、河口のオランダのロッテルダムまで、ずっと通して、空からあるいは陸上を河畔に沿って旅することができるという、その素晴しさに、大いに期待をふくらませていたものです。

そして着いたのが、フランクフルト空港であります。ところがどうでありましょう。のっけから降りたった空港が、フランクフルトの市街を南側からつつみこむように広がる、約五〇〇〇ヘクタールの素晴しい都市林の中にあるのには、まず驚かされました。たまたま都合で、直ちにマンハイムの市庁を訪問するため、バスは直行することとなり、アウトバーンに入りました。

見ていると、両側の植生景観の異様さに気がつきました。道路林の林帯が、あるところでは五十メートル、あるところでは二〇〇メートル、地形に応じて、どんどん変化していく。決して画一的でない。その植生の構成が単純林ではなく複層混交林となっていることです。

我々日本の沿道修景では、画一的な林帯で、せいぜい一列植えとか二列植えで、むかしから松並木か、杉並木とか、北海道であればポプラ並木とか、カラマツ並木といった、馬鹿のひとつ覚えのような単純植生がその伝統的手法であります。しかし現に、次々と目にとびこんで来る自然植生的修景というものが、未だかってお目にかかったことがないものですから、これはエライことをやっているぞと、くいいるように、植生の観察に、もうすっかり、とりつかれてしまいました。

それは、高木、亜高木、低木、それに林縁部のブッシュまで附随していて、まったく自然植生的に造成さ

れていることでありました。「これは、土木工学屋の発想からは絶対に生れてこない思想だ。何かあるぞ、すごいことだ。」私は心の中でうなってしまいました。ドイツの大地に足をつけた途端に、ガーンとなぐりつけられてしまったのであります。

我々の、いわゆる緑化の考えかたには、植木屋の職人的発想がどこか基底にあって、そもそも、自然を盆栽的に玩物視した発想から出ているものが多く、土木屋さんは、すぐにそれにひっかっかってしまう体質をもっています。その欠点が、至るところにあらわれてくる訳です。我々は、こうした最低最悪の固定観念にしばられている訳です。

この道路修景にはじまる一連の植生修景についてのナゾは、ボンにある連邦政府の公式訪問によって、手がかりがつかめました。早くも一九一一年にはじまった植生回復の運動は、第一次世界大戦が終ったあと一九二〇年に、まずルール地域の諸都市が集まり、土地利用を明確に画定した「緑の肺計画」という、大規模な緩衝緑地帯を造成する市町村連合体「ルール炭砿住宅組合」が組織され、そこに「景観管理、自然保護、植生計画研究所」が附設されました。

この研究所は、行政とはまったく独立した立場にたち、植物、動物、土壌、地理といった、専門科学者によって構成された広域調査研究機関で、地域内の精密な資料地図が作製され、域内のあらゆる土地利用について、道路橋梁の位置選定、建設などについては勿論のこと、沿道修景、計画の変更に至るまで、こまかくチェックする機関であって、強い権限をもち、先ほどのような国土管理が、実現するようになったのだということがわかりました。

現在では各州政府はもちろんのこと、一九五二年以降、連邦政府にも総括的な同様の研究所が設立されるに至り、全土にわたり、土地利用が、景観管理、植生計画、自然保護の立場にたって規制されています。

二、森林と工場・炭砿

ご承知のように、英仏に遅れてはじまったドイツの産業革命は急激な工業化政策が進められた結果、早くも公害と環境破懐が極端に現れたようであります。しかも第一次大戦による悲惨な国土破壊、人心の退廃を目のあたりにして、心ある人々の提起によって、まず人間生存機能と環境機能の回復の重要性にいち早く気がつき、市民運動の展開が、こうした素晴しいことを実現させたものと考えられます。

ジュッセルドルフ市の案内で、ヘンケルという化学工場を見学することができました。この会社の技術は、日本ではライオン油脂に導入されている筈です。さらに最近では、文房具のコクヨが発売している「口紅型のプリット」という事務用糊、あれはヘンケルの製品です。大規模な化学工場なのですが、訪ねてみてびっくりいたしました。バスは、森林のなかに入っていくのです。暫らくすると、森林の奥がパッと開けてきて、工場が現われました。なるほど、この地帯の工場という工場はすべてこのような調子ですから、ルール地域を走りまわりながら、キョロキョロ工場の姿を探してみても、それらしいものが見当らない理由がよくわかりました。この工場を囲んでいる森林というのがこれまた単純林ではなく、複層混交林によって構成されていることに感銘したのです。ついでですが、この会社の日本庭園を案内されたり、ベルサイユ宮殿のような応接室に通されて、構内の広さもさることながら、日本の大企業のコンクリートの箱のような本社応接室を知っているだけに、なにか企業の発想のちがいというものを感じさせられました。

このあと、エッセン市にほど近い炭砿地帯に出かけました。ところが、美しい花壇にとりかこまれた郊外住宅地帯といったおもむきの市街の真中でバスから降ろされ、ここが炭砿だというのです。炭砿地の感じがまったくしないのです。案内者が、この住宅街の裏通りの方向に向って歩き出しました。

なるほど炭砿です。タテ坑のマキが見えました。そのマキがまた低いのです。これでは中層住宅群のかげ

にかくれて見えない訳だと思いました。私の頭のなかには芦別とか赤平とかいった、うすぎたない、乱雑にゴチャゴチャした、炭住地帯の景観が頭にあるものですから、まったく戸迷いさせられた訳です。

ズリ山というものが見えないのです。石炭は現地でガス化されて、これがパイプで必要とする化学工場に送られていきます。ズリはすべて鉄道で平担に広げられ、ある程度の集積が終ると、みな覆土されて、森林に変貌してしまう訳です。その美事な景観は、この後飛行機でルールの上空を飛び、土地利用の美事さを確認することができ、なるほどと心から感銘したものです。

北海道の場合はどうでありましょうか。炭砿地帯のズリ山、あるいは根室本線の山部附近の石綿を採取したズリ山、もう工場は稼動していないにかかわらず放置されています。ドイツの場合であれば景観管理の法律によって、貴重な国土を放置しておくことができません。かならず覆土をして、もとの森林に戻さねばならぬ義務を負うている訳です。石炭や石綿を掘ってただモウければよいという、後始末はどうでもよいということにはならぬのです。植生景観、土壌保全の立場からきびしい規制を受け、そのことが、企業の社会的責任とされています。北海道内の閉鎖された炭砿地帯で、炭住が朽ちるにまかせて青少年の非行の温床となり、残留する市民の負担でその撤去が行われているという新聞報道を読むにつけても、まことに情ないことです。こういう資本の論理はまちがっていると思います。

三、森林と都市構造

ルール地域は十一の都市と四つの郡でなりたっています。面積は約五〇〇〇平方キロメートル（十勝平野の二分の一）、その人口五四一万人、西ドイツの国土の二パーセント、人口の十・三パーセントが集中しており、その工業出荷額は全ECの三十二パーセントを占めるという、工業の高度集中地域です。この地域を

バスで視察してわかったことは、都市と都市とが絶対に連担していないことです。画然と、都市ごとに独立を主張し、都市の周囲はいずれも自然植生的都市林によって、あたかもかっての城壁のごとくとりかこまれていることです。都市のなかに緑の空間が多いのではなく、緑の城壁の中に、都市があるのです。まちのなかに森をつくるのではなく、森のなかにまちがつくられているという印象が、ほんとうのところです。このように、都市的土地利用と農業的土地利用とが画然とし、また整然としていることに、心から感動しました。人口六十万人のドルムント市でさえ、市域の四十パーセントが、農業的土地利用としてきちんと機能しているのですから、まことに美事というほかはありません。

こうした西ドイツの都市構造は、何に由来するのか、いろいろ考えてみて、今の私の結論は、ドイツはもちろんですが、ヨーロッパは、国家があって都市ができたのではなく、都市があって国家が成立していった。いわば国家というものは、都市連合体の集まりにすぎないのではないのか。くわしい考えかたの説明は、ここでは省きますが、我々が今日考えている「国家」というもの、「近代国家」なんていうものは、わずか一〇〇年か二〇〇年そこそこの歴史しかないもので、多くの都市こそ、いずれも一〇〇〇年以上の、ある都市は二〇〇〇年に近い歴史と伝統の上に成立していることに、気がついたのです。

逆に日本の都市と称しているものは、要するに行政上の都市にすぎない。真に市民社会があっての都市というものはきわめて少ない。それがホントなのではないでしょうか。中世社会の歴史を持つ都市、そこに都市形成というものの本質があるのではないかと、痛感したものです。

日本がまだ高度成長で酔っ払っていた時、羽田（東京空港）と伊丹（大阪空港）の間に夜間便が飛んでおりました。よくこれを利用して大阪に出向いた時驚いたのですが、漆黒の夜の闇に、イルミネーションのように続くまちの灯りが完全に断ちきれていたのは、鈴鹿峠の上空だけです。あとは、東海道が完全に光のベルトでつながっていることに気がつきました。こんな気狂いじみた都市構造を持つ国なんて、世界のどこに

あるのでしょうか。このことが異常だと思わないところに、政治の完全な貧困があると思います。

都市というものが、構造的に、点と線にとどまって、面として凝縮するものだという意識がはじめから欠落していることであります。これは、後にアメリカの都市を見て歩いてわかりました。ニューヨークにはじまってすべての都市がいずれも、西部劇の映画に出てくる駅馬車のまちの構造、あれです。点ではじまって、線で終っていることです。

そういえばアメリカには城塞の経験はあっても、城壁都市の経験をもっていません。中世欠如の都市構造であることを歴然とものがたっています。日本の都市も東海道五十三次で、まったくアメリカ西部劇の駅馬車のまちのそれであります。ニューヨークの骨格は、バッテリー公園を起点とした、ブロードウエイというやつがそれです。あれが駅馬車の道路です。今でも幹線になっています。サンフランシスコでいえば、マーケット・ストリートというのがフリーウエイになって走っています。まったくお江戸日本橋にはじまって、銀座八丁を、昔の東海道五十三次を、そのまま国道一号線にしているのが日本の道路行政で、あれはアメリカのやりかたと瓜二つだということがよくわかります。

ドイツでは、ボンのようなあんな小さな街でさえ、城壁がありました。今でもその城壁の一部がのこっており、広場に面してラートハウス*があり、向い側に郵便局、その前にベートーベンの銅像がたっています。昔の郵便馬車が、この城壁の中の広場に起終点をもっていたことの名残りだということがわかります。ベートーベンの生れた木造の家が、この広場から横丁に入って僅か三十メートルたらずのところに、戦災にもあわず残っています。

アメリカの場合、ボストンのようなアメリカとしては非常に古い都市でさえ、ヨーロッパ的な都市構造のあとを見ることはできません。みんな都市が大きくなってから、でっちあげたものです。

北海道の場合、札幌農学校の伝統のせいで、アメリカが美化されて、嘘っぱちを教えこまされてきたもの

ですから、実際に行ってみてびっくりというのがほんとうのところです。

四、森林と動物

話を戻しまして、私がヨーロッパに出かける前友人からいわれたことは、とにかく街の中に小鳥が多いこと、公園にはリスがいて非常に人になついていることです。帯広のまちの森も、公園も、そういう森や公園をつくるべきだと、しきりにいわれました。このことを頭にいれて出かけました。

なるほど、最初のまちアムステルダムにはじまって小鳥が多いのがわかりました。たしかにリスがいました。まことに人なつっこく肩の上まで平気であがってくるのには驚きました。しかし考えてみると、どうしてこのように都市の公園や森に小鳥やリスがいるのでしょうか。友人はその理由は解きあかしてはくれなかった。いやそこまで考えての話ではなかったと思います。

私にはその疑問がわいてきました。ロンドンでは、ハイド・パークだけでも七回も通い、あの広い公園を隅から隅まで歩きまわりました。わかりましたよ。公園や森には、ちゃんと小鳥が住みつき、リスが暮せるように、巣づくりの場所をしかけているばかりでなく、ちゃんとエサになる樹種が選定されて、生態的に食物連鎖が行われるように、植生的配慮が行われていることでした。日本のように玩物的造園感覚の植生ではない。ちょうど秋のことですから、いたるところのブッシュに、赤い実、青い実、黒い実が、ゆたかに熟れた灌木が群生していることです。またリスのためには、カスタニエン（マロニエ、日本ではとちの木）とか、ドングリ（みずなら、楢）とか、リスの好んで食べる木の実のなる樹種によって、植生が構成されていることでありました。

それだけではありません。飛行機でそのまちを離れる時、よく注意してみると、郊外の農村部のいたると

ドイツの公園では鉄製の遊具はなくすべてが木製

ころに、広い森があちこちと展開しているのです。それらの森をつないでたどっていくと、必ずウエステルの森とか、オーデンの森とか、大森林のある山につながっているのです。

なるほど、リスや小鳥たちを山からつかまえて公園や森に放したのではなく、こうした自然林のある山にむかってリスがくる道、小鳥がくる道がしかけられていることがわかります。都市の中心部まで、小鳥やリスが移動してこれるように、土地利用上の配慮がちゃんとされているといってよいと思うのです。都市のそうした演出のためには、背後にそうした考慮が払われていなければ、小鳥のいるまち、リスのいるまちが、できないことがわかりました。そういうヨーロッパの都市のありかたというものを、私たちは真剣に考えてみたいものです。

五、森林と物質循環

それから、ヨーロッパを歩いていた頃は、ちょうど秋の落ち葉の季節です。それで気のついたことは、日本であれば至るところで、落ち葉焼きをする光景に出あうは

ずです。まったく出あわないのです。落ち葉は公園などでたしかにかき集めていましたが、みんな堆肥にして、また樹木のまわりに返してやるということでした。

チューリッヒでは、街路樹の落ち葉は、その街路に面した住民が掃除をしてかき集め、自分の庭の一角に煉瓦積みの小さい堆肥場があって、そこで腐熟させてから、また街路樹の根まわりに返すのが市民の義務であると聞かされました。

だから都市林のなかの落ち葉は決して外部にもち出させない。落ちっぱなしです。森の中に一歩足を踏みいれてみると、実に土がやわらかい訳です。フランクフルトの森は二度訪問しました。二度目はホテルで通訳をたのみ、車で半日森の中の施設を見て歩き、突然でしたが森林局を訪問して、それぞれのスペシャリストの個室を、図々しくも訪れて資料も入手することができました。

偶然にも森の中で養豚をやっているのにぶつかりました。これは中世以来の伝統で、森の中のドングリで豚を肥育することが行われているのです。よく見ると豚の小便はたれ流しで、小さい溝を伝わって低い方に流れていっています。しかもその下流には池がありました。その池の水は実に綺麗なのです。日本であればとんでもないことで、富栄養ということで酸素欠乏となり、魚なぞすめないといって大騒ぎをするところです。私はよく観察しました。土壌浄化法がとられているのです。なんといってもこの森は何百年もの森です。ナラやブナの林の中は、落ち葉がたまりにたまってフワフワしています。そこを通すのですから、ちゃんと嫌気性分解と、好気性分解が都合よく働らくようになっていて、土壌からしみ出てくる時はまったく綺麗になってしまっているのです。私は思わずハタと膝をうちました。「これだ、ドイツの連中はここから下水道の原理を学んだのだ。これはいちばんエネルギーを使わない、賢明な下水処理の原理だ」とほとほと感心しました。私自身昭和三十年に札幌市の自宅に浄化槽装置をつくり、下水道が敷設されるまでの二十年間も研究実践してきたものですから、たちまち納得することができました。

落ち葉の話に戻しますが、日本の神社や寺院の境内に入り、植生を調べるため、踏みこんでみて気のつくことは、実に土が固いということです。神主や坊さんが落ち葉かきをして燃やしている風景を、我われは子どものころから見なれてきましたが、あれはとんでもないことだということに気がつきました。結局、我われは自然の物質循環をたちきって、貴重な樹木を育てる資源を、「ゴミ扱い」している間違いをおかしていることに気がつきました。

神社や寺院の森や樹木が大切にされているかどうかは、その林床の土が、柔かいか固いかで判るということです。いたずらに、神社や寺院の建物をきらびやかに壮麗にしても、肝心の、鎮守の森や境内の樹木を粗末にしている、神主や坊さんたちは、神の道仏の道にかなわぬことをやっていることに気がついて貰わねば困ると思います。

ヨーロッパで気がつくことは、教会や寺院の周囲というものはまったく乾いた空間であって、まず森や樹木にとりかこまれている姿を見たことがありません。それは、教会や寺院のあるまち全体に森や樹木があるからというのでしょうか。日本の場合は、鎮守の森こそ神木として、本来的に神の依代としての思想信仰が本源にあることを忘れて貰っては困ると思います。お釈迦様は菩提樹の下で悟りを開かれたのであります。比叡山といい、高野山といい、永平寺といい、身延山といい、進んで山林の中に入って祖師たちは道を求め、道を開いていることを忘れて貰っては困ると思います。ヨーロッパだって、キリスト教以前の土俗の信仰は、すべて森林の思想であることは、今に続くキリスト教の信仰行事そのものに残っています。沙漠のキリスト教を森林のキリスト教に変質させていることは間違いありません。

神主や坊さんこそ、森や樹木のもっとも素朴な取りあつかいかたを民衆の前に、行道者として、模範を示して貰わねば困ると私は考えます。植木や盆栽をいじくる時はちゃんと腐葉土を買うくせに、この落ち葉の意味がわからないのは困りものです。特にこの頃は、アスファルトやコンクリートジャングル育ちの都会の

大学を出た神主や坊さんたちばかりになり、やりかたをみていると、まったく無神経で、無智もはなはだしいやりかたを平気でしていることに、腹がたつことがあります。

ましてや人々に境内の樹木の根もとを踏みかためさせて、平気でいるのは、困りものです。神社や寺院の境内の樹木こそ、まちのなかに森厳と静寂の空間を温存する唯一の貴重空間です。樹木の根まわりを踏みかためさせるやりかたは、根まわりに通気通水をさまたげ、酸素を欠乏させ、土壌の分解を停止させ、土壌生物の活動を無力化させ、保水力を失なわせることになりますから、せっかく祖先先輩のまもりぬいてきた、何十年、何百年の樹木の息の根をとめようというものです。こうしたことに対する心づかいこそ、この人たちの実践によって守ってほしいものだと思います。

六、森林と土壌

さきほど、嫌気性分解、好気性分解のお話をいたしましたが、これはバクテリヤによる働きのことなのです。土壌中のバクテリヤにも嫌気性と好気性の二種類があります。土壌の表土には空気が沢山あって酸素が多いから、有機物の分解には好気性のバクテリヤが活躍いたします。土壌の深いところは、空気の容量が小さく酸素が不足しますから、そこで活躍しているのは嫌気性のバクテリヤです。ですから、無思慮に、畑の土は深く起せばよいという訳で、深いところにある土を表面に出し、表面の土を深いところに押しこむとどういうことになるか。酸素を好まない嫌気性バクテリヤが、空気にさらされて、みな死んでしまう訳です。また酸素を必要とする好気性バクテリヤは空気が足りないために、これまた死んで、せっかくの好気性、嫌気性という、土壌中で食物連鎖の一環として土壌を肥沃にする大変な働きをするバクテリヤを、生活環境を破壊することによって、みな殺しにしてしまう訳です。だから畑の場合も、単純に深起しをすればよいとい

う考えかたの誤りに気づき、最近では二段起しで、心土犁といって、底の土は底の中で破砕していくという考えかたに変り、そういうプラオが開発されています。私は農業の立場でいつもモノを考えていますから、そこまではわかっておりました。

ところが、最初のヨーロッパ訪問の時、ルール地域のライン川のほとりを車で走っていて、驚くべきことを発見したのです。むこうの川は日本とちがって、悠々と流れる川であって、ルールあたりでは三〇〇〇トンクラスの汽船が往来しています。骨材（砂利）は川からとるものではなくて、陸（おか）砂利を使用いたしてます。たまたま甜菜の収穫期で、収穫が終ると、片っ端から秋耕をやっている時期で、圃場は美事なぐらい整理されて、日本のように雑草やからものが残っている風景は見られません。秋耕によって、からものや雑草が鋤きこまれることによって、翌年の春までに土壌中で分解させるやりかたです。サマーファロー＊というやりかたをやっています。そうした畑のド真中で、パワー・ショベルが地面を掘りこみ、さかんに砂利採取をやっているのにぶつかりました。

ああ、砂利採取をやっているぞ。それはよいのですが、まわりがちょっとおかしいのです。どうも日本での陸砂利採取とちがうところがあります。日本であればなんのことはない、砂利をとったあとの穴を埋め戻して、モトの畑にすればよいのだろうがというやりかたが、一般的なやりかたです。だから、まずブルトーザーで無思慮に畑の表土をおかまいなく一方的に押し出して、砂利層のあるところまで掘り出します。砂利をとったら、また無思慮に、表面の作土については心づかいをして、適当に埋め戻せばよい訳です。要は砂利を売ることを認めた側も、砂利を掘りとる側も、金になることが目的の場あたり主義で、ホントウに土地利用者として、国土保全、優良農地を保全することに共に社会的責任を持つという思想の上にたってはいない訳です。

ドイツの場合、どうなっているのでしょうか。第一に、掘りとった土壌が、だいたい三方向に、整然と、

ちょうど十勝であれば、秋のビートの集積場のように、細長くつみあげられています。しかも覆いがしてあるのです。これが不思議でその理由をいろいろ考えて見ましたが、ついに帰国するまで、整理された答えが出せなかった訳です。

それで帰国後、東大農学部の井手久登先生をお訪ねして、はじめて真実がわかりました。井手先生は西ドイツの、「景観管理、自然保護、植生計画研究所」で勉強されてきた方で、日本でもこの方面の研究者であられます。そこで出てきた話が、先程の土壌には好気性バクテリヤが活動している表土、嫌気性バクテリヤが活動している心土、さらにその下の基層土とある訳ですが、それがまたメッシュ化された調査図に全部記載されていて、その指定基準にしたがって土壌を保全し、その順序にしたがって、覆土しなおすために、さきほどのような、それぞれ丁寧な土壌の取扱いをしていることがわかりました。

私は話を聞いていて、なるほどと感心してしまったのです。ドイツでは土壌の取扱いを、そこまで考えてやっているのか。これでこそ、言葉の通りの「母なる土」の取扱いをしている訳です。土というものを単に金モウケの手段、モノとして見ているのではなく、生命あるものとして考え、取扱っていることが、よくわかりました。

さらに驚くべきことに、日本の砂利採取が、農地行政上の処理といった事務的処理になっているのに対し、工業規格の取扱いになっていることです。すなわち砂利採取の工程そのものが、工業規格のひとつとして規制され、違反すると厳しい処罰をうけることになっていることからも、考えかたの根底に、ちがいがあることを痛感いたしました。

七、森林と人間生活

さて、私にとっての西ドイツ、特にルールを中心とした旅は、二度の旅行といっても、日数にして僅か六日ぐらいなものです。環境林なり、公園なり、工場なり、炭砿なり、まったく通りすがりの旅にすぎませんが、よくよく目を皿のようにし、観察しながら歩いて見ると、以上申しあげたような、いくつかの事実について教えられました。特に、土地利用、森林、土壌に就て、私の関心がいよいよ深くなっていく重大なきっかけになったことは、申すまでもありません。

よく、ヨーロッパは観光だけで、土地利用の上からも、農業的にもまったく学ぶものなし、日本がいちばんうまくいっている、というオチを聞かされることがあります。あっさりいわれてしまうと、返すことばもありませんが、私にはどうもそうは思われない。失敗例も、成功例も含めて、いよいよ日本のことを深く掘り下げて真剣に考えていく、実に刺激の多いよい機会を与えられました。

平素、あまり身近に暮していて、問題意識にものぼってこないようなことが、一歩、海の外に出ることによって、ちがった風土、自然、景観、文化に触れることによって、もういちど考えなおしてみる問題の発見があり、新鮮な目で、モノを見つめるきっかけになることが、重要だと思うのです。

今年になって、山形大学の北村昌美という先生が、『森林と文化―シュヴァルツヴァルトの四季―』という、素晴しい本を書かれています。京都大学の林学科卒業といいますから、私の尊敬する四手井綱英先生のお弟子さんだと思います。この方が森林専門家の立場で、ドイツ各地の森林施業について研究して帰られ、その考えをまとめられた本です。その本に次のように書かれています。

「今は、世界的な関心を集めている環境破壊が、人間の仕業であることを、誰も疑うものはいますまいが、それの何倍もの意志の強さと、知識と、努力を必要とする環境保全のことも、これまた人間の仕業にほかな

らない。またさらに、一歩を進めて、緑ゆたかな環境をつくり出すことも、人間にとって可能であることを忘れてはならない。

西ドイツのケルンにあるグリーンベルトや、フランクルトの都市林を思いうかべてみよう。今は空港の地下駅から、列車でフランクフルト中央駅に出れるようになって、つかのまに通り過ぎてしまうため見のがしがちではあるが、この途中の森林の美しさは、まるで公園である。

しかし、この森林の美しさは、西ドイツでは決して特別な例ではない。そのことは、西ドイツでの滞在日数がたつにつれて次第にわかってくるのであるが、フランクフルト空港に西ドイツの第一歩を印した日本人にとって、この森林は、とりわけ鮮烈な印象を与えるのである。この森林は平地にある。そしてこのような平地の森林を周辺にもたない都市は、ヨーロッパでは、むしろさがすのが困難である。

ルール工業地帯はライン川下流部の東側にあり、その規模はヨーロッパ最大である。この工業地帯という名前から人々はどのような景観を連想するであろうか。わが国の場合は、切れ目なく続く家並、林立する煙突、暗く空をおおう煤煙、こういったものを思い浮かべるのが普通であろう。ところが、この多数の都市がひしめき、総計五五〇万もの人口をようするルール工業地帯では、信じがたいことに、森林や草地が、都市と都市の間を埋めているのである。（北海道の総人口に匹敵する人口が十勝の半分の面積に生活している空間とその景観・土地利用に驚かされるのです。）

たとえばエッセンという町は、そのなかの主要都市のひとつであるが、南の郊外にあるバルデナイ湖のほとりには、広大な森林が広がり、市民の憩いの場となっている。この中には、樹齢二〇〇年以上と思われる巨大なブナの林さえ見られるのである。まったくわが国では想像を絶することといってよいであろう。

それぞれの都市の持つ表情は、完全に人工的な街並だけでなく、このような森林環境をもふくめてなりたっていることに特に注目せねばならない。都市の大通りの片側は家並（やなみ）であるが、片側は森林とい

った配置は西ドイツあたりではごく普通に見られるもので、街並（まちなみ）と森林を切りはなして考えることはできない。（ベルリン市内に何ヵ所もこうした街区があるのです。）こういった多くの都市を見て、『緑ゆたかな、環境に恵まれた都市』と簡単にいってのけるいいかたは、どれほど間違ったいいかたであるかがわかる。都市も村落も国土も、建物や、道路や、農耕地や、森林を、すべてそのなかにふくんだ、そこに住む市民の絶大な持続的努力の上の文化的創造物として、とらえるべきであろう。

森林は、単に文化の根源という側面ばかりでなく、それ自体が、また文化的創造物としての側面を持つと考えられるのである。」

まったくの素人の私が、北村先生よりも数年早く、ヨーロッパ、ドイツに見出し、気がつき考えこんだ問題点を、学究者の立場から追試して貰ったようなもので、私の発見と判断に誤りないことの裏づけを得て、私にとってはまことに共感の多く、感銘の深い本であります。我われは、身近に高橋延清＊先生が苦心経営された、素晴しい富良野の東大演習林をもっている訳ですが、今までの林野庁や営林局のありかたというものは、まったく逆立ちして歩いてきた訳です。今までの森林組合あたりの仕事のしかたも、主体性がないから悪いところばかりをお手本にし、施業計画の考えかたを聞いてはいったいどうするつもりかと思っていましたが、案のじょう今日に及んで、がたがたやっています。

八、中国の生活

昭和五十一年の秋のことです。農業友好訪中団のひとりとして、はじめて中国を訪れました。

上海にはじまって五つの省を訪ね、その素晴しい農業発展の姿、農村生活の安定と向上ぶりにはまことに驚きと感銘の毎日でありました。中国農業が、建国僅か三十年のあいだによくぞここまで素晴しい躍進ぶり

を見せたものよと感心し、一部報告の遅れた農業という判断には、私はまったく否定的でありました。むしろ学ぶところが非常に多かったことであります。

しかし、毎日毎日の研修旅行の中で心にひっかかってくることは、森林植生のまったく見るべきものがないということでありました。皆無といってよいでありましょう。その農業を成立させ、支持している国土、自然に対する総合配慮において、いかに五〇〇〇年の文明を支えてきた風土とはいえ、いったいどういうことになっているのだろうか。「問題があるぞ」という疑問がしきりとわいてきました。こんなことで、農業が長続きすると考えているのであろうか、ということです。

雀と蝿がいないという報告は、ずいぶん聞かされていたので、別に驚きませんでした。雀の害をとり除く、蝿の害をとりのぞく、これは実に人々にわかりやすい、食糧の保全、あるいは予防衛生の向上を進める、素晴しい智恵だと思いますし、よくもやったものだと感心していました。まことにその通りで、たしかに雀も蝿も少ないことはわかりました。（但し、絶無ということでなくして、人民公社を数多く歩くうち、養豚のさかんなところでは、蝿もおり、雀も水田地帯ではやっぱり沢山いました。）

むしろ驚いたことは、都市のなかでも、農村のなかでも、いちどとして犬を見かけたことがなく、猫も見かけることがありませんでした。これは、ちょっと不思議に思いました。さらに、私はシベリヤ体験を持つものですから、シベリヤには、腹の白いカラスがいました。東北（昔の満州）は大陸の地続きでありますから、姿を見れるかと思っていましたが、まったくいない。もちろん、腹の黒いカラスも、長江流域から、黄河、永定河、遼河の流域を歩きながら、ずいぶん注意して歩いていましたが、ついに見かけることかできず、啼声も耳にしませんでした。

古い中国の都市の周囲には、墓地として土まんじゅうの広大な地区が必ずあったはずです。そこにはカラタチの木が植えられていました。ずい分そうした古い写真の面影が頭にこびりついています。その土まんじ

ゅう地区を、まったく見かけることかできません。すべて水田地帯に美事に変ってしまっていました。どうしたかというと、土葬を廃止して、現在は火葬に変り、納骨堂にお詣りするようになったというのです。だからカラタチの木は姿をかくし、そこをよいネグラとして巣づくりをしていた、カササギの姿もなくなったのです。

小鳥の声も、姿も見あたりません。万里の長城のある八達嶺の途中、たった一羽、半月のあいだ上海から沈陽に、沈陽から北京にと旅してきて、山中でやっと一羽飛んでいるのを見かけました。それだけです。

なぜだろう。私はそのことが気にかかり、考えました。カラスや、カササギが巣をつくれるような森林、あるいは樹木が、まったくないからではないかと、考えるようになりました。

九、中国の森林

新しい中国を研修して帰られたみなさんは、異口同音に、中国の緑は素晴しいと申します。たしかに都市の街路樹、農村あるいは沿道の並木の緑はゆたかです。とくに、北京のまちと空港のあいだの街路樹には、みなさんがたがすっかりびっくりして帰ってきておられます。北海道も少しは見習うべきだということで、堂垣内知事はわざわざ、道のその方面の職員を中国に派遣したことがあったぐらいです。まことにこっけいな話です。

私にいわせると、素人はこれでひっかかってしまうのです。よく見ると、樹種が単純で、数種類しかなく、しかも成長の早い樹種をねらっていますから、風で大きくゆれる樹ばかりです。これでは鳥は巣をつくっても、大揺れで地面にたたきおとされるし、安心して巣づくりができません。並木仕立てが主であって、およそ森とか、林とかいえるものは、まったく見当らないのです。（但し、明の十三陵といった地区は別です。

これは墓地です。墓地だから樹があるのです。しかし単純植生で、林床植生はまったくありません。）

私は、上海附近の人民公社の視察を終ってから、南京、済南と飛び、しかも飛行機は、渤海湾を右に見ながら北上、天津の上を飛んで、内蒙古山地の東部をかすめて、西から沈陽（昔の奉天）の空港に着きました。これは、まことに有難い空の旅で、長江の流れ、黄河の姿、有名な泰山（山東山地で、この南側が孔子の出身地）、大興安嶺の南部と、とにかく、それこそまばたきひとつ惜しい思いをしながら山々に、丘陵に、河畔に、都市に、森林植生はどうなっているか、植林の状況はどうか、このことに集中して観察を試みました。

どこのまちも、街路樹の緑は美しいのに、どういうことなのでしょう。山という山、丘という丘に緑が見られない。わずかに植林の努力の跡はたしかにわかります。しかし、それがせいぜいここ四、五年生といった感じぐらいのもので、異様な不自然さです。新中国になってからでも、すでに三十年はたっているのです。せめて、十五年生とか二十年生といった林相を求めましたが、ついに見ることができませんでした。

帰国してから、新中国の問題点として思ったのは、国土の広さが変らないのに、人口圧力だけはものすごく増大していること。向うの発表は八億といっているが、私はすでに十億に近いはずであると判断したこと。そしてこの森林植生の問題であります。私は南中国はまだ見ていないが、とにかく森林植生と土地利用の関係で、必ず深刻な問題をかかえこんでいる筈であるとの考えをみなさんに報告いたしました。

十、中国の土地利用

私は、前野茂著『ソ連獄窓十一年』（講談社学術文庫）第二巻を手にし、氏が、旧満州国政府の官史として、敗戦によって囚われの身となり、北鮮における長い幽囚のあとモスクワに送られるその車窓から見た、シベリア、モスクワに至る森林の観察と鋭い文明批評を一読して、はじめて漢族の土地利用の民族的性格を

知り、中国の森林化は容易でないものがあることに気がつきました。
「ハバロフスクを出発して車窓に見るものは、森また森の連続であった。草原だとか耕地といったものは、少し大げさにいうなら、森の切れ間に拡がっているとしか、私には感じられなかった。シベリアという地域そのものが、とてつもなく広いうえに、予想外の大森林が、これまた想像を超絶する規模でひろがっているので、事実広大な草原耕地も、森にはさまれた、ちっぽけなものと感じられたのかも知れない。
いずれにしても、その森林の規模の雄大さは、驚くべきものであった。一かかえも二かかえもあろうかと思われる赤松の巨木の林が、どこまでつづくかと思われる規模で連なっている。それは、人を威圧するような荘厳な眺めであるとともに、貧弱な森林資源しか持たない国の人間には、切ないほど羨ましい風景でもあった。
森林の多いのは、ただにシベリアだけでなく、ウラルを越え、欧露にはいっても同様で、モスクワ郊外まで、シベリアの森林はつづいているようであった。
満州（新中国の現東北）も、清朝末期までは大森林地帯であったことは、史上明らかであるが、漢人が入植しはじめるにおよび、逐次、森は焼き払われ、伐採され、ついに今日のように、その平らな地上は、まったく森林を見ることができないようになってしまった。
ロシア人のシベリア侵略の歴史も、漢人種の満州入植の歴史も、ほとんど、その時を同じくしながらいっぽうはこれほど森林が保存され、他方はあれほどまでに森林が滅ぼされてしまったということは、何に原因するのだろうか。」
私は、この一二五八頁に及ぶ大著を通読しましたが、僅か十数行のこの一節にいたって、絶句といってよいのか、二、三日はこのことで頭がいっぱいで、先に読み進むことができませんでした。中国とロシアの文明史を考えるにあたって、これほど適確にその対極点を示した文明論に、今まで目に触れたことがないだけ

に、その鋭い指摘に驚きと感動でいっぱいでした。著者が、極限の肉体的状況におかれながらも、よく一日本人として、冷静に見るべきものは見るという立派な態度に、明治人の剛毅さと、十一年という長期の幽囚に堪えぬき得たものと、感じいった次第です。

とにかく、新中国を考えるにあたって、その民族文化の基底にある森林思想の流れというものがどういうものであるか、考えこんでいるものです。下河辺淳＊氏の数次にわたる中国視察の結果報告からも、中国沙漠化の進捗率が現在も一年に十五パーセントに及んでいることを聞き、これは他人ごとではない、一衣帯水の日本の気象にも大きな影響をもたらすものと思います。

昭和五十六年八月　地域研究所年報第三号　旭川大学地域研究所

私の土地利用「開眼」（二）

かつてわれわれが当然の事実だと思い、基本的なデータとして取り扱ってきたもの、そのものの確かさに疑いが持たれるようになったのである。われわれの脚下に横たわっているひとつひとつの事実のその真疑が問われることになったのである。その真疑を判定するための、これまでのような仮定の尺度に疑いが持たれてきたといってもよい。「もの」をして「もの」の真実を語らしめなければならなくなったといってもよい。

いまでは、万事、人間中心に考え、人間は万物の霊長だということを自明のこととして信じてきたが、しかし、もしも人間が万物の霊長なら、人間は、人間の立場に立つと同時に他の万物の立場にも立たなければならない。山河大地、草木虫魚の立場に立つ、立つことができる。それが万物の霊長というものであろう。あらゆる力とは無縁のひとすじの光にも似た「知」を持つもの、それが人間というものであろう。

そうなってくると、素朴きわまる人間の立場から……人間だけに通ずる尺度を捨てて、自然にも神にも悪魔にも通ずる新たな尺度を考えなければならないということになる。もっと多元的な「もの」の見方、あるいは「もの」の見えかた、宇宙の見え方を会得しなければならないことになる。あるものだけを見る眼ではなくて、ないものが見えてくる眼、己れを見ることのできる眼、そういう方向への眼の進化が望ましいということになる。

岩田慶治著　人類学的宇宙観

十一、新中国に「森林法」成立

『北京周報』の一九八一年四月七日号に次のような記事がのりました。

「この数年間、中国政府はこれまでにもまして林業の発展を重視している。一九七九年（昭和五十四年）二月、全国人民代表大会常務委員会から森林法が公布されたが、これが中国はじめての林業法である」

新中国の建国三十年にして、ようやく森林政策が正面からとりあげられることになった訳です。日本の場合も、近代国家の発足を明治元年とすると、奇しくも明治の三十年（一八九七年）に森林法が制定されています。

新中国で森林法が制定されてから、中国の報道を注意して見ていると、従来とちがった生態学的視点にたった、森林的土地利用のありかたについての報道がしきりと目につくようになりました。たとえば五十六年八月十二日の朝日新聞には「揚子江洪水は乱伐が原因」という見出しで、「中国共産党機関紙人民日報が十九日伝えたところによると、先月中旬四川省を襲った揚子江上流の大洪水は、同地域の野放図な森林伐採が主な原因であることが判り、同省の党第一書記はこのほど重慶市での洪水調査会議の席上『今後は森林破壊を防ぐとともに、計画的に高地を森林に戻し生態バランスを保たなければならない』と訴えた。

中国では現在森林破壊によって全国的に沙漠化が進みつつあり、広大な国土のうち十三パーセントにあたる一二七万平方キロメートル（日本国土の三・四倍）がすでに完全に沙漠と化し、またその数倍の面積が沙漠化の一歩手前といわれる。四川省はもともと『国一番の米どころ』といわれ、最近は農業改革によって生産力も上っていると現政権の経済改革のお手本とされているが、一面で無理な耕地化が大規模な森林破壊をひき起し、今回の洪水につながった訳で、中国農業・林業の構造的な問題点をあらためて浮きぼりにしたかたちである。」

さらに同じ八月二十三日の北海道新聞は「小麦ピンチ・豪雨の中国黒龍江省」という見出しで、「ハルピン二十一日発の新華社電によると、黒龍江省三江平原と黒河地帯が豪雨で冠水がひどく、小麦の収穫に深刻な影響が出ている、同省も四川、雲南両省と同様、これまで森林が豊富だったが、近年木材需要増にともない集中的に森林伐採が進められてきたことに問題があると見られている」といった調子であります。

また、司馬遼太郎は『街道をゆく—中国・蜀のみち—』で、大事な報告を書いている。北京周辺の土壌の乾燥化が急激に進んでいることについてである。膨大な人口集中が進む北京の周辺農村部からの野菜供給について、非常に悲観的見方をしている。野菜の多くは栄養成長作物なので水の供給がその収量に深くかかわっているからである。

「その原因は、解放後の中国農業政策がいくつかの誤りをおかしたことに理由がある」と明確に指摘し、その重大なものとして、内蒙古草原の開墾をあげている。司馬はうまいことをいっている。

「中国の歴史は、農業帝国の側から書かれてきたために、（中国では歴史のことを鑑—かがみ—といい、日本の増鏡、大鏡もこの用例で、歴史を後代への規範とみている）紀元前から漢族が長城の外側の草原に進出して、その土を掘り返し農業をやった産業的土地利用上の悪業、過失については、ただの一行も書いていない。新中国成立以後、食糧増産の大方針は草原の開墾を大きなプログラムに組み入れた。モンゴル人には昔から禁忌として土は耕起してはならぬとされてきた。土は忽ち乾いて風塵を天に舞い上らせ、あとは草原の草も生えず沙漠になってしまう。（沙漠とは砂漠ではなくて水少なしの意である）しかも隣接する畑の土を連鎖的に乾燥させてしまう特質をもっている。この内蒙古から発した沙漠化が、今では北京周辺にまで及んできている」というのである。

司馬は既に内蒙古に接するモンゴル自治共和国を早くに旅行していて現地の歴史と実情にくわしく、（『街道をゆく』・シリーズ五「モンゴル紀行」）その指摘は鋭くマトをついているものと考える。私はさ

らに開墾政策だけではないと思っている。もともと中国解放軍は食糧の自給自活を原則としている。中ソの国境緊張で当然、解放軍が内蒙古国境線に増強されている筈である。新聞報道にあらわれる内蒙古の人口が解放前にくらべて異常に大きいことがそのことを示しており、常駐する解放軍による屯田的開墾が、モンゴルの放牧的土地利用のタブーを破って、農耕的土地利用が強行されている様子がうかがえるのである。したがって、今後の土地利用上の緊張関係まで頭にいれておく必要があるのではあるまいか。放牧的土地利用のテリトリーに対し、制限と破壊が加わる問題を真剣に考えておく必要があると思うのです。

十二、「封山育林」と「四傍緑化」

最近手許に届いた資料によると、中国は森林政策に二つの柱をたてているようであります。一つは「封山育林」であり、一つは「四傍緑化」であります。「封山育林」というのは、かんばつ防止と水源かん養、あるいは飛砂防止といった防護林帯の造成であります。黄塵万丈の黄砂の被害をくいとめるため、幅二〇〇キロメートル、延長千数百キロメートルという、緑の万里の長城ともいうべき大防護林帯をつくろうという計画も、そのひとつであります。

封山とは、山留の意味にもとれます。特に一般人の立入りを厳禁する。盗伐防止の意味もありますが、それ以外に遊牧民の立入禁止の意味が強いように思います。これはたまたま私が大行山脈を越え山西省に入って実見しました。山の植林地域の境界線上に自然石を杭状にたて白く塗ってあります。その近くを遊牧民が羊や山羊の群れを追っている姿を見ました。この羊、山羊のなかでもニホンカモシカと同じく山羊（乳の給源）が一番困りものなのです。彼らは木の葉を相当高いところまで喰べてしまう。これが育林にとって害をなします。防護林を必要とする地帯こそ、実はこの遊牧民の地帯ですから、この原則はまもられるべきだと

思います。

「四傍緑化」とは、村のそば、道路のそば、河川のそば、すべての空地に植樹をしようということです。これは従来でも徹底しています。中国を訪ねて目につく緑とは実はこれなのです。上海の人民公社で見た菜園のまわりの柳行季の原料になる柳まで、たくみな土地利用の集約性には感歎に値します。街路樹の萌芽など秋には燃料としてすべて刈りとられます。北京市の王府井あたりの街路樹の根まわりをちょっと掘り落して、少ない雨をそこに集水するような工夫など、日本とちがって智恵を働かせ無神経でないことに感心いたしました。

さらに育林に関して注目すべき施策がとられています。今、中国はエネルギー政策として石炭の出炭に努力しています。炭坑になくてはならぬのが坑木です。このため石炭産出量に応じて、一定の育林基金を拠出させるやりかたを実行しているようであります。これは素晴しいことだと思います。市場経済にまかせることなく、森林が社会会計の大事な要素として理解されていることは、私共に深く教えるところがあると思います。

たとえば日本でいえば、トイレットペーパーとか新聞に必ず森林保全税を課し、これを育林費として還元するやりかた、下流地域の水道使用者に対し、水道使用料の他に附加税を課し、これを財源として水源かん養林の維持費や、山村生活者の生活安定基金とするといった考えかたを実行することで、いつも川下の人々が川上の人々のくらしや仕事について、共感をもって感謝のくらしを自覚づけることです。今日の日本のように上流地域に巨大ダムをつくって住民追放を続けることは、亡国の道であると考えます。私のいっていることは何もおかしなことではないのです。現に空の航空運賃には石油消費税や、騒音その他の公害をもたらす対策のための財源となる税がとられているのです。山をまもり森林を充実させ、そこに土着して環境をまもって下さる方々に対し、バックペイするための措置が、毎日のくらしに絶対必要な水源維持、その森林育

成のために受益者が負担するのは当り前ではありませんか。そこに住む人々、まもっている人々の票があまりに少ないために、ひとつも政治にはねかえらない。だからこそ受益者が声をあげて協力支援するのが当り前です。われわれは現に、資源ナショナリズムで石油資源を持つＯＰＥＣによって、世界中がふりまわされている現状を身を以て体験しています。東南アジアからの木材輸入も、原木のままの供給がとめられ製材輸入への転換、あるいは原木伐採地への再植回復の義務化など、従来の市場経済概念の枠をはみ出したところに、事態は発展していっているではありませんか。

十三、人口激増と自然破壊

昭和三十年に、私の師匠である暉峻義等（てるおかぎとう）先生は、パリで開催の国際衛生会議のあとパリから北京に飛んでいます。周恩来の招きによるものです。暉峻先生は日本労働科学研究所の創設者で、戦前に中国東北でロマノフカに開拓科学研究所をつくり、昔の満州における開拓政策のありかた、衣・食・住の生活のありかたに就いて研究を進めていました。実は私自身、暉峻先生よりロマノフカ研究所をやらないかと奨められました。ある事情で実現しませんでしたが、今日でも貴重な実際的な研究であります。私が二十代の時暉峻先生の社会衛生学を読み、この医者は大変な医者だと感じ、東京に出てからもこの先生の側から離れないで勉強させて貰いました。私にとっての生涯の師のひとりであります。

暉峻先生が周恩来に勧告したことは、社会の安定化が進むと必ず人口が激増する。新中国のとるべき政策着眼は人口をどう抑制するかにかかっているということでした。国土が広がった訳ではない。資原は有限である。社会を国土と調和させる努力をしないと、せっかくの新建設があとからあとから崩れてゆくおそれがあると、具体的な施策について提案を行いました。

昭和二十年の中国人口四億五〇〇〇万、三十年には六億です。毛沢東の文革は人口抑制を否定しました。ついに昭和五十年に十億、世界人口の四分の一です。四人組追放で産児制限が実現して二人、さらに現在は一人という厳しい事態に追いこまれています。司馬遷の史記に「人衆（おう）きときは天に勝つ、天、定まりて亦能く人に勝つ」という有名な言葉がありますが、私は異常な人口圧力が環境と自然を破壊し、自然破壊によって、結局人間社会は報復を受けることを指摘していると思うのです。中国の人はちゃんと知っていると思うのです。これから先、さらに現代化を進めようとする中国にとって、今の人口抑制努力を続けると共に、正しい智恵深い土地利用のありかたに社会を調和させていく努力を、これまで以上に何十倍の努力と辛苦をかさねていくことが大事だと思います。現代化の進めかたを誤らないことを、隣人として心から願わざるを得ません。

十四、ボルガのほとりで

『ソ連獄窓十一年』の著者前野茂が、シベリア鉄道でモスクワに移送される途中、ロシアの森林の美事さに深い洞察を試みていることを前回ご紹介いたしましたが、一読して人一倍強く感動を受けたのは、他ならぬ私自身がロシアの森林労働の実際体験をもっていたからであります。

私の場合、昭和二十二年の厳冬の真っ只中、一月早々から八月いっぱいまで、冬春夏ぶっ通しの、長期の伐採体験をいたしました。これは北海道の造材労働としてはあり得ないことです。昭和はじめの造材といえば冬山造材が主力で、春の融雪増水期をまって、流送で搬出します。当時の十勝三股（東大雪）での冬季伐採の状況、また森林管理の実態を多少とも知っているものとして、ロシアというより、ヨーロッパの森林伐採、管理のありかたを、手足でおぼえ、からだで観察することができたことは、苦しい日々の労働であった

こととはいえ、今もって大きな収穫であったと思っています。

だいたいロシアの育林と管理の土台は、偉大な啓蒙君主ピヨートル大帝が、西ヨーロッパ旅行の成果として造船技術と共に船舶用材確保の必要を痛感し、ドイツ人専門家を招致して、森林行政の機構整備、森林の監督と維持にきびしい措置をとるようになったことがはじまりです。ドイツの林業経営の影響を深く受けております。ロシアの森林が社会主義の成果だと見るのは大間違いで、林相と植生を見て私はツアーの偉大な遺産だということにすぐ気がつきました。それがレーニン政権になってからも守られていることに感心しました。

私は敗戦を樺太で迎え、そこで抑留の身となり、将校団だけきり離されて、はじめウラジオストーク、ついで朝鮮、満州との国境に近いポシエット、それからシベリア鉄道で西へ西へと前野茂と同じコースを走り、ついにウラルを越えて、ウーハー、クイビシェフと、落ちついたのがドン川の上流部でロシア丘陵の一角タンボフ州のラーダというソ独戦の時のソ軍陣地です。ここの地下壕兵舎のラーゲル＊で一冬をすごし、翌年はミチューリンスクから南に下ったスターリニッツという黒土地帯のコルホーズで、一夏働きました。おかげで黒土の土をこの手で握ることが出来ました。結構埴性（粘土分）をもっており、タンボフあたりの氷河期の影響を受けた砂質ロームとはちがいます。ここでは表土をはがすと下から草炭がとれるところがあり、ブロックにきって乾燥し、燃料にしておりました。（石狩当別あたりの泥炭とはまた違います）はがした表土は干草を刻んでまぜ、型にいれて泥煉瓦をつくります。これで壁厚五十センチの住宅をつくっていました。ところがモグラのような大きなネズミがいて、この泥煉瓦の壁に穴をあけるのでいろいろな被害を出しておりました。またタンボフ附近の砂質ロームは、ロシア人が靴を手に下げてハダシで歩くのが目立ち、おかしなことをするなと思っていましたが、この方が歩きつかれないのです。石で舗装されたタンボフのまちに入ると足の裏をパタパタはたいて、すッと靴をはいて歩き出す。意外な合理性のある行動に妙に感心しました。

ここからまたウラルの方に戻り、エラブカに移動いたしました。ここでラーゲルの連中から毎回犠牲者を出すので「死の伐採隊」と怖れられていた、ボロショイ・ボール（大森林という意味）の伐採隊に、みずから志願して出かけます。ちょっとこのあたりの地理を説明いたします

ボルガ川が、はるかレニングラード附近に源流をもちモスクワの北部を東に流れ、カスピ海に向って南に大きくカーブを描く中流地点にカザンという大きな都市があります。タタール自治共和国の首都であり、この大学は有名な大学らしく、文豪トルストイも、レーニンもここの大学で学んでいます。この地帯は十三世紀から十六世紀まで、ジンギスカンによって攻略支配された地域で、ジンギスカンの孫バツー汗がボルゴグラード（スターリングラード）の西、サライに首都をおいて、キプチャク汗国と称えていたところで、モスクワ公国は勿論ながくその隷属下におかれていました。

その支配の歴史のなかで、モンゴル・タタールの血が色濃く残り、それでタタール自治共和国といっています。したがって回教文化の影響も深く、また回教寺院がのこっているのが目につきます。昭和五十年に私がブルガリアに参りはじめて判ったのですが、もともとこの地域は三、四世紀ごろには非スラブの遊牧民であるブルガール人の支配地域で、民族移動で一部がドナウ川を渡ってバルカン半島に進出し、八世紀ごろにはブルガリア王国をつくり、ビザンチンと対立しています。どうもボルガというのはこのブルガール人に関係ありそうであります。

十五、カザン地区で働く

このカザン附近で、東の方からカマ川という水量では本流に匹敵する大きな支流が、ボルガに合流しています。その水源はウラルの西、北ウラル台地であります。ラーゲルのあったエラブカも、ボロショイ・ボー

月別平均気温（昭和57年・理科年表）

℃	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
旭川	−8.5	−7.7	−2.8	4.7	11.5	16.2	20.3	20.4	15.2	8.5	1.5	−4.4	6.3
帯広	−8.5	−7.4	−2.2	5.1	10.9	14.5	18.4	19.6	15.5	9.1	2.2	−4.4	6.1
カザン	−13.1	−13.2	−7.2	3.8	12.0	17.6	19.4	17.7	11.1	3.5	−4.6	−10.3	3.1

ルも、このカマ川の沿岸にあります。最近のロシア地図を見ると、クイビシェフ近くのボルガに大きなダムがつくられて、クイビシェフ湖という巨大な人造湖ができたようであります。したがってエラブカ近くまでこの湖がオーバー・フローして、湖にほど近いまちになっているようです。しかもこの近くにカマグラードという工業都市が忽然と出現しているようです。例のソ連のアフガニスタン侵攻の際、侵攻速度があまりに早いのでアメリカ側が調べたところ、なんのことはないアメリカの資金と技術援助でつくられたこのカマグラードのトラック工場が稼動し、その成果があらわれたからだと、新聞に出ておりました。しかも対岸に油井が発見され大変な活況を呈しているようであります。ソ連の戦略は、伝統的に補給の完ぺき主義で、補給が万全でないと絶対に動かないようであります。その点はまことに立派だと思うのであります。クイビシェフではイタリアのフアイアットの資金と技術援助で乗用車生産が行われているようであります。これらの動きを見ていると、レーニンの時のゴスプラン＊が今も生きていて、直線的な産業化が進められているようで、あきれるぐらい感心いたします。結局、未だにアメリカに追いつけ、追いこせを、馬鹿の一つ覚えのようにやっていることであります。

理科年表を見て頂くと判りますが、北緯五十六度のカザンで年十二ヵ月平均気温が摂氏三・一度であります。旭川が六・三度、帯広が六・一度であります。これだけで気温のきびしさが判って頂けると思います。これでもハルピン並みで、バイカル附近のシベリアでは年平均がマイナスですからもっときびしいものがあります。

それでいて農業条件はどうかというと、融雪は五月に入ってからで、下旬から耕鋤、播種、六、七月は帯広より気温が高い、但し馬鈴薯など九月中に収穫を終らないと、十

月の雨で土はスコップがささらないほどガーンと凍結してしまいます。年間雨量が四三五ミリ、帯広の二分の一、旭川の三分の一、冷害による凶作というものは考えられません。何があるかといえは、ロシア全体がそうであるといえるようにかんばつによる凶作であります。レーニンは大地の上を火の車が走りまわると表現しています。私の体験でもまさにその通りでした。春がおそく秋が極端に早いとすれば、機械化、集団化以外に食糧増産と確保の道はない。なるほどと思いました。それはドン川のスターリニッツコルホーズで働いた時も、同じ体験をいたしました。

冬はどうかというと、毎日のように雪が降ります。ところが湿度が低いからデンプン粉のような雪でさっぱり積らない。雲はいつも低く垂れていて、頭のうえはいつも押えこまれている感じ。せまいラーゲル地下洞窟の中でじッとしていると頭がおかしくなってくる訳です。それで伐採にとび出したのですが、これがまた困るのです。日中、太陽の日差しの方向がつかめない。少しでも雲のうすいところがみな日差しの方向に見える。森の中に入って夢中になって働いていると、方角を見失ってしまう。いちど迷い出してあせり出すと、いよいよ方向がつかめなくなる。ですから森に入っていく時は、ちゃんと目印をつけておいて、出てくる時の方角を見失なわない注意が必要でありました。

これもウカツな話なのですが、シベリアからウラルを越えてヨーロッパロシアに移動してきたころは、丁度冬至、クリスマスのころです。我々には太陽というものは東から出て西に沈むという固定観念があります。ところが汽車の窓から見ていると、太陽は南から出て、ちょっと地平線に顔を出し、さっぱり高くならない。汽車は西に走っていますからそのまま沈んでしまう。北緯五十七度を走ってることに気がつきました。

こんなことですから、冬の日中時間が非常に短かい。ところが労働のノルマというものには夏冬の区別がない。一年中同じなのです。だからこの冬の伐採でノルマをしあげることに非常な困難がありました。いちばんつらい時節に伐採に出かけたことになります。しかもそれまでここのラーゲルでは、三ヵ月以上の伐採

労働はなかったそうです。それを我々は事故もおこさずに、あまりに立派にノルマをこなしたものですから、結局八ヵ月もやらされたということになります。しかしやりとげたものの立場からいえば、またとないありがたい体験をしてきたことになります。

十六、ボロショイ・ボール（大森林）

このボロショイ・ボールというのは、林相の主体は帝政時代に造林されたヨーロッパ赤松の人工林で、ボルガ河の船舶造船の用材林でした。美事な林相で、いずれも樹齢二〇〇年以上の林相です。一林画が一キロメートルと五〇〇メートルに整然と区画され、ざっと三〇〇林画ぐらいあったと記憶しています。

しかも、カマ川への斜面は「みずなら」を主力とした自然林で、林床植生も変化に富み、動物相も「あなぐま」とかいろいろ面白い動物にぶつかりました。一部にはサナトリウムという労働者のための保養施設が林内にありました。ロシア人のセックスタイムは昼間でだいたいが午後三時ごろです。このサナトリウムの林内伐採をやらされた時は、林内のロシア人のセックスタイムとぶつかり実にハラハラもので、段取りを計画的に進めないとノルマに支障を来すことがありました。それぐらい林内の管理が行き届いているということです。

しかし驚いたことには、これだけの大きな森林の伐採をやるのに、あるのはタポールという金太郎鉞＊と、ピラ＊という一メートル長さのふたりで両側から押してひく押しびき鋸、金偏のつくものはこれしかありません。あとは荷車と橇ぐらい。ガンタ＊、チンチヨ＊もトビ口（くち）＊も、チエーン＊もカン＊もない。これにはまったく恐れいりました。原始的といえばこれぐらい原始的なものはない。（ソ連全土の伐採労働はまったく同じ労働事情ですからおかしな国です。）われわれはこの八ヵ月のあいだに収容所長（ナチヤリ

エラブカ郊外のボロショイ・ボール（大森林）。
ヨーロッパ赤松が船舶用材として造林された。河畔にはシナやカシワの木が多い

ニク）に対し、ストライキを二回かけて作業拒否をしています。その時は向うさん、マンドリンではなくて重機関銃をもち出して、我々の座りこんでる目の前にこちらに銃口を向け、そこでの団体交渉です。機関銃はあっても、伐採をやるための道具がそろっていない。それでノルマをこなせというのです。

私は樺太で伐採の体験をもっている訳です。築城のために必要なだけの僅かな造材であっても、安全と能率のために、ひと通りの伐採道具は全部こしらえました。それがないという。枝払いをしてちゃんとした丸太にするためには、この金太郎鉞は、腰をまげてしにゃならぬ。こんな能率の悪い鉞はない。十勝ではサッテ鉞＊といって、柄の長い腰をまげないで能率のあがる鉞がある。ロシア人は数量計算がまったく苦手である。材積計算を単純にするため、二かかえもある九メートルの筏材を、行動の不自由な林内で、またウラ木から二メートルに玉伐り＊する薪材も、ぜんぶ高さ一メートルに「スタビレ」＊といって、そろえて積みあげるのです。この仕事は何でやるか、全部タンコンといって丸太棒です。これをガンタがわりに使って原木をまくるのですから大変です。斜面などは生命がけの仕事です。タンコンが一組でもつぶれたら、足場が悪いから原木の下敷になっておしまいです。まず生命はないと思わねばなりません。伐採ですが、彼らは日本のように皆伐などという犯罪的なことは絶対にやらない。（当時のことと限定しておきます。）戦後の日本の場合林学者や技術者は、全部一時は頭がおかしくなったのではないでしょうか。私はそうだと今でも思っています。但し富良野東大演習林は唯一例外です。よくもまあ平気で今日まで、気狂いのように皆伐一辺倒を進めてきたものだと思っています。お上がやるものですから民間まで権威にしたがい、これを是としてやってきたから困ったものです。私はその理由とするところはよくわかりませんが、水田農耕の連作モノカルチャー的土地利用を延長して森林にあてはめたものなのか、これは別のところで述べますが、戦後米軍の占領下において、アメリカを絶対視する事大主義が、林野独立採算制とか、もともと森林を資源としか考えず、金モウケ主義の森林乱伐の大本山、アメリカの森林思想を安易に受けいれた結果なのでしょうか。最近は赤松の病害虫だけでなく、杉のモノカルチャー的育林から、すでに九州の鹿児島から北九州に向って病害が進行中です。四国・中国と広がっていくのはどうも時間の問題のようです。この病害は目下のところ打つ手がないそうです。

高度成長で人手を失なった森林が、今になって農業の複合的土地利用がいわれると同じように、山林経済の複合化が叫ばれ、茸だ、山菜だといわれても、お上のいうように補助金につられて、ことごとく杉一辺倒の山にしてしまったものですから、茸のホダ木にする楢や櫟の木が一本もない。遠いところからホダ木を買って来なければならない。山村のくらしを破壊した、という笑えぬ悲劇が今ではテレビの画面からも伝わってきています。その山村の人は何と云っているか、「お上の指導の通りにやってきたのに、今になって何をいうか」と云っていました。

十七、八ヵ月の伐採労働

さて、話を戻して、当時のロシアの森林伐採はすべて擇伐です。刻印をうった木しか絶対に倒せないのです。これでまた苦労します。伐採にはまず「ウケ」＊をつくり、反対側から鋸をいれ伐っていきます。刻印のない他の木にひっかけたら大変です。ひっかけた木も倒せるならノルマははかどるのですが、それができない。どうするか。ひっかかった木を腹の方から二メートルづつ伐り落していくのです。倒した木の裏木を玉伐りするのとはワケがちがいます。太いモトから伐っていくのですから、五倍六倍も手間がかかり泣かされるのです。

だから、このウケつくりが伐採能率の決め手です。立木ぜんたいの重心線を確実につかみ、ウケをつくるのが私の仕事でした。倒したあとの作業の難易、事故のない段取工夫まで、一瞬のうちに決断することが大切でした。しかし、これが時間的経過まで見えるようになることは、決断する人間にとってホントウに気持のよいものでした。仕事するものの悦びともいえるものでしょう。雪の上に足をふまえて、木と問答する訳です。仕事をかさねているうちに、ちゃんと木が答えてくれるのです。木が許してくれるのです。

このウケをタポールでつくり、次に木口にあたるところから下の根株の樹皮は、すべて剥いで裸にするのです。その時松毛虫＊の幼虫がいるかどうかを丁寧に確認します。見つけた幼虫は大切に腰に下げた袋に納めます。これをラーゲルに持ち帰り、鉄板ストーブの上で焼きあげます。プツとふくれる。これがわれわれの大切な蛋白栄養源になります。木株の皮をむいて、このように幼虫を徹底して退治する努力をしているから、日本のような松毛虫の被害は考えられません。それだけではないのです。伐り払った枝は冬ですと雪の上に積み重ね、火をつけて全部焼却いたします。たとえ鉛筆ぐらいの小枝の先といえども、残さないで焼却するきびしさです。なにしろ雪の上ですからごまかしようもありません。それがいかに赤松とはいえ簡単に燃えきらないところに苦労のいる仕事でした。それでは夏はどうするか。枝類をぜんぶ一ヵ所に集め山にいたします。そのまわりに幅五十センチ、深さ五十センチの溝を掘ります。これも害虫予防のためで、さすが夏だけは火防上燃やすことはできません。彼らは林内清掃といっていますが、こうして林内管理が行き届き、森林を害虫からまもることに、非常に手間のかかるやりかたですが、いかに神経を使っているかがわかります。

こうした林内作業というものは、日本では考えられないことだけに驚歎しました。特に単純林としての人工林は自然林とちがい、その管理の手法に違いがなければならず、それだけ手間のかかることが、人工林の人工林たる所以でしよう。自然にさからって育林しようとするのですから、当然そうあるのがホントウのように思います。農業も林業も同じだということがわかります。

あかるくなった林内の林床には草苺が侵入してきてあたり一面に生えます。だいたい昼休みの一時間で飯盒にいっぱい摘みとれます。これが思わぬ伐採労働の余禄です。春先には外周林の白樺の幹に鉄板のクサビをうちこみ、下に水筒をおいておくと昼までに水筒一本の樹液がとれます。これがまた甘く丁度柿の風味がして、ビタミンの補給になります。白樺の葉を火に焙って口にするとこれが浅草海苔の風味がします。白樺

の樹液はロシア人もやっているらしく、木の上部に何年か前にやったらしい傷口が沢山見えます。そのことからこの生活の知恵を学んだのです。

私はボロショイ・ボールの八ヵ月を伐採作業だけに終始しましたが、運搬作業、筏組作業というのがあります。夏は大八車で九メートルの筏材をカマ川の崖ッぷちまで運び、これを要領よくカマ川の水面に落下させます。崖下の水上では九メートル角の筏に組む作業があります。これが一番危険な作業です。筏は白樺の小枝とクサビだけで組みあげます。細部の説明は省きますが驚くべき技術です。この筏が七組以上まとまると科の皮でよりあげた太縄でつなぎ、外輪船（川蒸汽船）がきてカマ川をひいてボルガを下っていきます。カマ川は冬は完全に凍結しますから、春になると飛行機をとばして爆弾をおとして氷を砕く。このあたりはいかにもロシアらしいと、頭上を飛ぶ飛行機を無心に仰いでいたことを思い出します。

十八、「森の歌」の原点を

私たちが復員帰国してからも、ロシアはスターリン統治下で大規模なかんばつに見舞われ、食糧危機に何回かあっています。それでスターリンは、ロシア全土に雄大なかんばつ防止林計画をたてた筈なのですが、この計画が順調に進みその成果があがったという情報はとんと耳にも目にも入ってきません。フルシチョフの西シベリア開発も失敗した話はありましたが、相変らず食糧政策はうまくいっていないようです。ショスタコービッチ＊の有名なオラトリオ「森の歌」は、ロシアの大地に平和が戻ってきた喜びと、大育林運動による森林恢復の進行を歌った筈のものですが、どうなっているのでしょうか。

私が心配しているのは森林伐採の機械化の出現です。日本もそうであるように、チェーンソーとかブルトーザーの出現です。私たちの時はピラとタポールの森林労働だからよかったのです。機械化による造材はな

にをもたらすか。日本でさえ若いオペレーターの作業ぶりを見ていると、まるで戦車にでものっているような気分で、土壌とか植生に対する注意深い取扱いはこれぽっちもありません。ましてや私たちが見てきたロシア人の機械の取扱いかた、その乱暴さはわれわれの神経からいえば想像を絶するものでありました。日本からシベリアの森林開発ということで、ブルトーザーが何百台となく毎年輸出されています。シベリア開発の大号令下に凍土地帯近くの無計画な森林皆伐が進められているのではないでしょうか。短かい夏の地表融水で、辛うじて生長を続けた素晴しいタイガ＊を、機械力でかたっぱしから皆伐していったら、どうなるでしょうか。開放空間に日照がどッと降りそそぎますから、見る見るうちに凍土は下に下にと抜けおちていって、いたるところに大きな陥没湖となってあらわれます。私はアラスカの上空を飛ぶたびに、その実例を見ています。シベリアの上空を飛んで観察した人の話にお前のいう通りだということを聞きました。こうしたことが、私たち北海道農業の異常気象につながらないという保証はどこにもない訳です。

私たちは戦後の下水道の普及と水洗化の実現で、資源無視と浪費の生活にならされて、トイレットペーパーをそれこそ湯水のように使用する習慣にドップリつかっています。おそろしいことです。ついこのあいだまで新聞紙とか黒チリをおとし紙にしていたのです。それが針葉樹材、広葉樹材のおかまいなしに、真白にさらしたトイレットペーパー浪費の時代への深まりは、何を意味するものか。ロシアばかりか、デンマークのような自由国圏のトイレットペーパーを見て、日本は政治の無智と商業政策に毒されて、たいへん不幸なくらしをしていると思います。資源とエネルギーを大事にする立場からも、再生不可能なトイレットペーパーをやめて、水洗化はそれこそ紙ではなく、水とか湯を使用し、おとし紙をなくすべきでないでしょうか。水なら循環可能であります。最近は土壌浄化法のシステムが開発されて、地下水とのローテーションも可能になりました。下水道施設のありかたそのものが批判されている時代であることを真剣に考えましょう。

金さえあれば資源を浪費してもよいということは、われわれ自身の生存の道を閉すことにもなりかねませ

ん。ロシアであろうが、アメリカであろうが、金があるから人さまの国の資源を浪費してよいということにはなりませんし、ロシアの素晴しい森林をまもってほしいし、あのオラトリオ「森の歌」の心をまもってほしいと、心から願うものであります。

（追記）北海タイムス五十七年六月二十七日日曜版の記事に「教訓生かし植林強化・中国長江上流の生々しい洪水の痛手」―北京共同―と、この洪水地区の復興にとりくむ状況の取材にはじめて外国人記者の訪問が許されたとある。四川省救災弁公室によると、昨年六月下旬から九月上旬にかけ六回にわたって起きた大洪水は、結局被災者二〇〇〇万人、死者行方不明者一三五八人、負傷一万四〇〇〇人。洪水からくみとった最大の教訓は植林の強化であった。『食糧をカナメとする』政策が森林乱伐による耕地化を進め、大洪水の誘因となったからだ。

四川省はこのため、三～五年以内に五十年代の森林（新中国成立の昭和二十四年当時のこと）に戻すことを目標に植林を進めている。植林と関連して田畑での単一作物栽培も反省されている。四川省は四人組追放後の経済モデルとされている地域である。ここで生態破壊の被害に気がついて、再建に努力していることが判る。日本の照葉樹林文化の原点は、この四川雲南の照葉樹林地帯にあるとされている。それだけに植林が直ちに森林の回復とはならないが、民生の安定と共に照葉樹林回復の持続的努力をのぞんでやまない。

昭和五十六年　地域研究所年報第四号　旭川大学地域研究所

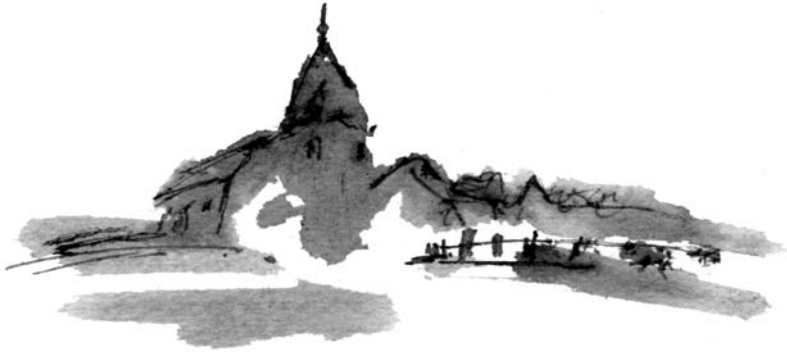
口は目ほどにモノをいい

―私の観光論―

昨年の夏、客を案内して、池田のワイン城で食事を共にした時のことである。国鉄機関庫わきの陸橋を、重いリュックを背にしたカニ学生たちが渡ってくるのが見えた。その学生たちが、私たちの横のテーブルについた。なんと驚いたのは、お一人様一万円也のビーフステーキを注文したことである。かれらの話を聞いてみると、昨夜は、帯広駅の廂（ひさし）の下ですごしたという。学生たちは「この一品」を味覚する機会を楽しむために、旅に出かけてきたという感じである。やがて、大学のキャンパスに戻れば、このことがクチコミで横に広がっていく。めいめいの家族たちにもクチコミされていく姿を、私は想像してみたのである。

観光宣伝には、ポスターやキャラバン隊だけではない、案外そういう面がある。こういう客を大切にすることが、観光の底を深くし、広げていくことになる。これからの観光は「ホンモノ」を食わせる観光、十勝平野の風土と産業にぴったりの「味覚の観光」を真剣に考えてみる必要がある。もっとつっこんだいいかたをすれば、大量生産の画一的な市場志向型生産でないもの、手づくりの新鮮でホンモノの「食べもの」が、その生産環境の現場に出かけてくることで口にすることができる、旅の歓びを提供することである。

例えば牛乳が余るということで、大型のチーズ工場をつくるという話がある。私は馬鹿の骨頂だと思っている。チーズなどは、人類にとって四千年の歴史があり、何百何千という種類があるものだ。それを私たちは大手メーカーに飼い馴らされて、僅か二、三種類しかないもののように思いちがいをしている。少数の生



産者が協同してつくれるものである。十勝にいけば何百種類のチーズにお目にかかれるようにしたらどんなものだろう。さいわい北方圏との交流の深まるなかで、各町村ごとに人材を派遣し、ノウ・ハウを手にして、今から生産競争をはじめたらどうか。生産したチーズは断じて市場には出さない。現地にこなければ、口にし、手にすることができないことを原則とする。

先ほどの客と食事した当日のステーキにはサラダに出たのが「ぎょうじゃにんにく」である。ウェーターの「ぎょうじゃにんにく」講釈のひとくさりに、客は感に堪えたように、この素晴しいレストランのもてなしに、「この次は家族全員を必ず連れてくる」といって、ナプキンで口を拭ったのである。

昭和五十六年一月一日　十勝毎日新聞

石勝線への提言

帯広・十勝の住民が、石勝線を主体的にどうつかまえるか、で波及効果の答えが出てくるのではないか。住民が、ただ新得―千歳空港の間が短くなったという程度でなく、真剣に石勝線と取り組み考えなければならないだろう。

東北本線は昭和四十三年に複線電化され、時速一二〇キロのスピードで走っている。しかし、本道は小樽―旭川間の函館本線が五十三年、千歳間が五十五年の電化で、複線化や電化が遅れている。石勝線の開業で道東の住民が将来展望をどう取り組むかという心構えが大事だ。

国鉄の方針はダイヤをみても札幌オンリーだ。下り線思想といえる。道東の地域が国鉄に協力するという前提で、利便の上に立った上り線思想を国鉄は考えてほしい。石勝線は二十年の歳月、七〇〇億円かけて完成した。四十三キロがトンネルで、日本で最大の"地下鉄道"だと考える。"黄金鉄道"ともいえ、これを生かすも殺すも住民の心構えひとつだろう。国鉄では年間六十六億円もの借金を三十年間、鉄道建設公団に支払わなければならないということだが、営業係数をゼロに持っていく赤字をなくす心構えも大事に思う。

これから千歳や札幌への用事は列車を使うことだ。国鉄オンリーの体制が必要に思う。国鉄側の営業態度の改善も必要だが、石勝線は床の間の飾り物には出来ない。大量輸送は鉄道の使命だ。

今年ドイツへ行ったが、高速道路が発達しているのにかかわらず、貨物輸送は鉄道が八十五％を占めてい

る。日本はアメリカの先取りで自動車輸送のウェートが高いがこれはおかしい。日本の経済はフローだけを考えストックをあまり考えない。石油が全盛でディーゼルが走っているが、電化の方がコストは安くなる。鉄道なくして北海道の発展はない。全国を走っている特急のポスターをみると、本道の列車は真っ黒だ。ススだらけで、乗っている人も顔が黒くなっているのだ。これに比べて電化している本州の車両はきれいだ。鉄道の電化は真剣に考えなくてはならない。五十年にブルガリアへ行ったが、あのような貧乏な国でもすべて電化が終っている。知事以下、よくこれまでがまんをしてきたものだ。

石勝線は電化さえすれば、東北線並みの一二〇キロを出せる。帯広―札幌間を二時間で結べるようになる。単線でもいいから釧路―千歳空港間の電化を進めるべきだ。われわれも協力したい。昭和三十六年に網走本線が池北線に格下げされた。いつのまにか急行もはずされたのに誰もネをあげない。十勝の人はおとなしい。池北線を網走本線に戻して石勝線と結び、網走、北見方面の客も石勝線に乗せる努力をすべきだ。旅客ばかりでなく貨物も新得経由で石勝線まわりで輸送するように考えた方がいい。網走、北見は道東にありながら旭川圏に組み込まれている。

攻撃は最大の防御という立場に立って、きちんとした道東の位置付けを持ち、貨物、旅客面とも国鉄には利益を上げてもらわなければならない。広尾線についても十勝港を射程に入れた戦略が必要だ。国鉄は合理化して経営改善をはからなければならないが、われわれも国鉄利用を促進するなど全力を挙げて応援する態度が必要でないか。

昭和五十六年九月二十六日　十勝毎日新聞

森林の中に農場あり
東ドイツ農業と矢島理論
―ドイツ民主共和国の表情―

近代農業の創始者アルブレヒト・テーア（一七五二～一八二八）は、プロシア王国に仕えて、オーデル河の近くに自然的悪条件と闘いながら農場を経営し、その実践の中から理論を完成させた。彼は近代の科学的合理的農業の創始者であり、また「農業経営学」の創始者でもあった。

彼の考えかたには二つの柱がある。一つは「地力均衡の理論」であり、他の一つは農業経営学の目的は「最高の持続的純収益」の実現にあるということであった。すなわち前提として地力均衡の基礎条件があって、その上に持続的な純収益をあげ得る農業経営の実現を目ざしたのである。

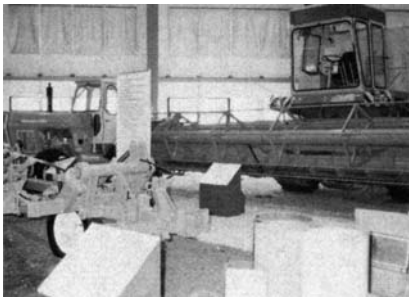
東ドイツの農業はテーアが活躍したかつての舞台である。今日社会主義国家として、当然生産関係の変革が行われ協同組合農場制が中心である。ソ連のアルテリ＊とはまったく異なり、農民の土地所有権はそのまま残し、利用権を協同組合に供出している。

しかし、私にはその生産力構造が、他の社会主義国あるいはアメリカのようなモノカルチャー（単作経営）の「落し穴」におちこんでいないかどうかが、非常に興味があり気にかかる問題点であった。

事実はどうであったか。頑固なぐらいテーアの教訓をまもり、完全な輪作方式が行われていたことである。

我々の歩いたエルベ河の流域地帯であるマグデブルグ県内の組合農場では、輪作方式は四年、五年、八年、十年というかたちがとられていた。

ライプチヒでは農業展（アグラ81）が盛大に開催されていたが、連日超満員の入場者だということだった。東ドイツ農業の発展ぶりを象徴するかのようだった



農業展に出品されていた農業機械。大型機械は外の広場に展示されている

牧畜が重要な農業部門だけに豚や牛が多数展示されていた

農業展会場の中で家畜共進会が行われていた。入賞した牛・馬・豚・緬羊が、上手なアナウンサーの紹介によるショウ的演出のもとに会場を一巡する

家畜共進会のスタンドは、一般の見物客でいっぱい。次々と登場する入賞の家畜を熱心に観察していた

一望見渡す限りの見事な秋まき小麦畑

経営面積の大型化、機械化が急速に進められているにもかかわらず、我々テーアの思想を支持するものとして、これこそ畑作的土地利用の王道を行くものとして感銘したのである。

観察した限りでは、一圃場が五十ヘクタールから六十ヘクタールで、北海道の殖民地区画＊でいえば、三百間角が二枚で一圃場ということになる。したがって一組合農場は五〇〇〇ヘクタールから六〇〇〇ヘクタールが農場の単位規模であって、東ドイツ政府の発表している数字と一致する。

マグデブルグ県は、西ドイツとの国境に接し、有名なブロッケン山（一〇〇〇メートル）を主峰とするハルツ山地をかかえ、北緯五十二度、海抜の平均高度は五十メートル、年平均降雨量は五六〇ミリ、年平均気温摂氏九・五度、夏雨型地帯である。参考までにしるすと、帯広の年間平均気温摂氏五・九度、年平均降雨量九〇〇ミリ、さらに帯広の三月の平均気温がマイナス二・四度であるのに対し、マグデブルグのそれはプラス三・九度。帯広が四月の平均温度がプラス五度であるのに対し、マグデブルグではプラス九度。この地帯の春耕が三月からはじまることは、このことから理解できる。また秋もこの地帯は長く、十一月の平均気温が帯広が一・九度、マグデブルグが四・七度であることからもわかる。

北大農学部名誉教授の矢島武先生は「テーアにもどれ」と、つぎのように力説している。

「ところで、テーアのいう純収益とは、粗収益から経営費を差引いたものにほかならない。純収益の最大をめざすためには、粗収益をできるだけ大きくし、しかも経営費の増加を抑えなければならない。

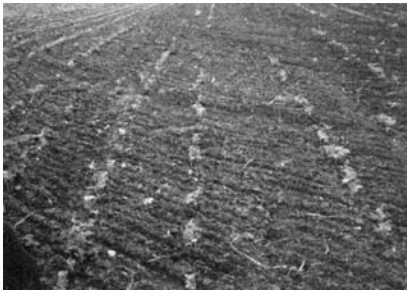
ところで粗収益とは、反収に単価をかけあわせたものだが、農産物の単価は、経営にとって与えられた条件であるから、経営にとって粗収益の増大は、反収の増加による以外に道はない。しかも、そこに経営費を増加させないでという条件があるとすれば、経営の内部循環を主軸とした地力の維持増進こそが、当然の帰結とならざるを得ないことになる。

こう見てくると、テーアが示した二本の柱、すなわち純収益説を認めるかぎり、地力均衡説を認めない訳

見渡す限りの甘藍。土壌は堆積土壌。十勝の火山灰土壌によく似ている

広大な黄花ルーピンの圃場の一角。
西暦紀元前1世紀ローマ郊外で播かれたという。ルーサンと飼料価値は変らず、蛋白質は大豆と同じ程度で、豚の飼料にもなる

そらまめの圃場。これもローマ農事暦に出てくる。ヨーロッパでは2000年に及ぶ作目。豆科である



白いんげんの圃場。北海道でいう「手亡」。さや豆野菜として供給している。土壌は堆積土壌である

混播牧草がサイロに積まれている。日本のトレンチサイロだが、パネルサイロといってよいかも知れない。季節によって多様に使用される

牛舎は清潔で、疾病や衛生にも注意しており部外者は入れない

にはいかないのである。そして純収益説を認めることは、『農業経営』を『企業』としてみることにほかならない。そこで、もし北海道の農業経営が企業性の高いものであり、かつそうでなければならぬとすれば当然『地力均衡』が最大の課題とならざるを得ない。

しかるに、農家を家計維持単位と考え、純収益ではなしに所得の安定確保がはかられればよいと規定するならば、以上に述べたことは当然の帰結とはされないことになる。

すなわち、このような農家にとっては、所得源が何にもとづくものであるかは、二の次の問題として取り扱われることである。

それは、農業からの所得であることは一向に必要としない。現にわが国では、総兼業化の様相を呈していることは周知の通りである。また農業からの所得にしても、かき集めでよい訳である。このような農家にとっては『地力均衡』は、その営農の前提とはなり得ないであろう。

はたせるかな、このような農家群の営農にあっては、内部循環の破壊―生態系の破壊―地力の衰退は顕在化してきているのである。」

矢島先生は、さらにこう強く主張する。

「しかしながら、チューネン・ブリンクマン＊流の考えかたにたてば、輪作は特定のゾーン（圏域）に成立する経営方式であって、一般性を持つものではないとする。すなわち、輪作という特定方式は、特定の集約度に対応するものであって、これより集約度の高いゾーン（圏域）では、いわゆる『自由式』農業が成立するものとした。

しかしながら、その理論の前提には、集約度とは、それぞれのゾーンの販売立地、購買立地の函数であり販売購買立地は、都市と市場からの距離によって決定される、という考えかたである。

このような考えかたに対し、私は距離による価格差を強調しすぎることは、今日のように交通手段が発達

りんごとさくらんぼが交互に植えられている果樹園。りんごは生食だけでなく、アップルワインとして供給されている。東ドイツではブドウの生産は少ないが、さくらんぼの並木があちこちにあった

シュレバー・ガルテン。英国ではアロットメントといい、日本では市民菜園と訳している。東ドイツのガルテンの普及度が、北欧３国やEC以上に高いのに驚いた。土地は市から借りたもの。休日ここに来て楽しむ

農村地帯の並木には、槲（アイヒ）、青ブナ、ボダイジュ（シナ）といった樹種が多い。アイヒは槲とされているが、葉の形は北海道のカシワである。ドングリは豚の飼料とするのが、中世以来の伝統である

マグデブルグとベルリンを結ぶ有名なアウトバーン高速道路。右側はヨーロッパ赤松、左側は混合林。右側の低いのはゲーテの詩に出てくる「のばら」で花のさかりだった

ブランデンブルグ門からほど近いところに日本近代文学を開いた文豪森鴎外が、医学を学び臨床研究をした病院がある

ドイツ民主共和国（東ドイツ）農林・食品産業省次官ツェーザー氏が、政務多忙の中を時間を割き「国民経済の一部としての農業の管理と計画」について貴重な報告をしてくれた

し、地元価格の形成に対して、輸送の比重が著しく低下している時代においてはあまり現実的でない。

それよりもむしろ、その場所、場所における土地そのものの性質を重視すべきことを主張する。いや私は主張してきたのである。すなわちそれぞれの土地の交通立地ではなく、その土地のもっている本源的性質にもとづき、その相対的有利性を活かすかたちで、土地利用方式が設定され、また設定されねばならぬとするものである。

市場からの距離による販売購買立地関係は、むしろ、二次的要因である。

もし、この考えかたが正しいとすれば、北方農業においては、その経営は輪作を基底とした有畜経営でなければならず、経営の内部循環はそこにある。いわば自己完結的な生態系に則ったものでなければならない。

今日、生態学への関心が異常に高まってきている。生物は他の生物および環境との層に調和ある関係を持つ限りにおいてのみ、生存を完了し得るのである。しかるに環境破壊は、この調和ある関係を破壊している。今日の状態をこのまま推移せしめたならば、やがて人類は滅亡せざるを得ないことは、ローマクラブ＊報告が指摘している通りである。」

ここに至って、矢島説にしたがうかぎり、北海道の土地利用の現状はこのままに推移してよいものだろうか。本来資本主義の経済体制といい、社会主義の経済体制といい、工業化を主軸とするものであって、近代化イコール工業化として進められている生産関係の位相の相違にすぎない。しかし生態学的観点が、ともにすっぽり抜け落ちているところに、問題があることにようやく人類が気がつきだしたのである。ローマクラブの報告書とは、人類共通の課題としてその問題点を提起し、我々につきつけているのである。

私はさきに新中国の農業を見て、その素晴しい飛躍と発展に驚くと共に、一面その国土利用における生態学的破壊に対する無思慮と、特に森林植生に対する無視の無惨さを痛感し、中国を去る日にあたり敢て中国農学会に対し『森林生態学』なる小冊子を呈してきたのである。昭和五十一年の秋のことである。

新中国に「森林法」がはじめて制定されたのは、昭和五十四年二月のことであり、昨年から『北京周報』の記事中に、しばしば農業的土地利用における生態的均衡を強調する論文がのるようになり、本年に至っては、八月以来揚子江の洪水、黄河上流の洪水、あるいは黒龍江省の洪水いずれも、大々的に森林の破壊にもとずくものとし、行き過ぎた耕地化を森林に回復すること、土地利用上の生態均衡を強調する報道が、北京発の報道として日本の新聞紙上にも伝えられるようになった。

東ドイツの農業を見て帰国後、人々に所感を求められて、私が一言に要約すればといっていることは、農場のまわりに森林があるのではなくて、森林地帯の中に農場が展開しているのが東ドイツの農業であるということである。しかも森林被覆率がわずかに二十パーセントと東ドイツ政府の資料は説明しているのであるが、その二十パーセントの森林景観が、我々の目にはそのように広大に映るのである。もってこの国の人々がいかに森林を大事にし、その育成に力を傾けているかが、ひしひしと伝わってくるのである。

特に私は林床植生に注意を払い、彼らの森林観を観察してきたのであるが、その生態的均衡に対する考慮が見事であることに感銘したのである。

農業的土地利用のモノカルチャーに問題があるように、森林的土地利用のモノカルチャー化についても、北海道の林業は深刻な反省をすべき時期にきていると思う。

今日に至ってようやく針葉樹一辺倒から広葉樹林の育成更新について考えるようになったが、森林と農業を土地利用上の一体性において把握しないタテ割行政、タテ割学問に対し、徹底した批判を加え、痛打を与えるべき時にきていると考える。

昭和五十六年　農事組合だより　北海道農業自立推進協議会

小規模な農協をめざして

〈北海道中札内村〉

はじめに

帯広行きのＤＣ９が羽田空港を旅立って九十分、二万年前の永河期の面影を残す圏谷や沼をかかえる美しい日高山脈を越えると、たちまち眼下に、碁盤の目のように五五〇メートル角に整然と区画された、一万平方キロメートルの十勝平野（北海道の七分の一の広さ）が、一望のもとに広がってくる。おそらく日本の空港の中で、いちばん壮大で、幾何学的な異色の景観に恵まれた空港ではないだろうか。

この新空港に着陸の際、進入態勢に入り、その視界に迫ってくる農村風景が、中札内村である。したがって、帯広空港から車で七、八分のところに中札内市街地がある。帯広市街地までは二十六キロメートルある。

この度、北海道新聞文学賞を受賞した吉田十四雄＊著『人間の土地』（全八冊の大河小説、四八〇〇枚）の舞台がこの村である。大正八年、著者の十四雄が十四才の時、父がこの地に六十ヘクタールの土地払下げを受け、農場を創設することになったので、三重県から家族と共に移住してきた。大正七年、それまで陸軍予定地として封鎖されていた附近の原野二万ヘクタールが、逐次、殖民地区画が実施され、開放されることになったからである。十四雄は十勝農学校を卒業し、獣医師の資格を得て、昭和六年ごろにはこの村を離れている。『人間の土地』は、この地に実在した片岡増五郎をモデルにしている。増五郎は明治三十九年ごろ

開拓者として入殖し、生涯の夢として追い続けた、一二五〇ヘクタールの土地を手にして大地主となる。ところが、敗戦後の農地解放で一挙にその夢を瓦解させ、昭和二十七年、彼は孤独のうちにこの世を去る。まさに、十勝開拓の断面史を小説化したものである。

梶浦氏の手腕で農協を再建

増五郎の死去したちょうどこの頃は、戦後の食糧危機、インフレ、経済復興の転換点にあたり、地域の総合農協である中札内村農業協同組合も、他の農協がそうであったように、このデフレ化の波のなかで、経済の行きづまりを告げる。そして、追い討ちをかけるように、昭和二十八、二十九、三十一年の連続冷害凶作で、ついに農協役員の総辞職という事態に追いこまれるのである。

梶浦福督氏

この時、これまで地域の農民運動一筋に活動してきた梶浦福督＊氏が組合長に選ばれる。彼は農民運動家として鍛えあげてきた独自の感覚をもって、そのころ当然視されていた政府の赤字農協再建制度を一蹴し、自主自立の再建の道を選んだ。「上からの制度としてつくられた農協」「支配と従属の農協」では、絶対に農業者は自立できない、モノとり、モノ貰いでは奴隷農業にすぎないと断言し、農業運動の実践と展開の上に、「自立と連帯、参画と参加の農協づくり」を目ざして、村づくりの歩みをはじめたのである。

彼が組合長となって一番先に手がけた仕事は、戦時中の農業会以来、物資の配給と統制経済になれきってしまった幹部職員を一挙に自発的

退職させたことである。古い体質の、しかも狭い農村社会の中で、このようなことを波乱もなくやってのけるあたりはまことに美事なのであった。

また、危機突破農民大会をしばしば開いて、組合員の意識の深化と、意思の統一をはかる一方、それまでに外部に大量に流出していた資金を農協に還流集中させて、自己資金の集積をはかった。たとえば、組合員には、市街地商店からの買物はすべて小切手を使用させて現金流動を迂回化させ、その把握をはかるなど、一銭一厘もおろそかにさせなかった。このやりかたにみられるように、当時としては、なかなか神経の行き届いた措置を次々と打ちだしていったのである。

なかでも、信用事業合理化のなかで、金融に行きづまった農協でありながら、あえて貯金の無制限払い出しの方針をうち出し、信用不安を一掃するなどの意表をついたやり方は、経済の循環は「現金」を「握りきんたま」のようにおさえていることではない、近代的な「契約」と「信用」の相互確立の上に、協同社会の実現があるということを実践を以て示した。こうして自主再建の道は三年をまたずして完了していくのである。

農事組合から生産小組合に

それから三十年、「第一次五ヵ年計画」に始まって今年は「第六次五ヵ年計画」の最終年次にあたる。この間、とり進めてきたいくつかの事例を紹介してみよう。

戦前からの部落農事組合は、行政機能の一部として、役場農協の下請機関として、食糧供出、納税枠の配分決定、金融債務の保証など、家父長を中心とした古い体質のものであった。農村民主化の徹底した推進は、まずここから手をつける必要があった。そこで、農民大会の決議で農事組合を再編し、生産小組合に改組し

た。実際に農業に従事する青年、婦人を加えたものとし、家族会議にはじまって、各戸の経営計画、生活設計に重点をおき、自主的な生産と生活の運動体にあらためたのである。

第二に、農民の地位の向上も人づくりからであるとの立場にたって、農民教育に力をいれ、村立の「独立定時制高校」設置を進めたほか、農協資金で奨学資金制度をつくり、大学進学まで農協が支援する途を開いた。スクール・バスの運行をはかり、小学校の統廃合も実現させた。また、農業機械化体系を中心にした農業経営の実践確立に寄与することを目的に「北海道畑作経営技術研究所」を設置し、北大、畜大の教授を中心に、村の農業団体、農業改良普及所、村農政担当者等が一体となって、将来の中札内農業のあるべき姿を追求すべく研究に励んだ。その予算は村と農協が二分の一ずつ負担した。矢島北大名誉教授を所長に、すでに二十数年一貫してその歩みを続け、研究と実践の成果はすべて組合員に報告還元するということが行われてきた。

農業の法人化をはかる

第三に、農業の法人化の推進である。他の産業社会では企業の主体は法人であり、資本、経営、労働の明確な分離をはかって、経営者から従業員に至るまで、給与の枠のなかで、それぞれの家計が営まれている。企業は企業として、純収益の最大化を目ざし、粗収入を大きくするとともに、経営費の支出増大をおさえるようあらゆる合理化を進めることに努力している。

一方、農業は、国民経済の中の重要産業であるといっても、土地利用を基盤とした生物生産である。したがって、自己完結的な生態系を前提としているから、テーアのいうように、あくまでも地力均衡を基礎条件として、最高の持続的な純収益の実現をはかりながら、近代産業として脱皮していかねばならない。

日本の農政は長い間、米麦を本位としたモノ行政（物量動員行政）であって、その担い手である農家の経済は家計維持単位であることにおしこめられていた。つまり、所得の確保安定のためには、兼業、出稼ぎ等あらゆる手段で補充させるという愚民化政策を進めて、土地利用産業として自立し、近代労働として確立することをあらゆる制限を加えて妨害してきたのである。そのため、意識的にか故意にかしらないが、農業生産の生産費引下げを軽視し、あらゆる術策を弄して、コスト意識の深化を妨げてきたといっても過言ではない。

そこで、農業も法人化することによって、経営と労働の制度的会計分離による土地生産性のみならず、産業としての労働生産性の向上をはかり、さらには他の産業社会におけるように、労働災害に対する安全管理と補償、社会保障の適用等、労働権の確立をめざそうということで、農業の構造と体質の変革を自らに課する運動を進めた。

この運動は農民運動が主体となり、農民同盟に事務局がおかれて強力に推進されていった。昭和三十四年にまず二つの共同畜舎をもった共同法人が発足した。昭和三十七年までには二十九社の農業法人が設立され、全農家の六十パーセントが何らかの法人の社員となった。このため、当初、農協の経理は「組合員勘定制度」によって農家経済の計画化と事務の効率化をとり進めてきたが、昭和四十五年からは、法人、個人を問わず、「法人勘定」によるコンピューターシステムによって事務が進められるようになった。今また、法人化システムをさらに拡大した形に移行する努力が続けられ、「原価意識」を明確にした農業の実現に向っている。法人化の運動、共同化の実践は、農業者の自己改革と、新たな組織化の道へとつながっていくのである。

現在は、法人事務局が農民同盟から農協の内部に移されているが、初期の法人組織の推移要項は次のとおりである。

一、性格

農業法人＝小組合

農業法人は、小組合組織が発展し充実した形態であり、完全な人格を持った生産組織である

二、規模

農業法人の規模は、既存の小組合とは必ずしも同じではない。十～二十戸程度、面積は一〇〇ヘクタール以上の組み合わせが望ましい

三、農業法人と農協

1、法的には農業法人―準組合員

構成員（農家）―正組合員

実質的には農業法人―正組合員

構成員（農家）―準組合員

2、農業に関する業務取引は、一切が法人を対象とする

信用部門―法人を対象、生活部門は個人ごと

購買部門―生産資材は法人を対象

販売部門―専属利用契約

利用部門、施設部門―概ね、右に同じ

指導部門―個別指導より集団指導へ、経営者労働の良質化、最高水準化を目ざす

四、農業法人と共済組合

1、すべての法人が対象となる

2、現行農業災害補償法の抜本的改正の途を開く

五、農業法人と農民同盟
　農業法人＝農民組織
六、農業法人と自治体、その他の団体
　農業に関する事項は、すべて法人が対象となる
七、農業法人と農家（構成員）
　1、出資―原則として現金
　2、賃貸借―賃貸借契約（賃貸料）

「よつば牛乳」と「中札内たまご」

第四に、農業が原料生産にとどまることなく、付加価値生産性の向上をはかるよう、アグリビジネスの分野を農業の生産組織のなかにとりこんだ。

戦後の農協発足以来馬鈴薯による澱粉製造事業は行われていたが、牛乳生産については、原料乳として帯広のY社とM社の両工場にもちこむだけであった。そこで、昭和三十年に農協独自の集乳施設を作り、一括集乳して乳質検査、秤量の適正化をはかり、個別販売ではなく、合乳による自主協販の途を開いた。さらに昭和三十五年の酪振法の不備を追求して、三十六年には食品加工工場を建設し、市乳年間九〇〇万本、製パン一日五〇〇〇食を生産するにいたった。

次いで農協資本による「十勝産業株式会社」（資本金七〇〇万円）を設立して、帯広を中心に販売ルートを求め、「十勝牛乳」の銘柄で売り出し、ついに乳業資本の牛乳を圧倒してしまった。このことが酪振法の一部改正につながり、生産者による生乳の協販事業が認められることになる。生産者自らが生産原価を把握

することができるようになると、乳業資本の独占を抑えて、四十一年には十勝管内八農協による「北海道協同乳業K・K」を実現した。現在は、これが全道的な「農協乳業K・K」に発展し、「よつば乳業」として本州にも愛用者の市場ができ進出販売をしている。

しかし、今日でも中札内の関係者は、農民同盟が中心となって、盟友がそれぞれ牛乳瓶を鞄にいれて、親類縁者をたよりに帯広市内に出かけ、自らの脚と汗で市場開拓に当たっている。混ぜもののない高濃度脂肪牛乳を消費者に直結配達することによって、生産者農民の実力を見せ、乳業資本をあわてさせた快挙の悦びを、今も懐しがっているのである。また、生産者と消費者の見えないところで行われる二次、三次の加工流通は、ともすると、かつて乳業資本が辿った道のように資本の独り歩きになりかねない憂慮を、今もかくしてはいない。資本とか工場の規模が、大きければ大きいほどよいというものではないのである。

「十勝産業K・K」は、市乳生産の販売から出発し、広域流通事業に移譲はしたが、本来的には農民農協と不離一体のもとに、農業者自らの二次、三次の加工流通を目ざして発足したものである。いわゆる農工コンビナート確立のとりくみとして、また循環農業への体質転換のためのものであった。

そこで、鶏卵の集荷、洗選卵のGPセンターを建設してこれらの産直販売の道を開き、札幌、釧路に「中札内たまご」の銘柄を確立し、消費の拡大をはかった。さらに、廃鶏の二次加工処理のためのスモーク・チキンの製造、食鶏正肉処理の開始、さらにはレンダリングプラント建設による蛋白質飼料製造、その他に、トラクター・車輛整備事業の農協からの分離移管、ガソリンスタンドの経営などその巾を広げている。目下、準備構想されているのが「産直農民流通センター」の開設である。自主流通の道を開くことを考えているのである。こうして、「十勝産業K・K」は、すでに二十億円以上の事業規模に達している。

事業部会による農協運営

第五に、農協事業推進のため、昭和三十六年から専門部会を設けたことである。当初は酪農、小家畜、中家畜、馬産、農産の五部会であった。この部会名でもわかるように、すでに三十五年ごろから営農のトラクター化は一部では始まってはいたが、畜耕手刈からトラクター化移行への過渡期でもあった。全面的にトラクター化、自走式時代へと機械化が進むのは昭和四十年以降のことである。

そこで、昭和四十年に、生産に直結した専門事業部会に改め、農協内部の協議機関という性格から脱皮して、経営の意思決定の性格をもたせるような方向づけに漸次変えていった。馬鈴薯部会に始まって、馬産、甜菜、酪農、養鶏、養豚、麦作、生活の八部会が設けられた。これらの部会が、土地利用の三・三・三農業確立運動の推進力となったのである。三・三・三農業とは、農業の専業化の確立を進めながら、荳科作目、禾本科作目、根菜類作目をそれぞれ輪作式の上にたって行い、単作化に陥らないようバランスのとれた土地利用をはかり、地力均衡を確立しようという運動で、十勝農業の慣習的ともいえる豆作偏重、地力掠奪農業からの脱却を目ざすものだった。

しかし、この頃の部会員は、まだ組合長の委嘱する者で構成されており、部会は農協業務の推進に参与、問題の処理、解決の方策を決定して、理事会に具申する場とされていた。理事会がこの具申を尊重し、経営にあたるという考え方である。

こうした部会活動の中で、地域複合化農業の根幹として、農業の規模拡大、専業経営の深化、循環生産の創出、さらに零細経営との連結システム化、機械銀行の設立などについて論議が交わされた。また、さらに、これらを内包化する「総合農協」という「制度としての農協」の新しい機能化の方向、展開のあり方、「農協の主人公」である組合員の位置づけ等について、検討と研究がつみ重ねられていった。

しかし、農協運動の一般情勢は、農村の解体と動揺のなかで、組合員の意思と決定による経営からいよいよ遠ざかりつつあり、経営至上主義の農協運営へと傾いていった。とくにオイルショック以降は、それが顕著化し、連合会以上の組織の肥大化、複雑化が一層進んで、商社化に独走する傾向さえ強くあらわれるようになった。しかも、米価をはじめとする農畜産物価格の請負要求から、経営全般にわたって請負体制化し、ひどいのになると政党選挙の請負に至るまで手をつけはじめた。農協事業というものが、組合員の請負機関として、要請もされない下請まで混然雑居とする様相を示すようになってきたのである。

今日、大衆化が進む社会の中で、主体を忘れて下請機関化していく農協は、かえって経営の合理化を阻み、必然的に組合と組合員との距離を遠くし、利害の対立を招くことになりかねない。また、生産組織の構造改革を、組合員の総力をあげて主体的に実現していかねばならぬ時、徒らに分派と分裂をくりかえしていては、その改革の時機を失うし、主人公である農業者の犠牲をも増大させかねない。各事業部会は、こうした周囲の情勢を深く見きわめ、研究と検討の結果、昭和五十年五月に、組合員全員参加による、協同運営管理システムとしての「農協事業部会制度」を主体とする農協運営に踏みきることになった。

本来、「制度としての農協」は、理事会が農協法にもとづく法律的責任を全面的にもって、農協運営にあたるものである。したがって、このことを否定するのではなく、この農協の場合は、事業部会が主体となって、実質的な当該事業、部会事業に道義的責任をもって当たろうというものである。少し乱暴な言い方をすれば、組合長及び理事は執行上の責任のハンコは押しなさい、あとは全員が参画して、作目別事業部会の活動決定方針にもとづいて、組合員全員が納得のいくような生産活動を進めていこうということになる。このことは自立ということが自律であることを意味している。自分達が共同の意思で決定したことについては、自分達の行動をきびしく課し、自分達の力がその計画を遂行していくのだという主体的な努力を意味する。タテマエの制度はそっとしておいて、ホンネは、組合員全員の力と意志を結集して、農協を運営していこう

ということだともいえる。

全国的に農業の総兼業化が大勢化して多種多様な生産構造化が進む中で、従来の伝統的、慣習的な硬直化した総合農協のあり方では、規模拡大と専業化を進める農業者のニーズを吸収しきれず、力のあるものだけが結集して、専門農協の設立化が進むことも考えられないことではない。また、規模拡大の機会に恵まれない零細経営の困難な壁をいかに打破していくかというニーズに対応できず、農業の退廃化を招きかねないでもない。

この作目別事業部会による農協運営は、専門農協の協同連合体として機能するとともに、零細経営については、企業農業との連結によって、その土地利用の効率化をはかり、労働力の農業内部での完全吸収を可能にするものと考えている。

また、この事業部会は、企業が独立採算の事業部制をとり、多種多様な商品生産にあたり、事業部門の協調的競争によって、企業全体の発展とその活性化をはかっている経営システムに相応しているといってよい。いずれにしても、新しい事業部会の仕組は、農業生産の拡大に即し、自主的に構造改革を進める独特の運営体制にある。そして、豆作、甜菜、馬鈴薯、酪農、畜産（養豚、養鶏）の五つの部会から、全組合員が自主的に部会を選び、加入するという原則にたっている。

部会の性格としては、次のことがあげられている。

一、農畜産物の計画的生産、加工、流通の一貫した近代化を促進する。

二、自主的事業参加の意志と行動を結合し、直接運営にあたる。

三、実質的運営権限を保有し、リスクをおそれず、当該運営の道義的責任を持つ。

（理事者は法律的責任を持つ）

四、事業公開の原則を貫き、農協の民主化をはかる。

このような、大胆ともいうべき全員参加の農協運営は、作目別事業部会の活動によって、零細家族経営（農村社会もまた徹底した長男長女社会に変貌し、昔の次三男までの労働力構成をもって家族農業にあたることは、もはや考えられなくなった）の克服、計画生産から計画加工流通への展開、合理的生産構造の創出と、主体的結合組織の発展を展望しているのである。

また、このような農協運営のあり方は、大地に足がついたものとなり、「タテマエとしての農協」はあくまでも「制度上」のもので、力が弱くて小さなものであってよいということを示している。したがって、中札内農協では「中札内村農業協同組合」の看板を探しても目だたない。「農業管理センター」といって、建物だけは近年立派なものになったが、あらゆる農業関係の団体、機関がここに雑居している。村の六十パーセントを占める農業法人の本社がすべてこの「農業管理センター」にあり、ここが、情報交換の場所であり、管理業務の行われる場所となっている。

婦人を主体に「生活協同組合」を発足

最後に、農協の購買店舗を廃止し、新たに婦人を主体とする生活協同組合を発足させたことである。

村の生産小組合活動、あるいは法人化運動の中で、婦人の自主活動が進められ、経営と家計の分離による生活の合理化が強力に進められてきた。たまたま、農協購買部が狭隘老朽化したこともあって、昭和四十一年にこれを農協マーケットとして新築する考えが出てきた。その時に、いっそのことこの機会に、婦人を主体とする生活協同組合を組織し、これに農協マーケットを移譲してはどうかということが提案されたのである。これに対し、家庭を守るべき婦人が、地域社会の中で、社会的経済的事業の主体となって活動することにまだ抵抗を感ずる者が一部にあり、また、いったいやっていけるのかという不安の空気もあって、結論は

直ちに出せなかった。

ところが、各地で農協購買部門の赤字が問題になり出してくると、日常生活の中で、実際に生活物資を購入しているのは婦人だから、その主体的担い手である婦人に農協マーケットをまかせて、農協は、その本来の目的である農業生産面の活動に集中専念していくのが本当ではないかという、新しい空気がもりあがってきた。

こうして検討と討議がかさねられた結果、生協発足の気運が熟し、昭和四十六年六月に生協の設立総会がもたれたのである。だが、設立認可申請の事務を進める段になると、農協マーケットの廃止、生協マーケットの設立ということは前例がないとのことで、系統連合会、また許認可権を持つ道民生部の双方からクレームがつき、再びもたついた。ようやく正式認可にこぎつけたのが、一年以上もすぎた翌四十七年七月のことであった。婦人は政治的参政権は得てはいたが、新たに社会的経済的参政権を得て、実際の活動をはじめるのはこの生協活動がはじめてである。発足当初の参加組合員数は三六〇名、役員数二十二名、職員数十四名ではじまった。常勤役員はおかず非常勤無報酬とし、支配人をおいて運営を進めることとした。

会員は、三十余の班活動体を組織し、年々その活動が活発化し、五十三年には村内の全世帯数一〇〇〇に対して、参加組合員数七一七名に達するに至った。その数字に活動の成果が歴然とあらわれている。仕入商品の計画的適正化、不良在庫の一掃と在庫管理の徹底、消費者の主体的立場にたった厳しい効率的仕入れの実現、自家生産物の調理技術の向上、食事のインスタント化・他律化の排除と学習活動の徹底、レシートによる割戻し、会員の建設的提案の即時実行、カゴ持運動によるノー包装による経費の節減等、生協運動を中心とする婦人活動には、目ざましいものがあった。

こうして、「生協」は地域の生活運動として完全に定着した。その成果を数字でみると、四十九年の出資金三〇〇万円は会員数の倍増により五十三年には一〇〇〇万円となり、取扱高も四十九年の三億二〇〇〇万

円から五十三年には五億五〇〇〇万円、利用割戻しも四十九年の八一九万円から五十三年の一七四〇万円と大きなものとなっている。

こうした動きは、従来の農村社会が、やがて市民社会へと成熟していくエネルギーを示し、地域社会を、開かれた市民社会に創出していくにはどうあるべきか、農村、農業の今後の主体的な構造改革とも関連があるものと思われる。現に、老令化、長男長女社会化あるいは余暇社会化の動きともかかわりあって、すべてカネ、モノで解決しようとする社会福祉から、モノ、カネでない地域福祉をどう実現していくかという論議が行われていることに深い興味と関心を持つのである。

おわりに

『農協創立三十年にあたって』という梶浦組合長の一文の中から、その言葉を引用して結びとしたい。

「農民みずから起ちあがり、人間を尊重する農業と、民主的近代的農村社会を作るための王道を、総員参加の農協事業に求めたことは、歴史の審判にまかせたい。

しかし三十年を経過しても、すべては緒についたといってもよい程度である。

『巧みな集中』と『美事な分散』は協同組合の生命である。民主主義の原型は協同組合であろう。二十一世紀に通ずる新しい道は、通いなれたいつか来た道ではない。男は夢を追い、女性は現実に生きる。再々開発の、ロマンにみちた市民社会は、農業と知的な産業、文化の共存交流する、二十一世紀の農村であろう」と。

昭和五十七年　『農事組合だより』　北海道農業自立推進協議会

弱肉強食の論理から棲み分けの論理へ

―地域主義の変貌―

進化論の是非

三浦朱門がこのごろ、こんなことを書いているのを読みました。

「ずっと昔に読んだ小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の文章に、松江中学の教師になって、そこで（ダーウィンの）進化論が堂々と教えられている事実に驚いた」というくだりがあった。

進化論は今日でも依然として仮説である。それが今日の生物界の状況の説明として一番好都合だということはあっても、科学として証明されている訳ではない。また欧米ではキリスト教の反対もあり―聖書では宇宙のはじめに、神が万物（人も鳥もケモノも）をつくったことになっている―最近まで高校あたりでは、進化論を教えない州が米国にあるほどだ。

冗談ではなく、アメリカでは現に今でも進化論を教える教えないで、裁判で争っている州がいくつかあって（教育には連邦政府が干渉できない）、これがすでにスペースシャトルを三回もとばしている国の現実である。そればかりではない、当選したばかりのレーガン大統領の発言に、「やはり学校で進化論を教えるのはけしからん、神を冒涜するものだ」と言っているのを新聞で読み驚いた。ところで私たちはどうかというと、明治の人である小泉八雲が驚いたぐらいだから、ひとつの仮説とは思っていない。証明しつくされた決

定論として受けとっており、そういうふうに教えこまれてきている訳です。そのことを疑ってみたこともない。

ダーウィンの進化論というのは、生物社会は弱肉強食の生存競争の中で優勝劣敗が進み、その結果として最適者生存という自然淘汰が行われてきた。またそれぞれの生物は突然変異により進化が進み今日に至っている。しかもその発想は個体中心の個体起源の進化論で組みたてられている。これが正当派進化論の特徴となっています。

今年はダーウィンが死んでちょうど百年になります。ところが今から四十数年前に、世界的な学者ダーウィンに文句をつけた日本の学者がいます。その人は京都大学の今西錦司＊先生です。日本では生物探検隊の先導者であります。本人は戦争がだんだんはげしくなっていくことを予感して、遺書のつもりで書いたというのが、『生物の世界』という本であります。「ダーウィンは『種の起原』といっているが、少しも種のことを説明していないではないか。自然淘汰などとバカなことをいっているが、人為淘汰をゴッチャにして、考えちがいしているのではないか。生物の進化というものは、地質学的な悠久な時間の中で行われてきたことで、そんなセッカチな出来ごとではないということ、生物の進化とは個体起源のものではなく、種社会を単位とした生物世界の全体的な歴史的発展を説明するものでなければならないこと」、こうして提起されたのが『棲み分け』の理論です。

私は、今西先生に『棲み分け』理論というものを示唆されてから、自然とか生物社会とか、土地利用を考える場合、実に新鮮な目で見ることができるようになりました。別に今西進化論が判ったとは思いませんが、自然というものを見る目が非常に変ったことはまちがいありません。しかも今西先生は、進化とはダーウィンのいうように外の力によって起るものではなく、もともとその種にそなわった自力で変るべくして変ることであり、生物の進化も、主体のあらわした自己運動の軌跡であるというのです。さらに、人間に主体性を

認めるなら、当然、動植物、生物全体にも主体性を認めるべきだと主張されているのです。これはもう大変な理論というか思想であります。

ニュートンを克服

もうひとつ私の腹の中では、ニュートンを克服せねばならぬという考えをもち続けていました。若い時田辺元＊の『自然科学概論』『科学と常識の間』とかいう本を読んで、私たちが旧制中学で教わった物理学というのは、結局ニュートンの古典物理学から一歩も出ていないことが判ったのです。田辺元は、もともと数学から哲学に移った人ですから、やたらと高等数学が出てくるのです。唯物論か唯心論かと一生懸命苦しんでいる時ですから、数式をとばして文字だけで読むのです。何回も何回もくり返して読みました。田辺の本というのはだいたいが一行一行読みながらそこで問い、そこで答えを得ていくことによって哲学するように書かれているのです。絶対に読み下しができないようなしるしかたでありました。

田辺元のおかげでニールス・ボーアの相補性原理、あるいはハイゼンベルグの不確定性原理といったことをかじることができました。今でいう量子力学の世界です。電子顕微鏡下の微視的体系の物理学で、今日の電子工学というのは、まったくこの発展の上にある訳です。おかげでニュートン物理学の素朴な理論のもとで、決定論的な自然の見かた、モノの考えかたから抜け出すことができました。なにかしらもっと自由にものを考える、しばられないで世の中を考え、社会を考え、自然を見つめるという心がまえのようなものができたことを覚えています。

さらに、このごろ狭義の経済学に対して広義の経済学を主張している玉野井芳郎先生も、「今日までの近代経済学も、マルクス経済学も、そもそもその『科学モデル』を暗黙のうちにニュートンの古典物理学にお

手本を求めてきたのではないか」とそう断定しています。第一に経済学はその出発点からリサイクルに必要なエネルギー、動力的基礎の問題を見落していたということ、第二に、時間の非可逆性ということを見落してきたということ、第三に、ネガのアウトプットを無視できるものとして取扱ってきたということ。だからエコロジーのことが欠落したり、地球の開放定常系におけるエントロピーの異常な増高に対して解答を出せない無能化が露呈しつつあるのだと、実にはげしく追究しています。それは生物世界の生存にかかわることだと、経済学者の立場から問うているのであります。

知恵の修練の大切さ

まちづくりとして、むらづくりとして、町や村の産業をどうするかと考えていく場合に、やはりその土地、その土地の土地利用のありかた、資源の活用のしかた、単なる知識ではないもの、知恵と私は言いたいのですが、その知恵の泉を豊かにしておかないと、見えるものも見えてこないように私には思えるのです。知恵の修練といってもよいかもしれません。私たちが仕事をしていく場合、従来の知識を固定させた考えかた、行政の枠でしばりつけられた考えかたでいると、大変な間違いをおかすのではないかという気持が強いのです。冒頭の話で突拍子もないことを申しあげたかもしれませんが、まずそういうことをお伝えしたかったからです。

すこし具体的な話に移りたいと思います。町や村の役場にいて、行政の立場から商工業の発展を考えていこうとする場合、どうしても思考の方法が生産者の論理でモノを見ているということです。私にしてもそうです。生産者の論理とは何か。モノを作って売るということ、売れないモノを作ってもしょうがないと考えること、だから売れるものを作るということ、売ってもモウからなければ困ると考えること、モウけるため

に作りモウかるような作り方をするということ、ひどいのはモウかりさえすればよいという作り方をすること、こうなると思います。

しかしそうした思考法の裏側に、われわれはあまりに市場経済に魅せられて、巨大な市場経済という化物に振り回されて、あとのことは何も見えないといったこともあると思うのです。光だけが見えて、光の影が見えないことだってあると思います。たとえば、昔は、といってもついこの間までの話なのですが、どこの町にもつくり酒屋があり、つくり味噌、つくり醤油の工場がありました。そしてそこにはそれぞれの持味のあるものが作られていました。それがいつの間にか次々と消えていって、全道市場、全国市場というふうに拡大し、それが世の中だと思いこみ、目下のところは酒、味噌、醤油のはてにいたるまで、どこの町どこの店にいっても目につくものは本土で作られた巨大資本の銘柄品ばかりといった感じになり、誰もそれを怪しまない、それが当り前といった感じの世の中になってしまいました。

顔の見えない商品群

このことは更に進むとアメリカの米でアメリカでで作られた日本酒、アメリカの大豆でアメリカで作られた味噌、そして醤油という巨大メーカーの銘柄商品を買わされることに気がついていないことです。そんな馬鹿なことをと思われるかもしれないが、市場経済における資本の論理というものはそういうものなのです。現にバターやチーズでも、某社や某社の製品をすべて北海道の牛乳を原料として作られていると思っているかもしれないが、冗談じゃない。オーストラリアの牧場でオーストラリアの牛乳で作られた、あるいはカナダで同じ手口で作られたバターやチーズが、従来品とまったく同じデザインのカートンに入って市場に出まわっているのです。それをやっているのが日本の資本です。十勝の農業にもっとも関係の深い乳業資本の動

きというものは、こんなところまでいってしまっているのです。

その結果どういうことが現れてくるか。商品の規格化、画一化ということです。根室の羅臼に行っても、鹿児島の指宿に行っても、同じ味噌、醤油を食わされるということです。市場占拠率を争うため寡占化が進み、少数のメーカーで押えられてしまう。これを消費者の立場からいえば、食べ物の規格化と味覚の強制化がいっそう進むという、まことに面白くない文化になっていくばかりです。

チーズなどよい例で、昭和三十年ごろまで、チーズの方がバターよりぐーんと安かった。チーズなど食べる人が少なかった。（ところで聖武天皇も光明皇后もチーズを食べていた。ちゃんと記録がのこっている。）チーズというのは牛乳を原料とした味噌と思えばよい訳です。このごろ、ようやく各地でチーズの手作りがはじまりました。素晴しいことだと思っています。チーズに長い間なじんできたヨーロッパでは、チーズなど何百種（約八〇〇種といわれる）とある訳です。われわれはチーズとは、それもプロセスチーズを、本当のチーズだとメーカーサイドによって限定して飼いならされてしまっている訳です。恐ろしいことです。ソーセージも、ソーセージではない。ソーセージのかたちをした色をつけたカマボコで飼いならされてしまっている。自分たちの風土なり、生活にあった味覚を育てていくことができなくなっている。消費者の主体性の喪失、そんなものは国際化でも何でもありません。

市場占拠を進めるために何が行われるか、長期の保存、貯蔵性能を高め、長距離輸送による変質を防ぐためにからくりをする。たとえば防腐剤です。いかにも鮮度がよいように見せるため、見た目も美しく発色をよくするため薬品を使用する。いよいよホンモノの味と質を失っていくばかりです。

酒などその大部分が醸造用のアルコールに色や香りでごまかしたもの。ビールといえばビール麦だけではない、コンスターチから砕米まで混ぜて作られています。昔はそんな酒やビールなど考えることもできませんでした。大量生産、大量販売ということで、ホンモノが消えてマガイモノがまかり通る世の中になってし

まいました。

話をちょっと変えますが、昨年のこと、実業之日本社から、目下ＮＨＫテレビで放映中の『峠の群像』の原作者堺屋太一が『群化の構図』、引き続いて『実例・群化の構図―地域開化の構図―』という二冊の本を出しています。要点をいいますと、

一、石油の時代は終ったということ。

二、したがって神話化されてきた資源多消費型、大規模大量生産と使い捨て大量消費の時代も終ったということ。

三、規模の利益（スケール・メリット）を追いかける時代も終ったということ。

四、エネルギー無限、資源過剰時代も終ったということ。

さらにこういうことを言ってます。

「一つの財の価値は、使用される資源、資本、労働と知恵とで構成される。石油文明の時代には資源の比重が拡大したが、これからは知恵の比重が拡大するだろう。不足化する資源を節約して、豊富な知恵を使う生活が指向される。一般衣料、住宅、家具、食料品に、知恵の価値（ソフトグッズ）がどんどん入りこんでくる。工業社会の次に来る脱工業社会とは、知恵の文化の時代と定義できる。知恵の文化は、画一化された規格大量生産からは生れてこない。知恵の文化（ソフトグッズ）の原泉は、商品の差別性と稀少性にあるのだから、どうしても多種少量生産とならざるを得ない」と言い切っているのです。

『油断』にはじまって『団塊の世代』を書いた通産省出身のエリート作家が、こう言い出したのです。これは大変なことです。これはトフラーの『第三の波』に指摘していることと、非常に共通していることに注目してよいと思うのです。

もうひとつ付け加えますと、第二部の現地にみる「群化の構図・実例第一」として、そのお手本は北海道

の池田町だといって、われわれおひざ元の、ワインによるまちづくりのことが紹介されているのです。

腰をおとした生産技術

私は一昨年沖縄協会主催の島おこし運動の催しに、玉野井先生のお誘いで出かけました。会長の茅誠司＊夫妻、高山英華＊先生といったお歴々にまじって、まちまちで地元の方々の熱心な討議をきき、参加者の立場からいささかお手伝いさせて頂きました。驚いたことにはこの運動の原点が、私も参加した昭和五十年の「池田シンポジウム」だったのです。この内発的、主体的な地域の掘りおこし運動が沖縄まで広がっていることに感動した次第です。

話を戻しますが、従来の生産者の論理からの展開は、今は大きな構造的な変換点にさしかかっているとしきりに考えているものです。それでこのごろはシューマッハーの『スモール・イズ・ビューティフル』（小さいことはよいことである）にはじまって、中間技術、適正技術、地縁技術といったことが言われ出し、大相撲でいいますと、ぐっと腰をおとしたかまえかた、そういう生産技術のことが、正面からとりあげられて、通産省あたりまでが力を入れるようになっています。

このことは、私に言わせれば、生産者の論理だけでモノを見ていくのではなく、消費者の論理からモノのを見ていくことが大切だと考えるべきで、時代が変化してきていると思うのです。私は毎年、北海道農業自立推進協議会＊主催の「村づくり移動大学」のコーディネーターとしてお手伝いをいたしております。北海道から五十人以上の青壮年と一緒になって、本州の旅行に出かけていきます。今ではこの三月で九十八回の回を重ね、卒業生も五〇〇〇名になりました。二十数年続いていますから大変なことだと思っています。

九州で一番大きい都市は北九州市ですが、ここに生活協同組合があります。この生協組織を作ったきっか

けが耶馬渓町下郷農協であります。この農協は、福沢諭吉の出身地中津の町が河口となっている山国川、この川の上流で、有名な青の洞門よりさらに奥に入った山峡の村です。どこに農地があるのかと思うようなところです。最初ここの戦後開拓酪農家の牛乳をどこに販路を求めるかということで、北九州市の親類縁者のツテを求めて、その方々に現地に生協をつくって貰ったのです。この牛乳がゴマかしがないというので檀家としての組合員が拡大しました。

そのうち卵はないのか、野菜はないのか、醤油はないのかというふうになり、しかも有機農法で農薬を使わない考え方の農業をやっているものですから檀家がふえ、複合経営のレパートリーがひろがりました。はじめは自家用の味噌、醤油としてつくっていたものが、それがよい、それももってこいということで、回収した一升瓶につめ、ラベルもない醤油が、注文が多くて困っているというのです。もともと自家用の味噌醤油工場ですから掘立の鉄板ぶきの小屋で、蒸気発生装置などは近代的なものですが、工場そのものは金をかけてない。こうして県下の指導的農協に発展している。農協が消費者を組織して生協をつくったということは、非常に面白い事例だと思います。

平松知事（元通産官僚）がとりあげている大分県の一村一品運動。この発想の原点は日田郡大山町農協がはじめたＮＰＯ運動です。蜂の巣城で有名な、例の下筌ダムの下流の山村です。ここも下郷と同じ、村の両側が見あげるばかりの急傾斜の杉山です。農協にいっても職員は指で数えるほどしかいない。集荷、選別、出荷までの作業は、ぜんぶ生産者である組合員の仕事であり責任になっている。面白い農協です。昨年ここの矢幡組合長がわざわざ私のところに訪ねてこられました。それで池田町のワイン城に案内し、大石部長からいろいろ話を聞かせて頂きました。その時「ぎょうじゃにんにく」のサラダが出され、これは素晴しいということになり、これがヒントで今年三月にいったら「ふきのとう」が選別場に並んでいるのです。高級料理店の食材として売れるというのです。山峡の知恵です。ここの農業はメンタル農業なのだといってました。

単なるモノを食べて貰うのではない、「大山町の農民の真心を食べて貰うために農業をやっているのだ」と申してます。この農協は販売部とは申してはいません。外商部と称し、早稲田とか慶応卒のインテリを採用しています。これが人事のカンどころなのです。

移動大学で私たちが学習して歩く農村は、どこに行っても必ず消費者との交流をやっています。消費者に生産現場を見てもらう。農家に分宿してもらう。家族ぐるみの交流をやるという努力をしています。ある意味では生産現場で消費者教育が行われていることになります。広島県砂谷村の久保農場など、それでありま す。七十七才で、今もかくしゃくとして土づくりと牛飼いにはげむ老農のはげしい気魄に、人の生命と健康とは何か、生命哲学と文明批判を学ぶ会です。広島大学の元学長長田新をして「私は砂谷の牛乳を飲むのではない、毎日久保さんを飲んでいるのだ」と語らしめた時、私は長田先生の顔を思い出して、涙があふれてあふれて困ったことがありました。北海道に広島大学教授の鎌塚扶先生を教育長にお迎えしようと、長田先生にお許しを得るため、曾て広島大学にお訪ねしたことがあり、懐かしい先生です。

大量生産の市場経済もよいのですが、今日では消費者にとり、生産現場というものが完全にブラック・ボックスになってしまっている。装置化された大量生産のシステムというものは、このブラック・ボックスをいくつもつくることができ、最終商品形態によって、消費者が強制的に受けとらされる仕組みになっています。生産の全過程を、消費者がじかにつかみとることができないようになってしまっていることです。

消費者存在の社会

私は機会があって、ある有名な大手メーカーのソーセージ工場を見せてもらったことがあります。ちょうどつなぎとして使用するアルゼンチンからの馬肉が病疫のため輸入がストップしたため、代替品としてオ

ーストラリアからカンガルー肉を輸入してました。カンガルーの捕獲は散弾銃を使用するため、強力な磁石を使用して弾丸をとっているところを見るともなく見てしまい、ギョッとしたことがあります。そこの製品は、この間までアルゼンチンの馬肉を使っていました。もちろんオーストラリアのカンガルーを使用しているということわり書きはただの一言もありません。某社のソーセージとしてだけ、消費者は受けとらざるを得ない訳です。

音更の農協牛乳で出している「よつば牛乳」。この「よつば牛乳」の愛好会という消費者団体が、東京にできています。この団体が毎年帯広に出かけてきます。工場を見学し、管内の生産者農家に宿泊し、牛舎の中、牛の飼いかた、搾乳の様子などを視察してから、研修会が開かれています。これがすごいおばさんたちなのです。

このひとたちはなぜ「よつば牛乳」を愛好しているかというと、ヨーグルトをつくることができるからだというのです。ニセモノ牛乳、他社の還元牛乳（ひどいのは平気で椰子油をまぜていた）では、絶対にヨーグルトができない。ホンモノとニセモノの区別がつくというのです。それだけではない、毎日「よつば牛乳」の成分分析をやっているグループがあります。成分検査の中で亜硝酸態窒素がふえたとか減ったとか、その他の微量成分がどうのこうのと、ちゃんと自分たちでたしかめた資料を印刷して持参、会場で配布し堂々と説明をやるのです。こちらではただのおばさんと思っているのが大間違いで、都立大学の理学博士だったりするのです。そして何故このような数字が結果として出てくるのかその原因は何か、結局、話は牛の飼いかた、飼料給与、作物管理、土壌の話まで実に専門的な質疑応答になるのです。

都市の消費者というものが、ここまで自覚的な消費者に変ってきていることです。単に牛乳というモノを購入しているのではない。牛乳という安全で健康のための食べものをわれわれは分けてもらっているのだ。価格の話ではない、質の話だというのです。私はこのひとたちの討議と研修を、朝の九時から夕食抜きで午

後の七時までうしろの方で聞いていて、消費者の意識がたいへん変ってきている、生産者優位の意識も変っていかねば大変なことになる、もうその熱気の中で深く深く考えこまされました。生産者の論理というもので一方的にゴリ押しできると考える、甘い姿勢の時代はすでに過ぎ去ろうとしていることです。

遊びそのものが文化

今まで、これからの町づくりの産業をどうするかということで、消費者の論理とはどういうことかを、食べものを中心にして話しましたが、とにかく行政の側でモノを考える場合、このようなことがすっぽり抜け落ちていたと考えています。十勝はなんといっても農畜産の産業を基盤とする地域であります。これからもそういう意味でのポテンシャルが非常に大きい地域であります。

食べもの文化というものは、文化の最先端をいくものです。文化が成熟しないと出現しないもので、ある意味で文化のバロメーターといわれています。フランス料理、中国料理がもてはやされるのは、そういうことでありましょう。食べものの原料生産だけでなく、二次加工、三次加工といったむずかしい表現でなくて、十勝のどこの町村にいっても、とにかくいろいろホンモノのゴマかしのない、珍しい料理、食べものがある。こうした環境づくり条件づくり、これが産業振興の土台づくりのような気がしてならないのです。誰でもがその舌と胃袋で、これぐらいわかりやすく確認できるものはないからです。

食べもの文化の創造は、はじめから大きいことは考える必要がありません。小さいことから手をつけていきたいものです。あるまちで商工会青年部の方が中心となって、立派なレストランをはじめたというので関心をもって出かけました。建物は立派なのですが、食べものに工夫がない。ただの食堂になっていることが惜しいと思いました。せっかくの発想が創造的に転化していないことが残念です。

私は、店がまえなど先の先にのばしてもまず、青年部のタマり場づくりくらいに思って、小さいところから手をつけることが大切だと提案します。若い諸君が中心となって手近な材料で、手づくりの食べもの文化を工夫してみる。食べもの飲みものを中心にワイワイガヤガヤやりながら、そこが情報交換の場所であったり、外部からのお客様をひっぱりこんで情報をしぼりとる場所として考えてみる。モトデの費用と思うと厳しく考えることになるが、遊びの費用と思えば冒険がやれる。失敗もまた楽しみとなる。そこから次のまた新しい発想が生れる。そんなところから食べもの文化を熟成させていくことができるのではないかと思います。

遊びそのものが文化だといっているホイジンガーの『ホモ・ルーデンス』(中公文庫)、あるいはロジェ・カイヨワの『遊びと人間』(講談社文庫)という立派な本があります。食べもの文化については、今西錦司先生のお弟子さんたちがずい分本を書いています。多くの示唆を与えてくれます。行政屋はすぐ産業というと固定した職業観に固着させて、身動きできない枠のなかで解答を出そうとしやすいので、すこしのびのびとしたよい意味の仕掛人になってほしいと思います。とくに大事なことは、これからの差別性、希少性をねらった多種少量生産というのは、クチコミの力が大きいと思います。こちらから市場を相手にしていくのではなく、ほしい人、食べたいひと、飲みたい人はそちらからお出かけ下さい。出かけてきてもらうことによって、そこにまた新しい波及効果が生れてくると思うのです。

市民の住むマチ

この一月十日に用事があり山形に参りました。空港からのバスがなかなか街の中に入っていかない。ものすごく渋滞しています。何故だと尋ねると十日市だというのです。これが山形弁で話をされるものですから

事情がさっぱりのみこめない。昔の山形城の外濠のあったところに沿って羽州街道が走り、十日市町、五日市町という名称の町並があり目抜通りになっています。一年に一回限りですが一月十日、約一キロメートルにわたり、完全に車両の通行をとめて、露店市がたつのです。昔は市神の祠堂があったようで、今はこの日だけ御神体が奉斎されてお祭りが行われます。大変な人出で、この日が山形の正月なのだというのです。

何を売っているのかというと、近在の農家の手づくりの臼、杵、せいろ、かまぶた、鍋ぶた、まないた、ハシゴ、脚立、神棚、木製品と思われるものは何でも、それに漬物、野菜類が売られ、要所要所に市神の縁起ものがひしめいて並び、大変な人出であります。歩道も車道も人ごみのため、宿にたどりつくまで大変苦労しました。高度な鋳鉄工業や、時代の先端をいくLSI場のある街の心臓部で、民衆の心をゆさぶる行事が今も続いていることに驚きました。

いつか広島市で、「えびす講」＊というのにぶつかったことがあります。中心部の紙屋町の裏仲通りにあるアーケード街、ここにも小さな祠堂があって、お詣りして縁起ものを求める人、買物する人の混雑と熱気の中にまきこまれ、ここは市民が住んでいる町だと実感したことがあります。歴史というものはお役所が作るものではない、市民が作っていくものだと思いました。補助金をアテにし、お役所の力を借りなければできない産業とか行事というものは歴史を形成していくものではない。市民の自助努力こそがホンモノを作りあげていくのではないかと考えます。

昭和五十七年　ふるさと十勝五月号

農民なくして食べものなし

―アメリカ農業視察報告―

食料自給の問題と課題

こんどのアメリカ農業の研究調査の旅に出かけることについては、二つのことが、私の課題としてありました。ひとつは、日米の経済摩擦と、これと連動しておきている政治的文化的緊張のことであります。これにどう腹をくくっていくべきかということであります。

もうひとつは、農業にも市場原理を貫徹すべきだという叶芳和＊氏と、土地収奪型農業の愚をくりかえすなという篠原孝＊氏とが、お二人ともアメリカ農業の展開をモデルとして、あるいはその影の部分を指摘して、オーバーヒートな論争を一昨年来やっている訳です。いったいその争点の大事な部分、アメリカ農業の土壌崩壊とはいったいどういうことになっているのか、このことを直視してきたいと思い出かけた次第です。

なにしろ主催団体が、ＮＨＫの『日本の条件、食料（1）』に詳細に紹介されている、アメリカ農民の拠出金、あるいは連邦政府の補助金を受けている、非政治的といっても悪名高いアメリカ飼料穀物協会です。旅行中全期間、アメリカ側の日本駐在代表が同行するという異色のチームで、農水省の官房から一人と、さらに叶芳和氏もチームのメンバーであります。まことに密度の濃い視察であったことはまちがいありません。旅行中、各地のテレビ、ラジオ、新聞の取材報道があり、挨拶にたつ団長の宮崎県西都市の中武市長さんは

大変なご苦労をされました。農畜産物の貿易自由化の問題と、アメリカが農産物の供給国として信頼できる国であるとの、アメリカ側のくりかえしての強調が強く印象にのこっています。

私は、さきほど申し上げたような立場にたち、見るべきものは見、調べるべきものは徹底して調べてきたいと決心して出かけましたが、なかなか思うようには参りませんでした。しかし、今後の手がかりはつかんできたように考えています。

日本の貿易黒字

さて、日本は現況、貿易上ではひとり黒字をだしており、世界中からいちばん安く手に入る資源を手あたり次第に買ってきて、これを日本人の知恵と勤勉で加工、製品化し、集中豪雨のように、購買力のあるアメリカ市場、ヨーロッパ市場に輸出ドライブをかける。これは戦前の飢餓輸出、安い労働賃金によるダンピング輸出とは大ちがいです。高度な生産技術による、市場競争力によって、輸出力が高まってきた訳であります。たまたま彼の地で、日系の農民が私たちにこういいました。日本の素晴らしい自動車のお蔭で、燃費をくわないものだからガソリンがだぶつき、石油の値段がとうとう下がったではないかと。これは平均的アメリカ市民の、デトロイトの事情とはまた違った、率直な意見だと思います。お互いにユトリのある時は金持喧嘩せずですが、今日のように世界が同時不況に陥り、戦後の世界経済の成長を支えてきた諸装置が有効に働かないようになると、ちょっとしたことが強い緊張関係として表面化いたします。

ご承知のように、かつてイギリスのランカシアの紡績労働者が日本製のメリヤスシャツを着て働くようになるに至って、日中戦争、太平洋戦争の遠因となったことを忘れてはならぬと考えるものです。

そのことは、輝かしいユニオンジャックの旗の下に、インドの綿花、オーストラリアの羊毛をもとにした、

世界制覇のイギリス的経済秩序を破壊したことになります。イギリスは、今度の戦争のあと、この覇権秩序を自ら解体し、ＥＣ秩序の中に溶解してしまいました。そのイギリスが、最近一部報道によりますと、食料自給率を一〇〇パーセントにもちこんだと伝えられていますが、およそ考えられないことです。真偽の解明とともに、政策動機がいかなる理由によるものか、私にとっては大きな関心のひとつであります。

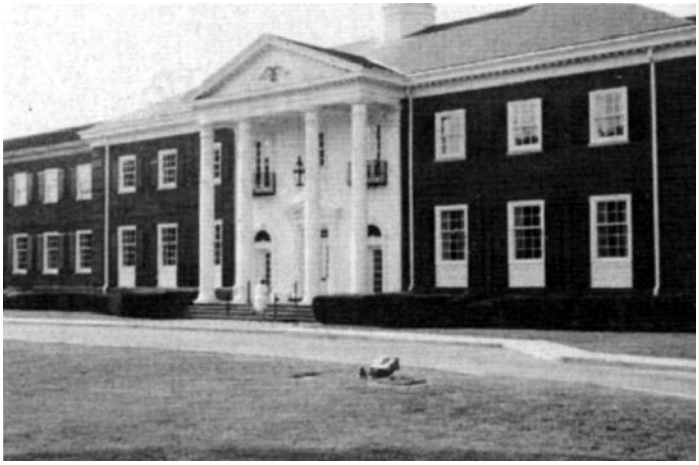
日本の食料は、米を除いてはアメリカの農産物と深く関わっています。従来の日本の貿易態度からいえば、附加価値の高いものを輸出して、基礎資源については、安く入手できるところから輸入するやりかたですから当然のことです。しかし私は、日本はいかに金があるからといって、相手国の政治的経済的意志に関わりなく、相手国人民の生存基盤である自然秩序の壊滅的破壊まで犯して、例えば森林資源を無茶苦茶にもちこんでくるとか、また食料をもちこんでくるやりかたは、道義の上にたったやりかたではない。必ず復しゅうを受けるであろうという考えを、文明上の道義観としてもっています。

アメリカの農産物が真実の食べものとして、良質で安いもの、安全の確度の高いものであれば、輸入していけないとの論理は成り立たない訳です。しかしアメリカ人民の生存基盤である、あの広大な耕地の土壌基盤を破壊してまでの輸入であるということであれば、これは我々の方から忠告して、キッパリお断りすべきだという考えを持つものであります。儲かる、損するだけの論理だけであってはいけない。人類共存の道義としていいたいのであります。

農業者は同じ生産仲間

さて、ここで話をかえて、今度のアメリカの旅で、いちばん感銘を受けたことから申しあげてみたいと思います。それはフロリダ州の、オーランドに近いキスミー・カウンティのことであります。アメリカでは、

市街地人口が二五〇〇以上あれば市といっています。帯広と姉妹都市を結んでいるアラスカのスワード市も、この基準からいって市政をしていることはおかしくない訳です。そのほかの基礎自治体をカウンティ（郡）といっているようであります。地名としてのタウンとかビレッジはあっても自治体ではないようです。



アメリカン・ファーム・ビューローの本部

前庭の表示石像

二十二日間の旅で、現地ご案内を頂いたりお世話を頂いたのが、コロラド州を除いて、ファームビューローという農民団体であります。アメリカには農民団体が五つぐらいありますが、ファームビューローというのがアメリカ最大の農民団体で、全米の五十州のうち四十八州にわたり、全米三一〇〇の郡のうち二八〇〇の郡に組織をもっていると申しています。非常にリベラ

ルな団体で、政府の経済介入を極力避けるという立場の団体であります。もっともアメリカ的農民の気風を表わしている団体のように見受けられました。

オーランドのホテルまで迎えにきて下さったのがキスミー・カウンティの農民の皆さん方で、それぞれマイカーに分乗いたしました。私と住友信託の由井さんがお世話になったのが、なかなかハンサムなクラーク・ゲーブルという青年でありました。英語の上手い由井さんが「ゲーブル・ゲーブル」といって話し掛けていますので、初めは愛称のことかなと聞いていましたが、確かに昔のハリウッドの映画俳優クラーク・ゲーブルに似たところもあるし、由井さんのような若い人がよくゲーブルのことを知っているなと感心しましたが、名刺を渡されて、ホントにクラーク・ゲーブルさんであることでびっくりいたしました。

肉牛、採卵養鶏、それと飼料畑のある農家と、市乳をやっている酪農家を勉強してから、キスミー農業センターに案内されました。ここはカウンティ・フェアもやれる広い敷地で、ロデオやいろいろカウンティの行事も行われ、素晴らしいスタンドもありました。ここの野外施設で、まるまる一頭の肉牛を潰して肉焼きが始まりました。カウンティの農民が火かき棒のような鉄棒を各自もって集まり、わいわいやり乍ら、缶ビールを空けながら大勢で焼きあげていくのです。私はアメリカの農村コミュニティの原点のようなものを見せて貰って、本当に嬉しくなりました。こういうもてなしを受けたのはここだけなものですから、非常に印象に残りました。十勝であればジンギスカン・パーティーのようなものです。このまま夜も暗くなっていくのに、こんなところで、鼻の穴に肉を入れかねない原っぱで交歓するのかなァと思ったらそうではなく、先程のセンター・ホールに焼きあげた肉を運んで、ぞろぞろ移動することになりましたのでホッとしました。農業改良普及所の事務所も、４Ｈクラブの本部もこの中にありました。

見失われる食料

そこでの挨拶の要旨が、こういうことです。「アメリカの農民も、日本の農民の皆さんも等しく、人々の生命を維持していく大切な食べ物を作る産業に従事しています。いわば同業者であり同志です。今やアメリカの市民の多くは、とくに若い市民たちは、食べ物というものは、例えばシェアーズのスーパーマーケットに出掛けていって、ビニールや紙箱その他のものでパッケージされ、棚に山積みされているものと誤認し、手押し車を押しながら求められるものと思い込むようになってしまった。そしてそれらの食べ物は、あのシカゴのまちに世界最高の摩天楼としてそびえたつ、四一〇メートルのシェアーズ・タワーから運ばれてくるような錯角に陥っている。誠に遺憾なことである。

コンピューターを操作する主婦

そこで、今、この会場の私の頭の上に掲げられているNO FARMERS…NO FOOD！（ノー・ファーマーズ・ノー・フッド）我々働く農民なくして、食べ物はない―というステッカーを青年部の諸君が作り、農業に対する理解を求めるべく、自動車にはりつけ運動をしている」という話であります。

このステッカーをお土産として、頂いてまいりました。大量生産、大量流通、大量販売、大量消費ということが、消費者と生産者との間に深い断絶をつくり、本当の食べ物、その食べ物の本当の美味しさが加工の過程で行方不明になっていく。現代文明の批判とも見受

けられます。アメリカの農民も同じことを考えているのだなと、深く私の心に刻みつけられました。

私はこのステッカーを手にして、さらに次のことを加えるべきだという感慨を深くいたしました。それはNO EARTH…NO FARMING!ということであります。NO SOILではちょっと弱い、むしろNO EARTHを選んだのですが、大地なくして農業なしということであります。それは物理的、化学的な意味の土壌だけでは困る。微生物をはじめとする生物活動を含めた意味での「活きている土」という意味で、アースといいたいのです。

土壌崩壊の実態を見る

私にとって関心のまとであったアメリカ農業の土壌浸蝕の防止については、驚いたことに「待ってました」とばかり、あらかじめ要請が行われていたのではないかと思われますが、イリノイのファームビューローでも、アイオワ州立大学でのレクチャー、あるいはワシントンにおける農務省当局の説明に於いても、相当の時間を割いて、これでもか、これでもかといってよいほど説明があり、アメリカにおける土壌浸蝕の問題は解決済みであるといった強い調子の説明に、真剣に聞いているこちらの方が、ちょっとこれはどうしたものかと考えたぐらいです。

話の節々には、「農業の実態もわからない、ワシントンやニューヨークの一部ジャーナリストが騒ぎを大きくし、誇大な報告を流している」ような説明にも受けとれるし、「日本のテレビやジャーナリズムの報道が何をいっているのか」といった調子で、ちょっとヒステリックに聞きとれて、まるでボロクソであります。アメリカ農業が崩壊するなどというのは警告であって、世論の喚起とも思われますが、ようやく技術的解決の方途がたち、着々と実験と、実践の成功例が普及しはじめつつあるというのが本当のところではないでし

ようか。いずれにしても、この問題に真剣に取り組んでいることについてはよくわかり、後に申し上げるような素晴らしい畑にもぶつかりました。

私が何故このことで留保をつけているのかというと、次のようなことであります。シカゴ郊外のエバンストンで、全米のファーム・ビューローに立ち寄り、それからシカゴの西部にあたるケーン・カウンティのファーム・ビューローの案内を受けています。このビューローの「加盟のお誘い」というリーフレットのなかに、イリノイ・ビューローのニュース・レター（八十三年六月二十四日日附）が挿まれていました。読んで見るとこう書いてあります。

冒頭に、「今年の春、いくたびか強風が吹き荒れたため、農地の細かい砂塵が吹きとんで、ハイウェーの上にその砂塵が堆積したため、イリノイ州のいくつかの地域ではしばしば交通止めをして道路を閉鎖したばかりか、両側の側溝をも埋めつくすような異常な事態がおきるに至った。

そこで、一般の市民たちは質問してきた。『いったい農民たちは、なぜこの貴重な土壌を、同じ場所に留めておくような努力をしないのであろうか』と。答えはこうだ。農民たちは、市民たちが現実に理解している以上に、非常に多くの努力を重ねているところだ」と。

風害で国道ストップ

いかがです。この一文を読んで、十勝に長く住んでいる方なら、この事態の中味がよくわかると思います。近頃でも、二、三年で転勤して歩く若い新聞記者が、十勝の春先の砂嵐を見て、すっかり驚き記事にしています。昭和の初めの風害を知っている者なら、近年の状況を見て驚くものはありません。別に風害で被害がないといっているものではありません。

一番近年でひどかったのは、確か昭和三十七年の四月下旬に続いた風害であります。ちょうどこの時、私はアメリカのサウスカロライナ大学のアレキサンダーという農学部長を案内して、川西の佐藤松太郎さんの牛舎を見に出掛けています。車中、彼はアメリカの風害はこんなものではない。もっともっとひどいものだと申していました。

この時は、豆の連作をやり堆厩肥もいれていない畑は豆はすっかり土に埋まり、側溝と道路とが平らになっていました。しかし堆厩肥のはいっている畑の側溝はそんなにひどく埋まっていない。この時ぐらい沿道を観察して、堆厩肥の有無、豆の連作が風害の大小をもたらしていることを教えてくれたことはありません。この時でも自動車が通行止めになるという事態は考えられませんでした。

幕別町では、道新が、長靴が埋まってしまう状況を写真にして載せていました。それでも道路が交通止めになったことは聞きません。この時佐藤松太郎さんの牛舎についてみますと、彼の畑は土が全然飛んでもいなければ、風さえあまりに静かなので驚きました。草地酪農の強味をまざまざと見せつけられたことを非常に鮮明に記憶しております。もちろん、今日のグリーンファームの結成以前の話であります。松太郎さんは牛飼いをしたくてしたくてたまらなかったのですが、オヤジさんが豆気狂いで、「四つ脚の牛など飼わせるものか」と反対され、反対されるほど牛飼いの熱望が強くなって、戦後、オヤジさんが亡くなられてから、やっと念願の酪農を始めることができたという非常に志の高い方であります。しかも農林省政策研究所長で有名な篠原孝さんが京大を出て農水省に採用になり、はじめて農業体験農場として働き勉強させて貰った農家です。

新しい対策と試み

だいたいアメリカのハイウェイは、十勝の国道のような狭いものではありません。まして、シカゴのような大都市に集中していく周辺部のハイウェイは上下六車線以上はあります。更にその外側にカウンティ・ロードが併行して走っていますから、相当の幅をもっています。これが砂嵐で埋まって車が動かなくなるというのですから、状況としては大変なことだと思うのです。そういう風害を受けるような圃場の土壌が、融雪の時や降雨の時に土壌流亡を起こさないということも、私たちの常識からいうと理解しかねるのです。そんな都合のよい土壌があるものだろうかという疑念がどうしても湧いてきます。

とにかく、ニュース・レターは次のように続きます。「農業は、作物生産のためにどのように土壌を取り扱うべきかについて、目下ひとつの革命が進行中である。もしこの革命が達成された時は、耕地の大部分の土壌浸蝕について解決されてしまったことに気づくであろう。

農民たちが、一層土壌浸蝕に関心をもちはじめるにつれ、モルドボールドプラオ＊による耕起を放棄することになる。すなわち最近の土壌保全サービスの調査では、昨年の秋モルドボールドプラオによる耕起が行われたのはイリノイ州全耕地の二十パーセント未満であったこと、また全耕地の四十パーセント以上は、冬季間全く耕さないままになっていた。より多くの農民が、この秋に耕作作業を行う時は、過去の形とは異なった形式の耕作をすることになるであろう。―中略―

ノー・ティル（不耕起）＊といわれるもうひとつの技術は、このうちでももっとも急進的な技術である。技術的には大きな変化があるものの、基本的な考え方は、土壌を全く反転させないかき混ぜないやり方である。条播作物は、農地に小さな裂目をつけて播種し、他の部分は全くじょく耕（カルチベーション）しないままとする。―中略―

イリノイ州では今後二十年以内に、州の全農地について、許容しうる水準にまで、土壌損失をくい止める目的で企画された土壌保全プログラムをもっている」。

他の資料では、二〇〇〇年までに五十パーセントまでもっていきたいと書いてあるのも目につきました。いずれにしても、このようにアメリカの中西部の穀倉地帯では、土壌保全について真剣に考えられていることは間違いありません。しかし、今年の中西部で四十度に近い熱波が七月、八月と続いたことが、とうもろこし、大豆の減収を確定的にしており、私たちがこの中西部を歩いている間に、既に新聞にとうもろこしの被害状況が報道され、ウォール・ストリート・ジャーナル紙をみても、シカゴ相場がじりじり値上がりを示していました。さらに新聞を精読してみると、今年の熱波の被害は、明年の土壌水分の確保を難しくし、今後順調にいっても、明年の収穫の伸びはあまり期待ができないと書いています。これは非常に大事なことで、要するにイリノイの土壌が、非常に保水力の弱い構造であることを示していると思います。私があちこち土を握ってみたり、努めて断面を観察しての判断に狂いのなかったことであります。土壌を単に肥力要素の分析だけで考えていくことは、確かに化学肥料の施肥量の節約に通じますが、土壌水分の保留については有機質の賦存と深く関わっており、また毛細管現象による蒸散をどう抑えるかという、土壌の管理技術も大切であります。

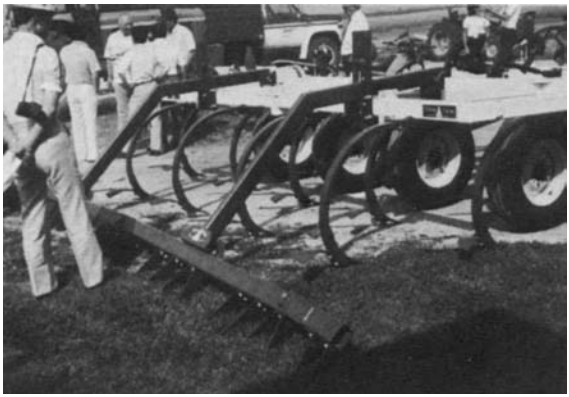
ノー・ティル（不耕起）農法の見直し

とにかく、土壌浸蝕防止のために、もっとも急進的かつ革命的な土地利用技術として、今アメリカが一番真剣に考えているのが、ノー・ティル（不耕起）農法だという説明には私は全く驚いてしまったのです。

その技術のディテールは別として、不耕起栽培農法を政策として取り上げ、これを西シベリアの農業開発

に大々的に実施し、しかも見事に失敗したのがソ連のフルシチョフ首相に他なりません。この農業政策の失敗が、スターリン批判を大胆にやってのけ、米ソの雪解けをもたらしたフルシチョフを、退陣に追い込んだのであります。彼はアメリカに大統領アイゼンハワーを訪ね、その農場を見学し、ハイブリッドコーンの技術、同じく改良豚をソ連に導入いたしました。米ソの和解が食べ物の確保であったのであります。

ノー・ティル、不耕起農法の土地利用思想を提出したのは、世界の土壌学の先がけとなったロシア土壌学の伝統の上にたったマリツェフであります。戦後、マリツェフの土壌理論は日本にも紹介されましたが、殆ど無視されて今日に至っております。北海道では開拓者連盟が、確か宮下先生の翻訳で発行していましたが、どう活用されたものか、目にも耳にもケースは聞いていません。いわば幻の土壌理論であります。



ノー・ティル農法のチゼルプラオ

ノー・ティル農法の圃場。カラを放置しておく

私が、昭和三十四年、第一回の移動村づくり大学を中札内の梶浦組合長さん他農協役員の全員、太田村長さん、音更の本家組合長さん、置戸の阿部町長さん、その他農協、役場、公民館の関係者二十人で、南は鹿児島の枕崎まで、日本の先端的農業の実態を研究調査旅行に出掛けたことがあります。

（これが現在まで続いて一〇八回、五〇〇〇人の卒業生を出しています。この仕事の中核となって進めてきた札幌の野口希彦さんのご努力に、ここに深く敬意を表したいと思います。）

広島の久保農場

この時、私たちは広島県佐伯郡砂谷村（さごたにと読み、現在は湯来町大字砂谷）の一〇〇戸による酪農協同の推進者、久保農場の久保政夫先生をお訪ねいたしております。久保先生は今年八十歳、まだ現役の農民です。三つの山を五十馬力のキャタのブルドーザーで崩して、一つの谷を埋めて平坦にし、そこに三十ヘクタールの農場を造りました。堆厩肥を一年間に三〇〇〇トンも、五〇〇〇トンも造っています。

二十八歳の時病身のため小説書きを断念して八丈島に渡り、そこで野菜作りから始まって、養鶏、養豚、そして酪農と展開し、農業の基本原理を体得し、十年目、太平洋戦争の始まる直前、昭和十六年五月に二十三頭のホルスタイン乳牛を伴って、本人の故郷砂谷村の開拓に入ります。この先生のやり方は堆厩肥の量にあわせて耕地を広げ、飼料基盤を造っていくやり方です。十アールあたり四十トンの堆肥をいきなりブルドーザーで、五十センチ以上の深さまでかき混ぜて入れるやり方であります。要するに微生物活動の環境を初めから土壌中に造りあげる、土壌とはあるものではなくて、造っていくべきものだという徹底した考え方で、このあとは土をプラオで反転するやり方をしない。広さで作物を造るのではなくて、深さで作物を育てる。堆肥の生産量にあわせて次第に耕地を広げていく発想であるため、初めから反収が他より二倍三倍以上の収量をあげることができる。基本建設をやっておけば、あとは労力、エネルギーのコストがものすごく低下してしまうという考えであります。堆肥というものは、マニュアスプレッダー＊で散布するという考えを全くもっていないことであります。

この土地が海抜四五〇メートルの積雪地帯の山地にありながら、高知県の海岸地帯よりも一ヵ月も早く春先の地温が十六度まで上がり、作物の生育活動期間を長くすることができ、素晴らしいエサを取ることができるのです。（一昨年の個人で天皇賞をもらった喜茂別町の成田繁男さんの土地利用技術は、この久保先生の思想と非常に脈絡しており、この方も最初は笹堆肥から着手しており、技術的符合に驚いております。）

マリツェフ理論

当時の久保農場には、五間に三間の広い研修室があって、荒むしろを敷いた室です。そこで先生からお話を伺いました。五間の壁には床から天井までびっしり本が並んでおりました。すでに六〇〇〇冊以上の本があったと思います。「私の農業のやり方は本を読んで、考えながらやっていく農業だ」と申していました。慣行農法にはあまりこだわらない、とにかく自分の頭で考えて、自分の農法を開発されていった方です。

そこで久保先生の口から出たのが、不耕起農法なのです。そして先程のマリツェフの土壌理論の紹介がありました。原著を読まれてのお話で、私はこの山の中で、まさかマリツェフの話が出てくるとは思いませんでしたので本当に驚いてしまいました。結局、久保農法はご自分の長い体験と観察、それとマリツェフによって理論的に裏づけされたというのが趣旨でありました。簡単にいうと、土壌を単に物理的化学的性質だけから見るのではなく、表層の作土には好気性の微生物がいる。深層には嫌気性の微生物がいる。これらの土壌生物が、全体として食物連鎖の中で分解者として有機質を無機質に転化させ、土壌の物理的化学的性質を効率化させて、作物の根に対し最良の生育環境を形成しているというのです。土壌中に堆肥を十分に投入することは、土壌環境をよくするばかりでなく、少ない化学肥料で有効化させる偉力を発揮するということです。私の土壌論争はここから出発させたもので、最後にたどりついたのが生理触媒としての土壌酵素理論で

す。植物もクソ小便をすると言い続けています。

従って、従来の農法であるボトムプラオ＊で反転することは、土壌中の生物活動環境を破壊し、せっかくの作物成長条件を助けることにはならぬ。それだけ土地の持つ収容力を矮小化（わいしょうか）して、生産をひき下げる結果になるというのが、不耕起農法の大要であります。

土壌と保水

更に曰く、「皆さんは中国、四国、九州といえば気候がよくて何でもとれるいいところだとお思いでしょう。（私も久保先生の指摘を受けるまでそう思い込んでいました）ところがこの西南暖地農業というのは土地が一番やせているのです。気候がナンボよくても土地は決して豊かではない。（何故か。ＮＨＫの出版している『日本の条件、食料（１）』に世界各地の土壌条件を色別で示した地図がある。なるほどこれも日本の西南暖地は土地がやせている色が塗られている。乞一読）確かに気温が高いから植物の生育条件に恵まれている。だから有機質、腐植の分解が早く有効化させるには都合がよい。ところが傾斜地が多い、台風には始終襲われる。雨脚が強いからせっかく溜まった腐植や肥料分は雨に叩かれて、表土と一緒にどんどん流亡してしまう。だからやせた土壌だけが残る。そのためには土壌を流亡させない工夫をすればよい。傾斜地をなくすために山を崩して谷を埋めて平坦にし、土壌の保水条件を作物の状況とあわせて高めていく工夫をしている。ここの土地はマサ土といって、水がスーッとぬけてしまう砂のような花崗岩の風化した酸性土壌だ。だからマサ土をマサ土でなくする努力をしてきた」と仰言るのです。こうしてロシアで成功しなかったマリツェフの理論を、立派に農業に実践して成果をあげてきたのが久保先生です。

久保先生は有機農法の主張はしない。「私は土壌分析して不足している肥料分はちゃんと供給している。

このマサ土にはマグネシウムが足りない。ドベネックの養分樽に示されているように、最小律の法則が働いて、マグネシウムが足りないために他の肥料分が有効化しない。そのためマグネシウムを肥料として投入している。しかし他の肥料、あるいは農薬、除草剤といったものは全く使っていない。だからここの牛乳は本当に美味しい、安心して飲んで貰える日本で最高の牛乳だと思っている。」現在搾乳牛一〇〇頭、平均六〇〇〇キロ、悠々とした営農を実現しておられる。また曰く、ニュージーランドの酪農専門家がしばしばこの地を訪れている。彼らの話を聞きながら、いかに彼らがこの日本に殴り込みをかけても、先生は競争していける自信があると仰言る。大地の基本建設が終わっているなら、日本農業は何も外国農業を怖がる必要がない筈だというのが先生の信念のようです。

ついでに申しあげますが、ご承知のように十勝の土は火山灰性土壌が圧倒的であります。日本の土は、北は知床から南は鹿児島のシラス地帯まで、殆どが火山灰の影響を受けています。リービッヒのいうＮＰＫのうち、燐酸（Ｐ）については火山灰土壌が固定化してしまい、作物に対して不可給態のものに変化させるという難点をもっています。堆厩肥の施用は、これを有効態の形で作物に供給することができる訳です。しかもこの燐酸肥料こそ、目下のところアメリカのフロリダ、アフリカのモロッコに資源があって、今後の世界の食料問題に深く関わって、二十一世紀のある時期には限界が見えてくると警告されている肥料資源であります。識者達はこれを日本農業の前途に影響あるものとしており、私たちは、これを解決していくシステムを真剣に考えていく必要があるのです。このことは若い皆さん方に今から真剣に考えておいて欲しいのです。日本の全農の燐酸肥料の原料は、このフロリダからパナマ運河を経由して運んできています。

チゼルプラオの導入

さて、日本のノー・ティル、不耕起栽培の農法はよくお判り頂けたと思いますが、アメリカでのノー・ティルの技術はどういうことなのでしょうか。まだ入手資料が不十分で、説明を聞いた範囲、また現場を見せてもらった範囲のことになりますが、お許しを頂きたい。

結論からいいますと、従来の揆土板による反転耕起をしない、モルドボールドプラオを使用しない農法ということになります。そのかわりチゼルプラオ＊という新しいプラオを使って、土を反転しないで、土壌深部まで空気や水を供給することができるように土壌構造にゆるみを入れるというプラオです。深土プラオの働きに似た考え方ですが、チゼルの方が牽引抵抗が少なくエネルギーコストが下がり、能率的のように思われます。

このチゼルはメーカーによっていろいろタイプがあるらしく、もうニュージーランド製のものを先程も申しあげた佐藤松太郎さんのグリーン・ファームで使っており、これを借りて日甜の清川農場も実験してみたという話を、こちらに帰ってから聞いています。

第二は、前作物のカラものを、全部または一部をそのまま圃場におきっぱなしにしておく。このためには、雑草防除のことを考えて、三日ぐらいで無害になってしまうように開発された除草剤を散布する。

第三には、後程スライドでご覧頂きますが、イリノイでは、とうもろこしや麦のあとに大豆が入りますが、その圃場に放置された前作のカラものをそのままにしておいたまま、ちゃんと土に条溝をいれて播種をしたり、施肥をしたりする機械が開発されております。

結局このことによって、作条と作条の間にカラものが土壌の上を覆うことになりますから、作つけ以前の融雪水による流亡とか、あるいは春先の風害による表土の飛散とか、また作付け後の降雨によっても、雨は

流下しても、表土の流亡を最小限にくい止めることができる。こういうことのようであります。

しかもこれらの作業は、プラウニング＊、ハローイング＊、シーデング＊といった作業を、重い機械を繰り返し圃場の上を走らせるのではなく、一挙にやってしまう考え方ですので、畑の土は踏圧によって固められたりすることなく、機械の往復の半減でエネルギーコストを半減させてしまうという説明でありました。

この技術は作物によっても違い、組み合わせにいろいろあったり、アメリカ農務省の方の説明でも、非常に高度の技術能力を必要とすること、どこでも画一的にやるべきものでもなく、特に気候、温度との関係があって、北部の寒冷な地帯での実施には問題があるという発言をされたことが、強く頭に残っています。

十勝への技術移入

このノー・ティル農法、その他関連の技術の普及は、土壌保全局の補助事業によって、農民に小規模なものから実験的に繰り返し実施をして、自信をつけ成果を見届けてから拡大をさせていくという非常に慎重なやり方をやっているようです。そう単純に「絶対間違いない、やれッ」と、上から号令をかけてやるような普及活動ではないように見受けました。農機具会社のパンフレットに詳細はつきているような言い方をしている人がいましたがそんな単細胞的なものではない。とにかく、ノー・ティルに就ての体系的な事例集、あるいは作物生理上の技術的なまとまった資料が入手できないかと随分心掛けましたけれど、まとまったものが無いということは、まだまだ完成度の高いものでないことの実証のようにも思っています。

あくまでも土壌流亡を減少させることを主眼とした方法、手段のひとつであって、土壌理論に基づいたマリツェフの考え方、あるいは久保先生のような深いトータルな観察のもとに、独自の磨きあげられた技術体系としてのノー・ティルにはまだなっていないことは間違いありません。しかし、たとえ土壌流亡を阻止す

るためとはいえ、農業機械メーカーの立場から、あるいは農薬化学メーカーの立場から、それぞれ一つの共同目標に向かって、競争的に技術的解決のための協力がある強い情熱をもって真剣に取り組まれている姿だけは、はっきりくみとれたことをお伝え出来ます。

なにしろ、エジプトの王朝時代の農耕以来、数千年にわたり続けられてきたプラウニング、ハローイングの農法を否定したノー・ティル農法とは、まさにイギリスの産業革命の前に実験したノー・フォーク農法＊の実現による農業革命、詳しくいえば休閑をいれた三圃農法から、輪作農法への転換に匹敵するものと考えられます。それがアメリカの穀倉地帯、イリノイとかアイオワの先端農業地帯に出現したということの意味は大きいと思います。見ものであります。戦後の日本では、アメリカのやることならすべて善と見る事大主義的な悪い癖があります。私は久保農場の早くからマリツェフの土壌理論を読みこなした、久保式ノー・ティル農法を二十数年にわたって、その実践を見せて頂いております。

その農法原理について、十勝農業も大いに学ぶべきことを説いてまいりました。これからは、奥行きの深い実践によって裏うちされた久保農法、不耕起農法も、少しは理解して貰えるのではないかと考えるものであります。

合格点の土も

イリノイとアイオワだけで、十日間にわたり見て歩きました。その中で、たまたま青えんどう（グリーンピース）の機械化収穫の状況を見せて頂く機会がありました。私は今度の旅行中、農場視察の際にスポーツシューズをという話でありましたので、世界で一番軽いシューズ、中国製の布靴を買って持参いたしました。（これがシカゴの店頭に並べて売っているのに驚きました）ペチャンとたためて携行にまことに便利なので

す。スリッパ並みです。これをはいて、一歩圃場に踏み込んで見て、土がスッと二、三センチ沈むのです。まるでじゅうたんの上に乗った感じです。あの大型機械を走らせてやる農場で、こんなソフトな土があるものだろうか、土を少し掘ってみました。まことに立派な土づくりでした。周囲の畑の土とは一段違った素晴らしい土でした。アメリカにもこんな素晴らしい土づくりをやっている農場があることを初めて実感しました。「合格だ」と思わず大声をあげたくらい感心しました。しかしこの素晴らしい土づくりの経過について、技術の要点について話を聞く機会は与えられませんでしたが、アメリカにも立派な農民がいるぞということは言いきってよいと思います

現物地代が増えていることに驚き

お話変わって、アメリカのファーム・ビューローをはじめとする農民組合の活動、その傘下の販売農協、購買農協の活動事情を知るにつけ、農民の徹底した価格競争原理に基づいた対応行動、また投機的態度、農民行動の組織がすべてゲーム化しているのではないかと思われるぐらい、厳しいことをひしひしと感じさせられました。それは農業以外の他の産業社会で作動している社会的ヒートとも、おそらく脈絡しているものと思われます。ここではそれ以上触れないこととといたします。ただ私が戦後の農業改革のなかで、日本農業のブルジョア改革をいかにして実現するかなどと真面目になって考えていた日のことを、がらにもなくつい思い出して、この年になってからこれは大変な社会の仕組を見たり、聞いたりしてしまったものだという思いを強くしています。

面白いと思ったのは、もうアメリカでも農地価格が高騰してしまって、農民が土地を買えなくなってきていて、そのため借地制が拡大していることであります。説明では自作が二十五パーセント、小作三十パーセ

ント、自小作四十五パーセントとなっています。それでは小作料、地代はどうなっているかというと、現金制五十パーセント、現物制三十パーセント、現金と現物併用地代が二十パーセント。実際に家族農場を訪ねてその答えの中で、この現物地代がポン、ポン出てくるのです。しかも地主が種子、肥料、農薬代もちで五十対五十の実例が非常に多かったことです。これには全く驚かされました。私は冗談じゃない、日本の経済学者の教科書では、現物地代とは封建地代であると教えてきた。それが資本主義の先進国であるアメリカ農業で現物地代が拡大しつつあるということ、これはいったいどういうことなのか。戦前の日本の農民闘争というものは、現物地代は封建地代であるとの理由でその廃止が目的であった。今またアメリカの現物地代が種子、肥料、農薬もちとはいえ五公五民＊だというのです。私はバスの中で大きな声を出して、笑いながらこの問いを出しましたが、経済学をやってきた連中がいっぱい居ながら誰も答えてくれる者はいませんでした。

持続する土づくり

困ったことにはアメリカ農業でも徹底した均分相続制がとられており、特に農地の価格が高騰することによって財産化し、このことが深刻化しているようです。日本の農地もアメリカさんのおかげで均分相続制が強行されました。だから土地所有と土地利用の上で矛盾が大きくなるばかりです。昭和三十年頃まで、十勝でさえ、各地で手鎌ふり回してのいくつかの農地相続分配の悲劇があったことを記憶しています。昔から日本では「バカモノ」のことを「田分け者」といって、柳田国男先生が『日本農民史』に書かれているように、土地を零細化することは、土地利用がこわれ、貧乏（貧棒）にカンナをかけるようなものだと、我々の祖先たちが強くいましめあってきたものだといっております。借地制しか今後の日本農業の抜け道がないかのよ

うに、アメリカの猿真似して声高にいわれていますが、私がすでに二十年も前から、農地管理事業団が国会の問題となっている時に、「農地は、土地利用の原点からいって市町村の基礎自治体におろすべきだ。当時金の使い道のない余裕財源を使って、やる気のある市町村に農地を保有させ、これを農民管理に一任する。これで農地の分散保有を阻止し、税金のむだ使いをなくする」というのが私の提言であります。しかし三年連続審議の末に、農産物価格安定法を通すため、与野党の闇取引で、ついに廃案になってしまいました。与野党共に政治家は「お願いします」の票乞食ですから、官僚とともに自分の利害を中心にした考えにたち、農業発展のための自由の道をふさぐことしか考えていないように思われ、まことに残念であります。

農業というのは、食べ物を作る産業であります。今年食べて来年はなくてもよいというものではありません。基本は持続的であること、発展的であること、そして土地利用の基本建設こそが土台であります。ここでいう基本建設とは、単なる土地改良とか土木事業といったものではありません。もっとトータルな食べ物を作る産業としての土台づくりであります。私たちの祖先は二〇〇〇年も、三〇〇〇年もかかって、今日の日本を発展させる土台を造ってきました。私たちはその遺産の上にあぐらをかいて、遺産のくいつぶしをやっていく訳にはまいりません。村ごとの、町ごとの、その地域に即した農業の基本建設だけは、一日としてゆるがせにできません。毎日毎日が基本建設の必要であることを自覚し、農業づくりをしていかねばならぬと考えるものです。

昭和五十八年　ふるさと十勝十月号

水資源と私達の生活

農業問題は、土地利用の問題

私は昭和六年、十七才で農村に入りました。連続凶作の始まりの年です。社会に出て初めてぶつかったのが、農村生活の困難でありました。例えば、水田地帯の農家はお米を作っていますが、お米が一粒も農民の口に入らない。政府の、農家救済のための払下げ古々米を食べていたんです。その頃は低温貯蔵庫などありませんから、穀象虫というのがいっぱい入っているのです。だから、そのお米を食べる時は、まず炊いてドンブリに入れ、お湯をかけてかきまわします。そうすると穀象虫が浮いてくる。それをすくって出してから食べる訳です。生活の糧であり、生命の素である作物を、生産する農民自身が食べることができない。売るどころか、自分が食べるものさえないんです。なぜこういうことになったのか、なんのための水田なのかということを疑問に思った訳です。

十勝の水田は泥炭地がほとんどです。泥炭というのは、深いところで四メートルくらいあるのです。泥炭は、水田を作っても水が下に抜けてしまいます。上流から灌漑水を引いても、絶えず田んぼに冷水がかかっているのです。水が溜らない。泥炭土で畔を作ってもその畔の横っ腹から水が漏れてしまう。冷却装置の中で米を作っているようなものですから無茶な話です。客土をしたり、テニスコートで使うローラーの重いも

明治から十勝でも水田作りが始まった

ので床締めをしてみても、グラスウールを足で踏みつけた程度でやっぱり水は下へ漏れるんです。

そんなことを見て考えているうちに、農業の問題というのは、結局は土地利用の問題だということに気がついた訳です。十勝は火山灰地ですね。火山灰というのは黒耀石（十勝石）の粉みたいなものなんです。皆さん、足の垢を落とすのに軽石を使いますね。軽石というのは天然ガラスからガスが抜けたものなんです。それを砕いて十勝平野にばらまいたのが火山灰土だと思えばいいんです。要するに火山灰というのは天然ガラスの粉です。天然ガラスの上で百姓をやろうというんです。ガラスの粉で何万年やったって、農業にはならないですよ。しかも我々は、自然が何万年もかけて与えてくれた有機物の蓄積を、ここ一〇〇年の間にほとんど食い潰してしまったというのが、十勝農業の実態だと思います。とすれば農業は一体どうすればいいか。土というものは、あるものではなく作っていくものだと私は考えました。農業の基本は土づくりであり、土づくりというのは、ただ堆厩肥を入れればいいというものでもありません。作物生産に最も都合のいいように、火山灰土を火山灰土でなくする

農業を我々は考えていかねばなりません。

今から百何年か前に、十勝にシャモ（和人）がアイヌに無断で入ってきて、いろいろな土地利用をしてみた訳です。北海道農業は何故土地利用が下手かという原因は、移住前の内地で米単作ばかりをやってきたから、畑作的な土地利用とか輪作方式を守れないのでないのかという論理があります。我々はそう聞かされてきましたが、それは嘘っ八なんです。そうではなく、北海道の主力になった団体移住者は、多くは焼畑地帯から来ているんです。ＮＨＫブックスで佐々木高明さんの『稲作以前』という本が出ていますから、読んでみて下さい。昭和三十年から三十五年までの世界農業センサスを見ますと、伊豆半島の南部はまだ焼畑をやっていた訳です。晩成社の伊豆の松崎町なんかよい例です。依田勉三の本家の松崎温泉では、今も猪鍋を名物として営業しているでしょう。猪の出るようなところは焼畑をやっている証拠です。奈良県の十津川なんて未だに焼畑をやっています。何故明治二十九年の北海道殖民地区画設定に伴って、北海道に大量の移住民が入ってきたのか。この二十年から三十年の間の問題なんです。三十年というのは日清戦争が終り賠償金が入ってきて、近代化のひとつの転換期を迎えて新しい社会構造、新しい生活の仕組の転換期になっていた時です。いわゆる産業革命の初期段階が終わり、次の新しい論理を考えていかなければならない時期に来ていた訳です。そのきっかけとして、戊辰戦争から明治三十年代に焼畑地帯で何が起こったか。これを皆さん勉強していただきたい。

これも土地利用の問題なんです。結局我々が土地利用が下手であれば、今の高度成長の中でダムを作ったり、観光道路を作ったり、南アルプスに道路を作ったり、これは皆土地利用に関わってくる訳です。

私は自然保護に絶対反対なんです。自然保護なんておこがましいですよ。我々自身が自然の一部なんです。人間もヒトとして自然の中にあり、人間はお釈迦様の手の平で踊っているようなものであって、もっと大きなものがある訳です。宮沢賢治の文学はそういう精神を示していますね。そんな意味で宮沢文学を改めて読

み直していただきたい。ヨーロッパのイソップ童話は動物を擬人化していますね。しかし、宮沢文学における人間は、水や山や森に向かって「おーい！木わけてけろよー」「いいぞー」というように木と対話をする。熊と対話をする。そこで許しを受け、人間の生活にそれを取り入れていくという関わり方をする。ここがイソップ童話と宮沢文学の基本的な違いであります。そこには、我々が二十一世紀に向けて生き延びていくための、重要な課題が含まれているということを理解していただきたいのです。

さて、土の話に戻ります。道庁の役人でも農林省の役人でも、土地というものを広げた地図の紙の上で平面としてしか見ていません。開拓者を入れる時は、紙の上に線を引いて、「お前この五ヘクタール」「あんたはこの五ヘクタール」という具合に振り分ける。農業というのは、そういうものではありません。現場をよく見なければ駄目です。だから戦後開拓にいろいろな問題が起きてきた。この頃は少し真面目な議論がされるようになってきましたが、私が騒いでいた頃は誰も見向きもしませんでした。

北海道全体の現況植生図は、先ごろ北大大学院の伊藤先生が作りましたが、戦前植生図というのはないんです。いわゆる、本来の北海道の自然植生図というのはまだできていないんですよ。今から十何年か前に、北海道の植生図を作るのに三十五万円の道費予算がつきました。その予算は誰がつけたかというと、高橋敏五郎＊さんという北海道の土木行政の大ボスで、堂垣内知事に長い手紙を書いた。巻き紙で二メートルもある手紙で、「今のように、土というものを全く無機物と同じ手つきでブルドーザーで押しまくるやり方は駄目だ。土というものは生きている。特に土の表面から五十センチの間には、我々の生命の生存に関わるものが含まれている。」ということを書かれたんです。それで初めて、僅かですが三十五万円という予算がついたんです。農業界や植物に関係のある人から出てきた問題ではない。そういうふうに、学問というものは、幅広くトータルな目で見ていかなくてはいけないということを痛感しています。

日高山脈の剣岳は、たった一二〇〇メートルの山なのに頂上が禿げてしまっていますね。岩だらけです。日高山脈の他の山を見ても、一二〇〇メートルで禿げてるような山はないですよ。これは、私は野火だと見てるんです。シャモは何人もいない時代ですから、おそらく鹿を追うために秋に火を付けたんだと思います。そういった野火があの山を傷めたのではないか。野火の問題。それと、花崗岩の風化が進んで表土の流亡につながる。そういう現象が、あの一帯で繰り返されていたと想像しています。こういう問題も、やはり考えていく必要があると思います。

水の貯金箱である日高山脈

では水の話に移ります。本当は土の方が大事なんですよ。土と水は一体なんだから土があるから水を蓄えてくれる訳です。海ではありませんよ。我々の陸が水の貯金箱なんです。ところが我々は水は土の上を流れているものだとしか思っていない。土の中にも流れているんです。私は前に電波探知器を使って帯広の地下水の調査をやって貰ったことがあります。その時に地質調査の方が「この冷たい水は日高山脈から何ヵ月もかかってここに出てきたんだ」ということを教えてくれました。それぐらい時間をかけて地下を流れてくるんです。私は驚きました。水というものは、位置の法則、高い所から低い所にバッと一気に流れるものだと思っていました。さにあらずです。

四年程前に東京の友人から電話がきて、「玉野井という東大名誉教授で沖縄国際大学の先生が、北海道を見たいというから案内してくれ」と言われましてお世話をしました。何日か一緒に旅行する間にいろいろと議論をしましたら、「あなたの考え方は我々と共通するものがある。是非一度沖縄へ来てくれ」と言われて、その年に行ってみました。沖縄本島は飛行機を乗り換えただけで、いきなり宮古島へ行きました。昭和五十

年に池田で地域開発センターの村おこしの会議があったのですが、それがきっかけになって、日本国中に村おこし運動というのがおこりました。沖縄にもそれが伝わって、島おこし運動を始めて三年たったところへ私が飛び込んでいった訳ですね。行ってみて驚いたのは、沖縄というところは戦前から水が足りない、天水に頼っているところだと聞いていたんですが、降雨量は二三〇〇ミリメートルもあるというんです。二三〇〇ミリメートルも降雨量があって、水が足りないなんておかしいですよ。沖縄本島には水源である山が北部にしかないんです。宮古島には全然山がない。石垣島もちょっとした山しかない。とにかく沖縄の島というのは平べったいんです。そして島には珊瑚礁がある。たしかに二三〇〇ミリメートル降ってはいるんですが、貯金箱がないからみんな抜けてしまうんです。おまけに珊瑚礁でスーと抜けてしまうから、溜まりっこない。いくら二三〇〇ミリメートル降雨量があっても山がないから駄目なんです。

札内川・上札内の渡船場

十勝の降雨量は八〇〇から九〇〇ミリメートルですが、水には困っていません。日高山脈があるからです。大雪・十勝山塊があるからです。日高があって大雪があって、その山には木が生えている。歴舟川や利別川、浦幌川は別にして他の全ての川は皆帯広に流れ込んでいる訳です。完全な構造盆地です。しかしそれらの水の元は日高山脈です。大雪、十勝の山々です。

我々はその上に胡坐をかいて、水のありがたさを忘れてしまっている。蛇口をひねれば水は出てくるものだと思っている。これはとんでもない間違いです。

私は中札内農協の『組合三十年史』を作りました。その時に、大正二年頃の上札内の渡船場の写真を見たんです。その写真の札内川は、水が満々と流れているんですよ。今はどうですか。森林が弱ってきているんだと見ていいと思います。貯金箱が壊れてきていますよ。そうすると私たちは日高の森林をもう一度見直して、下手なダムを作るより、どうやって森林と土地利用をからめていくかを考えるべきなんです。私は最初、農業的な土地利用だけ考えていたんですが、だんだん分かってきたんです。森林の土地利用と、農業的な土地利用を一体化しなければいけない。ところが森林行政と農業行政、そして水の行政はバラバラなんです。水は天下の貰い物ではないんです。それは循環のなかのひとつの作用なんです。

二十一世紀を考えるうえで是非読んで欲しい本『資源物理学入門』

ＮＨＫブックスから出ている『資源物理学入門』という本があるんですが、これは是非読んでいただきたい本です。たった七〇〇円ですから、コーヒー二杯飲んだと思えば安いものです。著者の槌田敦＊さんは日本の天才的な物理学者だと私は思っています。高等数学なども出てきてちょっと頭が痛くなりますが、この本を掴めれば次の段階が掴めます。あとは面白くなってきます。是非読んで下さい。もうひとつ『エントロピーの法則』これは東大の名誉教授の竹内均さんが訳したリフキン＊の本です。ドイツのハイゼンベルグだとか、フランスのド・ブロイだとか、我々が五十年前に卒業したことばかりですが、今頃アメリカがこんなことを言わなければならないのかというところに、アメリカ文明の完全な壁があるんです。大切な本ですが、あくまでも大衆向けの解説書です。ただし、リフキンという人はカーター大統領のブレーンですからね。だ

から内容については信頼していいけども、我々が半世紀前に考えていたこと、すなわち、ニュートンを否定した、新しい電子顕微鏡下の物質の、ミクロの世界の仕組というものを物語っている訳です。私にすれば、槌田さんのエントロピーの概念整理のほうが非常に素晴らしいと思います。我々人間は一日に二三〇〇から多い人で三〇〇〇カロリー採っていますね。そのカロリーが出ていかなかったら大変です。発汗作用によってカロリーを代謝している訳です。人間の身体の九割は水なんです。ご飯だったら二週間食べなくても生きていけますが、水を飲まなかったら一週間で死んでしまいますよ。人間も水、植物も水、豚も水なんです。水豚は困りますけどね。我々の生命の基本は水なんです。それがエントロピーを調節している訳です。エントロピーが増大すれば壊れてしまうんです。

槌田さんの考え方は、植物は生産者だということです。太陽のエネルギーから炭水化物を作り、酸素を吐く、炭酸ガスを摂る。それには下から水がこなければいけない。枯れた木にいくら太陽をあてても、光合成は行われない訳です。その光合成が行われるためには水が必要なんです。その水が蒸発して、どんどん上に行って、水蒸気は氷の結晶になる。そこで槌田先生に言わせると、氷の結晶は熱線として、太陽エネルギーと熱交換して、宇宙系に熱を返しているんだと説明している訳です。槌田さんの論点は、地球は閉鎖系ではなく開放系だ。宇宙からエネルギーを貰いっぱなしではない。貰いっぱなしであれば、地球は熱がたまって焼けこげてしまうはずですね。宇宙と呼吸をしながらバランスをとっているんだということなんです。人間というひとつの個体にしても、ひとつひとつの作物にしても、そこに授受がある訳ですね。その生存の原則を解明したのが、この『資源物理学入門』なんです。安い本ですから私に騙されたと思って是非読んで下さい。この本を勉強しないで二十一世紀を語るなんておやめなさい。

無駄なエントロピーを出さない町づくりを

去年私はシベリアへ行ってきましたが、シベリアの森林というのは凄いもんです。私が今問題だと思うのはトイレットペーパーです。皆さん気持良くばんばん使いますね。今のトイレットペーパーは、吸収力を強めるために針葉樹を使っているんです。昔は新聞紙とか黒チリ紙を使っていました。新聞紙というのは印刷の油がついてますから、お尻を拭いても、手にばい菌が伝わってこない。トイレットペーパーは滲みるように作ってあるんだから、厚くして使いますね。今のメーカーはいかにして大量生産、大量消費させるかという馬鹿なことをやっているんです。そして、木材資源をどんどん捨てている。しかもわざわざ真白に漂白している訳でしょう。コペンバーゲンの空港では、無漂白のトイレットペーパーでした。一番恐ろしいのは機械化、いわゆる石油文明と自然との関わり合いのスピードが違ってきていることです。一昨年、東ドイツのハルツ山地へ行って、三日間森林を見て歩きました。日本の森林はお粗末ですよ。

ドイツの国土は全部五〇〇メートル角のマップになってるんです。この土地は何センチまで好気性バクテリアがいますよ。それから何センチには嫌気性バクテリアがいますよということが載ってるんです。だから砂利を採る時は、好気性バクテリアと嫌気性バクテリアとを分けて、戻す時もその順序で戻さなければならない。それと、日本の高速道路の周りの森林は、カラ松だったらカラ松ばっかり、白樺なら白樺ばっかり、東海道松並木といえば赤松ばっかり、日本はばっかり農業でばっかり植林です。ドイツは違うんです。道路の両側に一キロぐらい森林の深さがあるかと思えば、一〇〇メートルになったり、三〇〇メートルになったりする。地形に合わせてできているんです。道路のつけ方も、土壌の状態によって決まる訳です。市町村連合の研究所があって、そのチェックがなかったら、道路も建物も建てられないんです。これには驚きました。そして我々は都市のなかの森林というと、管理された森林としか考えませんが大間違いです。ベルリンの町

では、アパート群の向い側にある都市林でもなんと下草の管理をしないのです。東ベルリンだけと思ったら西ベルリンの住宅街区の中にもあるようです。ところが帯広はどうです。柏林台の小学校の脇に小柏のかたまりが少し残ってたのに、少年たちの非行化の原因になるからといって伐ってしまった。話が逆なんですよ。そんなことドイツでやってごらんなさい。市民の側からドヤされてしまいます。ヨーロッパではそういう土地利用をしている訳です。

我々は石油文明の中に溺れきって、ただ便利ならいいんだという意識で、いろいろ大事な問題を落してきました。水の問題、下水道の問題、それらを小さく分散して無駄なエントロピーを出さない、そういう町づくり、農村づくりを考えていく時代に来ていると思います。

昭和五十八年　ふるさと十勝三月号

アメリカ農業の沿革を考える

―一面のみの美化は禁物―

”最初の開拓者が清教徒“は虚像だ

アメリカといえば、北海道の人間には、札幌農学校の伝統がつくりあげたバカな神話ができあがっていて、戦後期になってさらに強められたような気がする。私のような明治大正生れの世代はことにひどい。それはアメリカとは、すなわちニューイングランドというイメージ、あるいはアメリカ最初の開拓者は、メイフラワー号のピューリタン（清教徒）たちといった、誤ったアメリカの虚像をつくりあげてしまっていることである。

最近も「石橋湛山賞」を受賞した天谷直弘氏（通産相顧問）が、「スチュワート王朝の圧迫に耐えかねた新教徒たちが、一六二〇年、メイフラワー号に乗ってアメリカ大陸にやってきたことが、アメリカ合衆国の起源だが…」と、受賞記念の論文のなかに書いていることからも、虚像の根が深いことがわかる。日本の最高の官僚であった人物にしてこの程度だから、おして知るべしである。まだ占領ボケから抜け出せないでいることになる。

だいたい合衆国という国はない。合州国がホントで、明治政府の誤訳が慣用となって、まかり通っているにすぎない。アメリカは連邦国家なのだ。また新教徒と書いているが、イギリス国教会（アングリカン。日

本で聖公会といっているのがその流れ）そのものが新教徒（プロテスタント。カトリックを旧教というのに対し新教という）である。いわゆる清教徒といっても、国教会に対する分離派であり、その一派にすぎない。（日本では組合教会、現在は教団に統合）アメリカの起源を清教徒の移住におくことによって、アメリカがいかにもご清潔で、新しい理想にもえた白人たちの一群によってできあがった新国家であるかの如き神話をデッチあげたのにすぎない。伝説ではあっても歴史ではない。「アメリカには、うしろめたい手段によって高尚な生活を送る連中が少なくないが、清教徒たちはその最初の例であった」とさえ、アステア・クックは『アメリカ』（ＮＨＫ出版）にしるしている。

「欧米」とまとめていう文化は錯覚

現に清教徒たちより早く、一六〇七年にバージニア植民地がジェームズタウンを拠点として開設されているからである。それから遅れて十三年後、バージニアを目ざして出帆したはずのメイフラワー号が、腕の悪い航海士の手によって針路を誤り、はるか大西洋岸の北端、マサチューセッツ湾のケープコッドにたどりついてしまった。これがニューイングランド植民地のはじまりである。

このアメリカ建国神話の虚像をいちばん早く感じとり、見破って告発したのが、他ならぬ札幌農学校の卒業生内村鑑三である。詳しいことは鑑三の著書『予はいかにしてキリスト信徒となりしか』（角川文庫）を一読せられたい。アメリカ軍の占領下にあって、この本の一部が検閲削除で刊行されていたことからも、その告発の真実性を推察することができる。

昭和四十五年、私はヨーロッパを二十日間旅して、引き続きアメリカの旅がはじまる。ニューヨークからボストンを中心にしたニューイングランドであった。私はそこではじめて、中世社会の歴史をもたない、そ

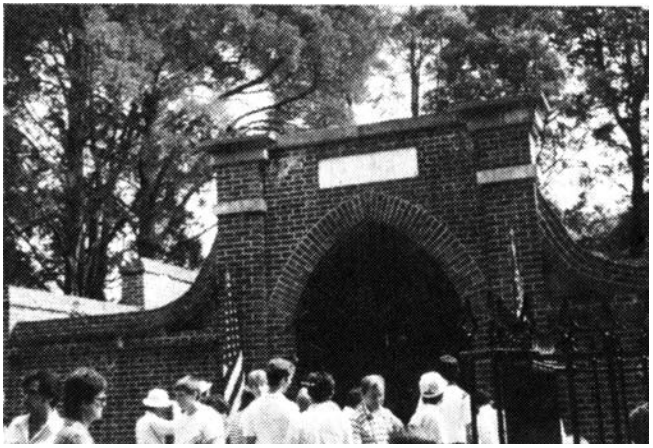
の克服の苦闘の歴史をもたない、いわば脱出者、逃亡者としてのアメリカ文明というもののなにものかであるかを考えながら十五日間旅したのである。われわれが今日まで「欧米」といって、ヨーロッパとアメリカが一体となった文明文化が存在するかの如き錯覚をもってアメリカを眺めてきたことの、大間違いであることに気がついたのである。今も私の判断に間違いがないと思っている。惜しいことに、この時は南部の地を訪れる機会がなかった。

ワシントン旧邸全景（上）と、その裏庭（下）

農業と密着するミシシッピー川

こんどは、バージニア、フロリダ、アーカンソーといった南部諸州を歩くことができ、さらにミシシッピー川をヨットで上下したり、この川の姿をいくたびか上空から観察することができ、この川が今も生きてアメリカ農業に深くかかわりあっている様子を見、考える機会がもてたことは大収穫であった。

首都ワシントンDCに二泊した。ワシントンDCからポトマック川に沿って二十キロメートル下流にマウント・バーノンという土地があって、ここにアメリカ初代大統領ジョージ・ワシントンの旧邸が、遺跡公園として保存されている。



ワシントン旧邸の炊事室（上）木造のため別棟にしてある。現在は観光客のため主屋と渡り廊下でつながる。（下）はワシントンの墓

ここで意外な事実にぶつかる。ワシントンは独立自営の農場主でなく、多数の黒人奴隷を使用する農場主であったことである。なんだ、今頃気がついたのかといわれるかもしれないが、事実その通りである。現在の敷地は一七三ヘクタールであるが、もとは三四〇ヘクタールあったそうである。さらにウィリアムズバーグにも六〇〇〇ヘクタールの農場をもっていた。農場には煙草工場、紡績工場が設けられていたという。ワシントン邸から見下ろすポトマック川畔には、チェサピーク湾から遡ってくる船の立派な船着場がある。

ワシントンは一〇〇〇人近い奴隷所有

ワシントンの所有していた奴隷の数は現地の説明では三一七人、これは黒人の成人男子の数で、もちろん別に女子供たちがいた。この女子供たちはワシントン夫人の所有物である。だから奴隷全体の数では一〇〇〇人に近い数字になるのではあるまいか。奴隷は商品であるから数をふやしたほうが儲かるという考えかたが当時からあったようである。家畜を繁殖させるのと似た考えかたである。

写真で見られる通り、ワシントン邸はどうみても白亜の石造館に見える。私の好奇心は、この建築はいかなる石材をもって積み上げたものかという質問にはじまった。ところがとんでもない、これは木造だというのである。木材ブロックの表面に、粗い石砂としっくいを混ぜあわせ塗ったものだという。見たところまったくの石造に見える。それでは低層の煉瓦建の長屋は何かと訊ねたところ、あれは奴隷小屋だという。実はそこではじめて、ワシントンが奴隷所有者であったことが判ったのである。

煉瓦造りの奴隷長屋は観光用か

なるほど白人たちは木造洋館に住み、奴隷は逃亡しないように、壁の厚さ五十センチメートルもある煉瓦建築にしているのだという理解もしてみた。奴隷長屋の端には見張窓のある望楼が立っている。この南部の大西洋側は、日本の気候に似て、夏は高温でしかも湿度が非常に高い。そのため白人たちは木造洋館に固執したものかとも考えてみたのである。

戦士の墓標が並ぶアーリントン墓地

ところが、一七九八年このワシントン邸に、二週間滞在したポーランドの詩人ユリアン・ニムツエービッチの手記が残っている。それには「ワシントン邸の黒人小屋は、とても家と呼べるようなものではない。非常にみじめなもので、夫婦は粗末なベッドで寝み、子供たちは土間の上で眠る」とその詳細が描かれている。これを読むと、現在の煉瓦長屋は観光用のもので、当時は粗末な丸太小屋であったらしい。よく考えて見ると写真の煉瓦小屋はあまり整備されすぎていることに気がつく。

”平等“とは背反する黒人の扱い

ワシントンと同じく、建国の功労者で独立宣言の起草者第三代大統領トーマス・ジェファーソンも、この人もまさかと思ったが黒人奴隷使用の農場主であったことである。独立宣言に曰く

リー将軍旧邸、今はアーリントン墓地の霊廟

「われわれは、次の真理を自明のものと思っている。一切の人間は生れながらにして平等である」とは、黒人奴隷たちにとってはいかなるものであったろうか。結局、黒人たちは人間として扱われなかったということである。しかし、ジェファーソンが、七六〇ヘクタールのモンテセロの農場に建てた「奴隷長屋」は、当時一般の白人の家よりはすぐれたもので、一連の煉瓦建であり、床もあり、スキ間風の入らないぴったりとした扉、それにガラス障子の窓もある建物だったとされている。とはいうものの売買された奴隷は奴隷以上のものではなかったはずである。

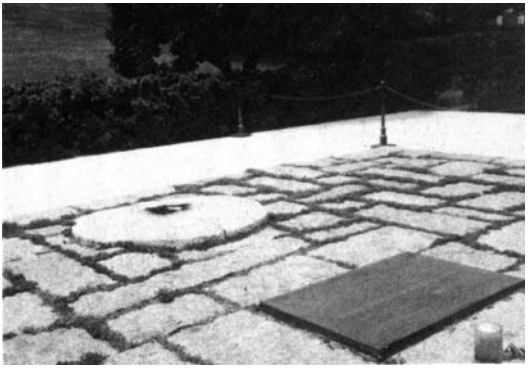
また、南北戦争の時の南軍の総司令官リー将軍（その夫人はワシントンの孫という）もまた、奴隷所有の農場主であった。ケネディ兄弟の眠るアーリントン墓地、その丘の上に立つギリシャ風の列柱を持つ建造物こそ、南北戦争に敗れたリー将軍の邸宅であり、その敷地は農場跡であって、北軍に没収されて陸軍墓地となったものだという。聞くと見るとは大違いとはこのことである。

凄絶な南北戦争では六十万人戦死

ついでに記すと、いつか江藤淳が、近代を通じて世界で最も残酷な内戦が南北戦争であったと、たった一行であるが触れていたことにひっかかり、調べたことがある。

一八六一年四月（文久元年）サムスターの攻撃にはじまり、南軍が敗れて降伏したのが一八六五年四月（慶応元年）、まる四ヵ年に及ぶ内戦である。この間の北軍の動員数二〇〇万人、戦死者三十六万人。南軍の動員数六十万人、戦死者二十五万人（当時の北部の人口は白人で一九〇〇万人、黒人四十万人。南部の人口は白人五〇〇万人、黒人三五〇万人であった）。その凄絶さを数字が示してくれる。

北軍は、南部の白人から選挙権をとりあげ、黒人に選挙権を与え、十年間にわたる軍事占領を行い、連邦政府軍の黒人部隊を以てしたというのであるから、至れりつくせりである。今も南部にはその怨念が深く残されているといわれているが、考えてみると、ついこの間の出来事である。



ジョン・ケネディの墓（写真上）

ロバート・ケネディの墓（写真下）

十九世紀初め北部は工、南部は農

アメリカの独立解放の戦いは、一七八三年のパリ条約によって終結し、イギリスからの独立承認をかちとるとともに、アパラチヤ山脈を西に越えたミシシッピー川に至る地域の割譲を受けた。西部フロンティア拡張への第一歩である。

自由民権の共和制ア

メリカの出現に刺激されて、フランスは王制を打倒し革命がはじまる。慌てたイギリスは革命の波及を恐れて大陸諸国と手を結び、対仏同盟をつくり、フランスを包囲する。フランスはナポレオンの出現によって、フランス革命を終結させ、対仏包囲の打開をはかる。

この間、アメリカの北部諸州は欧州の交戦諸国に、食糧その他物資を供給することにより、飛躍的に海運力を増大させ、またたくまに巨利を得て巨富を蓄積する。農業環境の厳しい北部諸州は、農業よりも漁業、造船、海運のほかに、鉄、石炭、水力の資源環境に恵まれていて、そのことが産業革命を急速に進捗させることになる。

ジェファーソン大統領は、密かにナポレオンと交渉し、一八〇三年ロッキー山脈以東（テキサスを除く）今日のアメリカの三分の一にあたる地域を、わずか一五〇〇ドルで譲渡をかちとる。一八五三年までに精力的に版図拡大をはかったアメリカは、太平洋岸まで今日の領域を手中に収めたのだった。この間、北部諸州の重化学工業化、西部への急激な発展と開発、開拓が進行するが、南部は依然として、農業地帯としてとどまっていた。

勤勉な移住者が大規模農地開く

一八五〇年に南部諸州の白人五〇〇万人のうち、十パーセントの白人が三五〇万人の黒人奴隷を支配し、五十人以上の所有者はわずか八〇〇〇人にすぎなかったという。これら少数者が南部各州の権力を握り、奴隷農業制に有利な政治をほしいままにしていた。

南北の対立は単に自由州と奴隷州との対立といった単純なことではあるまい。いま少し掘りさげて考えてみると、もともと南部のプランテーション農業（植栽農園制）は、モノカルチャー（単作物連作農業）であ

るため、地力を収奪して土地を荒廃させていた。新たに広がったミシシッピー川流域は、南部の支配者たちにとってはプランテーション農業を拡大していく格好の土地であった。

すべての南西部の大規模農業地はもとは僅かの財産と、激しい労働に耐える勤勉な移住者たちによって開かれた土地であった。これらの土地の開墾が進み、ようやく満足のいく状態になると、大規模なプランテーション業者が、豊富な資金と黒人奴隷の一隊をひきつれてたち現れる。非常に高い土地の買収価格を示して、片っ端から吸収していった。

土地を売り渡した小農民、貧しい白人たちはやむなく、プランテーションに不向きな山地とか、ミシシッピーを渡って、さらに西部の未墾の原野に追いたてられていくという有様であった。そのまた先を政府と連邦軍によって、西へ西へと追いたてられていったのはインディオたちであった。

民主主義の土台は独立農民にあり

第七代大統領になったアンドルウ・ジャクソンは、貧しい開拓者の子から身を起こしたテネシー出身の生粋の西部育ちの大統領であった。彼は、健全なアメリカ民主主義の土台は、独立自営農民であるという信念の持ち主で、ジャクソニアン・デモクラシーの父といわれた指導者である。奴隷制をかたくなに守る南部諸州こそ、ジャクソニアン・デモクラシーに対する挑戦と受けとる。こうして一つの国家でありながら、二つの部分からなるという矛盾は、耐え難いほど大きなものとなった。

一八六〇年、第十六代大統領となったアブラハム・リンカーンも西部の出身者である。翌年ついに南部諸州は連邦より脱退し、南部連合政府を結成し、南北戦争がはじまることになる。結果は先にしるした通りである。黒人奴隷のアフリカからの輸入は一八〇八年に禁止になったが、一八六五年の奴隷完全廃止までさら

に五十八年、半世紀以上の月日が必要だった訳である。

考えてみるとアメリカの奴隷制農業は一六〇七年のバージニア植民地開設にはじまる訳だが、ちょうど徳川幕藩制の、俗にいう徳川三〇〇年の全期間にわたって行われていたことになる。ケプロンだとかクラークだとかが北海道に来て、近代農業のいかなるものかの指針を、大まじめになって示していったアメリカだが、連中のくるつい十年前まで、奴隷制農業が行われていた訳である。その代表的人物が建国の功労者たちという訳であるからひどい話である。

「植栽農園制」は第二次大戦後も続く

イギリスの世界戦略は世界各地に植民地を広げていく訳であるが、印度の綿花、豪州の羊毛、マレーシアのゴム、セイロンの紅茶といったプランテーション農業を展開し、長く世界の覇権を握っていたのである。第二次大戦後、これらの植民地は相次いで解放されたものの、依然としてプランテーション農業は続いている。

こうしてみると、イギリスが植民地としたアメリカには、プランテーション農業の労働に酷使すべき植民地人労働者がいなかった。インディオはいたが、彼らは、人の頭の皮をむくように、アメリカの大地の皮をむいてやる農業には、あまりにも深く自然を畏敬し調和していた。「とうもろこし」の栽培は彼らのものであったが、自然の回復力に応じた栽培の仕方であった。野牛を追いかけて捕えてはいたが、野牛の数を減らすようなことはしなかった。

イギリス人はインディオたちをそそのかして敵対させ、夷を征するに夷を以てするというイギリスの植民地政策の伝統的謀略により、敵の部族をうち亡ぼした証拠に頭の皮をはがさせて、その数によって馬と銃を

与えて取引した。頭の皮はがしはインディオのものではなくて、イギリス人たちの発明したものである。そしてインディオは人の頭をはがすという伝説をデッチあげたのである。プランテーション農業を展開するために、イギリスそしてアメリカは、アフリカから膨大な黒人奴隷を労働力として、二〇〇年以上にわたり輸入したのだ。移住ではない。

これが農村でのメキシカンたちの粗末な住居

「家族農場」の手中にない農業も

世界の穀物倉庫といわれる今日のアメリカ農業を支えているのは、アメリカン・デモクラシーの体現者といわれるファミリーファーム（家族農場）であることは確かにまちがいない。ジャクソン大統領のいう独立自営農民の伝統は続いていて、健全であり決して崩壊はしていない。しかしすべての農業そのものは、独立自営農民の手だけで行われているのであろうか。（オーナー農業も少なからずあるにはあるが、今ここでは問わない。）たとえば、小麦、とうもろこし、大豆、ソルガム（こう

フロリダのオレンジ、グレープフルーツの果樹園。何時間走っても果樹、果樹。とにかく広い。真ん中は牧草がまいてある

日本向けオレンジ、グレープフルーツの箱がある。選別工場で

りゃん）あるいは牛肉といったものは、ほぼ完全機械化を実現していて、家族農場の手中にある。

しかし、オレンジ、グレープフルーツ、多種多様の野菜といった農業は、かたちは家族農場であっても、苗栽培、移植、収穫作業、パッケージ作業、その他の労働集約的作業は、メキシカンとか、カリブに浮ぶ島々、中南米からの数十万、数百万といわれる低賃金労働者の手によって補完されているのが事実である。（最低賃金法で守られているという説明もあったが、必ずしもそうでないようである。現地の日系の人と議論をしてみたが、結局私の推測を肯定したことでもわかる）

今に残る「植民地農業」。グレープフルーツ、オレンジにも苦い汁

独立自営農民の歴史は、はじめ奉公人といわれる雇傭労働者から借地農に、借地農から自営農民へと、踏みのぼっていくラダー制（はしご段をのぼるという意味で階梯制と訳す）という、かつてのフロンティアのチャンスと成功の道があったが、もはや家族農場の前途にさえ借地による拡大の道しか残されていない。メキシカンとか、スパニッシュといわれる人たちには、空転する踏車（ふみぐるま、昔は水田に揚水するために使われた）の生活を余儀なくされ、惨めな農業労働者の差別された社会が残されているにすぎない。

アメリカ農業といえば、その一面を見て全部を美化し、まばゆい光をみて、深い影を見落としている幾多の報告に、勘違いをしてはいけないと思った。オレンジにもグレープフルーツにも、苦い苦い汗がまじっているということだ。アメリカには、まだ植民地農業が生き残っている事実を忘れてはならないと思った。これがワシントン邸、アーリントン墓地ですごした何時間かの見学のなかで、私が考え込んだことである。

昭和五十八年　農事組合だより1月号　北海道農業自立推進協議会

宮沢賢治の卒業研究

―賢治文学のキーワード―

宮沢賢治が盛岡高等農林学校三年生の時、『腐植中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値』という卒業研究にとりくみ、これを得業論文として提出している。

賢治が盛岡高農の農学第二部（後の農芸化学科）に入学したのが大正四年、同級生は十二名であった。この得業論文は、他の九名の論文と共に大正七年三月、農学第二部『得業論文』として一冊に製本され、現在の岩手大学図書館に保存されている。論文は、標題は毛筆で記され、本文はペン書、ふくらみのあるのびのびとした書体で書かれている。

昭和五十年に、花巻農学校の移転跡地に市民文化会館が竣功し、これを記念して宮沢賢治展が開催された。この機会に展示物の一切を借り出し、北海道で賢治文学展を開こうということになって、千歳の詩人斉藤征義君の努力で、全道七ヵ所で開催した。非常な成功であった。帯広会場など僅か五日間で一万人の入場者を得たということは、文学展としては異例なことであった。

私は文学の賢治だけでなく、農業教師としての賢治の相貌をいささかでも紹介したいと思い、そういう努力と工夫をしてみた。（校本全集はまだ刊行途中であった）

当時、十勝の農業は、機械化と規模拡大が進む一方で、化学肥料の増投、農薬・除草剤の使用頻度が高まり、土壌の荒廃が指摘されるようになっていた。酪農家が片手間につくるビートや豆類の増収が目だつ一方

で、畑作農家の省力化が実現しながら反収があがらず、冷湿害にも弱い体質が暴露されていた。そこで、土づくりに問題があるのではないかとの反省から、豆類三、根菜三、麦類三の割合で作付方式を安定させようという「三・三・三運動」が進められていた。

その以前は、国立農試の畑作部長が、自ら先頭にたって、「もう堆厩肥がどうとか、緑肥がどうという時代は終った。化学肥料と除草剤・農薬だけで立派に農業をやっていける時代が来た」と町や村を講演して歩いていたのである。そしてあろうことか、札幌の国立農試の場長に栄転していった。基本法農政の走り出した時代である。農業の近代化とは、イコール工業化あるのみという熱気の高まりの時代であった。

たしかに科学者リービッヒが無機栄養説を唱えてテーアの有機栄養説を否定し、化学肥料の必要性を化学的に実証してみせたことは間違いない。しかし、地力均衡・物質循環の考え方まで、否定したものではなかった。リービッヒの原著をほん訳する人が出てきて、従来の孫引きの孫引き的リービッヒ理解が、間違いであったことが判った。むしろ彼は、ヨーロッパ農業の現状を批判し、徳川封建期の日本の農法のすぐれていることをヨーロッパ人に紹介し、警告としている。このことに私たちが驚かされたのも、実はこの頃である。

こうした時、大正七年という非常に早い時期に、土壌中の「腐植」の持つ意義に着目し、研究テーマとした賢治の学究的位置づけはいかようのものであるか明らかにしてほしいと思い、私は帯広畜産大学の田村昇市教授にお願いし、土壌学者から見た賢治について、このレポートを中心に解説をまとめて頂いた。この論述は会場にも掲出し、地元紙にも紹介された。

「緒論。腐植質ハ、土壌中動植物質ノ分解ノ途中ニアリテ、普通ハ暗褐色ヲ呈シ、種々ノ無機成分ヲモ含有セル、複雑ナル膠状複合体乃至ハソノ他ノ混合物ナリ。

而シテ腐植質中ニハ泥炭ニ類スル状態ヨリ、簡単ナル有機化合物ニ至ルマデノ種々ノ過程ニアル多クノ物

質ヲモ抱含シ、生物遺体トノ間ニ成分上劃然タル堺無キモ、分析上腐植質ト云フハ、土壌ヲ稀塩酸ニテ処理シタル後、安母尼亜溶液ニ溶解スルモノノミヲ指ス。

然ルニ腐植質中ノ無機成分ガ、植物栄養上如何ナル価値ヲ有スルヤハ、十九世紀末葉以後、多クノ学者ノ注意セル所ニシテ学説論難少カラズ」

（原文のまま）とある。「まったくその通りで、既に半世紀を経た今日においても、正確には解明が終っていない」という田村教授の教示に対し、また驚くのである。

（註　腐植物質は腐朽物質と真正腐植物に分けられる。腐朽物質も、生物遺体の中間分解生成物や微生物の代謝産物であるから、原理的には有機化学的方法によってそれぞれ分別できる筈である。しかしこれらの物質を穏和な方法で土の中からとり出し、結合している無機成分を切り離すことは難しい場合が多い。そのため、これらの物質の内容はまだよく判っていない。真正腐植物質に至っては、未だに満足な土からの抽出方法や分別方法が確立されていないので、その実体は殆ど不明である。―甲斐・橋立共著、『土壌腐植と有機物』昭和五十一年、農文協刊―）

賢治は盛岡・花巻附近の四ヵ所からローム層土壌を採集して科学分析を行っている。この分析研究のために、十冊に近い原書を読解している。（賢治の語学力は相当なものであったらしく、主任教授の関豊太郎の土壌についての試験答案を英文で解答記述し、教授を驚かし、かつ喜ばせ、手放しの賞詞を学生の前で与えたという。―校本全集一五巻年譜―）

「今次実験ノ供試土壌ニ就キ、次ノ結論ヲ得。腐植質中ノ燐酸ハ殆ンド全部、植物ニ不可給態ナリ。ソノ量ハ土壌中現ニ可給態ナル燐酸ノ量ニ比シテ甚大ニシテ、百倍以上ニ及ベリ。不良土ニ於テハ、土壌ヲ単ニ自

然情況下ニ永時放置スル事ニヨリテ、腐植質中、燐酸ガ植物可給態ニ変ズル事ハ期待スベカラズ。
腐植質中ノ加里ハ、比較的少量ニシテ現ニ可給態ナル加里ノ量ト大差ナク、植物栄養上ノ大ナル問題ヲ成サズ。
ソノ実際ニ可給ナルヤ否ヤハ俄ニ断定シ難キモ、寧ロ否定的傾向ヲ示ス」と、結論をしるし、「終リニ臨ミテ、本論ヲ草スルニ際シ終始指導ノ労ヲ執ラレタル古川教授、並ビニ多クノ注意ヲ賜ハリタル関教授ニ深謝ス」と結んでいる。

これらの供試土壌の採集地点はいずれもローム層で、私たち十勝の火山灰性土壌と類似の土壌の研究結果であり、このことが後年、農学校教師、羅須地人協会時代を経て、東北砕石工場技師として、土壌改良のための石灰施用の普及、特に炭酸石灰の普及について、いかにも賢治らしい良心的な啓蒙活動に没頭させ、その死を早めることになるのである。私たちが「炭カル」といっている肥料用語は、賢治の造語にはじまるという。ところで、関豊太郎は戦前の有名な土壌肥料学者で、明治四十三年からドイツ・フランスに留学。主に地質学、土壌学を研究し大正二年帰朝。賢治たちが高農三年の時『火山灰土壌の研究』によって、農学博士の学位を得ている。

当時石灰施用が害悪視されている時代に、岩手県下の石灰資源の工業化調査にあたり、生石灰、消石灰が燃料コストに関係あり、緩効性の石灰岩末こそ、岩手県農業発展のための土壌改良に必要であると提言し、後に賢治が砕石工場技師として身を投ずるきっかけとなるのである。古川教授は、詩集『春と修羅』の「小岩井農場パート一」の冒頭に出てくる「化学の古川さんによく肖たひとだ、あのオリーブのせびろなどはそっくりおとなしい農学士だ」とある古川さんである。不思議なことに、大正九年賢治が研究生二ヵ年を終えて高農を去る年、関教授も古川教授もまた教壇から去っていくのである。

さて、この時期の文学者賢治はどうだったのか。まだ詩人賢治も、童話作家の賢治も生れていない。盛岡中学から高農生活を通じて、もっぱら短歌の制作に凝縮させている。その作品は一〇九四首に及んでいる。小沢俊郎は「この高農時代こそ、賢治が生涯を通じて、最も解放感にみちた時代で、多くの純情な他の若者たちがそうであったようにさして変りのない青春時代を送った」というが、果たしてそうであろうか。

違うのだ、この時期こそ賢治は、詩と童話の賢治として、めくるめくようなコスモスを展開してみせる酵母を秘かに熟成させていたのだ。このナゾ解きをしてみせたのが吉見正信の『宮沢賢治の道程』（八重垣書房刊、昭和五十七年）である。そうでなければ大正十年の上京中の短い期間に、重いトランク一杯の童話や詩篇を書いて、花巻に帰ってくる訳がないのである。（一ヵ月に三〇〇〇枚の原稿を書いたという伝説が今も生きている。）

賢治は父より高農入学が許された大正三年九月、島地大等編『漢和対照、妙法蓮華経』を手にし、身をふるわせて感動した。明けて大正四年二月、盛岡に出て高農受験の準備をしている時入手した、片山正夫著『化学原論』、この二冊の本が賢治の生涯を決定し、片時も座右から離さなかったことは広く世に知られているところである。

吉見は、この二冊の本から賢治文学のキーワードをひっぱり出して見せるのである。

歌　稿

今日よりぞ
分析はじまる
瓦斯の火の
しづかに青くこころまぎれぬ

日下りの
化学の室の十二人
イレキを
帯びし白金の雲

鉄の澱
紅くよどみて
水もひかり
五時ちかければやめて帰らん

右に例示の二首目、「日下りの化学の室の」は、賢治のクラス十二人の化学実験の様子を歌ったものだ。「白金の雲」とは、容器中に白金がコロイド溶液化して、煙の如く散乱する興趣を歌ったものだという。この一首を手がかりにして吉見は、賢治が『化学原論』からコロイド自然観をひき出していることを感知する。ここで吉見は日本化学学会編の「コロイドとその応用」を引用して決定的なものを示す。少し長いが重要なので要点をしるす。

「コロイドは我々の日常生活と極めて密接な関係にある。まず生物体は殆んどコロイド系からできている。例えば細胞液・血液・リンパ液などはゾルであり、細胞膜・筋肉せんいなどはゲルである。動物体に於ける蛋白質も植物体を構成するセルロースも分子コロイドである。従って我々の人体は勿論、他の動物体も樹木も草本もコロイドから成り立つ。亦自然物を材料又は原料とする日用品も、食物も衣服も住居もコロイド状

質である、土壌も鉱物も合金もコロイド構造を持つ。呼吸する大気も一つのコロイド系である。水道水も単なる〝H2O〟ではなく、無数のコロイド粒子を浮遊させている。こう考えると化学は物質の実在を研究しようとする実在物質の科学である。」

さてこうなると賢治の詩の中に頻りと出てくるゾル、ゲル、ゼリー、コロイド状沈殿、キセロゼルといった言葉のコスモス的意味が見えてくるのである。私はこれに驚歎した。吉見は、賢治の自然観は、もはや紛れもない科学的自然観として成立し、まさに「コロイド自然観」とよぶにふさわしいものではないかというのである。同じ歌稿の中に、

本堂の
高座に島地大等の
ひとみに映る
黄なる薄明

大ぞらは
あはあはふかく波羅密の
夕づつたちもやがて出でなむ

ある星は
そらの微塵のただなかに
ものを思はずひためぐり行く

『漢和対照・妙法蓮華経』の編者島地大等には、親しく賢治がその法話の席に加わっており、訪ねに出かけてもいる。大等師は後に東大教授として東大に印度哲学の講座を開設した碩学である。

賢治は法華経の味読から「微塵」観を受けとり、実践的摂理として感得する。芸術概論中の、

まずもろともにかがやく宇宙の
微塵となりて
無方の空にちらばろう

はそれである。この宗教的意識における微塵観と、コロイド研究以来の科学的ミクロズムとが美事に妙合し、あたかも高分子化学複合体のように化し、分離分別不可能なものに化するのである。そうでなければ『春と修羅』の

種山ケ原　パート三

雲と風と水と虚空と光と核の塵
とでなりたつときに
風も地殻もまたわたくしも
それとひとしく組成され
じつにわたくしは水や風や

それらの核の一部分で
それをわたくしが感ずることは
水や光や風ぜんたいが
わたくしなのだ

は解けまいと、吉見はいうのである。吉見はさらに、「モナド」詩観、「光素」詩観に発展させていくが、ここでは省略する。

本題の賢治が何故に、あえて卒業研究のテーマに、土壌の「腐植」について選んだのかに戻るのであるが、「腐植質ハ……複雑ナル膠状（コロイド状）乃至ハソノ他ノ混合物」と定義したことに脈絡しているのではなかろうか、そう思いたい。

大正14年、教壇の賢治

校本全集十二巻に、真偽は定かでないとしながらも、同級生塩井義郎氏によれば、「賢治は始め『安山岩及びその風化物の物理的科学的研究に就て』というテーマの論文を準備していたという。賢治が論文二篇を書いて一つを級友に譲った（すなわち代理執筆）という話も伝えられている。」とある。校本全集十四巻の論文一覧によれば『安山岩及其風化産物ニ就テ』を提出しているのは当の塩井義郎氏である。とすると実は自分の卒業論文は、宮沢賢治君に書いて貰ったものだということを告白したことにな

盛岡高等農林学校生徒用実験室での宮沢賢治（左奥ガラス戸の前）

る。このことを附記して、賢治の土壌腐植をテーマに選択した状況に、もうひとつ深い意味づけが与えられたことになる。

昭和五十九年　『かいはつ』第四十一号

知事公館の椅子

教育行政広報誌『教育ほっかいどう』というのが私の手許に毎月送られてくる。こんなところで、むかし私のかかわりあった仕事とのきずなが、まだつながっているのだとの思いをすることがある。今年三月に出された二八九号の裏表紙に、フォトニュースとして道立旭川美術館の年間計画があって、昭和五十九年一月の企画として、「木の椅子は語る」―そのかたちと意味―、一月五日から二月十九日までが目にとまり、ちょっと興味をひかれた。正直いって美術館に、家具が、椅子がとりあげられたことの驚きである。椅子を芸術として理解して下さる人が北海道にもいて下さったという喜びでもあった。私は河井寛次郎＊の全仕事に、心の養いを強く受けているからである。説明には「道内作家八十人の作品と歴史的な椅子」とある。

それで早速、旭川美術館にハガキを書いた。知事公館に、会場地旭川にもっともゆかりのある加藤顕清の作品の椅子があるはずだがお気づきですかと、おせっかいにも書いたのである。しばらくして、返事がきたが、先方では非常に驚いて、早速道庁の管財課に調べて貰ったところ、そういうものはみあたらないということで、むなしい返事である。それからもう半年たった。加藤顕清といえば道内出身で芸大出の立派な彫刻家である。心のある人たちなら必死になって探して下さっているはずだと思うのだが、私の気持のなかでまだ落ちつかないものがある。

冗談じゃない。私が知事公館で、なんども、なんども、公館を訪ねるたびに腰をおろしては、あの素晴し

い楢材の、どっしりとした、豪宕（ごうとう）といってよい、存在感のある椅子を、いつも手ざわりで、その皮膚を通して伝わってくる作者の心を味わったものである。一〇〇年の材を使う時は一〇〇年の用、二〇〇年の材を使う時は二〇〇年の用、それが家具の心である。有用より真実を経て美へ、それが家具の心である。

知事公館での、この加藤顕清の作品との出会いは、私が道の教育委員時代のことである。まだ公館が道庁の正門前にあった頃である。私はこの作品（楢材使用の応接セット）に触れた時アッと思った。異様なぐらい存在感のあるものだったからである。それで当時の関係者に調べてもらったところ、佐上長官の依頼で、まだ若かった加藤顕清が、心をこめてつくったものであることがわかった。佐上長官は、内務省時代にイギリス、デンマークに出張して、イギリスやデンマークの家具の心を学んできていたのだ。

後に、知事公館が現在の三井別邸跡に移転してからも、玄関を入り二階に上がったところのロビーに、その作品はまちがいなくおかれていた。教育予算の折衝で知事公館に出かけた時は、かならずこの作品に身をおいて、手に触れて、いつも心を通わしていたものである。私にすれば八年間は親しんできたものである。だから当然こんどの旭川美術館の企画した「木の椅子は語る」には、気のついている人がいるなら、この作品が真先にとりあげられているはずというのが、私の思いこみであった。むしろ確認の意味でハガキを書いたのである。それが出展されない、出展できない、何とも無惨な思いがするのである。

さて、そこで毎月届く『道友』誌に気がついた。道友の会員の方ならその行方を知っておられる方もおられるはずである。すくなくとも、道出身者の芸術家のつくった作品として、知事公館の椅子は第一級のものである。「木の椅子は語る」展の会期は二月十九日まであるので、会期の途中出展でもよいから見つけ出して、顕清のふるさと旭川の地において、姿をあらわすことを心から祈るものである。

昭和五十九年　『道友』

女性は生産の根元

礼装した煙突掃除人出現

三年前、五十六年に「移動村づくり大学」の中心的存在である、常任理事の野口希彦さんらと一緒に東ドイツへ半月ほど旅行して参りました。西ドイツとの境に近い県の中心地のマグデブルグという町に泊まり、毎日北の方にある農学校に通い、午前中はそこで勉強をし、午後は外に出て畑とか、畜産とか、森林とかを実際に見せてもらいました。

約二週間いたのですが、その時たまたま農村をバスで走っていると、顔は煤で真っ黒なんですが、シルクハットをかぶり燕尾服を着た若者三人がサイドカーに乗って、身体にワイヤーの桶のタガのようなものを巻きつけて通ってゆきました。最初はわからなかったが、私はハッと気づき、曲がり角でバスをとめてもらい、彼らを呼びとめて、車を下りてもらいました。

実はこの人たちは「煙突掃除人」なんです。この国は社会主義の国ですが、その国でも煙突掃除の男がいるのだなぁーと感慨を新たにして、写真をとらしてもらったんですが、こういう光景に出合うのは、ちょっと珍しいのです。海外に永く留学していた人の本を読むと、西ドイツでもデンマークでもそうだそうですが、これらの国では煙突掃除の男と出会うと、「その日一日は縁起がいい。つまりゲンがよくって、特にその人

の身体にさわると長生きができる。いいことがいっぱいある人生を送れる。」といわれているそうです。何を意味するのかよくわかりませんが、留学した人の文章にも、その理由はとくに述べられていません。

そこで私は私なりにそういう関係の本を何冊か買って調べてみると、大体のことがわかったのです。ご承知のように、徳川時代に貝原益軒＊という学者がいます。『養生訓』という本を書いている人ですが、貝原先生は「夫婦の暮らしというものは羽織ハカマで致すべきもの」と、当時の書物に書いている。それを私がまだ年少のころ読んだ記憶に残っていたんですね。考えてみるとそれなんです。つまり男女の交わりというのはカマドの原理です。煙突掃除はカマドの掃除ですね。普通の服ではいけない。だからシルクハットに燕尾服を着用しなければ、カマドの掃除はできないのだと、まあこういうことです。

女性はカマドをおさえる

女性はカマドと一致しています。女性がカマドを押さえている。カマドを離したら「女性喪失」です。それは結局何を意味するかというと、”生産力“をいっている訳です。ものを産み出す力、これが大変なんですね。男性がいくら頑張ったって、逆立ちしたって出来っこない。

このことをまた、「むすび」ともいいます。「魂を産む」「産霊」ということで、大和言葉ではこれを「ムスビ」といっている。単に物のみを産んでいるんじゃない。カボチャだろうがトウモロコシであろうが、何であってもそこに魂がある。これは仏教の方では「狗子にも仏性あり」といい、犬でさえも魂をもち佛様だといっている。私はこちらの農協の三十年史の埋め草に宮沢賢治の言葉を入れましたが、彼の文学、彼の思想というのは、「木々にも生命がある、川を泳ぐ魚にも生命がある、すべて単に物とみず、万物みな生命が宿っているのだ、善も悪も全部、命がこもっているのだ」こういう考え方です。

皆さんはヨーロッパはキリスト教の国だと思っている。キリストの生れたのは二〇〇〇年前です。お釈迦さんはそれより五〇〇年早く生れています。孔子もソクラテスもキリストより早い。人類がこの世に現れて二〇〇万年たっているが、聖人と呼ばれる人はまだ四人しか現れていない。忘れていました。その他にマホメットがいます。マホメットはキリストより五七〇年も遅れて生れました。ヨーロッパの人がキリストを信じてから、実際は一五〇〇～一六〇〇年しか経っていない。キリストはユダヤの人でヨーロッパに生れ育った人ではない。それ以前のヨーロッパの人には固有の生活の考え方、信仰があった訳です。

それは、われわれ日本人の考え方と似ている。実に面白いと思います。地球上にはいろいろな人種がいるが、同じような成長の仕方、文化を育て上げてきたようです。ご承知のように昭和四十年ごろだったか、東京にパリのルーブル美術館からミロのビーナスという彫刻をもってきたことがある。上野の美術館は大変なにぎわいでした。私もフランスまで行くのは大変だから、せめて日本で見ようと思って飛行機に乗り往復して「ルーブルへいってきた」という気持ちになった訳ですが、あれはギリシャの島から見つかったんですね。

オッパイの大きな土偶も

ところがそのビーナスより五〇〇～一〇〇〇年ほどさかのぼった時代の府県や北海道の大地から、土偶が出ているんです。ものすごくオッパイの大きな、土で焼いた土偶があちこちの遺跡からいっぱい出土する。海峡を渡った青森県下からも、新潟の国体に使われた「火焔土器」というのが出土して、岡本太郎という有名な画家が、われわれの祖先にこんな素晴しい芸術があったのか、二〇〇〇年、三〇〇〇年前の縄文時代の芸術というのは大変なものだ、と感激していました。そしてミロのビーナスの原形、これはもっともっと小さいものですが、それらがたくさんギリシャから出土しました。それと北海道の土偶とどう違うのか、とい

青森県亀ヶ岡遺跡、縄文晩期の土偶

えば、それが同じなんです。ミロのビーナスは現在こそ人間らしい姿になっているが、昔はオッパイの大きい、いかにも生殖を象徴している姿です。だからビーナスといえば泰西の名画的に考えるが、今から三〇〇〇年前に住んでいた縄文人の気持ち、行動と、ヨーロッパ人のそれとは同じだということです。何も違っていないんです。

そのことから私は、女性は人類史の中でどういう役割を担っていたのか、いつの時代から、こういう存在になってきたのか、と考える訳です。それほど女性というのは大切です。だから日本の神話の中でもアマテラスオオミカミが最初の神様になっています。あれは女性で、しかも農業の神様ですね。ところが弟のスサノオノミコトの方は狩猟の神で、ヤリを投げて野獣をとったり皮を剥いだりして、アマテラスオオミカミが機織りをしている所に剥いだ皮を投げこんで、追放されたりしている訳ですね。これによっても、女性の文明というものが、人類文化の発展の歴史の中で大きな役割をもっていたことがわかります。

三〇〇〇年前に本道でも焼畑

ここには加賀団体の流れの方がおられると思います。十勝は福井、石川、富山の北陸各県、岐阜、広島、愛媛、岩手、宮城県と様々な土地の流れの方がおられますが、明治二十九年、十勝が初めて開放された、つまり政府がどうぞ入って下さいと門を開いた時、加賀の白山を中心に境を接している三県の人々が、はるばるやって来られた。この中札内は基線から東の方は大体大正八年に開放された所です。この辺の開拓は本来焼畑です。山に火をつけて焼き、五年間輪作をやる。根菜、禾本料、荳科の三つを、つまりアワ、ヒエ、大根、イモ類、大豆、小豆といったものを組み合わせて五年の間作る訳です。あと二十年間は荳科の木を植えて森林に戻す。そういう暮らしをしています。いまセレベスやボルネオで焼畑をやっています。日本の業者がいって山の木を切る。するとジャワの人たちがそのあと焼畑をやる。これに対しケシカランとあちこちから文句が出ているそうですが、とにかくこういう焼畑農業が何千年と続いてきた訳です。

私は三年ほど前、ドイツから帰ってすぐ沖縄に参りました。いきなり宮古島へいって、石垣、、西表島と渡り村おこし運動のお手伝いを致しました。毎日二、三十人の方と朝から晩まで座談会をやる。私も引っぱり出され、老若男女と膝を交え、村おこしについていろいろ体験などを語り、話し合いました。八重山あたりは明治三十三年まで税金はお金でなく粟で納めていました。これは焼畑だということです。日本の農業といえば、何か水田だけで、いわゆる弥生文化で二〇〇〇年やってきたように思いますが、考えてみると日本国中ついこの間まで焼畑でやっていた訳です。畑作というものが土台にあって、その上に水田というのが重なってやってきたということがわかった。これは大変なことです。もし焼畑が間違っているなら、日本の国は当然とっくに潰れていなければならない。ところがこの焼畑というものが、最も日本の気候、風土に適った農業であった。続けるに値する農業であったといっていいのだと思う。だから私は、畑作というものの本

当の原理、原則を日本人はちゃんと持っていたんだ、と考えているんです。

自然原理を表す「山の神」

四、五年前にＮＨＫで「食物読本」という番組を放送しました。私もヒョイとスイッチを入れると、奈良県十津川という土地をとり上げていました。ここは、参議院議員の丸谷金保さんや、元帯広市長の故吉村博さんの祖先の地です。初めの頃は、ここ中札内にも奈良団体が入っていたんですね。大正八年頃だと思います。ところで放送によると、驚きました、今でも奈良県では焼畑をやっている部落があるのです。そして畑に害虫が生じた時のおまじない的な行事では、必ず山の神を祀（まつ）る。山の神というのは女性ですね。弥生時代（二〇〇〇年くらい前）になってから田圃、水田ができます。これを祀るのは田の神です。ところがよく調べてみると、田の神というのは山から来ている。それが春まつりです。山からお迎えをする。そして秋には田の神がまた山に戻ってゆく。それが秋祭りです。

ということになると、山の神とは何か。皆さんは「奥さん」を山の神と昔から呼ぶことをご存知でしょう。あれは決して悪い意味じゃありません。神は山に住んでいる、田をやっている人も、畑を作っている人も、山には神がいるという考え方です。焼畑について注意して静岡だとか、あちこち調べていますが、奈良県あたりでは、焼畑の人たちが何か困ったこと、都合の悪いことがあると、男の人たちが山の方に向かって、ズボンから男性の品物をとり出し「照覧」させる。つまり山の神が一番喜んでくれるということで、そういうことをする訳です。これは二〇〇〇年続いている。不思議ですね。そのように山の神が女性だというのは、自然原理が女性原理だということが、よくも悪くも、われわれ日本人の心の底に、根元としてあるからでしょう。

ところが、われわれが勉強して、世の中がだんだん利口になってきたつもりなんですが、一方でそういう大事な心の問題を落っことしてしまった。横文字を縦にして、日本語に直せばすべて正しいのだというように考えて、もっと根元的な大地の土の神様、ムスビ（産霊）の生産の力というものは婦人にあるということを忘れてしまった。逆にそういうものを恥ずかしいとかけがらわしいとか、不道徳とかいやしいと考える風潮にもって行き、それが文明だ、文化だと考える誤りをおかしている。もっと当り前の、カラカラしたことなんです。だから私は女性の生産の力というものを基本的原理として、もう一度村の中に復権させなくてはならぬと考えているのです。

母親・マリアの方が大きい

ヨーロッパへいってご覧なさい。村を歩いてみると必ずカトリックの堂が立っている。角々に小屋があってマリア様の像があります。ちょうど日本ではお地蔵様があるように。マリアはキリストを抱いていますが、抱かれているキリストは小さく、抱いている母のマリアは大きい。キリストはキリスト教という宗教の始祖だなんていうけれど、その人は抱かれた「小さい方」です。これは女性がその国を支える文明の原理、原則だということと結びつくと思います。皆さん方がしっかりしなければ、そして人類の歴史の中における女性の役割、位置をもう一度とり返して頂かなければと強く感じます。

平取の二風谷という所で、萱野茂＊さんというアイヌの方が民族博物館を作っておられる。この方は私などよりずっと若い方ですが、アイヌの方でアイヌ語ペラペラ、日本語もペラペラというのはこの人しかいません。この萱野さんが出した本の中に、アイヌの人も焼畑をやっていたことが述べてある。私はビックリした。帯広に百年記念館というのができ、そこに郷土資料室というのがあります。一度ぜひそこをご覧になっ

生母マリアとキリスト

て下さい。今から一〇〇〇年前に網走付近や十勝浦幌など、道内で五ヵ所も六ヵ所も焼畑をやった遺跡、アワやヒエなどを作っていた遺跡が収蔵されています。一〇〇〇年前の北海道などというと農業なんて全然なくて、未開の原野だったと考えていますが、ちゃんと焼畑があったのです。弘前あたりでは、一三〇〇年前に作られたお米がカメの底から出てきている。日本の農業の歴史は古くて、いたる所からそうした遺跡が出土するのです。北海道といえども、同じように古い歴史をもっています。

米国流「碁盤の目」開拓区画

アメリカの農業なんていうのは全く新しい。南北戦争が日本の明治維新のころで、今から百数十年前のこと。あの戦争は四年続いて六十万人が戦死しました。その時初めて土地法という法律ができました。日本が明治二十八年にやった殖民地区画とアメリカの殖民地区画とはたった二十五年しか違わない。殖民地区画の考え方ですが、アメリカは土地を碁盤の目にしてゆく。これは中札内と同じです。向こうは九百間角で、それを四つに分け二百七十間、六十五町歩概算分を一戸当たりとした。明治十九年、佐藤昌介という北大初代

の総長をやった人がアメリカから帰ってきて道庁に進言した。これからの北海道の開拓も碁盤の目は結構だが、細目はアメリカに倣った方がいいという訳です。道庁はそれをとり上げました。十勝の場合、明治二十九年、大正村の札内川流域を九百間角でやっている。これを大画といいます。ただしこれをアメリカのように四分の一にせず、五五〇メートル、五町角でやり（中画制三十町歩）さらにそれを六分の一にしてその中の五ヘクタールずつを一戸分にした。初めから経営面積がアメリカの十何分の一という大差でした。

機械保有少ない米国農家

私は昨年七月機会を得てアメリカへ行って参りました。昭和四十五年に一度行っているんですが、今回は大分時間も経っており、農業専門に見て歩けるのだということ、向こうの農民組合が世話してくれるのだということから七月七日から二十二日間、ちょうど熱波襲来の真っ最中、イリノイとかアイオワ周辺といったアメリカ農業の中心地にいって農業のやり方を見てきた訳です。

アメリカは確かに家族経営です。しかし、今では大体一戸三〇〇町歩、多い人は六〇〇～一〇〇〇町歩の経営に変わってきています。もちろん小規模の経営もあるにはあります。この辺はほとんど、日本にどんどん押し込んできている大豆、トウモロコシ、コーリャン、小麦などの産地で、雨が少ないため、スプリンクラーで潤していました。五〇〇町歩も六〇〇町歩も耕作するのですから、農家へいったらさぞや農機具がズラリと、北海道のように並んでいるだろうと思ったところ、それが全く違うんです。ジョンディアーという会社で「こんなの使ってますよ」とデモンストレーションで、品物を一ヵ所に展示しているのを見ただけで、どこの農家へいっても機械は極めて少ない。せいぜい二台ぐらいです。アタッチメントもない。春エンドウの収穫機でも何でも、向こうは自操式で機械が専用機になっている。じゃ一体どうするのかというと、あち

こちに農業機械を専門に請け負う会社があるんです。飛行機ももっています。三台も四台も金網の向こうに並べてあります。

米作地帯へ行きますと、薬を撒くんでも何でもみな飛行機です。それが昔懐かしい、あの上出松太郎＊さんが音更で飛ばしたアポロ、ニューポール、サルムソンといった飛行機です。われわれが子供のころ、上出さんがタコ帽子をかぶり長ぐつはいて「おい、木呂子引っぱってろ」と後ろからロープを私に引っぱらせて、自分はプロペラ回す。エンジンがかかって上出さんが、「離せ」というまで引っぱっている。そしてソレ！という時、上出さんがパッと飛び乗って飛んでいく訳です。電線の下をくぐってみせたり、ずいぶん乱暴な、今だったら考えられない飛び方を上出さんはやってみせてくれました。上出さんには帯広空港で最初に飛行機が飛んだ昭和三十九年に来て頂き、お会いしたきりです。いま恵庭におられるはずで、もう八十何歳かでしょう。

ちょっと余談になりましたが、そんな飛行機でないと、宙返りとか軽業みたいなことをやるのは難しい。旅客機みたいなのは、急旋回したり、あんな芸当は出来ない。畑の中で急に引き返したりしなきゃならない。薬撒いたり仕事をするのですから行きっ放しという訳にはゆかない。それには先程申したような古い型の飛行機が良い訳です。それが請け負い会社の金網の中に並んでいる。そして個々の農家と契約して、何月何日の何時から、あのエンドウ畑の二百町歩に撒いてくれ、という具合にやる訳です。

マネージメントはご主人

アメリカの農家では家族は何をやっているかといえば、父親は経営者です。自分が機械を運転するなんていうのは、ごく限られた人達だけです。もっとも家畜を飼っている場合はちょっと違います。去年はアメリ

カの夏は猛烈に暑かったんですが、日曜日に訪問してみると、親父さんがホースで牛に水をかけている。われわれは外国の人が日曜日に働くなんて考えてもみなかったが、そこはやっぱり経営者ですね。日曜日も何もない。使用人は休みなんですが、暑さで牛が死んだら大変という訳です。その汚れた格好がいいので、そのままで写真をとらせてもらってきました。

あちらでは家族経営というのは、経営者としての農民ということで、奥さんは何をやっているかといえば、これがコンピューターに取り組んでいるんです。以前「農事組合だより」に写真を紹介しましたが、財布（カマド）は全部女房が握っている。経理が仕事です。ご主人がコンピューターとどう関わっているかというと、こっちはポンポンとキーをたたいて、シカゴの今日の小麦、大豆、トウキビの市況をパッパッと出している。一台のコンピューターで女房は会計をやり、ダンナは作物をいつどういうふうに売るべきか、つまりミシシッピー河畔の農協倉庫に送るべきか、あるいは鉄道でミシシッピー川の下流、メキシコ湾のニューオリンズへもっていって売るべきか、運賃によって懐具合に影響しますので、鉄道が安ければ鉄道、トラックが安ければトラック、川船を使う場合もどうするかという具合にマネージメント、経営の全般を判断する。それがダンナの仕事です。

畑の作業にしても、その全般が頭に入っているのは主人です。そうした姿を見せてもらって、実のところ驚きました。アメリカでは、われわれの考えている経営ではなくなってきているんですね。

五年分の作業日誌つづる

今から五十年前の大正十三年ごろ、グラボーというドイツの農民が帯広に入った。それから十勝清水に同じくドイツのコッホという人が入って、当時の北海道製糖と明治製糖がそれぞれ五年契約で雇用しました。

つまり実際に大正十三年から昭和三年まで、ビートの作り方をやってもらった訳です。このコッホという人は大変立派な人で、その二番目の娘さんが音更のよつば協同乳業の向かい、士幌線の線路の西側にある三沢＊農場へ嫁にゆきました。私の伯母が知り合いだった関係で、ドイツ流の農事の勉強をさせてもらおうと、三沢農場へ手伝いに行かせてもらいました。とても厳しいんですね。時間から時間まではビシッと働く。そして正午になると、ピタッと畑のど真ん中でも仕事をやめる。われわれだったら、もう少しだからやっちまおうなんてあんばいだが、向こう様はそうでない。これがドイツ流です。

玄関も牛小屋です。牛の尻を見ながら居間へ入って行くようになっている。特に感心したのは作業日誌が五年分、革表紙の立派な帳簿につづられている、自分で作ってきちんと整理し、「製本」されている訳です。去年の何月何日の畑はどういう状況で、どういう仕事をやって、どんな問題があったかというように、毎晩あすの仕事を考えてゆく時、それをめくればすぐわかる訳です。昨年は、一昨年はと全てがわかるこの帳簿、作業日誌が、経営の考え方を象徴しています。これはやはり「日本人離れ」しているな、と感心しましたね。外国の人の考え方、生活、農業のやり方を、まだ二十歳前の時代に知ることができたのは大へんいいことだったと思っています。

女房は畑に出せぬと怒る

もう一つ外人の話です。札幌近郊の琴似に昔農業試験場があって、その裏に十五町歩ほどの研修農場がありまして、ちょうどグラボーさんが来た頃、一緒にエミール・フェンガー＊というデンマークのお百姓さんが道庁の嘱託で招かれ、その農場で酪農経営をやってました。昔北海タイムス（今の道新の前身）という新聞があって、その記者がフェンガーさんの所へ写真をとりに行きました。日本人の心情として、ご主人だけ

でなく奥さんも一緒に農作業をしているところを写真にしたかったんでしょう。その記者は「ぜひ奥さんを連れてきて牧場に立たせて下さい」というと、フェンガー氏は怒ったんですね。「デンマークでは女性は野良に出るということは無いんだ」ということです。この中にはデンマークへ勉強にいらっしゃった方もあるかと思いますが、彼は「妻が畑に出ている写真などが出たら、デンマークの人間は女性に農作業させていると思われ、そんなことになったら、それは私の恥ではなく、デンマークの恥になるのだ。どうしても撮って載せるというなら、貴様、さっさと帰れ」と、大変な怒りようでした。私は強い衝撃を受けました。「郷に入れば郷に従え」というが彼は従わなかった訳です。

私は大分以前デンマークも見ていますが、確かに婦人は畑仕事なんかしていません。もっともフランスあたりのブドウ栽培は別ですがね。一般の畑作業ではそういうことはありません。昨年八月アメリカから帰って、バスで帯広空港から市街へ向かう途中、畑を見ると懐かしい格好で女の人が働いている。男の姿は見えない。一方では全く見られない光景が、なぜ十勝では見られるのかと思いましたね。しかも実際に畑で動いている機械はジョンディアーとか、カナダのファーガソンとかフォードとか、皆あちらのものです。それをわれわれは買ってきて使っている訳ですが、畑の状況は昔のままなんです。確かにイモでも麦でも一俵当たり何十分の一かに労働時間は短縮されています。しかし畑の面積も機械の動いている面積も昔のままで、ひどい所は馬のために作った枕ウネを残している。アチラの機械をアチラのように使えば安くなるんですが、従来馬一頭か二頭で済んだものを、馬の代わりに同じ面積のところへ五十馬力とか百馬力の、つまり馬五十頭か百頭分の機械をブチ込んでいる訳です。やあ、楽になった。ヒマになった、そして気づいたら借金残ったということをやってるのですからソロバン合う訳はないんですよ。

機械に合う畑を作らねば

もしアメリカの機械を買って使うなら、やはりアメリカのように、少なくとも一つのウネが五〇〇～一〇〇〇メートルくらいの畑にしなかったら勘定が合いません。もっとも今すぐ中札内で、そうしろといっても出来ることではないが、アメリカでは機械と合うように畑を作っています。能率が大いに違います。確かにアチラの能率のいい自操式の機械が入ってきたんだから、手間はかからなくなった。楽になるのは当たり前です。それでいてカアチャンがくっついている。隣のカアチャンが畑に出ているから、私も出なきゃ具合が悪いといって出ている。これは五十年、一〇〇年、一〇〇〇年前の考え方です。その機械は、本来カアチャンを畑に出さないための機械なのです。ご主人がダメというのにカアチャンが出ていくから、惰性で、そんならやれ、どうせやるのなら晩まで稼げというようなことになってしまう。

それだから農業機械屋は楽をコイている。工夫しないんです。中途半端な機械作って二、三年したら、「またこんな機械がありますよ」と売り込みに来る。それをみんながガバガバと買う訳。目移りするからね。ちょうど電気洗濯機買うようなもんです。はじめから「カアチャンを使うような機械ならいらないよ」と機械屋に農民がはっきりいえばいい。アメリカはそうなっています。

肥料でも農薬でも農機具でも農民組合があって、いろいろ業者に注文つける。４Ｈクラブでも学校農業クラブでも、ステートフェア、カントリーフェアー、つまり農業祭のようなものも、みんなこの農民組合がやるんです。そして農民組合が協同で農協を作っているんです。各種メーカーに農民組合が文句をいったり、こういうものを作れというようにいう。肥料でも農薬でも農機具メーカーでもたくさんある訳で、それらが競争していい物を作らなければならなくなる。競争があるんです。ところが日本では競争させていません。具合の悪いもの、中途半端なものでも、ホイホイと財布を開いて買う。残ったのは借金だけで、一体どうし

てくれるというのはわれわれの方。アチラの農民は、オレが使うんだからお客様は神様だ、農民は神様だご主人さまなんだという意識で、どんどん文句や注文をいう。こちらはご主人が文句もいわず作った方に振り回されて毎年見せられる機械を、ああいいなと買って、来年になるとああこれは去年のよりいいな、とまた買ったりしている。これじゃ何万年たっても解決しません。

農協婦人部の役目は何か

私は「カアチャンを使わぬ農業環境や農業条件をつくれ」と叫ぶのが農協婦人部の仕事だと思います。トウチャンの方にチョロチョロ同情してなまじっか手伝うから、オヤジもいい気分になって農機具屋に文句をいわない。これではさかさまです。二宮尊徳の本に「不都合は理屈に敵わず、非は理に勝つ能わず、理は法に敵わず（法は皆で決めるものだから）、法は権力に敵わず、権力は天に敵わず」と記されている。しからば天とは何か。これがお百姓だというんです。福沢諭吉がいってます。「天は人の上に人を作らず人の下に人を作らず」と。民主主義とは皆さんがご主人だということです。一人一人が人格をもって、ご主人として正しいことが正しく通るような世の中を組み立ててゆく。もう一人一人の時代ではなく組織の時代に変わってきています。そういうふうに世の中が動いている訳です。そういう中で、われわれは農業経営を考える、農村のくらしを考える時代になってきているのです。

新聞を見ますと、北海道にもメガロポリスとかテクノポリスとか、いろいろ舌をかみそうな難しい都市づくり用語が出てきている。十勝も、特に農業の中心地として情報産業というのが起きてくるなど、いわれていますが、そういうものをただ、われわれが受け身になって外側から支配されるんじゃなく、私たちが主人公になって組織、システムを使ってゆく。そういうやり方の「主人」に変わってゆかねばならぬ。そこで、

女性はそういうことに弱いから、不勉強でいいんだということにはならないと思うのです。、逆に婦人が疎外されることのないように、母性が疎外されぬように、農村の明るい暮らしのご主人としてやっていける仕組みを考えなくてはなりません。それには皆さんが懸命に勉強しなくちゃならない。この中札内というところは過去三十年、六回の五ヵ年計画の繰り返しと積み上げで農業をやってきましたが、農業というのは今年、来年で済むものでない。私たちの子々孫々に伝えてゆかねばならない。われわれはこの中札内の大地を守ってゆく役割を担っている訳です。その主人公としての女性の位置づけを、はっきりつかまえていただきたい。

婦人が本当の食物を作る

日本の、世界の、人類史の中での女性のもっている位置づけは大変なものです。特に皆さんの日本の国民経済の中で背負っている産業は、「食べ物産業」なんです。食物は人間の生命の土台、根元です。昨年九州熊本の竹熊宜孝＊先生がこられ、話をされたのを皆さんお聞きになったと思いますが、先生の所では、近所の人も含め正月三ヵ日絶食をやる。大体正月料理というのは、正月三日間火を使わず骨休みをするためのもの。オセチ料理とはそういう意味なんです。正月になって忙しく台所でガタガタするのなら、これは漫画です。ドンと構えて動かずに家族が新しい年を祝うための喜びの三ヵ日です。ところが竹熊先生はそれを利用して絶食をやる。人間とは食べなければどういう気持ちになるものなのか。普段は当たり前に食って、便を垂れて当たり前に眠ってるものだから、当たり前の食物がどんなに貴重なものであるかを忘れがちです。生きることの尊さ、食べ物を通しておいしいことの有難さ、本当の食物を理解しようということを、竹熊先生のところではやっている訳です。

その本当の食物を作る農業の基本は何か。これは女性の仕事です。自分の作ったものを、どうやったらお

いしく食べられるか、これが生活の中心です。それを豊かにしてゆく。ところがわれわれは、忙しさにまぎれ、インスタントとか、袋ものを使ってしまう。これではほんとうに食物を作る農民の、喜びの過程というものはありません。食物を作る産業の中心にある女性は、自分たちが生産した食物をどうやったらおいしく、豊かに食べられるかといった工夫を真剣にやって欲しい。自分らが食べておいしくない物を、「うまいから食いなさい、買って下さい」、これは通りません。「これはうまいですよ」と、新鮮な絞りたての牛乳を出したら、その言葉だけでおいしくなるでしょう。おいしいという信念に基づかない物を人にすすめて、売れないと嘆くのはおかしな話です。それから自分たちの作ったものを、自分たちがおいしく食べる機会、舞台を持たないでその産業を伸ばそうといったって、それはダメです。そういう意味での農村の女性の舞台というのは大変なものだと思います。

外国から原料を輸入し、それをゴチャゴチャいじくって袋に詰め、その袋の広告なり絵なりにゴマ化されて、われわれはどんどん農業の分野を狭めている。これはおかしいのです。竹熊先生がいつも鞄の中に入れて持ち歩いているお菓子、八年前と少しも変わらない、色もあせずカビもはえない、腐りもしない。一体そんな食べ物ってあるんですか。腐るから、カビがはえるから生きた食物なのです。インチキ食物に振り回されてはいけません。腐るような食物、新鮮でおいしく食べれる本物だからそこそ、「札幌の皆さん、帯広の皆さん、どうぞ食べて下さい」といえる。札幌の五番館デパートへいっても中札内の卵のケースがズラリと並んでいます。五番館なんか、中札内の卵ケースの間を通らないと地下鉄から五番館の中へ入れないようになっている。

村づくりも女性の双肩に

皆さんは食物を作る産業の担い手で、その食物を一番知っているのは皆さん方です。中札内へ行けば新鮮でおいしいものがふんだんに食べられるんだといわれたい。売ることも考えるが、それ以上に「中札内へいらっしゃい、他で食べられない、沢山のおいしい物がありますよ」という村づくりを考えるべきだと思います。来てくれれば、ついでに、あれもこれもと買って下さる。池田町のいい意味の町づくりの成功はそれだと思います。ただワイン作って売ってるんじゃない。六十万人がやってくるというのは大変なことです。ここは隣に空港があります。たった十分の距離です。最近東京からの飛行機は減便してますが、本当にうまいもの、中札内でしか食えない素晴しい物があるとなれば、航空会社は何便も飛行機飛ばすでしょう。そういう地の利があります。

われわれは、その地の利を大事にして、学者なり芸術家なり、いろいろな人が中札内を訪ねたくなり、住みたくなるような条件を作ろうじゃないですか。そういう条件を作るのが、皆さん方、ご婦人の双肩にかかっているのだということを、よくお考えいただきたいと思う訳でございます。

昭和五十九年　農事組合だより　北海道農業自立推進協議会

柳田国男・北海道の旅を追って（上）

―願わくば、これを語りて　平地人を戦慄せしめよ―　（遠野物語）

新帯広空港がある札内川の右岸地域（東部）は、むかし幸震村（こうしんむら）と呼ばれておりました。後に大正村と改称されましたが、昭和に入って国鉄広尾線が敷設された際、駅名だけは幸震（現在は大正）とつけられました。幸震の幸は「幸多かれ」の「さち」です。震は地震の和訓「ない」であります。結局、幸震というのは、札内（さつない）と普通表記されているものを、幸福に震えるという、雅名を考えたものでしょうか、ずいぶん苦心の表記であります。ちなみに縁起乗車券で有名になり、今も人気のある「愛の国から幸福へ」で評判になった幸福駅というのは、幸震村の幸と、この附近に入植した福井団体の福をとって、幸福と名づけた集落名に由来したものであります。

この何とも読解に苦しむ地名表記を考え出したのが、かつて十勝に在住した白野夏雲＊であることは、早くから聞いておりました。こんど「白野夏雲」の伝記が、北海道放送に勤める白野仁氏（曽孫）の手でまとめられ、刊行されました。夏雲は甲州郡内の出身、幕末の開明官僚岩瀬忠震に認められて幕臣になった人で、明治維新後、静岡藩十勝開業方として、明治三年十勝分領（十勝・中川・河東・上川の四郡）の拠点大津に来住し、精力的に現地調査にあたり、報告書「十勝州略志説」をまとめました。ところが明治四年八月、廃

藩置県のため事業が中断となり、北海道にそのまま留まり、明治五年北海道開拓使に転じています。最晩年は札幌神社宮司として終った方であります。旭川の近文山国見の碑は、当時の岩村長官の命で、夏雲の手によって建てられたものであります。

この夏雲の伝記に高倉新一郎＊先生が序文を寄せられておりますが、私にとってまことに刺戟的な内容のものでありました。

「たしか昭和七年夏（柳田年譜によれば昭和八年が正しい）、私が、新撰北海道史の編集の手伝いを始めて間もなくの日曜日であったと思う。牧野（信之助）編集長からの電話で、柳田国男先生が山形屋（旅館）に来ておられるから、直ぐ来るようにとのこと。とるものもとりあえず駆けつけると、部屋はすでに先生を囲んで数人の人がいた。

話は、当時柳田国男先生のお世話で刊行された『十島図譜』を中心にはずんでいた。『十島図譜』とは、明治初期（十七年）白野夏雲という人が、鹿児島県沖の屋久島と奄美大島との間に点在する（薩南）十島を訪れて、その状況を詳しくしるしたもので、当時注目を集めていた民俗学の貴重な資料とされていたものである。

アイヌ研究から民俗学に興味を持ち始めていた私は、もちろんこれを知っていた。否それよりも、アイヌ文献をあさっているうちに、白野夏雲という人が明治時代のアイヌ研究の先達者であることを知り、さらに札幌神社宮司として、北海道文化の発展に功労のあった人であることを知っていた。この人が南方（薩南諸島）においても、北海道に劣らぬ仕事をしておられるのを知った。この著書（十島図譜）に大きくひかれていたのである。

しかしその場に、夏雲の孫にあたる北海道拓殖銀行員白野甲峰松氏が来ておられ、夏雲が山梨県都留郡笹子村白野の出身で、今泉耕作と呼んでいたのを、幕末の英才岩瀬肥後守（忠震）に見出されて世に出た人で

あることを教えて頂き、さらに牧野編集長が北海道庁の書庫から見出したという、夏雲が鹿児島県令の命により、近海の魚類を収集写生した『麑海魚譜（げいかいぎょふ）』と称する、極彩色の画帖を見ることができたのである。大きな感激であった。」とあります。

柳田国男は、早くから白野夏雲に注目し、その足跡を追っていたようであります。柳田は昭和九年に南島談話会（大正十一年にはじまる）の雑誌『嶋』（柳田と伊波普猷＊、比嘉春潮＊が中心）に、「島の三大旅行家」という記事を書いています。柳田の昭和八年の北海道の旅の翌年にあたることに私は注目します。

「白野夏雲、田代安定＊（鹿児島県人）、笹森儀助＊（青森県人）、この三翁は、島の生活を記録しておこうと思う我々にとって、もっとも忘れがたい近代の俊傑であった……。

田代翁はたしか鹿児島県の生れである。その壮齢の日が、白野夏雲翁の任に、同県の勧業課長にあった際だから、両者はおそらく若干の交渉を有していたことであろう。もし相知っているとすれば、年長の白野翁がより多くの感化を与えたことも想像しえられる。

白野氏の学風は、既にその頃の学術雑誌（地学雑誌等）に掲げられているが、これを海南の列島に試みんとしたのは、その五年にわたる在任期間のことであった。当時、翁は齢六旬（よわい六十歳）に近く、職務はまた異常に繁劇であった。新たなる施設は相ついで企てられ、その上さらに内国博覧会を利用して、大いに地方の文物を紹介する必要もあったのである。のこされた若干の著述だけを見ても、翁は珍しくよく働いておられる。有名な麑海魚譜は自画であった……。それほどにも辛苦経営の事業であったのである。

十島巡察の旅行は、この忙しい生活の僅かな時間をさいて、思いたたれたものであるが、これにも翁は、なお全幅の精神を傾注し、舟中筆を走らせたかと思わるる一巻の図譜は、淋漓として当年の気魄をとどめている。この強烈な意志と精力とは、これを環視していた同時代の好学青年に、何らかの刺戟を与えずしてやむべきものではなかったかと思う……。

殊に先生（夏雲）の学問には師傅（しふ）がなく、単に時代の変化に先づ目ざめて、羈旅の間にあって感発し味得したものを、積んで大きくしていったばかりとすれば、その刻々の企画と念願とは、おそらくは日記にもこれを言いあらわすことはむずかしかっただろう……。白野夏雲という人はどんな人であったか。西洋の文化の新しい色と香とが、ほとんど一世を陶酔せしめようとした時代に、前には北国の曠野（十勝原野）にあって、夷人を友とし、さらに身をひるがえして南島の離れ小島の、ひとつひとつを訪い寄った彼の志は何れに存したか。これに答え得るものといえば、今はただこの数巻（の著書、報告）あるのみである。

遭遇ばかりに運であり、はた偶然であるとしても、人間の力のこれに関与し得るものであることを、おかげで私たちも経験することかできたのである。」

さらに、柳田の次の結語は実に感動的であります。

「十島はひさしいあいだ、ただ地図の上の一奇現象であった。たんにその島影を望んで馳せすぐるものは、年に何千という船の数であったが、親しく足をその土に踏みたてたものはまことに少なく、島人がこの壺中の天地に於て、いかに生死し、盛衰しつつあるかを省るものは、いよいよ稀であった。

われわれの知るかぎりに於ては、この白野夏雲翁の外に……」という、柳田の夏雲の人柄と仕事ぶりに対する限りない共感は、また柳田自身がよってたつ常民生活向上のための同情の学風からも、わが意を得たりと深く感銘したものと思います。

また、柳田は続けて語る。「白野夏雲の生涯については……自分はなお四十年来のひとつの空想を棄てることが出来ない。この翁の出所進退にはたしかに若干の故意の韜晦（とうかい）があった。そうして珍らしいその氏名は、どうやらその全部が後年の制作にかかるらしいのである。幕末維新の人物中には一時の変名を以て世に出てしまったものが折々はある。白野という苗字はあってもよい苗字だけれども、江戸でも甲州でも、また他の地方でもついぞ耳にしたことのない家名であり、しかもあまりによく夏雲の号と調和し、か

つ両者を一貫して、あまりに適切にその持主の事業と経歴とを表現しているように思う。
自分は弱冠の頃に、しばしばこの人の文章を読んで、いつもこういう氏名を名乗る気になった筆者の心境を、たとえようもなく、ゆかしく懐（おも）ったことであった。」と語っているように、その思いいりの深さがわかろうというものであります。

柳田国男の作品に『日本河川論』というのがあります。そのなかでこう語られています。
「この古くさい拘束から解脱（げだつ）するには、川を見てあるくこともひとつの方便である。絵巻物の川なども、もとは必ずある場合の写生から生れたものだろうが、少なくも今では……あんなものは、もう一筋だって流れていない。よほど久しい前から変化していたのである。
前年、私は十勝の平原を跋渉していて二つ三つ古画のような川を見つけて、なるほど美しいと思ってみたことがある。ちょうど色々の花の咲く頃であった。水は自由に地表を走っているから、ちっとも深くはならずに面白い屈曲を作って、草でも小石でも、ほんの僅かなものが平らなる岸を画していた。」とあるのです。
私はこの作品の「前年、私は十勝の平原を跋渉していて」というくだりに触れて、柳田がこの十勝の平原を歩いている事実を知り、ホントウに驚いたのです。「前年」とは、この作品が書かれた近い年のことでしょう。しかも「跋渉」とはこの地を、相当こまめに歩いていたことを意味し、「二つ三つ古画のような川を見つけて」とあるのは、歩いた広さを感じさせます。また「ちょうど色々の草の花の咲く頃であった」とは、たしかに夏のさかりもすぎた草いきれのする頃のことでしょう。
とすると、柳田は何時、どのような手引で十勝を歩かれたのか。いかに柳田であっても、何の手がかりなしに歩かれたとは考えられない。誰かが案内したにちがいない。この足跡を追ってみたいという念いを深めたのです。そんな時、浅野晃が『日本河川論』について書いているのを見つけました。それによると牧野吉

晴ははじめ日本画家を志し、小茂田青樹の門に入ったが、画業の途中で師を失ない、画を断念して作家になった。そして『東陽』という美術雑誌を出した。それは豪華なものであったが結局何号かで潰れた。昭和十一年、柳田はこの雑誌のため牧野の求めに応じて書いたのが『日本河川論』であったというのです。この『日本河川論』が後に、『豆の葉と太陽』（昭和十六年）に収めるにあたって、いささかあたりのやわらかい「川」と改題しています。

柳田年譜（定本全集）によると、柳田の北海道旅行は「昭和八年七月二十二～三十日、富士・信州旅行」とあって、七月二十四日には、富士山頂から山頂座談会『靈山と神話』の放送を行っています。「八月七日～九月五日、北海道旅行、網走―釧路―帯広を経て、八月二十三日、旭川での座談会に出席。二十四日～三十日、旭川赤十字病院に入院。九月五日、青森県八戸の小井川潤次郎宅に寄り帰宅。」とあって、『日本河川論』中の「前年、私は十勝の平原を跋渉していて」は、この昭和八年の旅であったことは間違いないと思われます。季節も一致いたします。

さてこうなると、『白野夏雲』伝の高倉序文にある札幌山形屋旅館における、柳田と高倉先生との出会いは、年譜には記述がなく、何時であったのか。北海道の旅のはじめであったのか、あとなのか、この疑問が出てきます。白野夏雲のかかわりからいけば、札幌の山形屋会合で高倉先生に会い、十勝出身の高倉先生が案内役となって、道東の旅に出かけたのではないかと、私はその思いこみを強くして、昨年高倉先生にお目にかかりました。しかし、先生は、柳田を道東の旅に案内した記憶がないことがはっきりいたしました。

高倉先生は帯広の出身です。父上は帯広の高名な実業家高倉安次郎＊翁です。私の少年時代、私のまわりには、私と年齢のほど近い先生の従弟たちが沢山おり、先生は従弟たちにとって大きな存在として、よく話題になりました。私もまた姻戚関係になっています。

この昭和八年という年は、まだ私は十勝の田舎で小学校教師をしておりました。ところが縁というのは妙

なもので、昭和十一年の春に北海道庁学務課に勤めるようになり、驚いたことに、赤煉瓦の学務課の一角が新撰北海道史の編集室になっていたのです。したがって、この道史が昭和十二年に刊行完了までの二年間、私は編集長の牧野信之助＊、編集員の森義雄、同じく高倉先生、筆耕の大賀姉妹たちと、同室の仲間として毎日顔をあわせて暮す奇遇を得たのでありました。私が、『白野夏雲』伝の高倉序文を読んで、柳田と先生との出会いを知り、ちょっと興奮したのは、わが青春の日にこうした因縁があったからです。

柳田は、既に大正二年から雑誌『郷土研究』を、高木敏雄と共同編集で、さらに翌三年からは貴族院書記官長の激職にありながら、単独で編集にあたり、官舎を編集所として自らの資を投じての刊行を続け、大正六年にはついに休刊しますが、後年の柳田民俗学のレールを敷設する訳です。

牧野信之助は『郷土研究』誌の第一巻八号（大正二年十月）に、「出作（でつくり）の話」という、加賀白山の山麓、即ち石川県手取川及びその支流源流部の、山峡における焼畑の出作り農耕型態を、社会経済の立場から報告をのせております。（詳細は省略しますが、明治二十九年の十勝における植民地区劃画定による制度的入植開始にあたり、現在の帯広市に入植した、さきほど紹介した福井団体、加賀団体は、いずれも牧野の調査報告の関係地帯であります）したがって柳田とは早くから交渉のあったことが判ります。

高倉先生の話では、「牧野は柳田先生とは相当親しいようであった。農村経済史をやっていて、私の師匠の高岡熊雄＊と親友であった。牧野が北海道史の編集にあたるようになったのは、高岡先生の推挽があって と考えている。その際、札幌地元での適当な協力者ということで高岡先生に牧野が相談したところ、助手の高倉が適任であるということで、私が牧野の手伝いをするようになったのだ」という話です。

話のついでに、私は高倉先生に、こういう話を致しました。私が十勝の団体入植の出身地を調べてみて驚いたことは、明治期の入植者の出身が、焼畑農耕地帯が圧倒的に多いことです。さらにつっこんで調べてみると焼畑（なぎ畑）は、いずれの地帯も立派な五年輪作になっている。「むつがえし」といって、六年目以

降は二十年、三十年の休閑をして、その間に立派に森林植生を恢復させている。しかも面白いことに空中窒素を固定させる荳科の樹木、たとえば「はんのき」とか「せんだいはぎ」を植林して、地力維持の体系を確立させている。考えてみると、今日いわれているように縄文農耕の存在からみて、もし不合理な焼畑農法であったとすれば、二〇〇〇年も一〇〇〇年も続いてこれる訳がないではないかと考える。とくに、幕藩体制が米を経済の基礎においたこと、明治以降も水稲偏重農政であったこと、日本の農耕開始が、弥生文化の水稲作からはじまるとされてきた古い固定観念が、日本の農政なり、農学のユガミとなって今日に至っているのではないかとお話したのです。これに対し、高倉先生の答は次のようなものでした。

「明治以来、学問のお手本をすべてヨーロッパに求めてきた。それからはみ出したものは目もくれないできてしまった。北海道の農業発達史でも、もれているものは沢山あるはずだ。たしかに北海道の開拓民は山村民が多かった。水田農耕の出身者では、開拓時の畑作開墾は技術的にいっても出来ることではなかった。鋸の目立のしかたも知らない、斧鉞の使いかたも知らないから、伐木とか、板どりもできなかった。

明治以降のタテ割行政が、農村、山村、漁村のくらしや、土地利用をバラバラに扱ってきて、これを総合的にとらえたり、山村のくらしのたて方など、行政や学問の上で考えてもみなかったのではないか。地域というものを一体的に、一つのまとまった相関社会として考えていく時代に来ていると思う。封建時代のことを反省してみる必要がある。

（昭和八年の）柳田来訪が縁となって、戦前に小林己智次先生と私が世話人となって、『民間伝承の会』の北海道支部もでき、多少の会員活動もやりました。しかし、当時私たちは、なにしろマルクス主義の立場にたって、農業や開拓の歴史を見ようとしていた。はじめ柳田のやりかたは学問の冒どくくらいに考えていたのだ。たとえば、『野幌部落史』をまとめた関矢留作が、『部落史をまとめてから、柳田の学問に触れてわれわれの考えかたが狂ってくるのだが、高倉先生はどう考えるか』と訊かれたことがある。マルクス的な考

えかたでいけば、すべてを敵か味方で割りきって考えていく立場だから、柳田のやりかたはおかしいということになるのだが、ということである。

戦後の柳田の来道は昭和二十二年の六月のことだが、私の家（高倉宅）に泊られている。その後たしか昭和二十五か二十六年、成城の柳田宅にうかがったことがある。その時の話で、柳田が私に言うには、『学問としては系統のちがう方法だから、おれのやりかたに迷いこんだら大変なことになるぞ。今からではやらないほうがよい』といわれた。しかしそうはいわれても、今考えてみて、やはり柳田の影響はたしかに受けていると思っている。

私が十勝の生れなものだから、十勝の話が出た。柳田は、日本にとって十勝平野は非常に興味の引かれるところで大切なところだ。歴史をやるものは、十勝平野を是非見ておかねばならぬ。農業地帯としても、実に自然が生き生きしているところだと、こうまでいい切られたのです。といわれても、私にとっては生れ育ったところなものだから、まったくの日常生活の風景にすぎない。柳田にえらくほめられても、別に感動が湧いてこなかったことを覚えている。」

以上のような話を高倉先生にうかがうことができたのです。

高倉先生にお目にかかったちょうどこの日（昭和五十九年十月二十日）が、新潮社の日本文学アルバム『柳田国男』の発売日であることを新聞で知っており、帰り途に狸小路の旭屋書店に出かけました。やっぱり札幌です、書店に出ていました。この本を手にして喫茶店に入り一読しました。

まずパッと開いて驚くべき写真がのっているのです。七十頁に「アイヌ酋長伏根某父子と、昭和三年頃、朝日新聞屋上で」とあるのです。帯広伏古コタンの古老伏根弘三翁が左に、息子さんが右に、柳田が真中にはさまれたかたちの写真です。柳田は例によって和服姿で腕組みをしている。昭和三年といえは朝日の編輯

顧問で、論説委員の時代です。このことは年譜にはありません。

驚くのがあたり前です。伏根翁は帯広聖公会の長老です。私の祖父鉞弥はジョン・バチェラーから洗礼を受けています。私は少年時代に聖公会に通っていました。帯広聖会会の礼拝日には、伏根翁と顔をあわせている訳です。伏根翁は、明治期に早くも自費でアイヌ子弟のために私塾を開いた方であります。たしか上京して、東京啓明会でアイヌ教育について講演も行っています。純乎とした傑物であられました。

昭和四、五年ごろ、私は当時のパテーベビーというフランス製の九ミリ半の映画を自転車の荷台につけて、伏古会館まで出かけ、伏根翁の仕事の手伝いをやっています。無声映画ですから、私が弁士をやったのはよいのですが、うっかり焼酎のことをアイヌビールとしゃべったために、場内騒然となり立往生し、伏根翁に助けられたことがあります。生涯忘れられない思い出のひとつです。祖父の鉞弥は、伏根翁とは親しい間柄でしたので、鉞弥がアイヌの人達の味方として働いたという手柄を説明されて、孫の私がようやく助けられたのです。今でもその場面がありありと思い出されるのです。

もうひとつ、この文学アルバムには旭川での写真が二枚出ています。先程の年譜では「帯広を経て八月二十三日、旭川での座談会に出席。二十四日～三十日、旭川赤十字病院に入院」とありましたが、アルバムには「旭川赤十字病院長桑島要（国男の長兄、医師松岡鼎の三女つるの夫）宅前にて。二十四日から三十日までこの病院の内科に入院した」とあり、院長宅の門前で桑島夫妻とその子供たちと柳田が写っています。もう一枚は、「同院長桑島要」とあって、桑島宅の座敷で、卓を横に元気を恢復した柳田の姿が写っています。当時、旭川には医師夫人としての柳田の姪が住んでいた訳です。

先程、申しあげた高倉先生にお目にかかっての話し合いのなかで、帯広在住のアイヌ民俗研究者としての吉田巌先生（アイヌ系児童のための小学校、日新小学校長をながい間された方です）と高倉先生との交渉についてお訊ねしましたが、当時高倉先生は吉田先生との間に交渉がなく、柳田の来札があってから後に、吉

田先生との交渉がはじまったことを承知しました。

もう一人、池田の隣り駅に十弗という駅があります。ここには佐藤春夫の実弟で、春夫と同じく慶応で永井荷風に学んだ佐藤夏樹さん（現在は竹田姓）が郵便局長をしておられました。白野夏雲の足跡を追って十勝川の流域を歩くとすれば、夏樹さんのところは格好の足がかりとなるのです。

竹田夏樹さんに柳田の来勝についてお手紙をさしあげました。返ってきた返事は、そういう記憶はまったくないというお返事でありました。私のひとつの夢は破れました。残りは吉田巌先生です。先に牧野のことで触れた『郷土研究』誌であります。この第一巻第十一号（大正三年一月）に、吉田先生は『アイヌの動物説話（1）』をのせています。内容は「其一、鳥類説話」であります。同じく第十二号に、「鳥類説話」の続きをのせています。（この鳥類説話は、二回にわけて吉田が送稿したものではなく、もともと小冊子なので、編集者の柳田が都合により、二回にわけて掲載したとみるべきでしょう）したがって、吉田先生は『郷土研究』の発足初期に、すでに寄稿活動をされており、柳田とは、以前から出ていた『人類学雑誌』での交渉があり、『郷土研究』誌に参加されたものと私は考えています。

昭和六年には、日新小学校が廃校になっていますから、昭和八年といえば、帯広に腰を据えておられますので、先生としては自由に動ける状態にあった訳です。吉田先生のながい間のアイヌ民俗研究は、今日考えるような状況のもとではなく、大変苦汁の多い条件のなかで続けてこられたのであります。ひとつの例として、私の手許にある平取町二風谷小学校八十年史に、吉田先生の手稿が引用して紹介されています。それをしるします。

「……吉田先生が、虻田の実業学校から（明治四十四年）荷負の学校へ赴任の途中、平取に泊まり、歩いて二風谷を通った時の感想である。しかし、赴任後の実態は次のようなものであった。

『水の不自由なことはたとえようもない。冬期間は井戸も凍って風呂どころか、雪を煮て飲食せしこと一ヵ月。

時には日用品の品切れに閉口、約半月の間、米一粒も食べなかったこともある。副食は日々イリコ（煮干魚）ばかり、焼味噌に茶漬ばかり、これが最上のごちそうとは、自分ながらあきらめのよいのに感泣の外はない。

虎穴に入らずんば虎児を得ず。余の研究と知識欲のため、不潔汚穢の土人に接してみすぼらしいその日を送る。さりながら素寒貧とは知ってくれる者はなく、金を借りに後から後からと来られる。逃げもならぬ。かくれもならぬ。一大苦痛、ここらが真の人生の味というものだろう。

相手はアイヌの人達、勝手が違う。児童の世話以外に、父兄の教育、実に言語に絶する。彼らの日々に持ちこむ民事、公私の文書、私信、さては私用の末まで、一から十まで一々弁じてやらぬとは時間を要する。日もこれ足らず、優にこの専務にて一（いつ）の生計を営み得ると信ずる。それを本職以外、名誉職同様かけもちは、通常一人の人間では到底耐えるところのものではない。それに安んずるを得てこそ、確かに哲人として自らも人も評することができる。

とはいえ、一意専心、調査研究に熱中しているところに、また一心に教鞭をふるっているところに、強制的に押しよせるには、毎度弱りはてた。時間の観念もなければ、道義心もない。××よりもっと下劣な品性を暴露して、度しがたいところ、〇〇万石。土人、和人雑混の土地柄、その交際上の様相は、弱肉強食、生存競争の実況を演じて、心ある余をして黙するを得せしめぬ。そこで余の言動は常に和人の忌禅するところとなり、災厄にかからざるを不思議に思う。剣呑、剣呑（けんのん、けんのん）『……」

戦後、民主化が進み、くらしの水準が向上した今日の環境とはまったく違う明治・大正時代のことです。

アイヌ系の人たちの教育のため苦労された方は、みな似たような苦悩を味わっています。アイヌ社会の仕組とシャモ社会の仕組は、深層では決して違っているものではなく共通している訳です。私は全く同じであるとさえ思っています。内村鑑三は見事にそのことを言いあてています。

ましてや士族の血の流れをもち、相馬藩の富田高慶＊や二宮尊親＊（尊徳の孫）の一族である吉田先生としては、ないといっては嘘になる、出自のほこりというものが心底にあります。また教育者としての衿持も崩せないとあれば、どろどろした社会の仕組にはなじめない身構えがあります。

土人、和人雑混ということは、校下の日常生活の上で二つの社会のからみあいの接点にあって、（特に和人はシャモづらをして、利害にさとく狡くたちまわるから始末が悪い）、俸給社会の人間として、そこに集中してくる訳です。御本人は、早くも人類学的識見をたくわえ、その方面の当代一流の人々との交渉をもち、外側からでなく、内側に入りこんで研究者として大成すべく、趣味人的甘さでは応待していない。はげしい決意をもち、またその才能をおもちであっただけに、苦悩の多いご生活であったと考えます。

吉田先生のアイヌ民俗研究資料、アイヌ語蒐集カード、日記類等については、そのほとんどが帯広市立図書館に寄託されています。非常に勤勉篤実の先生のことですから、私は吉田先生の日記を調べていけば、柳田との交渉の手がかりが得られるのでないかということに気がつき、図書館に出かけてみました。

ところが、問題の昭和八年前後の日記は、事情があってまだ遺族の手許に保管されていることが判りました。さてそれではどうすればご遺族と連絡がつくかと訊ねたところ、私の中学の同期、橘寿雄君にあたればよいとのことで、早速橘君に会い、私の真意のあるところを伝えて、連絡と協力をお願い致しました。ご遺族とは吉田先生の三女ヨシさんのことで、私の手許に届いたのは、吉田先生が柳田とまさしく帯広に出会った当日の日記の「写し」でありました。それと幾通かの柳田からの来信でありました。ただちにコピーにとり、即日拝借の柳田信書をお返し致しました。吉田先生は私の父と同じ明治十五年の生れ、図書館で拝見し

た原文日記の読み下しに苦労していただけに、写しであることがどんなにか有難いことでありました。まず、柳田来帯の日の吉田日記をしるします。※（　）内はすべて木呂子の補記、註記。

（昭和八年）八月二十二日

午前十時、突然差しまわしのタクシーで小片憲次（医師・十勝病院長）君が来訪。柳田国男氏が昨夕着帯。信陽館に滞在のところ、腹痛等の不快のため、遺憾ながら一切の視察をうちきり、予定を変更して帰京せられんとす。本日午后零時四十分の上り（列車）にて発車の予定にて、ちょっと来館を得たいから、平日のまま（ふだん着姿で）でよろしいから、このタクシーで来るようにとの御伝言だった。

自分は今朝から、友吉のペナウンペ、パナウンペのアイヌ語訳を、一句一句丹念にたどりて、四畳半にとじこもっていたところだった。早速、羽織ひとえ物に着換えて同行する。着館して（旅館に着いて）、二十年来の大人（たいじん、先生）に初対面。

（柳田の曰く）先年、預りのアイヌ童話の（原）稿は、やはりあの註があっては面白くないと思った。あの、あなたの弟さんが見えて、それに托して、その（原）稿をおかえししたが、弟さんの話には、原稿を柳田さんにしれてしまったから、もう発表はせんと、あなたが腹をたてたというように聞いたが、何か誤解があったのでしたろう。

あの例のアイヌの話をまとめて、ひとつ出版するようになさい。それから『北海道駅名解』をパンフレットでもよいから、ひとつこしらえて出版なさい。千や千五百部ぐらいは、自分は鉄道省のものにはかつて、ひきうけて（貰って）売ってあげる。地元では十分出版出来まいが、小物をひとつ書いて売ることも、生活上必要だから是非やってほしい。

もちろん大部の研究物は別だから、そういうものならばこちらで考えて、出版のほうはひきうけるつもり

である。目下の区長や方面委員の仕事は、思いきって強く拒絶してしまうがよい。何もそれをやらんからといって不都合ない（はずだ）。公職を（たち）切って、独自の自己の体験を集大成することに向って、極力没頭すること。市長なり、道庁なりに自分がそう話すなり、注意をするなり、いとやすいことだから、躰（からだ）でも工合が悪くなければ、（立ち）寄って話していってもよいのだが。

五十後の（五十歳過ぎてからの研究調査の）整理は、なかなか容易ではない。自分でも（あなたと同じようなことを）かつ願い、生活をやって（いるが）それでは足りない。（柳田は昭和四年、五十五歳で朝日新聞社論説委員を辞任している。爾後社友となる。）

この年になって（昭和八年は五十九歳）、今回の旅行でほとんど日本中、国と名のつくもの（北海道では十勝国以下十一州、但し千島国を含む）は、もれなく歩いた。その旅費だけは何とか考えても、鉄道だけは全国無賃なので（やってこれたので）あるからさいわいである。

先日、富士山の山頂からラジオ放送をやり、それが終って長野県の講習に、例の金田一（京助）、西講師等と一緒に臨んで、それから北海道とやってきたので、実は先日網走から、こちら根室で、一昨日も自動車であまり揺られたため、遂に下痢、腹痛という始末。昨日、当館に入るや即時医者をということで、宿でも驚いていた始末。こんなことがなけりゃ、広尾を抜けて、日高（様似）の等樹院によって帰ろうとし（てい）たのだが、まことに残念。ひとまづ旭川の姻戚によって休養の上、帰京することにしよう（と思っている）。

久保寺（逸彦、東京学芸大学教授、金田一京助の弟子）君も若いが、まじめによく（アイヌ文学について）相当集めておるようです。

国立公園だ、いや八景がどうのこうのと、商売のお先棒になって宣伝したり騒ぐのは面白くない。（ここのところは日本河川論の文中趣意と一致しているので、注目の要あり）

（吉田）以上のように、それからそれえとお話がつづく。前（出）の私の弟といわれたのは、実は甥の幹

（忠雄）のお考えちがいで、消息をきかれたから（既に）死亡したこと。ならびに兄が勿来（なこそ）の国民新聞社にいたこともお話し申しあげる。

余はキリスト信仰かとのお訊ねに、神道であると申すと、（柳田は）実はアイヌのため長い（あいだ）指導をされたのは、キリスト教の信仰から来ていたのではないかと（考えていた）との話である。

先生は、明治三十九年八月十日に十勝に来（られ）たそうである。このたびのこの方面は二回目で、まったく変りも変ったとのお話。余も丁度同年の八月八日に十勝入りしたことをお話に及ぶ。（柳田三十二歳、吉田二十五歳）

当時はまだ落合（旭川からのびてきた十勝線、狩勝峠の石狩側終点駅）と帯広（釧路線の終点）には汽車がなかったこと。（翌明治四十年九月二十一日に開通した）先生は荷車（馬車の誤記であるまいか）とかで帯広に来られたそうだ。自分も国境ごえでペケレベツ（十勝清水）で熊に出会った話を申し上げる（吉田註記、これは明治四十年八月のこと）

余は、古川辰五郎が話した、鶴が狼に首をくいきられた目撃談を紹介する。先日は隠岐の島にいってこられたとのお話（五月二日―六日）。かくて帯広駅頭には小片憲次君と水野薫氏（医師）と余（吉田）と三名で見送る。

（柳田曰く）「この次には家内家族をつれてもう一度やってくる。独りで（歩く旅で）こういうことがあるとはまったくこりごりだ」とのお話でお別れする。

以上が吉田先生が柳田と出会った当日の日記であります。その出会いが僅かに二時間。非常に短かい時間の中の対話が、二十数年という長い書信による交際をはさんでの初対面だということです。たまりにたまっていた言いそびれたことをすべてをはき出そうという両者の出会い、読んでいてはりつめた空気がこちらに

伝ってきます。驚くべきことです。さすが民俗採集者の記録であります。かたわらにいたであろう小片・水野両医師の息をひそめるようにして、両者の対話に耳を傾けている姿が目に浮んできます。お二人とも既に故人であります。

さらにこの日記の重要なことは、日本河川論中の「前年私は十勝の平原を跋渉していて」の、柳田の面影はまったく浮んでこないことであります。これはどうしたことでしょうか。むしろ明治三十九年まで話をもっていかねばならないのではないかの念いがつのるばかりであります。

柳田は八月二十二日の夕刻旭川駅に着き、いったん桑島医師宅に落着き、その後日赤病院に入院したことは先に見た通りです。しかし年譜によれば「二十三日、旭川での座談会に出席」とあって、非常に重要と思われるのです。どんな人達が集って、どんなことが話し合われたのか、帯広での吉田日記と直接整合しないものを感じます。予定の行動とすれば、広尾から日高様似の等樹院にも立ち寄っての話とつながらない訳です。これは、是非旭川の方たちに掘りおこして頂きたいことであります。帯広で伏根弘三翁との出会いがなく、旭川では近文コタンの方々との出会いがあったのかどうか、私の気になるところです。

吉田先生との話を続けます。九月二日づけの消印で、「洞爺湖畔にて」と柳田からの絵ハガキによる便りが届いています。

九月一日

先日は御目にかかりうれしく存候。あの夜旭川にて七日も入院いたし、一昨日漸く札幌に参り候。方面委員のこと学務部長にもよく内談いたし置き候につき、一日も早く代りを御見つけ下さるよう、渡部（守治）市長にお話に相成り、充分時間をお作りなさる可く候。高倉新一郎君も近く訪問せらるべく候。

このハガキにより、柳田は八月三十日（執筆より数えての一昨日）札幌に出かけ、学務部長（長官は佐上信一、学務部長は後藤耕造）に面談して、おそらく吉田先生の研究者としての評価を伝え、そのとりまとめに苦闘する先生の日常に、共感と同情を示し、自由時間を得られるよう、また行政側からの支援と協力を依頼されたものと考えます。

吉田年譜には「八月二十二日、帯広駅前信陽館にて柳田国男先生に謁見」「八月三十一日附、帯広市第二十八区長辞任」と、早くも区長辞任が実現し、九月一日には「北大図書館司書官高倉新一郎、医学士秋元波留夫氏両氏来宅」とあります。

柳田ハガキの通りに高倉先生が動き出し、吉田先生の長いあいだの蓄積を出版し、世に問うための支援活動がはじまった訳です。しかし問題は「白野夏雲」が話題の中心になった札幌山形屋旅館における柳田と高倉先生との出会いの日というのは、いったいいつであったのか。それはどうも柳田が吉田先生のために、北海道庁に学務部長に会ったという、八月三十日と考えてよいのでないかと思います。高倉先生にお目にかかったかぎりでは、先生はもうこの前後の事情をすっかりお忘れになっていたのです。このたびの貴重な柳田書信を拝読することがきて、事情がずいぶんとはっきりしてきたと思っています。

柳田が帰京してから、早くも九月十五日消印のハガキが届いています。差出は「東京市外砧村」、現在の世田谷区成城からで、ハガキに印刷された写真は、柳田が成城宅の庭で無心に草むしりをしている姿であります。

「御手紙ありがたく存候。高倉氏にもお逢いなされし由、札幌の様子御聞き及びと存じ候。『駅名由来考』既に不完全ながら刊行せられおり候故に、何か他の仕事を考え申すべし。小片君、番地を聞き忘れ申し候。貴下よりよろしく御伝声下され度候」とある。

柳田がこのハガキを書いた九月十四日（木曜日）という日は、柳田民俗学の上に意義深い日である。年譜

にあるように「この日より毎週木曜日午前、自宅で民間伝承論の講義をする。後藤興善＊、比嘉春潮、大藤時彦＊、杉浦健一＊、大間知篤三＊等が参会。以後十二回にわたって十二月十四日まで続く。自分では家の会ともいった。この集りが発展して昭和九年より木曜会となり、更に研究会となり、日本民俗学会の談話会となる。」その日である。柳田が若き学徒たちと協同して、巨大な柳田民俗学の独創的集大成というか、構築に向けて歩み出していった記念すべきその「木曜日」であったのであります。

いっぽう吉田年譜によれば、翌「昭和九年十一月二十六日、帯広市役所田上、川原田両君来宅。自分著作出版方をもたらす。二十七日市役所出頭、寺本課長に申出。三十日原稿一括持参、課長に披露す。十二月十五日北海出版社石田磊三氏より寺本課長へ右出版方快諾の回答あり。」

明けて昭和十年、「二月三日高倉新一郎君来宅」「六月十日『心の碑（いしぶみ）』校正。」「七月二十日『心の碑』初荷着」とあって、ついに吉田先生の半生記録であり処女出版ともいうべき『心の碑』が世に出たのであります。柳田の昭和八年来帯のことがきっかけとなって、その後の曲折はありましたが、内容的には半生を語る記録の出版となったものと、私は考えているものであります。

『心の碑』が、柳田の手許に著者献呈が行われた直後の返事と思われるハガキで、消印が昭和十年八月六日の、吉田先生あて書信があります。

「先日の御手紙拝誦。御著書も本日落手。早速拝見致しおり御芳意深謝仕り候。御心境いうにもゆかしく、其の多難の半生、感慨止みがたく候。御滞京中に拝眉致しかね残念に候。八月五日」

いかにも夏姿らしい白絣を着用した柳田が、成城宅の花百合の群にかこまれた写真が、ハガキの下半部に印刷されています。

七月三十一日、柳田の六十一歳（満六十歳）の還暦の日であった。早くから友人たち門弟たちから声があがって、還暦を記念して全国の民俗学徒の研究会が、神宮外苑の日本青年館を会場として、この七月三十一

日から八月六日まで、一週間の日程で開かれていたのであります。もちろん全体の統括は柳田の手で行われていました。集うもの各府県から七十二人、東京在住者八十人が参加するという盛況でありました。

初日は日本青年館の熊谷辰次郎が開講の辞を述べ、折口信夫＊、桜田勝徳＊の講演、夜は柳田の生誕祝賀会で、石黒忠篤（明治四十三年、新渡戸稲造の主唱する地方学＝じかたがく＝の確立を目ざして、新渡戸宅で始まった郷土研究会以来、柳田にとって最もよき友人、同志であった。近衛内閣の農林大臣）、比嘉春潮、伊波普猷、金田一京助が、参会者を代表して祝辞を述べました。この時の全記録は『日本民俗学研究』として翌年出版されています。後に私の東京時代、職場を共にした大西伍一（『日本老農伝』著者）も、青年館職員としてこの研究会を成功に導くために裏方として活躍いたしました。

柳田の書信の中に「拝眉の機会を失なった」という事情は、柳田を中心にこの大きな行事がとり進められていたためと私は判断するのであります。

ありていにいって、『日本河川論』に触発されて始まった私の柳田の足跡を追求する作業は、これからも続きますが、今回はこれで終りたいと思います。

昭和六十年　地域研究所年報第七号　旭川大学地域研究所

柳田国男・北海道の旅を追って（中）

まず前回、記述に間違いがあったことから訂正いたします。吉田巌先生のところに柳田国男の使いだといってタクシーで乗りつけたのは小片憲次氏でありました。この小片氏をてっきり医師の小片氏と思いちがいして、十勝病院長と記しましたが、これは誤りでした。十勝病院長の小片氏は丹蔵氏でした。お二人はご兄弟で丹蔵氏が兄上です。憲次氏は現在帯広市役所に勤めている英義君の父上でした。私の中学時代の同期生浅原英君の指摘で気がつきました。（浅原英君と小片丹蔵氏は共に聖公会の信者）浅原君にあらためて感謝申上げます。いちど活字となってしまうと、活字が独り歩きすることが一番こわいことで、これからも皆様の率直な御教示をお願い致してやみません。

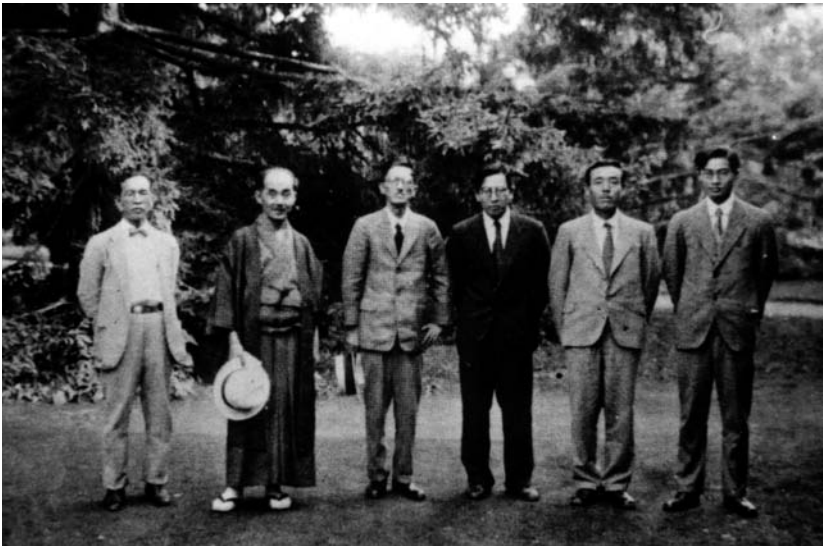
小片兄弟は宮城県白石の伊達家の重臣片倉小十郎家の家中の末裔で、明治期に士族の団体として胆振鷲別に移住した方であります。憲次氏は明治二十二年の生れで昭和四十七年に死去されています。昭和八年という年には四十五才という働きざかりの年にあたります。憲次氏は大正のはじめに上京、苦学力行をされて高等文官試験の突破を目指し、既に予備試験に合格していました。また偶然にも柳田が貴族院書記官長時代には官房の庶務課文書係勤務として勤めており、柳田の身辺で東京時代をすごしていたことになります。たまたま大正十二年の関東大震災に遭遇し、止むなく帯広に戻ることになり、河西支庁、帯広町役場に勤め、丁度柳田来帯の時は、柳田の宿舎となった信陽館から一〇〇メートルも離れていない当時の裁判所の向側で司

法書士をされていた時代であります。これで柳田の来帯と吉田巌先生とを結びつけたもう一本の糸、小片憲次氏の位置づけが明らかになったことは、私にとってまことに有難いことでありました。

もうひとつ、吉田巌日記の中で、「先日富士山の頂上からラジオ放送をやり云々」のところで西講師とありますのは、吉田先生が新村出＊を聞き違ったもので、柳田年譜によると八年七月二十八日長野県松本市郊外の浅間温泉富貴の湯で、金田一京助も加わっての国語学講習会があり、それに出席されたことが正しいようであります。

吉田巌日記は、帯広図書館から社会教育叢書として、ずいぶん息の長い仕事として逐次刊行されています。最初の監修者小林正雄氏の後を引きつぎ監修に当っておられるのが井上寿氏であります。それで井上氏に私の『柳田国男北海道の旅を追って』の抜刷をお届けいたしました。早速届いたという電話でのご挨拶がありましたが、「筑摩版定本全集をお前は揃えてもっているか」とのお訊ねなのです。勿論揃えておりますがと答えると、更に「柳田国男写真集を見たことあるか」とのお訊ねです。新潮社文学アルバムの『柳田国男』は入手しているが、定本全集には写真集は刊行されていない筈だと答えました。井上氏はなおも定本全集にちゃんとあるのだと仰言るものですから、それでは是非いちどそれを拝見させて下さいと申上げ、早速井上氏宅をお訪ねしました。

現物を見せて頂いて事情がはっきりしました。岩崎美術社というところが、柳田国男写真集というものをつくり、筑摩の定本全集と抱きあわせでセット販売をしたらしいもので、通信販売ですから、私どもの目に触れることがなかったものと判りました。その証拠に写真集には非売品で定価がついていないのです。編集は大藤時彦と柳田爲正との共編になっておりました。それで早速拝借することにいたし、新潮社の文学アルバムと比較検討いたしました。



北大植物園内で、左より犬飼哲夫（園長）、柳田、牧野、
高倉、川島専三（道史）、名取武光（植物園助手）

先ず気がついたことは、伝記『白野夏雲』の高倉先生の序文のなかで、新撰北海道史の牧野編集長から、柳田が来ているのでと呼出しを受けた時の写真があることです。その日柳田を囲んで集ったらしい顔触れが、事もあろうにジョン・バチェラー邸の西側にあった北大植物園内で撮った写真が一枚あることです。高倉先生と柳田との出会いの日にどういう人達が集ったのか、これで判りました。この写真は文学アルバムにはありません。もう一枚、たいへんな写真が見つかりました。文学アルバムでは座卓を囲んで、柳田が右に、左に桑島医師が坐っている写真であります。それが柳田写真集で判ったことは、柳田のさらに右側に二人の人が坐っていることで、単に柳田をスナップとして撮った写真でないことであります。文学アルバムはひどい編集のしかたをしたものだ、研究者にとっては実に不親切なことをしたものだと痛感いたしました。

前回も述べましたように、柳田が旭川にこられて、近文コタンの関係者とまったくめぐりあいがなかったのかどうか、私は疑問を提出しておきました。柳田が金田一京助に大きな影響を与えていたことは周知の通りで、ア

左より桑島、柳田、昇旭川新聞編集長、昇曙夢

イヌ民俗に関心をもっていなかったといったらウソになります。現に吉田巌先生との交渉も、大正三年創刊の『郷土研究』誌におけるアイヌ民俗の問題でありました。

ことに明治三十九年の来道以来の、長い空白をはさんでの再訪の旅です。必ず近文関係者と会っているにちがいないという、私の強い思いこみがあります。文学アルバムでは、そのへんの事情を事実関係がつかみかねて、敢えて意識的にカットしたのではあるまいか。どうも写真を見ていてカットされた二人の方は近文コタンの関係者ではないかという思いがつのるばかりでした。

私は早速、帯広の月刊誌『ふるさと十勝』の編集長佐藤隆則氏にお願いして、写真集から複写をとって頂きました。その写真を持参して、旭川大学の地域研究所＊の会合に出席いたしました。さいわい立原宏要先生が強い関心をおもち下さり、近文の方々にあたって見ましょうとの御好意なので、甘えてお願い致しました。昭和八年といえばもう五十年、半世紀たっています。その後立原先生が何人かの古老にあたってみたが、心当りのある返辞を下さった方に出会えず、手がかりなしとの返事でありました。

ところが世の中は広くて狭いものです。例の写真のコピーをとってくれた佐藤隆則さんから電話で、札幌に住む女性の方で、仕事上の仲間だが、日赤病院長桑島先生の血縁の方で、写真を見たいとのことで、抜刷と一緒に送ってくれとのことで、早速お送りいたしました。

日赤病院長宅前にて

札幌の女性とは深山真喜子女史で、桑島病院長宅前の写真の方々の関係とお名前がいっぺんに判りました。写真の人物を左よりに書くと、夫人桑島つる、手前に母の手を握るのが次男の清、長女のいく子、長男の核、次女のたみ子、後にたつのが柳田国男、医師桑島要の順になります。

さて、深山女史の母上こそ桑島病院長のご長女いく子で、当時十八才であったことから

柳田・桑島両家の家譜

- 松岡　賢治　／　たけ
  - 松岡　鼎（柳田の長兄）医　師
    - 桑島　要　医　師　／　五女　つ　る
      - いく子　長女　大正５年生　深山氏に嫁す　当時18才
      - 核（ただし）　長男　大正14年生　旭川市国立病院長　当時９才
      - たみ子　昭和４年生　富山大学教授横山氏に嫁す　当時５才
      - 清　次男　昭和６年生　北海道開発コンサルタントKK　当時３才
  - 俊次（早世）
  - 井上　通泰（医師・歌人）
  - 芳江（早世）
  - 友治（早世）
  - 柳田　国男
  - 松岡　静雄（海軍軍人・言語学者）
  - 松岡　映丘（画家）

も、桑島邸で座卓を囲む四人の人物中、右半分のお二人が近文関係者でないとしたら、別に手がかりになる記憶をお持ちでないかと考え、母上にお訊ね下さるようお願い致しました。果せるかな私の予期した通り、非常に大事な手がかりが得られました。まず、柳田のすぐ右側に坐っておられる方は、旭川新聞社の昇という記者らしいという連絡です。たいへんな手がかりです。このことを早速、旭川の立原先生にお知らせいたしました。

　するとどうでしょう。年明けての一月二十日付で、立原先生から次のようなお便りがありました。旭川新聞の関係者がいることから、旭川市立図書館に出かけて昭和八年の旭川新聞保存版を調べたところ、八月九日（水曜日）朝刊に、例の写真集とまったく同じ写真が出ているのを見つけ出し記事のコピーを送って頂きました。

　柳田の右側の人は当時旭川新聞社取締役編集長昇季雄で、更にその右端の人こそ有名なロシア文学者で、季雄氏の実兄昇曙夢（のぼる・しょうむ）氏であることが判りました。

記事には、こう書いてあります。

ゆくりなき親友会見（見出し）

土俗、民俗学の権威柳田国男氏は一昨夜来旭。縁辺の桑島赤十字病院長宅に一泊したが、旧友昇曙夢先生在旭なるを聞き、昨夕昇本社編集長を訪れ曙夢先生と会談、旧情をあたためたが、柳田氏は語る

「今回、来道の目的は旭川を中心とする本道各地の探勝にあります。私は曾て学生時代、今から二十年前北海道の地を踏んだものであるが、今再び曽遊の地を訪ねて、隔世の進歩に驚嘆のほかありません。ことに春光台、柏の木につつまれた御野立所にたって近郊を俯瞰した、あの感じは欧州の風物に髣髴として、まさに一幅の好画題たるに十分である。その雄大な風光は大いに世に推称する価値があると存じます。云々（原文ノママ）」とありました。

しかも写真説明としてカッコ書きで、（写真は右から曙夢先生、昇編集長、柳田国男氏、桑島病院長）と註記されています。これで、写真集のなかの座卓を囲んだ写真のモトが出てきて、人物の確認が出来たことになります。立原先生のお骨折りの賜と心から御礼申上げます。

昇曙夢は、新聞によると旭川教育会、旭川新聞社共催の、八月七日午後七時から旭川商工会議所で開かれた「ロシア事情講演会」に臨んでおり、翌八日には旭川新聞学芸部主宰の曙夢を囲む「ロシア文学座談会」に出席しています。

そこで昇曙夢の年譜によると、この時の記事は「昭和八年実弟季雄の案内にて、北海道両国立公園地帯を旅行」と記されています。両国立公園とは当時の大雪並びに阿寒国立公園のことで、層雲峡を中心とした大雪ばかりか、遠く摩周湖・阿寒湖を中心にした国立公園をも、季雄の案内で歩いたということになっています。前記旭川新聞社の記述にあるように、柳田来道の目的が旭川を中心に本道各地の探勝にありとすると、

曙夢の旅行目的とずいぶんと重なるところがあり、意外や柳田年譜の旭川、網走、釧路、帯広と書かれた足跡と、どこかでつながっているようにも推察されるのです。

さてその後、立原先生から萩山所長と図書館の喜多氏のご好意で、新しい旭川新聞の関係記事が見つかったからと、二枚のコピーが送られて参りました。

まず最初の一枚は、旭川新聞・昭和八年八月二十三日の夕刊です。

柳田国男氏の歓迎座談会

今夕本社主催でホテルに開催

土俗及民族学の権威柳田国男氏は過日渡道、旭川を始め本道各地を視、土俗学に関する研究中であったが、再度来旭、親戚に当る当市赤十字支部病院桑島要博士邸に滞在中であるを好機とし、本社主催で今宵七時より北海ホテルにおいて歓迎座談会を開くこととなった。会費は金一円で一般有志多数の参会を希望する。なお氏の略歴は、

明治八年千葉県の産（これは兵庫県の誤）、同三十三年に東京帝国大学法科大学政治科を卒業し、同三十五年法制局参事官に任じ、宮内書記官、内閣書記官長……（途中判読不能）……東京朝日新聞編集局顧問となり、同社の客員である。

なお、氏は土俗学の造詣深く、啓明会会員に推され、数種の土俗学に関する著書があり、この座談会で本道における土俗研究の興味あるお話が聞かれることであろう（写真は柳田国男氏）。

次のもう一枚のコピーは、

旭川新聞・昭和八年八月二十五日朝刊

柳田氏歓迎座談会における発言要旨

土俗および民俗学の権威柳田国男氏の歓迎座談会は、二十三日七時から本社主催のもとに、北海ホテルに於て開催した。出席者は赤十字病院長桑島博士、奥田千春氏、七師団高級副官助川中佐、笠茂ドクトル、沼崎重平氏、飯島五郎氏その他市役所、会議所、教育文芸界方面三十余名であった。

定刻、昇本社編集局長の挨拶があって座談会に移ったが、柳田氏が今回の道内旅行中において感じた道拓殖文化に就て忌憚のない所感、地方文化の特性、農村青年の思想動向等、話題は意外な方面へ進展し、氏一流の鋭い観察と、研究的立場よりの感想を述べ、それぞれ質問に応答し、十時記念撮影をなして散会したが、この種の催しとしては近来稀な盛会であった。（写真は当夜の記念撮影）。

とあって、北海ホテルの正面玄関前にて撮った記念写真がのせられております。

柳田年譜（定本全集）には「八月七日―九月五日、北海道旅行。網走―釧路―帯広を経て、八月二十三日旭川での座談会に出席。二十四日―三十日、旭川赤十字病院入院」とありますが、こんど発見された旭川新聞の記事により、柳田の足跡をあらためてなぞってみるとこういうことになります。

旭川新聞八月九日朝刊記事により、柳田は七日夜旭川に着いている。東京は五日か六日に発ち、北海道の旅の拠点を当初から、姪夫婦が日赤病院長夫妻として住む旭川においていたことが判断でき、途中の函館、札幌は通過で旭川に直行したものと考えてよいことであります。

旭川に着いてみると南島すなわち奄美大島の僻島、加計呂麻（かけろま）島の出身で、二葉亭四迷の挫折の跡を引きついだ、当時のロシア文学の権威昇曙夢が、旭川に来ているのに偶然出会うことになる。そして事もあろうに旭川新聞の編集長は曙夢の弟季雄であったことである。柳田は前回にもしるしたように大正十一年から伊波普猷、比嘉春潮らと共に南島談話会をつくり、雑誌『嶋』を出し、離島振興に力をかしていたことに、昇は柳田に深く私淑していた間柄であります。

柳田と曙夢の出会が八月八日。翌九日から二十二日夜旭川帰着までの十四日間、柳田は年譜によれば網走、釧路、帯広（吉田日記によればさらに根室管内も）と旅をかさねていて、そのうちはっきりしているのが、吉田日記にある二十一日夜帯広駅で下車、信陽館に宿泊、翌二十二日昼すぎの列車で旭川に向っているのが、たしかな足跡である。一方曙夢は年譜によれば大雪、阿寒両国立公園を、弟季雄の案内で歩いているが、その後二十三日の柳田の歓迎座談会には姿を見せていない。弟季雄だけは既に旭川に帰着し、柳田の座談会で開会の挨拶をしている訳です。

昭和八年という時点を頭にいれて、網走の米村喜男衛＊との出会いがなかったかどうか調べてみましたが否定的で、釧路での手がかりもまだまったくつかめません。昇兄弟と共に大雪・阿寒両国立公園を同行したような気もしますが、それも確証できないのが残念です。あわてずこれからの課題として残しておきたいと思っています。

ここで昇曙夢について少しく紹介したいと思います。私達の世代にとって昇曙夢といえば、高名なロシア文学者として知られており、特に昭和初期の新潮社版世界文学全集のトルストイの『復活』などは、たしか昇曙夢で読んだ記憶をもっています。しかしこのロシア文学者の歩みについてよくつかめないのです。それで成城大学の田中宣一先生のお力添えで、曙夢の関係資料をお送り頂いたこと、『民間伝承』終刊まで編集協力者だった立正大学名誉教授の浅野晃先生から、曙夢の民俗研究者としての側面について教示を受けることができました。

それによると曙夢は柳田より三才年下の明治十一年の生れ、生地は鹿児島県大島郡実久村芝（現在は同郡瀬戸内町）、鹿児島県といっても離島の奄美大島、その南西により添うように内海をはさむ加計呂麻島の片隅にあたる芝という集落であります。

曙夢はペンネームで本名は直隆です。内村鑑三の訳詩中に、「詩は英雄の曙の夢なり」とあるのを見つけ、

これをペンネームとしたそうです。郷里の小学校を卒業してから明治二十八年上京、二十九年ニコライ正教神学校に入学、三十六年卒業。卒業後は母校正教神学校の教授、早稲田大学、陸軍中央幼年学校等の講師を兼ね、大正五年陸軍教授、士官学校附となる。その間、大阪朝日、大阪毎日、中外商業新報社嘱託を兼ね、また内務省、内閣等の嘱託を歴任しました。

昭和七年、退官後は日大講師、雑誌『正教時報』主筆、ニコライ露語学院長として晩年に至ります。

昭和二年トルストイ生誕百年祭に国賓としてソ連に招待されたのをはじめ、ソ連に遊ぶこと前後四回に及んでいます。

昭和二十四年に、大著『大奄美史―奄美諸島民俗誌―』を出版、昭和三十一年には『ロシア・ソヴィエト文学史』を世に送り、芸術院賞を受け、さらに読売文学賞をも受賞しています。

殊に大奄美史の序文のなかで、曙夢は次のように語っています。「著者は、奄美諸島に生を享けた一人として、既に学生時代から郷土史の研究に心を傾け、将来郷土史を編さんする念願のもとに、早くから史料の蒐集に志した。そのために上京後も、夏休みの度毎に帰省し、大島各地を跋渉して、各種の記録、手記、伝記、民謡等を集め、諸家の系図、文書を手写し……云々」と、青年時代より南島文化を自己の誇りとして記録にとどめ、他日顕彰せんとの志と意欲のほどが、切々としてうかがえるのであります。

この郷土史の目次を見ると、南島研究者としての白野夏雲のことが紹介されているのであります。旭川における柳田国男と昇曙夢との奇遇と、かわされた話題のなかに白野夏雲のことが出ていたことはまちがいないと思います。柳田がこの後、八月三十日に出札して、山形屋旅館に宿をとり、牧野信之助、高倉新一郎先生、白野夏雲の遺児、甲峰松らと共に白野夏雲の往時を語りあったにちがいない会合に、脈絡していることに不思議な感動をおぼえるものであります。

とにかく旭川における柳田の足跡がずいぶんと輪廓を明らかにすることができました。地域研究所の先生

方のご配慮のたまものと、心から御礼を申上げます。次回は柳田が少数民族問題としてのアイヌの人々のために何をなしたのか、または「なさなかった」という梅原猛の論文に対して、私見をしるしたいと思っております。

＜追　記＞

初校が既に終ってから、どうしても気になることがありました。それは北大植物園での写真です。せっかくの機会であり、記録として残せるものは残しておきたいという念いがつのるばかりでした。そこでゲラのコピーをとり、まことに失礼かと思いましたが、大いそぎで夏雲の孫・白野仁氏、また前回も貴重な教示を頂いた高倉新一郎先生にお手紙いたしました。写真の中には白野甲峰松氏はいないことがはっきりしました。南一条西十二丁目の白野宅に柳田と何人かのお客様が見え、夏雲の遺品をご覧になっていかれたというお話をうかがいました。

高倉先生は写真中のお方です。お返事が待ち遠しい念いでいっぱいでした。先生のお便りですべてのお方のお名前がはっきりいたしました。ほんとうにありがたいことでした。高倉先生に心からお礼を申上げます。なお、この写真が写された日を、私は高倉先生が山形屋旅館によばれた日としるしておきましたが、先生はどうも当日ではなかったような気がすると仰言っています。山形屋滞在の翌日か、あと考えられるのは洞爺湖温泉から再び札幌に戻られてからのことか、これまた今後課題として残したいと思っています。

昭和六十三年　地域研究所年報第十号　旭川大学地域研究所

柳田国男・北海道の旅を追って（下）

国家の生命は永遠でありますならば、あらかじめ、まだ生れて来ぬ数千億万人の利益をも考えねばなりませぬ。

いわんや我々は、すでに土に帰したる数千億万の同胞をもつておりましてその精霊もまた、国運発展事業の上に、無限の利害の感をいだいておるのであります。

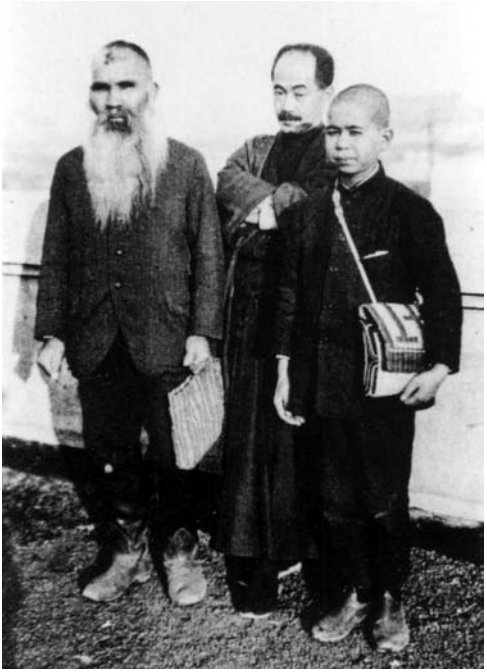
柳田国男『農業政策学』より

かつて私は、この一文（上）に於て、新潮社の日本文学アルバム『柳田国男』を手にして、写真集七十頁に「アイヌ酋長伏根某父子と、昭和三年頃、朝日新聞屋上で」とあるのを見つけ、あッと驚いたのであります。柳田に伏根翁との出会いがあったことであります。

酋長伏根某とは、当時帯広の伏古コタンの古老伏根弘三翁のことであります。

ここでしばらく、伏根翁に就いて触れたいと思います。

伏根翁は明治七年三月十五日の生れで、父はタアレ、母はウシケシタ。その三男坊でチヤンラロといいました。生れたところははっきりしませんが、七、八才当時（明治十三、四年ごろ）は、今の中札内村トツタペツ川の支流で、オソソケナイ（西戸蔦、大正四年図でいうオシヨシヨキナイ）川の小沢の中の一軒家に住



アイヌ酋長伏根某親子と
昭和３年頃朝日新聞屋上で

み、父母と兄佐々木彦次郎と、姉二人と、もひとりの兄と、都合七人暮しをしていたそうです。

和名を安太郎といいましたが、大正五年五月に戸籍名を弘三に改めています。よく弘三翁のことを伏根ホテネとしている記事を見ますが、これは少年時のあだ名だそうです。オ（お尻のこと）、テイネ（湿っている）という意味で、子供のころ、よく寝小便たれのクセがあって、いつも衣類をぬらしていたことから、親たちからオテイネ（寝小便たれ）といわれていたことが、いつのまにかホテネで通るようになったそうです。どうも伏根という姓を名乗ったのもホテネから来ているのでないかというのが、高倉新一郎先生の意見です。三十才以降の壮年期になってからも伏根ホテネで通用していました。

いつか高橋真君（十勝農民新聞記者）と話しあっていた時、「私たちは伏古アイヌといわれているが、そうじゃない、幸震アイヌなのだ。旧土人法で土地をあてがわれた時に、無理強いで伏古に移住させられたのだ」と、真顔で私の顔を穴のあくほど見つめて、語り聞かされたことが、強く印象に残っていました。それが弘三翁のことを調べていくうちによく判りました。

アイヌの人々にとって山野も、河谷も自由に移動し、狩猟と採集で自然と調和しながら、私有とか占有とかを必要としない。この北海道を自由の天地として、平和に暮していたところに、突然、明治維新、北海道

の開放、拓地植民と、特に鮭が勝手にとれなくなったり、山林が公私権によって占有されてしまうと、動きがとれないことになりました。またある時は豪雪のため鹿群の大量斃死のような事態にぶつかると、まったく食料の給源を絶たれて、窮迫から、生活に困難することになりました。それで明治政府はアイヌの人々を定着させ、農業を覚えさせ、土地を割当てるという方針をとることになりました。十勝の場合、このアイヌの人々の定着農業の指導員として、富山県出身の宮崎濁卑＊が派遣されてきました。それではじめ、幸震途別のトマム二股に十三、四軒の幸震アイヌの人々を集め、農業の指導をはじめました。その後　二、三年して、さらにまた幸震アイヌの人々は伏古（西帯広）に集団化させられたのであります。これで高橋真君が真剣な顔をして私に語ってくれた、伏古の人々の移動がよく判りました。自由の実現のための伏古移住でなく、強制的な移住と、定着化のための政策としてこのことがあった訳であります。

吉田巌先生は、伏根翁についてこう語っています。

「アイヌのなかにも語るべき先覚者は少なくない。おたがい個人的私的の短所は抜きにして―ことに無告、無援、孤立のままに朽ちはてた巨木のごとき、幾多の古老たちを思う時、その貴き犠牲に対し、万斛の涙なきを得ない。

わが十勝に於ても、同族の生活向上の功績により道庁長官より表彰された先覚者は、古くは三名ある。すなわち伏根弘三（伏古）中村要吉＊（音更）田村勝太郎＊（芽室太）の三氏である。……中略……伏根氏は明治三十九年九月十四日、はじめてその存在を知ったが、四十年ごろ氏が樺太（豊原町郊外並川）在住当時、私は虻田学園で、書信の交換をはじめたのがはじまりで、大正五年二月、氏の伏古に帰宅以来、地元十勝に重きをなしてきたひとりである。

容貌言論、古（いにしえ）の酋長シャクシャイン、イコトイ等の怪傑を思わしめるおもむきがあった。」

といっていますが、まこと生前の伏根翁を知るものとして、まさにその通りと私も思っております。

さて伏根翁の経歴についての聞書というのが、私の手許に三種あります。

一、は吉田巌先生のホテネ物語。取材は大正七年で、発表は昭和十四年、月刊『北海道社会事業』誌の四月号（八十三号）であります。

二、は高倉新一郎先生の『緑蔭に語る―伏古村の旧土人ホテネ君談話聞書―』取材は昭和二年八月、北大の学生の頃夏休みに帯広に帰宅して機会を掴んだもの。（昭和二年とあるが高倉談話と斉合せず）発表は昭和十一年、『北海道社会事業』誌七月号（五十一号）であります。高倉先生は既に北大図書館司書の身分のまま、『新撰北海道史』の編さん嘱託の時代のことであります。

三、は昭和六十一年十月、道出版企画センターより刊行された梅木孝昭編『アイヌ伝道者の生涯―江賀寅三遺稿―』にあるものです。江賀翁が大正十三年十二月に、当時アイヌ伝道団長としてのバチェラー翁に命ぜられ、伏古コタンのクリスマス伝道の応援に出かけてきた時に収録したものであります。

北海道庁立帯広日新尋常小学校前にて、右から吉田巌、伏根弘三、金田一京助（大正７年）

この場合「十勝義勇館に於て」としるされ、しかも写真が紹介されています。その説明に「伏根ホテネとキリスト講義所＝義勇館と称した。」とありますが、これは間違いであります。同じ写真が帯広市史にものっているのであります。これには「若き日の伏根弘三（樺太にて）」とあります。事実

写真をよく見ると丸太積家屋（ログハウス）で、当時の帯広としては考えられない建物です。
日露戦争が終り、樺太が日本の領有となったので、既に聖公会に入信していた伏根翁が、バチェラー翁の命で開拓伝道者として樺太に派遣されたものと考えます。建物はロシア人の残していったものと思います。ガラス窓の入っているハイカラな建物です。まちがいなく豊原郊外並川村のコタンと考えます。
伏根翁の右横に見える子供は、おそらく伏根翁のお子さんで、服装も洋服できちんとしたものです。私の記憶でも、私が生れた池田のまちでさえ大正九年の時点で、小学生が洋服を着ているなど誰ひとりおりませんでした。教師でさえ黒のツメ襟服を着ていた時代であります。非常に珍らしい写真であります。看板にはまさしく「基督教講義所」と、達筆でしるされています。
このことは、先ほどの吉田巌先生のいう「四十年ごろ、氏が樺太在住当時、私との書信の交換がはじまり、大正五年二月、氏が伏古村に帰宅」するまでの期間と一致しており、樺太でキリスト教伝道に従事されたものでしょう。私は帯広聖公会に通っていた頃の、伏根翁の礼拝時における祈りの言葉、聖歌集（聖公会は讃美歌集を使用せず）の歌唱力に、いつも驚いていましたから、さもありなんと思うのであります。

伏根翁回顧談　その一

オソソケナイから大正駅逓付近のヌツプコマプ（野原の下端部）に移り住んだころ、鮮やかに記憶に残っている話。
その頃、タビト（旅人？）といってシャモがあらわれ、酒やその他、アイヌが特にほしがるものをもちこんで、熊、鹿などの毛皮を、タダ同様の値段で非常に安く交換していった時代のことである。
私の母ウシケシタの身内のもので、サンケイタキというのがいて、帯広川の晩成社事務所付近に住んでい

た。パラトヤウンクル（深い水のよどんだ場所に住居する人の尊称）といわれて、そのころ大変羽振りのよい暮しをしていた。

ところがこの人が非常に酒好きで、また大酒飲みであった。酒一升が一円五十銭ぐらいの時に、鹿皮三枚から五枚ぐらいでばくられた。

鹿皮や熊皮が手許にある時はよいが、ない時は前借りしてのむことになる。シャモは借用証を勝手に書いて爪判をつかせる。こうしてはじめは富裕であったサンケイタキは、酒代の支払いのために貴重な家具什器をもち去られて、とうとうコロコロになってしまった。私の母は痛切にこの酒の害を感じとったものと見えて、自分を膝もとにひきよせ、口を開けば次のように訓えてくれたものである。

「大酒を飲めばどんな金持もみな潰れてしまうのだ。爪判もとられる。若死もする。酒は怖ろしい敵なのだから、絶対に酒にからめとられないように身を修めねばならぬ。」

これが私が十三才（明治十九年）の時のことである。尓来、この母の教えである飲酒の禁をいくたびか犯してきたが、心の片隅にはいつもこの母の教訓が、強く強くこびりついていて、私の一生の支えとなっていた。こんにちではまったく禁酒をまもり、かつ同族に対し禁酒のすすめを続けているのもこのためで、決して偶然のことではないのである。

○　アイヌ相手に金儲けする店だけが大きくなってコタンさびれた
○　ああアイヌやっぱり恥しい民族だ酒にうつつをぬかす其の態（ざま）
○　泥酔のアイヌを見れば我ながら義憤も消えて憎しみの湧く
○　山中のどんな淋しいコタンにも酒の空瓶たんと見出した
○　ウツかりとアイヌの悪口言った奴きまり悪げに云ひなおしする

○　シャモになる前にひとまづ堂々とアイヌであれと鉄腕を振る
○　アイヌ！と只一言が何よりの侮辱となって憤怒に燃ゆ
○　開拓の功労者の名のかげに脅威のアイヌおののいてゐる
○　俺はただアイヌであると自覚して正しい道を踏めばよいのだ
○　正直が一番ン偉いと教へた母がなくなって十五年になる

昭和四年、僅か二十九才でその生涯を閉じた違星北斗の遺稿集の中から、右記の飲酒の戒めと同族の自覚自立への気持を、口語短歌に托して唱いあげたいくつかをここにしるしてみました。

これらの歌を一読すれば、同族の自覚自立と、生活向上にとって、飲酒ということが大きな社会問題としてあったことが理解できると思います。酒を飲む飲まないということが、個人の道徳、不道徳以上の問題としてあったことであります。

アイヌ民俗学の隠れた学者で、アイヌ教育の父吉田巌先生（昭和17年）

バチェラーの薫化でキリスト信仰の道に入り、小学校教師として立派に自立し、後にホーリネス教会のすぐれた伝道師としても活躍した江賀寅三翁にしても、その遺稿集のなかで深酒のために思わぬ不覚と大失敗をしたことが書かれています。

キリスト教ではキリストとの契約の血として、堂々と日本酒とアルコール度に於て変らないワイン（ブドー酒）を口にする訳である。ソ連のウオッカ問題といい、国家権力が飲酒について国民生活を規制するような社会現象が現出する世の中である。経済制度、政治制度にまったく関係のないアルコール問題が何が故に国

家権力によって規制されなければならないのか。アルコール問題についての社会学的な解明の道があるものであろうか。アイヌ史の上でも考えておきたいことのように思われてしかたがないのである。これは筆の走りである。

伏根翁回顧談その二

明治二十八年、当時生花苗（おいかまない）を離れて函館に出て、牛肉の市場開拓に腐心していた依田勉三を頼って出かけたのが長旅の第一回である。次に第二回の旅は、明治三十一年大津から船に乗って函館に上陸、この時木材商をやっていた本名宗三郎＊氏に同行して上京するためであった。ちょうど函館では鉄道馬車が走るようになった時である。これで市内見物が面白くて乗ってみた。そこで偶然乗りあわせたある紳士が、私に向って何処へ行くのかと尋ねるのである。私は「これから上京するために出かけてきた。目的はアイヌ同族のため、是非教育施設を整え充実して貰いたいので、その筋に陳情のため上京する」と答えた。

ところがこの紳士は誰あろう前田正名であった。前田は薩摩藩の家中に生れ、フランスに留学、明治期の日本の殖産興業に力を尽し、特に地方産業の振興に意を用い、反中央集権で一貫した偉材である。明治三十二年には釧路に製紙会社を創設したり、阿寒湖畔に約四〇〇〇ヘクタールの山林を確保して経営、後の前田一歩園の創設者となり、北海道とは非常にゆかりの深い人である。死後、男爵を授けられている。農商務次官もやり、農商務大臣にも擬せられた人である。こういう立場の人に、いきなり好意ある知遇を受け、内務省の幹部の人々にそれぞれの紹介状を書いて貰うという、思わぬ幸先のよい旅のはじまりとなるのである。（高倉先生が白髯の人を本名氏としているのは誤りであります。こういうめぐりあいに、どうも伏根翁の人なつっこさ、愛すべき人柄があらわれていると見るのであります。）

こんなことで、本名氏とは二、三日遅れて青森に渡りました。いよいよ青森から東京行きの汽車にはじめて乗ったが、その頃の汽車だから退屈でたまらない。ホームで物売りが来るのが珍しく、ひやかしに買っては、ちょっと食べては編棚の上にあげておいたりして、退屈をまぎらせていた。

ちょうど盛岡の手前あたりで、みすぼらしい格好した老夫婦が乗車してきて、私のそばに腰をおろした。こちらはモーニングコートに山高帽をかぶった、俄仕立であるがれっきとした紳士の格好をしている。ところが、見ているとまもなく広い紙を広げて何か読み出したようである。そして函館に火事があったようだ。東京では強盗にやられている。米の値段がいくらになった。粕の相場は何ぼなどと、妻の方に向って語りかけている。いったいこの広げられた広い紙は何なのだろうかと、不思議なこともあるものよと、胸はいっぱいになり、その秘密が知りたくなった。（昔は新聞は黙読ではなく大きな声を出して、人前で読み上げる大人たちが沢山いた風景を思い出すのである。そうした風俗があったことが懐かしい。）

東京に着いてから、本名氏の宿にやっと辿りつくことができた。久しぶりでニシパ本名氏と夕餉を共にしたのであるが、汽車の途中で見た、あの老夫妻が広げて見ていた広い紙こそ魔法使いの紙か、八卦の紙でもあるのかと訊いてみたのである。するとニシパは思わず口の中の飯をプツと噴きとばすやら、腹をかかえて大笑いをするのであった。

「それは新聞というものだ。その新聞によって、日本のことはもちろん、外国のことまで新しく起ったことを教えてくれる。重宝な、いわば先生みたいなものだ」と聞かされて、私は笑うどころか穴があったら入ってしまいたいほど、口惜しいやら、恥かしいやらでありました。

あのみすぼらしい田舎爺さんすら新聞なるものを読んで、世間のことが判るというのに、私の眼は達者である。しかも山高帽にモーニングコートという紳士のいでたちだが、あの広い紙が読めない。解らないとは我ながら情ないことだ。ようし私は、十勝に帰ったらコタンの惘れなウタリたちに、この貴重な広い紙を読

み書きできるように仕込まにゃならぬと、固く決心したのであった。

翌日から早速、前田正名氏から貰った紹介状をもって、内務省に出かけていった。地方局長の蒲生仙氏に面会することができ、終日（というからには朝から夕方までということで、これは大変なこと）アイヌの生活現状から、農業教育上の保護施設を必要とする理由を、逐一陳情して引き下ってきた。ひとえに前田氏の同情ある紹介状のおかげであった。当時の東京新聞にこのことが広く報道されたのである。

帰途、再び函館に戻り、前田氏の話にあって強くすすめられた、谷地頭に住むネトルスップ氏のアイヌ学校の見学に出かけた。メノコ（女の子）やエカシ（老翁）たちが讃美歌を歌うのを聴いて、非常に新鮮な感じがして感動したのである。

このことが動機となって、早速伏古アイヌの広野教道（ひろの・のりみち）、広野勝次郎の二名の青年を送り出して、この学校に入学させ、その学費を私が貢いだ。この二人はキリスト教に入信するのであるが、私もまた、広野教道の導きでキリスト教に帰依することになったのである。

さて、ここで高倉新一郎先生の『緑蔭に語る』から引用します。

「伏根君の東京行について思いあたることがあるのでしるす。

北大所蔵の『旧土人陳情書』なる一巻は、明治二十八年第八国会に、三重県選出自由党代議士鈴木允美氏他五名が、『北海道土人に関する質問』を提出、続いて『北海道土人保護法案』が提出されるに至った動機をなしたと思われる。

北海道人某なるものが、議会に提示した質問書に関する北海道庁の回答書綴であるが、その某なるものが実は本名氏であり、伏根君はそれに随って上京運動したのではないかと思われる。とすれば、この運動はバチェラー氏も無関係でなかった筈である。また今日の『旧土人保護法』の前駆をなした運動が、私の故郷の

人々の手によって行われたということも、ひとつの快心事といわねばならぬ。」と書かれています。
後年、伏根翁は啓明会主催のアイヌ問題講演会で、時代の変化は「旧土人保護法」が実情にあわなくなり改正を要することを訴えているが、この記述はまことに興味あるアイヌ運動史の一コマともいえるものでありましょう。
ここで帯広市史（昭和五十一年刊）により、伏根翁がアイヌの子弟たちのために燃やし続けたアイヌ教育の足跡をしるしたいと思います。シャモでもよくやり遂げないことを翁はやり遂げているのであります。

「下帯広村（帯広のはじまりの地名）では、明治三十四年、伏根弘三の主唱により、大通五丁目の伏根宅を開放して私塾を開き、十一人の子弟が学んだ。真宗大谷派の僧侶山県良温が教授に当ったという。
明治三十五年六月、伏根は帯広町石狩通に塾を移し『伏古旧土人教育所』として再出発させた。教師は樋渡太郎、堀部義章の二人、学童は三十二人であった。教員俸給は函館の聖公会宣教師ネトルシップからの補助金を充当、あとは伏根が自弁したのである。
同年八月、北海道各地を視察した近衛篤麿は、十八日にこの教育所を参観、その北遊日誌に、『晴後細雨、午前十時馬上、帯広出発。十勝農事試験場分場及び土人某の施設にかかる土人学校を見る』と書いてある。
伏根は明治三十六年、二度目の上京を試みているが、それは伏古旧土人教育所の維持費を募るのが主目的であったようである。
明治三十七年五月十日、同地に庁立第二伏古尋常小学校が設けられ、この教育所は廃された。帯広町基線西二十五番地に開設された庁立伏古第二尋常小学校は、北海道旧土人保護法にもとづくものであった。国費支弁により経営され、帯広町と伏古村にまたがる旧土人給与地一帯を通学範囲としていた。
同地帯は、一般に『伏古アイヌコタン』と呼ばれ、学校は単に『アイヌ学校』といわれるようになった。

開校当初、代用教員佐藤義厚、同スガが着任していたが、学齢児童四十四人のうち、二十人より登校しなかった。

学校の責任者は、三野経太郎を経て、大正四年、吉田巌を迎えて交代した。吉田校長は、昭和六年八月末日の廃校に至るまで十五年八ヵ月勤続、部落とは切っても切れぬ指導者となった。この学校は大正八年十二月、庁立日新尋常小学校と改称している。」

この伏根私塾にはじまり、日新小学校の廃校に至るまで、一時伏根翁が樺太出向期間を除いて、一貫してアイヌ教育のために、翁はつねに体をはって同族の生活向上のために奮闘してこられたのであります。

戦後、伏根翁の顕彰碑が日新小学校跡地附近に建立されました。

市史の記述中、大通五丁目の伏根宅に私塾を開いたとあるが、市史中の「帯広の市街地区画」によると、明治二十七年の市街地貸下告示により、仮引渡を受けたものの資料（吉田菊太郎所蔵地図、吉田は幕別町農業会会長もやった、伏根翁たち世代の次の世代を背負った十勝の傑物であり、筆者にとっても懐しい人である。）によると、大通五丁目一、三番地はトレツ、大通七丁目一番地がツブトキ、大通十丁目十三番地がチャンルラ、大通十一丁目十三番地がテツクイポとあって、チャンルラはまさしく伏根弘三翁のことであるが、五丁目一、三番地のトレツは伏根翁とどんな関係にある人なのか不明で、伏根翁が私塾を開く頃はここに住宅があったことになります。

この五丁目一、三番地は、後にアイヌの互助団体旭明社＊の所有となっていて、十勝病院が戦前あったところで、小片憲次氏の兄丹蔵氏（聖公会信者）が病院長として経営されていたところです。

昭和六十年十一月号の雑誌『中央公論』は中央公論社創業百年記念号として刊行されました。この雑誌に、当時京都市立芸術大学々長の梅原猛が「甦える縄文」という一文を寄稿しています。梅原は藤村久和氏と共

に、再三帯広の地を訪れており、とくに吉田巌先生のお仕事に深い関心をお持ち下さっています。非常にありがたい方でありますが、私はこの一文中に、どうしても承認することのできない二つの点をみつけましたので、それをまず提示します。

梅原論点　その一

「柳田の民俗学の出発点が、里人すなわち農耕民に滅ぼされた山人、すなわち狩猟民についての関心からであることはまちがいない。どうも自分がその血を受けついでいるらしい。里人によって征服され鬼としてきらわれ、天狗としておそれられ、サルとして馬鹿にされた山人の復権のために、彼は民俗学をはじめたのである。このみずからの血に不安をおぼえた柳田は、この山人や山人の神様であるおしらさまや、おこまさまがしばしば登場する遠野の伝説に興味をもって、あの異様に美しい『遠野物語』なる本を書いた。それが柳田民俗学の出発点であった。

しかしどういう訳か、その後、柳田の山人研究は進展せず、柳田はその研究の対象を山人から里人に移した。この転向に明治四十三年の幸徳秋水事件が影響を与えているのではないかと思われるが、おそらくこの山人の研究を進めていく時、柳田はいっぽうで天皇制の問題とぶつかり、いっぽうでまた未解放部落の問題とぶつからざるを得ないことを感じたに違いない。

こういう研究が、高級官僚としての彼を、破滅に追いこむことは、たくましい生活者であった柳田国男は十分承知していたと思われる。……柳田は当時はまだ山人をアイヌ、あるいはアイヌと強く関係をもっていると考えていた。そしてこの山人に関心を失うと同時に柳田はアイヌに対する関心を失うのである。」

梅原論点　その二

「私は、柳田、折口をはじめとする日本の民俗学者たちが、あの英人宣教師ジョン・バチェラー（一八五四～一九四四）が一生かかって行ったアイヌ民族の研究に、ほとんど何の関心をも示さないことにむしろ驚きを覚えるのである。

ジョン・バチェラーは『ザ・アイヌ・アンド・フォークロア』（一九〇一）という大著を書いた。これは文字どおり、アイヌ民族とそのフォークロア、すなわち民俗の研究なのである。バチェラーはこの本を、彼のつくったアイヌ語の辞典とともに何度か書き直している。アイヌ語の研究とアイヌ民俗の研究が、彼の一生の仕事であったのである。

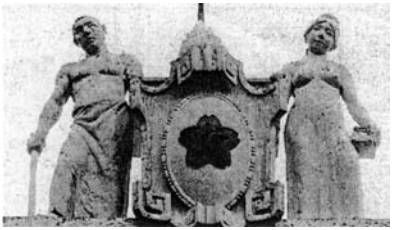
西洋人であるバチェラーは、自己の学問を柳田や折口のようなエッセイの集りというようなかたちで考えることはできなかった。学問は体系を持たなくてはならないとバチェラーは考えた。それで彼は、何よりもまずアイヌ語という言語の正確な辞典をつくり、そしてアイヌ民族の正確な民俗誌の体系をつくらなくてはならないと考えた。バチェラーの辞典は、現在のところはほとんど唯一の莫大な語彙とその正確な解釈をもつ辞典であるが、またバチェラーのこの研究書は、現代まで出版された書物のうちで、最も体系的なアイヌ民俗誌であるといえる。どうしてこのような著書が、日本の民俗学者によって利用されないのであろうか。

なぜ、民俗の追究を農耕社会にとどめ、それを越えて日本の基礎文化に遡らせないのか。もしそういう意識が少しでもあれば、アイヌ文化が沖縄文化とともに、日本の基礎文化を解く大きな鍵を与えるはずなのに、なぜあの驚くべき仕事が、十分に利用されないのであろうかということである。」

以上二点の梅原猛の所説に対し、私は異議申立をするものであるが、ちょっと論証の前に、論証資料に辿

りつくまでの経過を紹介いたします。
　もうだいぶ以前のこと、帯広中学での私の後輩である仁多見巌氏が、バチェラー翁の伝記を刊行いたしました。私の後輩にもこういう有難い志をもった方が出現したことは、何とも感激でありました。ことにこの刊行に、私の友人田上義也が支援していました。それでたしか仁多見氏に手紙を書いたのではないかと思うのですが、その時資料としてこういうものがあるといって、送られてきたのが『アイヌ生活の変遷』と題する、伏根弘三翁がどこかで講演した速記録であります。伏根翁にこういう講演記録があったのかと一読し驚きましたが、どういう状況の中での講演なのか、深い意味を探ろうともせずそれっきりでおりました。
　このたびの、北海道における柳田の足跡を追うにあたって、どうしても原本を読みたくなり、仁多見さんに何回か電話でお願いしましたが、書庫のどこかにある筈だが、ちょっとすぐには見つからない、時間をかしてほしいとの話、半年か一年ぐらいはかかったのではないでしょうか。ようやく入手できたのが、昭和六十年の九月のことです。
　この貴重な資料の表紙には

大正十五年八月十五日（発行年月日）
財団法人啓明会第十八回講演集とあります。当日の講演者は次のようになっています。
「眼前の異人種問題」東京朝日新聞顧問柳田国男君
「アイヌ研究の現状」東京帝国大学講師金田一京助君
「アイヌの生活と博物館のアイヌ品陳列棚」北海道帝国大学教授八田三郎＊君
「白老コタンのアイヌの生活」映画同上八田三郎君
「アイヌ生活の変遷」十勝アイヌ伏根弘三君


屋上の彫像

伏根弘三が講演した丸の内の日本工業倶楽部

「アイヌ語の本質」神学博士ジョン・バチェラー君

付録　本会寄附行為及び職員

講演は大正十五年四月十七日、日本工業倶楽部講堂に於て……とあります。

開会の辞は、本会常務理事鶴見左吉雄君

○　本日の講演会はアイヌに関する研究の発表であること。

○　講師のバチェラー博士は、五十年間わが国に於てアイヌ研究に一身を捧げておられる方であること。金田一、八田両氏は紹介するまでもない方であること。

○　伏根君はアイヌ出身の方で、現今ではアイヌ屈指の有識者である。柳田君は御承知のように多方面に造詣の深い人である。

○　啓明会はアイヌ研究の必要を感じ、数年前からこの方面の研究者に援助をしてきていること。河野常吉＊君のアイヌ研究に対し本会は奮って研究費を支出している。

○　又、バチェラー博士のアイヌ辞典の出版については後援を申上げている。金田一君の研究にも援助することになっている。

○　この講演会は、柳田君の斡旋、尽力によるものであること。

○　講演者に深く感謝し、斡旋者である柳田君に対し深く御礼を申上げる。
以上の開会の辞により、この催しがまったく柳田のお膳立で出来上ったものであることを明白にしていると思います。
柳田は、次のように語る。

眼前の異人種問題（要旨）柳田国男

私は偶然、講師の皆さんを知っていて、啓明会のこの結構な催しを手伝うことになった。挨拶がわりに、平素の考えを手短かに述べてみる。
○　最近数十年の国情の変化は、新たな解決すべき課題を次々と増加させている。その変化とは、外国とのつきあい方と交渉である。民族優劣論、人種差別の当否といった、今日まで考えてもみなかった題目が重要になってきている。政治家もこのことを無視できなくなってきている。とりわけ人口問題、移民政策などは自分の国のあり余る人間を、いとも気楽に他国の領土に押しつけるということで、深い研究もしないで、すぐにでも実現できるかのようなことを考えてる者がいる。まことに歎かわしい次第である。
人というものは、放っておいても郷里が窮屈なら、自然とどこかに出ていくものである。問題は、出ていく先でトラブルがおきないような方法を、前もって研究しておくかどうかである。それをやっていないということが問題なのである。
○　実は我々日本人は、一般に驚くべき事大主義者であって、強い国や大きな民族の思惑ばかりを気にする国民である。この広い地球、自然の恩恵と、広い地球世界を公平に分ち楽しもうと思うなら、まず異民族が互いに相疎み相憎むべからざるゆえんの道理を明らかにする必要がある。

人種差別の不当をいうなら、その前に我々自身が、今日までどのような異人種観を抱いていたかを反省する必要がある。

○　イギリスは植民地政策の先輩のような顔をしているが、例えばタスマニア島の住民が、一八六〇年前後に、最後の一人が死んで現地住民が完全に死に絶えてしまったという、重大な誤りをおかしている。

現地土着の人の中には狩猟族などその風習が抑制され、戦闘は長く絶え、生活の興味の中心を失ない、女性の愛情を引きつける男性の魅力ある行動がなくなり、そのため女性は家庭をまもり産育する意味を喪失するという、伝統生活の崩壊が人口の減少停滞となっている。また眼前に優越を以って圧倒する異人種がいることは、精神上の圧迫、不安の増大からくる社会崩壊がおきてくることが考えられる。

○　広く南方海域の島々だけの事ではない。北方ロシアにおける旧民族にも問題がある。シベリアが革命後の混乱に陥る前から原住民の各種族のなかには、既に北緯七十度附近の海際まで押しつめられ、動植物の生活にとってさえ、夏が至って短かいのと同様に、男女の壮年期が夢の間のように短かく、ただでも足りない若い娘を、強欲なる毛皮仲買のロシア人たちに連れ去られ、部族内にはいくら探してもひとりも配偶者を見つけられない男が多いことなど、少数民族圧迫のことを詳しく書いた資料が出ている。

○　今のアイヌ人の生活状態についても、傾向としては、これらの例と同じような境遇におかれている。人口もこの三十年四十年、殆ど昔のままで停滞し、そのうちに、シャモの血液が段々と浸潤していくように考えられる。北海道は全国的にも珍らしい人口増加率を示しているのに、ひとりアイヌ人の自然増加率のみが、ほぼゼロに等しいのである。そればかりか、アイヌ族の特質が、さらに大きな速度で失なわれていこうとしていることである。

○　純なるアイヌの信仰感情、善悪、幸不幸などの標準など、いうまでもなく、生活技術や作法、それから過去の事績に対する記憶追慕というものも、新しい教育や言語の関係から、今は段々と、その伝承の糸が

断ち切られんとしているのである。

淋しい島の住民としては、異数に豊富かつ秀麗であった歌謡その他の文芸が、また同様に僅かの年月の間に、片端から永遠に忘れ去られようとしている。

一箇の民族の立場から考えてみて、世の中にこれほど憂欝な経験はないのである。もし単に一万何千人の人口の数だけから診断して、少数の例だから辛抱する他はないなどと云うのであれば、あたかも角力の関取が私のような非力の男をみて、小さいから惜しくもないと云いきるようなもので、何とも無茶というより他ない、非情の言葉である。

外国からの人類学者たちが、いつも気をもむのは、学問上重要な資料が相当の注意も払われず、無関心に放置されていることを惜しむのであって、我らシャモのアイヌ文化に対する態度については、国を同じくして、共に住むということだけですまされることではない。

○　国中の各府県、ことにこれから北に行くほど濃厚に残った地名や方言が立証する如く、彼らアイヌ族の他の半分は久しく内地に住んでおり、同じ血はまた、今日の日本人のなかにも流れている。南部や津軽の一部には江戸期の中頃すぎてから、初めてちょん髷をゆい、袴を着けることになったアイヌの名族の後裔が今もいるのみか、もひとつ遡れば東部日本の広い地域にわたって、容貌魁偉の蝦夷という人達が、国の歴史の表面を闊歩していた。蝦夷は、今のアイヌの従兄弟であることは、言語や遺跡が簡単に証明してくれるばかりか、学ばざるに我々はそう信じている。

○　かの古代政府の方針では、帰順した蝦夷を小さな部族に分けて、南の九州の諸処の未開地に移して、今日の一部農民の祖先になることを許してきた。これらの蝦夷が、はじめに北からもたらした文化、また持っていた本来の美質や長所を、必ずや完全に融合して、今の日本人の歴史的業績の上に、いろいろと影響を与えているのである。不幸にして文字や記録に伝わらぬため、書物だけからはこれを辿ることはできな

い。それを僅かに帰納と比較との間接研究法（民俗学的手法）によって見ることができる。殊に幸いに最近まで保存せられていた、純乎たるアイヌ族の純たる伝承があったのである。それが意味もなく、また効果もなく亡失してしまうことは、国家として例えようのない損害である。もっと早く心つかねばならなかったのである。

然るに、日本の最近までの北方開拓手段は、十の十までヨーロッパ一部の、白人のいわゆる有色人種を統御する故智を模倣してきたにすぎない。アイヌ人をして、年久しくこの民族に親しみを感ぜしめなかったばかりか、国内で学問に志すもの、日本文化の渕源を究めようとする者の注意を、この方面に向けようとはせずに、終始蛮夷の荒野に踏みいって新たな功名をしようとする、したたかな猛者たちばかりに、一島の運命をゆだねておいて、たまたま北方に二つまで大学のおこるような時節が到来しても、まだ何らの研究も、アイヌの前代生活、その種族としての成長の問題に及んでいなかったのである。腹では異人種を天然現象視する白人などでも、このような恥づべき態度は、今はもう続けること出来なくなってきている。（戦後の北海道大学の新生再建にあたり、京大桑原武夫のところに仏文学講座を開設したいが協力してほしいと相談があったが、桑原が仏文は既に二大学あるので、北方にある北大としては、北方圏を軸とした講座を考えるべきでないのか、といってやったとあるのを読んだ記憶がある。いつになっても脱皮できない北大ということになろうか・木呂子註）

○　今や世界はいたるところ、強迫威圧を受けて憂憤する者が沢山あるが、しかも一剣を提げて彼らのために救援の事業を企つべき時代は既に過ぎ去った。これから後は、正しくかつ深い学問により、完全な人道の法則を以て、知識、腕力のみを誇りとするものを説得せねばならぬ。それが日本のような特殊な境遇にある国家の、予定せられた任務である。これに向っての“我々の新しい練習”として、このアイヌ問題の如きは、まことに適切な眼前の好機会である。すなわち啓明会の本日の催しに対し、衷心より感謝の意を表するものである。

以上が柳田の講演の概要であります。読者はここに至って、先に掲げた柳田批判なるものが、いかに見当外れなものであるか、また柳田の梅原に対する回答は、以上の記述のなかに全て尽されているものと理解するのであります。また、私の手許にある牧田茂、橋川文三、岩本由輝、後藤総一郎、谷川健一などによる幾多の柳田の評伝があるが、ひとりとして、柳田国男とアイヌ問題をとりあげているものがいないこともまた、不思議とするものであります。

この点の掘り起しを期待してやまない。

さらにこの機会に、東京のド真中でアイヌ研究講演会の主催団体となった啓明会について書いておきます。講演集の付録として財団法人啓明会の寄附行為がついています。設立は大正七年八月八日。第一条には「伯爵牧野伸顕、男爵平山成信、赤星鉄馬の寄附にかかる金一〇〇万円を以て財団法人を設立す」とある。

第三条の目的

一、特殊の研究、調査、著作を助成し、及び発見発明を奨励すること。

二、必要により本会自ら専門家を依嘱して前項の事業をなすこと。

顧問、伯爵牧野伸顕、理事長、男爵平山成信、評議員には新渡戸稲造、子爵大河内正敏、元文部大臣・成城学園の創立者である沢柳政太郎の名があがっています。私はこのなかで赤星鉄馬の名に注目するのです。赤星は鹿児島出身の実業家である。柳田が宮内省書記官時代の同僚で、西園寺公望の嗣子西園寺八郎の友人であった。

柳田が大正二年民俗学の専門雑誌『郷土研究』を創刊する。かたわら一般の出版刊行になじまない民俗学関係の単行本を、甲寅叢書として刊行する。これを支援してくれたのが西園寺八郎と赤星鉄馬で、二人で三〇〇〇円を出資してくれた。不足分は柳田が苦面することで発足したもので、第一冊は金田一京助の『北蝦

夷古謡遺篇』であった。

そして大正七年の啓明会に対する赤星の出捐も、柳田が蔭で働いていると私は見るのである。

啓明会の性格からいって東都の上層階級、知識階級の賛同があったと思うのです。この会場となった日本工業倶楽部は、幸い今度の戦災でも焼け残ったが、東京丸の内、丸ビルの北側にあり。内部はキンキラキンの華麗な建物であります。

こうした晴れがましい建物で、天井からつり下る輝かしいシャンデリアの下で、満堂の紳士淑女たちを前に、高い壇上から語りかけようとする伏根翁の真摯な姿を、私は思い浮べるのです。伏根翁にとって、生涯忘れることのできない出来事であったにちがいないと思うのであります。

アイヌ生活の変遷伏根弘三君

○　私は北海道の伏根弘三といい本年五十三才である。柳田先生に会ったところ、皆さんに会わしてやろうということでここに来た。

私は今まで北海道アイヌの伝承を話の中心にして、これにつけ加えて自分の目的とすることを話してきた。ところが今日は勝手がちがって、柳田先生はアイヌの救済策の話はしなくてよろしい。ただ困ったことがあったら困ったままの実情を話をしろとのこと。今までのような無鉄砲なことを云うてはならぬ、というものですから、私は話すことがなくなり、まことに困ったことになった。

○　自分たちアイヌは特別扱いにされて、これまでの旧土人保護法によってしばられ、実は困っている。何故困るかというと、今やアイヌも進んできて、保護されていることが却って不便になってきたということである。

一万五〇〇〇人のアイヌを三つぐらいにわけて考えてみる。

第一、山の民

昔は山の中に自分たちの暮しやすいところ、魚の沢山とれそうなところ、熊の沢山とれそうなところに行って小屋を建て、そこで暮した。法律とか制度で安心するのではなく、伝承された生活のきまりがあって、それで暮して満足してきていた。

熊を捕る方法を考える。アイヌ語でシユルクというトリカブトの毒がある。これを矢の根に塗って熊を捕る。どこのトリカブトでもよさそうであるが違う。効かない毒ブシがある。口に含んで舌の先で試してみる。それで三十分後に熊は死ぬという感じがおこってくる。またこれでは一時間たっても熊は死なぬという感じがおこる。こうやって強い毒ブシのあるところを選んでおく。熊を捕るだけではない、アイヌはひとつの安心すべき実感というか実験というか、そういう素晴しい能力をもっている。二十里も三十里も離れた山の中の一軒家にいて、今日は近くの処に熊が現れるということが判る。千里眼というか、頭の中のテレパシーが働くのである。いや今日（きょう）ではない、一晩おいて明日はここに現れるということまで判る。アイヌの言葉でホイボリエキシユという能力である。今日はお天気だが明日は大雨だとか、雲を見て明日の出水は川巾いっぱいで渡れなくなる。それにはどうしておけばよいかということが判る。（文明人は図鑑を見ないと毒茸の区別がつかない。大脳を発達させて間脳を退化させてしまったからである・木呂子註）

第二、海の民

船で沖に出て魚なり昆布をとる。この雲が出るとどこにどういう風が出て波がどうなるということが判る。

釧路で十万円、二十万円の漁場をこしらえシャモが漁をやる。一場所に二十五人から四十人といった人夫を傭う。ところが船頭はアイヌでないと困る。生きるか死ぬかの責任はアイヌに負わされ、シャモはアイヌの命令によって働いている。

○　明治憲法が出来て、アイヌも日本人ということになった。教育の方もお世話になって、小学校卒は全部、中学校、実業学校卒は三〇〇〇名、高等師範学校、専門学校卒が二〇〇名から三〇〇名くらいいる。財産といっても十万円以上もっているものは二十パーセントぐらいいる。一部はまことに残念だがズッと低い。その日暮しで困難している。

○　アイヌが病気した時にと日高に病院が二ヵ所できた。その病院の利用を調べて見たところ、配置された医者はどういう訳かアイヌの人達のくるのを何となく嫌がっている。こんどはアイヌも自分でいけなくしてしまった。そして内地人ばかりを治療している。

○　バチェラー博士は親切にも北海道中のアイヌの子供から選んで、アイヌ教化団から費用を出して、中等学校以上に進学させてくれている。日高、胆振はバチェラー博士が足繁げく回られているが、道東にはなかなか手がまわらず、遅れている。それで私は、バチェラー博士に自分の息子をあずかって頂くことをきめていた。

ところがその息子が急に死んでしまった。子供が死んで二ヵ月ぐらいたってから、妹娘を連れて教会にいくと、途端に妹が泣き出した。どうしたのだというと、ここで兄さんがお友達にいじめられて、は

じめは勝ったり負けたりしていたけれど、ついにこちらは一人だから負けてしまって、蹴られたり打たれたりした。兄さんが、「本当は誰かがカバンを持っててくれれば僕は負けるのではなかった。お前は女だからこんな時に何もならないなあ、しかしお父さんに云ってはダメだぞ。お母さんに云ってもダメだぞ。私はどんなにいじめられても、一生懸命勉強して偉い人になって、暴力をもって仇をうつのではなく、文明の人になって仇をとる決心だから、お前はお父さんお母さんにいってはならぬ。」と云ったと、妹娘が泣きながら私に云うのであった。

それから子供のいじめられた場所に立つと、実に胸苦しい思いがしたのであった。

○　アイヌが酒のために身を滅ぼすこと（略）

○　自分の恥はかくすのが当り前だが、いいようにとりつくろってもうまくないので、敢てありのままに申上げた。長い時間、皆さんの静聴を感謝する。

伏根翁の話のあとをうけて、最後に壇上の人となったのはジョン・バチェラー博士でした。「アイヌ語の本質」という講演ですが、アイヌ語についてはここで省略し、「啓明会で支援を頂いている『辞典』は、関東震災で紙型（再版のために必要な版型）を失なったので、新しく印刷するため準備を進めている。よく学問のできるアイヌの人と内地人もいて校正を進めており、『T』まで出来たが、英・アイヌの部一八〇頁を加え、その本は一〇〇〇頁以上になるだろうと思っている。啓明会の助力について大変光栄に思っていること。

二年前に皇太子殿下にお目にかかりお励ましのお言葉を頂き、この感激を具体化するために、アイヌ教化団を実行に移した。宿舎を私の家のそばに建て中等学校に通わせる。今やっています。先程の話のように、最初に伏根さんの息子を入れて、中学校すんだらお医者さんにしようと思っていた。それがあいにく突然死

んでしまいました。残念なことでした。

また十勝から教師になりたいというのがありましたが、適当でないのでやめました。今、六人いますが、そのうちの一人はぜんぶ優等生で通し、目下中学三年生ですが、大変立派な青年です。機会さえ与えれば、アイヌの少年たちも立派にやりとげることが出来る。目下十万円の基金をつくって、財団法人として持続性のある仕事にしたいと思っています。」これが話の要旨であります。

今から六十数年前に、啓明会主催の下に東都のド真中で「国内の異民族問題の解決」が先で、人種差別をよその国に向っていう資格はないと、有識有産階層の人に向って堂々と訴える機会をつくったのが、他ならぬ柳田国男でありました。柳田の問題提起は梅原のいわんとするところを、ことごとく尽していると思うのです。

さて冒頭の朝日新聞の屋上における柳田と伏根翁と、更に一人の少年との写真については、昭和三年とありますが、私はどうもこれは啓明会講演のあった大正十五年四月のことと考証するのであります。

私は伏根翁の家族のことをつかみたく、双葉幼椎園長の臼田女史にすすめられて、昭和六十年十月五日、帯広墓地の伏根家墓を調べに参りました。聖公会の信徒を中心にした一画のなかに、伏根家の墓碑がありました。墓碑には伏根翁を除いて次の方々の没年月日、没年令がしるされておりました。

伏根直三郎　大正十一年七月十日　十六才
勝美　大正十五年六月八日　一才
ユキ　昭和五年五月三日　五十三才

要作　昭和三年一月四日　十九才　帯広小学校和人と共学
シン　昭和四年一月（年齢欠刻）十七才（大正二年生）姉妹女学校卒

これにより直三郎は明治四十年生、勝美は大正十五年生、ユキは弘三の妻で明治十一年生、要作は明治四十三年生ということになります。朝日屋上を昭和三年とすれば、男の直三郎、要作は既に死没していることになります。これを大正十五年とすれば要作十七才で、写真の子供とそう矛盾しない。医師として将来を托したのは直三郎で、日躍学校のいじめの事実を父に伝えたのは、おそらくシンという妹でなかったかと思います。直三郎の不幸な事故のあと、本名氏の浄財で、従来東一条南八丁目にあった聖公会の敷地にあり独立した日曜学校とは別に、石狩通りに会館がたてられ、コタンの子の日曜学校がそちらに移されました。私がパテーベビーの映画をもって出かけたのがその会館であります。

伏根翁は、墓碑に見られるように、家族のことごとくを失ない、生涯を同族のため奮闘活躍したが、孤独失意のうちに倒れ、一時美幌で休養していたこともありますが、昭和十三年二月一日午后十時、帯広市大通五丁目一番地、十勝病院の西北角の十六号室で、小片丹蔵院長に看とられ乍ら、昇天されたのであります。時に六十五才でした。最後に立会われた当時の看護婦の角田節子さんからお話をうかがいました。

そして伏根翁は、自ら建てたお墓に名を刻することなく、今日に至っています。はからずも伏根翁逝いて五十年の年にあたります。心から鎮魂哀悼の意を表するものであります。

不思議なこともあるものです。違星北斗のことで、今年になっておつきあいができた小樽市立文学館の木ノ内洋二さんに、小樽にも柳田の手紙が三通ありますよとお教え頂き、早速コピーを頂きました。それは、戦後岩崎美術社から『アイヌの民俗』を出した早川昇先生あてのものでした。驚きました。

八月十八日厚岸発信、網走に二日、阿寒に滞在。八月二十三日旭川発信、川上、根室に出かけたとあり、九月五日東京砧よりの礼状です。

この新しい手がかりで、柳田の足跡をまた辿ることになる訳です。「続・柳田国男、北海道の旅を追って」をまとめることを楽しみ乍ら、今回はこれで筆をおきます。

追記

明治二十七年の帯広市街地貸下の時、最初大通五丁目一、三番地を假引渡を受けたトレツとは武田源五郎のことで、明治以降下帯広村を中心とした一帯のアイヌ総代人モザルク（モチャロク）の実弟で、二代目総代人となった人でした。このトレツからホテネが三代目、最後の総代人として引き継がれているようでありますので、この大通五丁目に伏根宅があったのも、また旭明社財産となったのも、そういう経過に由来するものと思います。これはおそらく旭明社の事績を調べると、もう少し委細が判ることと考えています。

昭和六十三年　地域研究所年報第十一号　旭川大学地域研究所

カール・ベック邸について

十勝沖地震は、確か昭和二十七年三月四日と記憶しております。私は、家族と共に上士幌に住んでおりまして、地震の朝、汽車で帯広へ出かけました。木野の駅まで来まして、ブレーキをかけ停車している汽車がレール上を前後に揺れ出しました。その時、目の前の木野駅の西側にあったブドウ糖工場のレンガ積みの煙突が、バタッーと沈み込んでいくように崩れていくのを目撃しました。ちょうどビルの取り壊しに、ダイナマイトを仕掛けておこなうあの姿と同じものでした。私としては、かつて体験したことのない地震でした。

当時、私は、ベックさんが自力で、若い大工を一人雇ってではありましたが、ほとんど自力で建てた彼のブロック住宅が最大の興味の対象でありましたので、帯広駅に着くとさっそく駅前の身内のところから自転車を借り、ベックさんの家がどうなっているか見に出かけました。

アメリカ人の実学的なプラグマティズム

そうとう綿密にぐるりを見て回ったのですが、壁にクラックひとつ全く入っていない。また、当時としては住宅に使われない特注の大判ガラス、五ミリ厚（調査の結果三ミリ厚）のしかもペアにした窓ですが、それらのガラスが一枚も割れていない。改めて、アメリカ人の力というか実学的なプラグマティズムに感心さ

南から見たカール・ベック邸。窓を大きくとってある

せられた訳です。

昭和二十五年には建っていた

いつ建てたのか正確な記憶がないのですが、私がベックさんの家に興味をもって通いつめていたのが昭和二十六年ですから二十五年には建っていたということになるはずです。

メノナイトと東北海道

カール・ベック＊さんという方はメノナイト教会＊再洗礼派の宣教師です。メノナイトは、ヨーロッパでカトリックに迫害され、プロテスタントに弾圧されたという苦難の歴史をもった異色のキリスト教です。スイスで始まりました。クエーカー教会と同じように兵役拒否、あくまで戦争反対のキリスト教です。戦後、進駐軍と一緒に日本に布教活動に入るのですが、特徴的なことは東北海道にしか入っていないことです。最初が釧路教会、二番目が帯広、三

番目が中標津、それから大樹、本別の順です。
それで、私はベックさんの家に出会い、このアメリカ人のノウハウを我々のものにしたい、そのためには懐にとび込んでという訳で、上士幌に土地を一反歩買い、教会に寄付して上士幌教会をつくってもらった。おそらく、上士幌以後は教会はつくられていないはずで、あとは北海道大学の南側にあるクリスチャンセンターが活動の拠点となっているくらいのものです。

図面は頭の中に

私がベックさんの家に刺激を受けたのは、まずブロック建築である、地下室があるというところから始まった。現在教会は別棟で建っておりますが、始めは地下室が教会であり日曜学校の場であった。また、信者との懇親会などには上の住宅の居間を使っておりました。
それで訪れる度にいろいろと刺激が深まる訳ですが、夫人は羊、山羊、鶏を飼っており、自給的な生活をしていました。
ベックさんに図面を見せて欲しいというと、そんなものはないというんです。それで私が構造的な質問をすると、とても幼稚な絵を書いて説明してくれる。
ベックさんの頭の中でまとめた設計のポイントは、一フィート一尺という計算です。それで市内の製材屋からそれぞれの規格寸法のものを入れてくる。ただ床の構造材だけは、日本の規格ものがないのでインチで説明して作らせたものだと思います。

ひと冬で環境条件をつかむ

第一に感心させられたのは、ベックさんは初め、近所の丸子さんという方の御宅に下宿していた訳ですが、ひと冬で帯広の年間の気候、風土を言葉が不自由な中でつかまえてしまったことです。地耐力がすばらしくいいという場所もです。あそこは、緑が丘の扇状地の端になるんですが、あそこだけは、札内川と同じ全く酸化鉄を含んでいないきれいな砂利が五メートルくらいの層になっている。戦争中はあそこから骨材を採っていたくらいです。その砂利を掘った穴ボコに豚屋さんが入って、豚を飼っていた記憶を持っています。

豊かな太陽光線

それから、ベック夫人の「帯広は南の太陽光線が豊富です、これを利用しない手はありません。そのためには、窓を天井いっぱいまで上げます。そうすると、太陽の低い冬は部屋の奥まで光線が入って暖かく、夏は涼しいです。」また、「ドアは全部フラッシュにしました。日本の人はみんな桟をつくって毎日パタパタと埃落としをしています。この通りフラッシュにすれば埃はたまりません。だから、これだけ大きな家でも掃除が楽です。」という説明です。ただ住んでいるのではなく、どういう意味付け、記号の中で自分たちの生活を維持しているのかということを夫人までが的確に受け答えするというすごさです。

ワームエアー・ヒーター、燃料は亜炭

地下にワームエアー・ヒーター、集中暖房があり、亜炭を燃料にしておりました。ベックさんたちの祖先

は北ドイツかオランダだと思います。

私は昭和五十七年に、東ドイツのマグデブルグに半月ばかり農業の勉強で滞在したことがあるんですが、ポーランド、ドイツ、ベルギー、デンマークなどあの辺の暖房燃料は褐炭です。褐炭というのはアッシュ(炭ガラ)、煤煙がものすごく出ます。地下室があって集中暖房は亜炭あるいは褐炭をたくというスタイル。これはベックさんのところと全く同じでした。

食料貯蔵室、洗濯場も地下に

また、地下には食料貯蔵室があって、夫人が当時の専売局の塩の入っていた空きびんを使って、ありとあらゆるものをびん詰めの保存食にして、貯蔵室の棚にびっしりと並べていました。洗濯場も地下にありました。

ひと冬燃料費五分の一

そのころ帯広周辺では、国見山、札内と幕別の中間の幌内沢というところで亜炭を掘っていまして、ベックさんはその亜炭をたいていました。我々には亜炭などたく仕掛けがなかったものですからとても安く、ひと冬の燃料費が我々の五分の一くらいで済んでおり、これも非常に驚きました。

シベリアでペチカを研究

私は昭和二十二年の暮れにシベリアから帰ってきたんですが、二年のシベリア生活の中で彼等のペチカ、家屋の構造、開口部の大小など、北海道の住生活をどうするかという問題意識で研究した訳です。とくに当時、北海道ではペチカの気違いが三人おりまして、帰国後も集まってはいろいろとやっておりました。

また、私の師匠は暉峻義等という方で、日本労働科学研究所をつくった方です。おそらく世界でもフランスやソビエトにさきがけて、この労働科学の分野を取り上げた方です。その暉峻さんが、当時の満鉄に金を出させてロマノフカに開拓科学研究所をつくったんです。つまり満州開拓という問題で、現地に住んでいる人の衣食住に学ぶべきだということで、農業のやり方、住宅などを研究していた訳です。私にも手伝えという話が持ち込まれました。当時私は、学部で英国史を学んでおりまして、これをもう少しやりたいということで満州へは行かなかった。

それから二ヵ月後の昭和十六年八月に赤紙が来て召集され、函館からカラフトへ、カラフトからシベリア抑留＊ということになってしまった。

雑誌『生活』を編集

暉峻先生とは、私が札幌にいる時代に先生の『社会衛生学』という本を読み、日本にもこういう医者がいるのかということで上京してから、門を叩いたのが出会いです。そして、お茶の水の山の上ホテルで、衣食住をテーマにした家事科学の『生活』という雑誌を編集したのが昭和十三年。

そんな訳で、北方建築、北方の衣食住にからんでの住空間、生活動線、健康との関連などを課題として持

ってシベリアに渡っている訳です。

ペチカは蓄熱器

それで、シベリアから帰ってから、ペチカは暖房器ではなく蓄熱器だ、エネルギーを無駄にしないための装置というふうに整理した。北海道では一時満州式がはやり、帯広でもかなり見られたんですが、構造が複雑で、うまく扱えないということで結局定着しなかった。

エネルギー利用の教育がない

基本的に、我々日本人には燃焼原理とかエネルギー利用の教育が全く無いと私は思っている訳です。だから、家の回りに三方六の薪を積んで、ストーブを真っ赤にして暑いからといって窓を開ける。それが石炭のルンペンストーブになっても同じ事を繰り返す。そんなことで北海道の山を丸裸にしてしまった。

そういう目でベックさんの家、その生活の仕方を見た訳ですから非常に衝撃を受けた訳です。

東南にあったニワトリ小屋

自然浄化の水洗便所

ベックさんのところに、一部五十セントでアメリカ農務省が出している暖房、水洗便所など生活全般に渡る資料があり、当時、下水も入っていないのに水洗便所をつくっている。それを真似して、その後帯広に一軒内緒で水洗便所を作りました。その頃札幌では個人住宅で水洗便所のある家が一軒もありませんでした。みな汲取り便所でした。

ブロアーで空気を動かす

集中暖房は、ダクトで暖まった空気をブロアーで送りだすんですが、そのダクトも床下の貫材を活用してベニヤを張ってダクトにするといった具合。

居間にファイアープレスがあるんですが、これも裏側の台所のほうとつないで、暖まった空気を送り出す仕組みなんです。

あきれてしまった小屋裏の梁構造

話は初めに戻りますが、十勝沖地震の後、山崎という当時の柏葉高校の建築の先生を連れて初めて小屋裏を覗いてみたんです。そこではじめて判ったんですが、梁は貫板なんです。それに切り込みを入れ、八分くらいの厚さの梁を留仕口（木口の腹合わせ）で合掌組にしてあるだけ。束（つか）もなにもない。そのまま端から端へずっとおしきっている。で、揺れ止めといえば野地板を張付けているだけ。それですでに約四十

年もっている訳ですからおもしろいというか、呆れてしまうというか。

時間をかけてつくりあげる行動原理

それから、おもしろいと思ったのは屋根のことです。最初、柾ぶきにするんですが、柾屋さんが「三年もちます」といったというので三年もたす。どうも三年目で雨漏りがしたようですが、それでも四年目でトタンぶきにする。そして、三年たってトタンの表面が少しザラザラしてくる、つまり、ペンキののりが良くなってからようやくペンキを塗る。柾からペンキまで七年。こういう合理的に、しかも長い時間をかけて仕上げていくやり方、これは日本人にない行動原理なんですね。日本人はなんでもかんでも短い時間でパッと仕上げてハイどうぞお引っ越しです。

学生時代に二軒大工のアルバイト

ベックさんは、アメリカ、ルイジアナ州のゴッシェンというまちにあるメノナイト系大学の卒業生です。学生の時、二軒だけ教授の家を建てる時アルバイトで手伝ったというんです。だから図面を引くなんていう技術などもっていない。ただ、頭の中に経験としての図面がある訳です。また、とくに器用だという訳でもなく、あちこちに素人仕事の不細工なところがたくさんある。そんな人があれだけの家を建ててしまうんですからすごいというか驚きというか。

北海道のアッシュブロックの元祖

ブロックにしても、土谷清さん＊（土谷特殊農機会長）に幼稚な絵を書いて、ブロック製型器を作ってもらった。そして、自分の乗用車のルノーにトレーラーをつけて、当時のビート工場から石炭ガラを運んできてはセメントと混ぜ合わせて製型器に詰め、一個一個手でつくっていく。

野幌にミッション的な性格の農学校として機農学校（現酪農学園）というのがあって、その中に、学生を中心とした三愛塾というのがありました。ベックさんのブロック製型器がその三愛塾にいきまして、学校の畜舎などがアッシュブロック造りになっていった訳です。

それがちょうど私達が札幌でペチカなど、寒地住宅についてワイワイやっていたころでして、第二期田中道政の中で寒地住宅研究所がつくられ、ブロックの工業的生産へと発展し、例のブロック住宅、三角屋根の住宅となっていった。

だから私は、アッシュブロック及び北海道における寒地建築の問題の根っこは帯広である、西七条南十七丁目のベックさんの家であると理解している訳です。

ベックさんの家には、ベックさんの後、中国系の宣教師の方やら何代か住む人が変わり、せっかくベックさんが素木の木目を大事にしていたのにペンキを塗ってしまったりして、当初の良さが損なわれてきているのが残念です。

（この後、質問に答える形で）

舛岡　アッシュブロックが北海道建築の素材として採用されていった理由は、レンガのように自分で組む

ことができるからなのか、あるいは、断熱効果など耐寒性が高いということなのか、どちらでしょう。

木呂子　私は両方の理由からだと思いますね。

舛岡　外側からだけですけれど今の帯広の住宅を見まして、せっかくの寒地住宅の蓄積が生かされていないような気がするのですがどう思われますか。

木呂子　最近、鹿児島、金沢など全国各地を訪れましたが、とにかく、なんとかハウスという新聞広告の家ばかり。全国どこも同じ。どうにもなりません。

私は、札幌でも建築家仲間と家を建てたりしていますが、帯広の考え方、方式を持ち込んで失敗した経験もあり、帯広と札幌ですらその気候風土で家も違ってくるべき。そういうことをベックさんがきちんとやったということが偉いという訳です。

菊地　ベックさんは学生時代、過去に二軒たてる経験をしているということですが、やはり地下室もつくったんでしょうか。

木呂子　それは知りませんけれど、メノナイトということであれば、また、私の東ドイツの見聞から見て特別なことではなく、地下室は常識であったと思います。

菊地　給水はどうされていたんでしょうか。

木呂子　当時はまだ水道ではなく、モーターで汲み上げていました。

菊地　当然、電気は引かれていたんでしょうね。

木呂子　電気は引かれていました。ただその電気で、集中暖房のことですが、ブロアーを回して空気を動かしていたということですね。当時の私達には、ペチカということはあっても、空気を動かす思想まではなかった。確かにペチカは暖かく、私も札幌で冬でもランニングシャツ一枚で過ごしていたけれども、足元が寒い。

それから煙突の問題。太くて高くて断熱係数が高いこと。ベックさんのところは、集中暖房用と、マントルピース用と、換気用と三本を抱かせ合わせて、レンガでがっちりくるんである。

東ドイツの場合は、抱き合わせにしていないで家の両端にそれぞれ煙突があって、片方は冬期の集中暖房用、もう片方は冬先、春先などに居間、子供部屋など個別にちょっと暖めるために使うものでした。

また、東ドイツでは、軒下にドラム缶があって雨水をため、そこから塩ビ管で畑へ散水できるようになっていた。これなども日本人にない発想ですね。

清水町にコッホというドイツ人の一家がビートづくりの模範農家ということで入りまして、その娘さんと結婚した三沢正男さんという方が、音更町の現在のよつば乳業の西側に昭和八、九年頃に入って酪農をやりましたが、やはり同じような水利用をしていました。近くの沢からトイで台所へ水を引き、風呂にもその水がいくようにしてある。風呂の使用後の水で洗濯をし、さらにその石鹸の混じった洗濯水で牛の尻を洗うという流れにしてある。だから三沢さんの牛はいつもきれいでピカピカでした。

話はとんで暖房のことになりますが、我々日本人には火鉢、囲炉裏以来、採暖という考えはあっても暖房、つまり部屋を暖めるという思想がない。中国へいってみましても壁厚が五十センチもある。スウェーデンなど北欧も同じ。だから建物も頑丈だし何百年という使用に耐える。

舛岡　住宅金融公庫の返済が終らないうちにもう住宅がだめになってしまうというこの現状、そろそろ考え直さなければいけませんね。

昭和六十三年四月十五日　帯広市産業技術センターにて

東北工業大学工業意匠学科第三生産技術研究室帯広分室

森が土を作り水を作る

森林は土壌の生産力の結果であり、同時に土壌の形成者である。その森林によって水は確保され、土壌の侵食も免れる。都市を養っている農地の土壌もまた、もとはといえば森林の賜物である。

森林の荒廃を、単に木材資源の枯渇ととらえるなら誤りであり、また観光やレクリエーションの場の破壊と考えるのであれば、これまた片手落ちである。

川の自然を否定して成立した都市は、日本列島の最も奥深い、水源地帯の自然をも放棄するに至った。残された資源は、今も尚その守り手たちが懸命に守ってきた農地の土壌だけである。この最後の資源が失われた時、列島改造の巨大な事業もおのずから終止符をうつことになる。

富山和子著『水と緑と土』より

小学館から月刊『本の窓』という自社出版物のＰＲ誌が出ている。一冊が一〇〇円ということになっているが、心がけていれば書店の勘定場に平積みになっていて、サービスで貰えるものである。私はこの愛読者である。

毎号を特集を組んでいるのが特色で、昭和六十年の六月号は「水」であった。雑誌の冒頭が、富山和子＊と野坂昭如との対談で、テーマが「水・環境・文化」となっていた。

私は、富山和子の所論については早くから注目していて、特に中公新書の『水と緑と土』は、川・水・森・土・米を、環境ぜんたいの一貫としてとらえ、しかも非常に行き届いたおさえかた、説得力のある書物であることに深く感銘していた。おそらく環境論として、古典となるべき本であると私は考えている。

そんなことで、この人の帯広に来ての講演も二度ばかりあり、私は聴講を欠かしたことがない。

とはいっても、この人の所説でもはてなとひっかかり、物言いをつけたくなる記述にぶつかることがある。たとえばこうである。「ハダカ山はよくない。何でもよい、人工林で結構でないか、落葉松の単純林でよいではないか、とにかく樹木を植えていくことが大切だ」といった、乱暴ないいかたである。

こう簡単にいいきられてしまうと、待て、待てと異論をとなえたくなるのである。一つの例として、北海道の根釧パイロット・フォーレストのことである。この落葉松一辺倒の広大な人工林の成功が、厚岸湾ならびにこの近くの沿海に対し、魚付林として威力を発揮して、魚族が海に戻ってきたという話である。

もちろんこの大規模人工林の造成に大きな貢献を果たしたのは落葉松苗の機械移植の成功である。滝川のサークル鉄工所の少覚納氏の開発したものである。この移植機の成功が、落葉松で出来ることは、ビートのペーパーポットの移植も可能だろうということで、ビート苗の移植がはじまったのである。

私は、この富山女史の落葉松一辺倒をよしとする考え方が気にくわないのである。私は北海道の場合、本多静六博士の「赤松亡国論」にならって、早くから「落葉松亡国論」を唱えて、補助金があるからといって自然植生を皆伐し、わざわざ地ごしらえして落葉松におきかえてきたやり方、その考え方、特に森林組合のボス達とはずいぶん議論してきているからである。

いったい信州落葉松は、本来北海道の自然植生ではない。北海道の育苗技術の未熟のなせる業がわっと信州落葉松に飛びついただけのことである。その通直性が、足場丸太材や炭鉱の抗木材としての需要がまだ大

いにあったからなので、戦後までもちこたえられたのである。
わざわざ地ごしらえして、ムダな手間ヒマ、補助金という国民の税金まで使って苗を植えていく。鼠にすれば手近なところにおいしい格好な餌をおいてってくれたようなもの。ありがたくかじらせて貰う。そこで考えたのが毒餌をまく。人の手を使っては勿体ないと飛行機による空中散布である。鼠がいなくなれば青大将もいなくなる。自然循環が狂ってくるから、当然生態系に影響を与えていることは勿論である。
何しろ北海道の営林局というところはおかしなところで、下草刈や除草が面倒だといっては、平気でベトナム戦の枯葉作戦に使われたダイオキシンという猛毒剤をぶちまくことを考える。そりゃ大変だ、中止となると、こんどは水源地帯に放置してみたり、ドラム缶が腐食することは百も承知し乍ら、土中にそのまま埋めて胡麻化すという無神経ぶりで、世間を驚かしても、騒がせても平気である。こんな無神経な調子で、手っとり早いやりかたで、落葉松一辺倒をやられては、たまったものでないのである。
先日も旭川市神居の酪農家斉藤晶さんをお訪ねし、山地酪農の現地に就てご案内頂いたのである。（この人の自著『牛が拓く牧場ー斉藤式蹄耕法ー』は地湧社より今度刊行されている。）その時斉藤さんの農場のいちばんテッペンまで登りつめ、国有林を眼前にしてのお話を深く感銘したのである。私のいいたい同じ考えをいってくれたのである。
戦後営林局は、目の前の落葉広葉樹林（雑木林として金の儲からない林地として）をわざわざ皆伐して、落葉松苗を植えた。ところが野鼠にやられて綺麗サッパリ駄目になってしまった。それでどうしたかというと、こんどはトド松苗にきりかえた。トド松苗の育苗技術がようやく軌道にのるようになったからだ。もう最近では植林といえばトド松である。これはもう北海道の自然植生である。これも成功しそうに見えたが、たまたまこれもダメだった。結局、放りっぱなしにしておいたら、見られる通りのモトの落葉広葉樹林に戻ってしまった。それなら始めから手をつけないでよかったのでないかと笑って話をしてくれた。僅か四十年

の間の出来事である。

いや昭和四十年代の終りごろには、旭川営林署では広葉樹林の見直しがはじまり、広葉樹、広葉樹といい出している訳である。単にカネ、カネだけでは山林は守れないのである。その土地の風土と条件というものがある。ついこの間まで、この広葉樹林とみると不経済林といい続けてきたのが北海道の林学者であり、営林局である。そして森林組合である。

私にも貴重な経験がある。昭和五十年はじめに、現在私の住む音更町の山林を調べて歩いたことがある。私の入った山（といっても丘陵というのがあたる。純楢林といってよいぐらい楢の多い山であった。）は、昭和三十年代まで炭焼き中心の民有林である。久保栄＊の『火山灰地』に出てくる舞台の、炭焼山の山続きである。だから五十年代の五万分の一地図（国土地理院）には、ちゃんと木炭の搬出道路が未だに明瞭に描かれているのである。

この調査で驚いたことは、木炭の需要がなくなり、山林が放置されてまだ僅か二十年しかたっていないのに、地図にもある木炭出しをした当時の馬車のワダチの跡は、注意をすれば足でさぐるとまだはっきりしているのに、道はもう素直に歩けるしかけのものではない。道そのものが左右の林相とまったく変らない樹林のなかに包みこまれてしまっている。樹木も目通しが既に二十センチ以上にもなっている。もういつでも木炭にできる原木にまで成長しているのである。これらが、別に地ごしらえしたり、苗を植えて造林したものでは全くない。いずれも萌芽といって、切株から芽を出し、枝を伸ばし、それが成長したものである。私は感嘆のあまり、ずい分と歩きにくい林内を、林相と林床植生を観察し乍ら歩きまわり、林外に出ていくことに躊躇しながら感銘を深くしたものである。

ところがである。一歩林内から抜け出て、周囲の山を見渡すと、昭和五十年代といえばもう炭坑の坑木も、建築の足場丸太も需要がなくなったこの時点で、森林組合が何をやっているかといえば、ただ補助金がある

からといって、組合の維持存続のためといえば邪推になるが、わざわざ不経済林といって、折角同様の林相であったものを皆伐し、目前の丘でご丁寧にも落葉松苗の植林をやっているのである。だから目をむくのである。

いつか農林省の篠原孝さんの文を読んでいたら、アメリカの耕地における森林破壊を告発したはてに、いきなり十勝平野が出てきて、素晴しいゴバンの目のような耕地防風林を賞讃する話が出てきて驚いたことがある。篠原さんは農林省に採用になると直ちに、川西村清川の佐藤松太郎さんのところで酪農の実習をしている。だから防風林が落葉松であることは百も承知である。

私は昭和三十七年五月の大風害の時に、アメリカのサウスカロライナ州立大学の農学部長をこの佐藤農場に案内している。ところが、サウスカロライナの風害はこんなものではないといって、別に驚かないのである。まだ町村道路といえばほとんど鋪装がない砂利道時代のことで、道端の道路側溝はあちこちが完全に埋没していて、路面と畑が平坦になり、その物凄さを語っている。それが佐藤農場に着いてみると、どこ吹く風か、まったく風害というものがない。ない筈である。当時は草地酪農が中心で、今のグリーンファームのようにデントコーンの通年サイロなどやっていない。圃場に裸地がないからである。この時ぐらい堆厩肥のはいった畑の土壌が、団粒化の維持による風害の抑止力とか、草地酪農と風害の関係を、身体をもって勉強させて貰ったことはない。自動車で走りまわったおかげで、いろいろな条件を比較し

昭和37年5月十勝幕別町における風害状況。号線道路の側溝が完全に埋没していることが判る。土壌が団粒化していれば風速15メートルでも土壌は飛散しない

て考察ができたからである。

このように落葉松の耕地防風林は、既に十勝の風物詩にまでなってしまっているが、これが昭和四十年代に入って馬耕が十勝の圃場から完全に姿を消し、トラクターや自走式農機の大型化と共に、この防風林が邪魔だといって少しずつ姿を消していっている。明治大正にかけて、殖民地区画による解放の時代に先人は計画的に一〇〇間巾（一八〇メートル）の自然植生の耕地防風帯を、ずい分残しておいてくれた。それでさえ昭和初期の春耕期の異常乾燥による風害は、初期成育の遅れとその後に引続く低温と結びついて、連年の惨たんたる冷害凶作をもたらしていた。そこでいっぽうでは耕地防風林の設置、いっぽうでは混同農業による有機質の還元循環が、十勝農業の改善指標とされるようになった。ところが戦後も高度成長時代になると、芽室の国立農試畑作部長までが、もはや化学肥料と農薬と農業機械があれば、農業がやっていけると太鼓を叩いて歩く始末。生態系も物質循環もヘッたくれもない。農業も工業と同じ考えでやっていけるといい出す始末。（私はこの人は精神異常者でないかと思った。ところがそうではない、当時の土壌肥料学会の学者、研究者、農業技師主流がそういう考え方で学問、研究を進めていたことが判り、ガク然とさせられたのである。）

今また森林組合が中心になって落葉松の耕地防風林の復元を、補助金が出るからと呼びかけているが、太鼓の響きだけよいがどうも反応はないようである。近頃はまたいちだんと、声が蚊の泣声のように小さくなってきたようである。私は若い人たちに耕地防風林をやるなら白樺を一次的に、二次的にドングリ作戦で楢でいったらどうかといっている。これなら耕地酸性化はしない。要するに成長の早い白樺と、成長のおそい楢との組みあわせた混合林ではどうだといっているのである。場所によってはヤチダモ、ヤチハンノキでもよい。どうも日本流のバッカリ単純林は考え直せないものかと呼びかけている。ドイツで出会ったアウトバーンの林帯の、複合複層性に目を見はるものがあったことが、今も印象深く残っている。酸性雨が降るよう

な事態にでもなれば、一番先にモノの美事にやられるのは針葉樹林であることは、スイス・ドイツ・スエーデンで答を出してくれている。中国の工業化・近代化が進めば、黄砂と一緒に日本列島を襲ってくるのは酸性雨であることを、毎日のＮＨＫの気象解説を注意深く見ていれば、すぐ気がつくことである。

斉藤さんの山地酪農の現地説明を受けて、つくづく感じたことである。

さてここで、さっきの富山・野坂の対談の記事に戻る。

富山はいきなり、台湾で開かれたという「水のシンポジウム」の話からはじめる。その際、台湾のある教授がこんな話をきり出したというのである。

「日本では毎日、好きな時に生水が飲める。これは大変なことなのだ。世界中でこんな国はどれだけあるだろうか。日本は、大変恵まれた国である。」と。事実、台湾のホテルで出る水は、いったん沸かした水を冷やしたものだという。国民が一生涯、沸かした水しか飲めない。このために必要な燃料のことを考えただけでも、これは大変なことである。こうなると水は国力といってよいものである。雨が多いとか、ダムを作るだけのことではない、要するに水源から家庭の蛇口までの、あらゆる要素の整合があってこそ、はじめて生水が毎日飲めることになる。だから、その国の水のありようは、まさに国力である。「いい言葉だと思った」とある。

この場合私にひきつけていうと、同じ思いを痛感したことがある。私の異国体験は、敗戦で樺太からソ連に抑留されたことにはじまる。ウラジオストクに上陸以来、いちばん先に禁じられたことは、生水の飲用である。森林伐採の仕事をさせられたのがいちばん長い労働である。冬・春・夏と、おかげでほとんど一年の移りゆく森林の状況を、ボルガの支流カマ川のボロショイ・ボール（大森林）という、死の伐採隊の中に紛れこんで、ツアーリ以来の人工林、ボルガの河畔自然林を、一丁のタポール（鉞）を片手に、つぶさに体験

できたことである。（少年時代からニペソツ岳はじめ東大雪の登山体験と、森林労働に接していたことが、意外にもこういう限界状況のなかで役にたったことである。）こんな時生水が飲めない。どうしたかというと白樺の幹に傷をつけてゴムの樹液をとる要領で、下に水筒をおいておく。だいたい二時間で水筒一本とれる。これが甘い柿の味がする。それは伐採者にとって最高の醍醐味であった。春先は、科（しな）の木の芽を歩き乍らしごいて口に放りこむ。夏は草いちごがびっしり生える。素晴しいビタミンの補給であった。

こんなことで、ナホトカまで来て、いよいよ乗船という時のことである。見あげると引揚船の甲板にたち、我々に手をふる日本の船員に向って、何といって叫んだか。それは「日本の水は飲めるかッ」と叫んだことである。ながいながい理不尽な苦役労働の果に、今解放されようとした時、いちばん先に口から出た感動の言葉である。今さらのように、当時の光景を思い出すのである。

ヨーロッパのほとんどの地域が硬水だから、いったん沸かさないと飲めない。最近のヨーロッパのホテルで水が飲めるというのは、硬水を軟水にして供給しているからである。ところ変れば品変るというのがホントウで、ヨーロッパの人が、日本でいうアクのある植物、アクを抜いたり、ゆでたり、アクすくいをやる植物は絶対口にしないのも、どうも水質と関係があるのかもしれない。たとばゴボウなど、ソ連でもドイツでも畑の雑草である。ウドも同じである。ウドなど腰までのびていても葉までウドの風味を失っていないので腹もちがよいので大助かりであった。

話を戻して、富山が野坂に語りかけた話の続き。

「野坂さんは、さっき蛇口からお湯が出るようになってから、人々の水に対する意識が変ったといったが、私はもっと早く、つるべ井戸から蛇口に変ってからだと思っている。

農家をみてもそのことがいえる。いま農業用水までが蛇口になってきている。そうなると、水に最も敏感であった農民すら、水に対する意識が薄くなっていく。自分の家にひかれている水の水源がどこにあるのか

さえ無関心になる。
やっぱり肌で経験するということは大変大事なことだ。水との接触がきれることは大変なことだ。今は、都市では水を拒否することが都市だという都市作りに変ってしまってきている。
「私がよくいうのは、川の水がなくならないのはなぜかということである。国力とは軍事力とか経済力とかだけと思っているが、われわれが今、水にいかに恵まれているかも国力だと理解すべきだ。
水が豊かなのは当り前ではないのだ。自然とは、人間が手を加えないことがよいとする考えかたが根強い。水は天からの貰いものだという発想が、自然保護論者にもあるが、それは間違いである。雨が多いから私たちは水を享受できるのじゃなくて、太古の昔から水を先祖たちは、汗の労働で作ってきたからなのだ。
日本のような急峻な国土では、雨は一日で海に捨てられて、川はカラカラに渇いても不思議でない。山が石の山だったならば。そうならないのは石の上に土があるからだ。（富山はここでもそうだが、石の上の堆積土壌は森林がつくってきたものだと主張する。）その森林は昔から、同じようにああゆうふうになったのかといったら、違う。ちょっと調べれば判る話だが、先祖たちが営々として伐ったり、植えたりして、守ってきたからだ」
「私はこう考えている。日本の歴史は上流から下流への文化移動の歴史であった。平野に文化が下りてきたのは、関東平野を見ればよく判る。まだ何百年もたっていない訳である。
文化の中心地が下へ降りてくる。それ以前は、縄文の大昔からやはり山にいた訳。長い年月のあいだ山の文化があった。その山の民の賑わいに支えられて、山は続いてきたのである。
いっぽう平野であるが、農民たちが下流に土地を開いて、上流の文化が下流の平野に降りてくる。その過程でも、水のためにまた山に木を植えている。」
私は、佐々木高明（ＮＨＫブックス『稲作以前』）もいっているように、この日本列島に縄文畑作農耕が

既に展開されていたればこそ、新入の弥生稲作農耕が急速に定着普及したという考え方は正しいと思っている。民俗的にも田の神を春には山から迎えて、秋の収穫が終ると田の神は山に還っていくという考え方が、里の村祭りに今日まで保持されてきたのも、富山の所説と重なるところがあると、私は考えている。

「昔は山の文化があり、上から下への文化の移動があった訳だが、それが江戸時代の新田開発で下に降り、さらに明治以降、東海道線をはじめ海岸に潜って、まず鉄道が発達してまた下へ降り、現代は全部引き下しちゃった。そこに、今の過密と過疎、都市の水不足、都市の危険地帯、汚染問題がある。いっぽう、山の守り手がいないから渇水になる。これからが心配な水の資源問題である。」

「現代の高度システム化社会の盲点は、ひとつ崩れると連鎖反応的に全部ダメになってしまうことである。例えば東京の下水道処理場で使う電力は、一発電所の発電量に匹敵する。もし国際情勢の変化で石油に何かあったら、東京は汚物・汚水のルツボになってしまう。

またいっぺん水道事故が起きたら、飲み水とトイレをどうするか。新宿の超高層ビルのあの都市群、あれが一日止ったらそれこそパニックと伝染病である。そうなると、都市が生き残るためには一日や二日のトイレの始末のできる水が必要だ。そのために木を植えようではなくて、自ずから植えざるを得ないし、農業も大事にせざるを得ないのだ。水田、あれは米の工場ではない、立派な貯水池の働きをしているのだ。私は、水に対応することを基本にして、まさかの時にギリギリ生きのびれる街作りをしていれば、環境問題はたいてい解決すると考えている。

川や池、井戸、あらゆる水資源の根本は、大地が雨を貯蔵した地下水にある。生命の源といってよい。その地下水を涵養するために使用した水を含めて、水を土に返す仕組を、真剣にとりくまなくてはいけない。」

以上が、富山のこの座談会における要旨であるが、話の中でひとつの事例を紹介している。それはこうである。

「農民たちが下流に土地を開いて、上流の文化が下流の平野に降りてくる。その過程で、水のためにまた山に木を植えている。

例えば（といって）熊本県の阿蘇山麓の七滝村（現・朝日村）。村の人たちが阿蘇山麓に土地を切り開こうと思ったけれども水がない。

それで半世紀にわたって、部落総出で上の方へむかって木を植えていく訳。そうすると、五十年もたつと木が育ってきて、涸（か）れ川に滔々（とうとう）と水が流れるようになり、はじめて土地を開くことができた。これはほんの一例だが、日本中到るところにこういう例がある。」と。

さてこれは事例としてであるが、こう簡単にいい切られると私はカチンとひっかかってしまったのである。

涸（かれ）川に水が流れた。それは部落総がかりで川の上流に向って木を植えたからだという。これだけでも大変なことである。私がバッカリ植林といっている単純林で土壌保水力は高まるものであろうか。その植生と林相を一〇〇年二〇〇年という歴史経過はあるにせよ、その営みと実態を見たい衝動にかられたのである。

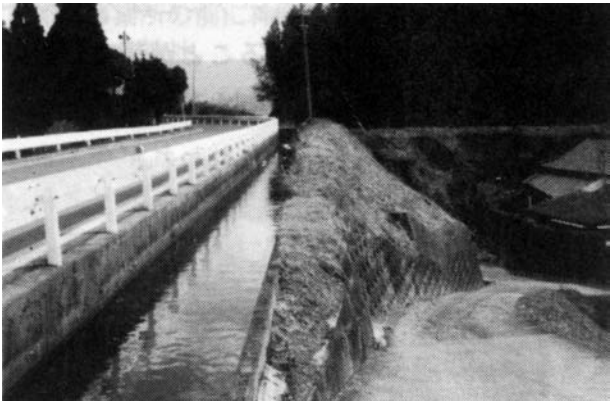
阿蘇は戦後も何回か訪れている。ある時は隈府（現・菊池市）に泊って、ここを拠点に菊池川の上流に向って集落を調べて歩いたことがある。日田の町から、あるいは竹田市の方から阿蘇の火口原を通りぬけて、熊本平野に下った体験も数回に及んでいる。

さてそういう阿蘇山麓の七滝村とはいったいどこだろうかと、古い地図、新しい地図をひっぱり出して調べてみる。七滝という地名は見つかったが、だいたい現・朝日村というのがない。七滝の地名からいうと上益域郡御船町のうちにある。昭文社刊の新しい地図には、御船川の中流部に滝の記号があって七滝と記され、川の上流部は矢部町のうちとなっている。また御船川の本流となる緑川は、矢部町内を流れ上流部は五滝川

というのがあって、いずれも阿蘇外輪山の最高峰、冠岳（一一五四メートル）の南斜面、大矢野原にその水源を発していることが判った。

『現代農業』という農業雑誌によく執筆されていて、『自然農薬で防ぐ病気と害虫』をはじめ幾つかの著書を農文協から出している精農家古賀綱行氏は、御船町から矢部町を通り抜けて、宮崎県ざかいに清和村といういかにも山村らしい山村に住んでいる方である。失礼な云いかたかもしれないが、よくもまあこんな山中に住んでいて、日本中に情報を発信つづけている古賀さんの素晴しさに驚いたのである。しかも畑を見せて下さいといったら、裏の山道を指して峠ひとつ向うで畑をつくられ、『現代農業』誌に執筆発表の原点があることに、さらに驚いたのである。実は「現・朝日村」とある朝日村こそ、この清和村の一部で、既に昭和三十一年の町村合併で地図の上から消えていたことを、この清和村に足を踏みいれて、古賀さんの口から聞いて、はじめて判ったのである。これにはもう一度驚いたのである。

こうして七滝村は現・御船町に昭和三十一年に合併された旧村と判断し、役場の農林課に事情を説明して、現地を教示して貰いたいとお願いしたが知らぬという話。その後さらに二十万分一図幅を求めて図上調査をしてみたが、どうも御船町の内と確信しかさねて照会したところ、そのことは教育長が知っているということになり、はじめて教育長の丹生静男氏と連絡がついたのである。そして資料としてお送り頂いたのが、昭和三十六年八月、熊本営



まんまんとして流れる水路が、道の左に、あるいは右にまとわりつくように流れるのを見ると、おやっと思わされる。尾根の上を流れる嘉永井手

林署がまとめた「吉無田国有林概要」というガリ刷の印刷物であった。

吉無田国有林の概要

一、吉無田国有林は、熊本市より東方約四十キロメートル、阿蘇外輪山南部斜面一帯の高原の中に黒々と裾をひいて、熊本の街からも遠望できる一大森林地帯である。その面積一七一ヘクタール

二、沿革　本団地は通称吉無田官山と称し、遠く細川藩の所領地にして、樹令一三〇年の旧藩政時代の造林樹木は、今なお鬱蒼と生い繁り、水源涵養保安林として明治四十四年指定されて以来、偉大な効用を発揮し、現在九一六ヘクタールが指定されている。今次の戦争をはじめ幾多の社会変動にも乱伐されることなく、現在では熊本営林局管内国有林中でも、数少ない藩政時代の人工造林地として、学術参考に貴重なる資料として昭和三十二年、一部を学術参考保護林に指定され、その面積三・四ヘクタールである。禁伐林である。位置は標高約八〇〇メートルである。旧藩植栽林の沿革については大要次の通り。

（イ）　旧藩時代

肥後藩主細川家の領地に属し、この管理保護は、郡方奉行、郡代、惣庄屋、山支配役をおき、御留山、御山、御薮等の区別を設けて、藩費を以て植栽したり、あるいはまた地元住民に植栽させる等により、保護管理一切の事務が処理された。公益、災害等による建築用材は無償で下げ渡し、良材は藩用として、立木のまま保存、乱伐を禁じた。なお、製炭を行う者は毎年、炭窯ごとに一様に木炭の現物納付を賦課した。

盗伐は厳重に取締り、これを犯したる者は体刑等に処し、軽微の者はその程度により、数年間補植させるなどの措置が行われた。当吉無田国有林は、天保七年、今を去る約一三〇年前、時の木倉郷総庄屋光永平蔵が飲料水、灌漑用水の年々減少するのを憂い、藩の許可を得て、木倉郷民（現在の御船町）に

呼びかけ、水源一帯二二〇ヘクタールに対し、水源並びに地元基本財産造成のため、部分林二公一民として、植栽したものである。植栽方法は、ほとんど直挿（ひのき・さわらは補植）で、地元民の奉仕により行い、部落ごとに割当をし、朝暗いうちより上山し、その割当本数を挿し終えると帰宅させたという。

その手入れ等も、木倉郷民の奉仕により行われたが、管理は総庄屋があたり、山口役をおき、その保護の任務にあたらしめた。

（ロ）明治時代

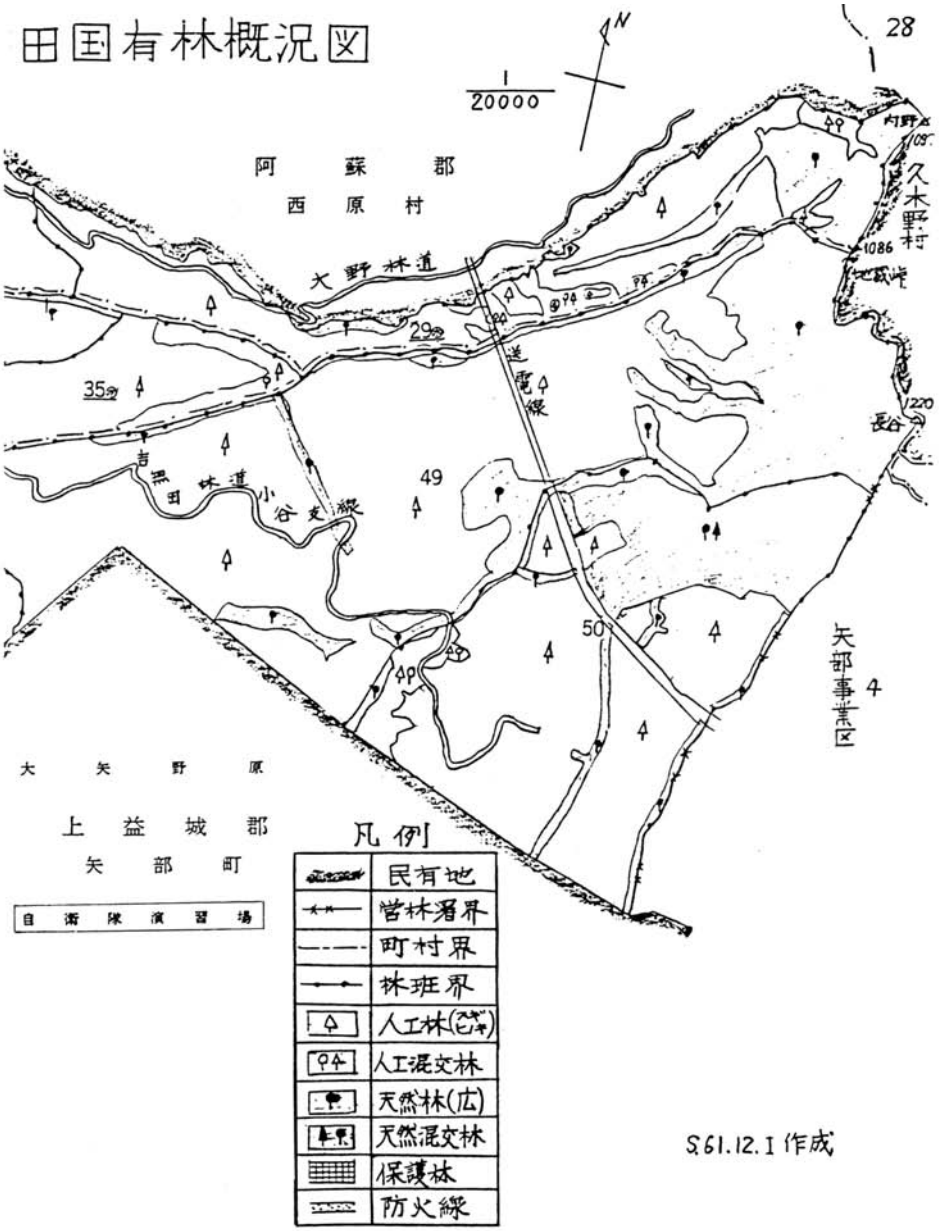
元禄の昔から既に300年にわたり子々孫々に伝えられて、山里を潤して流れる元禄井手

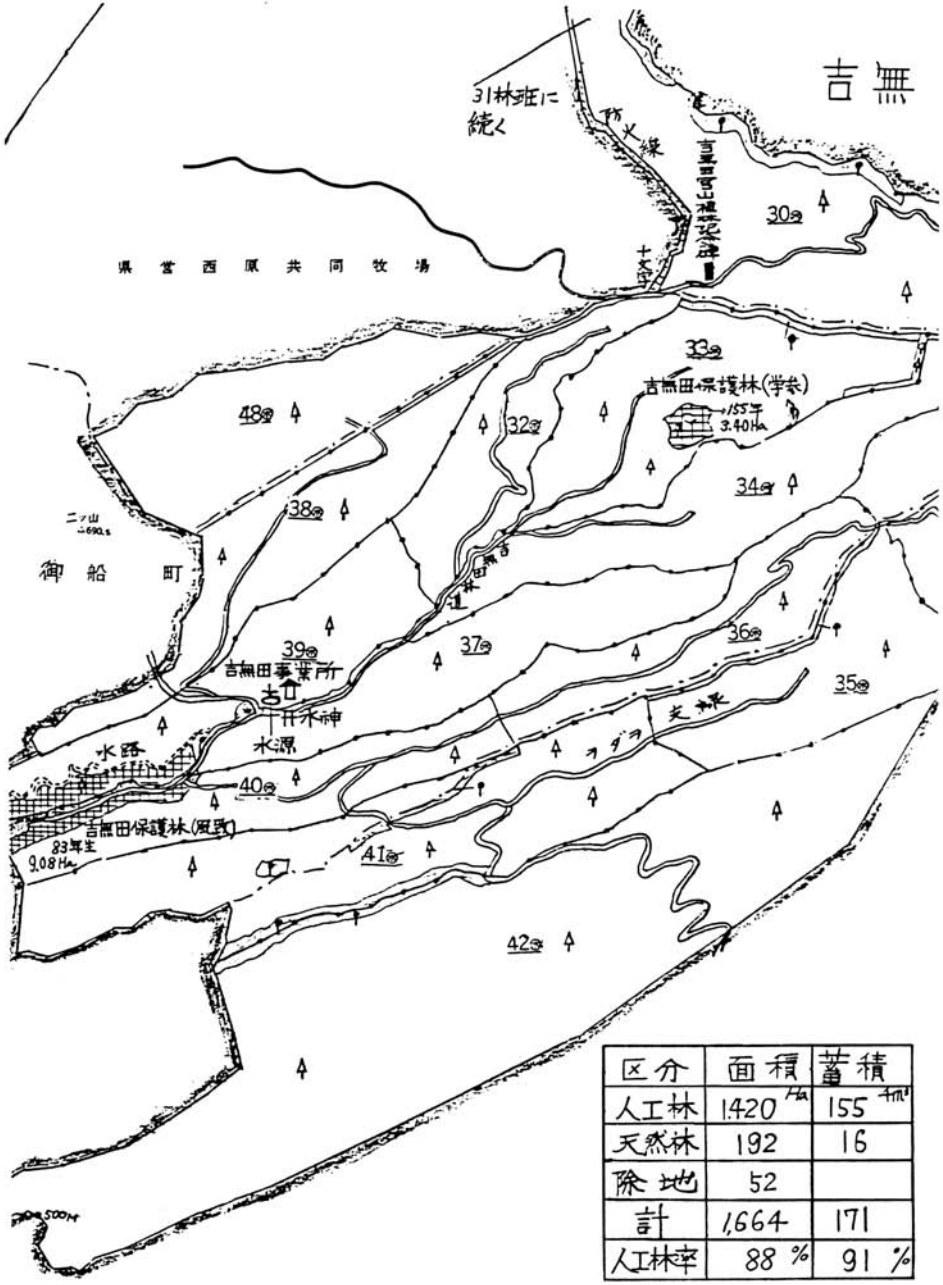
明治四年廃藩置県後、内務省の所管の下に熊本県山林課が管理、その後商務省所管にかわり明治二十一年熊本大林区署設置と共に御船小林区署の下におかれた。その後いくたびかの組織変更があって、大正十四年熊本営林署に改編され、その所轄となって今日に至っている。

（八）現代

吉無田国有林の中には、既述のように藩政時代からの七滝外四ヵ町村による約一七〇ヘクタ

吉無田国有林概況図


田国有林概況図
1/20000
N
28
阿蘇郡
西原村
大野林道
久木野村
1086
29
35
送電線
吉無田林道
小谷支線
49
50
220
長谷
矢部事業区
4
大矢野原
上益城郡
矢部町
自衛隊演習場
凡例
民有地
営林署界
町村界
林班界
人工林(スギ・ヒノキ)
人工混交林
天然林(広)
天然混交林
保護林
防火線
S.61.12.1 作成



区分	面積	蓄積
人工林	1420 Ha	155 千m³
天然林	192	16
除地	52	
計	1,664	171
人工林率	88 %	91 %

元禄嘉永井手位置図

吉無田官山植林記念碑
吉無田製品事業所
水源
吉無田国有林
元禄井手
(清水井手)
(上井手)
嘉永井手(下井手)
自衛隊演習場
西原公共育成牧場
29
30
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
48
49
50

元禄壽永井手位置図
五万分之一
南田代治水補修
北永平減殺堰
七滝担当区事務所

ールの共同部分林（分収林）があったが、大正八年その解除が許されて、同年より伐採されることになったのが、当国有林の主伐の始まりである。

木材は搬出困難なため、ほとんど民営により樽丸に割られて、製樽用として吉無田官山樽丸と銘打って採材された。肥後の樽丸材、また造船用の竜骨材、肋材として好評で、当営林署収入の最たるものであった。

三、吉無田国有林と地元施設

吉無田国有林は、御船町一帯の水源として、その重要性は極めて大きく、遠く元禄、嘉永の昔より、御船町大字御船、七滝、木倉、滝水の四地域にわたる灌漑水路、元禄井手・嘉永井手、の二大工事が行われ、延々八十キロメートルの流れは、八三六ヘクタールの田畑を潤し、一三九〇戸の飲料水となり、その機能を発揮し今日に至っている。

吉無田事業所の前に神寂びて奉斎されている水神社

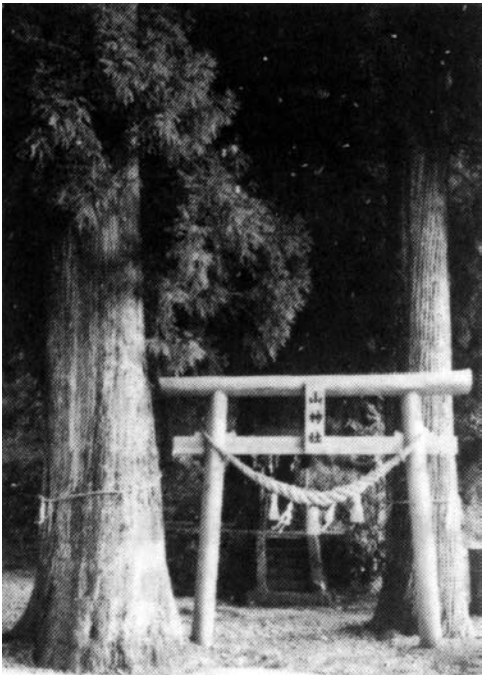
以上の資料を手がかりとして、とにかく現地に足を踏みいれて、森林の中に立ってみたいというのが、私の切実な思いであった。先述の清和村から南に下れば宮崎県の椎葉村、御船から真南に砥用町を通りぬければ五木村、何れも山村として九州における焼畑農業の長い伝統をもつ村々である。焼畑の調査は石川県、岐阜県にとどめて少し掘下げて調べてきたが、あるいは九州の焼畑を考える手がかりくらい、つかめるかもしれない。そんな淡い期待もないではなかった。

昭和六十年十二月十日の午後であった。私は熊本駅前からタクシーを拾って御船町役場に走らせる。運転手に吉無田官山を知っているかと訊ねたが知らぬという。役場について直ちに教育長さんにお目にかかる。五万分の一の青図を下さって、庁外にたって「あれが冠岳。とにかくあの山を目じるしにして、道を選んでいけば現地にいける。」というお話。地図と方向の概念をつかんで、タクシーを走らせる。

平野部の木倉を過ぎると、道は急に軍見坂という坂道をどんどん上る。わかりやすくいうと、馬の尻をのぼりつめると、馬の背、稜線部に出る。左右はなだらかな谷であるという地形。地図は青図だから一色のためあまり立体感がつかめなかったが、進行方向に対し、左は矢形川（館川）右は御船川。吉無田は御船川の枝流で八勢川の水源にあたることが判った。道はこの稜線部をあるいは左に、あるいは右にと、あたかも鞍の上の人のごとく、カーブを画いて走っている。

気がついて見ると、道の左側に、ある時は右側にと、相当の水量をもつ水路が併行して走るのが判った。驚いたのである。われわれの常識では、川というものは谷底を流れるものと思いこんでいる。あらためてこうした稜線部に豊かな水路が、まとわりつくように流れるのを見ていると、強い強い意外感にとらわれるのが当然である。

上野という集落を過ぎる。鼎春園という木立につつまれた小公園があり、宮部鼎蔵兄弟



吉無田事業所の山神社

の顕彰碑がある。宮部鼎蔵といえば肥後勤王党の総帥。吉田松陰の九州遊学にはじまり、その東北旅行は松陰をして、敢て脱藩してまで行を共にした親友として、私の理解のなかにある人。文久三年の八月政変で七卿と共に長州に逃れ、後元治元年池田屋騒動で新撰組の襲撃を受けて、自刃し果てた人である。松陰より十才年長であった。これも意外や意外という感じにうたれる。こういう山中から鼎蔵のような偉材が生れたのかと、杉木立の中の道を縫うように走る車のなかで考えたことである。

津ケ峰というところから、矢形川を渡って右岸の谷道を選ぶ。道は鋪装されて走り易い。この道は御船町営施設の吉無田高原の「緑の村」に通ずる道で、広い草原でキャンプ場があり、運転手は熊本から子供を連れて遊びにきたことがあると、急に思い出したような話。吉無田高原に出てから右へと八勢川の谷の方に下りる。やがて渓流が見えてきて、そこに熊本営林署の吉無田事業所の看板のある建物があった。ここで車を下りる。タクシーは帰りまで待ってくれるという有難い話。早速事務所にとびこみ、若い職員の方々に、しかじかかくかくと事情を説明し、水源涵養のため藩政時代に植えたという山がある筈だが、そこまで辿りついて、とにかく現場を見ること、そこの写真をとりたい。あくまで研究調査のために、わざわざ北海道から出てきたので、その場所を教えて頂きたい、と伝える。ところがきょとんとした調子で、さてそんな山があったかなといった調子。こちらは、ここまで来てこのままでは帰れない心情でハタと困って、腰を下ろしてしまった。

しかし不思議なことがあるもので、そこへ年輩の人が川伝いに下りてきて、私の話を聞いてくれた。「ああ、それは学術参考林のことだ。三十三林班のことだ。いきますか。直登するので相当きついですよ。」という話。それで早速小さい車をひっぱり出してきて乗れるところまで行きましょうと乗せてくれる。ゴロタ道をいけるとこまでいって、歩き出す。二キロメートルの道のりだが、道には倒木があり、これをまたぎまたぎの直登は相当のエネルギーがいる。私は七十二才の肺活量を全開して、離れないようについて歩いた。

ついに樹齢百数十年という学術参考林を見あげる位置に辿りつくことが出来た。そこには看板がたち、禁伐林であること、植物保護に協力を求める旨のことが書かれている。あたりを見まわしてみる。森林とは面白いものだ。植生環境ができてくると、林床を見ると、空間があればちゃんと照葉樹林に遷移していける小さい植生が、鮮やかに目につくことに驚いた。

一年中で一番日が短かい冬至が二週間後に迫っているので、午後の日脚は短い。とにかく写真をとっていく。これから先の林内を歩きまわることは無理と判断して、もときた道を引返す。さきほどの事務所の前が水源地である。そこには水神社と山神社がお祭りされている。運転手がいうには、熊本はどこの田舎にいっても、水神社が祭られているという。こうして山神と水神は一対のものとして、昔から人々の心の奥深く、伝統として受けつがれてきているのだ。この水を「酌む」ということがなくなって、蛇口をひねれば水が出てくる「近代」に変ってくると、人の心は水源から遠のいていく。営林署の役人であり乍ら目前に山神・水神を祭っている意味も判らないことになってくる。まさに富山和子のいう通りだと思うのである。

学術参考林目ざして直登する。
倒木を踏みこえて、若い人の前方を歩む

熊本旧藩時代のこと、細川家には太宰春台＊という有名な大儒がいた。彼は著書の中に次のように語る。

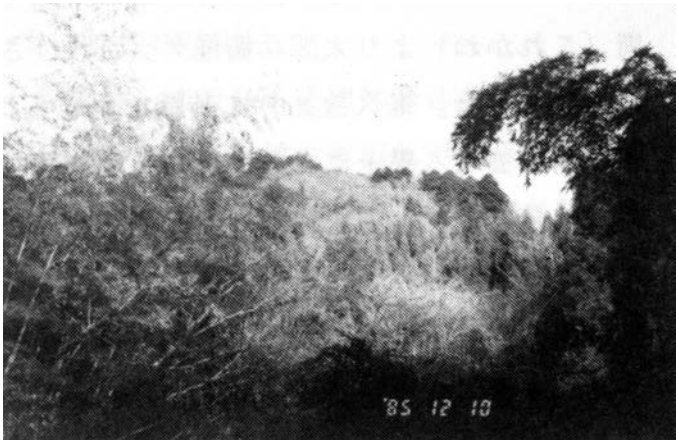
ついに吉無田官山、学術参考林の指定看板の前に立ち、カメラを百数十年の木に向ける。足許に照葉樹、落葉樹が既に侵入している。ここで海抜800メートルである

「山ニ木アレバ必ズ水アリ。又、山ニ水アレバ山下（さんか）ニ水沢（すいたく）アリテ、ソノトコロノ田地（でんち）ヲ養フ。山ニ木ナケレバ必ズ水ナシ。水、木ニテ生ジ、木ハ水ヲ得テ生スルモノナル故ニ、既ニ生ジテハ、又、木ノ中ニ水ヲ含ム、母ノ気ヲ具フルナリ。故ニ山ノ木ヲ伐尽セバ、山ノ水木尽キテ、山下ノ川沢（せんたく）、必ズ枯ルルナリ。川沢枯ルレバ田ヲ作ルヘキヨウナシ。地力ヲ尽ストイウコトヲ悪ク心得テ、山林ヲ伐リ尽サハ大ナル害ヲ招クベシ」

このような藩儒の思想が、直ちに藩政の指針となった訳ではなかろうが、しかし藩学のなかに深く、強くその影響をもったことはまちがいないと考えるのである。

火山に由来する生成土壌が主体で、茅原や草原の多い地帯で、渇水に苦しんだ地帯でも、たとえそれが単純林でも、伐期が八十年、一〇〇年となると、特に林床が植生環境を豊かにしていることが、こんど吉無田官林の現場を見て、私なりに理解したのである。林床の植生環境がととのってくると、空間さえあれば照葉樹ほかその他の広葉樹がどんどん侵入してきている事実を観察することができた。そこで何時かＮＨＫテレビで見た「杉山崩壊」というテーマの中で、ある山持ち地主が自分の山について語っていたことを思い出したのである。

「森林づくりは長い年月のスパンで考えることが大事だ。杉山は五、六十年ではまだ小学生、八十年ぐらいでようやく成人といえる。一〇〇年生の杉林では、いろんな広葉樹や小動物も自然の姿のままで共生している。



33林班の学術参考林をやや距離をおいて望見する。落葉広葉樹も既に競いあうように生育す。杉の梢は円くなっている

人工林は周囲と調和がとれた育て方をすれば、決して自然は破壊しない。例えば適地適木で、土地に適した本数を植えるなどだ。私は広葉樹を残すようなやり方を心がけている。“非皆伐施業”、つまり択伐や間伐で収入をあげる経営を志している。

植林は昔の昔からあったことで、天然林が善で人工林が悪というのはおかしい。日本の杉、桧は世界に誇れる樹種だと思っている。」

以上が発言の趣旨であったが、この山持地主がしかも婦人であったことに、いっそう驚いたことであった。何しろ山の現場の一々を指さして、代々の山林経営を説明する、腰の据った物言いに圧倒されて聞いていたことを思い出したのである。北海道の落葉松人工林が三十年伐期で、三十年たったら金がもうかるぞ式の植林とは、山の性質がまったくちがうことが判る。たとえ五十年伐期にもっていって、落葉松の造林を、伐ったり植えたりで、杉山のように代々受けついでいく山の経営が成立するとは、全く考えられないことである。ま

してや従来の皆伐方式の落葉松では収奪林業だから、それこそ施肥造林など、とんでもない造林の考えかたが横行することになるのでないかと憂慮するのである。林業も施肥林業になったらもうおしまいである。

吉無田官山の現地踏査から帰宅してみると、かねて注文してあった大西伍一著『日本老農伝』の再訂版が届いていた。大西氏は昭和十三年から私が昭和十六年の応召するまで、神田駿河台の佐藤新興生活館＊で職場を共にした人である。戦後八十才になって、二十代に世に問うた『老農伝』の改定増補に努力し、八十八才で遂に完成したものである。戦時中、成城の柳田国男文庫の半分が大西宅に疎開したことなど、柳田とは特に親しい間柄であった。柳田の日本民俗学講座が丸ビルから私の働いていた生活館に会場を移したのも、大西氏との関係と考えている。

戦後、大西氏の仕事で、私が注目していたのは、ガリ版で『江渡狄嶺（えと・てきれい）＊著作集』の刊行を続けられていたことである。

吉無田官山植林記念碑の十文字（辻）から、学術参考林の33林班を望む。中央の盛り上がっている部分がそれである。前年は谷底から直登してこの林の下にたった。今度は峠の上から見下ろして全貌を写す

この八百数十頁に及ぶ大部の本の、巻末に付録として約三〇〇頁近い老農年表と老農地方別事蹟表というのがある。何気なく熊本県に及んで驚いたのである。まず冒頭に加藤清正である。こういうまとめ方が面白

い。第三番目に木倉太郎兵衛（上益城郡木倉郷・惣庄屋　寛永・天和）がある。水利土工に主力を注ぐ。今なお有名な清水（元禄）井手は、御船・木倉・七滝・滝尾の諸村にわたり、畑を水田に切替えた面積は百町歩に及ぶ。のち七滝村に「南田大邑水潴碑」が建つ。

第十一番目は光永直次（上益城郡辺田見村山支配役―文化・弘化―）である。同郡御船川の上流は草原で、水流少なきを憂え、郡宰小山門喜と謀り、遠く樹苗を他郷に求めて杉桧の植林をはかる。文化十二年より弘化四年に至り二四〇万本を植うる。その子直治、祖業をつぎ慶応三年まで引続き植林し、一大美林となる。惣庄屋光永平蔵、これにより一の水路を開き、五ヵ村に疎通し、一五〇町歩の良田を得た、とある。

この『老農伝』のおかげで、さらに吉無田の植林ならびに水利が掴めてきたので、小文にまとめて独言独語三十三号にのせ、富山和子女史にも送っておいた。いきなり御自分の名前が出ていることで早速読んで下さったらしい。果たせるかな現地調査もなしに文献で知り、ぱっとしゃべったことが、そのまま活字になる。それを一読した私が先に現地に入ってしまったことになる。そこで富山女史は熊本営林局の案内で現地に初めて入る。そのことを『旅』という雑誌の昭和六十一年七月号に「阿蘇の水を作る話」として執筆される。さらに同じ夏に、皇太子御夫妻（現・天皇）をお迎えして、相当大がかりな「緑のシンポジウム」が熊本市で開かれた。講師としての富山女史が、ここでも吉無田官山のことを講演する。話を聞いた「森とむらの会」会長高木文雄（現国鉄総裁・元大蔵次官）氏は、早速雨の中をついて吉無田の現地を視察されるといった風に、話が広がっていったようである。一枚の私に出したハガキ通信（独言独語）が、玉つき現象をおこしたことになる。

ここまでくると、熊本営林局でもあらためて、吉無田官山と利水開田の歩みに就いての資料をとりまとめられたようである。私自身も国土地理院の二万五〇〇〇分の一地図をとり寄せ、特に水利の細部をおさえてみたいと、読図の努力を重ねてみたが、どうも次から次へと疑問がわいてくるばかり。やはりもう一度現地

を歩いてみて、疑問をつぶしていきたいと判断した。それで富山女史に手紙を出し、熊本営林局に便利をはかって頂きたいとお願いした。さすがにお役所で、ずい分と巾広く資料を蒐集されてあり、現地調査には営林署長が自ら案内して下さるという便宜を得たことである。

何しろ北海道にいて地図と資料だけで、想像を逞しくしてまとめようとするのとは話がちがい、現地の道路、地形に詳しい方々の案内で、しかもタクシーとちがい公用車での案内だから、とりたいと思っていた現場、現場の写真をとらして頂いたことは非常にありがたかった。メーターを気にし乍らのタクシーで調べて歩くのとは大違いな訳である。

補完調査で得た資料を中心に話を進める。

一、熊本藩の手永制度と木倉太郎兵衛

寛永の年（一六三二）細川忠利が肥後の領主として入国すると、独自の治政として惣庄屋制度を編成した。これを手永（てなが）制度ともよび、手のとどく政治、地方行政に藩政の手を行きとどかせるという意味だそうである。肥後藩内の手永は、はじめ、六十一手永あったが、のちに、五十二手永となる。益城郡は十手永。現在の御船町のうち、御船・滝水・七滝・木倉・高木の各村は、木倉手永に属していた。木倉手永の惣庄屋であった木倉（吉田）太郎兵衛惟豪（これたか）は在職四十有余年のあいだ、民事に力を注いだ。その大なるものは水利土木事業であった。

承応年間……南田代井手（清水井手とも元禄井手ともいう。一六五二～一六五五）

古記録によれば「右者承応年中、大矢山（現吉無田高原を含めた大矢野原）之内志水（現在の吉無田事業所の水神社山神社のあるところ。今は清水と記す）ト申ス所ヨリ、南田代マデ五里（二十粁）程之水行

ニ岩ヲ切リ抜キ谷ヲ埋メ、拾数間ノ盛リ井手ヲ築キ上ゲ、出高ニ相成候」とある。この井手の築造により南田代村は田畝十九町七反余（一九・七ヘクタール）が開田され、八十七石余が増石となった。この他に、木倉氏在世中に御船町内に辺田見井手、横野井手を完成させた。（井手とは、灌漑溝、通水路のこと）

二、南田代邑水潴碑

御船町大字上野字染野に所在す。かつてこの附近は南田代邑といわれた。水潴を富山はミズマと振仮名す。

寛永の昔、木倉太郎兵衛……木倉手永のうち畠勝ちにして民の産業乏しき処、十一村あり。此事を憂いて晝夜となく、その手永を廻り、その水源を尋ね得て、山を崩し岩を穿ち、数ヵ所に堰を営み、その流れを掘り、そのたまり（潴）に従いて水を引くこと数里、さて畠を田となすこと百町に余りて、穀を得ること古に十倍せしが、今に至るまで其の沢に濕うこというばかりなし。中にも南田代邑の水潴は、大矢野山清水という所より溢れ出づ。その水源に十二ヵ所の堰を営み、二筋の井手を掘り、千間平を通し、それより合して一筋となり、上田代邑に至り、かくて山に従い谷を渡らせて南田代なかを経て、末は西上野邑に至れり。長さ凡そ五里に余れるところに岩を穿ち、大石を放して水を通し、水道を引き、岩絶えたる所は石を築きたて、その上に土を覆い、盛井手を営み、漏水を塗り塞ぎて、遂に水道の功を成就せり。惟豪（これかた）既に没し、其子惟周（これかね）より太郎兵衛惟久（これひさ）に至るまで、子孫三代継ぎて其の職をしり、曽祖の道業を治む。惟久故ありて其職を免ぜられたり。その後一五十余年の星霜を経たることなれば、千間平は壤なる墨土にていつとなく崩れ落ち、漏水も防ぎ難くなり、水潴年々に不足す。

民、是を憂い、力を尽して其の漏りをとどめんとすれども、其の力に及ばず、年々干ばつ打続きて邑は零落せり。松村氏、所の郡尹（ぐんおさ・郡宰）たりし時、今の総庄屋光永円右エ門惟影、南田代村庄屋

山田桂七としめし合せ、郡尹に願いて、井手筋を広め、底を深め、大石のある所は割除きて、堰を築き、漏水をとどめて、水に乏しからざらしめければ、民其の澤（恩沢・おんたく）を蒙ること莫大なり。初め太郎平衛、水利の基を開き、円右エ門は其の絶えたるを興して、民心を安んぜしむ。是を以て当郡尹中村氏、高瀬氏、碑を建てて、此の事を録して、先績を彰わし、永代不朽に伝えしむるものなり。

文化十一年甲戌夏四月

鹿子木　惟喜　謹識

三、吉無田官山植林記念碑　御船町大字田代字吉無田（十文字）に所在す。

千代かけて杉のむら立　むらむらに
立ちそしけれ　杉のむら立ち

此の官山なる杉むらは、過ぎし文化のはじめ、予（よ）の祖父小山門喜藤原公範、ここの郡代なりし時、光永円右エ門藤原惟景、光永直次惟房に命じて植生したるが、はや百とせ近き年月を経て、かくは繁茂したるなり。

此のたびこの里人のその所以よく後の世にもしらせ、守るへしとて、ひとことを乞わるるまにまに、否みがたくて、かく記したるなり。　小山　多乎理

明治十五年十月中浣（旬）

十文字（辻）から阿蘇外輪山の中での最高峰冠岳を望む。この写真を右にカメラを動かすと33林班が望める。地蔵峠を越せば南郷谷に下る。農民は冬には湯治のためこの峠への道を越えていった

四、嘉栄用水路之記・碑　御船町大字上野字古閑原に所在す

木倉郷郡見坂（今は軍見坂と記す）以東の地なる、概ね山岳丘陵のみにして、水田に乏し。初め元禄井手（清水井手）なる用水ありて、その灌漑に充つ。然れども嘉永の末年に至りて、遂年の新墾、僅か一用水路の、これを涵し得るところに非ず。故に年々、挿秧（田植）の候に至れば、水論蜂起、村治亦将に乱れんとす。茲に於て郷長（総庄屋）、郷士楠田順喜をして其の事を治めしむ。楠田氏、論の起るは用水の欠乏より生ずるを知り、本用水路、目論見（もくろみ）の事を建（議）す。光永氏大いに其の策を容（い）れ、之をその筋に乞いて、断然工を起す。工、嘉永六年に起り、安政五年に竣る。年を経る六年。水源は吉無田、小多羅、北川内の諸湲水に発し、水末、木倉村に至って竭（つ）く。其里程七里（二十八粁）、堕（トンネル）の数二十有三、其長きもの五百四十間に至る。其の他、堤を築き、山を穿つ等の工数個あり。爲に水田数百町を得て、飲用水を得る者三百戸、民、其の沢（恩沢）を被る、枚挙にいとまあらず。依って治水路の人民、其の事を無窮に伝えんと欲して、爰に此の碑を設く。

明治二十四年十二月

五、熊本県土地改良事業団体連合会が、昭和四十五年十二月刊行の、農学博士本田彰男著『肥後藩農業水利史』という本があって、その関係部分のコピーを入手することができた。

この本は、当面の元禄・嘉永井手についてもっとも時系列に体系的に整理されており、まこと水利史と称するに足る充実したものである。ここでは省略して、既述の資料にもれたものについて記す。

（一）嘉永井手の工事中、九十九折付近に於て四百八十間の水路トンネルを貫通したるも、本工事中の最大の難工事であった。

楠田順喜はこのため工区を幾つかに分ち同時に着工させて工期の短縮をはかった。このトンネルの入口

側上部に、次の文字が刻まれている。

此堀貫長　四百八十間
嘉永六年十一月発業　安政五年三月卒業
石工　久五郎　彫通ス
水源より井手末迄流凡七里余
磧口六ケ所井手筋堀貫数二十二ヵ所　（文中、堀貫とはトンネルのこと）

光永平蔵の懇請に応じ、遠く日向（宮崎県）から出張して、足掛六ヵ年の長きにわたり、石工の総棟梁として、生命がけの働きをした久五郎の心意気が、この簡単な文面によくあらわれている。

（二）工事の測量、設計、工事監督にあたった楠田順喜は、後に慶応元年、野尻手永の総庄屋に任じられた、郷士中の人材であった。順喜は、父祖の家訓を継ぎ、専ら武技を修めていたが、偶々大いに悟るところあって、「およそ人は武事のみあって、数字に暗くては、事物の理を究めることはできない」と発心し、講武のかたわら、当時オランダ人より直伝を受けた池辺啓太の門に入り、数学および測量術を学ぶこと四年にして、奥義の伝を受けた。

業を経た順喜は、総庄屋光永平蔵の嘉永井手築造にあたり、技術指導者として活躍した。当時使用した測量器具は、現在御船町在住の子孫が所蔵しているが、オランダ製のものという。

（三）元禄嘉永井手の利水面積は、慶応元年五十四町七反、明治二十六年百町歩に伸び、昭和三十六年農林省の調査では二百二十町歩に及んでいる。水田の開発は水源に近い部分から次第に下方に向って拡大していくので、平水を越えて、水の比較的多い年の量で引水可能の最大範囲まで拡大していく傾向を示すから

という。

（四）右の井手の維持管理は、現在七滝村外二ヵ村土地改良区（御船町）があたっているという。

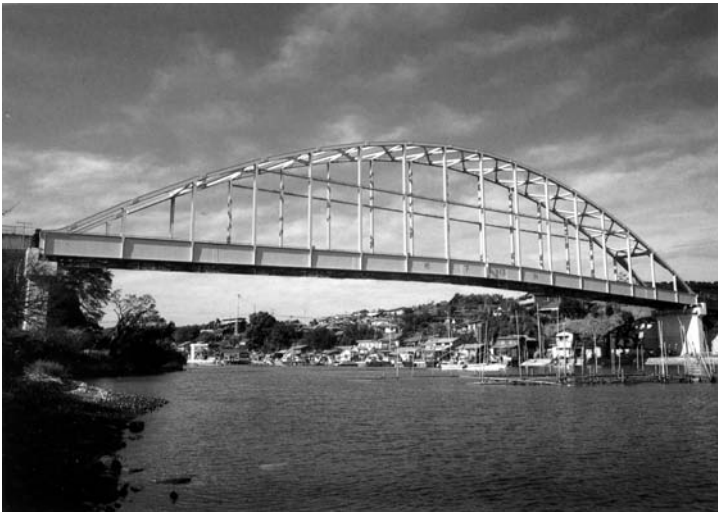
吉無田国有林内の水源は、特に水道用に二本以上採水されているのを見たが、水利権は営林署の管轄であると、現地の説明であった。

以上で補完資料を終るが、まだ私は御船町の土地改良区と、町の水道課にはお邪魔していない。こんどはあの馬の背部落に民宿して、藩政時代の恩恵を今も深くうけて暮らしている人たちが、将来に向ってどう考え乍ら暮しをたてているのだろうか、じっくり話を聞きたいものだと思っている。

〈付記〉酸性雨のことを書いておいたら、日本でも酸性雨が環境問題としてとりあげられていることが判った。植物の進化からいって、広葉樹が針葉樹より高等植物として進化したものというのが定説で、案外理解されていない。広葉樹をバカにするなといいたい。オンコの方が位が高いと思っている頭を切換えてほしい。土壌肥料学が自然としての森林土壌の原点を忘れていることが農業の崩壊を早めている。本稿に就いては丹生靜男、野口希彦、横谷優一の三氏、熊本営林局・署の御協力を頂いたことを、心から御礼申上げます。

平成元年　地域研究所年報第十二号　旭川大学地域研究所

もう一つの連絡橋



長島愛生園と対岸の本土虫明を結ぶ連絡橋

昨年のこと瀬戸内海に浮ぶ岡山県長島と本土の虫明との間に橋がかかったと、明るい話題としてテレビに報道されました。世間の関心は同じ岡山でもほとんど本四連絡橋の事でした。長島にある愛生園＊は、ハンセン氏病患者の隔離収容施設として、昭和五年に開設されました。この頃既にこの病気は遺伝ではないことは判明していましたが、適切な完治の方法が見つからない時代、初代の園長光田健輔先生たちの御苦労は大変なものでした。この病気に侵されると、今の言葉でいえば被差別の最たるものでした。それが戦後プロミンという新薬の開発により完治できるようになり、通院治療、社会復帰も可能になり、一日も早い本土との自由往来のできる架橋が望まれていたのでした。旧約聖書ヨブ記にもあるように、人類にとって長い間、業病として取扱われた宿命と悲傷の病からの解放のあかしとし

て、架橋が切望されてきたのです。

昭和七年一月、宇治山田での希望社学徒連盟の講習に参加し、その後、後藤静香先生にはじめてお目にかかるべく、岡山の長島に旅しました。その頃岡山の街を流れる旭川の、大きな橋のたもとから汽船が発着していました。午前八時頃乗った船はあちらの島、こちらの島と立ち寄り、長島に着いたのはお昼もすぎていました。愛生園の官舎で後藤先生、御令息の潔さんにお目にかかりました。今もその時の潔さんのサインが手許に残っています。

この時リュックの中から、角食の食パンを一本出して、「先生パンを召し上がって頂けますか」と、いとも気易く差し出したのです。これが先生へのお土産でした。今から考えると苦笑ものですが、希望社運動に夢中になって四年目、その尊敬する先生にやっとお目にかかれた喜びから、少しも恥ずかしいと思いませんでした。国民教本を使って毎月五の日に開いた夜学、佐藤武夫の４Ｈクラブを青年と共に実践、増田、横内両氏が丁抹（デンマーク）から帰国しての丁抹農業の研究。『希望』に先生が書かれたことはほとんど実行しました。我ながらよくやったものと今も思っています。

今年になって長島を訪ねてみたくなりました。岡山に泊りバスで西大寺を経て虫明へ。港に船がいました。この三月で渡船は役目を終えて廃止とのこと。港の内側も外側もカキの養殖場。懐かしい官舎のあったあたりは駐車場に変り、長島は既にクルマ社会に変貌していました。島の景観も変り、苦心して貞明皇后様の御歌の碑のあるところを探して、山の小高い所まで登りました。

つれづれの友となりても
慰めよ
行くことかたきわれに
かわりて

書は入江侍従のものでした。
帰途はタクシーをよんで貰って、『もう一つの連絡橋』を渡り岡山まで出ました。

平成元年　『希望だより』第十八号

仮説「北海道芸術工科大学」学長の誕生

総ての「造形」は「生活」から出発する。
高遠な理想から卑近な日常の起居に至るまで、
戦う民族の活動から、憩ひ睡る個人の動作に至るまで、
力強い生活の営みがあってこそ
初めて造形の華は開く。
斯くして生活は「汎美計画」の基礎である。

小池新二著『汎美計画』序文より

小池新二＊先生との出会いは昭和十三年（一九三八年）、私が北海道庁を辞して上京、雑誌『生活』の編集者としてである。前年十二月に、先生の訳したドイツのエルナ・マイヤア＊の「新興家政（ダスノイエ・ハウスハルト）」を『新興家事学』の名で、佐藤新興生活館から発刊したばかりの時である。この時期、類書の全くない時代に、編集長の加藤善徳の決断で世に出たものである。

生活館とは、今は神田・駿河台の山の上ホテルになっているが、新生活運動推進のために、昭和十年個人寄附で財団として発足したものである。この建物の四、五階は生活訓練所といい、高良とみ＊を所長として、

古くからあるドイツの「ムッター・シューレ（主婦学校）＊」にならったものである。すぐ近くに西村伊作の文化学院があって、対照的な教育が行われていた。

私が今住む十勝音更町に三沢正男が牛飼いをしていた。この人の夫人が、大正十二年から八ヵ年、十勝清水町下佐幌でドイツから招かれ有畜混同農業の実技指導をしていたフリードリッヒ・コッホの娘である。このドイツ人主婦の家事のやり方を直に学び知っていただけに、私はマイヤアの本を一読して共感し、小池先生に私淑し、『生活』誌に原稿を頂くため、小金井のお宅によく通い親しくさせて頂いていたのである。

戦後、私が北海道教育委員長をしていた時代、まだ米軍の占領下の頃、お宅に久しぶりでお邪魔すると、驚いたことに居間を潰して図書室にされておられた。アメリカだけではない、ヨーロッパ各国の建築や家具、その他のデザイン雑誌を、床がぬけるのではないかと思われるぐらい集めておられていた。まだ一般が不自由な暮らしをしている時に、素晴しいカラフルな雑誌図書は驚きであった。

第一回の日本建築学会賞を受賞され、さっそくお祝いのご挨拶をさしあげたが、その後のこと、先生から北海道の旅をしたいから手配をしてほしいとの手紙で、私は早速、道の建築部長に話をつけて、道から車を提供してもらい、各支庁の協力を頂いて、道内を広くご案内をすることができた。帯広ではメノナイトの宣教師カール・ベックさんのハンドメイドのブロック建築による教会を見て頂いた。これが後の田中道政の寒地建築研究所のきっかけとなったのである。

私が、昭和三十五年から帯広市の経済部長をしていた時代、先生から国立九州芸術工科大学の学長として、暫く東京から離れることになったからとの楽しいお便りがあった。正直いって私はしまったと思った。私は丁度、五〇〇ヘクタールの内陸工業団地としては日本でいちばんスケールの大きい、グリーン・インダストリアル・パークの造成に着手し、悪戦苦闘の真最中であった。こういう大学こそ十勝平野にほしいと思っていたのだ。先生のところにもう少し足繁く通っていて、情報を早くにつかんでいれば、先生もろとも十勝に

拉致できたものにと思ったのである。今も惜しいことをしたと思っている。

1990年代〜2003年

水耕思想の土壌肥料学から地球に優しい土壌肥料学へ
ソ連抑留について語る
至誠至純の人倉田百三先生
地霊
賢治結縁
流転人生「私のなかの歴史」
いのちの大地に、いのちの食べものを
生命力溢れる大地を
忘れ得ぬ農人前橋真八郎翁
西帯広工業団地について
至軒寮の人々

水耕思想の土壌肥料学から
地球に優しい土壌肥料学へ

土壌の生産力こそ真の資源である―富山和子

農業は「フロー」ではなく、「ストック」である。農林業を出荷額でみれば、ＧＮＰの僅か三パーセントにすぎない。これはＧＮＰというものが、「フロー」の集積の上になりたつ数字だからである。

農業を「フロー」でとらえてはならぬ。「ストック」として大きい意味がある。つまり農業は、短期的なコストと利益の相関ではなく、国民的な財産である。

―小島慶三『文明としての農業』

スリランカ留学の途中で、たまたま日本に一時帰国していた当時の中村尚司（現・竜谷大学教授）から私が直に聞いた話だが、この人の著書『地域と共同体』（春秋社・一九八〇）のはしがきにくわしく出ている。

「アソーラという名の水草がある。湛水田や水路の表面で繁茂する浮き草である。スリランカでは、昔からアソーラが水稲と共存していた。アソーラが田圃をおおいつくしている風景は、稲作農村のどこへいっても至るところで見られる景観である。

イギリスの植民地支配のもとで近代農業が導入されるようになって、アソーラは農学者たちによって水稲に有害な雑草と判断されるようになった。さまざまな除草剤の適用が試みられたが、はかばかしい結果が得

られなかった。その生活力の強さが判ろうというものである。

近代農法の普及に力をいれている役人たちは、化学肥料を投入する前に、手どり除草を強制的に奨めてまわった。農業省の試験場では、化学肥料の使用効果をあげるため、アソーラの駆除絶滅法に就いて研究に力が入れられていた。

このアソーラには、空気中の窒素を固定化する能力があることが知られるようになったのは、ここ数年来のことである。

堪水田では、僅か三十日間にエーカー（〇・四ヘクタール）当たり二十六トンのアソーラが繁茂する。水分を除く乾物の四分の一強が蛋白質であり、これは一二六キログラムの尿素肥料に相当し、水稲に対する施肥標準をはるかに超える量である。

肥料の輸入価格が年々高くなるので、ほとんどの農家は施肥標準の半分しか化学肥料を使用しないのが実情である。

私の知っているガンヌルワ農場に就いて紹介する。三年前から水稲三毛作と、田んぼに共存するアソーラを肥料としてすきこみ、余ったアソーラは家畜や家禽のエサとして使っている。ここではニワトリの糞を乳牛のエサとし、牛糞を豚のエサとし、豚糞をアヒルと魚のエサとし、アヒルと魚の排泄物を含む池の水を田畑に灌漑しているのである。

エサとして消費つくされなかった畜糞は、農舎や圃場の廃棄物と共に二基のバイオガス装置に流しこまれる。

三十頭の牛と十二頭の豚の糞尿を主成分とする農場廃棄物から二十数立方メートルのメタンガスを発生させ、毎日七十人分の食事を調理するためのガス燃料に供せられ、さらに十二馬力の揚水ポンプを作動させ、圧縮ガスでトラクターや脱穀機を動かし、十キロワットの自家発電まで行っている。

バイオガス装置の副産物である完熟有機肥料は、水田のアソーラと共に十二エーカー（四・八ヘクタール）の農場の作物を育てるのに用いられている。

若干のカリ肥料とリン酸肥料を補完的に投入する以外は、化学肥料は一切不要であり、労働力も大幅に軽減されている。現在は七人でこの農場の全作業を完全に行っている。

スリランカでは、このような農業のやりかたを総合農法といって、アソーラやバイオガスの活用が各地で進められている。このようなリサイクル農法の確立に奮斗している青年たちが、今日、目ざしているのは、まちがっても先進工業国や、多国籍企業に従属することのない経済の自立であり、環境に大きな負担をかけない、環境に対してやさしい農業のくらしの道、権威や権力に屈しない道義あるくらしの道の確立を求めて活躍しているのである。」

この一文中にあるスリランカの水田雑草とされてきた浮き草アソーラのことから、ここで中村桂子のことに話題を移したい。中村桂子は周知のように、バイオテクノロジーに就いて日本の第一線にたつ研究者である。昨年から早稲田大学の新設講座の教授に転じている。

平成元年にはＮＨＫ市民大学講座で「生命科学と人間」を放送し、この春には、同じ題名の『生命科学と人間』という本をＮＨＫブックスから刊行している。東大理学部卒の理学博士である。

この人が帯広に来てバイオテクノロジーの講演会があった。当時は、三菱化成生命科学研究所の人間・自然研究部長の立場にあった時のことである。会場は満員であった。

筑波の科学万博がはじまったばかりの昭和六十年四月のことである。先端科学としての遺伝子操作その他のバイオテクノロジーがジャーナリズムによってもてはやされ、世間を賑やかにしていた時代である。

国際自由化の波に追いこまれて、窮地にたった農業問題や食糧問題が、バイオテクノロジーによって、そ

の障害をいっぺんに吹きとばし、忽ちにして新しい局面展開を見せてくれるかのような錯覚を与えかねない雰囲気に、あふりたてられていた時である。

「これまでの農業は、生物の能力の限界に見切りをつけ、もっぱら農薬や機械など、物理学や化学の研究に頼りきっていた。そこで生命科学の成果を土台にして、さらに生物の能力を引き出そうと、方向転換を進めようというのが、バイオテクノロジーといってよい。」という、バイテクの主題にそった講演を、私は素直に拝聴していた。

ところがである。最後の結びの話に至って、たちまち頭に来てしまったのである。話はこうである。

「こんどの科学万博の政府館に、目玉としてハイポニカという水耕法＊による、一本のトマトの株に一万三〇〇〇個のトマトをならせたのが出ている。これを見て、植物が土壌の制約から離れることより、その生命力の偉大さの発揮に驚異を覚えたのである。この実績は、別に遺伝子工学から出たものではない。水と酸素と無機肥料によって得られたものであるが、一本の植物のもつ生命力の素晴らしさに素直に驚いたのである。」

そして感動のあまりだろうが、「農業には最早土壌が不要であることが判った。土壌に一〇〇パーセントこだわらなくても農業がやっていけることが判った」と強言して話を結んだのである。

私は冗談じゃない。高等植物の栽培というなら判る。植物の水耕栽培というなら、もう五十年も前から技術化されていると、北大の石塚名誉教授でさえ主張する。ハイポニカの驚異は生物としての植物の生命力を満度にひき出した水耕技術にすぎない。その意味で素晴しいのである。しかも研究室の机の上でできる技術である。

農業という全人類の生命を支える幅の広い産業が、土壌なくして成立すると考えるのは、バカも休み休みにして貰いたいものである。早速、私は、私の通信『独言独語』（三十二号）に次のような小文を書いた。

「筑波の科学万博が終わって、会期中人目を驚かしたハイポニカ農法の巨木のトマトが、その装置のスイッチが切られ、これから枯死の道を辿る、という新聞記事を読んだ東海大学教授友永剛太郎は、あたかも植物人間となった患者の生命装置が切られる瞬間を思い浮かべて、やりきれない念いをしたというのである。

友永教授は、ハイポニカ農法をはじめとする、土壌から完全に足を洗ったと称する水耕法をはじめ、農業を工業化方向にひっぱっていこうとする思考法は、このトマトの場合もそうであるように、肝心の種子は水耕法で採取されたものではない。某種苗会社の沃かな苗圃の土壌で生産された優良種子であることを、人々は気づいているのであろうかと、問題をぶっつけているのである。

小山鉄夫（ニューヨーク市立大学教授・同植物園アジア部長）と共に、日本における資源植物学の非常な遅れを指摘し、学者たちの怠慢を警告し続けている友永は、『技術と経済　十二月号』に、『いったい土壌を離れて植物資源産業は存在するのか』と、専門バカ共の軽薄を叱りつけ、農業土壌の重要性を訴えているのである。」

以上の小文をしるした『独言独語』を中村桂子にも送りつけておいたが、私には直接の手ごたえはまったくなかった。

ハイポニカ・トマトに就いては、私は昭和五十八年の暮れに既に武田邦太郎＊の紹介で丹波篠山まで出かけ、創案者の野沢重雄に会い、午前中はその発想を、午後は施設の案内を受け勉強させて貰っている。社長室に入ってまず驚いたのは、科学技術庁長官中川一郎の名で表彰状が掲げられていたことである。

野沢は水耕法とは説明しない。水気耕法であるという。要するに調整された栄養水液を単に循環させるのではなく、コンプレッサーで空気即ち酸素と共に強制的な循環をやっているので、水気耕法と名づけたようである。循環水の流速を見ていると、相当のスピードでまわっていることがよく判る。栄養水液には、多量

要素ばかりでなく、微量要素も全部含めて、その理論にもとづいて一定のバランス（リービッヒのいう最小律）を以て調整されているのである。

野沢の立論の基礎は、土壌は植物の成長にとって邪魔モノである。だから邪魔モノは排除しなければならぬ。土壌は単に植物の直立を支持する素材にすぎない。だから土壌を小石におきかえ、注意してよく見ると、トマトの根回りに少しおいてあるにすぎない。

植物成長を有利にする要因だけで人工的に環境を整備し、阻害要因と考えられるものは片端から全部排除してしまおうという思想である。そういう私に対する説明である。

戦後アメリカ占領軍が、当時下肥で野菜を栽培することが当然とされていた時代に、日本人のたれたクソ小便をぶっかけて育てた野菜なんて、危なくてアメリカ兵に食わせる訳にはいかぬと、東京近郊で水耕野菜がはじまったのだが、これは彼らなりの論理での緊急避難措置に過ぎないのである。その証拠にアメリカ現地における野菜生産は、どこにいったって土地利用生産であることに変わりはないのである。農業という産業の王道は、土地利用であることを、あらためてここに強調しておきたいのである。

中村桂子の講演は帯広の経済センターホールで行われた。聴衆は市内の商工業者が多数であったと思うが、農業関係者も参会していた筈である。何しろ事大主義者の多いのが日本人である。「それみろ、お前は土だ、土だとバカみたいにわめいているが、日本の先端をゆく科学者は、ちゃんと土壌なんて無くても農業は立派にやっていけるといっているではないか。」これがオッカないのである。それかあらぬか、新しがりやの多い十勝の人間である。大企業が一斉に水耕栽培装置の売りこみに動き出し、結構各地の町村役場がひっかかり、なかには何千万円も金をかけて一、二年で退却したものもある。それよりも日本農業新聞によると、水耕栽培はまだまだソロバンにあわぬと、業界団体の研究結果の報告が出ていたことは皮肉である。エネルギ

ー多消費型産業であることの致命的欠陥に気づいていないのである。

私はその後つねに中村桂子の書いた記事、発言には注意して追いかけていた。昭和六十三年の月刊『本の窓』に「科学といのち」という題で連載を書いているのに気がついた。なかでも十一・十二月号に〝ペルー農業の挑戦〟という記事がある。一読して帯広講演での発想とは全く変化しているのである。それが平成元年のＮＨＫ市民大学講座、今年のＮＨＫブックス『生命科学と人間』では、その考えかたが明快に変化していると私は見たのである。それをしるす。

ＮＨＫブックスには、第九章に「植物・健康・環境の基本となる農業」とある。「生物と共に生きるために、人間中心主義からの脱却」とサブタイトルされている。これは帯広講演での土壌無用論からの完全転向である。土壌無用論の誤りを認めたことになる。しかし、「帯広講演は私の考えが間違いでありました」とはいわない。これが学者のいいくら加減さである。

「生命科学の出発には二つの大事な点があった。一つは現代科学技術への批判である。これ迄の技術を支えてきた考えは、あまりにも人間を特別視する人間中心主義であった。それを人間も同じ生物だという目で見ると、今日の技術にはおかしいところがいっぱいある。

第二に、技術は自然を征服するというか、克服するものであるという考え方のため、他の生物と共生するための技術という発想をもっていない。生物には制約がある。そこから脱出する願いの技術を求めてきた。だから早く、大きく、効率がよいことだけが進歩であると、そればかりを追求してきた。それはおかしいというのが生命科学の基本である。」

次に「生態系の中での農業」と「緑の革命の反省」と続く。

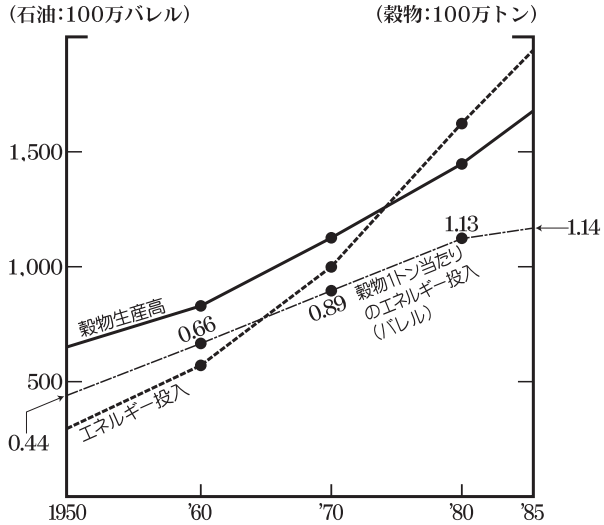
「従来の技術とこれからの技術という観点から農業の流れをみると、一九五〇年代に、まず先進国で近代

化が急速に進み、多収穫の品種を利用し、化学肥料や農薬の増投、機械化などで労働力は軽減し収穫は増加した。しかし肥料や農薬の不適切な投入で環境破壊、エネルギー多消費という問題が起きてきた。

図を見ればよく判るように、もはや世界の農業は、エネルギー投入のカーブが穀物生産の産出カーブをはるかに上まわるという事態になり、一トンあたりのエネルギー投入量も増大するばかりという現実である。

さらに一九六〇年代になると、アメリカが中心となって、アジアやラテンアメリカを中心に、先進国のやることは全て善である、近代化こそ善であるという単純な発想のもとに、〝緑の革命〟という技術思想が強制的に輸出された。ところがこの〝緑の革命〟が反省の局面に立たされ、方向転換をはじめている。

一例をあげるとフィリピンに国際イネ研究所がある。開発途上国の稲作近代化の重要な役割を果たすことを目的に発足した研究所である。ここは〝緑の革命〟の時に、近代化にふさわしいイネの新品種を開発した。新品種IR8は、非常に高収量を実現し、アジア諸国に灌漑施設をつくり、普及を進めた。さらに研究所は耐病性のもつIR36を開発、次にIR64を開発し、しかも味のよいものを開発した。これで大成功となればよかったのであるが、化学肥料を大量



穀物生産の増加はエネルギーの増加によって支えられてきたが、その増加率はエネルギーのほうが穀物生産を上まわるようになった。また穀物1トン当りのエネルギー消費量も増加の一途をたどっている。このような傾向がいつまで続けることができるであろうか　(『生命科学と人間』より再掲)

に投入することを必要とした。

さてそこで化学肥料の大量投入は、たちまちにして環境破壊につながり、エネルギー消費の増大をもたらす。一九八五年には世界の石油生産の十分の一が農業に使われるに至った。このため肥料を買える地主はよいが、中小農民には不向きである。このため諸国の農民に貧富の格差をもたらしたばかりか、土地を手離さねばならなくなった農民が都市に流出し、失業者のうごめく新しい都市問題を生ずるようになった。

またこの方法は、農業技術上の問題として品種の画一化均一化のため、いったんある特定の病害が発生すると、破滅的打撃を与えかねないことが判ってきた。」（アメリカはトウモロコシで既にこの大失敗を経験し非道いめにあっていることを忘れてはならぬ・木呂子註）

一九八〇年代に入り、これまでの問題点を反省し、新しい動きが出てきた。アメリカの国際農業研究コンサルティング・グループは次のように提言する。

「農民には農業の内部資源があるということである。内部資源とは土壌固有の肥沃性、降雨などの気候の型、害虫とその天敵との均衡関係など農業の自然基盤という資源である。これら内部資源のもつ潜在的生産力が、化学肥料や農薬などの過度の投入によって阻害されていることである。農業生産の場に外部からの投入を急激に、しかも過度に導入したことが、農業の本来もっている内部資源の抵抗力、活力、有用性のことごとくを不必要なまでに減少させてしまった。というより破滅と荒廃をもたらしたことである。これからは伝統や生態系など、これまで無視してきたものの中に、近代農法の欠落させてきたものを、謙虚に学ぶべきである。」

ここで中村桂子は、はじめて伝統農法の中にあった、アソーラのことを登場させるのである。このアソーラの研究を、国際イネ研究所でやっていたのが日本の渡辺巌＊である。このアソーラのことは冒頭の解説で明らかなので省略する。ただ渡辺巌提供のアソーラをすきこんだ田んぼと、すきこまない田んぼとの生育試

験の比較写真があるので注視して頂きたい。手前の方がアソーラをすきこんだもので、明らかに生育に違いがあることを示している。（註1）

さて渡辺巌には『地力の思想と水耕の思想―地力の問題をめぐって―』という非常に重要な論稿がある。当時、渡辺は岩手大学農学部教授である。後にフィリピンの国際イネ研究所で活躍していることを、こんど中村桂子の〝生命科学と人間〟で承知したのである。

昭和四十八年、東北農文協の第三回シンポジウムに於いて、渡辺教授の行った基調講演を、渡辺の執筆により『農村文化運動』の資料版として印刷配布されたものである。後にしるすように、地力否定の思想は、ながく北海道の土壌肥料学会を牛耳ってきた北大農芸化学の石塚喜明、田中明により押し進められてきたものと私は考えていたのだが、とんでもない。それが全国的な風潮として、学会を支配してきた考え方でもあったことをはじめて知り、ただただ唖然として驚くばかりであった。

「地力とは何か」という問に対する論争は、土壌肥料学者や技術者の間では絶えず行われていた。第二次大戦後では記録に残る論争だけでも三回はあった。

第一次は敗戦直後の肥料不足からようやく脱却し、塩入松三郎博士の土壌学理論を武器に、数多くの土壌肥料

空中窒素を固定する水生シダ類アソーラの水田に鋤込による水稲の生育状況。中央部より手前はアソーラを鋤込んだ緑肥によるもの。奥の方はアソーラを鋤込んでいない。写真は渡辺巌先生の提供によるもの。日本でも昔は田植の前にレンゲの花が田ンボを埋めていた。レンゲは荳科で空中窒素を固定してくれた

学的研究と実績が一斉に開花した時期である。

一九五四年（昭和二十九年）に日本農業研究所編で『地力増強に関する総合研究』という本が出版された。この論争の中に、次のような発言がされている。

「植物は水耕でできるし、時には土耕よりも生育がよい。いったい土をどう考えたらよいのか」という質問に対し、「土はむしろ養分の供給では悪い方に働くのじゃないのか」とか「農業では土を相手にするので仕方ないが、水耕培養の姿を理想とすべきではないのか」とか、「土壌なんか使わないで、水だけでつくれるようになるといいのだが」という意見が出されている。（まさに今日のハイポニカ農法の方向を予測しているようなものだが・木呂子註）

この時のシンポジウムには、土壌微生物学者とか土壌物理学者とかはひとりも参加していない。（土壌肥料学会には土壌微生物や土壌物理の部会がある筈なのに、さりとて正体不明の片輪な学会とも思われるのだ・木呂子註）

第二次は、このシンポジウムから丁度十年後、一九六四年に雑誌『農業技術』に「堆きゅう肥」の特集号が出された。

水田一点張りともいえた日本の土壌肥料学が、畑にも目をむけ始めた頃である。畑では特に堆きゅう肥の効果が大きいから、堆きゅう肥の効果を洗い直す必要が出てきた。水耕の思想にとりつかれた大部分の土壌肥料学者にとって、堆きゅう肥の効果が大きいことは驚異であった。そこで工業製品で堆きゅう肥に代わるものを開発しようと意欲を燃やすものも現れた。

この特集号で、はじめて土壌伝染病害と堆きゅう肥との関係が取り上げられ、ようやく土の生物的側面に目が向けられるようになったといえる。

第三次は一九七〇年代である。環境汚染、公害問題もふくめて土壌の環境浄化能力に注意が向けられるようになったのが特長である。

名古屋大学の熊田恭一＊は、一九七三年（昭和四十八年）に、従来の土壌肥料学者の大部分は〝水耕の思想〟に執着し、呪縛されていると真正面から批判した。

「土壌の生物的側面、微生物性にももっと注意をふりむける必要がある。特に化学肥料の大量使用、機械化も牽引式から専能化自走式に変わり、アメリカに追随して重装大型化の時代に突入したので、耕地土壌の地力に対する新しい発想が必要である。」と、強く主張したのである。（事実十勝畑作の場合明治以来の畜耕手刈の農業は昭和四十三年の時点で、豆作手刈を除いて完全に終止符をうち、馬は十勝農業の景観から姿を消した。トラクターもこの時点で六十馬力以上の段階に突入し、八十馬力、一〇〇馬力、踏圧破砕のため遂に一三〇馬力の段階に入るようになった。特に麦作の普及はアメリカの自走式コンバインの導入によって、耕作規模の大型化と共に、重装に対する抵抗感をなくし、農薬散布機も自走化し、三トン、四トンが十勝の畑作圃場を走りまわるようになった・木呂子註）

ちょうど二十年前に土壌と共にある農業生産に対し、土壌は作物生産のためには阻害要因ではないのかという疑問が出され、土壌肥料学者が全国から集まって論議するなかで、誰ひとりマトモに反論するものもなく、また反論できなかった事態に対して、ちょうど二十年かかって、ようやく批判があらわれたというのである。

しかし、それにしても学者とか研究者とかいうものはノンキなもので、二十年もかからなければ土壌の生物的側面に目が向けられなかったり、批判があらわれないというのだから恐れいるのである。さらにそれから二十年たち、四十年前とまったく変わりなく、現在も土壌の生物的側面を無視した立場にたち、学者たちは北海道の土壌肥料学会の主流として君臨しているのだから、さらにさらに恐れいるのである。

現在の農業高校で土壌肥料を担当する教師たちが、こういう学者たちによって洗脳されていることである。その証拠に先年来道内の農業学校で水耕栽培が行われ、バカバカしいことに、億単位の道税を投入して新聞には画期的な教育として宣伝されていることでも判る。これではいつまでたっても嫁のくる農業、孫子が飛

びつく農業が確立される訳がない。北海道の大地は荒廃していくばかりである。

ここで熊田恭一の著『土壌環境』（学会出版センター・一九八〇）からその所説を引用して、熊田の水耕批判を補記しておきたい。

「水耕の思想の発端は、リービッヒによって確立された植物の無機栄養説に求められよう。ただしこのことは、リービッヒがここにいう〝水耕の思想〟をいだいていたということでは勿論ないことを、つけ加えておきたい。

〝水耕の思想〟は、（北大農芸化学の名誉教授の）石塚喜明のいう『肥料依存型の多肥農業』の背景にある思想である。この農業では土壌改良によって地力の向上が図られる。これは石塚の表現では、化学肥料の投資効果を高めるためである。しかし、肥料依存型という用語自体が、土壌依存からの離脱を、そして地力に代わる化学肥料の優位性を誇示しているように思われる。

土壌依存型農業は化学肥料依存型農業に移り変わり、さらに農薬や石油に依存し、機械力を駆使する農業へと変化してきた。これが現代の工業化農業であり、むしろ人間依存型農業ともいえる。

（中略）

ここで〝水耕の思想〟と表現したのは、十九世紀後半にはじまり、わが国では明治以来発展してきた近代化思想、あるいは工業化社会の出現の一側面に他ならない。農業生産力の向上も工業化によって実現されたのである。

そして、工業がその生産力の発展にともなって、資源・環境に関する多くの問題を生み出したように、農業の直線的な、無反省な工業化が、今日の農業そのものにもマイナス面を大きく露呈するに至ったことである。地力低下といわれるものこそ、その一面である。」（ナンボ肥料を大量に投入しても、農薬の散布の回数を増やしても、

あるいは航空散布、大型散布機でまいても、その効果が少しも現れなくなってしまった。そのことがまた地球環境の破壊を増大させているといいたいのである・木呂子註）

ここでまた渡辺巌教授の論稿をさらに続ける。

「生物に対する技術は、工学技術のように簡単に〝代替〟という訳にはいかぬ。やはり生物や生物界の法則をふまえて、その生物としての機能、能力を補うようにはかるべきである。〝代替〟の思想から〝補完〟の思想へと、発想の転換をはかるべきであると考える。そのためには、性急な効果を求める能率主義、経済効率一辺倒を排していかねばならぬ。あざやかな効果に惑わされては生物側からのシッペ返しに気がつかず、後であわてることになる。

生物生産技術は、生物の法則性にのっとった自然利用が第一で、人工物はあくまで補完であると考えたい。工学技術をスゴロクの〝あがり〟とする人工礼讃の発想に、技術者はあまりにも毒されているのではあるまいか。学者や農業指導者もいつのまにか工業的・企業的発想のとりこになって装置化・人工化自体が進歩だと思いこんでしまっていることである。（私はこの思考法をニュートン的思考と名づけている・木呂子註）

生物生産は工場生産とはちがうということである。

生物は〝休養〟することで生産をあげることができる。土壌は作物を植えない間でも働いていて有機物を分解し、地力をつくりあげているのである。

工場の機械が休んでいて、機械の生産力があがるなどということはあり得ない。機械は人為的なエネルギー、情報の投入なしに何もできないシロモノである。

ところが、生物は人手を介することなく、〝自然に〟生産を行っていけるのである。機械のほうこそ〝生物技術〟を〝あがり〟とすべきで、生物の生産が機械的生産を真似るというのは逆である。（先にしるした筑波の

科学博の、ハイポニカ・トマトの電源スイッチを切ったことを思い浮かべよ・木呂子註）

この当り前のことを農民までが尻馬にのって〝工学技術〟を最善とするのは、いったいどういうことかと云いたいのである。生物生産には大いに〝自然を利用すべき〟なのである。堆きゅう肥はまさに自然物であり、大いに活用すべきなのである。

今日まで医療技術といえば、体力や心力よりも、薬の作用を重くみるような方向で進んできた。たしかに病気によっては、薬や外科手術によらねばならぬものもある。生物自体の能力よりも人工的なものを信頼するのは、生物学よりも物理学、化学、工学が進んでいた過去の時代の学問的遺物にすぎないので、つねに正しいという訳ではない。

自然物の利用を低くみるのは、その自然物の法則性の理解が不十分だからである。法則性が判らないから利用しにくく、法則性が判るから人工物を利用してきたにすぎない。

生物や生物の社会に人工物を以て〝代替〟の目的に利用した時の生物や、その生物社会が行うシッペ返しについては、われわれはそれ以上に全く無知なのである。

堆きゅう肥の効果にはまだ説明つかぬものがいっぱいある。法則性が判らぬということで、法則性が判ったとする人工物の使用のみがとり進められる。人工物の挿入に対する〝自然のシッペ返し〟に就いては、ほとんど判っていない。ここに科学や技術の不遜があると思いたいのである。（ゲーテは近代化の思考の不遜に一番早くに気がつき、ニュートン的思考にかみついたのである・木呂子註）

人工物を使う時、その効果目標はわりと単純である。

化学肥料は、土壌の特性のうち、養分の供給能力の効果のみを目的とす。除草剤は除草効果のみをねらう。土壌改良剤は土壌の物理性の改良のみをねらう。ほとんど僅かの幅の技術の目標しかもたない。それで本当によいのであろうか。

石灰窒素は、もとは窒素肥料であり、除草剤であり、酸性中和剤であり、殺虫剤であった。こういうものがなくなって、農家はそれぞれ別な資材を購入しなければならなくなった。いったいこれが進歩であろうか。人工物を作り出して売り出す企業のいいなりになった技術を、我々は農家に押しつけていないだろうか。（ボルドー合剤＊を使用しなくなって銅欠がおこり、油虫にやられるようになったのもその一例である・木呂子註）

堆きゅう肥の投入による土の中の有機物の効果は多面的である。肥料成分になるばかりでなく、土の物理性を改良し、地温を高め病原菌をおさえ、発熱源となり、根の伸びを促進し、炭酸ガス肥料にもなり、微生物の栄養源になる等……という多方面の効果をあらわすであろう。

現代の農業技術は、商人の戸別訪問に屈してしまった。肥料商、農薬商、機械商などが、代わる代わるにやってきては、肥料を買え、農薬を使え、土を捨ててきれいな砂で作物を作る道具を買えと、商魂たくましく売りまくるようになった。（農薬会社、肥料会社こそ農学部卒業生の売り込み先で、農芸化学教授にとっても見返りが大きいのでないのか？　といいたくなる・木呂子註）

それが技術の進歩だと学者先生もその提灯もちをやってきた。そのかわり農家は借金で首がまわらなくなり、出稼ぎで借金を返そうと努める。金は入った、物は買える。そして〝家はピカピカ、土はカチカチ〟となっていくのである。

堆きゅう肥の効果の解明でも、やはり水耕の思想にとりつかれた学者によるものが多い。したがって、もっぱら養分供給の側面からしか、研究が進められてこなかったというのが現状である。

今日の植物生理学は、いろいろな有機物質が微量で植物の働きを変化させること（ホルモン作用とか酵素作用）を解明してきた。それにもかかわらず、土壌肥料学者は、堆きゅう肥や土の中にある微量で作用する物質を無視してほとんど注意をはらわない。（まったくその通りだ。ここ数年来、私の土壌肥料学者と称するものたちとの遭遇はその通りの体験に終始していることである・木呂子註）

土壌肥料学者たちの”水耕の思想“病は、相当にひどいものといわねばならぬ。堆きゅう肥の効果を考えるにあたり、”説明のつかない効果“を無視してしまう傾向すらある。説明できる現象のみを信ずるなら科学は無用となる。科学は、現象として確かに起こっているのだが、理由が判らぬことへの疑問から出発するのであるまいか。

堆きゅう肥の効果で『説明のつかない効果』がいっぱいある。しかし、だからといって、現象まで否定することはできない。

地力の思想とは、根本的に”工学技術“を以てスゴロクのあがりとせず、生物生産の技術の確立をめざす思想でなければならない」と、渡辺巌教授は強く主張するのである。

北海道の場合”水耕の思想“病がいかにひどいものであるかの、証拠を提示したい。

昭和四十四年（一九六九）、日本土壌肥料学会北海道支部編で、『北海道農業と土壌肥料』という本がはじめて北農会から刊行された。

監修者　石塚喜明

編集委員　江川友治　長谷部俊雄　志賀一一　南松雄　中川利彦

である。監修者は、そのはしがきに次のようにしるしている。

「北海道も開道百年を迎え、北海道農業の発展に責任をもつ農業試験場も研究を開始してから七十年、その成績は極めて膨大なものがある。この時点でその研究をまとめ、今後の農業研究及び農業指導の糧とすべきであるという意見が出て、その監修を筆者（即ち石塚喜明自身のこと）にゆだねられた。責任の重大性を深く感じ……」とあって、この大冊が、石塚の責任監修であることをここで確認しておきたい。

「農業普及に従事しておられる方々から、今日までの研究を総括（全体を一つにまとめること、角川国語

辞典）し、教科書的（教育の現場で教材として使用する図書のこと、角川国語辞典）なものを作ってほしい要求」があって、敢てこの大冊がつくられたというのである。「さらにあわせて農業指導に従事される方の参考書」として役立てられたいというのである。この記述により、農業改良普及事業に従事する普及員は、その身分の如何にかかわらず、暗黙のうちにその記述に拘束されることを意味する。また農業教育に従事する教師の教育もまたしかりとするのである。

いったい財団法人〝北農会〟の刊行したこの大冊には何が何と書かれているのであろうか。私が何といってもひっかかり、今もってこだわり続けている一節を紹介する。

「第二章　畑土壌の地力増強

第一節　有機物

新田一彦　農林省北海道農業試験場

このように堆きゅう肥の生産、搬出作業は、たとえ機械化したとしても、これに要する時間と労力は非常に大きく、堆きゅう肥依存の技術は、結果的にかえって労働生産性の低下を招来することになりかねないと思う。

たしかにこれまでのように、社会経済的条件が小規模多労の農業技術を許した時代は、堆きゅう肥依存の農業技術も成立したであろう。

しかし、昨今の農業に於いても、ようやく労力の不足、労賃の高騰、貿易の自由化という条件は、不可避の状況となりつつあり、農業技術も労働生産性の向上という前提に立って対応せざるを得ないすう勢にある。

このように考えてくれば、畑作地帯における堆きゅう肥生産の意義は、次第にうすれていくことが予想される。

畑作における生産の向上、所得の増大は、堆きゅう肥依存の農業から、脱却することが、その第一歩ではなかろうか。」

堆きゅう肥無用論である。労働生産性向上のためには悪であるから、無用のものは生産要素から断固として切り捨てろといっていることである。もちろん堆きゅう肥だけが土壌に還元すべき有機物のすべてであるとは、私も考えていない。従来の有機質の土への還元は、長い畑作振興の歴史の上で、堆きゅう肥のかたちを基本として推進されてきたのである。

それがこのような教科書であるという、指導書であるという、単なる学術研究の発表誌ではない、土壌肥料学の責任ある今日までの研究総括（しめくくり）書に於いて、真正面から堆きゅう肥無用がうち出されたことは、農業技術史上、まったく前代未聞のことである。

監修者なり編集委員に名をつらねている人々の背景にある発想は、何であったのであろうか。私は例えば堆きゅう肥を化学肥料その他で置きかえることができるという、ある片よった側面からしか土壌を見ていない、考えていない一面性に、落とし穴があったと見るのである。

そうでなければ、この大冊の編集委員の一人である南松雄の次の文章はどう受けとめたらよいのであろうか。この時から十八年目の昭和六十二年に出された『新時代の土づくりと施肥』（北海道協同組合通信社刊）は、監修は南松雄・岩淵晴郎・飯村康二の三人とあって、南松雄は次のように監修者を代表して序文を書いている。

「土づくりは農業の基本問題である。健康な農産物は質量ともに優れている。

農業団体が八月一日を〝土の日〟と定めてから、はや十年の歳月が流れた。この間農協には土づくりのための施設や機械が導入され、普及所や農業団体、民間では土壌診断への取り組みが精力的に進められてき

た。その結果、今日、病んだ”土“はよみがえったといえるであろうか。

残念ながら答えは、否である。」

とまで、他人ごとのように云いきっているのである。

続けて、南はしるす。

「目先の経済合理性や労働生産性を重視するあまり、次第にエネルギー収支や物質循環を無視した過剰機械化、多肥料、多農薬資源浪費型農業に進んでしまった過程で、有畜経営を基本とした有機物の圃場還元、稲ワラや緑肥作物の鋤こみなど、従来、ごく自然に行われてきた自前の土づくりを放棄せしめた事実を見のがす訳にはいかない。最近になって、生態系農業による農産物のシェアが徐々に拡大し、低農薬の安全で、よりおいしい食べものを消費者が求めていることは確かである。」というのである。

どう考えてもこの一文は、前記の教科書とは”行ったと来たとの断絶“を感ずるのである。

昭和三十年代の半ばすぎに国立農試の西潟畑作部長は、十勝の町村を講演して歩いて、「もはや農業にとって堆きゅう肥をつくる必要はない。化学肥料と除草剤と農薬、そして農業機械さえあれば、立派に農業がやっていける時代が来た」としゃべって歩いたのである。

私は、とんでもないことをしゃべる人だと思った。私たちは安孫子孝次＊とか黒沢酉蔵＊といった人たちの影響を受け、育ってきた人間である。ことに安孫子が試験場長時代には、はじめて経営実験農家を各地に設置して経営のあるべき姿と、農業にコストの考えをもちこんだものである。また農試側の完熟堆肥と、当時酪連といった時代の酪連側の未熟堆肥についての効用論争があったりして、百姓をやっていた私たち若い者にとり、非常な勉強の意欲をわきたたせたものである。したがって工業製品の化学肥料、農薬だけで農業がやっていけるなどという放言は、とんでもないことである。この放言を許しておいたら、いよいよ以て十勝の農業はとんでもないことになると判断したのである。ナゼこんなバカな放言がまかり通るのか。この背

景を調べていくうちに、この"水耕の思想"は個人の見解といったものではなく、日本の土壌肥料学会ぐるみの動きであることが判ってきたのである。

農文協が昭和五十一年に出した『土づくり講座』五冊シリーズがある。その一冊『土づくりの原理』に金野隆光は次のように書いている。

「北海道の畑作農業を例にとり、地力否定説が登場する経過を見てみる。

北海道の畑作農業が目標としたものは、開拓以来、畑作と酪農とを結合させた有畜農業であった。穀物と飼料と家畜とを結合させ、合理的な輪作と緑肥や堆きゅう肥により、地力増強をはかる方式である。

輪栽式農法は地力重視説を基礎としている。地力重視説とは、農業生産の発展には地力増強が不可欠で、そのためには合理的輪作が必要で、緑肥や堆きゅう肥の施用が重要であるという考え方である。北海道の畑作は、開拓以来、戦後第一期に於いても地力重視説を基礎とし、輪栽式農法の確立を目標としていたのである。

ところが、戦後第二期にはいると地力否定説が登場する。農業が進歩し、防除技術が発展したのだから、輪作にしばられることなく、収益の高い作物の作付けを増やし、連作も可能である。また、化学肥料が進歩し、施肥技術が高度になったのだから、堆きゅう肥のように汚くて労力のかかるものに依存する農業ではなく、化学肥料だけで高生産をあげる農業を目ざすべきだ。緑肥の効果も化学肥料でおきかえられる、という考え方である。

要するに、輪作による拘束や緑肥、堆きゅう肥による地力維持を否定する考え方で、地力否定説という。

この地力否定説を基礎として、輪作をしなくても、堆きゅう肥がなくても、あるいは有畜農業でなくても、畑作農業は発展できるのだとされ、さらに行政的にも農業の近代化がおしすすめられ、北海道の畑作は、畑

作専業と酪農専業の二つの方向に分化していったのである。（むかしは農業経営にこういう分類はなかった。行政的にもこの分類をまかり通らせたということは、学者、研究者の問題でなく、今日まで行政までもが地力否定説を支持してきたという証拠になるのではあるまいか・木呂子註）

専業化したほうが生産性が向上するし、近代的農業が実現するとされた。大型トラクターの導入、規模の拡大、主要作物の転換、多肥多農薬栽培などいちじるしい変化が起きたのである」（昭和五十年の時点で金野はここまで指摘しているが、私はウカツにもここまで気がついていなかったことを正直に告白したい・木呂子註）

金野隆光はさらに問題の追究を進める。

「こうして輪栽式農法は超輪栽式農法へと移行する。それは商業的農業の発展、専業化への進展に対応して科学や工業の発展に裏づけられ発展したものとされた。その特長は特定作物へ集中すること、連作技術の発展（モノカルチャーの推進）、地力維持の中心が化学肥料と土地改良に移ること。トラクターによる一貫作業体系が確立することなどである。

要するに、戦後第二期の北海道畑作は、地力否定説を基礎として超輪栽式農法を目ざしたのであった。

輪栽農法と、輪作と堆きゅう肥による地力維持を重視して有畜農業を目ざしたのに対し、超輪栽式農法は、地力維持が、工場生産の農薬や化学肥料で代替できると考え、畑作専業、酪農専業を目ざしたのである。

しかし、最近になって、畑作専業でも酪農専業でもそれぞれ問題が生れてきた。畑作専業では施肥量や農薬散布量が増え続けるばかりで、収量は完全に頭打ちとなり、病虫害の発生も多くなってきた。さらに農薬公害が社会問題となっており、再び地力維持、土づくりが重要視されるようになった。

地力維持とは、土壌と、植物と動物との間の二つの物質循環（有機物の循環と無機養分の循環）を考慮することが基本原則である。

栽培技術の進歩による収量の増加は、適切な地力維持対策をともなわない限りは、地力の収奪をより激し

くするものである。

高度な化学肥料が登場した現在でも、堆きゅう肥使用は、依然として重要な役割を担っているのである。

日本の地力増強技術は戦後にいちじるしく発展したが、最近になって急激に後退してしまった。科学的で合理的な地力維持方式の確立は、個々の農民や技術者の努力だけで達成されるものでなく、国家の科学的施策があって、はじめて達成されるものである。」と。

（当時の某氏が、科学者として技術者として地力否定説に対しＮＯと言い続け、健闘したが、状況は孤立無援といってよく、堆きゅう肥の研究など、そんな古くさいものにいつまでも税金を使わせてたまるかと、研究テーマとしても、予算としても、周囲から圧力をものすごくかけられたと、秘かに聞いていた。しかし、今度金野レポートを読んでみて、某氏の話は根拠のないものでなかったことを私はあらためて確認したのである。畑作専業化と酪農専業化の土地利用の上で激化する矛盾を地域内の物質循環を合理化し、地域の内部組織によって解決するという、画期的な努力を進めているのが、早くに有機農業の村宣言を行った中札内村である。また鹿追町の村おこしは、畑作専業農家と酪農専業農家が土地利用契約を結び、農地の交換利用により素晴しい単収増の成果をあげ、今日もその契約が継続していることに注目したいのである。また、更別村では、農協が進んで二万トンの能力ある堆肥づくりをはじめたことである。一万ヘクタールの農地に対し二万トンということになるが、農協が組織の力で集中的に堆肥づくりの管理をやるということは、土づくりの強い意欲を組合員に対し徹底する効果は大きく、その規模を拡大していける可能性を秘めているのである・木呂子註）

昭和二十七年に〝耕土培養法＊〟ができてからちょうど三十三年目のこと、昭和五十九年五月第一〇一国会で〝地力増進法案＊〟が成立した。この法律は地力の増進を図るための基本的方針の策定および地力増進地域の制度を定めるためとし、農業生産力の増進と農業経営の安定をはかることを目的とする法律であるとされる。一般に土づくり基本法だと考えられている。

この年の雑誌『農業と経済』十月号（富民協会）は、〝今なぜ地力問題か〟を特集している。これに東大

教授熊沢喜久雄は「土壌肥料学からみた現在の地力問題」を書いている。

○　地力問題の中心に耕地土壌に対する有機物の補給問題が据えられていることは、古今東西、国内国外を問わず言うまでもないことである。耕地土壌では、収穫により地上部は毎回撤去されるから、ここでは自然による有機物の富化は考えられない。したがって有機物を補給しないで耕作を続けていけば、自然土壌とちがって有機物の貧化を招くことになる。

○　堆きゅう肥等の効果は、長期的に評価しなければならず、またその一部の効果は、化学肥料や無機質改良資材などで代用できるため、一部の論者の間には、堆肥無用論がとなえられたこともあるが、総合的に見て、堆きゅう肥は地力の維持増進のためには必須のものであることが、広く認識されてきていることはまことに喜ばしい。

土壌に対する有機物使用の効果については、既に数多くの論説があるが、最も重要な点は、土壌中の微生物に対して栄養を与えることであり、また土壌中の栄養腐植を増加させ、同時に土壌の物理性、化学性を改良することにある。集積した栄養腐植は適宜分解されねばならず、微生物による分解に好適な土壌条件を備えねばならぬ。作物生産性の高い土、地力の高い土は、現象的には微生物活動に好適な条件を具備している土であるともいえる。

○　ただし、農耕地の地力の取り扱いは極めて慎重でなければならぬ。ただ有機物を持ち込めばよいというように、矮小化することは危険である。下水汚泥や豚糞等の中に混入している重金属などの作物生育有害物は、厳重に監視されねばならない。

○　土壌は国の資源であり、その基本的属性である地力の増進のために国が、責任をもって長期的見地から、種々の有効施策をたてることはきわめて重要なことである。

その施策は合理的根拠を必要とし、その最大なものは科学的な土壌調査である。地力実態調査と、経営技術、栽培技術の研究成果の上にたって、絶えず新しく向上する技術の進歩に即した改善指針である。

とくに地力は、その性質上常に変化する。実態は正確に、不断に把握されねばならぬ。このため国会附帯決議にあるように、訓練された土壌調査の専門家育成が強調されねばならぬ理由はここにある。

また、土壌に対する正しい認識を国民的なものにまで普及するため、教育の諸段階で、土に対する正しい理解の普及に考慮がはらわれなければならぬ。

（国土の四十パーセントを国民の手によって作り出したオランダに、土壌科学博物館がある。一村一品運動花ざかりの時代に、日本の畑作中心地の十勝に、土壌科学博物館をつくる気概のある町村はないものだろうか。オランダがやっているように、世界中の土壌を集めるのである。資源植物学があるのだから、資源土壌学の国際研究センターがうまれてもよいのではあるまいか・木呂子註）

昭和六十三年四月に日本土壌肥料学会編『土の健康と物質循環』という本が博友社から出た。昭和六十二年に学会総会が行われ、シンポジウムが二日間にわたり開催された。その際の集録である。

先ず〝まえがき〟から拾い書きする。

「一九八六年に五十周年を迎えたアメリカ土壌学会において、また一九八七年八月、青森で開催の国際土壌シンポジウムで、期せずして、『有限な地球の上の、有限な土壌資源の、永続性ある管理の重要性、不可欠性』が強調されたことである。

地球という系の物質とエネルギーを、無制限かつ一方的に消費しようとする傾向を性格上、基本的にもつ工業と、太陽エネルギーと大気、及び土壌圏に存在する生命構成物質を、食料、その他の農林業生産物としてとりこみ、再び大気、土壌に返していくことにより、地球上の生命を豊かに育み、支えている農林業との体質的な差異を、〝土〟の視座からあらためて見つめ直すことが、現在ほど求められている時代はないので

はなかろうか。

土を選び、適切な管理をほどこすならば、土自身は必ずこれに答えてくれること、そしてそれは世代を越えて永続すること、いや続かせるように努めていくことが、現代に生きる人々の責務である。」としている。

さらに〝刊行にあたって〟に、平田熙＊が次のようにしるす。

「現在、日本の産業構造や国際関係のなかで、本来、国の基幹産業であるべき農業そのものが未だかつて経験したことのない危機に直面させられつつある。

その原因の最大のものは、現在日本の経済や政治の仕組の中にあり、国の政策決定にあたり、中枢部分の近くにあって大きな影響をもつ、一部経済界の論理の中にあることは、今や見え見えで明白である。

しかし、狭小な目先だけの論理で、私たち国民や、日本の国土の将来に甚大な影響を及ぼすに違いない日本農業の崩壊を、許してはならない。

今回のテーマに関連して、一九八六年には、二つの注目される著書と訳書が出版された。一つは山下惣一の『土と日本人―農のゆくえを問う―』（ＮＨＫブックス）である。山下は一九八四年、村で大量に発生した死米の体験から、それは〝土の悲鳴〟であり、病んだ土がもたらしたものとし、〝土の健康破壊〟に警鐘を乱打していることである。

いま一つは、国立北海道農試の吉田武彦訳のリービッヒ著『化学の農業及び生理学への応用』（北海道農試研究資料、第三十号）の部分訳の公刊である。

周知のようにリービッヒは、有機化学、農芸化学の建設者として、十九世紀ドイツ科学を代表する巨人であり、〝植物の無機栄養説〟をうちたてて、それまでの腐植栄養説を決定的に否定して、旧来の輪栽式堆きゅう肥農業を、近代的農業に変革するのに、はかり知れない影響を与えた。またそれ故にこそ、農業近代化の

なかで表面化してきた、あらゆるマイナス面の元凶であると評価されている一人である。

吉田は〝訳者・まえがき〟の中で、『本書に集約されるリービッヒの理論は、わが国の農芸化学、土壌肥料学の分野に、決定的な影響を及ぼしてきたと、一般的に思いこまれてきたが、明治はじめのドイツ農学の導入期を含めて、本書が深く読まれたり、研究されたという証拠を見つけることはむしろ困難である』として、『地球的規模に及ぶ物質循環、地力問題、環境汚染問題、資源問題、そして食料問題についてのリービッヒの思想は、今日でも驚くほど新鮮さに溢れる問題提起をしている』と指摘し、本書をあらためて深く研究することの意義を強調している。」ことである。

実は吉田はこれより以前、十年以上も前に、昭和五十一年にこのリービッヒの原著の序論中より、『農耕と歴史』『国民経済と農業』の二篇を訳し、農林技術出版社より刊行している。私は当時、この七十一頁ばかりの冊子を十冊求め、人にもすすめ、熟読したのである。その一節にこうある。

「ある国民の没落の政治的原因のすべてが土壌に影響をおよぼす訳ではないが、土壌の性質が変化した時におこるのが国民の没落である。

農民は自分を養わなくなった土地を見捨てて、新しい土地を求めて移動するように、国土の状態にしたがって、その国民の文化と文明も移り変わる。

ひとつの民族は、国土の肥沃性に比例して興隆、発展し、国土の消耗とともに確実に滅亡する。ただ、文化と文明の果実である精神的遺産は滅亡せず、ところを変えるだけである。

国民の興隆と没落を支配するのは、同一の自然法則である。国土の肥沃性の諸条件の収奪は国民の没落を、それの維持は、国民の永続、富および力を規定する。」私はこの一節だけでリービッヒに棒しばりになってしまった。

この本が出たまったく同じ年に、農民作家の薄井清＊が、『土は呼吸する』（三省堂刊）に、「リービッヒは無機栄養説をひっさげて登場し、アルベルト・テーアの有機栄養説を完膚なきまで叩きのめし、土や作物のもつ神秘のベールを、化学のメスで容赦なく切り裂いたのである。

テーアが自然の循環系にもとづいた農法であるのに対し、後者は循環に関係のない工業生産に一歩近づいた農法である。」と非難しているが、この一例をみても判るようにリービッヒは原著で読まれることなく、化学肥料偏重の親玉として孫引的に理解されてきた。今日の地力否定説は、リービッヒにはじまる農芸化学の正統派がリービッヒの原著を読むことなく、勝手にドグマ化していたところに問題ありと思うのである。

まったく同じ世代に生きた詩人ゲーテは、「自然科学者としてまちがった仮説はないよりましだが、しかしまちがった仮説が固定化され、疑念をさしはさむ余地を許さないのは、一種の信仰告白であり、もう不幸であるばかりか、幾世紀にわたり、その被害を及ぼすことになる」といっている。また「分析ばかりを事としていると気がつくまいが、肝心なことは、分析は総合を前提としているということである。

最近の化学は自然の結合したものを分離することを主眼とし、自然を要素に分解してしまい、自然としての総合を放棄してしまっている」といっていることは、地力否定論にも当てはまるように思われる。

ここで吉田武彦から、教示を受けた土壌についての考えを補記しておく。

水と生物、この二つのないところに、土壌の生成はないというのである。何故かというと、土壌の重要な二つの骨格である〝粘土鉱物〟と〝腐植〟は、ともに〝水〟と〝生物〟の存在が関わっているというのである。

単なる岩石の風化物は、岩石の粉であっても、土壌ではない。だから、月には、水と生物が存在しないから、土壌はないというのである。

また、地球以外の惑星でも、水の三相、即ち、気体としての水蒸気、固体として氷、液体としての水は、〝水の惑星〟たる地球以外には存在しないし、生物の存在も認められないから、土壌の存在はない。

土壌をもつ惑星〝地球〟の住人たる、人類の責任は重いのである。土壌を無視した高等植物の存在を、また農業を無視しようという発想は、何としてもおかしいのである。

リービッヒは、続けて語る。

「植物の生命活動に関与する土壌・水・空気などの、すべての成分と、植物体、動物体を構成する諸成分（生命体は、植物であろうと動物であろうと、細胞を以て構成され、細胞を構成する諸分子、諸分子を構成するのは諸元素である・木呂子註）との間には、相互関係が成立していて、しかも無機物が、有機体として生命体として、生物的能力をもつ担い手に移行する際の、媒体する諸要因の連鎖全体のなかで、ただ一つの鎖の環が欠けても、一生命体としての植物体も動物体も、存在し得ないのである。」といっていることである。

読み砕いているうちに、もうこれは宮沢賢治の農民芸術概論の一節、「微塵となりて、無方の空に散らばろう」という、輪廻転生の仏教的宇宙観を、化学者の立場で解説しているようにも受けとられ、リービッヒは、要するに、自然を、人間をも含む動物と植物との、生命代謝過程としてとらえており、その意味では、人間も加わっての巨大な生命の循環としていることを、理解したのである。

また、「もし、畑（土）の肥沃度の維持が、造物主から人間の手に託されたものであり、自らその行為によって、子孫に対し、もたらすであろう災厄について、責任ありとするならば、（また畑の肥沃度の維持によって）、自分の生命と自分の子供達を、養うことに役立ってきたことを理解し（自覚し）、かつ次々と生れてくる新しい世代と、（その世代たちの）社会の発展に役立てるためには、（畑の肥沃度の）維持回復のためには、いくばくかの費用がかかり、多少の労苦が伴うからといって、（畑の肥沃度を）無駄に浪費したり、生命の輪廻を故意に狂わしたり、物質循環を断ちきることは、（略奪農業を継続しようとすることは）、神と人類に対する罪悪にほかならない。」といい切っていることである。

もうこれは、私の持論である食料の安全保障よりも、まず土壌の安全保障をという主張と、まったく同じであることに驚かされるのである。

さらに、リービッヒは、物質循環農業の手本として、徳川幕藩制下の日本農業に就いてのH・マロンの報告を土台にして、ヨーロッパ農業を対比させ乍ら論じている。

「山が多く、国土の半ばにも及ばない耕地、しかもイギリスに倍する人口の島国日本が、草地もなく、飼料もなく、しかもグアノ（燐灰土）、骨粉、チリ硝石などの、一かけらも輸入することなく、住民の栄養を完全に生産していることである。

日本の農民は、輪作農法については、なにも知らないが、地力の利子だけに手をつけ、利子を引き出すべき資本（地力）には、決して手をつけないことである。

それにくらべて、イギリスの農業はどうであろうか。外国より輸入した肥料等を、大量に消費しているばかりか、なおかつ、植民地からの農産物を、大量に飢餓輸出させて、その収奪を絶えずくりかえしているのである。

ロンドンの下水道は立派に出来たかもしれないが、その終末はテームズ川に放出され、果ては北海にまで流出させて、物質循環を断ち、イングランドの農地には、還元されることがないではないか。

しかるに、日本の農業を見よ。利根川、荒川、江戸川、隅田川の諸川を通じて、江戸八百の町々に、米、麦、豆類、野菜、果物、薪、木炭等々を運んできた荷船、荷車は、もうその日の帰り途には、肥桶に糞尿を満杯させて、そのモトの畑に、田圃に、還元しているではないか。」

「つまり、自然力の、完結した循環の、壮大な図式が成り立っているのであって、連鎖のどの環も、鎖も抜け落ちることなく、次々と立派に、手をとりあっていることである。」

「ヨーロッパの農業は、見かけ上の農業にすぎず、日本の農業とは完全に対照的で、肥沃性の諸条件につ

いては、耕地の略奪に頼りきっている。
ヨーロッパの農業者の目標と、彼が農業技術の粋をつくす主な目的は、耕地から可能な限りの、多くの穀物と肉類をとり出すこと、その収穫を実現した諸条件を、買いもどすためには、なるべく労力と金銭をおしむだけである。」

「ヨーロッパは、遅かれ早かれ欺瞞の暴露する時がやってくる。日本の農業は、実際的な真の農耕であって、土壌の生産性は地力の利子であって、日本人は、利子だけで生活することを知っている。」
これは原訳のままの引用であるがこの物凄い迫力に心うたれるものである。リービッヒの、地力についての思想は明らかであり、幕藩制下における日本農業に対する評価の如何は別として、その思想は今日的にも通ずる、新鮮さに驚くべきものがある。
リービッヒは、以上のような思想の根源にたち、農業に適用すべき二つの法則を主張する。
「第一が補充の法則。農業経営がよいか悪いか、合理的であるか合理的でないかの指標は、この普遍的な補充の自然の法則を理解し、それにしたがって、土壌を管理しているか、していないかにかかっている。
物質循環を断ちきることは、自然法則の破壊にほかならない。土地から収奪した栄養分を、なんらかの方法で還元する時、持続的に、最大の収益をあげ得るものとしていることである。
第二は、最小養分律の法則。それぞれの畑は、一つまたは多数の養分の最大量と、一つまたは多数の、他の養分の最小量を含んでいる。それが、各種養分中の、いずれかの養分元素に関わりなく、その収量は養分の最小量に比例し、収量の水準及び持続性は、最小の養分元素によって支配され、決定される。」（最小律の法則）としていることである。
この場合、リービッヒは、堆きゅう肥の効果を否定したものではなく、堆きゅう肥は、畑から奪われた個

別養分の一定量を含有し、失敗が少なく、目的に適った確実な方法であるとしている。リービッヒが、アルベルト・テーアの腐植説を批判したのは、堆きゅう肥が、完全肥料であるとしたテーアの主張に対して行ったのである。

また、無機栄養説についても、植物が無機栄養生物であることを主張したのであって、植物が有機化合物を吸収同化することまでを否定したものではないと、吉田武彦は解説している。

私は、今から十五年前に、このリービッヒ原著の吉田武彦訳を入手し、学んで以来、この偉大なる農芸化学の道を開いた、リービッヒの思想を、もう一度原点として、土壌肥料学のあるべき方向を、再検討する必要ありと、深く深く痛感させられたのである。

北農会の『北農』一九八六年一月号（昭和六十一年）は、「北海道における地力問題について」という中山兼徳の論稿をのせている。

畑作の地力問題について、金野隆光が地力否定説批判の論稿（内容は前記の趣旨と同一）を、北農、その他の雑誌に書いてから、ちょうど十年たった訳である。中山はどうとりあげているだろうか。

まず、十勝農協連の実施している農作物増収記録会の、出展農家（即ち十勝の優良農家のことである）を対象に、褐色火山性土における、昭和五十二～五十七年の平均施肥量を求め北海道庁農務部で作製した、地帯別、土性別、作物別の”施肥基準“との比較（図2）を紹介し、

「また、農協連の土壌診断事業の結果によってみても、府県の野菜畑のような、異常な富化はみられないものの、養分的にみて、とてもやせている状態ではないのである。

なお、ほとんどの農家は、肥料の投与を惜しまない経済力をもっている。」とある。

「以上のように、養分面では恵まれている条件でも、最近では多収に結びつかない場合が生じている。主

要作物の収量が、世界の最高水準に達し、より多収とその維持が、難しくなってきていることもあろうが、いっぽう、特定の作物の過作、連作にともなった、土壌病害の多発に、影響されている面も少なくない。また、そのことが、逆に多肥を促している。その対策として堆きゅう肥の増加と、輪作の実施がすすめられている。

したがって、堆きゅう肥の施用は、養分補給が目的でなく、土壌病害の軽減など、地力の機能向上に、主たるネライがおかれているのである。

「地力向上に働く、堆きゅう肥の機能が、最近の研究から、少しずつ、明らかにされてきている。たとえば、堆きゅう肥の施用で、成育の初期から、根の伸長や分岐がよくなり、それが根圏にすみつくカビ（微生物）の種類の多様性と、関連があることが、判ってきている。実際に、堆きゅう肥施用で、根圏にすみつくカビの種類は、多様化を示している。

生物社会における、多様性有利の生態的原則は、各種の面から、明らかであるが、土壌微生物の面でも、同様である。堆きゅう肥施用は、その面でも、大きな役割と効用をもっていることが、判ってきた。

また、土壌微生物の作用で、有機物から、エチレン、サイトカイニンなどの、植物ホルモンが作出され、

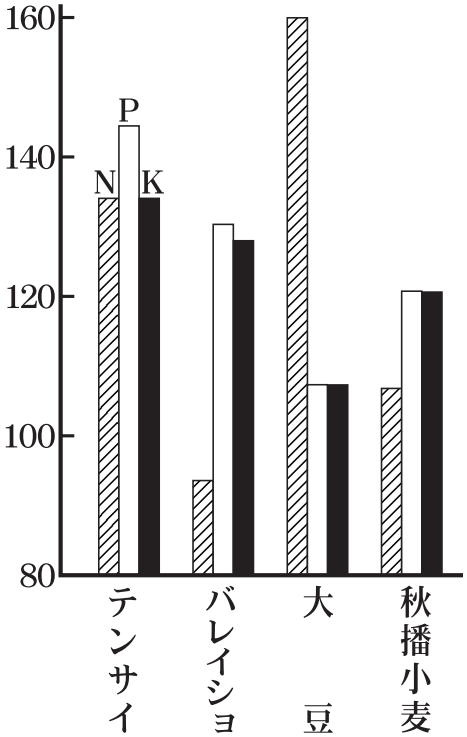


図-2　農家施肥量と道施肥標準の比較（褐色火山性土、十勝農作物増収記録会審査報告、昭和52～57年）

作物の成長促進に寄与していることも、明らかにされてきている。このような、堆きゅう肥の効果は、十ヘクタール当り、一～二トンの施用で認められている。」

（小林達治著『根の活力と根圏微生物』、小川真著『作物と土地をつなぐ共生微生物』、西尾道徳著『土壌微生物の基礎知識』、何れも農文協刊を参考とせられたい。木呂子註）

「ところがである。畑作では、堆きゅう肥にする有機物資源が不足しているという声が強い。これはおかしくないか。見方のちがいであるが、筆者は、近年の畑作栽培の推移から、北海道、とくに十勝の場合、有機物資源が、最高に恵まれている時代でないのかと考える。」と、茨城県と北海道の栽培構造を数字をあげて、数量的に比較し、特に十勝農業の有機物資源の豊富さと、有利性について、強く指摘していることは、注目してよい。

この中山論稿を一読して、私は、北海道の土壌肥料学会にも、ようやくその一部に、正気が戻ってきたあかしの論稿として、受けとめたのである。

注目すべき部分に、敢えてアンダーラインをしておいたが、「この肥料の投与をおしまない経済力をもっている。」という行文を、読者はどう受けとめているか、ということである。

少し意地の悪いいいかたをすれば、十勝の農業者は、経済的なゆとりをもっているのだから、金のゆとりにまかせて、肥料の増投につぐ増投、農薬の散布もまけばまくほど効果があるものとし、散布回数を増大させてきたとも、受けとられるのである。

これを傍観視していたのが、いな奨励してきたのが農業団体でないのか。そういう技術行動を支持してきたのが、従来の土壌肥料学会の、技術思想でなかったのでないかと、云いたいのである。もし不合理なもの、不経済なものと知っていたら、ブレーキを掛けるのがまともな農業団体の行動であり、農業技術者ではない

のか。「農業者は貧乏しても、農業団体がもうかるのであれば」と、農業技術者と結託して、黙認してきたとでもいうのだろうか。そうではあるまい。農業技術の根底にある思想が、片寄っていて、ゆがんでいたというのが、事実のような気がしてならないのである。また、この行文が、まったく事実に反しているのであれば、当然に農業団体から強硬な抗議があってよい訳である。しかし、私は今日まで、〝北農〟誌上に敢て訂正なり、釈明の記事を見ていないから、この事実を承認したことになると思うのである。

これを裏づける立派な資料がある。

日刊『日本農業新聞』というのがある。農協が資本を出して発行している、日刊の機関紙である。だから私は、農協の御用新聞といっている。まず農協の自己批判を書いたためしがない。その新聞に、昭和六十二年二月十三日号から、北海道版だけと思うが、カコイ記事で、〝ガラスの砂〟という、土壌破壊の実態ルポを、十回にわたり連載している。

バレイショ編で七回、てん菜編で三回、記事を読めば、十勝と北見のどこの有名町村のことを書いているかが、すぐ判る。しかもこのルポには、いずれも農業試験場から同行し、取材に協力しているから、驚くのである。御用新聞の記事ですぞ。

書き出しは、こうである。

「土が〝ガラスの砂〟になりつつある。こんな悲しい警鐘が、かなり前からあった。だが、警鐘は、時に目の前の利益によってかき消される。道農業にとって、化学肥料、農薬、トラクターの『三種の神器』は、農作物の収量を、飛躍的に高めてきた。

土の大切さを忘れても、作物はとれてきた。しかし、時代は様変わり『量より質』『コスト低減』が、重視される今になって、土を痛めつけてきた弊害が、さまざまなかたちで顕在化している。

あらためて、『土の生命』が見直されはじめている。土づくりが、なぜ必要なのか。バレイショ、てん菜の産地を訪ねて、考えてみた。

この三種の神器の「化学肥料」といい、「農薬」といい、「農業機械」といい、誰が窓口になって、農業者に売りつけてきたのか。

私には、この三種の神器が悪いのではなくて、この三種の神器を使っての、背景にある農業技術の思想、モノの考えかたが、災禍をもたらし、十勝の大地を〝ガラスの砂〟にしたのだと云いたいのである。

話を簡単にするため、このシリーズの見出しだけを、列記して紹介したい。

(1) 天国と地獄―商品化率たったの六割。土づくり、今こそ転換期。
(2) 信仰の崩壊―収量一辺倒が命とり。窒素過剰と知りつつも。
(3) 虚弱肥満児―気候変動ですぐ発病。地力が農耕馬と共に消滅。
(4) 不老長寿の害―茎葉徒長、倒伏……。経費増や品質低下歴然。
(バレイショをわざわざ一メートル六十センチまで徒長させて、イモ掘機械にからむからと、枯凋剤「農薬」をまいて枯らせる。イモは施肥管理で、八十センチで、下から自然に枯れあがるのが、普通の状態・木呂子註)
(5) 理想の算術―十ヘクタール一〇〇万円純増。商品化率高め、上手に減肥。
(6) 貯蓄の威力―減肥しても減収せず。有機物の量的な差が原因。窒素肥料は二重に損を招く。
(7) 将来への切符―活路を開く堆きゅう肥の山。やせた土が息を吹き返す。
(8) 原点の病弊―吹き飛ぶ大切な表土。単粒化で忽ち風害になる。
(9) 時代の転換―量から質へ目覚める。窒素で多収のムダを実感。
(10) 第一歩の視点―地力が将来を分ける明暗。有畜複合など積極的に。

御用新聞だから、「学者、研究者、農業団体、普及所の技術思想が間違っている」とは、口が腐ってもい

わないが、農業者に尻ぬぐいをおっつけて、知らぬ顔とはいえないではないか。しかし現場の事実は正しく、記事にしているのではあるまいか。

畑作の生産性向上、所得増大は、堆きゅう肥依存農業から脱却することが、その第一歩であるとした、地力否定説宣言の石塚喜明監修『北海道農業と土壌肥料』が、刊行されてから十八年を経て日本土壌肥料学会北海道支部編で、田中明監修『北海道農業と土壌肥料一九八七』いわば一九六九年版の新訂版が、昭和六十二年七月、やはり北農会より出版された。

編集委員は長が飯村康二、委員として、奥村純一、南松雄、大垣昭一、水落勁美が、名を連ねている。十八年前の同一メンバーは南松雄ひとりである。

こんどの有機物の項は、小川和夫の執筆となっている。「有機物管理」の〝はじめに〟と〝むすび〟について略記する。

「畑地への有機物施用は、地力維持のための、基本的な土壌管理技術とされ、北海道の農家では、従来、有機物資源となる作物を組みいれた輪作体系のもとに、合理的な有機物管理が行われてきた。（学者は平気でこうした嘘をつく・木呂子註）

しかし、役畜の消滅と、堆肥原料作物の作付減少が進み、堆きゅう肥の生産は減少をたどる。

一方、堆きゅう肥生産減少傾向の中で、土壌病害の多発、冷害などの生産不安定性が憂慮されこれは化学肥料依存の多肥農業により、地力低下によるものとされ、有機物管理の重要性が認識されるようになった。」

「今日、農業生態系において、土壌養分の過剰蓄積、作物養分吸収のアンバランスなどが、問題となっている。この状態は、これまでの土壌改良、施肥改善、家畜栄養、家畜排泄物の処理など、それぞれ個別の立場にたって、独立的に検討され、それぞれが、個別技術として、実行されてきたための、行きついた結果で

あると、思われる。

これらの問題解決のために、農業生態系、つまり大気・水・土・作物・家畜・人間系での、物質循環のバランスシートを把握し、合理的施肥法と地力管理法を設定する必要があり、有機物管理も、バランスのとれた物質循環システムを前提にして、行わなければならない。

一方、有機物の土壌生態環境への影響は、養分や物理性改良の面ばかりでなく、生物活性や生理活性物質の面からも、いっそうの解明が、重要になるものと、思われる。」

北海道の土壌肥料学会としても、化学肥料依存の、地力否定ではおかしいということに、ようやく気がつき、その論調に、ようやく変化が現れたのである。

従来の地力否定説の、有機物、堆きゅう肥無用論は、土壌の物理性、化学性からのみ把握し、この二つの側面は、工業製品、化学製品でおきかえられるという思想があり、単純に即断したことからくる誤ちであったことになる。

しかし、頑固に、未だに土壌の微生物性を認めようとしない傾向も残っているように思われる。

末尾の、生物活性や、生理活性物質の解明こそ、重要な当面の研究課題と思われるのである。いかなる学者、研究者といい、研究のための予算がなければ、解明のための研究は進まないのである。

物理性、化学性の研究には、予算が圧倒的に配分されて、微生物研究には、僅少の予算しか配分されないといったことでは、解明のための研究が進みようがない。

農水省も、微生物性研究に昭和六十一年から、五ヵ年計画で、研究を進めるようにはなったが、いったい北海道の現況は、どう進んでいるものか、気になるところである。

篤農家とか精農家とかいわれている人の技術には、理屈は判らないが、土壌の微生物性特質を、ちゃんと

つかんでいる技術だと、私は考える。農業経営を維持する農業者こそ、学問的には説明できぬものの、ちゃんと事実として、現象として、つかんでいる。堆きゅう肥無用論の学問がケツを割った訳であるから、堆きゅう肥のことを含めて、土壌の生物活性化研究の応援団となって、予算もつく、仕事もできるように、学者、研究者を声を大にして応援する必要があると、痛切に思うのである。

（生物代謝のことを考えていると、手もとにある農学の通俗書では、なかなか飲みこめない。たとえば窒素がアミノ酸に変り、蛋白質に変わって、植物細胞の組織となる訳だが、そのためには、蛋白質の一種である無数の酵素の働きが、参与している。ここまでくると、酵素の働きについては、農学ではあまりといっても、ほとんど説明していない。かえって量子生物学、分子生物学の方から追いつめていくと、釈然とするのである。どうしても、学問の専門家のワクのなかでは見えてこない。ダメということになる。学問と学問との間のスキ間に、橋をかけていかないと、展望が開けないのではないかと、特に痛感するものである・木呂子註）

北海道農業試験研究推進会議が、『北海道における土壌・作物栄養診断の現状と問題点』を出したのが、昭和六十三年三月である。

これを踏まえて、『土壌診断に基づく施肥対応』『土壌および作物栄養の診断基準』そして『北海道施肥標準』の三冊が、平成元年五月に公刊された。

『北海道施肥標準』（昭和二十七年以来、およそ五年ごとに改訂）は、北海道を一〇〇の地帯区分にわけ、各種作物について、土壌区分にもとづいた、施肥基準が示されている。

要するに、標準的施肥量が示されている。昭和五十八年が最終改定で、ちょうど六年たっての、今回の改定となったのである。

この施肥標準を土台にして、各町村の施肥基準ができている筈である。

こんどの標準で、私が注目しているのは、「施肥標準利用上の留意事項」として三点が、明確に示された

ことである。

第一は堆きゅう肥の施用であり、第二に、微量要素の施用、第三に、土壌診断の活用である。

○　堆きゅう肥の使用については、良質で安全な農産物を、安定的に生産するためには、健全な「土づくり」が基本である。だから良質な堆きゅう肥をつくること。（完熟堆肥であること。堆肥であればよいというものではない・木呂子註）適切に施すことが大事だとする。

しかも、このネライは、地力の維持・増進、特に作物の根圏に共生する、土壌微生物の活性化をはかるために必要だということを、はっきりさせていることが重要なポイントである。土壌微生物のエネルギー源として、有機物が重要だといっていることである。

だから、そのことをよく考えて、有機物資材については、施肥対応をも、充分に参考にせよといっていることである。

○　微量要素の欠如が部分的に認められるので、土壌分析を必ずやり、その結果をよく見て検討し、欠乏している土壌には、微量要素を施用する必要がある、としていることである。

これは非常に画期的なことなのである。

ナゼかといえば、従来は微量要素の欠如は、これこれの作物において、これこれのような症状があらわれる。その場合、葉面散布を行って欠乏症状が消えれば、まちがいなく欠乏症状だとする。

いちばんひどいのは、農文協刊の三好洋著『土壌診断法』である。

一、欠乏は単独でおこることは少なく、合併症で出る。

二、土壌そのものが、欠乏している場合は少なくなく、ＰＨ・乾湿が適切でないと出る。だから、合併症として診断できれば十分であるとする。

また、微量要素含量を分析測定する必要はない。分析しても、その基準の数字の確定したものは少ない。

さらに、欠乏が明らかな場合でも、単独要素として考える必要はない。総合微量要素の資材か、堆肥などを施せばよい。

としている。この本は昭和五十三年に出され、農文協では未だに版をかさねている。農業の急速な変化に事態は変わっているのでないのか。農文協がこういう記述に平気でいることに、私は疑問を感じている。

都留信也＊が、共立出版から出した「生態学への招待シリーズ」のその著『土と生態』に、「土壌の化学分析と、作物の化学分析により、作物への適切な施肥基準が、設定されるようになった。土壌の化学分析は、多くの場合に、いろいろの養分欠乏を、明らかにするのに、貢献している。また、栄養不足の地域を発見するのに、有効であった。近年、作物の化学分析は、窒素過剰による品質低下をきたしているビートやレモンのような作物で、過剰の障害を防除するようになった。」

「微量要素の施肥は、比較的に新しいものである。土壌から作物に移動する微量要素の増加や、品質の向上（反収が倍増すれば、当然微量要素の吸収も増加、特定作物の連作、過作が続けば、その作物特性による微量要素の欠乏は早まる。たとえば、十勝の場合ある時期に、相当長期にわたり、小豆、金時、手亡といった亜鉛吸収力の大きい豆類の連作過作をやった地帯に、見事に亜鉛欠乏がパラレルに出現したではないか。その結果として三・三運動というのがはじまったのだ。実は雑物を排除したということは、養分要素が純粋に近いから、施肥の計量計算がし易いということになる。そのためいわば、タライの水と一緒に、赤ん坊も流してしまったことに気がつかなかったともいえる。純粋に、純粋にということは、いよいよ貴重資源が、雑物として排除してきたことに注意・木呂子註）による、微量要素の欠如、あるいは微量要素の欠乏する土地利用といったことのために、微量要素の施肥が、必要とされるようになったのである。

ルーサン＊ではホウ素、トウモロコシでは亜鉛、果樹、牧草では鉄といった要素の欠乏は、一般的となっている。

土壌の化学分析や、作物の化学分析は、欠乏の実態を明確にするのに、役立ってきただけではない。微量要素の適正施用の設計に、不可欠の技術になっている。」とある。

都留の『土と生態』は、昭和四十六年の刊行である。私は三好洋との考え方に、非常な研究の落差を感じとるのである。ところが、道の「施肥標準」が、ここまで明示しているにもかかわらず、道民の血税を使って、道内農家に全戸配布の『やさしい土づくり』が、三好洋の考え方から、一歩も出ていないばかりか、都留の指摘から二十年もたっているのに、「微量要素のはたらき」をいい乍ら、その病症を示すばかりで、はたらきについては、ただの一行も書きしるしていないことに驚くのである。ただし『農協土づくり情報』二十四号（平成元年一月）には、山口正栄が「農産物の高品質化と微量要素」という題で、〝土壌分析にもとづく診断基準値〟（上限、下限の適正巾まで示している）と〝はたらき〟について丁寧にふれている。

「微量要素は、すべての酵素の構成元素か、酵素の活性化に関係し、植物の生理代謝にとって必須元素であることである。微量だから、あってもなくてもどうでもよいものではなくて、なかったら植物細胞の生理代謝が円滑に行われないのである。何故なら酵素は常温下（摂氏三十五度前後）で、生物代謝の触媒反応の速度を、一億倍以上も高めることを可能とする」というのである。（岩波新書・柳川弘志著『生命の起源を探る』四十二頁参照・木呂子註）山口が作物の高品質化に関係ありと、指摘しているのは、そのためである。

話を判りやすくするため機械にたとえれば、窒素、燐酸、加里、石灰、苦土といった多量要素はシャフトとか、プーリー、ギアといったものであり、微量要素は、ピン、ナット、グリスといったもので、機械が故障する時は、ピン、ナット、グリスなどのように、ごく小さなものがとんだり、割れたり、不足することからおこることでも判ろうというものである。ピン、ナット、グリスなしでは機械が動かないのである。だから必須要素なのである。

不思議なことに、化学肥料、農薬だけで農業ができるとした地力否定の肥料依存主義の学者たちは、この微量要素をバカにして、マトモに認めようとしないのである。

昭和六十二年に、青森県で「あおもり国際土壌シンポジウム」が開かれ、オランダの国際土壌標本センター所長のソンブルク博士が招待講演を行っている。講演のあとの質疑応答のなかで、注目すべき発言をしている。

「今日の近代化農業における、化学肥料の大量投入、農薬の大量散布、機械の踏圧等々による土壌の崩壊は、生産物のコストに計算されないままで流通している。しかし何時かはそのツケ（代償）を支払わねばならぬ時がくる。いったいそのツケを誰に支払わせようというのか。」

「二週間、日本の土を見て歩いたが、日本の土壌肥料学者が土壌の微量要素賦存の関連で、人間の健康のことを全く考えていないことは、驚くべきことである。」とはっきり言い切っていることである。さらに続けて

「家畜の栄養と健康については、どの土壌にどんな微量要素が関係するかについて、熱心に研究されているにもかかわらず、人間の健康と栄養に直接関係のある食物になる作物については、どう微量要素が関係しているかについては、研究が全く進んでいない。

家畜の健康と微量要素との比較から人間の体にとり必須の役割を判断しているのにすぎない。この人間の健康に、必須と思われる微量要素の欠乏を補うために、化学合成された人工的なものを、（あたかもクスリのように）補給し、また莫大な医療費を支払うような結果を招いているのに驚くのである。」と指摘されている。（同シンポジウム報告書　七十七頁、七十八頁・木呂子註）日本の土壌肥料学会の巾のせまさといったらよいのか、とにかく、見るところは見、おさえるところはおさえている指摘に、私は驚いたのである。

ここでつけ加えておきたいことだが、三好は、微量要素は堆肥をやっただけで、欠乏が補えるといった言い方をしているが、化学肥料依存の農法が、長く続いたため収奪からきた欠乏は、その耕地で生産された力ラモノでつくった堆肥そのものが、微量要素の欠乏した素材であるということに気がついていないことである。だから単純に堆肥をいれればよいということにはならぬ。

昔の堆肥は耕馬がいて、つくられた堆肥である。当時の私たち若者は、朝飯前に土手や灌漑溝の自然地の草刈をして、馬にくわせ、馬にふませてできた堆肥であるから、微量要素の自然地からの循環があった。今はそれがない。

また昔は、魚粕とか大豆粕とかが肥料として使われていたり、農薬といってもボルドー合剤しかなかった。ボルドー合剤は、石灰乳と硫酸銅でつくるので、その面からの銅の補給がまだあった。アブラ虫は、土壌の銅のバランス（診断基準による）が崩れると、テキメンに集まってくる。

日本有機農業研究会機関紙『土と健康』二〇八号、二一五号に、在ブラジルの続木善夫が、フランスのフランシス・シャブスー＊の「トロフォビオーゼ」理論、その著「農薬散布で病気になる作物」に紹介された農法の実践例を書いている。

理論の骨子は、根から吸収された無機態の窒素は、アミノ酸に合成され、最終的には蛋白質となって植物組織となる訳だが、生理的に代謝系に狂いを生じた植物は、この蛋白合成が正常に進まず、樹液中に無機態窒素、遊離アミノ酸となって停滞する。実は昆虫の生命を支えるエネルギーが、この遊離アミノ酸であって、その消長によって昆虫（害虫）の出現数も増減するものと考えていることである。

虫害の抵抗性品種と非抵抗性品種と、害虫との関係で研究していたところ、遊離アミノ酸の少ない葉を与えた場合、害虫の幼虫は栄養不足で死に絶え、逆に遊離アミノ酸を添加すると、害虫の幼虫は立派に成長し

成虫となることが判ったことから、研究の端緒をつかんだ。
微生物に対しても、原則的に同じで、代謝系の狂った植物体内には、遊離アミノ酸以外に、水溶性糖類その他、微生物の絶好のエサとなる物質がつくられ、高分子炭水化物に合成されないまま停滞する。
この代謝系の狂いの要因として、特にN／K比、K／Ca比、C／N比をはじめ、微量要素の栄養バランスの崩れ、そして農薬の害を強調していることである。
従来は、養分が不足すれば、それ化学肥料、害虫が出たらそれ農薬、病害が出たらそれ農薬、といった、一方的研究がまかり通ってきた訳である。
小豆の落葉病＊が出たら、落葉病の病菌を探してそれを殺す農薬を早く開発せよと、農業者も農業団体も躍起になって叫ぶのである。
新田恒雄＊がそんなバカなこと考えなくてももっと簡単な方法がある。落葉病にかかった小豆のカラモノで、堆肥をつくり、それを土壌にかえせば、落葉病は再発しないといえば、「なんだそんなことか」とガッカリした表情をするのに驚くのである。クスリを飲まねば病気にかかったと思わない人情が、そのまま農薬をまかねば作物病害が治らぬという固定観念から、堆肥づくりで病害がなくなるといえば、ガッカリした不満気な顔をするのは、どこかが狂っているとしか、いいようがないのである。
学者や研究者ばかりでなく、農業団体や農業者までが、いかに「化学肥料と農薬病」におかされているか、その病根の深さに驚くのである。

「土壌および作物栄養の診断基準」が、北海道試験会議で、画定したのは昭和五十六年である。当時は、土壌改良が主目的であって、施肥の合理化を目的としたものではなかった。
しかし、この基準の数値は、構造改善の一部として、私の記憶では、昭和五十四年には出来ていた。帯広

市の場合、構改事業の予算で印刷に附し、市内農家の全戸に配布している。後になってであるが、市の農政担当者が、その存在すら、理解していなかったのに、唖然としたことがある。

昭和五十八年に、この診断基準が、一部改訂されて、ネライは農業者の合理的な施肥管理のためと、その活用について、一歩踏み出したのである。

さらに、これが試験機関の協力により、第二訂が行われた。

「この診断基準値は、とりもなおさず、各作物の生育に、最適な土壌の理想的状態を、数値化したもので、土壌診断の場合、分析値の測定結果とあわせて、現地のほ場での土壌断面、作物の生育状況、栽培管理法等をふくめて、調査結果を総合して、診断する配慮が必要である。

土壌診断基準は、今後更に、試験研究の成果に期待すること少なくないが、地域の営農指導にあたっては、営農に役立つ活用を期待するものである。」と〝はしがき〟はしるしている。

「最適な土壌の理想的状態」が、北海道の診断基準では、水田、畑作共に、多量要素、微量要素を含めて、リービッヒのいう、バランスのとれた上限、下限の適正巾のある、基準数値をもって示している。素晴しいものである。私は、この先進性に感銘している。

おそらく他の府県で、ここまで行き届いた診断基準を示しているところはない筈である。

しかも趣意とするところは、これからは農業者が営農する場合、毎回各ほ場ごとの、土壌分析を行い、その上で合理的な施肥設計を、行ってほしいとの提示がなされた診断基準だということである。

昨年（平成元年）三月七日、十四日、二十一日の日本農業新聞に「土壌診断・現状と問題点」という論稿を、道立上川農試の坂本宣崇土壌肥料科長の執筆により、連載されている。

「土壌診断が国の事業として、推進されたのが、昭和四十一年からである。以来五十四年まで、道内六十

の農業改良普及所に、測定診断室が設置された。
いっぽう高度に自動化された分析機器、データ処理システムによる広域診断施設が、ホクレン、十勝農協連にそれぞれ五十四年、五十七年に開設された。
○　土壌改良剤の勧告を中心とする診断では、分析する側も、農家の側も、満足できるものではなくなった。
○　施肥基準は、今日までは、まったく土壌診断にもとづいたものではなかった（これは重要なことである。）
土壌診断の目的は、各自の各ほ場の土壌養分を知り、もっとも農家のフトコロがもうかる施肥量を算出することである。
診断にもとづいた処方せんづくりは、まだ緒についたばかりという状態にあることは確かである。
○　以上のように、昭和の最終年になって、ようやく、未熟な点をかかえながらも、一応の格好がついてきた。
○　農家の個々のほ場について、土壌分析の結果から、各作物に対し、正確に施肥量を示すことは、困難な作業であるが、また度胸のいる仕事である。
何故なら、土壌の実際により、気候気象により、影響されるところが大きいから、これらの知識が足りないと、結果的に誤った答えを出しかねない。
○　正しい土壌分析と診断のつみかさねが、土づくりを方向づけ、施肥合理化の具体化を進めることができる。
○　課　題
土壌診断にもとづいて、施肥量を求めると、今日では、多くの作物において、従来の施肥量より、ほとんど少なくなるのが事実である。
その程度は、畑作物ではカリ、苦土、リン酸の順に大きく、水田では、リン酸、苦土、カリの順である。

○　水田について、昭和六十～六十三年まで、上川農試の調査結果では、慣行と土壌診断にもとづいた施肥量との比較では、リン酸肥料のコストだけでも五十八％節約できることが判った。

この数値を試算した筆者にとっては、本当にショッキングな数値であった。

六十三年の全道水田の肥料代は、およそ一〇〇億円以上と、推定されるから、コスト低減可能額は二十億円以上と見こまれることである。

しかも土壌診断による節減は、規模の大きい農家ほど大きく、コストに占める肥料代の比率がより高くなっているからである。（二十億円の肥料代を、この減反と自由化にゆれている時代に、ムダに施肥しているという事実は、大変なことである・木呂子註）

○　昭和六十三年に、上川中央部の五農家で、土壌診断にもとづいてリン酸、カリを、従来より半減、即ち、リン酸十キロを五キロに、カリ八キロを四キロに、窒素だけは、慣行の八～十キロそのままとし、品種はユキヒカリで、栽培比較を行った。

結果は、反収が増加、千粒重の比重も増加となって、あらわれた。リン酸カリの慣行は、その半分がムダまきしていた結果としてあらわれた。これまた大変なことである。（表2）

○　土壌診断も、養分の豊否の判定に使用している時の従来のやりかたでは、たいして役にもたたないかわりに、失敗も少なかった。

しかし、今後、それぞれの肥料について、何キロ施肥、何キロ減肥と勧告するようになると、誤診による被害が出てくるものと、覚悟しなければならぬ。

表－2　土壌診断に基づいてリン酸、カリを従来より減らした水稲栽培例

処理	精玄米収量 キロ／10アール	穂数 本／平方メートル	一穂もみ数	発熟歩合 %	千粒重 グラム
慣行施肥	601	627	61.8	72.6	21.1
診断施肥	617	612	62.6	71.5	21.2

1）慣行－診断：リン酸10－5、カリ8－4キロ／10アール
2）窒素の施肥量は慣行、診断とも8～10キロ／10アール
3）試験は1988年に上川中央部の5農家で実施、品種「ゆきひかり」

農家から、減収補償せよと迫られることを思うと、今から胃が痛くなる。

○　現時点では窒素に関する診断項目はない。この診断基準の策定に鋭意努力中で、今年度中には仕上げる予定である。

○　原子吸光分光光度計が、普及所の診断施設にも設置されるようになり、銅、亜鉛、マンガンなどの、微量要素の診断が可能になった。

微量要素の欠乏対策は、症状が確認されれば、不足要素について、所定量を施与することで、比較的容易に解決できる。

（これは三好洋の「土壌診断法」について触れておいたが、「土壌診断基準」に、微量要素の基準数値が、明定されている北海道の場合、基準により補給するのが原則で、土壌診断にしたがうのが当然と考えるべきである。但し、微量要素は重金属だから、基準の適正量以上を施用することは、過剰害が出るおそれがある。

私は、この点は、中島常允＊の理論により、所定量の三分の一ずつ、三年に分割して使用することがのぞましいとする。水田地帯と雖も、畑作、特に転作の土地利用からも、三年分割による微量要素の施用を奨める。不足量の三分の一補給だけでも、奇跡的なぐらいに威力を発揮していることが、ほ場実験で判っている。三年かけてバランスをとり、その結果を比較試験（慣行・試験）によりカラダでおぼえることが大切であると考える。ただし、年二回どり、三回どりをする野菜の場合は、毎回の土壌分析により、土壌変化を確認しておく必要がある。

土壌は施肥前、施肥後、毎回その性状を変えていくものである。山口県の一年九作どりホウレン草の栽培者は、毎回、微量要素が吸収されてなくなっていることを、土壌分析によって確認している。三分の一施用は重金属の害を避けるためにも正しい取扱と考える・木呂子註）

○　「安全な農産物は、健全な土壌にこそ育まれ、土壌の健康度は、土壌診断でチェックされる。

土壌診断は、多くの問題をかかえているが、低コスト生産、健康な農産物生産に確実に寄与するものと

中島常允氏

考える。故に、今後とも十分な投資が、必要である。」

以上で坂本科長の解説の要点を終る。

昭和三十年代のはじまりに、農民土壌調査の地域活動を提唱したのが、当時まだ農林省にいた横井利直である。後に東京農大に転じて土壌学を講ずる。私はこの人の「土壌調査の手引」と、運動の考え方に共鳴し、北農試出身の飯塚仁四郎と共に、富良野農協に計画をもちこみ、水田だけであったが、芳川生産部長を中心に、三年がかりで土壌調査をやった、ささやかな体験を持つものである。

こんにち、ここまで土壌診断体制が、整備されてきたので、各地域ごとに、青年を中心にした土壌診断運動をおこす必要性を痛感するのである。このことによって土壌診断結果を、農業者の自己責任において、実践していこうとするものである。

十勝の場合でも、海外の農業実習なり、視察に出かけ、ホームステーしてきた青年たちは、土壌分析なくして、施肥設計なしという、海外現場を体験し、彼らが口々に指摘するのは、むしろ日本の農業者の土壌診断の対応が遅れているとするのである。まだまだ現場では、三要素の分析でさえ、まともでないのに、今さら何が微量要素だといって、押しつぶされてしまう傾向もある。そうした青年たちを勇気づける必要がある。

診断基準が、個別ほ場の施肥設計のためと明確に国立道立農試、道改良課と、統一された意志決定され、施肥標準と共に画定しながら、未だに、これを否定するかのような研究者や普及所の発言もあるが、これは土壌分析の活用普及の妨げといいたいのである。

しかも、診断基準には、サブタイトルで何と書いてあるかというと、「北海道農業試験会議〝普及奨励並

びに指導参考事項“」と、しるされているから、今さら何をかいわんやと云いたいのである。

農業者がいつ迄も指図される農業から、主体性を確立し、良心的な学者、研究者、普及員の協力を受けつつも、自らの責任体制のもとに、指図されない、科学的な真実の土づくり、正しい土壌管理施肥管理の大道を歩み出して貰いたいものである。

私の当面する北海道農業への提案は次のようなものである。

一、あたりまえのことをあたりまえにやる。

二、余計なものは減らす、足りないものは足してやる。

三、肥料は半分に、農薬は三分の一に。

四、秀品率九十五パーセントの農業を。

これだけで、安全、良質、コスト低減の糸口がつかめるということ。

土づくりの喜びは、現状では五年たったらつかめる。十年たったらつかめるというのでは困る。今年やったら、今年やっただけの喜びがつかめる。それがホントウの土づくり運動だと、私は考えている。だから、まず土壌分析をやる。土壌分析は土づくりのすべてではないが重要な手がかりの一部である。施肥標準、施肥対応を参考にして、施肥設計をたてて、実践を進める。農事暦にゲタをあずける農業はやめにする。診断の結果の減肥は、大胆率直にやること。バランスのとれた土壌管理の上に、作付けした時は、農薬はまかない。農薬にたよるのでなく、作物の健康、自律的抵抗力に信頼をおくこと。病気も虫もこないのに、農薬をまこうとするのは、敗北主義だ。ムダなことはしない。じっとガマンの子で、ひとつひとつ体でおぼえ、おぼえた喜びを重ねていくことが大事だと思っている。

日本農業新聞の報ずるところによれば今年八月、京都で世界の土壌学者二〇〇〇人が集まって、第十四回

国際土壌科学会議が開かれるというのである。この国際会議が、東アジアで開催されるのは、こんどが初めてだそうである。当然、水田と稲作問題がとりあげられることが予想されている。今回のテーマは、「生命と環境をはぐくむ土」で、世界的規模で問題になっている、砂漠化や、塩類化、有機物の減少など、土壌悪化の原因や対策について、研究成果の発表や意見交換が、行われるものとみられている。

この会議のための北海道委員会が主催で、前哨戦といったかたちで、「国際化に対応した北海道農業の再構築」というテーマで、三年前の九月に、札幌で講演会が開かれたことがある。

その際の、田中明国際土壌科学会長の講演では、「生命と環境をはぐくむ土」ではなくて、「人間と環境をはぐくむ土」を、テーマとした講演であった。

これではニュアンスのまったくちがった〝土〟の見方になるおそれがある。「人間中心主義」「人間至上主義」の見方と、〝生命〟といえば人間を含めた動物はもちろん、植物も含めて、生命あるものすべてが共生、循環、調和のとれた、より生態系生命系に即した土壌科学の立場で、環境のことも考え合っていこうという見方とになるからである。会議は、一週間で、土壌物理、化学や、微生物などについて、四十五のシンポジウムが開かれるとのことである。砂漠化や、土壌侵食、連作障害などによる土地の悪化が、現在の割合で進めば、今後二十年のうちに、世界中の耕作可能な土地の三分の一が失われ、また、今世紀末まで、熱帯林が半減することなどが予測されており、温暖化と土壌の関係や、熱帯農業の持続的開発のための土壌管理など、地球規模の環境問題に焦点があてられている、というのである。現に中国の北京の郊外では砂漠化がまちの十五キロメートルまで迫っているというのである。

実行委員長の熊沢教授は、「土壌は、農業生産の基盤として、人間の生存を支えていると同時に、環境浄化機能をもっており、環境保全の上からも、重要な役割を果たしている。しかし、いったん破壊されると、回復するのがむずかしい。土壌保全のために、日本がどのように寄与できるかも、積極的に考えていきたい。」

と開催の意義を語っている。この熊沢教授の考えかたに共感するものである。

さて、学会だから意見はいくらでも、いろいろあってもよいのだが、この国際会議のデモンストレーションとして札幌講演会における北大教授田中明会長の「北海道農業に対する私見」は、土壌肥料学者の発言だけに、今日的段階から見て余計にひっかかるものがある。これが北海道の農芸化学の権威というのだから恐れ入る。

一つは、「個々の農家の生産コストを軽減するためには、一口にいって、優良品種の密植多肥栽培が必要である」と主張し、アメリカのトウモロコシの単収増を事例としてあげていることである。

二は、「地力や化学肥料についてもいろいろ問題が多い。地力維持のために有機質肥料を使うべきであり、化学肥料を使いすぎているとよくいわれる。しかし、有機質肥料を長年信奉してきた中国においてさえ、有機質肥料の使用が減少し、化学肥料の消費がのびているではないか」と強言していることである。

「有機質肥料の効用、地力重要性が一般市民の間で、常識的に口にされ、高くても買う人が多い。この意味では焼畑農業をやれば、一般の消費者は喜ぶのかも知れない。しかし、これでは、食料が非常に高くつく。化学肥料を使った作物でも安全なのだと一般の人に、訴えていかねばならぬ。土壌肥料研究者は、ホントウに農家や消費者の身になって、コスト低減の立場にたち、長期的視野から、従来の定説的なものにとらわれないで、研究を展開すべきであろう。」

三は、「アメリカの篤農家は、多量の化学肥料を与えて、トウモロコシと大豆を、ほとんど連作状態で長年栽培し、非常に高い反収を得ている。いずれにしても、大量投入、大量産出が、生産コストの切り詰めの道のようである。」ここでは、「従来の定説」が、話が逆になっている。

この話を私は、国際土壌科学会長という立場の北海道の土壌肥料学者田中の発言を、三年たった今も、今

時どんなに、読みなおしてみても、考えなおしても、考えなおすほど、ひっかかるのである。北大農芸化学の病痕は深いのである。ましてや「人間と環境をはぐくむ土」という田中の発想は、「生命と環境をはぐくむ土」という、今年の肝心の国際会議の主テーマとは、どう整合するのであろうか。

私は、この国際会議で、一三一ヵ国から集まるなかで、日本の学会の発言が、どう討論されるものか、集録を一読する日を、楽しみにしているのである。満座の中で日本の恥をかかねばよいと思っている。

先進国のなかにあって、ＦＡＯの世界食糧会議に於て首相自らが、「環境を損なわない農業を」というテーマで、講演をしたり、今また二〇〇〇年を目標に、農薬と化学肥料の使用を半減する法律を、今年のうちに成立させようとしている国がある。それがオランダである。オランダは面積が四・一万平方キロメートル、人口一四八四万人の小さな農業国である。（北海道面積の約五十パーセント、人口密度は日本と略等しい三四四人）今年五月二十一日の日本農業新聞に、このオランダのブラックス農相の談話がのっている。

「現段階では、二〇〇〇年までに、農薬と化学肥料の使用量を、完全に五十パーセント減らす計画である。国会の承認次第、今年末にも立法化される見込である。政府は、昨年五月に、二〇〇〇年を目標に国内の総合的な『環境政策計画』（ＮＭＰ）をたてたが、地下水の汚染防止対策もこの一環である。土地、空気、水は、これを使っているものが、責任をもって、その汚染を防いでいかねばならぬ。農薬、化学肥料の使用規制は、農業全般にわたる。とにかく、国土の八十パーセントを占める農地に、散布する化学物質を五十パーセント減らすことで、土壌中の残留量を、七十パーセント減らし、地下水への浸透をゼロにすることが目標である。

先進国農業にとっては大改革である。これぐらい過激にやらないと、国民の生命と環境を、まもることができない。農薬と化学肥料を急激に減らすことは可能である。農家は、今まで必要以上の量を、頭で考えた

末でなく、あまりにも無意識に散布してきた。さらに、これらの使用量を減らせば、農産物の品質はかえってアップするであろう。農業者並に農業団体から、目標年次を、少しのばせという要望はあるが、農薬・化学肥料の半減は賛成を得ている。われわれは、国内の農業生産量を、今以上に増やす必要はないと考えている。昨年の農畜産物の総輸出額は、約四兆円だったが、このレベルが維持できれば満足である。

農政の最大の課題は、環境を汚染しない農業生産を目ざすことである。地球温暖化とＣＯ２、ＮＯｘの問題について、アメリカや日本が尻ごみし、オランダが先進国の中で、強行にリーデングしていることについて、オランダが自分のところの水没の危機意識から、強硬のように見られているが、心外である。これはまったく誤解で、既にデルタ・プランによって、堤防のカサ上げは完了している。海面下の土地は沢山あるが、ぜんぜん心配していない。われわれが、地球の環境問題で積極になっている理由は、他でもない。オランダのような小国だけで、いくら環境政策に真剣にとりくんでも、空気や水などの地球環境を守りきれるものでないことである。国際的な対処を必要とする危機意識から出ているもので、オランダ国民の強い支持によって、オランダ政府は国際行動をおこしているのである。」

（なお現代農業誌平成二年五月号は、オランダ農民組合代表、アリー・バン・デ・ブラントの「環境汚染が農業を追いつめ、農業が公害をもたらす」―この悪循環をたちきるべく、オランダでは、環境と共存する農業にむけ、動き出した―という、農業者の現状からの報告が、掲載されている。一読されたい・木呂子註）

世界は既にすべての国々が、連帯して、地球環境のことを、真剣に考え、まもっていかねばならぬ時代に変ってきている。農業という産業がその枠外で考えていける時代でなくなったことである。

全農業者のたった一パーセントが五十万ドル以上の所得を得ていて、しかも、その国の農業純収益の四十五パーセントをおさえている。この一パーセントの企業的農業者の利益保護のために、国際農産物市場での

自由化要求を出しているのがアメリカであって、企業家農業中心のアメリカの強引な戦略に対し、世界の人々は、危機感を受けとっている。ECとの衝突はその現れである。

農業が、単に安い農産物を供給すればよいという機能だけのものではない。地球環境、その地域、地域の自然環境から、文化環境の保全にまで、深くかかわっていることである。

熊本の菊池養生園では「医は食に、食は農に、農は自然に学べ」と医療と土づくりの関係が指摘され始めている

アメリカ国内の足もとから、地力消耗のリスクをおかしながら、重装の機械力と巨大な化学力で、大規模に生産する農業構造に対し、消費者の側から強い疑問が出され、市民活動となって、一九八五年法附属法の有機農業の立法化が促進された経過がある。(註2)

今こそ地球にやさしい、土壌肥料学の道が国際的に、しかも市民レベルまで求められているのである。

註1　国際イネ研究所の写真に、AZOLLAとあるので、フィリピンではアゾーラとよんでいる。変った植物で、水生シダ類であるが、この葉のクボミに、アナバエナ・アゾラエという青緑色の藻類が共棲し、これが空気中の窒素を固定するというのである。フィリピンでは、一九八三年、全国アゾーラ行動計画(NAAP)を策定した、という記事を見つけたので、附記しておく。

註2　アイオワでは一九八七年州法で地下水汚染対策として、農薬と化学肥料に特別課税を附加し農業化学物質削減の研究調査・試験の財源に充てている。又、六〇〇〇種以上の農薬の登録税により年間四〇〇万ドルの財源で、アイオ

ワ州立大学の「持続性可能な農業」開発研究・情報・教育のプロジェクト予算に使用、この金額は連邦政府の同種資金を上まわっている
という。農業州の積極性をうかがわせる。

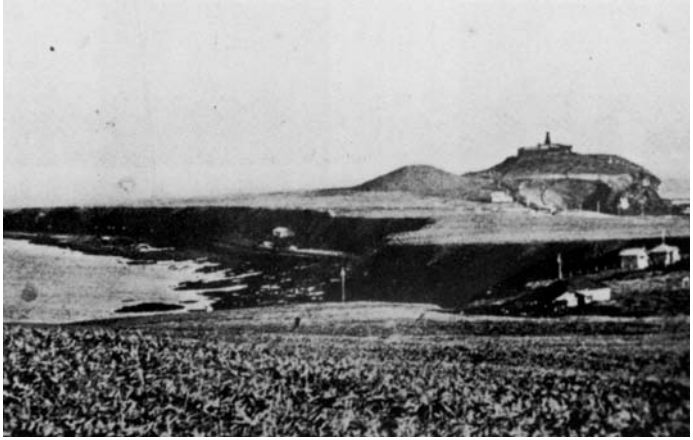
平成二年　地域研究所年報第十三号　旭川大学地域研究所

ソ連抑留について語る

シベリア抑留についてお話しろということであります。今となっては、もう五十五年前の戦後体験であります。いつのまにか半世紀を経てしまいました。しかし私にとってのシベリア体験は、私自身の人生にとり、今も鮮烈であり、戦後、ずっと私の心の底でひきずっていて、未だにこれで終わりだということになっておりません。

共に敗戦の日まで五年間、苦労を共にしてきた戦友たちが、思いもかけないシベリア抑留の身となり、うち七名をシベリアに失ない、未だに故国の土に帰ることなく、凍土の下に眠っていることであります。遺骨収集もまだ一人も実現いたしておりません。あのノモンハンの戦争の後でさえ、戦場整理といって、敵味方の遺体の収容が行われているのです。ましてやシベリア抑留は、私たちは戦争終結の命令により、また矛を交えることなく、自ら武装を解除し、その上一方的な強制連行とは、ポツダム宣言＊違反であります。

私の敗戦は樺太であります。兵科は要塞重砲兵で、四門編成の九六式十五センチ・カノンの固定砲台であります（射程は二十六キロメートル）。宗谷海峡の大泊と稚内を結ぶ連絡船の援護とアメリカ潜水艦の日本海侵入の阻止、撃滅を任務としていて、昼夜の別なく監視、二十四時間の戦斗体制でありました。陸海空協同でアメリカ潜水艦ワフー号（艦隊航洋型）を撃沈した戦果をあげています。これは要塞重砲として日本陸軍の建軍以来唯一の戦果でありました。



陣地より西ノトロ灯台を望む

宗谷岬から僅か四十キロメートルの対岸で、晴れた日には双眼鏡で建物まで見えて、二〇〇センチメートルの探照灯で新聞が読める距離でありました。

八月二十三日には、樺太八八師団とソ連軍との停戦協定が成立し、師団長以下幹部は豊原の博物館に収容されました。私の属する中隊は、北海道側とは直接、海底電話が接続されていましたが、二十四日にはまだソ連軍の上陸侵攻もないまま、一方的に味方によって電話が切られてしまいました。ソ連海軍の艦艇が二隻、白旗を掲げて上陸してきたのが、一週間もたってから後の八月三十日です。その間、我々は体制を維持して、樺太島民の秘かに脱出するのを援護しておりました。

上陸してきたソ連海軍による武装解除と同時に、軍使として誰か大泊基地海軍司令官までの同行を求められましたので、私は先任将校としてソ連艦艇に乗船し、大泊に向かいました。

驚いたことに、こちらはロシア語は全然ダメなのに、彼らは英語で話しかけてくるのです。ブロークンイングリッシュでしたが、英和辞典をなかにおいて話し合うことができました。まず船の動力はガソリンエンジンで、スクリューは可変ピッチで、ヘリコプターのようにピッチを変えて前進後退がブリッジにいてできる訳です。ものすごいスピードと旋回能力をもっていることに驚かされました。

出された食事は白パンとハムエッグ。パンもコーヒーも食べ放題、飲み放題といった出しかたです。居住

性能はすばらしく良く、日本の海軍とは全く異なり、列車でいえば一等寝台といってよく、しかしこの接遇もたった一晩の船の中だけでありました。

上陸して大泊港桟橋の先端にある埠頭の屋舎で、ソ側の基地司令官と直接武器引渡の手続を終え、あとは市内の大泊女学校に連れていかれました。原隊に帰せとの私の主張にかかわらず、中隊の全員はいずれここに到着するから、それまで待ってろとの話であります。

たまたま学校の図書室をのぞくと、ひどく荒らされていて、その本の山のなかから八杉貞利の岩波ロシア語辞典、同じく八杉の文法書を見つけました。さらに折口信夫の万葉辞典、これはなかなか手に入らない希観本です。それと短歌全集の一冊。これだけあればしばらく退屈しないと嬉しかったですね。

さてこの時何の気なしに窓を開けて外を見ると、下は崖で、崖下の路上にはなんとソ連軍の自動牽引野砲が、延々と続いているではありませんか。樺太師団には山砲の一個大隊しか配備がないのです。全然、火力装備の違いをまざまざと見せつけられました。

わずかこの二日間で、ソ連の陸海軍の片鱗にふれたのですが、この時の驚きが五十年たった今、その秘密と実相がようやく判ったので、ここでお話しておきます。

一九四二年（昭和十七年）モスクワで米英ソの会談が行われ、アメリカは武器貸与法により、直ちにソ連に対し早くも輸送船による援ソ物資を、北太平洋経由で六七〇万トン、ウラジオストックに揚陸しています。さらに数千トンの資材をアラスカ経由でシベリアのヤクーツクに空輸しています。

貨物は戦車、航空機、トラック、ジープ、各種兵器、燃料、食糧等で、船舶は貨物船をソ連国籍に変更し、乗組員もソ連兵によって運航されたといいます。

物資ばかりでありません。ソ連太平洋艦隊の一万五〇〇〇人の人員をアラスカに派遣し、アメリカより引渡された一三八隻の艦艇をもって、アラスカのコールドバ（海岸基地）で、数ヵ月間にわたり、アメリカ側

によって訓練と演習をかさねた上、フリゲート艦、掃海艇、駆逐艦、上陸用舟艇等の引渡しを行っていたのであります。

このことは、ソ連海軍のクズネツォフ＊海軍上級大将の回顧録によって、明らかにされました。私がソ連海軍との、僅か二日間の遭遇体験の一々を裏づけるものであることに、今更のように感慨無量のものがあります。

九月二十日、何故か集結した将校集団だけが、下士官・兵たちと切り離されて、貨物船に乗船、船倉に積みこまれた丸太の上に起居し、大泊を出港、二十五日にはウラジオに入港、駆逐艦、潜水艦にかこまれて軍港の中で停泊。二週間にわたり、一日に将校用水筒の小さなフタコップに、たった二杯の大豆の煎豆の給与です。要するに貨物船には炊事用の水が足りないという理由です。このためほとんど全員が下痢症状。水分の補給もあまりなかったことを記憶しています。栄養失調症状の患者が続出しました。ソ連では絶対に生水は飲んでいけないことになっていましたからなおさらです。

十月五日からピョートル大帝湾を望むバラック建ての収容所に入って、腰痛と不眠症、歩行困難が重なり、遂に重症患者となってしまいました。

不眠症からくる幻覚が毎晩続いて、しきりと死を覚悟する時期がありました。現に同じバラックにおられた十勝農学校の先輩で、名前は失念しましたが、危篤に近い状態におちいり、バラックから姿を消してしまったことを、今も憶い出します。

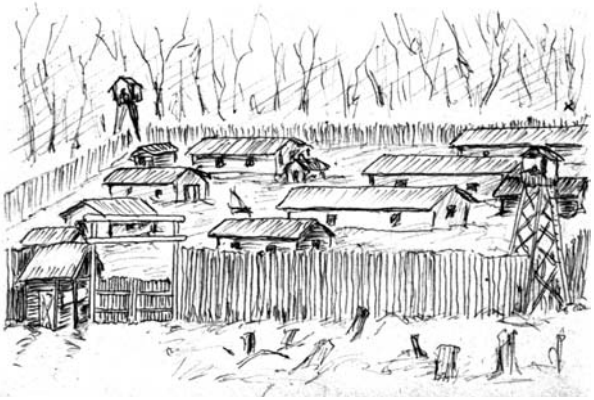
十一月三日、明治節だという日に移動ということになり、私は貨車でなく、寝台車にのせられて、ウラジオから更に南下して、ポシエット湾というソ連の潜水艦基地にのぞむ、クラスキーノという草原で天幕生活を送ることになりました。ここは豆満江の河口に近く、ソ連、満州、朝鮮とお互いに国境を接するところです。

ここで満州と朝鮮から移動してきた将校集団と合流したのです。ところが朝鮮からきた部隊がメンタイという棒鱈を食糧としてもってきていて、その骨と皮をさかんに草原に捨てているのです。私はそれをせっせと拾い集めて、平たい石の上で叩いて砕き食べました。これがよかった。十一月の寒風荒む天幕生活乍ら、まだ雪のこない草原で、腰痛が不思議と軽くなり、後々の二年半に近い重苦しい生活のなかで、あまり人に迷惑をかけないで一緒について歩けるようになったのは、ありがたいことでした。

十一月末になって二〇〇〇名ずつの梯団が編成されて、順次また移動です。こんどは大型貨車に二段装置になっていて三十名ずつ乗車。真中にストーブがおかれ、床の隅に穴があってそれで小便の用を足し、大便は長い停車時間に限り下車が許され。貨車の下で用を足します。

列車ははじめ夜間は走っていて、昼間は停車していることが多く、車外の様子はなるべく見せないためでなかったかと思います。ハバロフスクはとうにすぎて西に向かって走っていることは判りました。かつて満州から鉄道で結ばれていたカリムスカヤ駅という昔の国際駅ではじめての下車です。駅近くの公衆浴場に案内されました。シャワーのしかけで、三カ月めの入浴です。衣類は全部リングという鉄の輪につるし、シラミ退治のため熱気消毒です。下着は洗濯消毒ずみのものを交換です。ここでなるほど着ている下着まで国有財産になっていて、私物という考えがないことに気がつきました。これは後々、死者埋葬の際、下着まではぎとり、まる裸にして埋葬しましたが、その下着はまた洗濯消毒されて、誰かが着用する仕組になっているということです。

バイカル湖をすぎて列車は更に西に走ります。この時、気のついたことは、もう十二月の冬至に近くなおさらですが、太陽は雪原はるか地平線に顔を出して高くあがることなく、列車と平行して進み、そのまま沈んで夜になってしまうことです。これは北緯六十度に近いことを示すもので寒さは一層きびしくなって参りました。何日かが過ぎました。ウーハーをすぎたのでウラル山脈を越えたことに気がつきました。もうヨー



ラーゲリ（収容所）の全景

ロッパ・ロシアです。クイビシエフでボルガ川を渡り、更に西に走ってドン川の上流部、タンボフ州のラーダというところで下車。ここは独ソ戦の際のソ連軍陣地のあったところで、ウクライナにほど近いところです。丁度一ヵ月の貨車の旅で十二月二十四日でした。ゼムリヤンカといって地面を三メートル掘り下げ、それに丸太を並べて屋根とし、さらに土を被せて草をはやした洞窟兵舎です。ドイツ、ハンガリーに、日本を加えて四万人近い収容所です。少数のアメリカ、フランスの兵士もいました。

ここで正月を迎えます。私は高速道路の築造工事に従事していましたが、工事現場の往復で、道路の両側のブッシュのなかに目だたないように平行して、ケモノ道のような道があります。これは夏の暑さを避けるための路で、婦人がハダシで歩いている。靴を片手にさげて、石畳の街にたどりつくと、足の砂をはらって靴をはく。成程と感心しました。このあたりは氷河時代が終わり、氷河に含まれていた岩屑が堆積してできた土壌でレス＊といい、まさにショウロフの『静かなるドン』の中の景観です。

さらにここから六十キロほど南下して、スターリニッツというコルホーズで農作業に従事しました。ここではトラックが出入り可能な斜坑のように地面を掘り下げた馬鈴薯貯蔵庫で、二ヵ月寝起きしました。ケロシンランプ＊の灯りでゴーゴリの短編小説『地霊』（ヴィー）を手にいれて読むことができたことはありがたいことでした。もうこの辺一帯は黒土地帯です。ロシア語でチェルノーゼムといってどこまで掘っても黒

い土です。深い肥沃な土です。

ドクチャーエフ＊がこの地帯で黒土の研究を進めて、世界ではじめて土壌生成の秘密を明らかにした土壌学という学問の発祥の地であります。

土壌とは単なる岩石の風化したものではない。全生物活動による地質学的悠久の時間の中で生成された腐植の豊かな土壌であることを喝破したのです。ここでの暮らしは誰でも体験できるものではない。炎熱下での苦しい生活でしたが、貴重な観察ができました。

急に連絡が入ってラーダに戻れとのことで、夜から朝にかけて六十キロの道を歩き続けて帰って見るとラーゲルはモ抜けのカラ。あとにソ連軍の戦車隊が入ってくるというのです。各地に散らばっていた所外作業隊が戻ってきて、また貨車にのせられて移動です。

こんどは列車は西ではなく、東にむけて走り、ボルガ川を渡り、あわよくばウラルへと思っていましたが、着いたのがタタール自治共和国のカザンより更に東のキズネルという小駅で下車。ここから八十キロ南に歩いて、ボルガ川の支流カマ川の河畔都市エラブカという町に入りました。昔、修道院のあったところで、はじめて人間らしい扱いを受ける居住でした。よくもまあ穴居人のような土の中ばかりの暮らしの一ヵ年でした。

ここは将官をはじめ高級将校、満州国、樺太庁の高級官吏もおりました。お世話になった樺太庁の白井、斉藤部長、本斗町長の森さんとも二年ぶりで出会いました。ここで短い期間でしたが建国大学教授の半田さんを囲んでプラトン哲学のゼミをやったり、後に日本詩人協会理事長となった国学院大卒の高橋渡君（中山と改姓）と宮沢賢治の研究会も開きました。

ところが、翌四十七年の正月早々、当時、死の伐採隊といわれ、仲間があまり行きたがらない、ボロショイボール（大森林）という、ピョートル大帝の時代に、船舶用材林として造林された五〇〇〇ヘクタールの

ヨーロッパ赤松の人工林、まことに見事な森林の伐採に出かけることになりました。またもやゼムリヤンカの洞窟暮らしです。伐採、運搬、筏作りの三部門に分かれていて、私は少年時代から登山体験があり、伐採も多少経験していたので、伐採組長になりました。とにかく事故をおこさないことが組長の責任と考えて、何しろ樹高三十メートル近い大木ばかりの林なので、お互いに距離をとること、木を倒す時はお互いに気力をふるって、大きな声をかけあうこと、よそからとんでくる木の枝や、倒れる時の大木の根ぎわのはね返りに注意すること、このことに力をいれたことでひとりも怪我人を出さずにすみました。

ラーゲリのバラック内部

何しろ森林伐採といっても、使う道具はピラといって一メートル長さの二人で両側から押す、押し引き鋸です。ウケを作ったり、根株の皮をはつったり、三十メートル以上もある木の太い枝を全部とり払うのには、柄の短い金太郎鉞（タポール）だけです。スタビレといって林の中を丸太棒（軍隊用語では担棍）を使って、一メートル高さに積みそろえるのです。ロシア人の監督には、こうしてやらないとノルマの計算ができないからです。筏材はすべて九メートルに、薪材は二メートルに伐り揃えるのです。以上は作業が順調にいった時の話で、ウケの角度が悪いと、刻印のない木にひっかかる。刻印のない木にひっかかった時は、下の方から二メートルごとに裏がけで伐り落としていく。ストンストンと落として倒れるまで伐り落とす。こうなる

とノルマ達成の手順が狂い、泣くことになる。

切株はどうかというと、根まわりの樹皮はきれいに全部裸にはがさねばならぬ。松毛虫の幼虫を探し出し、あれば袋にいれて持ち帰る。これをストーブの上で焼くと、プウとふくれる。居あわせたものたちの口に入る。蛋白質の補給になる訳、少しは力の足しになったのではないでしょうか。

ドイツ流の実にきびしい森林管理の方式に、つらい思いはしたが、学ぶべきところ大きく、むしろ感銘を深くしました。ピョートル大帝の次はドイツ人女帝エカテリーナであり、タタールの隣国は沿ボルガドイツ人共和国といって、ドイツからボルガの流域にさかんに宗教移民をはかったところです。ましてこの森はオランダで造船技術を学んだピョートル大帝自らの命令でボルガ河を運航する船舶用木材として造林されたものでありました。三〇〇年前が息づいているという感銘でした。

ピラを使っての森林伐採

三十メートル近い木の太い枝おとしは、何しろ柄の短い金太郎鉞でやるのですから、腰に負担がかかり大変です。北海道では柄の長いサツテ鉞でしょう。この落とした枝葉を、冬は雪の上で全部燃やすのです。鉛筆一本の太さの枝も残せません。白い雪の上だから目だちます。これがノルマなのです。夏はどうするか、枝葉を集めて山積し、そのまわりを巾五十センチ、深さ五十センチの溝を掘るのです。これで林床がきれいな理由が判りました。季節がくると林床いっぱいの野苺がとれます。昼休みの一時間で飯盒一ぱいとれるのには驚きました。

また林縁の白樺に鋸で少し傷つけ、V型の鉄片をうちこみ、下に水筒をおき樹液をとります。これが甘い柿の味です。見あげると何年か

前の樹液をとった傷跡があり、ロシア人も同じことをやっていることが判ります。夏は白樺の小枝を焚火であぶり口に入れると浅草飴の風味がします。こんなことで少しでもストレスを解消していました。

ここでは、普通二ヵ月か三ヵ月で作業交替が慣例となっていました。ノルマはきちんとやる、事故はおこさないということで、収容所では三月になっても、五月になっても、エラブカに帰れとは言わない。ついに八月になりました。冬山、春山、夏山と、ほとんどの季節の変化を森の中で暮したことになります。

このままおとなしく黙っていては、いつまでたっても帰れないことが判り、岩手県水沢出身の気骨のある渡辺大尉を中心に結束して、たとえ食糧を絶たれても、三日間は水だけでしのいでいこうと、作業ボイコットをやることになり、三〇〇名の将校作業隊でしたが、ハーグ条約＊をタテにとってストライキに入りました。

朝、出動体制をとり、全員がゲートの前に座りこみに入りました。収容所長は、あわてて重機関銃を正面に据えて、おどかしにかかりました。丁度昼近くになって、カザン政府から日本人将校が暴動を起こしたということで、政治部将校がとんできました。そこで渡辺大尉が、収容所長の無謀なる取扱態度、特にメーデーが過ぎてからカマ河の氷がとけ、筏班の作業がはじまり、ノルマが無茶苦茶に追加されるのです。冗談ではない。崖の上から次から次と投下される原木を、流水の上で受け止め、筏に組んでいくのです。白樺の枝の組輪と木のクサビだけで、九メーター角に筏を組み、鳶口なし、ワイヤーもカンもまったくなし。さらに二メートルの薪材を積載していく。まるで手品のようなものです。筏が五、六組できあがるとシナの木の皮でよりあわせた太い綱でつなぎあわせ、汽船がひっぱって、ボルガの方に下るのです。例の車輪船です。この危険な作業を人数を倍にするから、ノルマを倍やれというのです。作業をやる場所が限定され誰でもやれる仕事ではない。しかもノルマのピンはねをやっている不正について、ノルマ表の基準からいっておかしいと、逐一抗議をしました。こっちは日本語でしゃべる。通訳がロシア語でしゃべる。見ていると、所長はい

たいところをつかれるものだから、見る見るうちに顔を真赤にしてうつむいたまま弁解の余地なしとうなだれてしまいました。カザンからきた政治部将校が我々の目の前で、ゲート近くにある営倉に所長をたたきこんでしまいました。そこで全員の要求として、もうまる八ヵ月もここで作業を続けている。一日も早くエラブカに帰れることを要請し、月末には帰れることになり、ストライキを解除しました。

さてこうしてエラブカに戻りましたが、戻ったのはAラーゲルではなく、Bラーゲルでありました。ここで出身地ごとの県人会が開かれました。驚いたことに、帯広中学と十勝農学校の関係者だけで五十名以上いたことです。帯広中学の配属将校でスキーで有名だった石山少佐、もうひとり本別神社ゆかりの少佐（名前失念）、帯広で会計事務所をやっている西雪公啓君、北電の佐野源次郎君、三井金物の三井紀念男君、音更駅長の息子の川西政治君、私が媒酌を引受け、帯広工業団地造成の農民側代表として骨折ってくれた野原行男君、帯広小学校長の草野静君といった面々です。遠く故国を離れて七〇〇〇キロの異邦の地で、お互いに顔をあわせるとは思ってもみませんでした。こうして集まってみると、満州から朝鮮からそして樺太千島からと、よ

シベリアの収容所で故山本稚彦さんが白樺素木で彫ったシベリア秘仏・阿弥陀佛座像。収容所名にちなみ「エラブカ佛」と名づけられた。表情の細部は注射針で彫られた

くもまあ今日まで生き延びてきたものと共々に感慨を深くしました。
こうして十月に入り、いよいよダモイ*の話が本格化し、十月末から第一梯団の出発があり、私はリストにのりながら、出発直前にオタフク風邪と診断され、もとのAラーゲルの病院に入院させられました。要は患者が患者の面倒をみるための要員確保のためだと判りました。
末期の結核患者の下の世話をしたり、凍傷のため両手両足を鋸で切断された佐官級の方が三名もおり、その方たちの世話のためです。
夜のうす暗い裸電球の下で、この人達の世話をすることはいかに気丈にしていても心おじすることでした。何といっても苦役は、この広い病院の隅から隅までせまい患者のベッドの下にもぐりこんで、ガラスの破片で床削りをさせられたことです。看護婦（セストラ）にせかされ、病室のすみずみが真白くなるまで、床削りをやらされたことです。病院勤務をやらされたものは、みな同様の経験をしている筈であります。
十一月、ようやく第四梯団に入りキズネルまで、またも八十キロの道のりを歩き、こんどこそ、ウラルを越えて東へ、東へと走る列車に乗り込みました。この度は三段装置の貨車のなかでは、天井が低くて頭を起こすことができない。横になったままの姿勢で食事をしなければならない。これが一ヵ月続いたことです。終着がナホトカの海岸の砂浜です。天皇島に逆上陸のための最後の聖地ナホトカです。若い連中の型通りのしごきと、脅かしがあって、復員船大安丸に乗船しました。この年、最後の船で、はじめて日本から運ばれてきた生水を飲むことができました。日本の水の美味かったことです。三年ぶりで生水をのむことができました。
入港したのが函館でした。舞鶴に入るものとばっかり思っていたのが、わが故郷北海道の函館なのです。十二月三日、引揚収容所として入ったのが、何と私が東京で赤紙を受け取り初年兵として入隊した函館重砲兵連隊の旧兵舎でした。兵士としての生活が函館のこの兵舎ではじまり、ここで終わることになった訳です。

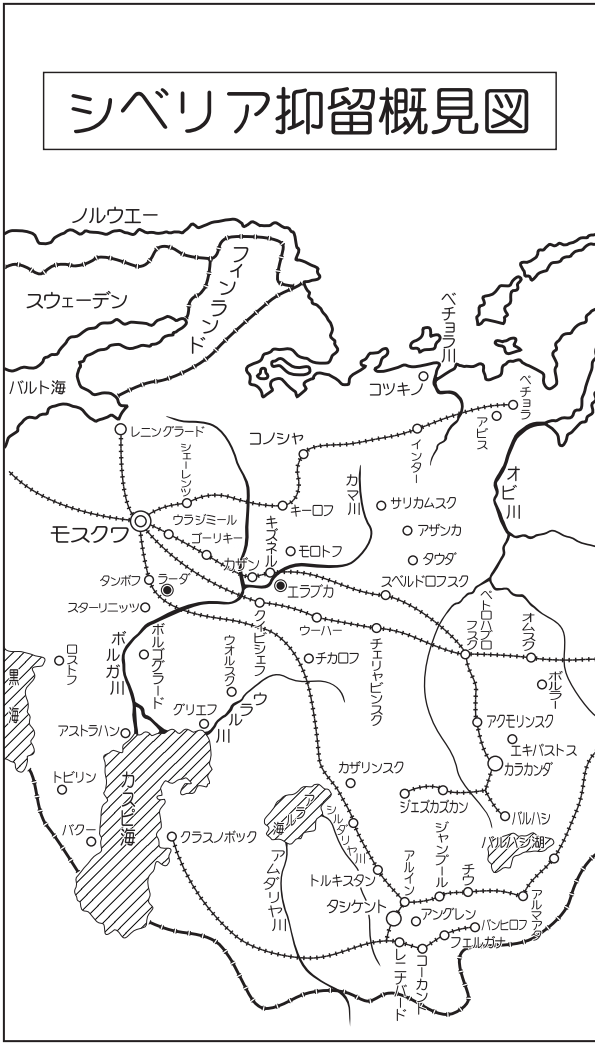
昭和十六年八月の召集から数えて、丁度七ヵ年の軍役です。こうして私の青春の日々の終わりを深くかみしめました。

引揚船の中で、偶然戦友の芽室町出身の廣瀬竹蔵君（町会議員）と出会いました。中隊長の内田大尉はじめ下士官、兵たちと樺太で別れてから、シベリアに渡ったその後の足どりが判り、早速援護局に出向いて、中隊の抑留者名簿を調べてみました。驚いたことに全然デタラメなのです。冗談ではない。まず少年兵二名が抜けている。既に昭和十九年の召集解除者の名前がぞろぞろある。いかに敗戦の混乱とはいえ、連隊本部は命令を出しておきながら、何をしていたのか。私は義憤にかられ、このままでは帰れない、既に第一梯団で帰国の小樽の井上少尉のところにころげこみました。彼は初年兵教育隊の教官でしたので、二人で二日がかりで一六七名の名簿を整理いたしました。ここで広瀬君から聞いたシベリア抑留の状況をもとに記事をとりまとめ、量徳小学校でガリ版を借りて、早速通信第一号を全留守宅に発送いたしました。さらに旭川に立ち寄り西谷少尉ともあい、今後の協力をお願いして「ゴタイブジ、フクインス」の電報一本を出したままであった留守宅に帰り着いたのが年末ぎりぎりでした。

年が明けて、何十名かの仲間たちから、既に復員しているとの手紙が入り出し、戦友たちの動向が次々とつかめました。通信は昭和二十四年まで六回出し、結局シベリアでの戦病死者七名、最後の一人まで消息確認の決意でしたので、あらゆる手だてを尽くして白糠の鈴木君の死亡公報を出して貰ったのが昭和三十三年、丁度十年の月日を要したことになります。

私がまだエラブカにいた時、捕虜通信＊のほかに絵ハガキを含めて故国からの郵便一度に八通を受け取っているのです。これはどうしたことかと仲間に不思議がられました。こんなことは私ひとりだけだったらしいからです。それは当時、帯広で米軍の通訳をしていた飯島正久君、飯島安三郎弁護士＊の息子さんです。どうしたらシベリアと通信できるかと、家内が出向いて訊ねたところ、それはフランス語で宛名を書き、ジ

ュネーブの国際赤十字経由で出したらよいと教えられ、そのことを兄弟知人に知らせたそうです。すると、インドネシアで獄中にいた親友の金子智一君（スカルノ、ハッタと共にインドネシアの独立宣言文を参加起草した日本人）がたまたま昭和二十二年春に釈放になって帰国。早速家内からの知らせで、美しい富士山のエハガキで手紙をくれました。感



しを受けました。そこでシベリアでの収容所配置図、地区番号、収容所番号等の詳細図を見せられました。その青焼きを手にいれたことです。シベリアから出す捕虜通信の、たとえば往復ハガキに、「浦塩斯徳中央郵便局・2／315」といった表記があります。地区は第二地区、収容所は三一五号という意味です。通称ムーリー地区といって、バム鉄道＊のコムソモリスク市のアムール河をはさんで対岸から東へ、間宮海峡の港町ワニノまでの、平均高度海抜一〇〇〇メートル級のシホタアリン山脈をはさんで鉄道沿線四八〇キロの間に数百ヵ所の収容所、分所があります。その中の三一五収容所という意味です。帰国者の情報とこのハガキとをかみあわせて、戦友の足どりとか健康状況をしるして、通信を出したのです。その後の帰国者からよくもこんなに詳しく留守宅に知らせてくれたと感謝の手紙を貰いました。

次にシベリアでの戦病死者のことであります。戦後になって舞鶴に上陸した復員者により、戦病死者の情激でしたね。これは家内の大手柄でした。

さて、私がどのようにして、戦友たちの留守宅と情報交換をやったかということです。帰国の翌年春に、市ヶ谷にあるアメリカ軍より呼び出

報が援護局に届けられ、あるいは軍医の死亡診断書等の提出によって、公報が遺族に通知されます。ご遺族としては公報に記載されている死亡地点が、そのまま埋葬地点であると思いこまれていることです。ところが公報の死亡地点と埋葬地点とは必ずしも一致しないことが、私の今日まで行ってきた墓参のための埋葬地探しから明らかになりました。

実例として、帯広市にお住まいのご遺族Sさんに就て申上げます。この方の父上は、敗戦の時、北千島の幌筵（ホロムシロ）の防備隊におられ、ソ連軍の侵攻と戦い、シベリア抑留の身となりました。ソ連貨物船に乗りバム鉄道の終点、旧樺太の恵須取の対岸、ポートワニ（現ワニノ港）に上陸、直ちに暗夜貨車にのせられ、奥地の収容所で苛酷な強制労働に従事してましたが、遂に病に倒れ、昭和二十一年八月二十八日ムーリー地区コスクランボ三〇九九病院第一病棟五号室で戦病死されたと、復員局より公報があり、遺族としてはその通りと、かたく信じてきました。

ソ連崩壊後、バム鉄道沿線が外国人の立入り旅行禁止が開放され、平成六年、早速全国強制抑留者協会の墓参団に夫婦共々に参加し、父上が五十年間も凍土の下に眠るコスグランボの地に立ち、ようやく亡き父の冥福を祈ることができました。そして翌七年一族相集い五十回忌法要を行ったのであります。

実は、私もこの三〇九九病院には墓参をしており、ロシア側から埋葬者の名簿、埋葬配置図も入手してきました。しかし、この墓地の現状はどうかというと一角に高圧送電線が工事され、白樺林は伐採され、赤軍のブルドーザーで開削されて、数体の遺骨が地上に暴露されていました。私どもは雨の中を散乱する遺骨の無惨さに、悲憤の涙を流し乍ら遺骨を拾い集め、移植ゴテで穴を掘り、心経を唱えてご冥福を祈りました。しかし考えて見ると上肢骨、下肢骨ばかりで、頭蓋骨は一つも見当たらないのです。さすがにソ連兵も気がひけたものか、頭蓋骨だけは集めて、どこかにまとめ埋めたのではないでしょうか。そう考えるより仕様がない有様でした。第一回のチタにおける厚生省の遺骨収集団の作業が開始以来判ったことは、ご遺体は冬は

浅くしか埋葬できませんでしたが、ロシア人自身の場合もそうであるように、一メートル以上深く埋葬し直していることが判りました。それは狼に喰い荒らされるのを防止するためで、石のあるところは、大きな石をのせたりもしています。逆に遺骨収集の作業もそれだけに大変な苦労をされているのが事実です。はじめて私はハバロフスクで遺骨収集団の方々にあいましたが、戦後のきゃしゃな体つきの若者たちを見てご苦労なことだと思いました。埋葬地は、まさに白樺のコヤシにしてやるとおどかされていたように、どこもかしこも白樺林に変わってしまっていて、ダニは頭から降ってくる、アブや蚊の大群に悩まされる、ノドがかわいても決して生水は飲めない、赤痢やチブスで何時やられるかもしれない。自衛隊のように訓練された組織でないといけないことを痛感しました。第一回のチタの遺骨収集には現にロシア軍の兵士たちが主力になって協力してくれ実働しているのです。

さて、コスグランボが埋葬地点と信じていたSさんに、私は「ゴルバチョフの来日以後、新しい情報が少しずつ、日本側に通報されていますよ、一度、厚生省に照会の手紙をお出しになっては如何ですか」と、おすすめしました。但し、故人の遺族であることの証明として、必ず戸籍謄本を添えてお出し下さいと申し上げました。

早速、厚生省から回答がありました。私の予感した通り、公報と異なり、埋葬地はコスグランボから九十五キロも離れたポーニ地区第一四四九特別野戦病院で、赤痢のため死去、墓地もこの病院墓地であるとの回答がありました。何故今になってこういうことが起こるかということです。先ほど申し上げた舞鶴、函館の復員局で、復員兵、軍医たちの口頭での報告にもとづいて死亡公報を出していたからです。勿論、国際法上、当然ソ連は抑留者の人数、氏名、健康状態、死亡者の人数、氏名、埋葬地等を相手国に通報する義務を負っています。ところがソ連政府はその崩壊するまで、ただの一度も義務を果たさず国際法無視の違反を続けてきました。ゴルバチョフ名簿＊がはじめてなのです。いかに非道い国であったかということが判ります。し

かも未だに六万人といわれる死者のうち、四万人名簿しか渡されず、二万人の方は不明のままで、強制連行した抑留者数さえはっきりしていないのが、今日までの状況です。

さて、ポーニ地区もまた私は平成八年に墓参しております。東京に「ソ連抑留生活を記録する会」という会があり、ソ連抑留者からの証言と記録を集めて全八巻の記録集を出しています。年に二回、『オーロラ』という機関紙を出していました。それにポーニ地区の記事がありました。ここの第一四四九特別野戦病院の院長オストロスキー軍医少佐は非常に心暖かい軍医で、宗教に深い関心を持ち、東洋には仏教があるそうだが、他界した死者たちのために供養塔を建ててはどうかと、この病院で働いている日本人の作業隊に働きかけがあったそうです。隊員たちはこの言葉に感激して、一同力をあわせて堂身四メートル八十センチ、広さ四坪あまりの美事な六角堂を建立し、中に南無妙法蓮華経の七字を銅板をくりぬいて掲げたというのです。私はこの記事を読んで感動し、ポーニでの六角浄魂堂との出会いを楽しみに出かけました。ダメでした。まったくの白樺林だけになり、堂はありませんでした。それは何故か、フルシチョフの時代に、全シベリアの日本人強制抑留の証拠になる施設の破却を命じたからです。皆さんはよく新聞に写真で紹介された白いコンクリート枠にかこまれナンバーがうたれた日本兵墓地を想像されるでしょうが、あれは日本人旅行者、特にモスクワ・オリンピックを意識してのシベリア鉄道の沿線、ウラジオ、ナホトカに始まってモスクワに至る開放された地区の、日本人の立ち寄り先の観光用に整備されたものであると、ロシア側の資料で明らかにされました。日本人が一番多数苦難の道を歩んだバム鉄道の沿線にはただの一ヵ所もそんなところはありません。ただただ荒れはてた湿地や白樺の林に化しているのが実状であります。コムソモリスクなどはもっともひどいものです。市内数か所の埋葬地がありますが、一〇〇〇名近い最大の埋葬地は、都市計画ということで赤軍のブルトーザーで整地されて既に住宅地となり、全くその面影を残しておりません。

もう一人の例を申し上げます。士幌町で町の助役もされたNさんです。この方もお父上が千島のエトロフ

島からシベリアに抑留され、Sさんの父上と全く同じ経路で、バム鉄道沿線収容所で亡くなっておられます。この方は早くに北海道庁主催の日ソ友好並に墓参団員として、当時の中川利若副知事を団長とした墓参団に参加しシベリアに出かけていることを承知していました。父上の亡くなったのはシホタアリン山脈の東側に近くサルワッカ駅の近くで、森林伐採中に、事故でなくなったと公報で通知を受けておられ、遺族はこもごも関係地に墓参に出かけておられています。

私の助言で是非いちど厚生省に戸籍謄本を添えて照会してご覧なさいとお奨めしました。厚生省の回答はこうでした。四万人名簿のあとロシア側から三〇〇〇人の追加名簿があり、その中にあなたの父上の名がありました。それは先ほどのコスクランボ三〇九九病院で亡くなり、ここの墓地に葬られているということなのです。サルワッカとコスグランボとでは、日高山脈のような海抜一〇〇〇メートル以上の山脈をはさんで東と西と離れています。分かり易くいえば十勝清水で亡くなったものと思っていたものが、幾寅の病院墓地に葬られていたことになります。Nさんは早速戸籍訂正の手続きをとられたそうです。

このように私の身近な人の実例で申し上げるように、しばしば死亡公報と埋葬地の現地とが違っているのが実状です。ゴルバチョフ名簿でも、有名な全抑協の代表斉藤六郎氏、朝日のモスクワ支局長で四万人名簿の刊行責任者の白井明氏にしても、サブガバニスキー第一地区とはどこなのか、知っている方は地理的位置を教示してほしいと書いているのに驚きました。戦前からのロシアの文献を読んでいればすぐ分かるのですが、コムソモリスクという地名がナ・アムーレ以外にソ連発行の軍事用地図でもアメリカ版の宇宙衛星から作製した航空用地図にもない地名が、墓地所在地名に出てくるから、たしかに埋葬地点探しは大変です。アメリカ製のソ連地図には飛行場滑走路の方向、送電線の鉄塔まで記入されており、東京にいけば売っているのですが、コムソモリスクという地名だけは駄目です。皆さんにお願いしたいのは、身近なシベリア関係のご遺族に口コミでお伝え頂きたいことです。市町村役場では頼りになりません。社会福祉課の保護係という

のは、せいぜい旭川の護国神社の祭典ぐらいしか関心を持っていない、若い新人しか配置していません。しかもこの方たちが遺族会の事務局を担当しています。自分の村のシベリア遺族の調査も満足にしていません。毎年四月に十勝支庁から届くシベリア墓参の厚生省通達もせいぜい係長どまりで、ファイルにポンといれてそれで終わりです。士幌のNさんも、助役を六年やっていたそうですが、厚生省からのシベリア墓参の公文書をただの一度も見たことがなかったのが実態です。いかに遺族に対する北方ばかりか南方の墓参団の勧奨に冷淡であるかがこれでお判り頂けると思います。市町村長の推薦がないと、厚生省が毎年行っている墓参団に参加できないからです。遺族としてはこうした情報がない限り、折角の墓参に参加できないのです。ですから、道内では札幌とか旭川の方たちばかりが多数参加しているのです。

私にとっては太平洋戦争は終わっていないのです。七名の部下戦友の墓参をまちがいなく埋葬地点に立ち、ようやく鎮魂の回向が終わったと思ったら、遺骨収集のことが残っていました。目下その実態と促進に力をつくしています。一人でも二人でも救出したい。故国の土に戻してあげたい。その気持ちでいっぱいです。

政府の遺骨収集が始まった平成三年から十年たっていますが、故国に救出されたご遺骨は僅かに一万柱前後にすぎないのです。国も力をいれていますが、何故進まないのでしょうか。私は収集団の宿舎に問題があると考えます。特にバム鉄道の沿線は鉄道建設当時は相当の集落のあったところも、今は森林資源が奥地化したり、ソ連崩壊による社会移動の自由が許されて以来、現地を歩いてみて廃屋だけが残り、廃村が至る所に見られます。どうしてもホテルのある都市が拠点となり、軍用バスによる往復可能な地点だけが優先します。第一回のチタのようにロシア兵の支援が得られたり、夏の短い期間に作業が集中するため、最近ではブルトーザーとか油圧ショベルを使用していますが、こうした器材は民間にはなく、軍にしかなく、いよいよ収集地点が限られてしまいます。非常に悲観的な状況です。声をあげて下さい。声の小さいところは票にならないから、力が入らないのです。

今は昨年から遺骨収集の際には歯骨か指骨を焼かないで持ち帰り、ＤＮＡ検査ができる様になりました。不明なご遺骨は、永久に千鳥ケ渕霊苑に収容されてしまいます。

終りに、次男茂二郎をシベリアに失い未だに凍土の下に眠る親の嘆きを歌った老歌人窪田空穂＊の短歌二首

国難に殉じにけりと慰むれ　親には子なり天皇の兵

死にし子の年を数ふる愚かさを　しばしばもしぬ愚かなり親は

昭和三十九年歌集『木草と共に』所収の歌で「息子の死後十八年経ても、父親はなおこうも歌う」と、大岡信の『折々のうた』に出ていました。

三浦綾子がいいました。沢山の小説を書き終わってほっとしたら、まだ死ぬという仕事が残っていたと書いているのを読んで感動しました。私には死ぬ仕事の前にまだ、シベリアとの仕事は終わっていない。戦友の遺骨収集の始末を見届けたい気持ちでいっぱいです。

※註

厚生労働省の照会先

〒１００―８９１６　東京都千代田区霞ヶ関１-２-２

電話（代表）　０３―５２５３―１１１１　内線３４７２

厚生労働省社会・援護局業務課調査資料室、資料第三係

平成二年　帯広西ロータリークラブにての卓話

至誠至純の人倉田百三先生

倉田百三＊先生にお目にかかれたのは、金子智一兄との縁からです。

日本青年館が出していた雑誌『青年』に、「手紙の友会」というグループ活動があり、五人で一組でした。柳田国男にふかく私淑していた熊谷辰次郎のアイデアで、全国から広域的に同一年齢の世代が組合せられ、手紙のやりとりで交友を深めるしかけでありました。共に十七歳で私と班を共にしたのが金子兄であります。

倉田百三先生

金子兄は当時京都の里見岸雄＊氏の日本文化学研究所におられた時代です。その頃は伸雄と名乗っていました。

先日も身辺整理をしていたら、金子兄から送られてきた田辺元の『哲学研究』という雑誌が三冊も出てきました。懐かしさがいっぺんにこみあげてきました。

倉田先生の『出家とその弟子』を読んだのもその頃です。

当時冷害と凶作に苦しむ農村で、最も稲作の不適地、しかも泥炭地帯で米作が強制される矛盾を解決するた

め、私は青年たちと共に水田を潰す運動をはじめました。完全な土地利用失敗のケースで、補助金が出る、米が食えるという、政治の誘いにのってしまったのです。怒ったのは、造田を進めてきた大人たちです。青年たちはぴったり私と行動を共にしましたが、老人たちを敵にまわしてしまいました。

こんな時、賀川豊彦、後藤静香、暁烏敏＊、西田天香＊（この人は北海道で水田開拓事業で失敗し、故郷の滋賀県に帰り、やがて無一物中無尽蔵の一燈園＊を開きました）といった先生たちの書物がこころの支えでありました。倉田先生の『出家とその弟子』は人間の愛憎と救済をえがいた素晴らしい戯曲作品でした。

「若い時には若い心で生きていくより無いのだ。若さを振りかざして運命に向うのだよ。純な青春時代を過さない人は、深い老年期を持つことも出来ないのだ」第三幕第二場

「決して争うな。どのような苦しい、不合理な気のすることがあっても、仏と人とに呪いをおくるな。凡て祝せよ。悲しみに耐えて忍べよ。忍耐は、徳を己のものとするのじゃ」第六幕第四場

若い未熟な私にとって、この親鸞の臨終の場における言葉は、まるで電気に打たれたように脳にひびきました。これだけが今も倉田先生のお教えとして鮮やかに私の脳裡によみがえってきます。私にとっての救いでもありました。おのれの主張を曲げずに耐ええたのであります。

倉田先生自身も、青春の苦悩で一燈園に駈けこんだ体験の持主です。

金子兄とはじめて膝を交えて接したのは、昭和十三年の春です。私が道庁をやめて上京してからです。だから交友八年目の出会いです。たしか上野駅を降りて、駅前のソバ屋の二階が初対面の場所でした。金子兄は、人を百年の知己のようにつつみこむ、不思議な力を持っている人でした。

昭和14年佐藤生活新興館の講堂で「生きんとての会」のメンバー

そして翌年、私の勤め先である神田駿河台の佐藤新興生活館講堂で、都内の男女学生を中心に倉田先生の主宰する「生きんとての会」が開かれました。私もお世話をする係をさせて頂きました。この時はじめて倉田先生にお目にかかりました。其の時の印象を申しあげると先生の戯曲『出家とその弟子』は、私の生れた頃（大正五年）の本でしょう。その先生が今、目の前にたたれている。まだ四十代に手の届かないお若さです。もう老人のはずと思いこんでいた私にとっては、驚きでありました。大森の御自宅にも何回かお邪魔し御教示を頂いたものです。

倉田先生は、影山正治の大東塾＊にいた窪田雅章＊兄と中国の旅に出かけ、帰国されてから、再び病床の人となられました。先生が逝くなられた時は、私は既に召集で、樺太の陣地にいました。

先生のご生涯は、生一本、至誠至純の人としての生涯であられたように思います。昭和十二年の時点でミット・レーベン（共生）としての「生きんとての会」と会の名前をつけられ、また「生とは何か。如何に生くべきか。いかに祖国と民族共同体と人類ユニオンに委嘱し、且献身すべきか。モラルの究竟の源泉はいづこに　私はそ

うしたラディカルな掘下げのために、同志の人々とこの会をもちたい」と、発足宣言されたこと自体、先生らしい一途さのあらわれであったと思います。

この頃、岩波書店から出していた『愛と認識の出発』。このたった一冊の本だけで印税が毎月四百円、倉田先生の手許に届けられました。この印税が「生きんとての会」の運営費でした。四百円とは当時の町村長の月俸の四ヵ月分です。あの頃の岩波の本はぷーんと独特の香りのする上質紙を使っていたことを思い出します。

平成三年　生きんとての会編『倉田百三の真髄』脇書き　ASEANセンター刊

地霊

一九四六年のことである。私はモスクワの東南約四二〇キロメートル程のタンボフ市郊外のラーダ収容所で春を迎えた。北緯五十三度、北流するオカ川、南流するドン川の分水嶺にあたるロシア高地の一角である。オカ川はボルガに合流し、ドン川はサライ、ジンギス汗のキブチヤク汗国の首都サライのほとりを流下して、アゾフ海、黒海にと注ぐ。

タンボフは当時人口二十三万、函館のまちの人口だと考えていた。モスクワのレーニンにとっての重要な食料供給基地であった。このため徹底した徴発と収奪がくり返され、「知られざる内戦」大規模な農民戦争の舞台となった。レーニンは有名なトハチェフスキー＊将軍の正規軍を送って、ようやく制圧した。農民は片端から強制労働収容所に送りこまれたといい、悲劇の舞台である。一九二〇年、既に革命から四年目のことである。

私たちは独ソ戦の時のソ連軍陣地である地下兵舎に一冬をすごした。私たちの撤去のあと、直ちにソ連の戦車隊が入ってきた。とにかく来る日も来る日もデンプンの様な細かい微粉の雪が、降るともなく毎日降っている。雲は低くたれて重苦しい圧迫感を私たちに与え、異国の風雪に狂おしくさせる。

これが五月一日、メーデーが終わると雪は一挙にとけ出して、忽ちにして大地を露出させる。砂丘のように波うつ丘陵の凹地に、数知れない池沼があらわれて、そのほとりに可憐な春の花がいっせいに咲き出す。

ただし、夏とか秋の花はまったくない。高山に似ている。とにかく、歩くのに花々を踏むのでないかとためらうぐらい敷きつめたように咲く。

十日もすると凍土はぬけ、気温は一挙に三十度をこえる日が続く。春の耕鋤が始まる。五月のうちに播きつけを終えなければならぬ。ついでにいうと九月中に収穫を終えないと、十月の雨は一雨ごとに凍深を深め、十日もすぎると、もうスコップはささらない。

六月に入って急に百名ばかりに移動の命令が出た。珍しくタンボフ駅から列車に乗るという。硬座車である。ソ連に入ってからはじめて切符というものを手にした。列車が動き出した時は、もう日は西にあった。広い広い原野を南に向かって走る。あたりはいよいよ暗闇の度合いを濃くしていく。列車はこのまま、深く深く地底にひきこまれていくのではないかとのおそれさえ感じた。

何時間走ったか、列車はとまり下車しろという。あたりを見ても何も見えない。まわりに朝の気配が動いてきて、少しずつモノが見えてきた。まったくの原野、しかも黒土地帯、土が真黒なのである。ラーダの土とはちがう。ラーダあたりは氷河期が終わり、氷河が北に向かって後退していく時、残土として堆積したレス土壌である。まるで火山灰のようにさらさらして、スコップに土がつかない。それが思いもかけない黒土地帯の大地の上に私はたつことが出来たのである。しきりと土をとっては握りしめたものである。

この年は大旱魃であった。要するにこの附近のコルホーズの野菜に灌水を手伝えというのである。およそ樹木というものがない。まして森林景観を求めても、目の届く限りの地平には全くない。燃料といえば、地形の凹部の表土をはがすと真黒な腐植に近い草炭が出てくる。これは燃料であるばかりか土とまぜて地干し煉瓦が出来る。これをつみあげて住宅をつくる。私たちの宿舎はというと、地上から炭坑の斜坑のように掘り下げたトンネル状のイモの地底貯蔵庫である。ここで二ヵ月寝起きした。

私は所持していた折口信夫の万葉集辞典を貸して、岩波文庫本で、星が一つ、二十銭のゴーゴリの『昔気

質（かたぎ）の地主たち』と『ヴィイ』の一冊本を手に入れた。この『ヴィイ』（地霊）に感動する。単純な筋書きである。ウクライナの首都キエフの神学生が夏休み、といっても正しくいえば学年の変り日の長い休暇のことである。学生たちが何人かで、悪さに興じながら旅に出る。とある地主の家の娘の死にぶつかる。神学生はいわば坊さんの卵である。早速三日三晩、会堂に安置された柩をまもり供養することを引き受ける。そこに『ヴィイ』といわれる地霊が妖怪を引きつれてたち現れる。

地霊は、その眉毛が地面にまで届くという妖怪の頭目である。魑魅魍魎（ちみもうりょう）をひきつれて、会堂の天井を飛びかい、暗闇の中で壁にぶつかる音、響きはすさまじいものがある。学生たちは呪文、経文をとなえ、一夜、また一夜と、妖怪をしりぞけるが、ついに三日目の夜に呪文が破れて、柩（ひつぎ）のかたわらに息絶えるといったあらましである。

イモ倉の地面に、たちゆれるケロシンランプの灯りをおいて、魅せられたように、私はくり返し読んだ。今もその記憶が甦ってくるのである。これは泉鏡花だとも思った。ゴーゴリは、いかなる圧政も奢った権力も決して永続はしない、必ずこのロシアの大地に潜む地霊が反逆する、復讐（ふくしゅう）することを、風刺（ふうし）しているように思えたのである。

果せるかな、私の目の黒いうちに、息をしているうちにその日がやってきたのである。八月のソ連の大変動のニュースは私を釘づけにした。他の誰よりも、深い感慨をもって、すぎた日を、これから来る日のことを念っているのである。空想の小説ではなかった、細やかな四十年前の体験をかみしめているのである。ゲーテのいうように、まさに「萬づのこと、時あり」である。

平成三年　『あかしや』十六号　北海道教友会会報

賢治結縁

私が賢治を知った頃は文圃堂版の三巻本が出ていたぐらいで、この端本でもと神田本郷を探しまわり、早稲田の鶴巻町あたりまで古本屋を歩いたことを覚えています。ところが手許にある文圃堂版は何故か賢治の実弟清六さんから頂いたものでした。賢治を知ったのは『婦人之友』という雑誌であります。昭和十三年の三月号に「新日本娘読本」という特集頁があって、「若い元気な読者に親しまれつつ、この欄も三月を迎えました。詩の頁では今月は現代日本の新しい美しい優れた詩を十分に味わって頂きましょう」とあって、「一、宮沢賢治の詩……高村光太郎」とあります。

『婦人之友』は羽仁もと子＊により創刊された日本で一番古い婦人雑誌で、各地に「友の会」という読者組織をもっていました。たまたま昭和六年に始まる北海道東北地方の大冷害凶作の時代に、私は十勝の水田地帯にあって当時農村が直面していた経済的困難の様子を、身を以て体験することができました。そんな時、友の会が東北各地に農村セツルメント＊を開設しましたが、その素晴しい活動ぶりに心ひかれて私も読者のひとりとなりました。

羽仁はまた「自由学園」という文部省令によらない全く異色の学校を経営していて、夏休み冬休みとかにはこの学校の子供達も、友の会々員と一緒になって、セツルメント活動をしていました。その活動ぶりを読むのが有難いことでした。この雑誌を編集していたのが盛岡出身の吉田幾世さんで、後に盛岡に生活学校を

開き今も高校を経営されている筈です。
光太郎は賢治に就てこう書いています。

「僅か三十八年の生涯しかもたなかったが、その一生は実に稀に見る規模の大きい複雑多面、豊富玲瓏のものであった。彼はもと農林学校に地質土壌肥料の學を修め、郷里の農学校の先生となり、実験指導や土性調査の事に従っていた熱心な自然科学者であり、後に花巻町の郊外に羅須地人協会というものを開設し、自ら農耕し、肥料設計事務所を縣内数個所に設けて、あまねく農民の為に農事相談を無料で行い、東奔西走、農民と共に喜び、共に憂い、或時は東北砕石工場の技師ともなり、足を棒にして郷土の『土』に終始した実際家であったのである。
彼は膨大な夢をもち真の意味における科学者の魂の所有者であり、宇宙自然の機微に参入し、殆ど無我の大にまで到達した一個の全球体をなす人間でもあった。かかる人間が又幸にも、言葉の世界に異常な才能を持って生れたのである。……心象の沸き起るままにそれを言葉にした。言葉にしては歌った。そこに全く新しい詩の一種族が期せずして生れた。しかも多量多産まるで一粒万倍の勢で書きつくした。詩篇、和歌、童話、劇、その数は数えきれない。……しかもその作の真価の発揚はすべて未来に属する……」と。

この一文にふれた頃は私はまだ札幌にいましたが、もうすっかり賢治につかまれてしまいました。四月には上京し、神田で『生活』という小さい雑誌の編集の仕事をします。さっそく詩の頁をつくり、団子坂のアトリエに高村先生をお訪ねしました。この年、夫人の智恵子さんを亡くされるのですが、心よくお目にかかることができ、詩の原稿のご快諾を頂き、賢治についてのお話をじかにうかがうことが出来ました。
お話かわって昭和五十年の秋のことです。仕掛人の中村方人・斉藤征義両氏の力で、思いもかけない宮沢

宮沢賢治帯広展の実行委員メンバー

賢治文学展を帯広で開くことができました。わずか五日半の会期で実に一万人の入場者を得て大変なことでしたが、すべて事務局長の太田修教さん、熊代弘法さんはじめ実行委員会のメンバーの皆さん達の努力の甲斐があって、成功裡に終ることができました。これは後々帯広市民劇場の文化芸術活動に大きな刺激となったと考えています。

翌五十一年には、冬の堅雪の時をねらって、日高山脈を越えて十二トンの緑泥片岩を運んできて、帯広中央公園の小豆梨と栗の木の下に据え、賢治の童話「虔十公園林」の一節を、賢治の実弟宮沢清六さんに模写して頂き刻みこみました。それは、この中央公園になるまであった帯広小学校の生徒たちが使っていた教科書に、宮沢賢治の「虔十公園林」があり、跡地記念としてもっともふさわしいものと考えたからであります。しかもここは職員室の窓から見える中庭で、有名な金耕太郎校長が植栽された樹々がそのまま残っているのです。碑はあたりまえのモニュマントにすることを避け、地から生え出た巨岩のように趣きを考えました。子供たちがデクノボーの賢治にまつわりつくように、石をのぼったり下りたり日常にとけこむことをネライとしました。これは成功したと思っています。花巻に賢治記念館建設促進の醵金をすることが

詩人草野心平さんと帯広中央公園の宮沢賢治文学碑

出来、秋十一月には高村光太郎から贈られた遺愛のマントと襟巻姿の草野心平＊さんを帯広にお迎えして、宮沢賢治文学碑開眼の集いを開くことが出来ました。

補記　草野心平さんの来帯は数度に及び、お子さんの雷君の夫人は帯広出身です。

「宮沢賢治文学碑から」

あゝこゝはすっかりもとの通りだ
木まですっかりもとの通りだ
木は却って小さくなったやうだ
みんなも遊んでゐる
あゝあの中に私や私の昔の友達が
居ないだろうか

宮沢賢治「虔十公園」より

平成四年　『宮沢賢治記念館通信』第三十八号

流転人生—私のなかの歴史—

先祖は表秩父の土豪

福沢諭吉は自己の生涯を顧みて、「一身にして二世を経たり」と言った。巨人・諭吉に倣うにははなはだ小人生だが、いざ己を語ろうとすると二世、いや三世を経た思いを深くする。

「木呂子」は埼玉県比企郡小川町の地名で、表秩父の山峡にある。この山峡に入った土豪が先祖で、系図は五〇〇年と続く。大祖父の退蔵は上州館林藩の旧藩士で戊申戦争では軍監を勤め、廃藩後は上毛自由党＊の草分けの一人となり、明治十八年（一八八五年）に士族救済のため千島のウルップ島の開発を目指した。次男で群馬師範を出て館林の大島小学校長（現在の館林第四小学校の三代目校長）だった祖父の鉞弥

大祖父木呂子退蔵

（えつや）が翌年、父の後を追って根室に来て巡査になった。その後、鉞弥は岩見沢に出て北海道炭砿鉄道に入り鉄道部門の責任者にまでなり、日露戦争で満鉄に行ったあと、胆振の早来町で運送屋を始めた。ここのカシワの皮からタンニン＊を取る会社が、原料を求めて十勝の池田町に移転したのに合わせて、父の敬一らも同四十三年に引っ越し、そこで私が生れた。大正二年の凶作の翌年だ。十一人きょうだいの一番上だ。この会社は日本皮革といって、のちに帯広市長になる吉村博さんの父親が幹部をしていた。また、作家の吉屋信子さんの兄が工場長だった。池田勇人さんが宏池会会長だった時に農政顧問を務めた池本喜三夫＊さんは先輩だ。川合尋常高小（のちに池田尋常高小）で、二級上にいたのが吉村さん、美濃政市さん（元代議士）、角田隆一さん（十勝酪農協組合長）、後輩に丸谷金保さん（元参院議員）がいた。

ニペソツ登頂に成功

大正十五年に帯広中学（現帯広柏葉高）に進んだ。夏は毎年、日高か大雪の山に登った。初めて東大雪のニペソツの登頂に成功したのが五年生の時だ。三年続けての挑戦だった。おそらく、一般の登山家も登っていなかったはずだ。その一方で傾倒したのが、神の国運動を進めていた宗教家の賀川豊彦先生と、社会教育家の後藤静香先生だ。賀川先生は私の最初の師である。

友人に誘われ集会へ

賀川先生との出会いは、昭和二、三年ごろではなかったか。大恐慌の直前で、既に不景気風が吹いていた。おそらく、同級生で友人の龍田政治君の誘いで、帯広の教会で開かれた集会に出席したと思う。

彼は熱心なクリスチャンだった。根っからの詩人で、詩風はホイットマン的であった。龍田君は惜しいことに比島で戦死をされている。私にとって、最初の良友である。知り合ったころの賀川先生は四十歳前後。お話は、もう驚きであった。その後、先生には農民運動論や組織論をはじめ、昭和三十五年に七十三歳で亡くなられるまで、多くのことを学ばせていただくことになる。

「師を敬し、友を愛せよ」という言葉が、帯中の綱領の中にあった。

空前絶後の講演法

賀川豊彦先生は、模造紙を何枚も黒板に張り、卓上の皿にたっぷりと墨汁を入れて数本の毛筆を用意し、これを板書の代わりにして、講演を進める。一番初めに出てくるのは、宇宙は膨張するという宇宙論だ。空前にして絶後の講演の仕方だった。ものすごいパッショネートな話法を身につけておられた。毒舌で名高い大宅壮一さんも参って、神戸の先生の元に通ったそうだ。

模造紙と筆を板書代わりにして講演する賀川豊彦先生

何しろ先生は、日本の労働運動、農民運動の創設に深くかかわった人だ。神戸市葺合（ふきあい）の貧しい人たちが住む街での生活再建運動、川崎製鉄の大ストライキの指導

者として検束された。その体験を『死線を越えて』『壁の声聞く時』『太陽を射る者』の三部作として、白樺派の擡頭した時期に社会小説の先駆となった作品を、ベストセラーとして世に送り出した。伝説だが、大英百科事典を斜めに読めたそうだ。

扇面に書いていただいた歌二首がいまも手元にある。

吉野路の小石拾いて白亜紀の昔偲（しの）びて神思う哉（かな）

夏よ夏蝉（せみ）も蝶々（ちょうちょう）も神をほむ我も彼らの態度学ばん

昭和十五年（一九四〇年）の夏、先生とともに大和桜井（奈良県）から多武峰（とうのみね）にのぼり、明日香の村に下り、一日行をした道々、私と先生との対話がこの歌となった。

豆乳で危機を突破

戦後、私はウラジオストクで抑留生活中、栄養失調からくる坐骨神経痛で動けなくなり、二週間以上の不眠が続いて、これが最後かと覚悟した一時期があった。仲間に教えられ、水を含ませたハンカチに一握りの生大豆を包み、これを飯ごうの中ごに入れて腹のところに当てておく。四、五日するとモヤシになっている。ゆでた大豆は石ですりつぶし豆乳にして飲む。これで危機を突破した。

ポシエットの草原に移り、凍（い）てついた大地の上で天幕生活を送った。朝鮮から回されて来た人々は無造作にミンタイという魚の皮とか骨を捨てる。それを拾って歩き、石の上でたたき砕いて食べた。これが良かった。半月もすると歩けるようになった。復員するまで集団について歩き、脱落しないところまで回復

した。この話を賀川先生は真剣に聞いてくださった。

井戸掘る人の苦労

先生の小説『一粒の麦』の中に、ある人が急に腹痛に苦しむ場面がある。その時、青年は粉ハミガキを患者に与え、たちまち痛みを止める。当時の粉ハミガキに重曹が入っていることを知っていて、応急措置をとる。小さいことだが、山村の生活の知恵、生きざまを先生は知っていて、見事に作品の中に生かされた。

今日の農協がやっている生命共済、火災共済、厚生病院の経営、生活協同組合、農民組合の運動は、どれをとっても先生を中心に、戦前からの果敢な戦いによって道が開かれたもの。財界の利益に反すると極度に妨害を受けたものだ。国民健康保険も先生が切り開いてきた。私は井戸を掘った人の苦労を忘れてはならないと思う。私は宗教者としての賀川先生よりも、社会運動者としての先生の影響を多く受けている。賀川精神を継承する団体が「イエスの友」。大正十年（一九二一年）の創設で、今の中央委員長は東京時代の友人の金子益雄さんで、湯河原教会の牧師だ。

後藤静香先生に学ぶ

もう一人の師、社会教育家の後藤静香先生との出会いは昭和四年（一九二九）ごろ、帯中の図書室で見つけた『希望』という小冊子だ。後藤先生には三年後東京で初めてお会いした。ボランティア活動の先駆者で、社会教育から福祉まで数々の薫陶を受けることになる。

『希望』という小冊子は後藤先生の個人誌で、全文一人で執筆された。発行所は希望社。帯中恩師の畠山

正芳先生の師範の同期に飯田二郎という方がおられ、希望社に関係されていた。その誌友活動を希望社運動と言っていた。もとは修養団の内部組織といってよい形を取っていたが独立する。修養団と違うところは、社会福祉にまで目を行き届かせていたことではあるまいか。

今でも続くのが点訳奉仕活動と、ハンセン病をアジアから無くす運動。日本点字図書館長、本間一夫＊さん（留萌管内増毛町出身）の『指と耳で読む』（岩波新書）に、この図書館の歩みが詳しく書かれているが、後藤先生は自らが講師になり、晴眼者を対象に点訳者の養成講習会を始めた。東京が戦災に遭うまで続き、戦後は点字のほかに耳で読むテープライブラリーが設けられ、声の奉仕者育成にまで広がった。また、東京の戦火を逃れて点字本を帯広に疎開させ、これが北海点字図書館（帯広）の基礎となった。

話はそれるが帯中時代、中学生たちの読書グループがあり、毎日、少年たちの家庭を会場に輪読会が開かれていた。畠山先生の誘いで会に顔を出すようになった。大人たちの会合にも加えてもらった。さすがに大人たちは読書家が多く、小図書館と言えるほどの蔵書家もいた。

私には手の届かない本がここでは読めた。内村鑑三全集の『ロマ書の研究』などの大冊は随分と小骨の多い本だが、よくかじりついたと今では冷汗が出る思いがする。しかし、この時代の乱読は今もって無駄になっていないから不思議だ。

昭和13年ウィーンでの後藤先生

小学校の代用教員に

帯中を卒業した昭和六年、河西支庁の視学（いまの十勝教育局長）だった高橋正男さんの誘いで代用教員になり、十勝管内清水町下人舞の小学校に赴任した。恐慌の後で大冷害の始まりの年だった。一帯は泥炭地。何とかしたい、小作農の親子が食べられるようにしなくては、ただ教えて月給をもらうだけでは駄目だ、と思った。これが私の人生を決める。

校長がカリエスで教壇に立てないのを幸いに、独断で青年相手の夜学を始めた。村おこしを進め、のちに音更町長になる本家三郎＊さんや清水の菊地栄光さん、川西の藤本与順さん、新得の西川忠四郎さん、足寄の森哲道さんらと、各地で活動する青年を横でつなぐ組織「十勝興村同盟」を結成した。

昭和12年十勝農学校「研農寮」にて十勝興村連盟の第２回研修会

十勝農学校でのこと

九年、十勝農業学校（現帯広農業高）に社会人を対象とした研究科が設置され、農業を勉強し直そうと入学した。晴耕雨読の毎日だった。二年目は助手になり、まだ帯広市内にあった道立十勝農試、久保栄の『火山灰地』のモデルとなった場長の玉山豊さんに話をつけて、遊んでいた米国製やドイツ製の農業機

械を借りてきて、片っ端から試用試験をやった。この時、農業機械はただの機械でないことに気付いた。機械の造られた国々の畑の土壌の状況を自ら物語っていることが分かった時、うれしかったことを覚えている。

十一年に突然、面識のあった佐上信一・北海道庁長官から道庁に来るよう言われた。実学をした人材を望んだのだろう。青年教育を担当した。

東京へ出て雑誌編集

道庁勤務をしていたある日のことだ。後藤静香先生の関係で何度か手紙をやりとりしたことがある東京の雑誌編集長、加藤善徳さんから一通の手紙が届いた。「お前はそのまま役人をやっていると、田舎天狗（てんぐ）になる。道庁なんかさっさと辞めて東京に出てこい。東京で仕事をしろ」と書かれてあった。

雑誌編集者時代、「生活館」前で黒沢西蔵先生（中央）と

道庁に辞表を出して昭和十三年（一九三八年）春に上京。『生活』という雑誌の編集を、加藤さんの下で手伝うことになった。雑誌を出していた新興生活館は同じ名前の財団の運営で、創設者は佐藤慶太郎＊さん。佐藤さんは関東大震災後、個人の力で今の都立美術館を一〇〇万円で建て、東京都に寄付した人である。青年団運動の指導者の

一人で一事貫行を唱導していた山下信義先生の思想に共鳴していて、生活館の建設、運営のために個人の財産一五〇万円を出した。

雑誌の編集では、多方面の多くの人材と親しくさせていただいた。持ち駒（ごま）といって、いつでも快く原稿を書いてくれる人を、周辺に数多く持っていることが大切だ。詩人の高村光太郎先生とは特に親しくなり、宮沢賢治の話を聞いたり、賢治ゆかりの人たちを紹介してもらった。今も感謝している。

人脈が大きな財産に

雑誌の仕事の一方で、東京時代はいろんなところに顔を出した。農業関係には特に首を突っ込んだ。当時の産業組合青年連盟本部は、委員長をしていた田村民安さん（後志管内倶知安町出身）をはじめ北海道出身者が多かった。私自身、社会人の第一歩となった代用教員時代にこの運動に打ち込み、地主本位でなく小作の立場も考えた産業組合に、と十七歳の若さで役員選挙にかかわり、世代交代を図ろうとしたほどだ。

東京でも、産青連など農業関係団体の若手の意見交換の場だった土曜クラブにも加わった。こうした東京での人脈は大きな財産となる。印刷所の隣に日大があり、夜学の法文学部史学科に入った。地理・歴史を専攻したのは、人文地理を学べば当時は実質的には農村社会学をやれたからだ。三年間の専門部を終え、学部に進んだのが十六年。その年の夏「赤紙」が届く。

樺太で終戦、抑留生活

応召して行ったのが宗谷要塞（さい）だった。予備士官学校での約半年間をはさんで、終戦は樺太（サハ

リン）側で迎えた。その後の抑留生活は、ウラジオストク、ポシエットを経て、遠くウラル山脈西側のヨーロッパロシアに行った。ボルガ川支流のカマ川畔のエラブカで八カ月間、極寒の一月から八月まで毎日、ヨーロッパ赤松の伐採をさせられたこともある。日本にやっと帰れたのは、二十二年十二月だ。

実家のあった十勝の上士幌に戻り、自活の畑仕事をしたり、叔父の電気屋を手伝ってラジオを売り歩いたり、帯中の社会科講師をしたりしていた。そうこうするうち、二十三年秋、足寄にラジオを売りに行って帰ると、公選制で初めて実施された道教育委員の選挙が始まっていて、村おこし運動の仲間たちが、本人が知らない間に「お前を立候補させた」という。十勝の農民同盟挙げて選挙をやってくれ、定数六に対して十八人立候補した乱立の中で、下から二番目で当選した。次の選挙は全道の農民同盟青年部が動いてくれ、道教育委員は公選制が廃止される三十一年まで、二期八年務めることになる。

樺太守備隊、炭焼き窯の前で

「知恵と力を貸して」

道の教育委員時代で最も思い出があるのは、昭和二十七年（一九五二年）、十勝沖地震で大被害を受けた日高の平取町二風谷小学校のことだ。おそらく私が教育委員長だった時だ。穂坂徹校長、ＰＴＡ会長の貝沢正さん、副会長の貝沢松太郎さん、町議の貝沢善助さんが、いきなり私を札幌に訪ねてきて、知恵と力を貸

せ、という。

私の脳裏にすぐ、後藤静香先生と、違星北斗のことが思い浮かんだ。

北斗は余市町の出身で、昭和二年から三年にかけて、平取を拠点にアイヌ民族の文化研究と生活更生のため働いている。このころ、現在の余市・フゴッペ遺跡の近くに洞窟（くつ）遺跡が見つかり、記号か線刻様のものが出てきた。私の叔父で小樽高商教授の西田彰三が早速、小樽新聞にアイヌ説の考証を発表したが、これに猛然と反駁（ばく）したのが青年・北斗だった。

アイヌ民族は自然に対し極めて敬虔（けん）な民族で、和人のようにみだりに自然物を傷つけたり、落書きすることは絶対にしない　などと主張する北斗の言い分が素直にうなずけ、一読してどうも叔父の負けだと私は思った。

この北斗を愛し、その同族自立更生運動に絶大な期待をかけていたのが、後藤先生であった。北斗は体調を崩して余市に帰り、四年、惜しくも二十九歳の生涯を閉じるが、後藤先生は早速、北斗の精神を凝縮した遺稿集『コタン』を出版された。先生は、必ずその志が将来によみがえる、と考えておられた。

二風谷小にあったとんがり帽子の時計台

風呂、水洗便所付き校舎を

二風谷の方々が来た時北斗のことを語り、コタンに浴場を建てたい、希望園を造りたい、など北斗の日記にあった夢を話し、風呂と水洗便所のある学校

をと提案した。

また私は、東京の自由学園や帝国ホテルを設計したフランク・ロイド・ライトの弟子田上義也（たのうえ・よしや）さんの話もした。自由な発想と、機能と造形美が一体となった建築だ。従来の学校建築は兵舎建築と変わりない。戦後の民主社会と文化国家を目指して美術とか音楽とかで情操を豊かに高めようとしている時に、兵舎や箱のようなバラック校舎はやめにしよう、みなさんと力を合わせ、和人を見返してやろうではないかと心情をぶちまけた。

こうして二十八、九年の二年がかりで学校を建てた。構造設計は道教育研究所の山崎慎さんに頼んだ。学校の周りにある六十年生のカラマツで小屋組みと野地板を取る。砂利と玉石は学校裏の沙流川から運び上げる。子供達まで前掛に石をいれて運んだ。

作業は住民が総出で

当時一四〇～一五〇人いた二風谷の人たちが総出で手伝い、とんがり帽子の時計塔のある赤い屋根のハイカラな校舎、風呂と水洗便所のある当時、道内では考えられない学校ができてしまった。これがアイヌ民族の今日の運動につながるきっかけの一つになったことは間違いない。

今、二風谷の地域の中心となって活躍しているのが当時の小学校三、四年生たちであるという。生活館ができ、民俗資料館ができ、北大のマンロー＊記念館があり、萱野茂さんのような素晴らしい人材を得て、その波紋は日本に、世界にと広がっていっている。

善助さん、正さん、松太郎さん、穂坂先生と、みな亡くなられた。しかし二風谷は先輩の志を忘れず、過疎どころかいよいよ活力を加え、アイヌ文化の発信地として躍進している。ありがたいことだ。

暉峻先生の調査に同行

道教育委員時代、会議や団交などで拘束されていない時には、現場主義であちこちを飛び回っていた。特に、産業医学での世界的な先駆者で、東京時代に押し掛け弟子となった暉峻義等（てるおか・ぎとう）先生の調査に同行したことが、思い出深い。

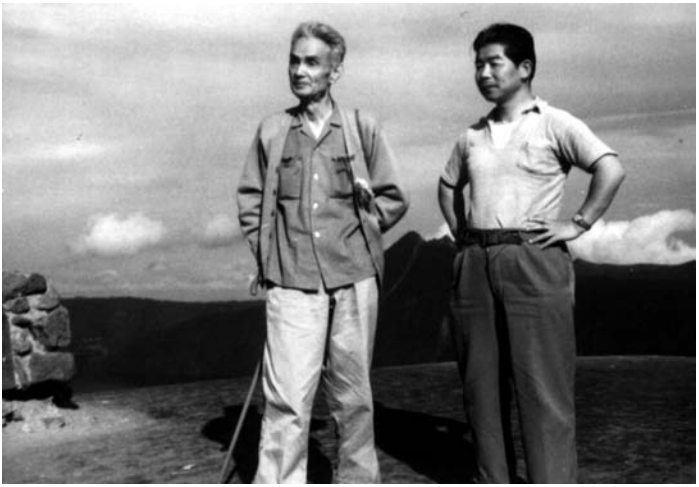
戦後、先生は公職追放になり、漁船漁業の労働調査、農業労働科学の体系化に力を注がれるようになる。

後志管内喜茂別町のアスパラ労働調査は、当時はホワイトアスパラの時代で作付面積も大きく、タクシーの手配もつかない時代だったので、貸自転車を調達して、危なっかしい先生を前にしながら、経営規模別に標本農家を決め、村の中を一軒一軒訪ね歩いた。農家の玄関を開けると、土間の壁にずらりとノミが掛けてある。一本一本スケッチをしていく。一本のノミがその使用者の労働のありさまを物語っている。子供まで動員されていることがノミで分かるのだ。

また、開拓保健婦の活動調査に同行して、開拓地の農民の生活状況、特に医療対策について道東の標茶、弟子屈、足寄とお供して歩いたこともある。摩周湖近くでは、あんなにそばに湖があるのに水に困る農家があったりした。地図上で線引きして農地を割り振っているから、こういうことになる。現地を見ないと分からないことが多かった。

着眼点の鋭さ学ぶ

先生との出会いは一冊の本、岩波全書の『社会衛生学』だった。道庁時代、衛生技師の机の上ににあったこの本を何気なく取り上げ、拾い読みしたのがきっかけだ。



暉峻義等先生と開拓者を訪ね歩く（摩周湖畔にて）

「衛生」といいながら、いきなり人口論が出てくる。生物生命体としての人の心身発達のことが出てくる。当時、私たちの常識では衛生とは伝染病の予防対策のことだと思っているから、随分変わった本だと思い、早速自分でも買い求めた。

先生の着眼点の鋭さには、いつも学ぶところが大きかった。日本では繊維労働者はじめ、労働者の多くが農村から出ていく。悪い労働環境の中で病気になると、片端からやめさせられて帰郷させられる。農村は疾病労働者の吹きだまりにされる。これは単なる都市労働者の問題でなく、国民全体の保健の問題である。

だから農村の労働環境、医療体制、生活環境を早く変えていかないと農業は崩壊する。農村、農業が変わることが、都市の労働環境に変革を及ぼすことになる、という。先生の意見に私もうなずいた。

知識の切り売り教育ではダメ

また、生理学者の立場から特に青年前期、後期の心身発達と人格の形成について指摘されており、これがのちのち私が定時制、勤労青年の教育のあり方に注目する理由となった。知識の切り売り教育では駄目という、こんな医学者にぶつかったことがない。

先生は、厚生病院の第一号である中野組合病院の再建と改築を、賀川豊彦先生から依頼され、完成のテープカットをされたものの、過労から倒れられる。お見舞いに上がると、奥様に時計を指さされても、トケイの言葉が出てこない。それでいて私に向かって何をおっしゃるかというと、開拓地をご一緒した時のことはちゃんと覚えていて、あの芽登（足寄町）の農家の病人はどうされているか、とはっきりお尋ねになる。奮闘、また奮闘の生涯。昭和四十一年（一九六六年）十二月、七十七歳で亡くなられた。

三十五年に市役所入り

昭和三十一年（一九五六年）に道教育委員を辞めた後、道農民同盟＊青年部事務局長の野口希彦さんの勧めで、道農業自立推進協議会常務理事となった。協議会では三十年の設立当初から理事をしている。十勝管内芽室町農協組合長だった高橋雄之助さん（元北農中央会長、元参院議員）を会長に農家の真の自立を目指した運動である。リュックサックを背負い、幻灯機と手がきの紙芝居を持って道内を歩いた。農事実行組合を行政の伝達組織でなく、家族全員が主体性を持って参加する協同生産組織に変えようという運動だ。農家で雑魚寝し、疲れ切るまで議論する。同志として運動している訳だ。この時期の活動は心の成長に役立ったと思う。

三十五年、子供の時からの付き合いだった当時の帯広市長の吉村博さんから、まちづくりを手伝えと言われ市役所入りした。市町村自治体では日本で初めて総合計画を手づくりした直後で、これを実現せよという話だった。

座談会の火付け役

吉村市長

経済厚生部長に迎えられ、部長になって三、四ヵ月は計画書を読みながら地図の上で戦略を練った。ちょうど帯広民衆駅を建てる話が出ていて、関連して中心商店街のまちづくりをどうするか、という話で時々、町内の座談会に呼ばれた。少年時代からの知り合いが町内の顔役になっていた。親しいものだからつい、時折バラ色の発煙筒をパッとたいて反応を調べてみた。

例えばこうである。札幌の大通のような一〇〇メートル道路が帯広でもやれる可能性があるのだが、どうか。目抜き通りの西三条と西四条をはさんで根室本線から国道三十八号線までをぶち抜く。日高山脈のこちら側に、札幌の向こうをはって大通緑道なんて面白いではないか、とかね。サッポロ、サッポロと大層にいうが、札幌も戦前はせいぜい人口二十万人程度の街だ、と仕掛ける。

また、例えば帯広の西の端の西帯広から東の端の札内川までの根室本線の両側を、並木でなく原始林ではさんでしまう。原始林のど真ん中に列車が止まり、降りてみたらそこが帯広駅だったら面白いではないか、と言ってみる。

常磐線の上野を出入りする時注意すればすぐ分かるが、鉄道高架にしたり、街の裏側を列車が走るとどうなるか。夏は二階家は開放的となるので丸見え。物干し台は満艦飾になる。日本的といえばまことに日本的だが、海外を歩いて沿線風景でこんな場面にぶつかることはない。都市景観もちゃんと都市計画に入れるべきではないのか。

駅には情緒も必要

そうした意味でも、帯広民衆駅は縦割り組織の国鉄相手のけんかで苦労したが、多少の工夫はしたつもりだ。

この帯広駅も鉄道高架であと五、六年で消滅するそうだ。コンクリート建築が構造的に傷んでいないのに簡単に消滅していくのは、もったいない気がしてならない。

歌うごと駅の名呼びし柔和なる若き駅夫の目をも忘れず

啄木が釧路に向かう時の歌だが、帯広駅で詠んだのだろうと啄木日記から私は考証している。そういう情緒的な停車場もあってよいのでないかと思う。

西帯広工業団地の造成

帯広市役所時代にやったことに工業団地造成がある。計画面積は五〇〇数十ヘクタールで、当時の帯広市街地に相当する広さだった。

用地を提供してくれる農家も市民、入居する工業者も市民という市民基盤の上に立って物事を考えた。農民からの土地取り上げであってはならない。離農対策班をつくって対応した。離農者団地をつくって必要なだけ土地を与える。そのうえで企業の人たちの住むアパート、マンションを建てさせ、毎年の家賃が投資額の一割になるようにした。

工業界から帯広工業団地促進協議会代表の土谷清さん、農業界から西帯広開発期成会会長の野原行男さんにお世話いただいたが、もう亡くなられた。感謝している。事務方も、もう何人か故人になった。まあ、バランスが取れ、赤字を出さずに片付いたことは、めでたしである。

企業誘致で、松下電工が進出してきた。ありがたいことに松下電工の当時の社長、丹羽正治さんは、後藤静香先生の著書を小学校より愛読され、学生のころ私と同じように社会教育運動をしていて、互いに存在を知った仲だった。話は早く、後藤先生の関係の加藤善徳さんの口添えで進出が決まり、丹羽さんが社内をまとめてくださった。幹部が帯広へ出張する用事をことあるごとにつくり、自然と帯広進出を仕向ける。いかにも丹羽さんらしい手の打ち方だった。

道に空港政策なし

経済厚生部長を引き受けて最初に手をつけたのがこの工業団地。そして空港、石勝線の実現である。地域開発は交通運輸の戦略をどう持つかということだ。

空港再建にはいささか苦労した。帯広空港は三十九年に再開、札幌線が飛んだ。歳月を経てこの夏、大阪に直行便が飛ぶようになったのは感慨無量である。

この当時の道庁には、空港政策が全くといっていいほどなかった。戦後の千歳の軍民併用、ついで函館、釧路、稚内に第二種空港が開設されたのは、米軍の都合による配置であって、道の主体的計画でない。市町村にも協力出資させて道策会社の北日本航空をつくったが、これがなかなかうまくいかない。このため空港政策に手が回らず、非常に臆病だったのではあるまいか。

話はさかのぼるが、大正十四年（一九二五年）に十勝の音更町の高台に、逓信省認可の正式飛行場ができ

た。北海道民間航空の父、上出松太郎さんは、この音更飛行場からはばたいた。ここでたちまち二等飛行士の資格を取る。十勝の空が上出さんを育て、北海道の初期の航空関係者のほとんどが上出飛行士に育てられた。かくいう私もヒコーキが大好きになったのは、上出さんの感化だ。

池田に飛行機呼ぶ

私が池田から帯中に列車通学し、池田の子供の科学会で活動していた時、鈴木という歯医者さんが中心になってお金をつくり、音更から上出飛行士を呼んだ。飛行機の離着陸は今の清見ケ丘公園である。

上出さんがプロペラを回してエンジンをかけ操縦席に滑り込むと、尾翼のロープを引っ張っていた私たち子供が手を放し、見事に離陸していく。池田のまちの訪問飛行は成功した。

当時としては珍しい飛行機の実演のため、あちこち歩いて寄付や広告集めをしたが、子供でもそれくらいの仕事ができるという体験は、のちのちの人生に役立った。

帯広空港から東京便が就航するまでには、こんなエピソードがあった。

全日空の社長と交渉

当時の北日本航空の社長は増茂昌夫氏、常務は日航から出向の片岡淳氏であった。札幌に会いに行くと、片岡氏は「会社は帯広に飛行機を飛ばす気はさらさらない。一体、帯広に乗るお客がいると考えているのか」という。こちらの話を半分も聞かないうちにこの返事だ。小なりといえども帯広市や十勝の町村は株主だ。「少し慌てさせてやろう」という気にもなった。早速、上京して全日空社長の美土路昌一さんに会った。

帯広は札幌に飛行機を飛ばしてくれとは考えていない、東京便に期待をかけている、と帯広駅を中心にした東京方面往復の鉄道旅客数の数字を見せて交渉した。美土路さんは非常に乗り気になってくれ、専務の岡崎嘉平太さんを調査に行かせましょう、と会談に同席させた。ここまで話が進めば見通しが明るい。

空港の工事現場には私が案内した。岡崎さんは広い空港の環境を見てとって、「これは素晴らしい。ここは場周柵を思い切り広げて、綿羊を放牧したらよい。日本に一つぐらいそんな飛行場をつくりましょうよ」という。驚いて、そんな飛行場どこにありますか、と尋ねると、オランダのスキポール空港が手本になる、という話であった。

全日空はＤＣ３を使い、途中、青森県八戸あたりで給油して東京に飛ばそうという腹を固めてくれた。この話が新聞に載ると、慌てたのは北日本航空。函館を全日空に明け渡しはしたが、道策会社の因縁からこれ以上内陸に手をつけられては困る、と懇請してくる。結局、四十年、北日本航空などが合併した日本国内航空で東京便が実現した。

俳句好きの吉村市長

さて、スキポール空港は企画室長となった四十五年に視察した。欧州、アメリカを歩いて飛行場を数々見た中で、驚きの景観だった。

日本にも、北海道のイメージのためにも、乳牛が悠々、牧草を食べているような空港が実現してよいのでないか、と思う。企画室長として第二期総合計画を策定し、四十六年から三年間、助役を務めた。

ところで、帯広市長だった吉村博さんは俳句が趣味で、中学時代から首に手帳を下げて俳句の材料を探していた。瞬間的、直感的に要点をつかんでしまう技量は、俳句を詠み続ける中で培われたのではないだろう

か。

われわれが一時間かかる話を五分間で決めてしまう。そんな話し方が魅力だった。俳句も類型的でなくオリジナルな作風で、語彙（い）も豊富だった。

再び村おこし運動へ

私は、市長は船頭のようなものだ、と思っている。絶えずまちづくりの大きな方向と乗客、即ち市民の生活の福祉と安全に心配りしていかねばならぬ。吉村さんは、実務は役人に任せ、常に大局的に考えていた。帯広の森をやる時も次の選挙など全く考えず「二〇〇年、三〇〇年かかって立派になる木を植え、森林を造る。市民は子々孫々にわたって続いていくもので、一〇〇年、二〇〇年かけて造っていくことで、市民精神も育ってくる」と言っておられた。

四十九年三月、吉村さんが辞め、田本憲吾さんに政権交代した。七月に私も退任し、再び、村おこし運動に打ち込むことになる。

道農民同盟が支えに

戦後、私が復員して以来、帯広市職員の期間を除いて、私を支えてくれたのは道農民同盟である。そして、道農民同盟青年部であり、その中心にあった野口希彦さんだ。同志として随分世話になっている。野口さんは私が市役所入りしたあとに道農業自立推進協議会常務理事となって組織をささえ、北海道農業の自立推進運動を進めてきた。

北海道農業は昭和二十八年（一九五三年）、二十九年、三十一年と冷害、凶作に苦悩する。この危機を突破しようという三十年の道農民同盟青年部の函館大会で、青年の自主自立の生産体制を推進すべきだ、と決議され、自立推進運動が始まるきっかけとなった。以来、三十数年たゆまぬ運動が続く。全くの申し合わせ団体で、道内の自治体、農協の協賛で支えられている。

帯広市の助役を四十九年に退任後、野口さんに協力し、同協議会理事として移動村づくり大学の手伝いをやっている。また、「キロコ地域研究所」という看板を掲げ、道内外から講演や地域おこしのアドバイスを頼まれ、あちこち飛び回っている。

三十四年に始まった移動村づくり大学は、既に一六六回、参加者八〇〇〇人に達している。継続は力である。私の目の黒いうちは、この仕事に協力していくつもりだ。

生きがいのある仕事

農業自立推進運動は、初めは簿記記帳運動で各農家が生産コストを自覚し、コストを下げる努力をする。さらに、法人化、協同化による組織的なコスト引き下げ運動を展開している。

ところが、おかしなことに農業基本法制定以来の農政で機械化が進み、離農と規模拡大が始まると、法人化と協同化が壊れる方向に動いていく。三回の農薬散布が三十回の農薬散布の方向に進む。化学肥料を多く与えると、かえって農業の命の土を壊し、食べ物は自然から遠ざかり、それが、病害の多発を招き、さらに農薬散布の回数を増やすという悪循環に巻き込まれる。土壌の物理性と化学性しか考えず、生物性を無視した農学なり技術はおかしい。私にしてみれば、生きがいのある仕事をいっぱいつくってくれている訳だ。楽しくて楽しくてたまらない時代である。

帯広での宮沢賢治展

宮沢賢治の実弟訪ね

最後に、私にとっては目に見えない師である宮沢賢治のことを話したい。五十二年のこと、書店で雑誌『ユリイカ』に「総特集・宮沢賢治」とあるのを見つけた。パッとめくると座談会の記事があり、冒頭、「自己紹介　私は神田の木呂子敏彦です」という活字が目に飛び込んだ。

昭和十五年五月十三日、東京・日本青年館の一室だった。東京の宮沢賢治研究会の初会合で、賢治が岩手・花巻農学校の教諭時代に同僚だった藤原嘉藤治さんが司会し、中島健蔵さん、谷川徹三さんらを交えて座談会をした時のものだ。座談会のあと、八月に賢治の実弟清六さんを花巻に訪ね、いろいろお話した。この時清六さんから賢治遺言の一〇〇〇部の中の一冊の法華経を頂き今も手許にある。

こうした縁で、北海道賢治の会の代表を務めているが、五十年に宮沢賢治文学展を帯広など道内七ヵ所で開き、三万五〇〇〇人以上の入場者で大成功を収め、花巻市に賢治記念館建設を促す寄付をした。翌年には帯広市の中央公園に同展の益金で文学碑を建立した。二十一世紀に向かって賢治の精神に心を寄せていただければと切に思うものである。

平成四年　北海道新聞

いのちの大地に、いのちの食べものを

バカなアメリカ式考え方は通用しない

三月二十八日の北海道新聞夕刊にパリ二十八日発「農業と環境の調和提言―ＯＥＣＤ農相会議・農家に財政援助も」という記事が出ていました。

「十年ぶりに開かれた経済協力開発機構（ＯＥＣＤ、現在参加加盟国二十）の農相会議は、最終日の二十七日、農業と環境の調和などを盛りこんだ共同声明を採択して、閉幕した。」

これまで一貫して農業の効率的食料生産と、自由貿易化を追求してきたＯＥＣＤが、ここに来て、一転農業の持つ「多面的機能」を認知し、「環境と共存できる農業」を謳ったもので大きな転換点となろう。

米国とＥＣの対立のため、暗礁にのりあげているガットのウルグアイ・ラウンドについては、声明の中で、早期かつ成功裡に終結の期待を表明し、農業分野の解決が基本であり、終結のために政治的妥協が必要という認識を示して深入りを避けている。

しかも農業と環境の調和については、「農業は、環境の主要な管理者」であり、「農林業と環境の相互関係がますます重要である」とした上で、土壌保全、洪水調節、景観維持など、農業の「多面的機能」を強調し、「環境の持続性と、農村地域の資源保全に対する貢献を認識すること」を強調している。

そのための施策として、環境保全の農家への直接援助のための財政措置、環境管理協定、環境にやさしい品種や肥料の研究開発などを挙げている。

また農村地域開発についても言及し、「単に農業政策ではない、より広い総合的な開発政策の必要性をうたっている」

以上が最近になって先進各国を中心に、世界の関係各国の農相が集って出した結論であります。

このＯＥＣＤには、日本の農水省から篠原孝さんが昨年からパリに常駐して大活躍をしていた訳で、このアタリマエの結論がアタリマエのこととして各国の合意を得られたということは、従来のアメリカ中心の世界を画一的な思想のもとに貿易自由化を押しつけ、農業の風土性、土着性をまったく否定しようとする無限定な国際市場化を阻止する手がかりが得られたことで、今後の動きを注目する必要があります。

大地にたつ農業の原点に返ろう

農業は土地利用が基本であります。この土地を大切にしていよいよ豊かにしていく。豊かな大地が豊かな農業、豊かな農村の発展を永遠に存続することを許してくれるものであります。

農業はいのちの食べものを作る産業であります。人間にとっては、生きている限り存続して貰わねばならぬ産業であります。

農業の土地は、工業の土地とはまったく違うものであります。従来の経済学は、近代経済学であれ、マルクス経済学であれ、ここのところの間違いを犯してきました。土地、資本、労働といって工業も農業も画一的に扱ってきました。

そうではなく農業の土地は生きている。生命活動をしている土であります。雨が降っても、風が吹いても

働いている土であります。肉眼では見えないこの働きを今までの学問は無視してきました。未知なことは一切きり棄て、わかったことだけで理屈を組みたてわかったような顔をしてきた、総合を忘れた科学の細分化、専門バカに問題がありました。

名古屋大学の熊田恭一が、土壌肥料学会の主流が土壌の化学性、物理性の研究にすっぽり埋没していることに対し、土壌学者の大部分が、水耕思想に執着し呪縛されていると真正面から批判し、土壌の生物的側面、微生物性にもっと注意をふりむける必要を指摘したのが、昭和四十八年のことです。

さらに、熊田は追及の手をゆるめず、石塚喜明（北大名誉教授・農芸化学）のいう「肥料依存型の多肥農業」の背景にあるのは、水耕の思想である。肥料依存型というコトバ自体が、土壌依存から離脱（土壌否定論として）し、地力に代って化学肥料の優位性を誇示するものであると、『土壌環境』（昭和五十五年、学会出版センター）で詰め寄っているのであります。

熊田のいう土壌の微生物性を、京都大学の学長もやった奥田東に激励支援されて、ようやくその成果をまとめたのが小林達治（こばやし・みちはる）＊の『根の活力と根圏微生物』（昭和六十一年、農文協）だと私は理解しています。

小林は、この本の「まえがき」でこのようにいっています。

「従来、高等植物の根の役割については、次のような見方が主流を占めていた。すなわち根は、土壌という固定された場所から、水分、養分を吸収し、また、その場に自体を立脚させる器官にすぎない、という考え方でありました。

われわれは、二十数年前から土壌中の微生物、とくに根圏微生物が、高等植物（作物）の栄養分の吸収とその体内代謝系に、多大の影響を与えていると考え、研究を進めてきた。

科学の進歩は目ざましく、分析機器の性能は向上し、アイソトープの利用や高等植物の無菌栽培技術も確

立され、根圏域における根と微生物との相互作用、物質代謝も詳細に調べることができるようになった」と。

特に、次のことが重要であります。「高等植物の根からは、その植物特有の分泌物を排出しており、その分泌物を求めて、微生物は、根圏域にくらべてはるかに多くなっている。

この根圏微生物は、各種の有機物を分泌し、根は、これらの微生物の排出物を利用することができる。

微生物の排出するアミノ酸、低分子量核酸類などは、その植物の生殖生長などに、非常に効果的に寄与し果実その他農産物の品質向上には、微生物の排出する有機物の吸収が必須であることが、明らかになった。

高等植物の根は、本来、無機、有機を問わず、選択的に、それらの成分をうまく吸収する能力をもっている。そうした根の機能を充分発揮できるようにしているのが、根の近くで活躍する根圏微生物である。植物の根圏微生物とは深い関係があり、この関係を良好に保ち、共存共生の環境をつくることが、土壌管理の基本となる」というのであります。

文部省の検定農業教科書はズレこんでいる

図1は、山根一郎監修の現在の農業高等学校で使用している、文部省検定済の教科書『栽培管理』に出ている、耕地における物質循環を説明したものであります。

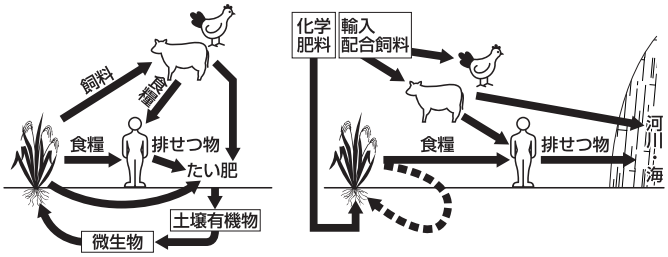


図1　循環の保たれている過去の農業(左)と循環がたち切られている近代農業(右)

左半分の図は、過去の伝統農業では、ちゃんと土壌に有機物が還元されている。

植物は唯一の「生産者」として光合成により植物生産を、人間と家畜（動物）は「消費者」として植物生産からいのちの糧を受けとり、その排泄物は、茎葉残渣と共に耕地に還元し、「分解者」としての微生物は、有機物をエネルギーとして養分を無機化する働きをして、植物生産のため養分として供給し、生きている土壌を舞台として物質循環が行われていることを説明しています。

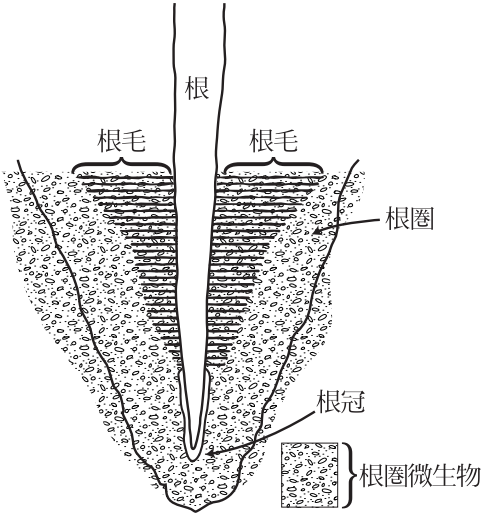
右半分の図は、おそらく化学肥料一辺倒、配合飼料一辺倒で農業生産が行われ、土壌の物質循環が絶ちきられ、環境浄化の能力が無視され、消費者としての動物の排泄物、過剰に投下された化学物質等が、河川、湖沼、海岸等を汚染し、生態系、生命系の環境破壊を進めていることを示しているものと思います。

この物質循環の説明はもう二十年以上も前の古い考え方だと思うのです。

図2、図3を見て理解を深めて頂きたいのですが、小林が解明したように、植物の根は、体内代謝の過程で根からその植物特有の分泌物を出しています。

人でいえば、口に運び食べた食物はクソ小便となって排泄されます。汗をかきます、フケも出る、耳あか、目くそ、鼻くそ、鼻汁を出す。こすればボ

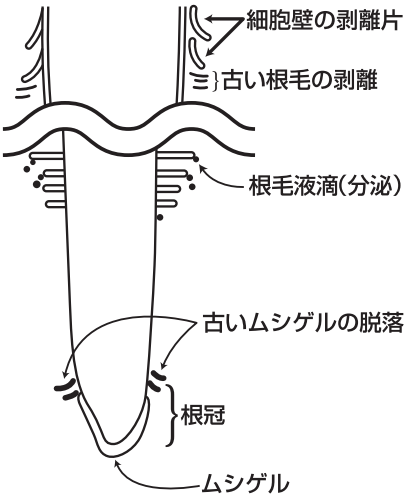
図2　根圏域における細菌の行動を示す模式図



運動性のあるものは根圏域より根からの分泌物をもらうためか、根の表層部や根毛表面へ近づいていく。根の表層部に到達すると、そこで微生物は植物根の分泌物を摂取するかわりに、なんらかの微生物代謝産物を与えているように見える。微生物によっては、根毛付近を飛び回り、また根毛にとりつき、そこで回転運動を活発に行うものもいる。すなわち穴をあけて根毛内へ侵入しようとしているように思われる。

（16mmフィルム写真撮影結果より）

図3　根から排出される有機物質



ロボロ垢も出る。生命あるものはすべて生物代謝をやっているかぎり当然のことなのです。

ところが面白いことがあります。講談社のブルー・バックスに、古谷雅樹著『植物的生命像』という本がこういう書き方をしています。

「植物には排泄作用はない。自分で生きるための必要な養分をつくる葉が、老化して役にたたなくなると身柄そのものを捨て去る。落葉とか落枝が植物の排泄作用ともいえる」と。

肝心かなめの、植物にとって動物の口にあたる根のこと、根圏のことはまったく思い至っていないことに驚くのであります。これが東大名誉教授の理学博士です。

次に、鎌田博・原田宏共著の『植物のバイオテクノロジー』（中公新書）ではこう書いています。

「植物は、根や葉から吸収した物質から、自身の生育に必要なものを合成利用しているので、排泄機能はなくてもよいと考えがちである。

植物も自身の生育に毒なものは生成するし、毒を合成する場合もある。

植物細胞では、体内で生成した毒を、液胞に貯えることが多い。植物細胞特有のものであり、細胞の膨圧の維持のためにも深くかかわっている」というのです。

生物は、動物であろうが植物であろうが、生物代謝を行うかぎり不要となったものが、何らかのかたちで排出されると考えるのがホントウではないのでしょうか。

私がこのことに深く関心を持つようになったのは、もう二十年以上も前に吉田武彦さんが、東大の金沢夏樹といった大物の農業経営学者たちに、土壌肥料の考え方を説明したことがあります。

そのレポートを読んで驚きました。落葉松がPH四・三とかの強酸性の有機酸を、根から分泌するというのであります。根圏で何がおこっているのか、注意するようになりました。北見の置戸の農地で見た、真白いポドソル土壌のことを思い出したのであります。

実は、この植物がクソ小便する話を、道内大学の学生で組織している農業問題研究会の創立三十周年記念とかで講演した時、資料を配ってお話したことがあります。会場は帯広畜大であり、農業、畜産、農村生活といった、生物に関係ある大学の学生たちです。非常に新鮮な問題として、はじめて聞いたといって喜んでくれました。

この時名寄女子短大の学生さんから質問があり、そのクソ小便を構成する物質の名を教えろということですっかり嬉しくなったのですが、それが表1であります。

すべての生命が生きているということは、生物

表1　根の浸出液中の成分（Rovira　1965）

炭水化物	グルコース、フラクトース、ショ糖、キシロース、マルトース、ラムノース、アラピノース、ラフィノース、オリゴ糖
アミノ酸	ロイシン、イソロイシン、バリン、γ－アミノ酸、グルタミン、α－アラニン、アスパラギン、セリン、グリタミン酸、アスパラギン酸、シスチン、システイン、グルシン、フェニルアラニン、スレオニン、チロシン、リジン、プロリン、メチオニン、トリプトファン、ホモセリン、β－アラニン、アルギニン
有機酸	クエン酸、リンゴ酸、酢酸、プロピオン酸、酪酸、吉草酸、コハク酸、フマール酸、グリコール酸、酒石酸、シュウ酸
酵素活性	ホスファターゼ、インベルターゼ、アミラーゼ、プロテアーゼ、ポリガラクチュロナーゼ
その他生長促進または抑制物質	ビオチン、チアミン、パントテン酸、ナイアシン、コリン、イノシトール、ピリドキシン、*p*－アミノ安息香酸、*n*－メチルニコチン酸 その他糸状菌、細菌および線虫の生育を促進または抑制する未同定物質多数

代謝が行われているということだと思うのです。植物の根は、単なるジュースを飲む時のストローとは違うと思います。

とにかく、高等植物の生育を観察する時、根圏で行われている微妙で複雑な根と微生物の働きに、目が行き届いていないということであります。

都留信也さんも申されているように、「土壌微生物は、土壌構造の主要な要因であり、とくに植物根圏の細菌フロラが、重要な要因であるということ。土壌の持つバイオリアクター的機能をもっと掘り下げて具体的にする必要がある」と思います。

さらに、この『栽培管理』を一読して気のついたことをこの機会に指摘しておきたいと思います。

それは、第四章に「作物の養分と肥料」がある。三要素のほかに、「その他養分」として中量要素、次に微量要素の記述があります。

この微量要素の働きであるが、表2のように、いずれも酵素に関係しその構成分として、あるいは活性化の機能を持つものとしてしるされているのです。

ところがそこから先がない。この酵素とはいかなる働

表2　必須栄養成分と生理的役割（リチャードソン　1968）

元　　素	供　　給	生　理　的　役　割
1.水(H)(0)	根（まれに茎葉）	1.溶媒　2.膨圧　3.光合成代謝物として
2.窒素(N)	根（まれに葉） NO2またはNH4として	1.タンパク代謝　2.核酸代謝 3.酵素、補酵素の成分として酸化還元作用
3.リン(P)	根　PO4	1.タンパク代謝　2.核酸代謝 3.ADP、ATP としてエネルギーの蓄積と運搬
4.イオウ(S)	根　SO4	1.タンパク代謝　2.ビタミン成分として助酵素
5.カルシウム(Ca)	根　Ca	1.細胞膜合成代謝　2.茎、根生長点の発育 3.酵素の活性化
6.マグネシウム(Mg)	根　Mg	1.光合成(葉緑素成分として)　2.酵素の活性化
7.カリ(K)	根　K	1.細胞活動の維持　2.浸透助長 3.酵素の活性化
8.鉄(Fe)	根　Fe	1.酵素活性化　2.チトクローム酸化 3.葉緑素合成
9.銅(Cu)	根　Cu	1.酵素の構成分として
10.亜鉛(Zn)	根　Zn	1.酵素の構成分として
11.モリブデン(Mo)	根　MoO4	1.酵素の構成分として　2.NO2還元
12.マンガン(Mn)	根　Mn	1.酵素の構成分として
13.ホウ素(B)	根　BO2	1.酵素の構成分として

きをするものなのか、そこまでしるすのがホントウでないのでしょうか。
しかもこの酵素の働きは、植物の体内代謝における働きだけでなく根圏の活性化に関係があるのです。
表1中に、根の分泌物中に、酵素が五種類例示されていますが、都留信也さんの資料によると、土壌中にこれまで五十種類以上の土壌酵素が確認されており、土壌中の生化学活性は、この酵素によって触媒された一連の反応であるとされているから、その重要さが理解頂けると思います。
したがって、微量要素は単なる養分ではない。土壌酵素の生化学活性に深くかかわっていることであります。

いのちの一杯つまった、いのちの食べものをつくるために

柳川弘志は、現職は三菱化成生命科学研究所の研究部長であります。生命の誕生を深海海底中の熱水噴出口における化学進化に由来するという仮説をたて、その研究にうちこんでいる人です。物質から生命へ、生命誕生研究のシナリオを世に問うたのが、『生命の起源を探る』という本で、岩波新書から出しています。分子生物学をかじるためにも目を通しておいて頂きたい本です。
この本の「生命の基本的性格」に酵素のことが書いてあります。（四十一頁）
「細胞の七十パーセントは、タンパク質で占められている。
タンパク質は、生命維持に必要なすべての過程に関係している。
細胞のなかには数千種類のタンパク質が存在しており、それぞれに対応する遺伝子によって、規定された特異的な機能をになっている。
なかでも種類が豊富で、特異性の高いタンパク質が、生体反応を触媒する酵素なのである。

現在まで、二〇〇〇種類以上の酵素が、種々の生物から見出されている。

酵素は、酵素がなければ、ゆっくりとしか進行しない、生化学的反応の速度を、いちじるしく速める働きをする。酵素とはそういう触媒なのである。

一般に、酵素が触媒として反応する速度は、一億倍以上と考えられている」と。

酵素には、その働きによって触媒反応別に六種類あるとしるされています。すなわち、一、酸化・還元、二、転移、三、加水分解、四、リアーゼ、五、異性化、六、合成といった種類の働きをすることであります。

私は、ここで触媒の反応速度が一億倍ということは、大変なことであると考えるのです。作物の生育速度にかかわることだからです。しかも常温、常圧下で、生物の体内代謝のなかで行われる反応だというのです。

同じ化学触媒でも、農業で身近な触媒は、ビート工場で砂糖精製の過程で石灰が触媒として使われていますが、おそらく一〇〇〇度以上、高圧のなかで、エネルギー多消費によって行われている筈だから、作物生産における酵素のこの働きを、もっと深く深くうけとめて貰いたいものだと思います。そのためにも微量要素の土壌調査における実践的裏づけを進めて貰いたいものです。

さらに重ねていえば、一億倍の反応速度ということは、酵素がなければ一日と三時間三十六分かかる化学変化が、わずか一〇〇〇分の一秒という瞬間風速に近い速度で終了するということです。まさに生命の神秘といってよく、それが遺伝子のなかに組みこまれている不思議さであります。

生命力あふれる食べものを得るためには、生化学変化を励起する酵素、その構成元素としての微量要素の存在が、深くかかわっていることを深く理解することが重要なのではあるまいかと考えます。

微量要素は微量だからといってバカにしているのが、巨大メカニズムに泥酔している連中であります。

いちばんよい例が、今年のゴールデンウィークの直後、東海道新幹線のぞみ用新車輌が、たった二本の素朴なボルトの欠落で、名古屋の近くで緊急ブレーキがかかり動かなくなってしまいました。微量要素の重要

性はこの二本のボルトとまったく同じであります。
私には山根一郎監修の教科書『栽培管理』からは、この微量要素の重要性は、これっぽっちも伝わってこないのであります。同じ農文協の三好の『土壌診断法』も同じであります。
この欠陥教科書を放任している文部省に強く抗議するものであります。
昭和五十九年に農文協が『農業技術大系』の刊行にふみきり、「土壌施肥編」の完結を見たのが昭和六十二年十二月であります。
その完結のことばが手許にあります。私はこの一文を読み、言い当てていることの適確さに感心し、ここに紹介しておきます。文部省検定済教科書とは大違いである。
「基本とした視点は、根と土のかかわり、根と微生物とのかかわりをどのようにしたら、よい関係にできるのかということである」
これが土壌施肥の基本視点だというのです。
「深刻化する土壌病害の多発は、根と微生物との関係が狂っていることのあらわれである。
その狙いは、
一、過剰施肥による化学性の悪化
二、機械の踏圧による物理性の悪化
といった現状技術が、根圏の活力を低下させ、土壌中の微生物フローラを撹乱し、結果として、根と微生物を悪い関係にしてしまったのである。
今新しい土づくりは、土づくりは有機物で、多収は施肥でといったバラバラな技術でなく、根と微生物のかかわりを基本にすえて、施肥のあり方、物理性の改善、有機物利用といった、地域の実情にかなった総合的な目でつかんでいくことではないだろうか」。

どうもこれは同じ年に、北農会から刊行された日本土壌肥料学会北海道支部の『北海道農業と土壌肥料』と、まったく調子が違うのであります。だからこの期に及んで、クリーン農業とか、減農薬農業ということをいい出し、これから研究し答えを出そうということになったと思うのです。

農文協では、この「土壌施肥編」のために、『利用の手引』というのを出しています。たった五〇〇円です。これは素晴しい。このなかに「現代の土壌肥料問題をとくキーワード集」というのがあります。

一、根が土に働きかける
二、生きものとしての土
三、病原菌と作物の関係
四、反応系としての土
五、養分動態としての土
六、土壌をとらえる視点
七、作物をとらえる視点

以上の項目に分類されて、技術大系の小項目に至るまでの索引として利用できるようになっています。この手引だけでも入手されることをお奨めしてやみません。

平成四年　農事組合だより五月号　北海道農業自立推進協議会

生命力溢れる大地を

土壌は単に岩石が風化し微粒子となった無機物ではない。
植物、微生物ばかりか、種々多様の生物の生命活動が関与して、
長い地質時間の中で生成されてきたものと喝破したのは、
土壌学の創始者ドクチャエフである。
植物は排泄しないとする植物学者がいるのには驚いているが、冗談ではない。
動物がそうであるように、植物も細胞から出来ている。
動植物が生きているということは、生命代謝を行っているということだ。
動物がクソ小便をして排泄しているように、
植物だってクソ小便をしているということだ。
いい出したのは小林達治である。
今日、人間の体内の各部にファイバースコープをいれて、
医療に役立てているように、
ファイバースコープと電子顕微鏡とを用いて、
植物体の根圏における排泄と土壌微生物との交渉を、

事細かに映像化することに成功した。
小林はまたいう。植物には内臓はないが、
それに代わるものとして土壌がその働きをしている。
唯一、太陽光線と大気を活用して光合成を行う生産者としての植物に対し、
土壌は単に根をはる場所を与えたり、
植物の直立を支持するためにあるものではない。
根のためには水、窒素、燐酸、加里のほか、
微量元素に至る養分のすべてを供給しているのである。
都留信也は、動物が各種体内酵素の存在によって、
生理的触媒として一億倍以上という速度で生命代謝系の活性化がはかられているように、
土壌にも土壌酵素が同様の働きをしているという。
現在までに五十以上の土壌酵素の存在が確認されている。
したがって土壌微生物がそうであるように、
土壌酵素の存在が地球上の物質循環に大きな役割を果たしていることを見落としてはならない。
土は化学性、物理性、生物性、そのすべての面に於いて、
バランスのとれていることが、健康な生命力ある植物の成育をたすける。
豊かな大地とは、豊かな生命活動が行われている大地のことである。

平成十年『ことえん』

忘れ得ぬ農人　前橋真八郎翁

前橋真八郎翁

私が上京した年、即ち昭和十三年、黒澤酉蔵翁が農林大臣から表彰を受けた。この時、一緒に受賞した人に栃木県足利郡筑波村（現足利市）の村長前橋真八郎さんがいる。筑波村は戦後合併されて足利市小曽根町筑波となっている。

黒澤翁は私の職場、神田駿河台の佐藤新興生活館（今は山の上ホテル。近江兄弟社の創立者で、建築事務所を主宰していたボーリス先生の設計）の三階宿泊部を定宿とされていた。やはり北海道の一己村（いっちやんむら。合併して深川市）の深沢吉平翁、北龍町和（やわら）の開拓者吉植庄亮翁（百姓歌人として有名）のお二人も定宿とされていた。この三先生とおつきあいができたことは、私にとって非常に有難いことであった。特に吉植庄亮翁については、最近になり佐藤新興生活館の創設者、佐藤慶太郎翁の伝記を読んで、この新興生活運動の熱心な協力者であったことを知り、今更のように感銘を深くしている。

食堂は二階にあり、玄米食を提供していた。二木謙造博士の玄米食説によってであった。白米は粕と書いて健康に悪い。健康によい部分は糠と書いて、玄米食こそ健康食であるという栄養理論である。黒澤翁は、

西式健康法の信奉者だから当然玄米食である。

たまたま黒澤翁と食堂でご一緒した時、「私と一緒に農林大臣から表彰を受けた前橋さんのところに近く出かける。君も一緒に行かないか」とのお誘いを受けて、私は即座に「是非お供させて下さい」とお願いした。

前橋さんの筑波村は渡良瀬川をはさんで、私の父、祖父たちの故郷群馬県館林町（現館林市）の対岸であり、共に足尾銅山の曾ての鉱毒被災地であった。黒澤翁にすれば、鉱毒事件の先頭にたって戦った田中正造＊翁に随身し、谷中村の青年行動隊を組織して活動し、遂に前橋刑務所に未決拘留六ヵ月に及んだ青春の思い出の地である。前橋さんのお宅には鉱毒事件の貴重な記録が残されているというのである。

さらにこの村には、労働科学研究所暉峻博士が主宰する農村労働調査所がおかれていた。支那事変が始まって既に二年が経ち、農村から若い働き手が大陸の戦場に動員されつつあり、農村の労働力構造に変化が起きていた。

田中正造翁

前橋さんの所に着いて驚いたことは、村長、産業組合長という公職のかたわら、水田二ヘクタール、裏作麦二ヘクタールの経営を、田植と稲刈以外は家族労働をあてにしないで、ひとりで片づけていたことである。

それだけでない。前橋式耕耘機を開発して特許をとり、村の産業組合工場で製作販売していた。「かかえもつたて犂」がこのあたりの一般的な耕耘機であった時代に、ハンドルをつけた反転犂をつくり、赤牛にひかせて、極めて能率的な耕耘を行っていたことである。

先ず圃場から案内をうける。田一枚が一ヘクタールである。二ヘクタールとは田が二枚ということである。横巾が二十七メートル、

縦長が三六〇メートル、これが一枚の田のかたちで、二枚の田は縦長に併行してできている。だから畦は中に一本だけである。但し、苗配りや追肥等の資材配りのために、縦長の半分あたりに両側からそれぞれ半ばにかけて低い畔（くろ）がつき出している。これは驚くべき圃場のかたちで、素晴しい土地利用である。

その頃の広い北海道の経営面積、五ヘクタール以上の経営規模で、しかも牛より軽快な馬耕の畜力体系の中でどうであったか。北海道の田一枚の広さは五アールである。前橋さんの田の二十分の一である。しかも戦後の昭和四十年代以降の構造改善事業で、ようやく国の補助金を貰って、田一枚を三十アールに標準化したのである。とっくに自動耕耘機やトラクターの時代に入っているのに、である。おかしなことに本州の田一枚の標準化にあわせてまったく同じなのである。但し、戦後昭和三十年代に浦臼町あたりで、高知県の農業者がはるばる北海道まで出かけてきて「出作り」をし、田一枚一ヘクタールの水田を経営したと新聞を賑わしたことがあるが、その後どうなったかはわからない。

当時一般に水苗代の時代に、田の縦長の両端、枕畦にあたる部分（これは牛が反転する遊びのスペースである。）を陸苗代（おかなわしろ）に使っている。その陸苗代には籾がらをしきつめるというのである。苗取りの際は、稲は稗より成長が早いので、稗まで抜かないですむという。稗抜きの作業は苗代の時期に片づけてしまうという説明である。陸苗代の方が活着がよいというのである。

裏作の麦踏みが面白い。デンマークの農業者エミール・フェンガーが琴似の農業試験場に残していったカルチ・パッカー*である。なんと自転車の古リームを集めてきて、それにシャフトを通して坐乗型の三畦麦踏機を作り、赤牛にひかせる。麦踏みはそれで終りである。

私は、小学校の国定教科書に出ていた木枯吹く麦畑で、子供たちが寒そうに両手を着物の袖に通して、横並びに麦踏みしている風景の挿絵を思い出した。それがないのである。ここでは村長さんひとりで片づけているのである。

米麦の収穫はどうか。これだけはまだ機械化されず、田植同様、家族の力を借りている。しかしモーア＊やリーパー＊を参考にさかんに目下研究中と仰言っていた。北海道の農業機械が、関東平野のド真中に引越してきたような感にうたれた。

この後の農作業が面白い。屋敷には長屋門から入る。門の片方が牛小屋、片方が農機具資材小屋になっている。内庭の片方が米蔵、片方が家財什器の土蔵である。この辺の一般的な自作農の屋敷構えは皆そうなっている。

驚いたことに広い内庭がコンクリート舗装なのである。上州は「かかぁ天下に屋根の石」といって、秋は天気がよく風が強いことの諺である。日差しが強いからコンクリート内庭が熱をたくわえてくれる。熱しにくいコンクリートは逆にたくわえた熱が冷めにくいということだ。この庭に籾や麦を広げて乾燥させる。空模様が危ないとあれば、板に柄のつけた奴で中央にかきあつめ、シートをかぶせればすむというのである。母屋（おもや）の瓦屋根の上には手づくりの温水器がのっている。いつでも風呂に入れるしかけである。

これまでの説明ですっかり驚いてしまった。これは誰かお手本があっての経営改善なり、生活改善ではないのである。創意工夫が至るところにあらわれているのである。黒澤翁もすっかり感心してしまった様子であった。

その農業経営の先進性、独創性、合理性を考えると、前橋さんこそ、今に至るまで忘れ難い農人である。

さて、やっと座敷に案内されて、畳大の大きさの足尾鉱毒災害流域図が広げられた。田中正造翁が足を棒にして自ら関係地域を歩きまわり、有志と共に当時作製し九万枚も印刷配布したという「足尾銅山鉱毒被害民毎人毎戸の記憶すべき請願の要点」のビラ。「鉱毒被害地出生・死者調査統計報告書」等、貴重な資料が取り出された。事件の当事者である黒澤翁と前橋さんとの話なものだからはずむ一方であった。

何といっても、明治二十三年にはじまった足尾の鉱毒被害に対する田中翁の救援活動は、翁の指導による

明治三十三年の川俣事件、四回目の東京に向かっての国会請願の押出しがピークであった。

二月十三日払暁、館林郊外の鉱毒事務所のあった雲龍寺に集結した被災民たちは、寺の梵鐘を合図に鉱毒悲歌を歌いながら動き出した。その数二五〇〇人とも三五〇〇人ともいわれた。

由井正臣の『田中正造』によれば「野口春歳が騎馬姿にて先頭にたち、左部（あたりべ）、山本その他の指揮役が部隊毎に介在し、館林人大出喜平が最後尾に従うという隊伍で、警官隊の阻止を突破し、館林の町並みを抜けて南下、約十キロメートル進んで利根川河畔川俣まで到着した。ここで強固な防護線をしいていた警官隊一八〇名と衝突、その場で十五名が逮捕され、解散させられた。逮捕者は現場はじめ、その後の探索によるもの合せて一〇〇余名に及んだ。この弾圧によって第四回の押出も遂に挫折に終ったのである。」この後に引続いて、田中正造翁自ら立ち上がって、国会から御帰路の御召馬車に向っての直訴事件を起こす。直訴状は幸徳秋水が書いたものである。この直訴事件は世間に大反響をもたらす。被害民救済の講演会が内村鑑三たちキリスト教ばかりか仏教団体でもおこる有様である。

佐藤生活新興館での記念撮影。前列左から５人目が創佐藤慶太郎翁

黒澤酉蔵翁は、保釈になったばかりの正造翁を宿舎に訪ね、これがきっかけでまだ中学生でありながら、学業をなげうって正造翁に随身することになる。

こうして鉱毒水害の解決策の一案として、鉱毒沈澱池として谷中村全村を潰して遊水地化しようとの計画が進む。明治三十七年、正造翁は谷中村問題に専念するため、少年黒沢翁と共に敢て谷中村を寄留地として移り住むことになる。「悪弊一洗農地復活青年事務所」を設けて、村内の買収反対派の青年を結集して、調査活動をはじめる。この谷中村事件の強制立退者の一部が北海道に移住した。現在の佐呂間町の栃木部落がそれである。

この日は、私は、話しの尽きぬ黒澤翁を一人残して館林町まで戻った。

この鉱毒事件については、その後昭和四十六年に群馬県が編纂した『群馬県百年史』に、「栃木県側の田中正造翁に対し、群馬県側の代表として曾祖父木呂子退蔵が明治三十三年の川俣事件に発展する第四回の請願運動で活躍した」と紹介されていたのに驚いた。我が家には詳しい資料が残っていない。群馬県に資料の出所を問い合わせてみたがはっきりしなかった。

確かに退蔵は、所謂上毛自由党の創唱者の一人であり、激派の大井憲太郎とも深く交わっていた。板垣退助の『自由党史』の中では、明治十三年十一月の国会期成同盟第二回大会で田中正造翁が栃木県代表、木呂子退蔵翁が群馬県代表の一人として名を連ねており、最近出た『中江兆民全集』には明治二十三年に大井憲太郎、中江兆民が板垣退助の大同団結により生れた立憲自由党を脱党し、自由党関東派を再興した際に、一時その副議長をしていたとの記載がある。明治十八年の北海道移住断念後、館林に戻ってからの活動の中でなにがしか鉱毒事件にもかかわっていたのかも知れない。しかし、明治三十三年の川俣事件の時には既に病に伏せており、翌三十四年に七十五歳で亡くなっているので、第三回の請願運動以前に関与したものと考えるのである。

平成十五年

西帯広工業団地について

西帯広工業団地の着工式。昭和39年8月

帯広のまちづくりは、総合計画で近代的田園都市をつくるのだというまちづくりのネライがはっきりしていたことである。暮しやすいまちづくりを進めることが、そのフレームである。とすれば、自然発生的に都市機能が拡散と集中の運動をおこしているなかで、行政がその機能を土地利用を中心にして先見的に計画的に誘導していく必要がある。西帯広工業団地はその一連のものとして生れてきたもので、煤煙、騒音、汚水などの公害を排除するために工業団地が生れてきたものではない。公害を排除するということは、工場があれば公害をなくするのが当り前で、工業団地にかかわりなく、本来的なものであって、工業団地の造成によって公害防止を合理的に措置することがやり易いという条件にすぎない。したがって西帯広工業団地は、あくまでも土地利用を基本にした帯広都市計画事業の一環として生れてきたものである。工業の振

興とか工場誘致とかはあくまでも附随して出てきた問題である。

発想の基底

帯広市の背景となる十勝農業の戦後の著しい発展が、トラクター化（十五馬力から三十馬力、更に六十馬力、一〇〇馬力）段階から更にコンバイン、ハーベスター化時代へと進み、経営規模拡大が地元商工業の原料並びに消費市場を急速に拡大させ、中心都市としての都市機能の集積、特に文化的サービス機能の整備促進が目立ちはじめてきた。このことはさらに集中化を早める。

未整備であった河川、道路、港湾、農地などの開発基盤に対し、財政投資が高度経済成長の波にのって計画的に拡大投入されることにより、管理機能の増強が進んで、財政投資の波及効果が都市構造の再編を促す要因として強まってきた。（帯広開発建設部の増築、改築、各地モータープールの整備などがそのことを示す）

輸送機能の整備として、国鉄施設の整備と自動車輸送との円滑なアクセスを、真剣に検討を必要とする状況が生れてきていた。

当時の国鉄帯広駅を中心とした実態と問題点

一、農産物の集散地市場として発展してきた帯広のまちづくりは、国鉄帯広駅を中心にした空間を鉄道輸送に依存して輸送、貯蔵、取引の機能が占拠してきた。これに伴う外部との交通発生要因（馬車→トラック）が集中して、土地利用を固定化してきた。

二、昭和初期における士幌線の開通、ついで広尾線の開通。ところが昭和経済恐慌を誘因として、かえってこの両支線に沿って開拓地の拡大という限界農用地の拡大移動をもたらした。（昭和八年の大樹での拓殖実習場創設などがそれ。更別村地区などは、漸く昭和八年に至って殖民地区画の測量が行われたことで判ろうというもの）従来の馬車輸送による農産物の輸送は鉄道に転化される。これに対応して帯広駅を中心に集中化が促進し、このため中心商店街も馬車時代の電信通を軸とした大通近辺の集中が、駅を中心とした西二条に移動をはじめる。（藤丸の移転）戦後の経済復興過程で一層このことが促進される。

三、バス交通も戦後自動車産業の第一段階として拡大され、路線バスが駅前、西二条を中心に集中化し、漸次帯広名物の自転車と歩道における自転車の留置風景を駆逐していく。このあとにマイカー時代が来て、完全に息の根をとめる。尚馬車もリヤカーも輸送手段から姿を消してしまうことになる。かえって自動車の駐車が問題の正面に出てくる。

四、卸、問屋機能が鉄道輸送にこれまた依存して駅中心の空間にはりつき、卸機能、小売機能の土地利用を乱雑化し、十勝圏域へのトラック配送は、小売商店街の純化を妨げる状況も濃化してきた。

五、帯広の工業は食料品工業、木材製品工業で七十パーセント以上の比率を占め、何れも鉄道輸送を体系として帯広駅、十勝鉄道周辺に集中化し、土地利用の純化を妨げる要素となってきた。

雪印乳業などは、原料乳輸送が鉄道からトラック輸送に完全に転換しても尚、現状地に規模拡大、改築が進められるという企業としての自殺行為が平然として進められていた。

六、帯広の人口増大と国鉄旅客の漸増は、昭和五年改築の駅舎を狭隘化し、かつ駅前広場の乱雑化がその限度にきていて、駅舎の改築要請と、駅前広場の都市改造的整備の必要性が出てきた。

七、昭和三十年代における十勝鉄道の奥地路線の廃止、旅客営業の休止、帯広大通駅の廃止、大通（国道）と鉄道の立体交差化の実現は、帯広駅の下り方の土地利用に変化をもたらした。帯広市民にとって街の誇

りであった自転車による買物が、街の玄関口ともいえる帯広駅周辺で姿を消していきつつあった。

八、燃料としての暖房炭時代から石油化への転換方向も、石炭土場の位置、土地利用について検討する必要が出てきた。札内、木野方面における石油貯留施設の分散によってかえって国鉄輸送合理化の逆行化、場当たり的措置の進行。

九、石勝線の着工決定の見通しがついてきたこと。十勝港の重要港湾指定も見通しがついたこと。この二つは十勝圏域の事業経済に重大な変化をもたらすこととなった。特に石勝線は乙級線として施行されること（従来根室線は丙線指定、広尾、士幌線は簡易丙線指定であった。輸送能力、速度に格段の相違が出てくること）で札幌、苫小牧との距離短縮は、時間と経済距離の短縮化を実現し、得失共に影響は甚大化することが見過ごされてきた。滝川―新得間のローカル化で旭川圏との交流に問題が出てくること。当時市当局は石勝線の価値が内包する将来展望が把握できず、無能無策ぶりを暴露し、日勝線期成会に重点をおいて、石勝線期成会から僅かの負担金を惜しんで脱会しており、再加盟のため三年がかりで関係町村を説得するのに非常に苦労をした。旧狩勝線の牽引力五〇〇トンが一挙に倍加すること。芦別、滝川間の石炭輸送が、空知川の蛇行による線形不良と共に輸送能力のネックであった。石勝線の全線が乙級線化により、千分の十勾配に規制され、東海道線並のスピード化が図られ、複線化、電化の促進など将来的展望をもたらすことになった。（市場距離の短縮化）従来の貨物列車の岩見沢操車場経由は豪雪地帯にあるため、しばしば長期にわたる輸送マヒをもたらしたが、苫小牧にジャンクションを集約化することにより、寡雪地帯にそのポイント移行し、道東との鉄道輸送の不安を除去することになる。残るのは青函航路のネックの解決ということになる。

十、計画策定当時は国道の狩勝峠が未整備のため、除雪不能で数週間にわたり道路交通が遮断され、黄金道路経由も又、雪崩のためしばしば交通が途絶するというのが実状で、十勝の交通孤立化は重大な問題であ

った。まして、昭和三十七年、狩勝において約三週間以上に及び道路、鉄道輸送が止まった時は、北空知管内指定生産地の妹背牛農協（帯広向供給地）よりの米輸送は、わざわざ遠く石北、釧網線経由で輸送されていた。当時統制下の政府米は、生産地農協は農協倉庫の保管料で利益をあげていたので、たとえ一日でも倉庫料金利を稼ごうと移出を惜しんだ。市当局としては指定産地よりの米輸送は三日分となっていたので、市民に不安を与えないため秘密裏に緊急対策を講ぜざるを得なかった。

十一、十勝港の整備は、輸送の海上化により、鉄道道路輸送の代替策として、しかも東京港との距離は函館よりも二浬、室蘭よりも十五浬、苫小牧よりも十七浬、釧路よりは六十二浬も近いという東京市場との最短距離の港湾としてフェリー化、コンテナ化の実現により新しい展望を持つようになった。いいかえれば十勝港は東京に対して一番近い港ということだ。（開発庁は当初、苫小牧、釧路間の避難港湾として整備すれば足れりとする思想であったが、釧路港は冬季季節風が港を直撃してその接岸と操舵を困難にし、バース時代の港湾機能として多くの問題が出てきた。以前は、貨物船は沖がかりでハシケによって貨物の揚陸していたものが、近代港湾は岸壁に接岸揚陸するようになった。特に流氷の問題もある。十勝港の恒風の大部分が西風のためダシ風で、接岸を容易にするという利点をもっている。）このことは帯広・十勝の農業経済に重大な変動要因をもたらすことを可能とする。（後述の様に広尾線の線形より見て貨物駅を上り方に配置することが鉄道輸送として合理性を得るようになる）以上のようなフィジカルな要因と戦略的要因を背景として、次の様なことが当面の対策課題となってきた。

都市機能の純化を目標に

将来の工業発展と拡大を予想する時、原材料の到着、製品の発送といった生産財交通の発生要因を、西二

条附近の三次特化の商業街区の中を通過させるべきでない。したがって貨物の到着発送といった輸送機能と、旅客輸送機能とを画然と分離することが先決である。あわせて操車機能、客車基地、動力車基地、宿舎用地は思いきり外部に移転させて、効率化と合理化をはかる。即ち客貨機能の分離である。

一、帯広駅を旅客駅として純化することにより、残るのは通過線（将来の複線化を考えて二本あればよい）のみとすることになり、鉄道用地の南北巾の狭小化によって南北交通の接続が最少費用で実現化がはかれる。

二、バスターミナルの実現によって駅前の交通の集中化を面的に分散をはかる。それだけ商業街区の効率化がはかれる。

三、卸商団地を別に造成することにより商業街区の純化を進め、駐車空間の造成をはかり、都市改造への誘因とする。

以上のようなことから、まず国鉄の客貨分離の折衝が国鉄当局との間に開始された。ここで出てきたことは、貨物駅をつくるのはよいが、これら国鉄投資に見あう貨物の集積化について説明がつかなければ、事態が仲々進まないということが当面課題となってきた。市側としても、これを極力推進する立場から、発送到着の取扱貨物の集積をはかるために、工業団地の造成を検討することが急務となった。工業団地用地取得の当初から、十数万坪に及ぶ国鉄用地の確保が行われた理由はこのことからくるもので、もともと不離一体のもとして生れてきたものである。以上のように帯広の工業団地の造成は、他都市と全くちがった発想であり、都市計画事業として浮上してきたものだ。

工業団地の用地取得と造成について

一、国鉄用地を含めて工業団地の用地取得が当面の課題になってきた。国鉄のために用地を先行取得するということでは名分がたたないから、工業用地の取得ということが名分になり、そのビジョンづくりが中心課題となった。

二、用地を取得するための主体をどうするかということ。財源の問題、財政との関連が問題となってくる。

○　市が直接ということであれば特別会計でやれるが、その財源をどうするかということ。取得はいいとしても用地処分の事務処理の機能性が問題になってくる。一々議会の議決が必要という事態も生れてくる。

○　公社方式、当時の全道各市は何れも株式会社方式で、僅かに北見が住宅用地のための財団方式であった。本州は殆どすべてが財団法人であった。

○　地方自治法の一部改正による地方開発事業団法九十八条は、政府原案は一箇の自治体で設立可能であったものが、国会修正で二箇以上の自治体によるものとされ、その普及を困難にし、運用の妙を欠き、空文化の実状にあった。今日もその通りである。逆手をとって農地転用については無能力者（準禁治産者）とされている市町村に対し、都道府県は能力者（裁定能力者）とされているので、道と市が事業団をつくって用地取得をやれば、資金取得の信用力をつけ、農地転用も容易な訳であるが、当時北海道でなくてヤッカイドウといわれていた道側から軽く一蹴されてしまった。やる気がまるでないことが明らかにされた。

○　市金庫の指定をうけている拓銀と交渉した結果、市の損失保証の議決があれば資金は融通する。但し資金は九十日手形で利息前とりという条件である。一億円借りても金利が一割、即ち実質九千万円しか現金として使えないということであるが、その見通しはついた。

○　通産省の工業団地造成資金の融通は長期資金であり低利であるが、製造業の同一業種が二十企業以上、

又は十企業集団と十企業集団のあわせて二十企業以上ということになったが、帯広には十企業以上そろう業種もなければ、あったとしても集団協業化の気運などというものはほんの一かけらもない状態であって、時間的にも間にあわず、全くこの政府資金の利用は不可能であった。

○　各種の検討を進めてきたが、結論として財団法人（民法三十四条の公益法人）方式で用地取得処分の主体としていくという腹をかためた。解散時における財産処分は市に帰属するものとし、公益性を貫徹するのが当然の眼目である。何故ならば用地について協力する農業者も、用地を取得する企業主も同じく市民である。市民ベースを土台とするとき、株式会社という利益法人はあり得ないということだ。用地提供者、用地取得者があって公社活動が成り立つもので、自治体という公共団体がその結節面に位置することにより、土地利用の公共性を実現し、私経済としては迂回再生産的効果を発揮し、地域経済の集積化を進めるという一種のニューデール、リリエンソールがＴ・Ｖ・Ａに於て発揮した「開発の知恵」を、帯広は帯広らしくトコトンまでつきつめて見たいという情熱をもって掘下げていった。

しかしこの事業は、帯広市という自治体の信用力を背景にフルに活用していこうということなので、自治体に赤字負担を残すようなことは出来ない。さりとて営利が目的でないから儲けることは出来ない。しかも事業は長期にわたり、経済の変動、事業の困難を伴うことは当然なので、そのための安全装置、緩衝装置はシステムとしてあらゆる検討が行われ、経営計画の中におりこまれなければならぬ。このことについて最も威力を発揮したのが山田昭一（工業課長）君であった。河野和雄（係）君と共に万全の研究が進められた。この二人は何れも商業専門の学校を出て経理事務に明るかったということは、大いに役立ったといわねばならぬ。役人上がりでなくて、こういう異色の人材がいたということは重要なことである。帳簿は伝票会計で複式簿記を採用することとし、こうした不動産業務の勘定科目の設定は特殊な研究と検討を必要とし、一般企業とは異なり、山田、河野両君の功を多とせねばならぬ。これがしっかりしていないと公社経営はうまく

いかぬ。船でいえば機関部であり、操舵室での装置にあたるものだ。不動産取引業者として取引業務の免許資格も必要とし、取引業としての認可も必要となってくるのであるが、試験を受けたら全員合格してしまい、隣接町村の公社業務に名義貸しをしたり業務指導をしたりするようになるとは、当時としては考えてもみなかった。なお、登記業務の確実化のため法務局より志村貞則君を迎えたことは、公社の陣容を更に体制を強化することができた。

○　財団法人産業開発公社をつくって西帯広用地取得構想の粗案をまとめた段階で、昭和三十六年に議会の有力筋に話をもちかけたところ、いっぱつでアウトであった。これはよほどお膳立てが必要だということで、

1、市内の工業関係者を中心にして、是非入居したいという事業体の組織をつくり、気運を早急に醸成すること。

2、西帯広関係住民を中心にして期成会をつくって貰い、工業団地の用地取得の協力と実現化の促進をはかること。

3、国鉄構想を推進するため、なるべく大手企業進出の気運醸成をはかり、尻の重い国鉄に調査とビジョンづくりを促進すること。

何といっても当初は大手企業が本命なので、宮本（富次郎）元老＊を動かしてサッポロビールの北海道第二工場の誘致に特段のご活躍を頂いた。このことは宮本翁の逝去まで続き、水と空気が日本一うまいなどというキャッチフレーズはこの時に生れたのだ。土谷清氏を中心に当時の富士鉄社長・永野重雄氏（日本財界の巨頭）の数次にわたる秘密裏の来帯と、ストックヤード、シャーリング工場の誘致を進めるなど非常な努力を払ったが、戦略的効果はあがったが、戦闘場面としてはいわば負けで、どれも具体化を見るに至らなかった。

1　については、昭和三十七年春の西帯広市政懇談会でこの問題が話題の中心となり、間もなく西帯広地

区関係住民が主体となって、西帯広地区開発促進期成会が生れ、野原行雄氏を会長として鴇田権兵衛氏を幹事長として具体的な活動がはじまる。

2　については土谷清氏が中心となって推進力となり、自動車整備振興会の吉田外吉氏と共に商工会議所を中心に懇談会、協議会がつくられる。

消費都市から生産都市にするのだという考えかたは、市民の一部にたとえそういう発想があったとしても、そういう愚かしい思想は毛頭この仕事の推進にあたってはないので、これは抹消して貰わねばならぬ。あくまでも暮らしやすいまちづくりの一環として、都市機能の純化によって、既存工業の振興にも役だちその発展の条件を整備しようというものにすぎない。

例えば農機具（まだ農業機械といえない段階）工業の山田トンボ、北農機にしても狭隘な敷地で狭隘な工場に、その出荷が季節的に集中するため完成品置場の困難、機械配置の乱雑化からくる非効率がある。又車輛整備工場が商店街の中で、歩道にまで整備車をせり出して修理にあたっている交通障害、西二条のドマン中でかまぼこ屋が魚箱を山と歩道に積みかさね悪臭と蝿の蝟集、魚菜市場に集中する百数十台の車輛が、帯広小学校の通学路を平然とふさいでいたなどが実態である。イノベーション（技術革新）と事業の拡大は、こうした現状を許さない事態まで追い込んできていた。

本来企業とは英語ではエンタープライズといい危険をおかす、冒険をするというのが真義であるが、まだ帯広の段階では家業感覚の延長で非常に臆病である。当然他圏域との交通手段の変革整備がもたらすであろう事態についての、危機感というものは全然もちあわせていない。旧慣にアグラをかいていたのが実態だ。口がくさっても消費都市から生産都市などという言い分が出てこないのが本来の姿であって、言葉遊びにすぎないことが理解されるであろう。土地利用が自然発生的に進む中でこうした壁が出てきた。

次が西帯広の工業団地計画予定地の基礎調査である。これは市の商工予算に計上され北海道地下資源調査

所に依頼して、地下水の賦存、水質、地耐力（貫入係数）について全面的調査を行った。もともとこの地帯は全般的に低位泥炭地で、畑作に不適なところから水田化が進んだが、冷害を克服するためにも深水灌漑の必要性があるのだが、泥炭土のため畦もれがし、更に底ぬけ水田として結果的に冷水灌漑となり、腐植には富んでいるが生産力の低い水田地帯であった。戦時中には荒廃現象さえ見られた。この地帯が本来地形学的に開拓の初期には、帯広川が旧伏古川の水系と一体となっていたものが、十勝川本流の水勢におされて自然堤防を形成し、この西側に泥炭地形成が進み、帯広川は延々として水光園の北部に至ってようやく旧売買川、札内川伏流河川と合してパラトゥ＊を形成して十勝川に合していたものである。これら自然堤防は八号、九号附近に砂利が近いため、畑にもならず雑木林としてその悌をのこしていた。しかし地耐力調査をやってみてわかったことであるが、従来湿地帯、泥炭地帯として理解されていたこの地帯が、何れも深さ一メートル五十で地耐力三十トン以上出ることが判然としたことである。農業土地利用としては大いに問題があるものが、工業的土地利用としては非常に地盤がよいという訳だ。後の開発局の調査によっても全道の工場適地調査の中で、旭川の永山団地に次ぐもので、札幌、苫小牧、江別、美唄、函館何れも問題にならない優秀なものであったということは、工業団地造成の立場からいえば大変有難いことであった。

水質についても、従来飲料不適といわれたものも調査方法に問題があったため、帯広保健所による一斉同時採水調査によって、水質は硫化水素の賦存が認められるが、工業用水基準からいって灘の用水より優秀なことが判明した。硫化水素は気体であるから曝気をすれば容易にこれを解決することが可能なこともわかった。水量も三インチ管で日量二八〇〇トン、水温も割合に低く冷却水としても好適ということがわかった。（十インチで時間当五〇〇トン、一日一万二〇〇〇トンというのが一△＝イチウロコ＝市場の実例である）

たまたま当時、帯広測候所構内に於て気象庁気象研究所の神山恵三博士による鉄工粗材塗料の発錆試験が行われていた。山田課長が早速、神山博士と連絡をとり全国的な鉄の発錆度の資料を手にいれてきた。この

結果、帯広地方は全国の調査地点中最低であることがわかった。理由として空気が乾燥している、亜硫酸ガスが少ない、海岸でないから塩分がない等のことである。湿度では総体的に高いにかかわらず、絶対湿度（空気一立方メートル中の水蒸気の絶対飽和量）が最低で、日本一鉄の錆びないまちであるということであった。晴天日数も全国的にみて上位であり、冬至のある十二月の日照時間が東京と同じで、ギリシャのアテネに匹敵するということは、気温は別として、北海道寒地における絶対的有利性を示すものであり、冬の寡雪地帯であることは、冬季交通の有利性を示すものである。

以上のような気象的有利性ということも漸次明らかにされた。

工業団地の土地利用計画に就いて

単に工場に用地を売ればよいということが、いかなる問題を将来にひきおこすであろうか。土地があるから工場をひっぱってくるという考え方がどのような結果をもたらすかは、既存工業地帯の集中化の無残さを見れば自ずから答えが出てくる。

都市計画としての工業団地は、帯広としての都市計画らしく慎重の上にも慎重さを以て計画されなければならぬ。当時の吉村市長は、常に煙を吐く工場はいらぬとか、工場誘致はせぬということを公然と発言していた。全国市長会主催の都市問題研究会（富山市）に於て、岩手大学教授小川博三氏（現北大工学部教授・都市計画担当）が「吉村帯広市長の考えこそは、これからのまちづくりの発想を変革する先駆的なものだ」という絶賛の発言をした。このことが帯広市議会で質問戦を誘発するなかで仕事を進めるのであるから、当事者の苦労は市の内部外部に対し大変なことであった。

たまたま熊本市における都市計画大会に於て、日本商工会議所専務の岡松成太郎氏（後の北海道電力社

長・現相談役）が、工業立地研究会長の立場から大分県鶴崎開発について次のような提言を行った。「これからの工業開発の考え方は、工場の中に緑をとりいれるといった程度の考え方ではダメだ。逆に緑の中に工場団地をつくるという考え方の上にたたねばならぬ」ということを強く主張されたのである。昭和三十五年ごろ、当時としては異色な発言で、公害その他で事態が深刻になるなど誰も考えていなかった。工場ぎらいの市長を納得させ、その上での計画でなければならぬ。緑の工場公園という表現はこうして生れてきたのである。土地利用計画についてもいろいろと検討を進めた。

第一に北一線以北については沖積土壌地帯が多いので、あくまでそ菜農業地帯として手をつけないで、農工を関連させた農業の振興をはかる。農業的土地利用に対して、工業団地が手順を誤ってはならぬという決意を明確にしておくことであった。工業団地は畑作利用をしたくても土地条件のため出来ないので、水田化された生産力の低い泥炭地、湿地帯を再利用するということである。

第二に、道路体系であるが、国道三十八号線に接しているということがこの団地の立地有利性であるが、国道は読んで字の如く国民全体のための幹線道路体系であるから、その機能をある特定地域の交通発生要因によってマヒさせるということは、自らの交通機能をマヒさせることにも通ずるので、このことを当初から排除することに努める土地利用を考えるべきであると判断した。このことについて、私は札幌周辺部における月寒地区、琴似地区における国道の実態によって痛感しており、特に冬季積雪期においては交通事故の多発並びに交通渋滞となって現われ、能率の低下となる。このため敢て、国道の両側を夫々四メートル五十を緑地帯として留保し私企業に対しては処分を行わず、団地内交通と国道とのアクセスを原則として三〇〇間おき（五五〇メートル）とし、別に団地の地域内交通のため、将来八車線が可能なように敷巾四十八メートル（国道敷巾は二十七・二七メートル）の幹線道路用地を確保し、将来は分離帯が集中幹渠として利用できるよう予想したことである。

第三に、建ぺい率を当初から三十パーセントとし、空間率を大きくとり、緑化の可能な土地利用とすることにした。しかし当時の都市計画法、建築基準法にはよるべき立法根拠がないので、民法上による条件つき売買によって規制せざるを得なかった。その理由とするところは、先進地工業地帯の荒廃ぶり、モノ生産第一主義がある。働くものの環境整備はおろか、公害災害について都市計画的思想というものは通産省はいうに及ばず、建設省にも立法化をしてまでという意志は微塵もなく、只これ、経済の成長発展優位のままで、土地利用の無政府的現状であった。東京の江東地帯、川崎、大阪東西淀川地帯、尼崎の工業地区を見よ。それはるいるいたる白く塗りたる墓地の如き、或は刑務所団地を思わせる、るいるいたるコンクリート高塀の連続で、灰色の工業地帯であることである。このことから絶対にコンクリート高塀は認めない、団地全体を開放的に緑化によってつつみこむという売買条件を附した。

第四に、最初から公共空間を更に確保していくこと。入居企業が零細中小企業であることからいってもその必要性を痛感したので、計画的にこれを配置することにした。

西帯広工業団地に進出した帯広松下電工

帯広のような地方都市であっても、その背景とする十勝農業の戦後の著しい発展と近代化が、地元商工業の市場を一層拡大することになり、中心都市としての都市機能の集積化が早まり、従来未整備であった港湾、河川、道路、農地などの開発基盤に対し、財政投資が計画的に投入されることによる管理機能の拡張増強は、これまた都市構造の再編をおしすすめるようになってきた。

平成十五年

至軒寮の人々

ワイン町長で有名な元池田町長の丸谷金保さんの一文に、『穂積五一＊先生を想う』がある。

七月十七日は、私（丸谷）の至軒寮時代の忘れざる恩師穂積先生の命日にあたる。東大正門前にあった至軒寮は、憲法学者の上杉慎吉先生が学生の思想団体として七生社を結成、その学生宿舎としてできたものである。上杉先生の没後、穂積先生が寮長として学生たちの面倒を見てこられた。寮生は質素な自治生活をしながら人間性の修練を積み、政治思想をこえて心の深奥で先生に結びついていた。

穂積五一先生

寮にはアジア各地から青年の往来も激しく、戦後はアジア学生文化会館となって今日に至っている。この会館が増築された一九六八年、アジア学生文化協会機関誌『アジアの友』に載った、穂積先生の一文を紹介させて頂く。

「会館の中で、日本人学生とアジア各国からの留学生たちとの対話の中で、『あの戦争（満州事変以後）は軍部のやったことだ。自分たちは全く関与していない。』と発言した途端、アジアの留学

生が『もう一度いってごらん』とその緊張した鋭い語調と気魄に、日本人学生はたじたじとなり二の句がつげず黙ってしまった。

忘れようといえるのは、アジアの留学生たちの方である。日本人が一言の挨拶なしに忘れようなどというのは礼儀に反する。自分たちが忘れようという、そちら（日本人）は償いをしたいという。これが相互の謙譲というものだ。日本人はモラルというものをなくしたね。」と穂積先生は指摘するのである。

この丸谷さんの一文は、日本人一般の志操に対する痛棒としかいいようがない。丸谷さんが至軒寮に入寮するのは、「生きんとての会」が主催した穂積先生の講演会がきっかけである。

昭和十四年十月、「生きんとての会」の主宰者倉田百三先生、先生この時四十八歳。大東塾の窪田雅章君を伴って鮮満・北支・蒙古・中支等大陸各地を視察。二ヵ月の旅を終えて帰国されたが、年明けて病床に伏せることになる。

「私は最近二ヵ月の大陸旅行において、日本の大陸経営の真に容易ならざる実情を観取し、深く考えさせられるものがあった。

日本は真に今こそ再出発、再覚悟を要する時である。

凡そ民族には民族的人格ともいうべきものがある。日本民族が全体としてもっと向上しその徳、その智、教養、実力を養成することをしないなら、異民族の信頼を得て、これを包容することはできない。武力のみでは人心を把握することが出来ず、従って治安そのものさへも確保することも容易でない。

そこで人間教育、民族啓蒙の永遠の問題がものをいうようになっているのが、現段階の実情そのものである。

われらの『生きんとての会』は、この情勢に沿い、益々われわれ本来の課題に励むべきであると、私は思う。

人間としての価値、人格陶冶において他民族に劣る個人を成員とする民族は、他民族を指導し得るものでない。支那大陸を移動する日本人民衆が、支那の民衆よりも人間的に立ちまさるものでない限り、東亜の新秩序は成就し得ないであろう。

その意味でわれらの会の活動をここらでさらにピッチをあげるべきでないのか。」と先生が語りかけた。

この様に大陸の実情を、憂憤を以て、当時何れも二十代の男女学生の前に激白されたのである。ところが年明けて先生は病床に伏せることになる。病状はさらに重くなり、東大病院に移られることになる。

そこで穂積五一先生を招いて、大陸の実情に就て講演会を開くことになる。丸谷さんはその頃明治大学の学生で、講演会場に隣接して大学があり、是非聴講されるよう私は誘った。その際、直々穂積先生に丸谷さんを紹介してあげた記憶をもっている。これが丸谷さんと至軒寮との結びつきである。

ところで、この日の講演会を機に、もう一人至軒寮に出入りすることになった「生きんとての会」の仲間がいた。東大法学部政治学科の渡辺藤男君である。渡辺君は仲間から「藤さん」の愛称でよばれ、体格雄偉、豪放磊落、しかも繊細な感覚の持主で、倉田門下の東大生の中でも目立っていた。

渡辺君は伊豆韮山中学より旧制都立高校を経て、東大に進んでいる。私が「伊豆人なら依田勉三翁を知っている筈だが」と話しかけたのが親交のきっかけである。

渡辺君はこの日から東大アジア研究会に属し、また石原莞爾＊の東亜連盟論に触発され、とくに当面のアジア問題をどうするかという現実問題への関心から東大卒業直前に、満州の実態を調べるべく、四十日間の満州各地の調査の旅に出る。この体験で、五族協和・王道楽土の理想は現実と遠く隔たっており、民族的偏

見を払拭した真の平等・対等観の必要性を痛感して帰国するのである。日本民族はアジアの孤児になってはならぬ。中国問題への関心はここに根づき、戦後におよんでからも中国各地の視察に出かけ、遠く新彊ウイグル地区まで脚をのばしていることからも、その思いの深さが分かるのである。

大学卒業後、軍役に服し、いわゆるニューギニア伐木部隊長として、日本人・台湾人を部下に、南方の島々を転戦する。日本人と台湾人の待遇の差別を廃し、現地住民にも偏見なく接し、インドネシアでは「トアン・サールハッテ・バクス（心地よき旦那）」として慕われたというのである。モンゴロイドくさくない日本人離れした彼の風貌を思い浮かべて、実感を以てほほえましく思い浮かべるのである。

戦後、復員してから故郷沼津の西浦に帰還。役人官僚などは望まず、新聞記者を考えられたこともあるが、故国再建の憂国の志を、次代の世代に期待して教育界に入ることになる。

爾来、沼津学園高校、三島南校、静岡城内高校、高教組委員長、静岡高校、指導主事、熱海高校、裾野高校、東部教育事務所長、教育研究所長、下田北高校長、韮山高校長、不二聖心女学院高、三島高校長、常葉学園大学教授と、四十年にわたり教育生涯を送られる。まさに戦後日本の教育史ともいうべき生活を送られた。

今、私の手許に、彼の古稀記念著作として刊行された『ロマンの残党』がある。その編集後記に彼について次のように記述されている。

「ある時は意気あがらざる学園を燃焼させ、才能高きが故に苦悩深き学び舎の学生課長として生徒たちと懊悩を共にし、曲り角にたつ教組のリーダーとして、或いは東部の義務教育行政の最高責任者として、また新しい時代の教育研修の最高推進者としての活躍など、興味のつきないドラマ性の魅力が数々ある。壮大な夢と青年の心を叩いて止まなかった各学校の校長として、溢れる情熱の泉はいささかも枯れることなく、一筋に生きた大いなる人生街道を私たちは尊いものと思う。」とある。筆者は三島高校の校長飯田和信先生で

あるが、彼が同僚たちからどう見られていたか、その風姿が察せられるのである。
また私と渡辺君との交渉については、昭和四十七年三月、下田北高校の『豆陽論叢』に掲載された「北方へのロマン―依田勉三とその同志たち―」にしるされている。
「伊豆人である私が、郷土の大先覚者依田勉三の名を知ったのは、四十数年も前、北海道の友人木呂子敏彦氏を通じてであり、しかも依田勉三とその同志たちの十勝平野開拓に捧げた辛苦の生涯と不滅の業績とを、はじめて審らかにすることを得たのは、一昨年、同氏より寄贈された『拓聖依田勉三伝』によってであったことは不覚というほかはない。
そしてまた、勉三の長兄である依田佐二平らによって創立され、勉三自身教員として『日本外史』を講じ、彼の終生の同志であった渡辺勝が教頭として同時に英語を講じた豆陽学校の後身たる本校に、勉三に関する伝記の決定版ともいうべき該書が刊行された年に校長として赴任したことも、また奇縁というべきか。
先般帯広市を訪れる機会を得て、幸い同市木呂子助役の案内により、帯広神社の社頭にそそりたつ依田勉三銅像、途別水田所跡、徳原地の碑（依田佐二平撰文並書）、途別水田の碑（同じ）等の遺跡を歴訪し、さらに車を駆って、緑ヶ丘の一角より、東西南北に無限の発展の可能性を蔵した十勝平野の中心都邑帯広市の整然たる市街を鳥瞰し、北方にかけた八十数年前の晩成社の同志たちの夢がここに成れるを思い、感慨あらたなるものがあった。
結語に旧制帯広中学校の校訓が「オベリベリ魂」（晩成社魂ともいうべきか）であると、本県教育庁の山内課長から伺ったことがある。
この希有の先覚に興味をそそられた人は、本校図書館にある勉三伝を読まれることを奨める。

『途別水田碑』の前にたちて

柏の葉のさやさや鳴れば益良夫のくにしのびうた聞ゆるごとし

依田勉三銅像の前にて

はるばると十勝大野を見はるかし依田勉三はまさやかに立つ

以上で渡辺君と私との交渉の一端を終るが、残念ながら平成十一年に亡くなられた。ところが、渡辺君のお嬢さんが東京都内で言語障害児童教室の教師を勤めていて、たまたま札幌で全国関係教師の会合があり、足をのばして父親藤男君の来遊の地、帯広を訪れられお目にかかることができた。亡き父上の日記のコピーを持参しておられ、お前のことが書いてあるぞと見せられた。驚いたことに日記の中には

昭和十五年九月十九日

鈴木邦彦（東大生、生きんとての会の仲間＝渡辺君とは生涯の盟友＝）と倉田百三先生を見舞う。生活館で木呂子氏を訪ね、昼食をご馳走になる。

至軒寮の穂積五一先生の話を重く聴くことができた。新体制の内幕を若干伺うことができた。日本の危機の切迫せるに、今更の如く戦慄する。

九月二十日

聖テモテ教会にて「生きんとての会」会歌試聴、本郷にて鈴木邦彦、山川弘至、古川敏子氏らと夕食を共にし語る。

とあった。これで丸谷さんや渡辺君が穂積五一先生との出会った日が明らかになり、驚いている。お二人の

その後の人生にとって意義深い日であったと思われる。

渡辺君の日記の中の山川弘至君とは、渡辺君の大学時代に同志の契りを結んだ人で、国学院大学の折口信夫の研究室におられた。私にとっても勿論親友である。『国風の守護』『ふるくに』『国学の源流と文芸復興』等の著書が、戦後次々と刊行された。終戦の僅か四日前、台湾の南端屏東飛行場の暗号班長として軍務についていたが、惜しいことにフィリピンから飛来した米軍の空爆にあい戦死をされた。本当に惜しい惜しい青年であった。高見順が何かの雑誌に、戦後最初の貴族文学だと批評していたのを覚えている。長良川の清流を遡って富山に抜ける街道の源流に近い高鷲村に出生、郡上踊で有名な旧制八幡中学から国学院に進んだ。清潔の一語につきる青年で、この人の声がまた涼しく美しく仲間に好感を与えた。私とは徒然草や方丈記にはじまる日本の隠者文学の系譜に就て何回か語りあったことを覚えている。

この渡辺日記により、鈴木邦彦君も穂積先生の講演会に出席されていたようである。

「生きんとての会」ではもう一人、同じ東大生で大島藤三君がいる。戦後、私が教育委員の頃、北大の学生課長として顔をあわせることになる。戦後の混乱した荒々しい空気の時代で、北大事務本部に彼を訪ねると、課長席の青テーブルの上に、大胡座（あぐら）をかいて、とり囲む学生たちを相手に盛んに丁々発止と議論をしていたことが今も瞼に浮かぶ。しかもイールズ事件＊の頃、時の文部大臣が北大を訪れた時、大臣の乗った自動車を学生たちが取り囲んで通せんぼしてしまった。ところが大島君が現れて、大臣の乗っている自動車の屋根の上によじのぼって仁王立ちとなり、彼の演説がはじまり忽ち学生たちの囲みを排除してしまった。彼にはこうした逸話は事欠かない快男児なのである。大島君は各地のむずかしい大学を転じ、最後は東大の学生部長で終わっている。

平成十五年

随想

昭和四十四年～北海タイムス「四季の声」
昭和五十四年～北海タイムス「随想」

続馬喰一代
もう一人の知事
無期懲役
青年企業家
安孫子賞
手前筋子
次郎物語
地方文化（ぢかたぶんか）
教師の船
三笑亭
続三笑亭
フラワー・ストリート
造園学部の設置を
賢治と豊彦の童話
小鳥の来る日
新しい北海道人像
自由な大気
野草園にて
十勝平野の上空
スウェーデンの燐寸
うばぐるま社会
アメリカの鍵
カリフォルニアの土
シスコの海岸にて
幻の大地
緑の週間
万物は流転する
柳田学の展開を
オールド・トリーズ・イン・タウン
証言・太平洋戦争
石坂洋次郎先生騒動記
永六輔に物申す
天田愚庵のこと再び
パリの石畳
北京の歓談
永六輔の返事と江政敏
川村秀雄先生を悼む
萬葉僧仙覚律師のこと
萱野茂「アイヌの碑」によせて
エエンネエンヌプリの異相
畑ちがい（1～9）

続馬喰一代

尾崎士郎に激賞された小説『馬喰一代』の作者中山正男＊の知遇を得たのは、四十年来の畏友金子智一の縁による。山形県の青年団活動者としての金子と手紙の友情に支えられ、共に十七歳からの交際である。金子の女房は金子きみ＊といって北見芭露出身の文学少女であった。『薮踏み鳴らし』の一著で作家の位置は決まった。平林たい子賞を受賞した。『流氷の女』の原作者でもある。きみの姉が中山夫人である。この二組の夫婦は全く妙縁だと今も感じいっている。

中山は大宅壮一も評するように空中列車で、とにかく物凄い熱情をもって仕事を広げてゆく。後始末を丁寧にしてゆくのが金子である。私達金子の仲間は「中山から離れろ、金子の持味が死んでしまう。金子は中山の番頭ごとき人材ではないのだぞ。」という。しかし金子は中山から離れなかった。金子がいなければ中山の仕事は進まなかった。ほんとうに名コンビの羨ましいぐらいの義兄弟であった。

この二月、偶然倉田百三の墓前祭にぶつかり仲間が多摩墓地に集まった。師の没後、私にとって初の参列である。終ってから、金子が中山正男の見舞にゆくという。昨年札幌での開道一〇〇年の記念式典で大宅壮一と一緒のところを会ったきりである。東京医大に二人で出かけた。病室には三

笠宮様はじめ福田赳夫など名士からの豪華な花鉢がいっぱいだった。地元帯広の銘菓「大平原」を開いて出したところ、間髪をいれず中山の手がのびて、菓子は口の中にあった。夫人があわてて中山の手を押さえた時は間にあわなかった。中山の糖尿病は私の記憶でもずい分長いもので、百も承知である。中山の食べかたはまるで子供のようであった。

その中山正男が亡くなった。私に向かって、「こらっ、北海道の外れ男」という毒舌も、もう聞くことは出来なくなった。

昭和四十四年十一月二十四日

もう一人の知事

宮崎には知事が二人いるという。その一人、民間知事岩切宮崎交通会長がつい先頃札幌まで見えられ、道観光開発について極めて感銘の深い示唆をされたようである。私が二十年にわたり続けている一千字年賀状に、岩切さんのことを紹介したことがある。早速巻紙に風格のある筆書きのお便りを頂戴した。お目にかかれなかったことを残念に思っている。

もう一人の知事は黒木県知事さんだ。ＳＡＰ運動という農業の繁栄について学習することを意味する青年運動を、県下に徹底したことで有名な知事さんだ。

一昨年宮崎に立寄った際、知事が今度はＢＳＰ運動といって、商店街再開発運動を推進しているという。早速県庁に出かけ中小企業振興課長さんにお目にかかった。出された名刺には知事と同姓で黒木とあった。午前から午後にかけての三時間、昼めし抜きである。昼めし時間はその課長と私とのたった二人。まるでこちらは棒しばりである。話を聞くのとメモをとるので動けなくなった。高祖日蓮大師の前で説法を聞く弟子一人の如き有様である。何と勿体ない講義であったことよ。深い叡智と烈々たる気概を以て説く宮崎の街づくり構想。県の行政官が郷土再建の使命に満ちあふれて行動する。これは異色なことだ。

「Ｂとはビュウティ、Ｓはセイフティ、Ｐはプロスペリティ」美化、安全、繁栄を目標に、商店

街の若がえりを図ることを商店によびかける運動だ。第一に、美と安全を創造する街づくり。第二に、地域に豊かな奉仕を、企業に共同の繁栄を。第三に、科学的調査と徹底した話あいを。第四に、企業経営の原則をふみはずさない。

都市計画を従来の土木屋的偏向から解放し、一つの開発哲学をもち、市民的側面から取組み、そのエネルギーをひっぱり出そうというのが知事の構想だと説明する。知事も立派だが、これはまた立派な課長だ。知事の開発哲学を聞き松下幸之助が即座に企業の進出を決めたというのもむべなるかなと感じた次第である。

昭和四十四年十一月二十九日

無期懲役

先頃、上川の東神楽の稲刈りに忙しい米作農民を訪ねた際、水田価格が十アール当り四十万円以上の相場を出していると聞いた。「お前のいうように水田単作十ヘクタール経営のなりたつことは理解できるし自信もある。しかし、今の米価で農地十アール三十万円以上ではソロバンにもあわないし、まったく手が出ないので、規模を大きくしようといっても、地元の農民は指をくわえて見ているだけだ」という。それはまたどうした訳かと聞いたら、旭川郊外の宅地工場に農地を売り渡した農民が、現ナマをどんとふところにして、納内から深川にかけてまで代替農地を買いあさっているからだという。

「米が余るから減反しろ。」というかけ声の答えははっきりしている。「米の売渡し価格を下げろ。生産費の高い米は困る。それには経営規模を大きくし、大型化しろ」ということになる。いわれている構造改善のホンネはここにある。しかし農地の流動がこれでは困る。

財界は「土地が高くて社会開発が進まないから、土地価格の公示制度を設けろ。社会資本の八割が用地取得にくわれている」という。そこから農地法の撤廃意見まで飛び出す始末。しかし、農地価格の公示制度を設けろとはいってくれない。

農業経営は、土地、資本、労働の組みあわせである。土地の価格が高ければ資本装備も改良できない。労働所得はゼロになり、安い米を作れということがどだい無理な話というものだ。私は提案する。速やかに農業がなりたつ農地価格の公示制度を設け、これに違反した農地の売買は、直ちに農民の裏切りとして無期懲役とする。死刑とはいわない。これはあくまで考えかただ。ついでにいうと、苫小牧東部では一万ヘクタール一七五億円で工業用地の買収が始まるという。結構なことだ。但し農地を売却した約三〇〇戸の農民が、どんと現ナマをふところにして十勝の酪農地帯を買いあさり、農地価格のつりあげをやり、十勝農業の発展にブレーキをかけられては困る。あくまでも適正価格でお願いしたい。

昭和四十四年十二月十二日

青年企業家

「課長が部下を集めぶっ倒れるまで痛飲し、お互いに恥部をさらけだし、それで同質であることを確認してしまえばそれだけでもうチームワークができてしまったという錯覚がある。新しい到来者である新入社員には、入社したその晩に乱暴ろうぜきを共犯することによって、仲間意識を確かめあうことが多い。日本の企業では、企業を構成する従業員がみんな同種同質の仲間意識に埋没し、過去にとらわれ、現在のやり方を前提に物事を考えるといったことに、あまりにも慣れすぎているのではないか」。

これはこの夏、軽井沢ゼミで財界の面々を前にし、七十年半ばには労働組合にも内ゲバが起ると提言して大きな話題を呼んだウシオ電機社長牛尾治朗氏の発言である。牛尾氏は昭和六年生れ。昭和三十四年に父の会社に入社、三十九年には独立して自らウシオ電機を創設した。日本青年会議所会頭である。

日本の人口はすでに七十パーセントが昭和生れに変っている。さらに七十年代にはまったく価値観を異にする戦後の「新しい日本人」が、企業構成の半ば以上を占めるであろう。企業のゲバルトは、まずもっとも封建的な企業から起り、地すべり的に他の企業にも波及すると警告し、並いる老財界人を驚かしたという。この青年企業家の発想に深く共感するものである。

帯広青年会議所が先頃長野県諏訪の青年会議所との交流をようやく実現した。帰って来て曰く、「全く驚いた。会員が三十代そこそこで、みな自立して一〇〇人、二〇〇人の従業員を持つ工場の経営者であったことだ。大学を卒業し四、五年は地元の精密工場に働いた後、自ら独立して協力工場を創設しているものが多い。二代目意識にあぐらをかいたものは一人もいなかった」ということだ。北海道の開発もこうした二代目意識にあぐらをかかない、独立自主の青年企業家のけっ起にまつところが多い。企業誘致でバタバタ騒ぐばかりが能ではない、青年企業家の育成こそ大事だと考える。

昭和四十四年十二月十四日

安孫子賞

この一月、地元大正農協の専務、奥村喜十郎氏が「安孫子賞」＊を受賞された記念の祝賀会が開かれたのだが、もっぱら、わが尊敬する奥村さんの功績がたたえられて、肝心の安孫子賞の持つ意義なり、安孫子孝次先生の御事業に触れた話をされた方がひとりもいなかったことを残念に思い、十勝の農業人で、安孫子先生のことを知る人が少ないのにも、ことの意外と驚いたのである。

青年の日、不思議な縁で、先生の厳父倫彦翁にもお目にかかっている。「郷土研究」ということが盛んな時代で、私ものこの十勝から琴似屯田の調査に出かけた。屯田記念館があって、翁が屯田兵として入植の翌年早くも西南戦争に参加され、弾丸が頭をかすめて負傷したその頭の傷跡と軍帽の破れを示され、翁自らの丁寧な説明を頂いたことを今も深く記憶している。

十勝農学校に入って農業を学ぶようになってから、わが師大沢徳治先生の御紹介で、琴似試験場長時代の安孫子先生に再三お話を伺うことができた。とつとつとした会津弁まる出しで語られる先生は、私にとってまこと一世の師父としての感銘を受けたものである。

先生のお仕事のうちで私が特筆したいのは、学閥や学歴にとらわれず広く人材を集められ、思いきり研究や仕事をやらせたことだと思う。稚内の勇知薯が今日でも食用馬鈴薯として関西に根をおろしているかげに、先生の人材育成があったことを忘れることができない。

第二は、農業経営という立場から、農業に数字を与えられたことだ。いっては悪いが大正、昭和にかけての十勝の農業経営には数字がなかった。小作が多いから春には米噌肥料を商店から仕入れ、秋には収穫した小豆で借金を決済するやり方だから、農業の数字をつかみようがない。先生は各地に経営試験委託農家を設けられ、経営の実態を明らかにされた。

私らが今日多少とも十勝の農業経営について論ずるところがあれば、先生の学恩であると、感謝せざるを得ないのである。

昭和四十五年二月十四日

手前筋子

樺太に住んでいたころ、本斗から西ノトロ岬までの約八十キロは、冬は途中一泊の駅逓馬そりに乗るか、三日も四日もかかって歩くかの難儀道である。今のように道路の除雪などは考えられないころで、馬そりがつくり出す雪道を歩くか、さもないと浜づたいに、波打際の歩きよいところをひろってたどり歩くかである。途中に山道が二ヵ所ばかりあって、吹雪にでもぶつかったら大変なことで、腰までの雪をこいで、とにかく一キロや二キロを覚悟して、気力を十分にするため、普門品の偈文を唱えながら歩きぬいたことを思い出すのである。この道筋には、どこの部落にも馴染があって、昼食をとるにも、時には泊めてもらえる便宜があった。この冬の海岸歩きの大きな楽しみは、どこそこの漁家でもてなしを受ける鰊づけや筋子の味である。家ごとに出される鰊づけや筋子の風味がそれぞれちがう。もちろんそれぞれの家の主婦の仕込みのしかたが異なるからだ。浜育ちでない私にとって、これはまったくの驚きであった。

「手前味噌」という言葉がある。これは農家の自家用味噌の味くらべに由来して出てきた言葉だと思う。このごろは考えて見ると、この手前味噌やら、手前鰊づけ、手前筋子がすっかり私達の身のまわりから姿を消してしまったことだ。

先ごろ上京の機会に、十勝の農産物の市場化についてすこしく勉強しようと、一日F君と赤羽のダイエー、西友、都心のデパート、青山の紀の国屋と食品売場を歩きまわって見た。馬鈴薯や小豆のパッケージが多かったが、加工品の多種多様さと、蛍光管の下でこれでもかこれでもかと刺激的にはねかえってくる色彩感覚。味で買わせようというのでなくて、色じかけで買わせようという商魂に仰天した次第である。はるかな日の、樺太の漁家で味わった「手前筋子」の味覚を思い出すのである。

昭和四十五年二月二十五日

次郎物語

私に鍋島論語『葉隠』＊の所在を教えてくれたのは、『次郎物語』の著者湖人下村虎六郎先生である。

「恋の至極は、忍ぶ恋と見立て候。逢いてからは恋の丈（たけ）が低し。一生忍んで思い死することこそ恋の本意なれ。歌に、

恋死なん　後の煙にそれと知れ
　ついにもらさぬ　なかの思いは

これこそたけ高き恋なれと申し候へば、感心の衆四、五人ありて、煙仲間と申され候」

次郎物語の第二部以下ではこれが主テーマである。この一節は、先生がつねに私に語りかけてくれた葉隠の粋である。

先生との出会は、小金井浴恩館長としての先生が、留萌、羽幌での青年団講習会の講師として来道したのがきっかけである。たしか支那事変の始まった年である。十三年春私が上京した時、先生

は浴恩館を辞し、雑誌『青年』に連載の『次郎物語』も、自由主義だということで掲載中止となっていた。私は畏友加藤善徳と編集していた雑誌『生活』に、早速『小開拓者』という次郎物語の第二部にあたる小説の連載をお願いした。淀橋百人町の下村邸の往来は、私にとって楽しい仕事のひとつであった。たしか暑い季節と覚えているが、加藤が歩厚い包みをもちこんで、先生から『次郎物語』の出版先を見つけるよう頼まれたという。これを岩波書店にもちこんだが、一年もたってから原稿が返されてきた。それじゃ私の番だという訳で教育関係の出版社を片っ端から原稿をもってかけあいをして歩いた。私もついに手をあげ最後のかけあいをしたのが、何と謝国権の『性生活の知恵』でかせぎまくった現池田書店の社長池田敏子である。その頃は本郷で高山書店といって、たしか霜田静志の教育書を出していた。そのうち私は昭和十六年に応召し、『次郎物語』を世に出せぬまま遠く北辺の樺太に渡った。

そしてこの年、小山書店からはじめて『次郎物語』が世に出ることになった。ところがどうだ、忽ちベストセラーとなり版を重ね、戦時下にかかわらずついに映画化されたのである。先生は、わざわざ樺太の陣中に丁寧な手紙と共に映画『次郎物語』のプログラムを送ってくださった。

戦後、池田敏子の池田書店が下村湖人全集を出し、『次郎物語』も相当の版をかさねたが、私にとって不思議な青春の思い出である。

昭和四十五年三月十日

地方文化（ぢかたぶんか）

九州芸術工科大学という大学がある。まだ誕生して二年目だが、国立の新構想大学である。学長の小池新二さんから、賀詞と一緒に「文化における地方と中央」という朝日新聞九州版の寄稿を送っていただいた。私とは商工省工芸指導所時代からのおつきあいである。

徳川幕府のはじめた参勤交代の制が、実は日本にはじめてネットワークを完成し、次の近代的統一国家への道を開いた。大名たちは藩政を通じて地方文化を育て、参勤交代は地方文化を中央に集め、その交流を促し、同時に中央文化の地方拡散をはかった。その例として秋田の佐竹侯が角館の桜樺細工の印籠を江戸の大名達への土産とし、中央での価値を高めて、地方工芸の発達を促したという一文である。

柳宗悦＊が発掘し育てた民芸というのは、もともと商業性の否定の上に開花したものだ。北海道の民芸の弱さは「みやげもの」から一歩も出ていないことだ。民芸は土着生活の日常文化から、日常の用と日常の美とを結合させた土着の主張でなければならぬ。土着の生命に意味を与えるところに地方文化の振興があると思う。

先年、道の岩田工業課長と、信州松本の池田三四郎氏の中央構材を訪ね、信州家具の神髄に触れ

て、今に感銘しているものである。松本市内のレストラン、旅館、喫茶店、そばや、飲み屋といわず氏の設計された建築と家具を見せて頂き、地方文化というものはこういうものだと思った。厳しい信州の風雪に育った木材が、クラフトマンたちの木材の本質を見ぬく鋭い眼力と、用を具象化しようという激しい情熱の前に、用がおのずから美となる秘密に触れ得た思いをした。土着の心と眼を育てることが、地方（ぢかた）文化創造の道だと思う。

昭和四十五年三月二十五日

教師の船

日本経済新聞のコラムは、コラムとしては全く異例の記事で、岩手県選出の山中吾郎代議士が、さきの予算委員会で質問を行った「教師の船」の提案について非常な共感をよせ、その実現に期待をよせている。私もその一人だ。

すでに実現を見ている東南アジア歴訪の「青年の船」は、亡き中山正男の進言に佐藤首相が感動し、これを日本の青年への贈り物としたものだ。その中山に「青年の船」の発想を教え、実現を懇請したのは私だ。

もう十五年にもなる。私が道南臼尻村の鈴木慶一村長、尾札部村の杉谷梅一村長と取り組み、日本で初めての定時制漁業高等学校をつくり、練習船を実現した。その名も栄光丸、一一七トンの鋼鉄船だ。パリに本部のある国際漁船協会から漁船年鑑をとりよせ、最新鋭の練習船をということで、デンマークのバーマイスターの可変ピッチスクリュー、二サイクルエンジンを採用した。

いきなり水産庁の調査船に指定され、本来であれば沿岸の昆布採りといか釣りで一年を暮らしている浜の勤労青年たちが、夢のような海外への航海だ。アリューシャンのアダック島を基地として、ベーリング海の魚況調査に従事したのである。夏は赤道から印度洋にまぐろを追いかけた。太平洋

の巨浪と戦うことを知らない、いそぎんちゃくのような臆病な浜の子供たちが、忽ちにして逞しい海の勇者に変貌して村に帰ってきたのだ。

私はこれだと思った。教育とは機会と夢を与えることだ。漁業はただ海の資源を掠奪するだけではいけない。漁業や漁村に新しい秩序と理想をうちたてることだ。それにはスウェーデンとかノルウェーの漁業と漁村を、何とか青少年たちにナマで見せてやりたかった。そこで中山正男に「青年の船」を頼みこんだのだ。青年自らがラットをとり、海図にコンパスをあて、エンジンを動かし、かつて太平洋を処女航海した勝海舟らの咸臨丸の感動を青年たちに与えたかった。

山中吾郎は、岩手県教育長時代に私と気脈をあわせて、現行の「へき地教育振興法」の成立をともに画策した同志である。「教師の船」の実現を心から期待するものである。青年たちが銃を背負い武力を背景にアジアを、世界を見聞することでは困る。

昭和四十五年四月四日

三笑亭

急に用事が出来てK君と京都まで出かけてきた。K君の手配で万博の混雑を避け、天王山の麓昔の西国街道の宿場町山崎の三笑亭が、今夜の宿舎である。宿の二階から見える隣の庭が離宮八幡の境内、宿の前の小社は山城と摂津の国境で、平安の昔の古関の跡である。平家一門が西海に逃れる時、ここからはるかに石清水八幡を拝して、都に再帰することを祈願したそうである。

人口一万の町。サントリー、日立、積水といった工場群が櫛比している。しかし町に出て下着一枚、靴下一足求める商店がないという不思議な町である。宿の下駄をつっかけて、名神高速道路を背にして国鉄東海道線、阪急電車、国鉄新幹線を僅か一〇〇メートルの間に潜りぬけ、堤防をあがるとそこは大淀川に沿って国道一七一号線である。暮れなずむ川の向側は、金剛生駒の山塊の残丘というべき男山。麓の河港の町、橋本の宿の夜の灯が追々と光を強めてゆく。ここは京都盆地を貫流する木津、宇治、桂、羽束、小畑の諸川が合流し、西山連山の南を削るように大淀川となって南流の態勢を整える地点である。平安の都にとって西国に通ずる戦略要害であり、瀬戸内海の汐風に乗って海彼文化を吹きいれる窓口でもあった。大陸の文化、西欧の文物もここを通って入ってきた筈である。

それにしてもここには町づくりがあるのだろうか。行政といったものがあるのだろうか。そこにある石、そこにある老木、そこにある細い道、すべて一〇〇〇年に近い文化と歴史の重みを背負っているのである。宿の三笑亭の名も一〇〇年に近い由来がある。京都と大阪の間、寸尺の土地もブルドーザーでおし砕き、工場化、都市化が乱雑に進んでゆく。人と文化のかかわりあいを無視して進んでゆく。これが民族のふるさとの姿かと心悲しむものである。

昭和四十五年四月二十七日

続三笑亭

京都府乙訓（おとくに）郡大山崎町、東海道線山崎駅前の旅館三笑亭。この宿の名が変っている。宿のおかみに、落語家に関係ありやと聞けばさに非ずという。大和法隆寺の門前には浪曲師吉田奈良丸の碑があるのだから、離宮八幡の隣が落語家と因縁があっても別に不思議ではないが、実はむかし越前武生の人酒井観海という高名の禅僧が、永平寺管長をも勤めたのであるが、ふと、種族保存の道を思いたち、旅に出て、この山城国大山崎の地に一婦人を得て還俗永住することになったという。その後たまたま、道をはさんで摂津国山崎の地に情人が出来たが、生涯三人仲よく笑って暮らそうではないかと、営むところの旅館に三笑と名づけたよし。その屋号もおかめの面の三つ重ねとなかなかゆき届いている。宿に着いて濃い地場の新茶をすすりながらいきなりこんな話の出るところが、歴史の古い土地の面白さである。山崎の孟宗筍といえば、京大阪では人ぞ知る名物。われらの食膳に供しようと朝早くから山に登り、筍狩りをしてきたと筍料理が出る。その口あたりの軟らかいこと、人情の濃やかさがそのまま味に出ている。筍というものはこうも美味いものかと、わが連れの食うは、食うは。

翌朝早く約束の訪問時間前にと、道をはさんで立つ同じ駅横の妙喜庵の国宝利休の茶室を観た。

山崎合戦を前にして、秀吉が堺より利休を招いて茶を点じたところという。僅かに二畳の広さである。開明な上方豪商の富の奢りの極みが、丸太の小屋組みと荒壁仕上げ。ぜいたくのまことはこういうものであろうか。

宿の目と鼻の先はサントリーの山崎工場。テレビのＣＭでお馴染の建物だ。山崎谷西観音寺の跡だ。サントリーとは山崎の山、太陽のＳＵＮ、鳥井をもじったものだそうだ。谷は東に向いて開いている。確かに朝の太陽は男山八幡の上から昇ってきた。

昭和四十五年五月十三日

フラワー・ストリート

帯広の広小路フラワー・ストリートが六日にオープンした。一ヵ月ごとの許可更新ということだが、見通しでは九月まで開設可能のようである。買い物公園としては日本ではじめてのロングランである。

旭川が昨年約二週間であったが、平和通り約八〇〇メートルを買い物公園として実現したことが、地元帯広にとって大きな刺激となった。旭川市はこの催しを実現するまでに非常な苦労をしたが、パイオニアとして突破口を開いてくれたことが、視察に出かけた市民に勇気を与えてくれた。

買い物公園構想は、昭和三十八年の商店街診断で道商工指導センターの佐久間診断部長がとりあげ、帯広構想として打ち出したものである。実現までに八ヵ年かかったことになる。

フラワー・ストリートの発足にあたり、一部の商店街の利益のためではないかという批判があったが、これは見当ちがいだ。マチづくりを進めるための社会実験なのだ。実際にそのマチでこうしたことをやって見ての利害得失というものが、市民の目ではっきりするということだ。

アメリカの中小都市ではモータリゼーションのため都心部に空洞化が起き、住宅にはじまって官庁までも地域外の郊外に逃げ出す。このため中心部の地価が値下がり、固定資産税の収入減、財政

力の低下という現象がおきた。こうしたことから、われわれのいう買い物公園、車を排除したモール方式が駐車場の整備とあわせて最初は短期間の実験にはじまり、恒久化にと発展していく。ミシガン湖畔カラマーズという無名の小都市からこれがはじまった。今では西部の中小都市では都市再開発の手法として一般化してきた。先日のＮＨＫテレビ『歩行者は反撃する』という一時間番組は、自動車禍時代における都心の人間性回復のための、いきいきした市民運動の実態を教えてくれた。都心の市道を用途廃止して街路公園につくり変えてゆく。公園だからその整備は商店街の負担ではない。市の負担である。このため都心の地価も回復し市の財政も危機を脱する。

それ以上に歩く市民たちの人間性の回復が実現し、街路公園は市民対話の場所として機能し、新しいマチづくりの方向と夢を実現する手がかりとなっている。

都心を車から解放するマチづくりが当然のこととして、これからもたくさんの町によって実験されることをこい願うものである。

昭和四十五年六月十一日

造園学部の設置を

昔から「素人はコワイ」といわれている。林学の素人がコワイこと知らずに書くことも、また楽しいかなである。しかし、日本の林学はドイツからの輸入だといわれている。一八八五年サリッシュは造園家と林業家との提携協同を提唱し、「林業は国土美化の一部である。林業の主目的は樹木を生産的のみならず、美的にも、またレクリエーションのためにも、さらには動物の保護のためにも、植栽し、管理することが必要である」といい、森林美学の講座を大学に設置することを提起したが、ドイツ林業家協会が真っ向から反対し阻止したという事実がある。その頃のドイツの林業者はまだ金もうけ林業しか知らない蒙昧（もうまい）時代であった。しかし産業革命の惨禍に気がつき、ドイツの林業は一八〇度の転換をする。

わが国もそう遠くない時期に一週五日制はもちろんのこと、有給連続休暇二週間（夏休み）の時代がくることが明らかになってきた。国土利用のありかたについて、現にはじまっている北海道三期計画の考えかたも根本的に洗い直す時期に来ている。産業優先の工業立地が問題になっているように、産業優先から、生活と環境優先の農林業のありかたについて、問題にする必要があると考える。

北海道が亜寒帯であるという基本認識にたち、北海道の造園学、森林美学の講座なり、学部が開設されてよいのではなかろうか。関東と関西にしか造園に関する大学講座がない。北方圏のことがいわれている折、北方の造園、造林美学の講座が検討されてよいのではないか。カシワや楢の樹林を片っ端から叩きつぶし、坂本直行＊さんの画材が日に日に消えてゆくいっぽうで、カラ松一辺倒でぬりつぶされる十勝の林相を見ていると、情けないかぎりである。人づくりを早くやらないと、緑はつくれないとつくづく考えるのだが、いかがなものであろうか。

昭和四十五年六月十六日

賢治と豊彦の童話

この四月、経済企画庁の下河辺淳さんに会った時、机の上に一冊の童話の本がおいてあった。それは宮沢賢治の『グスコーブドリの伝記』である。下河辺さんは、人も知る前回の全国総合開発計画、今回の新全国総合開発計画策定のチェアーマンとして、エネルギッシュにまとめあげた人だ。今度も環境制御の問題で欧州を調査して帰ってきたばかりである。七十年代の日本が果たさねばならぬ課題、日本列島の環境制御をどうシステム化してゆくかで、日夜構想を練っている、その下河辺さんが宮沢賢治の童話に夢中になっているとのこと。賢治文学と国土開発という組あわせは面白いと思った。

賢治の童話は、四次元の宇宙空間と人間の暮し、世の中とのかかわりあいを、時空を斜めに切り結んで、大乗の実相を視覚化しようと試みたものだ。祈りと志の文学といってよいと思う。

同じ頃、賀川豊彦召天十周年記念祈祷会が東京大久保で開かれていて参列した。賀川先生には青年の日にいろいろな意味で感化を受けた。同じ運送屋の仲であったことなど、妙な共感を覚えて親しくさせて頂くことができた。この会合で、ある老牧師が起って、童話作家としての賀川豊彦の話をしたのである。

「皆さん、賀川先生の『馬の天国』という童話集を知っていますか」といって、その中の一編『青芽の草笛』の話をした。札幌近くの鉄道踏切番の子供、梅吉の物語である。ふとしたことから、動物好きの梅吉が雪のつもる藻岩山のふもとに穴籠りする熊の家に誘われて、「打出の胡桃」を熊からもらい、「青芽の草笛」を雲雀からもらい、「蝉の羽衣」を蝉からもらって家に帰り、「打出の胡桃」で当時冷害凶作で苦しむ農民のために、胡桃の森を作って人々を助けたという話である。（賀川先生はペカンという胡桃に似た樹木を日本にもちこんだ人である）

期せずしてこの二人の宗教詩人が、子供たちのために、冷害と貧乏克服をテーマとする、極めてヒューマニテックな童話作品を書き残したことに感動を覚えた。

昭和四十五年六月二十三日

小鳥の来る日

『小鳥の来る日』というのは、わが少年の日に愛読した吉田絃二郎＊の本の名で、これには懐かしい思い出がある。その頃まだ北大山岳部でさえ、日高に登るためには仰々しくガイドを先頭にたて、人夫に荷物を托してパーティーを組み、その記録を集積していった時代であった。夏休みを利用して、若い中学の英語教師と少年の私とたった二人きりで、ピパイロ岳に登った。今から考えても相当大胆な冒険であった。奥深い山の中でキャンプをはる訳だが、夜がふけるほどに、はげしい川音は絶えず耳から離れることがない。かえって、天幕の外側をすっぽり包みこんだ巨大な沈黙の暗闇の深さを意識させる。二人は眠ってしまうまでおしゃべりを続けた。そんな時、話が文学のことになって、私が千家元麿の詩が好きだということ、吉田絃二郎のエッセイがひどく心に沁みると話しかけたら、教師は「君はまだ幼稚だ。絃二郎は文学ではないよ。森鴎外を読むんだな」といった。私は「鴎外も立派だが、絃二郎は絃二郎で美しい作品ではないですか」と押し返した。そのうちに二人は深い眠りにおちていった。

現在帯広の将来に向っての都市像はいかにあるべきかについて、何人かの市民に集まっていただき討議して頂いている。先日この会合で、コーヒーショップ「モーラ」のご主人が、「広小路のフラ

ワーストリートは大成功だ。街の中から排気ガスのにおいが消えて、空気がうまくなった。そればかりでない。白樺の木に小鳥が来て啼いているのをお前知っているか」という問である。それは知らなかった。

私は、その時ふっと少年の日のことを思った。ああ、小鳥の来る日か。ついに街に小鳥が戻ってくるようになった。絃二郎にそんな作品があった。あの時少年は無邪気に、ムキになり、英語の教師に向って絃二郎の作品のことを弁護したが、やはり絃二郎の『小鳥の来る日』という作品は美しいなと思った。

昭和四十五年七月十二日

新しい北海道人像

先頃がらにもなく、「北方圏問題について」という首題の座談会にひっぱり出され、その時有島武郎の言葉として次のように記憶したままを引用してしゃべった。「もし函館戦争で榎本軍が勝利をおさめ、彼が考えていたような民主共和政府が成立し今日に至ったとしたら、もっと異質な日本人が北海道に誕生したにちがいない。南方文化の断絶の上に、もっと重厚な、独創性に富んだ北方文化の担い手としての日本人が誕生したにちがいない」というのである。

帰ってから念のために有島全集をひっぱり出し、ほこりを払って原文を探してみた。どうも札幌でしゃべったことは、有島の一文に触発された私の創作であった。実は原文はこうである。

「艱難に対してある勇気が生れ出てくる。めいめいが、めいめいの仕事を独力でやってゆくのに、ある促進を受ける。これは確かに北海道の住民の特異な気質となって現われている。もしこの土地に、人為上にもっと自由が許されていたならば、北海道の移住民は日本人という在来の典型に、ある新しい寄与をしていたかもしれない。欧州文明におけるスカンジナビアのように、または北米文明におけるニューイングランドのように」というのである。

黒田清隆長官＊の道政のあとは、中央政府にあゆ追随するような為政者ばかりで、内地の在来の

形式と何ら選ぶところがない。北海道の自然の特色を失うばかりだ。特異の自然を活動するような詩人的洞察力をもった政治家は、ついにその後現れなかったというのである。（この活動という言葉はうまい表現だ）

私の記憶に誤りがあったことが分かった。だがこの一文が少年の日の大きな感銘として残り、ドサンコの私にとって、生涯の北海道を見つめる底意となっていたことはまちがいない。

昭和四十五年七月十八日

自由な大気

本屋の店先で、懐かしい国定教科書の尋常小学国語読本が復刻されているのを見つけた。巻十一といえば尋常六年生一学期の教科書である。

この教科書で小学校をすごした大正時代の十勝というのは、第一次世界戦争当時の豆作景気でわきたっており、農業が、沖積地帯から火山灰地の段丘面に急速に拡大していった時代であり、開拓の活気にあふれていた。久保栄が『火山灰地』にしるしているように、農民の手のひらにのった一粒の豆殻のような小さな市、帯広も耕境の拡大にあわせて、街並みを発展させていったころである。

この巻十一の第十四課は『北海道』という題であって、代表的にとりあげられているのが「札幌」「狩勝の展望」「十勝の平原」の三つである。私はこのことに感動した。作者の詩的直感に感銘したのだ。北海道を東西に二分する日高山脈と、札幌と、帯広の対置。一は中央政府による開発、一は福沢精神を継承する自由移民による開発。

札幌のことは大通公園、真駒内及び月寒の大きな牧場によって代表され、すべてが大規模でのびのびとしていると表現し、その頃の札幌は、まだ自然と公園の中に街のたたずまいがあったことを物語る。しかし、今の札幌は、その遺産をくいつぶして無限にスプロールを進めている。

狩勝の展望では「暗黒から光明の世界へとトンネルを抜け出た時、雄大といおうか豪壮といおうか、恐らく全道第一の壮観であろう」と、狩勝峠からの十勝平野の展望美を激賞している。

十勝の平原では、「十勝川の流域一帯の平野は、いわゆる十勝平原で、その中心をなすものは帯広の町である」にはじまり、札幌の二頁に対して四頁も費やしている。未開の原野に丸木舟の便をかりるに過ぎなかった帯広が、今は人口約二万、戸数約四〇〇〇を算する立派な町になったと書いている。そして農業者というものは、多くは古い習慣になじみやすいものであるが、十勝平野では新しい知識をいれて新式の農具を用い、新式の方法によってどしどし土地を開いている。

人々は「自由な大気を呼吸しながら、土の香りに親しんで楽しげに働いている。十勝の平野は心ゆくばかり晴々しいところである」と結んでいる。

父祖の時代から、伝統社会の古い惰性にこだわらないこの自由な大気を呼吸する十勝人こそ、新しい市民連帯の街づくりを実現しなければならない。われわれの山、日高の連峯のように。母なる川、十勝の流れのように。

昭和四十五年七月三十日

野草園にて

帯広の緑ヶ丘公園には、吉村市長の発想から生れた動物園、児童会館、老人ホームといった老人と子供を大切にする、街をシンボルする施設が集まっている。このなかに囲まれて野草園という自然植物園がある。

もう立秋をすぎた樹々や野草の生態を観察しようと、園内を歩きまわって見た。胡桃も、ぶどうも、こくわも青い房状の実をつけていた。静かだ。この日の催しを告げるスピーカーの音、車の騒音が多少あるが、たしかに静かだ。うっそうとした繁みが騒音を吸収してくれるからだろう。

歩いているうちに、先日苫小牧臨海の視察からわざわざ足を伸ばして、三日ばかり十勝平野を車で走り回り、「開発とは何か」につき議論しあった北東公庫の中西肇さんとの話がふと思い浮んだ。

「北海道の開発三期計画といっても目ぼしいものは苫小牧ぐらいで、道央の重化学工業化以外に何があるのか。食料基地とか観光地域とかいったって本当に期待がもてるのか」というような道内各地有識者の発言が新聞に出ていたが、「あとの地域はどう開発するかは自由に考えろ」といった、突き放された姿勢を開発計画から読みとり、戸惑いの反撃だったのだろうということ。この無気力な受けとり方こそ、開発にとって一番危険な心の状態であること。日本の各地で進んでいる開発が、

実は苫小牧開発も、札樽の都市化の進展も、すべて産業開発が優先して進んでいる。煙をモクモク吐き出す工場が、町に村にはりつけば開発であるかのような理解が強すぎることなどだ。過密と公害の苦しみを死ぬまでにはこの村でしてみたいといった、ある村長の言葉もある。

地域開発即産業開発といった呪縛から解放されて、地域開発を都市建設として、もっと生活する市民を主体として、生活空間（自然空間、生産空間）を計画的に配置してみる。こういう未踏の開発こそ、道東だから十勝だからやれるのではないだろうか。生産と生活の調和ではおかしいので、自然の中における生活と生産の調和でないのだろうか。生活と生産は社会的費用の対象として考えるが、自然はタダのもので、社会的費用の対象として考えない政治も行政も、既に誤りを犯しているのではないだろうか。

こんなことを考えながら歩く足許に、美しい羽根の野鳥の死骸がころがっていた。私の足はとまった。開発というものは「心の開発」がいちばん先だと自分につぶやいた。

昭和四十五年八月十二日

十勝平野の上空

曇りの日であった。帯広空港を飛びたった東京直行便のＹＳ11が、機首を東に向けて高度をとる。あっという間に雲界をつきぬける。上空には太陽がまぶしく輝き、ぬけるような青空がそこに広がっていた。オホーツク海高気圧が、遠くベーリングから、またマガダンの岬から、海上をなめるように南下し、重くふくんだ水蒸気を、道東の沿岸部にバリウム液のように白くこぼした海霧の広がりだ。今日はこの海霧が、十勝の内陸部に奥深く入りこんできたのだ。沈降と隆起のくりかえしの古地質時代をそこに再現したような、素晴しい景観が美事にひろがっている。日高の構造山脈は、海抜七〇〇メートルの線に限られて、サホロ岳にはじまるメムオロ、エエンネエン、ピパイロ、トツタペツ、ポロシリ、サチナイ、ペテガリと、美しいスカイラインを雲海の上に画き出している。

やがて機首はUターンする。雌阿寒岳が見える。然別湖を静かに抱くヌプカウシの山塊、ニペソツ、石狩、大雪、十勝の連峰が次々とパノラマのように目にはいってくる。

ここは機上ではない。宮沢賢治の銀河鉄道を走る列車からの車窓風景だ。そんな錯覚のような感懐が自然に浮かんでくる。いや、そうじゃない。ここは、ホーバークラフト遊覧船トカプチ号の上なのだ。白く、白く、泡だつ波の上を、すべるように走っているではないか。

いや、ちがう。一万年前の火山灰砂丘の上を走る探検車の上なのだ。日高の向うから偏西風にのって、来る日も来る日も静かに降りつもった有珠や、樽前の火山活動の降灰の地上を走っているのだ。ナウマン象も、マンモス象も、間氷期の湿原の中に埋まって、この灰の下に眠っているのではないか。

こんな勝手な空想を機上の小窓に顔をよせて楽しんでいるうちに、YS11機はもう日高を横ぎり、静内の上空から太平洋に出た。こんど陸影が見えたら三陸海岸の上だ。東京に着いたら暑いぞ。汗ばんで寝つかれない夜が待っている。とにかく少しでも寝ておいた方がよいと、背もたれを後に倒すことにした。

昭和四十五年九月十日

スウェーデンの燐寸

ヨーロッパでの二十日間の旅を通じて、日本のような木材を軸木とした燐寸（マッチ）を手にしたのはスウェーデンただ一国であった。あとの国々で手にしたマッチは、いずれも紙軸のマッチであった。

ストックホルムの港湾局を公式訪問をした際、はじめて日本で見るような大箱マッチを出された時、さすが森林王国スウェーデンだと思った。だが手にとって見ると軸木がいかにもか細く、木材を無駄にしまいとの心根がうかがえた。

もともと日本のマッチはスウェーデンマッチといって、神戸にスウェーデンの国際資本が根を下ろして産業化したもので、神戸市内の家内労働に依存して発展したものだ。かつては、このマッチ軸木に十勝原野の「どろの木」がねらわれ、管内のあちこちに軸木工場があったことを子供心に記憶している。ところで、日本の木材需要の約五割が輸入材に依存している今日、マッチ一つを例にとっても、日本人は木材資源の無駄使いをしているように思えてならない。

港湾局の案内でストックホルム港の施設を見学させてもらったが、驚いたことにはアフリカ材をはじめとして、外材の輸入がずい分と行われていることだ。わかったことは、日本の外材輸入とは

事情がちがい、資源を荒らしたために止むなくの輸入ではなく、森や林を成長量以上に破壊しないためだ。森林王国を看板にして逆に製材プラント、紙パルプ等の製造プラントを自力開発し、このプラントの海外輸出に力をいれ、見返りに必要な木材資源を輸入し、あくまでも自国の資源はまもりぬくという考えかただ。この智恵には全く敬服した。このことは同じ北欧のデンマークが、酪農王国を看板にして、乳製品の製造プラントを各国に輸出しているのと同断である。

私は思った。同じ木材王国、酪農王国を呼号する北海道が、かつてこのように、一次産業と二次産業とを関連させた開発手法を考えたことがあるか。全くの芸無しで山林を破壊し、農地を収奪する開発を推進してきたのではないか。おたがいに北方圏にありながら、こちらは、脳味噌のシバレっ放しでなかったかどうかを反省して見る必要があると思った。

昭和四十六年一月十日

うばぐるま社会

札幌といっても三越のある十字街付近のことである。この付近に、よほどヘソまがりの店と見えて、絶対に店の前の歩道を除雪したり、氷を割って歩行者の安全をはかろうとしない家がある。数年来、冬にはいつもどうなっているかこの付近を通るたびに気をつけているが、お見事である。今年も確実にその通りである。

歩道は道路用地だから民有地ではない。雪や氷の始末をするのは、市役所の仕事だということになる。繁華街の歩道をいちばん利用するのは不特定多数の市民である。全くその通りであるが、それでも古風な感情が、何か割りきれないものを心に残す。

北欧の街を訪ねて、つとめて、街なかの冬の暮しの様子を聞く努力をして見たが、意外と雪の量も少ないし、寒さもそう厳しくないことに驚いた。冬でも歩道の除雪は完璧に行われているそうである。

そこで、北欧では、冬でも歩道の除雪管理がきちんと行われる理由というものを考えて見た。それはどうも乳母車社会からきているのではないか。乳母車に子供をのせて、市電であろうが、地下鉄であろうが、エレベーターでも、街なかのどこにでも出かけていける社会だからではないだろう

か。もちろん、乳母車で渡れない跨道橋などあろう筈がない。冬でもわざわざ寒風にさらして、子供を乳母車にのせて町に出かけるのが北欧諸国の生活慣習だ。

世界で、アメリカと日本だけが自動車優先のキチガイ社会であり、自転車まで追放した国であるから、もちろん乳母車など、夏でも冬でも、街なかを押して歩けるしかけのものではない。

人間尊重の街づくりは、まず市民が冬でも夏でも、乳母車（乳幼児がのっているということだ）を押して、安心して歩ける都市のしかけから考えてみる必要がありそうだ。おのずから歩道の除雪も行きとどく。街づくりの方途も考えつくということになるのではなかろうか。

昭和四十六年一月二十八日

アメリカの鍵

清潔なオランダのスキポール空港を飛びたって、ニューヨークのケネディ空港に着き、まず驚いたのは、不潔きわまりない紙屑だらけだということである。なるほど、これではケネディが暗殺されるような国だとすぐわかった。

ホテルに向うバスの中で、エージェントの滞在注意がこうだ。「ホテルの部屋に入ったら、内鍵（かぎ）をかけるだけではダメだ。クサリ錠がぶらさがっているから必ずかけろ。ノックされても、絶対にドアをあわててあけてはならぬ。

女の声がしたらそれは色仕掛の泥棒だ。まず部屋にとびこんできて、サッと首を抱いてキッスをする。女のしゃべる言葉の意味がわからない、こちらも相手に通ずる言葉をもたないから、モタモタ、ウロチョロする。そこをタイミングよろしく、後続の二、三人組の女がペチャクチャしゃべりながら入ってくる。こうして女たちにからかわれている間に、ロッカーにある上衣のポケット、そこにあるトランクをかきまわし、金目のものを失敬してドロンする。」

これが道をはさんでカーネギーホールのある、五つ星のシェラトンという一流のホテルのことで、ホテルのメイドが外部と連絡をとっているのできわめて組織的だ。ねらわれるのはゼニ持ちと見られ、英語のしゃべれない日本人が主で、手口が心理的にできている。ルームは私室だからスリッパ

でよいが、ホテルでは、廊下に出れば街路や公道と同じだから靴ばきでなければならぬ。その私室に、見知らぬ女をいれたことは合意したことになり、法律的には負け。言葉が通じないもクソもない。こちらが勝手に引き入れたことであって、家宅侵入罪にはならない。

その晩同じホテルに、日本人が三チーム滞在した。翌朝食堂で日本人チームが大騒ぎをしている。例の手口で一二〇〇ドル盗られたというのだ。注意を守ったわがチームは無事故であった。

ホテルのドアにロックの他にクサリ錠までついているのは、ニューヨークはもちろん、歩いたアメリカ七都市のすべてがそうであった。ヨーロッパ八ヵ国のホテルではただの一ヵ所もない。日本には勿論あるはずもない。これが世界の文明大国を誇るアメリカの実情だ。いったい先進国とか文明国とかいうのは、月に宇宙船を飛ばす遊びばかりしていて、平和な一旅行者をこんなホテルに泊めさせるのが文明というのであれば、こんな文明とか繁栄はお断りしたいものである。

昭和四十六年二月二十五日

カリフォルニアの土

海外の農業研修ということで、人々が出かけていく機会が多くなった。しかしその農業を支えている、土壌なり気象なりの勉強の報告をあまり聞かない。まず無いといってよい。外国の農業というと、天国みたいなところでやっているようにも聞こえる。

私は素人だが、今度の海外視察では、いつもワイシャツのポケットに拡大鏡をいれ、行くところの畑の土をとっては掌ですりつぶし、自分なりの観察をする努力をしてみた。その土から、その土地の農業のなりたちを考えてみる工夫をしてみた。

シカゴを発ち、ミズリー、ミシシッピの流域を離れ、コロラドの上空を越えると、機上からは砂漠の連続のように見える。ロサンゼルスに着いて驚いた。西海岸の平地の緑は一木一草すべて潅（かん）水で保たれている。一週間も潅水しないと草木はたちまち枯死してもとの赤土に戻る。こんなところでオリーブやグレープ・フルーツがつくられている。土を調べて見ると植生土壌だ。十勝の沖積よりもっと肥沃（よく）だ。

土地は広々としてタダ同様に安く手に入る。水さえひっぱれば農業になる。日本的感覚での農業は全く勤まらぬ。雨は年間に十日か二十日しか降らず三五〇ミリ以下、緯度は北緯三十四度で日本

の徳島にあたる。日本一雨量の少ないことを誇りにしている帯広でさえ九〇〇ミリ以上だから、程度がわかる。日照は豊富、気温が高い、雨が降らないから土壌は流亡しない。そしてその土が肥えている。

しかしこの肥沃土はどうして出来たか。この大疑問を解くために書店に飛びこみ資料探しをやった。この北米西部の気候は二十世紀に入ってから乾燥型に変ったのだ。もともと十六世紀ごろからズッと多雨型時代が続き、以前は植物が繁茂していたのだ。それが乾燥型に変り、植物も一変して、サボテン位しか生えない土地に変ってしまった。

繁茂した植物は風化してこの土地に肥沃をのこしたことになる。水はコロラド河にダムをつくり、ロッキーの水を集めて、延々と山脈を越え砂漠を越えてひっぱってくる。アメリカのやることの偉大さとおそろしさである。

昭和四十六年三月九日

シスコの海岸にて

サンフランシスコの街の太平洋側に、クリフ・ハウス＊がある。ここから目と鼻の先にある岩礁にオットセイの棲（せい）息の姿が見れる。このクリフ・ハウスから金門橋に至る約五キロの沿岸に、太平洋戦争中の金門湾防衛の砲座が延々と残っているのに驚いた。日本軍がここまで上陸するものと、アメリカが真面目に考えていたとしか思われない。そのあわてぶりと、生々しい戦争の傷跡を見つけ出して、私は思わずはっとした。

ゴールデン・ゲート・パークには、道の正面に勝海舟らの咸臨丸上陸の記念碑が建っている。これまでアメリカに渡ってからの十数日間、とにかくアメリカとはいったいどういうものだということで、つかみかかるような思いで観察を続けてきたが、このシスコに来ていきなり日米交渉という、別な視点から考えねばならぬ破目にぶつかった。

日本はアメリカから何を収穫し、何を失ったかということを、真剣に考えていくことを迫られた。それは今でも感慨のようなもので、考えは定まらない。

海、海、これが我々を結びつけたのだ。これからは海ではなくて空が多くなるだろうが、それにしても海舟だけでない。内村鑑三、新渡戸稲造、佐藤昌介、有島武郎、賀川豊彦、皆ここに上陸したのだ。

それだけでない、棄民のように渡ってきた日本人一世。性病の検疫には、一本の張り渡された縄を、若き夫、その妻、その子供までが縄跳び式にまたがされたのが、この町の港でおこった出来事なのだ。

日本にとってアメリカとはいったい何ものなのだ。とに角大変な課題だと思っている。

昭和四十六年三月二十八日

幻の大地

「冷害、飢饉、凶作、水害、自然と人間とがつくり出す脅威にさらされながら、しかし、土に住む人びとは、荒れ地の石の下からも芽生える、名なし草のように生きてゆく。」有名な久保栄の『火山灰地』、一九三〇年代の十勝の火山灰地農業を告発したドラマのモノローグの部分である。

三月二十五日放送のＮＨＫテレビ『幻の大地』―十勝離農者の記録―は、十勝農業に深いかかわりをもち、ひとしお愛着を持つものとして非常にショックであった。

そこには離農者という人間の社会移動の側面と、十勝農業の持続性という側面からの、二つの問題提起が行われているが、離農していった五人の老若農民の姿を、一年にわたり追い続けたカメラの非情性は見終ってからさらに頭の中を重くした。

果たして十勝の農業二十万ヘクタールは、一九七〇年代に於て幻の大地となるのであろうか。ドラマ『火山灰地』のラストに、主人公の雨宮が娘の玲子とともに、小雨の降る夜闇に向かって窓をあけ、再び十勝の野に白い火山灰が、静かに雨のように降りそそいでくると予感しているように、絶望的なものであろうか。このシーンの窓の下から声がして、「しの」にめんこい男の子が元気に生れたことを告げる声がする。新しい生命の誕生の告知だ。新しい時代への、歩みの産（うぶ）声が

したように、この十勝の大地に春がたくましく息づき、甦る大地として、希望にもえる十勝農業となり得るのだ。

十勝農業は決して幻の大地ではない。緑の大地、若い大地なのだ。生きがいある農業、農民の立場にたったメカニズムを確立することに、筋道をつけてゆかなければならない。

昭和四十六年四月十日

緑の週間

緑の週間がやってくる。従来、植林するのだといって山を根こそぎハゲ坊主にし、馬鹿のひとつおぼえのようにムダな地拵をしてカラ松を植林することに多大の疑問をもっていた。また、口を開けば「財産づくりだ。金もうけのために、農業の経済安定のために植林が必要だ」といった言い方を聞くたびに、胸くそが悪くなる思いがしてたまらなかった。ひとつとして国土を愛し、自然を愛する根性を感じたことがない。どうも豆づくり農業の地力収奪一辺倒のやりかたと共通した臭さが感じとられてしかたがなかった。

昨年、市の吏員採用で農業高校の林科生について面接したことがある。その学校の校庭にある林木について質問したところ、一人として答えたものがいなかった。答えられたのは実習林のトド松、エゾ松のことばかり。こちらも頭に来た。今日の林業教育というものは、パルプ資本に奉仕するための教育よりしていないのであろうか。恐ろしいことである。国土の崩壊、自然の崩壊は、こうした行政の考え方、教育のありかたの中にひそんでいるように思う。

たまたま、国立林業試験場の太田研太郎博士が役所を来訪された際、さっそく議論をふっかけたところ、スウェーデンの林業について話をうかがった。この問題意識をもってはからずも北欧や西

独の森林を、飛行機の上から、あるいはアウトバーンを走るバスの窓から観察することができた。

どうも、日本で、北海道で、自然保護といっていることと、北欧やドイツの自然保護とは、次元が違うということが少しわかりかけてきた。科学とはもともと冷静で実証的なものであるが、その根底にあって支えているものは、金もうけや、趣味的な発想ではなくて、真に国土を憂い、民族を念（おも）うの情によってささえられているものだ。緑の自然をまもること、育てることも、そのよってたつふるさとの土の生命にかかわっているのだ。森の土、林の土だ。土の生命を知ることが、緑の生命、自然の生命を知ることだと痛感されてしかたがない。

昭和四十六年四月二十八日

万物は流転する

ホノルル空港からアラモアナホテルに向かう途中に、中古自動車の展示場がある。この中古車の群れにポツンと、黄色くペンキで塗りたてた変わったものがおかれてある。教えられないとちょっと気がつかないが、これこそ日本軍が真珠湾攻撃に使用し、不覚にも裏オアフの海岸に誤って座礁し捕獲された特殊潜航艇である。三十年の歳月は真珠湾の戦いの日を風化させ、こうしたところに戯画化されて、むなしくその骸（むくろ）をさらしているのである。

私は苫小牧の新岡さんを誘い、宿舎の聖書を持ち出し、太平洋戦争で日米共に真珠湾で戦没した英霊におまいりしようと港から船に乗りこんだ。船には五十人に余る客がいたが、日本人は私たち二人だけであった。船は湾に向かって進んでいるが、港口はどこかと観望しても判別に困難な地形である。特殊潜航艇の苦闘が目に見えるようであった。雲がきれて背景の山の姿が見えてくる。それはありし日の海軍航空隊が、鹿児島の桜島山にひそかに攻撃訓練をかさねた面影の山である。雲の動き、山のたたずまいを見ていると、その日の若者たちの心の高ぶりのようなものが伝わってくる。

やがて船は湾内に進入する。醜悪な赤さびた巨腹を見せているのは標的艦ユタである。フォード島を一回りすると、いまだにどす黒い重油を流している沈没艦の上に、百数十名の遺体を未収容の

真珠湾の戦艦アリゾナ

まま、白い記念館が建てられているのが旗艦アリゾナである。このため今も現役の戦艦として取り扱いを受け、白い水兵服姿の歩哨（しょう）が歩きまわっているのが痛ましく目に映る。船上の人々はいっせいにたち上がり、今までの観光気分のざわめきがピタリととまり、声もなく艦に注目する。私は聖書に手をおいて黙とうをささげた。当然日本人としての礼儀である。

軍港の中は、乾ドックのいくつかが見え、海防艦らしいのが一、二隻見られる程度で、抜け殻のような港内であることに驚いた。真珠湾は今は観光地と化し、ヒッカム飛行場にその基地を移しているようである。まさしく、万物は流転すると、心に深く思った。

昭和四十六年六月二十三日

柳田学の展開を

北欧の文明とか文化を実見して、心中深くかげをおとしたのが柳田国男の学問で、そのことは当時の報告書の末尾にしるしておいた。生来の怠情の故に少しも研究も進まないのが残念で、切に後学にまつものである。

このごろ北方圏研究会というのがあってその報告を聞いた。フィンランドの人々の寒圏における住衣食のレポートである。大変有益なものであったが、そうした智恵を生み出した、集団の内発的契機が背景にあるはずで、そのことが聞けなかったことが惜しまれる。

北海道では和人の移住以来、南京下見板張りの建築がつい先日までの建築の手法で、札幌のめぬきの裏通りにも沢山あって現に人が暮している。大正期には、帯広の白壁の家が目に美しいと賞賛され、外来人には異色に映ったものだが、それとて壁の収縮でスキ間風を呼びこむ間壁の手法であった。信州人も相当入りこんでいるはずだが、あの長野県北部の美しく合理的な大壁の手法まで何故発展させ得なかったか。これに類するものが十勝にないという訳ではない。帯広の大通りには軒を並べて土蔵造、石造、煉瓦の建築はたしかにあった。しかしそれは表（たな）であって、奥にあたる住宅に及ばないことは三井金物店の現状を見ればよい。蔵屋敷といったものをついに生まなかった。

寒圏の冬の暮らしの基本は採暖具でありその燃料の取り扱いできまる。その変化と対応の歴史である。フィンランドの人々の生活圏は森林の国といわれる。北海道も森林王国である。現に無尽蔵の森林資源のために道路が必要だという町村長たちの主張の口はまだ乾いていない。共に無尽蔵の森林資源の中に生活の本拠を求めながら、しかも木が凍って裂けるという共通の気圏の下で、この森なり林なり木なりと、そこに住む人々のかかわり方の差は何なのか？　つまり、文化の違いの根底となる、人々の心と行動の性向からしっかり押さえてかからないと、暮しの基本は創造されないということだ。啓蒙だけで解決するものではあるまい。その意味でも柳田学を押さえておく必要がある。

追記

長野県北部の町、中野市にある有名な作曲家中山晋平先生の旧宅に泊めて頂いたことがある。たまたま詩人高橋渡君が旧宅に下宿されていた縁である。お陰で信州北部の白壁づくりの家並の美しい集落に感銘したのである。西も東も急峻な山にかこまれた峡谷にあって、白、白の集落は、その空間を広く感じさせるのだ。信州人の生活には、ちゃんと文化感覚があると感銘したのである。

昭和五十四年四月十五日

オールド・トリーズ・イン・タウン

いったいまちづくりの骨格ともいえる都市計画の仕事は、土木学を学んだものの領分とされている。ところがこの学問が、明治のはじめオランダ人によってもちこまれたのだが、何を血迷ったか土木学と名づけたことは完璧な誤訳であった。木の上に土をおっかぶせる、そのことから頭が狂っていることがよくわかる。木土学というのであればまだ筋が通る。だから土木学をやった連中の樹木の取扱いを見ればその狂っていることを指摘するのに、街中その材料を拾うのに事欠かない。樹木の自然に即した親切な仕事は絶対にしていないことだ。

辞書にはシビル・エンジニアリングとあり、土木技師とはシビル・エンジニアとなっている。日本の土木学をはじめた学者の頭の悪さがこれでもわかる。シビルには土木の意味はない。「市民の、ていねいな、礼儀正しい、文明」などとなっている。それが本当なのだ。本来、市民生活の福祉を高めるための学問のことだが、日本ではブルドーザーで、無惨にもそこにある自然をぶちこわし、踏みにじっていくのが土木学だと教えられてしまったのだから始末が悪い。

帯広川のへり大通橋に近いあたりに今でも「あかだも」の巨木が何本か残っている。一本は無惨な姿に変ってしまった。このあたりにあった「あかだも」「やちだも」「いたや」の巨木が明治二十

年代に、今の土現の前を基点として、十勝原野と帯広市街の殖民地区画が始まった時の「目印」になった記念すべき樹木であったとこのごろ帯広市史に書かれている記事を見つけた。

イギリスでは「オールド・トリーズ・イン・タウン」というのがまちづくりの基本理念となっていて、まちをつくる時は、道を曲げてでも、自然の樹木を生かしてコミュニティの核とするのが常識だと磯村英一という都市学者がいっている。とすると、今残されているあの帯広河畔の「あかだも」こそ、まさに「オールド・トリーズ・イン・タウン」そのものではないか。百年記念事業として何かをやろうというのであれば、この「あかだも」の巨木を中心に、周辺の土地、建物を買収し、二世代、三世代の「あかだも」「やちだも」「いたや」の若樹も植えて、公園にできないものか。それにしても、帯広十勝の発展と推移をじっと見つめてきた老樹の取扱いとしては、現状あまりにも非道すぎないかと思うのであるが、いかがなものであろうか。

昭和五十四年五月二十日

証言・太平洋戦争

『歴史と人物』八月号が「証言・太平洋戦争」を特集し、当時の樺太師団参謀長鈴木康生の敗戦経過記がある。この証言で明らかになったことは、『稚内百年史』には樺太師団の解体を八月三十日としているが、事実は二十三日だということである。ところが筆者の所属部隊は八月三十日に至ってようやくソ連軍が上陸してきて武装解除されている。師団崩壊後も一個大隊以上の兵力が依然として編成を保ち、万一ソ連が北海道に上陸した場合、これを背後から脅かそうと大まじめでいたという悲喜劇が明らかになったことだ。しかも師団首脳と北部軍との通信連絡がなお保持されていたというナゾである。

鈴木証言のなかでこういっている。「ある日豊原の街のなかでソ連の少佐と出会った。少佐いわく『ソ連人は夏冬一着だけで暮しているのに、豊原の家の中には家具や衣類が満ちみちている。しかるに日本軍の装備の貧弱さ、兵力の少なさはなんだ』と威張られ、返す言葉がなかった」というのである。

この少佐の一言、夏冬一着の暮らしというのは本当で、彼らの優れた特性である。ロシア人の意外にも強じんな徹底した合理性と、酷寒地に対する知恵の深さである。到底われらの対応できるも

のでないことを痛感した。日露戦争で勝った勝ったといってはバカにし、今もなお正しく理解しようとしない遺憾さである。彼らは貧しいのではなくてその方が合理的であるからなのだ。鈴木証言の裏にひそむ軍官僚の根性である。皮相を見て真実に迫ろうとしない単細胞的態度である。

彼らの装備の強力最新鋭と物理力の充実は、鈴木はいやというほど目にしていたはずである。筆者はそのことよりも、補給輸送を絶対確実にしない限り動かないという戦例を眼前にしてウナる以外に言葉がなかった。次にソ連兵士の徹底した衣食住の合理性と、そのためのムダな補給輸送をしないことである。被服の単純さと耐寒能力の抜群さ、野性的な行動力である。水の扱い、食糧、野外宿営、すべて驚嘆するばかりである。どこかの国のように、今も複雑多様の被服食糧の準備とその補給のため膨大なエネルギーは絶対に使っていない。耐乏ではなくて当然視しているソ連兵士の姿に、怖れを感じたというのがホントウである。

兵士の略奪についてよく時計の話が出るが、アメリカ兵も全く同じであったことが同じ雑誌の「焦土のヨーロッパ逃避行」に詳細に記されているので、兵士の時計略奪は社会体制とは全く関係なさそうである。戦争とはそういう愚かしいもので、それ以上のものではないということである。

昭和五十四年七月十五日

石坂洋次郎先生騒動記

Nの個展が帯広で開かれているので出かけた。そこでひょっこりMと会い、久し振りの出会いなので在パリの洋画家増田誠＊の近況などが話題となった。話は一転して「大樹の石坂を知っているだろう。小説『若い人』『青い山脈』で名を売った、作家の石坂洋次郎のおやじが開拓した部落だ。洋次郎が、そのおやじの伝記を書きたがって、資料集めに出かけてきたいといっている」と、まるできのうでも聞いてきたようにさかんにくすぐる話しぶりである。

こちらはすっかりのせられて、洋次郎が戦前主婦の友社にかん詰めにされせっせと原稿を書いていたころ私と同じ屋根の下で毎日顔をあわせていたので、多少の縁はあると思い、洋次郎も記憶のあるはずのI女史の名前などを挙げて、「もしこちらにお出かけになるのであれば、できるだけ現地での受け入れ態勢をつくりたいが、お考えをお聞かせ願いたい」と手紙を書いた。

返事に曰（いわ）く「思いやりのあるお手紙をいただき感銘ひとしおなものがありました。小生、七十九歳、心身共にすっかりボケてしまい、何をしようという気持ちにもなれません。……貴方もお元気で。」これでは一体どうなっているのか、キツネにつままれたようなものである。

その後、ことの起こりは一切はMの早のみこみと思い違いから出たことだとわかった。しかし、

石坂部落の開拓者石坂善七は、洋次郎の父忠次郎の姉婿であって、決して無縁の人ではなかった。

小説うんぬんの話は、終戦間もなく文芸春秋社の地方文化講演で小説家の一行が渡道した際、そのなかに洋次郎がいて、人に広尾線の石坂駅の由来を話してきかせた。同行の久米正雄が感心してそれは君が小説に書いた方がよいと勧めたが、伝記は性にあわないのでと、答えたそうである。

後に、善七の子の亀翁が同じ話をしかけたことがあるが、同じような答えであったという。これでは行ったと来たとの話のくいちがいである。おかげで、またもや長々と平身低頭のおわびの手紙を書く羽目になってしまった。

石坂善七は、明治二十八年から石坂で蒸気機関を据えてマッチの製軸工場を経営し、三〇〇〇町歩の土地貸し付けを受け、開拓農場、畜産業にも手をつけていた。ところが三十三年、大阪での所用を終えて帰道の途中、十月七日大型台風に遭遇し、栃木県下の帛川の鉄橋上で鉄橋、列車もろとも濁流中に押し流される大事故に遭い惜しくも死没した。わずか六年で事業は挫折、四十一歳の若さであった。しかし石坂は地名として今日に残っていることである。

昭和五十四年八月二十六日

永六輔に物申す

先頃のＮＨＫテレビでの、「歴史の招待」の番組で『清水次郎長伝』があった。富士裾野の開墾地での大政小政以下の次郎長一家の勢揃いした写真に就て、次郎長は新しがり屋でこんな写真を残したのだと永六輔がひやかした言いかたをしているのを聞いて、これはとんでもない。永の不勉強の発言だと思った。

画面にも紹介されたが、神田伯山の講談『清水次郎長』（往年朝日新聞に連載されたはずで、昔はこういうのが熱狂を以て愛読された。私も小学生乍ら毎日読んでいた。昔の新聞は総ルビつきだから小学生でも面白く読めたのである）以下もろもろの次郎長伝のタネ本となった山本鉄眉著明治十七年興論社出版の『東海遊侠伝』の著者こそ、盤州平藩士天田五郎のことで、山岡鉄舟の奨めで次郎長の養子となり山本五郎号して鉄眉、（眼光けいけい、芋虫のような眉をしていた）後に京都天龍寺滴水禅師の高弟となった歌僧愚庵である。短歌革新の出発にあたり正岡子規に強い影響を与えた人である。

愚庵は天性の歌人詩人であったが、戊辰戦争の渦中で行方不明となった父母と妹を探し求めその生涯の半ばを費やして諸国を遍歴した。その方便として、明治十二年下岡蓮杖の弟子写真師江崎礼

二より写真術を修得した。十三年小田原で試みに開業、好評を博して腕に自信をつけた。十四年前述のように次郎長の養子となり、十五年夏から富士開墾地に入って監督の任にあたっている。次郎長一家の写真はこの時山本五郎こと天田愚庵によって撮影されたものである。鉄舟が愚庵を次郎長に託したのは、愚庵を深く愛し、父母の行方を探す情報蒐集の便を考えたからである。

この愚庵に次のような歌がある。

十勝国にまかりたる時
十勝山夕霧ふかく立ちこめて我が乗る馬の足もすすまず

大坪草二郎は『愚庵遺稿』を考証して、この歌を初期の作、明治九年としている。筑前福岡藩士福本日南＊の実弟、帯広在住の安田厳城＊が執筆したという明治四十年刊の『十勝史』には、明治二十一年とある。当時十勝川河口大津で漁場を経営していた愚庵の少年時代の親友江政敏＊を訪ねた時の歌という。

ところが愚庵が滴水禅師より剃髪得度を受け既に僧籍に入ったのが明治二十年四月。二十一年には大恩人山岡鉄舟の死去。滴水禅師の山陰巡錫中の修学院離宮の林丘寺の監護など相当責任の重い立場にたち、身辺多忙を思わせる年で、二十一年渡道の歌とするにはなお疑問の多いように思われてならぬ。尚、京都の林丘寺とは修学院離宮の中に建てられていた由緒ある寺院である。

昭和五十四年九月二十三日

天田愚庵のこと再び

明治三十五年七月北海道庁発行の『殖民公報』第九号に、史伝として「依田勉三履歴」がある。筆者の名は記されていないが、いわずとしれたこの雑誌の編集者河野常吉であることは間違いない。次のような記述がある。

「明治十七年に至り、勉三は、移住以来の実験により、深くかんがみるところあり……社務多忙のため、農耕開墾にもっぱらなるあたわず……当時、交通不便な大津の如きも、汽船の航路未だ開けず、ただ不定期の帆船、時期を見はからって、寄港するのみなれば、貨物の運搬、往々その時を失し、困難せることしばしばなるを以て、大津に於て社務を代理せしむるの必要を感じ、よって同地の漁業家江政敏に、本社資金を貸しつけて、社用を弁ぜしめ、一は利殖をはかることとなせり。

しかるに同年勉三不在中、大津は大不漁にして、人民の騒擾はなはだしく、江政敏、また一大損失をなしたるを以て、さきに依託した社金五〇〇〇余円は、その用をなさず、帰道のおそきを悔ゆれども及ぶべからず、まさに、事業は一頓坐を来さんとす」

はからずもここに天田愚庵の親友、江政敏の名が現われている。このように江は、十勝内陸開拓を目ざし移住早々の依田勉三に対し大損害を与えたことを知った。この結末がどうなったのか、手

許に資料はない。

明治九年愚庵二十三歳の時、当時函館に住む江のところに身を寄せたが、気候の激変に会い肺をおかされて倒れる。父母妹を探し求めての渡道であったが空しく東京に戻る。しかしこの時の肺患が終生固疾の因となったという。

明治二十五年愚庵は師の滴水禅師（恩人山岡鉄舟もまた滴水より印可を受けた）の許しを得て、修学院離宮の一廓である林丘寺を出て、京都清水寺の産寧坂に地を卜して小庵を建て、独坐観照の生活を営むことになる。この小庵は四畳と二畳のささやかなものであったが、この費用は一切江政敏の喜捨によるものとされている。

江政敏については、身の丈長大、毛髪たつごとく、しかも性情温和、胆力のすわった人物で半面細心の人であったと伝えられている。江は晩年札幌に大規模の紡績工場新設の計画をたてたが、その事業の緒につき、半ばにして腸チフスを患い、明治三十三年十一月、札幌東辰病院でその生涯を閉じた。

愚庵は江に遅れること四年、三十七年一月、滴水禅師遺贈の法衣を着て、法弟ら読経のうちに莞爾として示寂したという。享年五十一歳であった。

昭和五十四年十月二十八日

パリの石畳

書店の新刊書の中に見た一冊の本『パリの石畳』。朝日新聞パリ支局長和田俊がパリ在住四ヵ年の暮しの中から、日常の生活に即して体験と感想をまとめたものである。

旅行者の目で書くものとちがった、生活者の目が光っていて鋭い。非常に勉強になる。かつてロンドンに旅した時、サリーをまとった印度婦人がその民俗衣裳を身につけたまま胸を張り、真直歩いているのを見て、植民地領有の帝国主義国家とは何であるのかと、考えをつめたことがあるが、若者のパリ体験はその影の濃く、いろどり深いものがあることをはじめて教えられた。

ヨーロッパ諸国が一方で地盤沈下を防衛するためEC化を進め乍ら、我々の目にも明らかに映る各国、各都市の頑なな異質性、自律性に就て感動するのだが、著者の観点に触れて興味をひいた。

ところで、この本のブックカバーなのだが、確かに見覚えのある絵なのだ。佐伯祐三とユトリロがその中で呼吸している絵だ。奥付を見たらやはり増田誠だった。パリを描き続ける日本人画家として五本の指に入っている。パリ画壇では高い評価を受けている。

昭和五十一年の暮「在パリ二十年記念展」が全作品を集めて小田急デパートで開かれた時、偶然この会に出席して、彼の初期からの作品を見ることができた。

戦後私がシベリアから復員して十勝清水の町で増田とばったり出会った時は、全く驚いた。彼は山梨県都留市の出身だったからである。まさかと思っていたが、戦後開拓者ということで清水に落ち着き、その頃看板屋をやっていた。

増田は幹候が私の一期上で、近衛師団野戦重砲の出身で、宗谷要塞重砲兵連隊で将校として一緒であった。連隊一の喧嘩男で彼の被害を被らない将校はいなかったぐらいである。直情径行の人である。彼の指揮刀は鞘におさまらず、いつもとび出していて有名であった。

その増田の絵を見て気がつくことは、私の知っている性格とは真反対で、物凄い集中力と持続力に驚かされることである。「水の増田」ともいわれるほど、セーヌやアムステルダム運河を描いた水面を見ていると、つい、その水に吸いこまれてしまう。たしかに巧者である。

絵描きは「描いているから絵描きなのだ」といって毎日八時間は描いているそうである。彼ほどになっても画筆を放さぬ努力に、増田の今日の大成の秘密があると知った。人は道によって尊しである。増田の絵は釧路の栗林ビルにある美術館に収蔵されていて、いつでも開放されている。

昭和五十四年十二月九日

北京の歓談

「江戸、隅田川の水は、ロンドンのテームズ河に通ず」と喝（かっ）破したのは寛政三奇人のひとり林子平だが、帯広、十勝川の水は北京の永定河の水に通ずるというお話をひとつ。

このたびの大平首相の中国訪問で、十二月五日の歓迎宴の席上、両国首相のあいだで都市問題が話題となりひと時花を咲かせたと共同通信の記者が報じている。

華首相いわく「首都の人口は、二十万人か三十万人が適当と思っています」と。ちょうどいま北京の空はスモッグの時期で、たった人口十八万人のころの札幌でさえスモッグで苦しんだのだが、七〇〇万人の北京のそれはまことに異様で、その物すごさに驚かされるのである。

私が第一回訪中の際宿舎は北京飯店であった。丁度十一月、ホテルの屋上に出て見て北京の街並をみようとした。驚く勿れあたり一面のスモッグ（煙霧）である。僅かに天安門のある紫禁城の青い屋根瓦が、あたり一面のスモッグの上に頭を出しているのが見えただけである。今に思い出すのである。当時、藻岩山から見た札幌の町のスモッグなどより比較できないほど非道いものであったことを思い出すのである。

華首相が日本はじめ、アメリカ、ヨーロッパ諸国を歴訪し、初めて海外の風にあたり、都市の在

り方を深く痛感したのではあるまいか。

公害問題、都市問題の先進国首相として大平さんは田園都市構想を語り、「一人の市長が掌握できる規模は、人口が二十万人ないし三十万人が適当と思います」と華さんに相づちをうち、さらに過度のモータリゼーションは禁物ですと、経験のひとくさりを語ったというのである。

この記事を読み、十勝の人間なら、はてこの語り口はどこかで聞いたことがあるぞと思うに違いない。それはそうである。二十数年間も前から「まちづくりの目標は、近代的田園都市を目指す」ことを発想し、「一人の市長の目が届き、市民と対話のできる都市の規模は、人口二十万人どまり。それ以上に都市を大きくする必要はない。そのために、街を森の緑で包囲する」と言い切ったのは、二十年近く帯広市長をしていた吉村博さんにほかならなかった。

吉村さんの長い間の提唱とその発想がだれかの口を通じ入れ知恵され、大平さんの発言となったことはそのブレーンの顔触れをみれば大よそ察しがつくというもの。

たまたま世界の四極か五極かしらないが、少なくとも国際的に影響力の大きい両国首脳の歓談のなかで、報道関係者にも強く関心をひいた話題となったことは愉快なことだ。

体制とか社会とか党派の違いを超えた市民生活の在り方として、具体的な発想として、問われた問題である。ご丁寧にも「田園都市」の看板をおろしたどこかの市があるのだが、石油文明の終局を迎えていよいよ奇妙なことである。哲学のない哀れな小商人共よといいたい。

昭和五十四年十二月二十三日

永六輔の返事と江政敏

ＮＨＫテレビ「歴史への招待」で、清水次郎長が富士山麓開墾地における大政小政以下一家勢揃いの写真を残したことは、次郎長の新しがりやの故と永六輔がきめつけたことでさきにその反論を書き、コピーを永に送っておいた。早速折返しの返事がきた。

―写真の件、次郎長の新しがりやとくっつけて説明不足。反省しています。愚庵については『愚庵の世界』を手にいわき市、京都の五條坂と歩きまわりました。（山口崇演ずる主役でしたので）とりいそぎ。

師走二十九日　永六輔

ということで、一件落着。

ところで、歌僧愚庵にとって生涯の協力者であった江政敏について、十勝に団体入植早々の晩成社依田勉三より預かった大金五〇〇〇円を、大津漁場大不漁のため忽ち損失し勉三を窮地に陥らしめたことはさきにしるした。

こんど河野常吉編著の『北海道史人名語集』を見ることができ、このなかに「江政敏」の項がある。

曰く「実業家なり。嘉永四年、平藩に生る。明治九年十月函館に移住し餅屋を営む。十一年行商となり各地の状況を視察し、十三年十勝国大津に転住し、雑貨店を開く。忽ちにして利益を得たるを以て、翌年大津川尻の鮭漁場を購い、且つ土人漁場を賃借し、漁場を営みしも、僅に鮭七十余石を得しに過ぎず。

十五年、更に資を借り経営せしに、豊漁にして八〇〇石を収む。十八年凶漁のため再び資産を蕩尽せしが、十九年豊漁にして数万金を得、負債を完済してなお万金を餘し、翌二十年亦大漁あり」と。

これで十九年には江は巨利を博して、当然晩成社よりの負債五〇〇〇円に十分の利息を付して勉三に完済したものと解される。さらに「二十年有志と謀り、釧路十勝共同汽船会社を創設する。

二十一年函館魚菜会社を創設す。十勝旧土人管財人となる。是より先き、居を函館に移し、次で東京に移る。三十一年、釧路国雌阿寒硫黄鉱山を買収し、女婿前田吉彦に経営せしめ、三十三年、前田正名、大和田荘七等と謀り、釧路製紙会社を発起して、社長に挙げらる。」

この年、江は札幌で急逝する。江は、今日の阿寒湖のぐるり全周の森林を保有する前田一歩園の前田正名と、深い交渉のあったことがわかった。江政敏の生涯は、私にとっていよいよ興味深いものがある。

昭和五十五年一月二十七日

川村秀雄先生を悼む

五年ほど前から、毎年秋に行われる北海道教育功労者の表彰式に道教育委員の前歴者も招待されるならわしとなった。気境教育長の配慮からである。ちょうど自由の身になったことでもあり案内があると出かけていくことにしている。

おかげでタイムス社会長の川村秀雄先生とお目にかかり、いちばん楽しくお話できたのもこの会合のせいである。

川村先生は私の十勝農学校時代の大恩師である。先生は口ぐせのように、「君、僕は一〇〇歳まで生きることにしているよ」と、例の背筋をきちんと伸ばしたポーズで私に語りかける。「先生なら、たしかに一〇〇歳までお元気で活躍できますよ」とお答えしていたものである。事実いつもつやつやしたお顔だちで、老いこんだ気色というものはひとつも見られず、五十年前のこちらがヤンチャでずいぶんとご迷惑をおかけした時とお変わりにならないかに見えたからである。

その先生が急逝されたことを新聞で知り、人の寿命の無情であることを深く痛恨し、驚愕（がく）したのである。

先生は若くして十勝農学校の教師として赴任し、二十数年にわたり北海道農業の人材育成にあた

られたのである。その恩恵を受けたもの無数である。

先生は若い時から農業の専門書を著しておられた。昭和のはじめごろは、今の東一条十八丁目にお住まいされていた。昔は文化街といって、白壁住居の多い、ハイカラな住宅街といわれていた。とはいうものの田園風景で囲まれた、そのころの帯広としてはまったくの郊外であった。

私の記憶にあるのでは『家庭菜園の秘けつ』『果樹園芸の手引』などであるが、不思議と大衆書として広告不要のベストセラーになっていた。広い愛読者層をもっておられたのである。

先生には白い実習服がいちばんお似合いであったように、著述が実技を中心として親切であったからである。そのころの本としてはものすごく紙質がよく、写真が鮮明で、神経が行き届いていた御本であった。

文化街のド真ん中にあった見事な広いブドウ園は、先生の指導でできたブドウ園でデラウェアー種をはじめ、各種のブドウが、秋になると実りもたわわに収穫されたころのことを思い出すのである。心からごめい福をお祈りするばかりである。

昭和五十五年二月二十四日

萬葉僧仙覚律師のこと

萬葉僧仙覚とは、鎌倉の将軍藤原頼経の頃、その正室竹の御所の廟所となった新釈迦堂の供僧職に任ぜられた僧である。この堂の供田（寺領）とされたのが埼玉県比企郡麻師宇郷（猿尾、増尾とも記す）である。

仙覚を何故萬葉僧というのか。萬葉集は大伴家持（七八五没）によって編集されたといわれ、以来その特異の萬葉仮名による記述の故に、後代読解に苦辛するところが多かった。天暦五年（九五一）村上帝の御代、内裏後宮の梨壷の女流五歌仙によって訓読の作業が進められ、これを古点といい、その後暫く次点の作業があったが久しく絶えた。

それに発憤して萬葉集の研究に着手したのが、年僅か十三歳（建保三年一二一五）の修学僧仙覚であった。仙覚はその頃、天台宗関東別院といわれた麻師宇郷近くの慈光寺の学僧であった。その頃の慈光寺は僧坊七十五、七堂迦藍を誇る源頼朝以来の祈願寺でもあった。この慈光寺には、紙本法華経三十三巻、後鳥羽上皇はじめ公卿門跡の書写になる屈指の装飾経（国宝）があり、安倍小水麿によって貞観十三年（八七一）納経された紙本墨書の大般若経一五二巻（重要文化財）があり、その由緒は古い。

寛元四年（一二四六）、将軍頼経の命により最初の萬葉集校正本を作った。さらに、難解一五二首

の歌に訓点を加えて、建長五年（一二五三）新点本を後嵯峨帝に献上した。弘長元年（一二六一）再び校勘の作業をおこし、文永二年（一二六五）二度目の校定本を完成、同時に、萬葉集注釈を起筆、同六年六月完成した。時に年六十七歳。実に五十数年にわたり生涯の大半を万葉集校註に心血を注いだ古今未曾有の人であった。

この仙覚の萬葉研究を可能にした秘密が麻師宇の里と私は見ている。慈光寺が修学道場として書庫の役割を果たしていたこと、経学資材である和紙の生産地が天平の古よりこの麻師宇の地であったことである。昔も今も麻師宇郷（現小川町）は和紙の産地として伝承されている。

私は先年、木呂子氏の在名以前猿尾氏を称え、畠山重忠の一族であるとの由来から、その考証を小冊子『萬葉僧仙覚と猿尾氏』にまとめ中世史研究の史家に送っておいた。それがこのたびいろいろ話題になっているのに驚いている。

昭和五十五年三月三十日

萱野茂『アイヌの碑』によせて

昭和二十七年十勝沖地震で平取町二風谷小学校が倒壊した。そのあとコタンの長老貝沢善助、正、松太郎の三氏が、穂坂校長と共に訪ねてきて、学校復旧に力を貸せというのである。

私の伯父西田彰三（小樽高商）は余市フゴッペで発見された洞窟中の線刻のことから、「アイヌの啄木」といわれた違星北斗と、昭和二年ごろ小樽新聞紙上で学術論争をしている。アイヌには文字はなく、また絶対に落書きはしないということで北斗は否定し、伯父の負けであった。北斗の没後彼の遺稿集『コタン』を世に出したのが、私の師、後藤静香である。北斗は同族更生のため生涯を捧げた人で、平取にもいてバチェラー八重子に協力している。後藤静香は北斗に期待するところ大きく、最後まで経済援助を続けていた。

北斗の歌に「平取に浴場ひとつほしいもの　金があったら建てたいものを」があるので、二風谷の皆さんに「どうです。お風呂のある学校を建てませんか。ついでにトイレは水洗便所にしたいのです。皆さんが協力して下さるなら、既に村の予算化している木造価格の予算の範囲内で、鉄筋ブロック建築にしましょう。しばれない暖かい学校にしませんか。ついでに違星北斗の歌碑も建てたいのです」という条件を出した。一同賛成だという。それから私の、二風谷の現場通いが始まる。

この学校は黒田彦三校長が三十年間生涯を終えるまで在職した学校であり、吉田巌先生の遺著『心の碑』にも記されているように、明治三十年代に既に独立した図書館をもっていた。とにかく浴場、水洗便所のある赤い屋根のトンガリ帽子の塔のあるハイカラな小学校が、忽然として沙流川の畔りに昭和三十年、実現したのである。

さて歌碑のことで問題が起きた。当時の二風谷校下の雰囲気は、おおよそアイヌを意識させるデザインは一切まかりならぬという。歌碑の設計は田上義也、アイヌ紋様は河野広道の選定、北斗の歌二首は金田一京助先生の揮毫、既に札幌で石師によって刻まれていた。ここで私の苦悩がはじまる。何でアイヌがアイヌ文化を否定しなければならないのか。アイヌ文化を正しく主張することこそ自立への道でないのか。北斗の生涯の叫びはこれであった。こんなことで学校は立派にできたが、北斗の歌碑の完成は昭和四十三年に至るのである。

時間が解決してくれた。萱野茂さんの出現とその活動によってである。こんどその萱野茂さんの『アイヌの碑』（朝日新聞社刊）が出版され、一読して感無量なものがある。萱野さんのいう神人共食のアイヌ文化の精神こそもともとシャモ（シサム）文化にとっても祖型である。シャモの失ったものをアイヌ文化が伝承したことを、シャモは思い知るべきである。

昭和五十五年五月一日

エエンネエンヌプリの異相

一昨年廃校になった御影上旭小学校の旧職員住宅に住むワイズメンズクラブの池田先生と、この地帯の五十年前の土地の様子を話しているうちに、ふと気のついたことがある。

昭和初め、この学校の南側に深い沢があって、飲料水はじめ生活用水はすべてこの沢を流れる泉を利用していた。その深かった沢が今は姿を消し、ただの湿地帯となってしまった。僅か半世紀の間に沢を埋めてしまうような土砂の流亡が、この上流からおこったことを意味する。

そこで想いは、この扇状地を形成し、頂部をなす山塊剣岳（昔はエエンネエンヌプリといっていた）に及ぶのである。この山は海抜一二〇〇メートル、手ごろに登れることもあって早くから山岳信仰に結びつけられ、その異容が平野部に近く迫り、人々に親しまれてきた。

ところでこの山だけでなく、佐幌岳に始まり、狩勝・日勝峠は勿論、南に続く諸峰に向けて、深成岩である花崗岩が山々を構成し、黄金道路に臨む白い断崖となって海に落ちている。御影は昔はサネンコロといい、どうも語呂がよくないとのことで、花崗岩を御影石と称することから、これに因んで改められた。（同じころ、浦幌の手前のシタコロベが新吉野に改称されたことが、共に酒の肴にされたことを思い出すのである）

上旭の地名も旧は上渋山といい、渋山川の上流部をなし、槲、楢の大樹海におおわれていた。明治の末ころ、槲の樹皮がタンニン原料として目をつけられ、あっという間に皆伐され、その跡地に小作人を入植させた。昭和のはじめには、まだ当時山子をした記憶を持つ人々が住んでいた。

さて同じ花崗岩の連峯のうち、この山のことを考えてみて、どうも氷蝕地形とは違った趣きに思えてならぬのである。ある時期、明治も早くから山火事の洗礼を何回か受けているように思うのである。鹿猟に入ったシャモの仕業と深い関係がありそうである。

さらにその後の開墾期と続いてしばしば山火事をおこし、これが稜線まで燃えあがっては、偏西風によって妨げられ、そこで火がとまる。稜線に近い針葉樹林は壊滅する。そのことが風蝕分解と崩壊を進めて土砂の流亡速度を早めた。後々、この土地の生活の困難をもたらすことになり、過疎を促進したといえるのである。そういう角度からこの山と扇状地の関係を、いろいろ今思いめぐらせてみるのである。

昭和五十五年六月一日

畑ちがい

一

私は、今まで十勝農業を「畑作」として表現しいささかも疑念を持つことがなかった。ところが金田一春彦は、『日本語の特質』の話のなかで、中国には「田」の字がすべての平坦な農耕地を意味し、日本語でいう「タ」とか「ハタケ」の区別はないというのである。

そこで国語辞典（旺文社）をみるとこう書いてある。「田」は、稲を植える耕地。水田、陸田とともに田で、稲作の土地利用に限定して使用されるという。「畑」は、草木を焼いてそのあとを開墾したはたけ、とあって、これはあきらかに焼畑に限定した文字である。「畠」とは水のないはたけ、田に対して本来の「ハタケ」を意味するという。しかも「田」は漢字であるが、「畑」も「畠」も漢字ではなく、中国にはない文字で、国字といい、日本人の意識からつくり出された文字であるというのである。

こうなると、十勝の土地利用は焼畑ではないから、厳密にいえば畑作ではなく畠作と日本語としては表現すべきだということになる。慣用としてもまったくの間違いで、「畑ちがい」の畠であったことになる。

なるほど、田に火扁がついていることはもともと焼畑農耕に由来するもので、古来日本は稲作文化が中心とされながらも、相当ながいあいだ焼畑が持続していたことになる。（中国ももともとは焼畑から出発したものであろうが、焼畑をするような森林を、華中の平原から数千年前に早くも失ってしまったことを意味する。）

十勝農業の担い手となった開拓者の歴史を調べていくうちにわかってきたことは、その主力となった岐阜、福井、石川、富山からの移民の先駆者たちももとは水稲農耕民で、零細農耕の脱出から十勝移住を企てたものとこっちが勝手に決めてかかっていたが、どうもそうではない部分が大きいようであり、今までの町村史もそのことに深く注意をはらっていなかったようである。少なくとも明治初期については十分調べる必要が出てきた。

ズバリいうと、明治二十年代の工業化開始の波にのって自然破壊を進めることによって、自らの生活をも困難にして、北海道移住を余儀なくさせた疑いが強く出てきていることである。先に記した県ばかりでなく岡山、広島、島根、鳥取の諸県出身者についても、瀬戸内海の製塩、砂鉄採取、窯業と深くかかわりあっているようである。

明治なって各地で鉱業が起ると、製煉に必要なエネルギーとして木炭それもカロリーの高い堅炭の需要が増大し焼畑地帯に炭焼が盛んになる。このことと焼畑地帯の山が荒れたことも見逃せない。筑豊炭田、常磐炭田、幌内炭田の開発によってコークスが生産されるようになるまで続くことになる。

昭和五十五年八月三日

二

オランダの治水技術者デレーケが明治政府に招かれ、お雇い外人として日本にきたのが明治十一年である。彼がはじめに手がけたのが木曽川、長良川、揖斐川の三川改修工事であった。この工事は明治二十年に始まり、三十三年に及んでいる。

彼の調査は、まず三川の源流から徹底して手がけていることである。山岳部まで踏み込んで、その森林植生をはじめ、流系の実情を見きわめている。当時は地図も十分調整されていないなかで、彼の治水、利水についての鋭い着眼と行動力に驚くのである。そのトータルな目に、ホントウの科学を学んだものの心を感ずるのである。（私が彼のことをあえて土木技術者としるさないのは、今日でもわが国の土木技術者は、川のことは、川の源流にまで踏み込んで、川に聞こうとしない単細胞的なやりかたに腹をたてているからである。）

彼が数次にわたる上流地域調査の結果、そこに見いだしたのは、広範囲にひろがる自然破壊としての焼き畑農耕の展開であった。もちろんヨーロッパ農業にも遠い原初にあった農法であったが、およそリービッヒの日本農業理解を学んできた彼としては、これとまったく背反する焼き畑農業にぶつかった時、照葉樹林帯の植生条件を知らなかっただけに驚きと怖れに近いものを感じたに違いない。

焼き畑による森林の裸地化は、水源涵（かん）養林の破壊だけではない。土砂の流失を促進し、エロージョンを起こし、水の流出速度を早め、これが下流域の河床の上昇、水位の増高、水勢破壊

力を大にし、被害を増幅するばかりであることを彼は見てとったのである。
当時、大垣に居住していたデレーケは「三川改修は、まず上流部の焼き畑農耕を禁止することからはじまる」と感じ、関係者に徹底して啓発したもようである。
このことがやがて岐阜県議会で問題となり、濃尾平野の水害の最たる原因は、揖斐川、長良川上流の焼き畑農耕に伴う林地荒廃にありとし、遂に岐阜県下の焼き畑農耕は県条例によって一切禁止されるに至った。
「このため、揖斐川上流にあって焼き畑に頼り生活していた幾つかの村は生活基盤を失い、遂に北海道に移住してしまう出来事が起こった」と、千葉徳爾著『はげ山の文化』（学生社）に指摘している。
さてそうなると、移住動機を濃尾地震にありと記述されている、従来の揖斐川上流の岐阜県人による北海道への大挙移住というものは、この焼き畑禁止の事件と大いに関係があるのではないか、洗い直して見る必要がでてきたと私は考える。

昭和五十五年八月十日

三

帯広市史によれば「幸震村にはいった加賀団体の出身地石川県能美郡新丸村は、郡の西南隅、大

日川（下流は、手取川となって日本海に注ぐ）上流のへき地である。山峡の奥の山村で、耕地は少なく、雪が多かった。……明治二十九年四月、中岳の雪崩を含む大洪水に見舞われ、村は全滅に近い被害を受けた。土地は崩れ、家は流れ、美田は一朝にして石原と化した」とある。この文脈からいくと、加賀団体の故地新丸村はたしかに山峡の奥の地形であるが、移住者はあたかもすべて、美田を失った水稲農耕者であったかの如き記述となっている。ここが問題である。

この新丸村は、昭和三十一年に小松市に合併している。昭和四十一年に、旧村関係者の努力によって『新丸村の歴史』が発刊されていて、まことに詳細をきわめて、貴重な資料である。

この村は、かつて白山信仰の紛争にまきこまれ、寛文八年（一六六八年）以来、天領（幕府直轄領）となって明治に至り、二十二年の町村制施行で、新保、須納谷、丸山、小原、杖の旧村をあわせて新丸村を称えるに至った。

新丸村の航空写真を仔細に見るに、十勝の札内川の上流を遡るとピウタンの滝があるが、あれから上流部の地形と考えればまちがいがない。村を貫流する大日川の水源大日山（一三六八メートル）の鞍部大日峠は、福井県の九頭竜川との分水嶺で、加賀団体と同じころ、幸震村に団体移住した勝山を中心とする「越前団体」の故郷の村々が、そこに散在している。

『村の歴史』には、次のように書かれている。昭和十一年の座談会記事であるが「四、五十年前（明治二十年ごろになる）まで、薙畑輪作（焼畑農耕のこと）と申しまして、もっぱら、雑木林（照葉樹林）を伐り、焼きはらって、一時的開墾とでも申しますか、まず初年度には稗（禾本料）をつくり、二年目には粟（禾本料）、三年目には大豆（荳科）、四年目には粟（禾本料）、五年目には小豆

（荳科）をつくるというぐあいにして、六年目には放棄してしまう。荳科は空中窒素を根粒菌により土中に蓄積する。そうすればまた、そこに雑木がはえる。さらに二十年ほどたつと、また前のようなことをくりかえすというようなつくりかたであります。」これはもう明らかに焼畑農法の、二〇〇〇年以来の伝統の姿をまざまざと写し出している。

昭和五十五年九月七日

四

新丸村の歴史を語る座談会記事を続ける。

「村内、中流以上の家庭においては、米と粟、稗等を混食し、中流以下のものはほとんど稗、粟のみを常食し、他より移入することなく、ほとんど自給自足の状態でやってきたのであります。

ところが、明治二十九年の大水害以後、水源の涵養がやかましくなると同時に、植林事業がはじまり、漸次さかんになってきたため、これらの山林はおいおい植林せられ、いきおい（焼畑）輪作地が減少し、今や杖、新保、木地小屋（いずれも集落の名）を残しほかにはほとんど（焼畑のできる雑林地が）皆無の状態となりましたため、年々生産する稗、粟等はいちじるしく減少し、生産額、稗、粟あわせて一〇〇石にすぎません。したがって、移入米は、年に約七〇〇石に達する状態であります。」

この村の人々にとって、美事な照葉樹林が単なる雑木林として理解されていることである。おそらくこれは明治に時代が変わってからのことで、杉、桧といった丸太生産の換金作目が森林であると強く意識されるようになったためと思われる。時代が、山村の人々の山林に対する思想を現金経済にまきこんでいったためである。その証拠に、以前は食糧の自給自足が中心であったのに、移入米にたよらなければくらしがたたないという事態にまきこまれていったとしるされている。

木地小屋という地名（木地屋仕事の小屋の意味で大日川の一番奥地になっている。この先は峠になっている）をのこしているように、かつては長い歴史のあいだ、この山村の人々は、立派に照葉樹林と調和のとれたくらしを続けてきたのである。それをこの照葉樹林を雑木林にまでおとしめたように、くらしの思想に、変化が及んできたものと考えるのである。（このことは、この村の人々の生活道徳が変わったことを意味する。粟、稗を食べることをやめて、米に変えたという事件ではなく、くらしの道徳が変わってしまったのである。近代の歴史観はこのことを見落としている。某講中では阿弥陀如来の尊像まで売りとばしている）

明治二十九年大水害により北海道移住者を大量に出したことはここに出てこないが、別に明治二十年から昭和三十一年まで、六十年間の村外転出者の詳細資料があり、明治三十年中の北海道移住者四十一世帯二三一名は、過去最大のものとなっている。

焼畑農耕の廃止は、食糧八〇〇石から計算して人口収容力が八〇〇人に、この村の土地利用が変貌したことを意味する。これにはさらに深い理由がなければならぬ。

昭和五十五年九月十四日

五

焼畑農耕（なぎはた）には、その土地におけるそれなりの農業的土地利用の原則、合理性というものがたもたれていたはずである。そうでなければ、二〇〇〇年も、三〇〇〇年も続いてきた訳がない。無理な農耕であれば、当然途中で崩壊がおこるはずである。

そうなのである。既述のように、チャンと立派な輪作体系が完成していて、新丸村史でも「なぎはた輪作」の表現を用いながいあいだ守られてきたのである。それは「なぎはた」の焼灰が肥料として活用されていたのである。「なぎはた」とは、焼灰を肥料とする合理的輪作農法ともいえるのである。

しかし、「なぎはた」耕作を六年も七年も続けるかといえば、それは絶対にない。ながく土地利用を固定して畑を続けることは別に「常畑」といって、技術が根本的に変ることで、明確に峻別していることからでもわかる。六年目になると「なぎはた」は自然のままに放置されるのである。このことを「むつし」といっている。「むつし」の期間は、最低でも二十年で、三十年、四十年という「むつし」もあるらしい。だから、新丸村の実際の「なぎはた」の面積はおのずから決まってくるし、その人口も、自給完結の社会として限度があった。二十一年目か三十一年目になって、森林の自然回復をまち、再び「なぎはた」として手をつけるからである。

従来、農業指導のがわで、十勝の開拓者たちは出身が水稲農耕者であるため、米の連作体験の府県的慣習から抜け出すことができずに、早くから輪作の必要性が叫ばれながらも、なかなか定着しなかったとして考えられてきた。どうもこのことはおかしいのである。

明治二十九年の十勝の殖民地区画の設定と入植開始にあたり、大挙移住してきた人々の主力は「なぎはた」地帯の人々であるから、むしろ「なぎはた輪作」の伝統を慣習として保持してきた人たちである。昭和十二年刊行の管内某産業組合二十周年記念録に、「札内川沿岸は沖積地で、土地肥沃であったが、無肥料耕作をつづけ……一かく千金の夢見て入地し……地力の減退をもたらし云々」とあるのは、後人の勝手きわまる解釈で、「なぎはた」が無肥料耕作であることは当然であり、輪作のことは身についており、問題は「なぎはた」的土地利用がその後も続けられ、常畑化していったところにあるといわねばならぬ。当初の無肥料は求むるに肥料なく、あるいはカネがなかったということではなく、土地利用の過程に問題があったと理解すべきでないだろうか。

昭和五十五年十月十二日

六

柳田国男の云うように、日本人がその土地で愛情をもって生きて暮らしていくためには、歴史の学問が大事だと思っている。歴史が学問として立派であるためには、トータルな史眼が大切である。

このごろ流行の民衆史の動きを見ていると、どうも差別をひっくり返して、なんのことはない優越を語ろうとしているのではないかと思えてならない。シャモがシャモ同士で自分たちの傷口をなめあっているような甘えが見えるからである。少なくとも、北海道としてまず解決しておかなければならないのは、少数民族としてのアイヌ問題である。アイヌ文化についての正しい理解の道を解決つけないでは民衆史もへったくれもないのである。この「畑ちがい」も最後は、このアイヌ文化に結びつけたいのである。アイヌの人々も又焼き畑農耕をしていたからである。むかし山中峰太郎が、余市アイヌで並木凡平に口語短歌を学んだ「違星北斗」の生涯を『民族』という短編にまとめこのことに触れている。これを一読した時の驚きと感銘が忘れられないのである。私は、若い諸君に学問の刺激ともなればと思って、書いていくつもりである。

　このごろ各町村のあちこちで部落史の刊行が盛んである。まことにありがたいことである。できることなら部

落についての古い写真をたくさん集めて集録してほしいのである。一枚の写真は一枚で、それが亡失すると万事休すである。印刷して分散しておくことは、あとに残すことができるからである。それと古老の談話も大事であるが、古老は今は古老であるが、開拓当初はまだ幼少であって、直接体験以上の視野はもちあわせていないからである。おそらくは古老の父祖たちは、その故郷に手紙や写真を喜怒哀楽をこめてふるさとに残った人々に書き、送っているにちがいないのである。今ではあるいは既に遅いのかもしれないが、やはり手をつくして本州の父祖たちの生れ育った村々のもよりの人々に手紙を出し、こちらからの手紙や写真を集めることも開拓の重要な資料となるものと思うのである。ぜひお願いしたい。

昭和五十五年十月十九日

七

学問というものは学んでから問うという働きもあるが、こちらが問うているから、向うから答えを出してくれる学びの働きも大いにあるようである。焼畑農耕と十勝農業のことを問うている私にとって、ことし十月十七日のＮＨＫテレビ「現代たべもの読本・雑穀」の放送を見ていて驚いた。

舞台は奈良県吉野郡大塔村の篠原部落である。今に生きる焼畑農業の実態を、ことこまかく映し出していたからである。大和五条市から賀名生（あなう）の里を経てやがて天辻峠にかかる。峠を

下ると十津川郷である。篠原は、この十津川の支流舟の川の山峡にある。

十津川郷は、かつては焼畑農業地帯であったという事実の発見である。しかも一部には、いまだにその伝統をふだんごとのように続けている事実に私は驚いたのである。明治二十二年、十津川郷は大水害に襲われ、たちまちにして故郷を失い、その年はるばると北海道樺戸郡石狩川のほとりトップ原野、今の新十津川町に六〇〇戸の移民団を組織して移住してきた。第二次移民団は、士別に入地している。さらにその後、一部の人々は中札内村に奈良団体として入地している。前帯広市長の吉村さんも、前池田町長の丸谷さんも、十津川移民の血脈だから焼畑農耕民の末裔（えい）ということになる。

もっと驚いたことには、日本の焼畑研究の第一人者佐々木高明の『稲作以前』（ＮＨＫブックス）によると、そもそも十勝開拓の団体移住の先駆をなした晩成社依田勉三の出身地、伊豆の南半部もまた焼畑農耕地帯であることである。昭和三十五年の農業センサスに焼畑の数字があげられている。そういえば依田勉三の本家松崎温泉が、いのしし鍋を売り物にしていることからも焼畑地帯の証拠といえよう。

こうなると宮崎濁卑の勧誘で、大挙、伏古はじめ帯広周辺に移住してきた富山県人も、やはり焼畑に関係ありと私はにらんだのである。富山の西砺波郡といっても南北に長く、加賀、能登、飛騨と境を接し、山峡がぐるりと取り囲んでいる。もう二十年以上も前のことだが、私は散居制と青少年による土壌断面調査の行われていることを聞き、石動の町に二泊して、その近くの松沢村を訪ねたことがある。西砺波に焼畑があることは気がつかなかったが、昭和三十五年のセンサスに、相当

の焼畑の数字があげられている。こうしてみると十勝の農業開拓は、始めから本土の焼畑農耕地帯と密接な関係があったことになるのである。

昭和五十五年

八

音更町の矢部団体の人々が故郷の「獅子踊り」を今に伝え、おいおい衣裳その他もととのえて、その伝承を支える人々が年々熱心さを加えてきていることがテレビで報ぜられている。これとまったく同じ「獅子踊り」を、幕別町糠内にも、浦幌町にも伝えている人々がいて、その活動を絶やしていないのである。いずれも富山県西砺波出身の関係者の方々である。故郷の伝統芸能が、氏も素姓もはっきりさせて今に行われていることは、まことに芽出度いことで、開拓のはじめの初志と苦労を伝えていくうえでも、何にもまして大事なことである。

この「獅子踊り」についての私の理解であるが、これは「しし」といっても獅子ではなく、どうも「いのしし」の「しし」のようである。宮沢賢治の作品に出てくる「ししおどり」は、「いのしし」ではなく、鹿と記して訓読みは「しし」である。いずれも焼畑農耕に関係していると見ている。いったい「いのしし」にしても、鹿にしても、低地平野部に出没するものではないからである。山峡とか山麓の森林の林縁部にあらわれるものである。そこには直進してくるいのししを防ぐために

「ししがき」がしつらえている。

せっかく汗水流した焼畑のみのりを、「いのしし」が山からあらわれ荒らしまわり、山峡での自給食物を傷められることは、人々のくらしにとって致命的なことである。その被害の少なからんことを願い、祈るのは当然である。しかし「獅子踊り」にしろ、「鹿踊り」にしろ、その踊りの流れから見れば「この憎い奴め」といった趣きはない。むしろ、これら山のケモノたちとの親和を求めているフシが見えてしかたがないのが、おもしろいのである。なぜなら、山のケモノたちは、焼畑の人々のくらしにとって、きっと重要な蛋白質供給源として考えられていたにちがいないのである。そういう雰囲気を感ずるのである。

依田勉三の故郷伊豆松崎の大沢温泉（依田本家）では、名物として「いのしし料理」を食べさせてくれるので有名である。この「いのしし料理」こそ、焼畑農耕のあったことを示すものである。

松崎町の芸能に「虎舞い」＊がある。はじめ私はこれを、黒潮を関係する海上交通に結びつけて今まで考えてきたが、どうもそうではなく、富山の「獅子踊り」と同一趣好のものと考えるようになった。というのはこの「虎舞い」が、岩手の上閉伊、気仙の北上山地の焼畑地帯にも、広く伝承されていることがわかったからである。「獅子踊り」の芸能化がさらに進んだかたちとして転化したものと思うようになっている。

昭和五十五年

九

千葉徳爾はその昔『はげ山の文化』の中で、都市としての城下町存立に、山村である焼畑地帯からバイオマス・エネルギーとして、燃料の供給と交流のあったことについて、調査なり研究が省みられないことを強く指摘している。

たとえば信州松本では、梓川上流に大野川という村があり、そこには松本藩から、あらかじめ米が支給されていて、手がうたれていた。また、岐阜県の城下町大垣では、揖斐川上流の村々（帯広市の川西村に入地した岐阜団体の出身地）と契約が結ばれ、むかしは「段木」（だんぼく）といって、雑木燃料を川による流送によって確保していた。

東北地方から北陸地方にかけては、雪の深い城下町には、そこを流下する河川の上流村落から、融雪の春を迎えると、「コロ」とか「ハルキ」とかいって、薪（まき）をきっては城下に流送して売っていたというのである。

このことを面白い話だとかたわらの家内に話をしたところ、これを読めといって示されたのが、盛岡市の郷土史『もりおか物語』である。石川啄木の歌に出てくる不来方（こずかた）城のかたわらを流れる中津川の上流左岸に、加賀野「春木場」という地名がある。むかし、盛岡城下町の一年間に使用する燃料の薪材料が、上流の山村から流送されてくるのを川から引き揚げ集積したところだというのである。

この薪材料のことを「春木」といった。上流山間部の村人たちは、冬に薪材をきり出してためて

おき、春の雪解け水を利用して盛岡城下まで送り出した。山できりためた春木には、一本一本に符牒（ちょう）が刻まれていた。春木場に集められた春木はその符牒によってよりわけられる。符牒は、春木採りの専門家でなければ判読できなかった。「三八だ」「ホレ助六だ」などとかけ声をかけてよりわけ、一山ずつ積みあげると、それがまたピッタリと注文してあった通りの数量になったというのである。

春木採りの人たちが親方に春木を引き渡すと、「大勘定」といって代金がその場で支払われる。この金を懐にした人々は、盛岡のまちで大きな買い物をして、また山に帰っていく。春木場に集められた「春木」を、屋敷や商家に運搬する荷つけ仕事を「春木づけ」といった。また町では、五、六人ずつ組をつくり、ノコ、マサカリの道具をもって注文をとり、「春木割り」といって、使い勝手のよい薪にする小割り仕事で、結構年間の暮らしをたてている人々がごく近年までいたそうである。

昭和五十五年

独言独語

昭和四十七年〜平成十四年

「独言独語」は、1961年(昭和36年)から始まった1000字の年頭挨拶で、時々の話題をテーマに私見をまとめたもの。ここでは他と重複しないものを収めた。

昭和四十七年

帯広が札幌より東京に近いのだといったら驚かれると思います。羽田千歳の空路が九〇〇キロメートル、千歳札幌が四十キロメートル。羽田帯広の空路が九三〇キロメートル。航空という新しい輸送手段では帯広は札幌より絶対的に近い。芝浦苫小牧港一〇三七キロメートル、苫小牧札幌が六十キロメートル計一〇九七キロメートル、芝浦十勝港一〇〇六キロメートル、十勝港帯広が八十三キロメートルで一〇八九キロメートル。フェリーボートという船と自動車を結合する新しい輸送手段では、これもまた物理的にも、時間的にも、経済的にも帯広が札幌より東京に近いのです。明治百年の開発動脈として進めてきた旧い輸送手段の鉄道体系だけで物事を判断するのと、技術革命の眼で自分の位置づけを見直すのとでは、こうも違ってくるのです。道東、十勝、帯広の新しい開発戦略のキメ手はこの二つであると考えています。さらに今後の北半球新幹線ルートの開発は、十勝の平野に新しい課題を求めていると思います。こうしたことからも、東京や札幌で作られる情報だけで判断することは誤りで、外からの情報の適確な選択と共に、自らも情報を発見し、創造していく自主自立の心掛けの大切なことを痛感している次第です。

帯広は月平均気温の上では、年間の動きがモントリオール、モスクワと非常に似ているにもかかわらず、全く異なるところは日照時間の豊富なことで、東京の二〇一九時間よりも三十時間多く、冬至の十二月で帯広とギリシャのアテネが同じく一六九時間。モスクワ十九時間、ロンドン三十八時間と、圧倒的に帯広の日照の豊かさを示しています。しかも窓ガラス一坪当りの日光による入射熱量は四キロワットの電熱器のカロリーです。帯広の冬の快適さがわかります。

帯広十勝が北方圏の文化を創造しようという時、何としても解せないのが、日本人の持つ寒地適応の技術です。日本人は家屋という空間を暖めるという智恵をついに創造できず、今でもその責任を貧しさに負わせ

て逃げています。その採暖方式は輻射熱に依存し、対流熱の利用になじまない。栄養摂取も寒暑の気候に調整し、衣食住を一体とした北方適応の道を探り出せなかった無能ぶりです。朝鮮中国との数千年の交流があり乍ら、北方的適応の智恵については学びとらなかった不思議さです。この秘密を解くところに、我々の新しい道が開けそうです。

昭和五十三年

情報としてのテレビが、新聞とちがい一時性で記録性のないこと、繰返しがないことが、長いあいだあるはがゆさ、もどかしさを痛切にしていました。それがホーム・ビデオの出現で、私どもの手の届く費用で一挙に解決しました。よい番組を記録し、保存し、何回でも繰返し聴視できることです。ビデオの本格的普及時代の到来を予感するものです。

ＮＨＫが、長野県松本市の民芸生活館長池田三四郎先生のお仕事を紹介した「民芸家具」など、私にとってよい例です。もうこれで何十回繰返して聞いていることでしょうか。一〇〇年、二〇〇年を経た木材を使っての家具は、一〇〇年、二〇〇年の使用に耐えてこそ自然の循環にこたえる人倫であると語っておられます。そうでないと日本の樹木は失われてしまう。この素朴単純な見解に、モノをつくるということは、この心をつくることだと思いました。この心が美しいモノをつくり出すのだと思いました。又、掃除哲学をいい、モノの手入れは、そのモノの美しさを手入れによっていよいよ引出すことだとも語っています。心がけて見るとビデオの効用に驚くばかりで、心からお奨めいたして止みません。

さきごろ直木賞作家で、戦前の十字屋版宮沢賢治全集の編輯者森荘巳池氏の『私残記』（中公文庫）を読みました。文化四年、今から一七〇年前、ロシアが千島のエトロフ島に侵寇、この地の警備についていた五十六才の南部藩老砲術師大村治五平は捕虜となり、後放還されて故郷に帰り幽居、六十二才の死に至るまでの間秘かに書きのこした『私残記』を中心に展開する異色作です。言葉が通じない、風俗慣習が異なる人間たちが突然上陸。瞬時の修羅場となり、生死の局面での出会い。その背後にある異なる権力意志。遠く五〇〇里の異境の地で、旧い幕藩体制そのままの戦いの悲劇でありました。東北人特有の、静かなつぶやきに似た客観的記述と正確なスケッチ画に見る治五平の直面した事実とあまりの符合に、無量の感慨にうたれました。

この本を手にした昨年十月は、思わぬ神経痛に脚の痛苦と安眠の叶わぬ数週間で、まさに三十三年前の浦塩収容所での鉄條網と寒風吹き舞うバラックの中で、栄養失調と神経痛（大豆が兵用水筒の蓋に一日二杯の支給。これが二ヵ月続き、その間一ヵ月は慣れるまで下痢）に生涯の終りと覚悟した時と同じ月でありました。この『私残記』に、自らも鎮魂の行を課すべき促迫を受けた次第です。こうした書物こそ広く読まれ、刻心し志操の高揚を思うものです。

敗戦の年九月二日スターリンは対日戦勝利を布告し、日露戦役の敗北で父兄が受けた恥辱を、今こそ雪ぎ仇をとった。そのため南樺太、千島の奪回を果たしたのだといい、更に北海道北半の占領をトルーマンに強要しています。（丸谷才一著『文章読本』七十二頁、林三郎著『関東軍と極東ソ軍』）大国の元首として驚くべき酷薄の怨念であります。モノほしげな軽薄な思想で北方領土の復帰など、到底考えられるものではありません。

インターナショナルなコムニズムが実はインチキな狭溢なナショナリズムであったことを、共産主義の祖国ソビエトの大元師スターリン自らがはしたなくもボロを出したのはまことに滑稽なことであります。

第二次世界大戦を大祖国戦争と名づけたのはスターリン元師その人ではありませんか。一国社会主義建設を称えて共産主義コミンテルンを解散させたものスターリン自身ではありませんか。

昭和六十年

この六月三日の日本経済新聞「中外時評」の記事に、「米国農業は、将来もずっと強大で、頼りになる存在であり続けるのだろうか。最近農水省の一部や、商社の穀物担当者の間で、米国農業の内部で強く静かに進行する病根を危惧する声が出ている。大型機械や化学肥料、農薬をふんだんに投入、自然の生態系を無視し経済効率のみを目ざす資源収奪型の企業農業を続けてきた結果、土壌侵食や地力低下、塩類集積のトガメが表面化してきているというのである。

有機質を補給せず化学肥料のみに頼り、地力喪失、塩類集積、森林過伐が重なって、耕地の沙漠化が広がっている。米国政府も憂慮し、土壌保全や塩分に抵抗力ある品種の開発を急いでいるという。

米国農業のかかる弱点は、食糧の安全保障をそこに求めているわが国民も注視する必要がある」と警告している。しかし、この結びを私はおかしいと考える。米国の農業者は自己及び自国民の利益のために農業をやっているので、日本の食糧安全保障のためにやっている訳ではない。日本はアメリカにとって市場の一部にすぎない。現に昨年ＮＨＫのインタビュアーに対し農務長官ブロックは、「そんなに心配なら、日本はソ連に倣い、長期穀物契約を結んだらどうだ」とウソぶいていたではないか。米国からいえば、間違われては困るというのだ。食糧従属国・ドレイ国家日本よ。

今年は春の遅れからまたも大きな冷湿害になるのではないかとの心配が、このところ順調に推移しいささかほっとしています。昨年は丁度今ごろ、暗鬱な十勝の作況をあとに、熱波の真只中のイリノイ、アイオワをふり出しに中西部、南部のアメリカ農業の実態を二十日間見て歩くことができました。アメリカにも不耕起農法があるのに驚き、未だにこのことに執着、種々と調べています。広島県の久保政夫先生から不耕起農法を教えて頂いてからもう三十年近くたちました。さらにラッセルの『作物の根系と土壌』を一読して、欧州でも不耕起農法のあることに注目し、考えを整理しておきたいと努力しています。

この六月に、「土壌は地球にしかない」という吉田武彦氏（国立道農試副場長）の講話を札幌でして頂きました。これは地球を開放定常系として把握しなければ出てこない思想です。水と生物のないところでは土壌の生成はない。何故か。土壌の重要な二つの成分、粘土鉱物と腐植は、ともに水と生物の存在にかかわっているからだというのです。単なる岩石の風化物ではないということです。だから月には土壌はない。粘土鉱物は「水の惑星」地球の特産物だというのです。これは非常に大事な点だと考えるのです。

この貴重な地域資源「土壌」の流亡と侵食に就て、私たちは意外と無関心なことであります。不耕起農法とか省略耕農法というのはこの被害を最小にとどめるために工夫された農法です。久保先生は西南暖地が気象その他の植生条件に恵まれながら、なぜ土壌が瘠せていて、生産力があがらないのか現実直視からつかみとった農法です。アメリカの土壌流亡や侵食を伝えるテレビの放映を見て、他人ごとのように見てはおれぬということです。北海道の畑作にとっての大きな課題だと考えます。

熊本県泗水町にある公立病院、菊池養生園。院長は竹熊宣孝先生。著書に『土からの医療』『土からの教育』（地湧社）があります。ここは診察はするが西洋医学の薬が出ない。食べモノの献立表が渡される。必要な薬は漢方薬が出る。構内は薬草園と農場。全国から医者の卵が集って研修に来て、野菜の栽培からやら

されます。

フランスのアンドレ・ポアザンは「土が草や作物を育て、草が動物を育て、遂に土が人間を育てる。食べモノの最後の判定者は化学者でなく、人間の健康である。土・植物（生産者）―動物・人間（消費者）の食物連鎖の根本である『土』の学問は予防医学である」と。竹熊先生は土づくりと人間の医者をやっている訳です。農業の原点を教えられました。

昭和六十三年

十億の人に十億の母あらむも、わが母にまさる母ありなんや。これは暁烏敏先生の御作である。不思議な縁に導かれて敏先生が昭和四年帯広にこられた時は親しくお目にかかれた。といっても先生はもう随分視力がおちて、奥様の手をかりて旅行されていた時代である。著書も頂戴し、三部経講話もそれなりに勉強させて頂いたつもりである。そんなことで生意気にも村の報恩講があると、春先の堅雪を踏んで前座に阿弥陀経の解説をやって歩いたことがある。加藤善徳さんはこのことを知っておられた。

それが一昨年駿河台・山の上ホテルでの会合の席上、私の隣に座って呟くように「暁烏敏全集があるのだがどなたかに貰って下さる方はいないだろうか」というのである。そして「はい、これはあなたに」と手渡されたのが、イスラエルのキブツ紹介書であった。もうちゃんとお見通しだ。だが暁烏敏全集には沈然でお答えしてしまった事が今になって悔まれる。

札幌で仕事をしていた時代の私を東京に出てこいとひっぱり出してくれたのが善徳さんである。それまで手紙のやりとりはあったが一度もお目にかかったことはない。とにかく広いところに出てきて頭をひやせと

いわれるのである。そして与えられた仕事が小さい雑誌の編集であった。ご本人は劇作家を志しておられ、仕事に区切りがつくと私を連れて出かけるのが芝居演劇である。その頃の新宿劇場では前進座と新国劇が月番で交互に幟を立てていた時代である。勿論ムーランルージュにも足をのばすことを忘れなかった。善徳さんは真山青果＊に私淑していた。

「次郎物語」は昨年四度目の映画化である。始め善徳さんが著者の下村湖人先生から出版元を探すことを引受け岩波書店がダメになり、よし岩波の鼻をへし折ってやれと私が高山書店にもちこんだ。だが社長夫妻の意見が分れてこれまたダメ。戦後逸早く次郎物語の復刊、湖人全集をと取組んだ池田書店主が誰あろう元高山書店の夫人であった。昨年十一月、加藤善徳さんは八十才でこの世を去られた。大きな仕事をされた方である。

奈良の東大寺長老清水公照師の最近著『しあわせを創る』（講談社刊）の一節に有難い指摘を見つけた。私のカラ松亡国論と同断である。殺鼠剤をやたらと空中散布し青大将の姿さえ見られなくなった。共生の食物連鎖が切断されてしまったからである。

「営林署で木材の不況を聞き、植林の困難さなど現代のなやみを聞かされた時、フト『柳桜をこきまぜて』（謡曲遊行柳の一節）と春を謳歌する名句から、美しいことがそのまま用につながるのではないのかと河井寛次郎先生（京都五条坂に記念館あり）の提唱めいた意思をいわせて貰ったのがキッカケになって、山を護り山から利殖を生ませる行政の転向を教えていただいた。

雑木林を伐採して杉山に仕立てる方針が近世の方針だった。比較的生長率の早い杉、建材としても高く売れる杉材をと、杉山を拡張してきたのが実は建材が鉄骨に代り割高になってきた。木材の需要が伸びなやんでいる昨今、杉の生育まで問題になってきているという現状を聞かして貰うことになった。その一つのマイ

ナスは山膚がやせてきたということだと。

山の神の神威をおそれた曾ての時代、そのままに詠った文学に出てくる紅白、黒白、紫紅、緑紅の装いが、逆に地味（肥沃度）を計る尺度になることを忘れてはならない。杉の美林でも、雑木を挟んでおかねばならぬことを営林署の専門家が再認識したことは、素人の私にはこの上もない喜びだった」とある。山の植生のバランスを崩すと宮崎の市房山の惨状を繰返すことになる。私が阿蘇外輪山の吉無田学術参考林の現場に、体力的に無理かと思い乍ら調査に出かけ、足を踏みいれたのは、先人の植林の足跡を確かめたかったからだ。

実は公照師の染筆で、宮沢賢治の文語詩「宗谷・二」の『はだれに暗く緑する／宗谷岬のたたずみと／北はま蒼にうち睡る／サガレン島の東尾や』が、鎮魂献詠の碑として一昨年宗谷岬に建立されている。このことで東大寺宝厳院の玄関の土間に起った時、見上げた書が秋草道人会津八一＊先生の筆であった。公照師の書といい、風格ある筆勢に強く心ひかれているものである。この宗谷建碑に清水公照師の染筆実現は六花亭会長小田豊四郎氏の格段のご高配により実現したことを記し、ここに感謝の意を表する次第である。

昨年、宮沢清六さんから電話があり、賢治祭に花巻農業高校で記念講演をしろとのいいつけである。題は「身土不二、医食同源を語る」とさせて頂いた。この学校に賢治晩年の農民塾「羅須地人協会」の建物が移設されている。美しく整った公園になっていた。

終ってから車で岩手山を囲む葛根田川の地熱発電に案内されたが、ここで思わぬ景観にぶつかる。ぶな、とち、なら、くるみ、こぶし、くり、しな、ほう等、等、成熟した原始林。いずれ劣らぬ巨木の群叢。まさに縄文の林相であり、東北の原植生を目のあたりにして動けなくなった。平地では津軽のあすなろ、秋田の杉、南部の赤松とか「県の木」といわれるものばかりで、もう縄文の高貴な原植生は通りすがりの列車の車窓から見られなくなっている。そして本来の東北の植生景観はこんなところに広がっていたのだ。素晴しい。

よく考えてみると宮沢賢治の作品に出てくる植生は、みな縄文からの原植生ばかりであった。縄文植生圏のなかで、賢治の童話も、詩も成立していることをおのずから諒解したのである。

昭和六十四年

暮れの三十日朝、広島県佐伯郡湯来町伏谷（旧砂谷）の久保政夫先生からお電話がありました。八十六才で現役の酪農家です。長い間移動大学研修地として大変お世話になってきました。午前五時から百頭の牛群を看察し、三十ヘクタールの農場を見廻って戻られたところだというのです。まったく昔通りの張りのあるお声に驚いてしまいました。数年前東大病院で癌と宣告され見放された方とは思えぬ明るいお声です。先生は「無農薬エサでホンモノ牛乳を飲み、新鮮野菜を食べて必ず癌は癒して見せる」と仰言っていると聞いてましたが、その通りになりました。

先生は広島市民に半世紀にわたり、今では二万戸に砂谷牛乳を提供してきました。当時一般の乳業資本の流通は日本国中どこでも一合瓶牛乳でした。先生はそれを五合瓶牛乳を実現しようと考えておられました。そのためのプラント設計、計画、資材の発注を整えて、資金を政府金融の農林漁業公庫に求めて広島県庁に書類を提出していました。ところが、この計画を聞きつけた雪印乳業が、その頃全国乳業の市場の独占支配をねらっておりましたので、県庁と結託し、申請書類をうっかり期日に間に合わなかったといって偽りの陰謀を逞うして、資金のパイプをふさいでしまったのであります。既に発注済の資材はどんどん入ってくる。窮した先生は金策の過労から平和公園のベンチに意識不明で倒れてしまいました。ところが救急車で運ばれた病院が砂谷牛乳の檀家で、事情を聞いた院長は病院建築に準備した金をそっくり用立ててくれ、今も使用

している五合瓶牛乳が実現発足したのです。こうして今日流通している一リットル（五合五勺）の牛乳パックの道を開いたのであります。砂谷牛乳の五合瓶や牛乳パック（砂谷では両方届けている）には毎日その日その日にふさわしい格言や教訓が印刷されています。これがまた朝牛乳を飲む時の家族の話題の中心になっています。このほほえましい風景を想像して頂きたいのです。牛乳を売るのでない。心を精神を家庭にお届けするのだと申している訳です。ペスタロッチ研究で有名な広島大学学長の長田新先生など、私たちは牛乳を飲むのじゃない、久保を飲んでいるのだといって、砂谷牛乳応援の先頭にたたれ、今日の発展をみたのです。しかもこんど砂谷牛乳の檀家がお金を出しあって久保先生の胸像を建てたというお話を聞いて、この素晴しい話に感動のあまり絶句してしまいました。健康な土づくりからはじめて生命の食べものが生れる。牛乳を飲んで下さる方の顔の見える農業をということで、一貫して素志をまげず、半世紀を貫き通した久保先生の美事な生きざまです。私にとり先生は三十年来の大師匠です。ご長養を祈るや切であります。

月刊『科学』十月号（特集・土の危機）に吉田武彦氏がお雇外人教師フェスカ＊の石灰亡国論に就て書いている。石灰施用で土地が瘠せると政府に警告したため、府県は慌てて石灰禁止条例を出した。併し大工原銀太郎＊が明治四十年から酸性土壌研究の結果、石灰の有効性を認めたため禁止条例は廃止になった。ところが廃止の理由がふるっている。フエスカの石灰禁止の根拠が間違っていたからとはいわず、禁止目的が達成されたからだとしたというのである。まことに人を喰った話である。

北海道の土壌肥料学会の主流は、水耕思想の持主によって占められていると名古屋大学の熊田恭一が指摘していたが、石灰禁止の手口とそっくりなのである。

水耕とはそもそも、土は邪魔モノとするところから出発したもので化学肥料だけあればよい、判らないことは全部切り棄てて省みようとしない姿勢である。昨秋札幌で国際土壌科学会議の講演があった。そのテキ

ストを読むとこうある。「近頃流行の水耕栽培を五十年も前から研究手段として利用してきた。しかしその私でも農業は将来とも季節感を尊び、健全な土を土台として営なまるべきと確信しており、このことが国際競争場裡に於て北海道農業が生き残る基本条件であると思っている」というのだから、目を疑うのである。

農業基本法ができた頃、最早化学肥料・農薬・除草剤だけで農業がやっていけると喋って歩いた国立農試の場長（西潟）がいたが、これは気がふれて喋ったのではなく、そう喋らせる学会の支持が背景にあったからだと考える。馬が完全に消えトラクター時代に転じ、既に三・三運動が始まった昭和四十四年、北農会は普及事業のテキスト『北海道農業と土壌』を刊行した。その中で「堆厩肥の意義はうすれた。堆厩肥依存からの脱却が生産の向上、所得増大の第一歩である」としている。監修者は化学肥料を中心に高度生産農業に転換の時代来るとし、土壌の物理性、化学性解明の必要をいい、生物性には全く触れない。昭和六十二年改訂版も生物性を意識的に排除し、土壌微生物学者との協力を除外している記述に驚くのである。『農業技術』十月号に土壌肥料学会の第四部門は土壌微生物とあるから、まるで狐になめられている感じである。

平成二年

ちょうど倉敷、坂出間に本四連絡橋が完成、世間の関心を大きく集めていた時、同じ内海に浮ぶ長島と本土の間にも橋が架かり、自由往来ができると長い間の住民悲願達成の喜びを伝えるテレビニュースを見ていて、私には非常な驚きであった。

長島愛生園はハンセン病患者の隔離施設としてこの孤島が選ばれ開設された。園長は光田健輔先生。また北海道に近代絵画の人材を育てた札幌一中の林竹次郎先生の御子息林文雄先生も、北大医学部を出てこの島

の医師として生涯を捧げられた。『小島の春』の著者、女医小川正子さんもこの仕事に殉じて倒れた。

私が長島を訪れたのは昭和七年。当時この島に滞在の社会教育運動の大先達、後藤静香先生をお訪ねする為であった。岡山市の旭川に架かる京橋河畔から機帆船に乗り、内海に出て小豆島を横に眺め乍ら島から島へと立ち寄り、四時間がかりで長島に着いた。

ハンセン病は旧約聖書のヨブ記以来、天刑病として人類にとり差別の最たるものとされてきた。感染症と判ってからも完治の方法がないため、社会的に傷跡を深くしてきた。戦後新薬プロミンの開発で通院治療が可能となり、完治と社会復帰の途が開かれた。日本でこの途を開いたのが昨年朝日社会福祉賞を受けられた犀川一夫＊博士であり、博士の救ライ医療の半生の自伝『門は開かれて』（みすず書房）は感動の書である。

長島架橋を知った私は昨年二月再度ここを訪れた。あと旬日で運航廃止されるという渡船で、後藤公園下の桟橋に着く。昔の園長官舎のあたり一帯は駐車場となり、全島が既に開放的なクルマ社会に変貌していることに驚く。島の周囲に美しくカキの養殖筏が浮ぶ。私は貞明皇后の「つれづれの友となりても慰めよ、行くこと難きわれに代わりて」の御歌の碑まで辿りつき、帰りはタクシーで「もう一つの本土との連絡橋」を渡り、岡山のまちに走らせた。

犀川先生は現在沖縄ハンセン病予防協会診療所長としてご活躍。離島の患者は診療所まで来るのに経費がかかるといって来てくれない。このため先生は、自ら離島を巡回して診療にあたっておられるという。心の家はこの先生の応援のため醵金を集めている。

平成五年

見給え、この腐植土（つち）を／腐植土をつき破って、音もなく芽を出す豆／玉ねぎの華奢な芽も勢よく伸び／今や生き生きと萠え出す、春の草木たちよ／

ホイットマンの詩集『草の葉』の「この腐植土よ」の一節である。ホイットマンは、アメリカの大地に腐植土の持つ物質循環、輪廻転生の秘義を感じとり、再生と快癒の悦びを感動を以て歌っている。

曾てはこの素晴しい強靱健康であったアメリカの大地も、このごろ益々巨大化していく化学力と重装の機械力の前に蒼ざめた大地に化しているというのである。その現実化が土壌と地下水の硝酸汚染である。硝酸濃度の増大が、遂にブルーベビー・シンドロームによる乳幼児の死亡例となって現れた。調査した井戸水のうち二・七パーセントが、硝酸態窒素濃度十ｐｐｍ（ＷＨＯ許容限度）を超え、カリフォルニアでは三五四ｐｐｍが報告されている。

アメリカだけではない、日本の地下水の硝酸汚染も次第に拡大し関東の荒川扇状地、岐阜の各務原台地等々、二十～三十ｐｐｍの硝酸濃度が確認されている。欧州では丁抹・和蘭・英国で深刻化しているという。（熊沢喜久雄『農業と環境汚染』学士会報一九九〇／四）

こうした土壌の危機に対し、アメリカ最大の穀倉地帯アイオワ州では、「市民の危機意識87」に支えられて地下水汚染防止法を成立、化学肥料・農薬・除草剤等、農業に使用するあらゆる合成化学物質に重税を課し、この税収を財源に農業用化学物質の削減対策を進めている。また和蘭は、政府・国会・農民が一体となって、二〇〇〇年までに化学肥料、農薬の使用を完全に半減を義務づけた法律を成立させたのである。（国民生活センター）

石塚喜明は、早くに『農業技術』（一九八五／六）に、ミシガン州農業試験場名誉場長ウイットワー博士

の発した警告を、驚きを以て紹介している。「今世界の農業は、先進農業を僭称するメカニカル農業の継続かバイオロジカル農業、持続性ある農業への転換か二つの途の選択を迫られている。これまでアメリカ農業は、生産力を至上とし、ひたすら効率だけを追い求め、作物が生きものであることを無視してやってきた。そのためのツケを今になって支払わざるを得ない局面に追いこまれている。

これに反しバイオロジカル（生物学的）農業は、作物は生物であることを前提に、生命体としての作物が何を求めているかを理解し、生命の潜在的能力を可及的に発現させることを原則とし、まず土を作り、作物を育て、農民はそれに力をかすことを基本として農業を進めてきた。日本をはじめ、アジアの農業がそれである」というのである。石塚はこれを聞いていささか面映い思いをしたと述懐する。

渡辺巌は「生物生産は工場生産とは異なる。土壌は畑に作物がなく休養中でも働き続けており、有機物を分解し地力を高める。工場の機械は休んでいて生産をあげることはない。エネルギー、情報の投入なくしては何もできないシロモノである。生物生産技術は生物と生命の法則性の上にたち、自然利用が第一である。農業における工業技術は、あくまで補完であって代替ではない。代替の思想から補完の発想に転換すべきである。自然物利用を低く見るのは法則性の解明がまだ不十分なためであって、物理学、化学、工学だけが進んでいた過去の時代の遺産にすぎない。常に正しいとは限らぬ。生物社会、生命社会の法則に就ては、我々はまだまだ無知であることを思いしるべきである」という渡辺博士の声に耳を傾けたいものである。

平成十四年

「人の体の消化管は口から肛門まで七メートルある。昨今は飽食とグルメの流行で、舌は大切だが胃腸軽視の恐るべき風潮がある。患者が、完全栄養液の静脈点滴だけで何か月も生存するのを見て成程と思いこみ、医学徒には金の儲かる糖尿病とか腎臓病の研究ばかりが尊重されている」とは藤田恒夫著『腸は考える』（岩波新書）の指摘である。否、腸こそ小さな脳である。腸には超能力があり、瞬時に食物を化学的に分別して指令し黙々と働いてくれている。モトを正さず後始末に力をいれる近代医学は間違っているという。

米国アルバート・アインシュタイン医科大学外科教授新谷弘美＊博士の『胃腸は語る―胃相腸相からみた健康長寿法』（弘文堂）は、切ったりはったりの外科医であり乍ら驚くべき提言をしている。三十年間に米国と日本で二十五万人の胃腸内視鏡検査を行い、人の顔に人相があるように、胃腸にも胃相腸相のある事に気がつく。内視鏡によるポリープ切除を世界に先駆けて開発し米国医学会を驚嘆させた人であるが、新谷式健康法の提言は、日本でも各界の名士が実践している報告に驚くのである。新谷博士は肉食は絶対に腸相を悪くする。二十五万人の結果である。本人は玄米二、稗粟一の割合で一日三食、白子大根おろし和、若布の味噌汁、昼は野菜のおかず弁当、動物食は魚介類。未精製の穀物こそ健康に最良とする。一年後に検査すると、見事に胃相腸相が綺麗になっているというのである。人間も大自然の中の一生物たる事を自覚し、免疫力、抵抗力ある身体を造ることが健康の秘訣と強調する。

全く同様な趣旨を自ら数十年以前から唱導し実践してきたのが大阪八尾市甲田医院の院長甲田光雄＊博士である。有名な熊本菊池市他五町村立公立病院長竹熊宣孝さんもみずから医者でありながら、大学病院の同僚に見放された重い肝臓病を、甲田博士の断食療法で何と十日間で快癒の道が開け、反近代医学に目覚め、今日迄食わぬ養生を唱えて医療活動を続け、地域医療費を激減させた。既に甲田博士は国際的に高い評価を

受け、スウェーデンアカデミーより世界科学大賞（医学部門）を授与された。今年七月に甲田博士を帯広に迎えて、研修会の計画を進めている。

「萬ずの事、時あり！　これこそいくらか長生きしていると、その意味が層一層、なるほどと思えてくる箴言である。そういえば黙するに時あり、語るにもまた時ありで、何故なら若い時には行動し活動するのは当然だとすれば、老年期には観照や表白こそがふさわしいと考える」

ゲーテが『西東詩集』の註記に記した冒頭の言葉です。『西東詩集』は私の枕頭の書です。いや、早くから人生の壁にぶつかった時、自戒自省の書でもありました。

わが時を短くするものは何ぞ
活動。堪え難く時を長くするものは何ぞ。怠惰。

君ゆえに　われ梟となり
このテラスにうずくまり
かの北空の双子星が
行く手変えるを　見届けるまで

〝死して成れ〟の　この心を
その身に　悟り得ぬかぎり

汝は　暗き地上にて
悲しき客に　すぎざらん

ゲーテの諦念の言葉

努むるものに救いあり
人は「永遠の生」を念うべきであり、
そうする権利がある。
なぜなら、永遠の生についての私の堅い信仰は、
人は努むべきもの、働くべきものという考えから出発する。
私が生涯の終わりまで休みなく働いたら、
今の存在形式が私の精神をこれ以上、支え得なくなった時、
自然は私に別な存在形式を与える義務があるからだ。

ゲーテは偉大な詩人、作家であったばかりでなく偉大な自然科学者でありました。有名なニュートンの光学理論に噛みついて膨大な『色彩論』を書きました。まだ学生の時代に医学部の解剖教室の解剖に立会い顎間骨を発見しました。ゲーテは「目の人」ともいわれ、彼はイタリアの長い旅の中で、植物の観察を続け、植物の根本現象という発想をうちたて、植物の根も花もすべて葉の変形であると主張します。
今日に至って一年中苺が市場に出まわるようになった技術は、このゲーテの発想にヒントを得たものだといいます。

ゲーテは、次のように主張します。

「分析ばかり夢中になって総合を敬遠する世紀は、正道を学んでいるとはいえない。呼吸のように呼気と吸気が一体となってこそ、学問に生命をつぎこむことができる。

間違った仮説もないよりましだが、仮説が固定化された疑念をさしはさむことを許さないのは一種の信仰告白であり、もうこれは不幸であるばかりか、幾世紀にもその被害を及ぼすことになる。

専ら分析ばかりを事としていると気がつくまいが、肝心な事は分析は総合を前提としていることだ。

最近の科学は自然の結合したものを分離する事に主眼をおいている。

そのため自然を要素に分解してしまい、自然としての総合を放棄していることである」と自然科学論集の中で述べています。

最近も北見工業大学でシステム工学を講ずる小林正義教授が、「ニュートンからゲーテへの脱出—生命産業としての農業生産への挑戦」の提言を発表しました。農業科学界が相変らずニュートン的発想に執念を燃やしているのに、工業科学界から、農業こそゲーテ的発想に転換をと主張していることは感動です。

大量生産、高効率（ニュートン的思考）といった無限定な工業化は既に生産力の限界を示し、肥料の増投（投入）は食糧増産（産出）に結びつかないばかりか環境破壊を進めていると、レスター・ブラウンの報告は提示しています。

注釈

＊注釈は本文の中で初めて出てきた時に付けています。配列はあいうえお順とし、敬称は略させていただきました。又本人と深く関わった方、文中重要であると思われる事柄については詳しく解説しました。

＊アーサー・ヤング
1741～1820　イギリスの農学者。輪作農法の普及に一生を捧げた。囲いこみとそれに基づく大農経営の熱心な主張者でもあった。著書『農業経済』『農民暦』『政治算術』ほか。

＊愛生園
長島愛生園参照。

＊会津八一（あいづ　やいち）
1881～1956　歌人、書家、美術史家。明治39年早稲田大学英文学科を卒業、新潟に帰り英語教師になったが、同43年早稲田中学に転任。大正10年頃から奈良美術の研究に従事。同13年第一歌集『南京新唱』を刊行。古代芸術への憧憬を盛り込む独自な歌格をもつ。昭和6年早稲田大学文学部教授。

＊アウトバーン
ドイツの高速自動車専用道路。ヒトラーが第二次大戦に備え、初めて建設した。

＊暁烏敏（あけがらす　はや）
1877～1954　明治の名僧・作家。明治10年石川県松任市生れ。京都で仏教を学び、当時の仏教界が形式にとらわれ、本来の教えから離れていると批判。生涯の師、清澤満之のもとで浩々洞を創設し、月刊『精神界』の編集活動の中心となり、当時の思想界に大きな影響を与えた。

＊浅野晃（あさの　あきら）
1901～1990　滋賀県生れ。東京帝国大学法学部卒業。西田哲学の影響をうけて東大「新人会」に入会、産業労働調査所で野呂栄太郎、志賀義雄らと日本共産党再建期に活動した。昭和3年の三・一五事件直後に検挙されたが、未決収監中に転向した。同9年日本浪曼派、同12年新日本文化の会に所属。同20年北海道勇払の国策パルプにいた水野成男に誘われて疎開、地域の知識人の多くに影響を与えた。戦後、立正大学教授。

＊旭川大学地域研究所
旭川大学は１９６８（昭和43）年、旭川市に北日本学院大学として開設されたが、45年旭川大学と名称を変更。開学４年目の46年に経営が破綻したが、教職員と地域の協力による自力再建を図り、52年に再建計画を達成。この年、新生旭川大学の教学改善に資する教育研究の拠点として旭川大学地域研究所を設置。事実から学ぶ学風を創造するために地域をフィールドとして調査研究し、その成果を教育と地域に還元しようと企図した。そのため、木呂子敏彦氏らを学外から特別研究員として招き、地域研究に取り組み、研究成果は旭川大学地域研究所年報として公刊された。

＊アドニス合唱団
帯広アドニス少年少女合唱団が正式名。小中学生を主体とした合唱団で「サイロの会少年少女合唱団」として発足し、昭和42年来日したソフィア少年少女合唱団と共演以来、東京西六郷、ＮＨＫ児童合唱団などを招きジョイントコンサートを開催。東欧各国合唱団とも演奏を行った。全日本合唱連盟コンクールで銀賞を受賞。ブルガリア公演の時持ち帰った民謡はそれをベースに、その後作曲家クラシミール・キュルクチィスキーが編曲し、岩井照清訳詞で「小鳥はうたう」として１９８７年音楽の友より出版された。

＊安孫子孝次（あびこ　こうじ）
１８８２〜１９７３　琴似の屯田兵村（現・札幌市西区琴似）生れ。札幌農学校に入学、東北帝国大学農科大学を卒業、農林省試験場野付牛分場長となる。昭和２年北海道農業試験場長となり、寒冷地農業や馬鈴薯、水稲、麦などの品種改良に貢献。さらに経営試験農場制を創設して北海道農業の特質を明らかにした。退官後は北海道農会会長となったが、17年衆議院議員に推され、さらに19年琴似町長に選任された。戦後、すべての公職を去って帰農。35歳でキリスト教の信仰生活に入り、24年札幌琴似教会を結成、自宅を仮会堂とした。26年北星学園の園長に就任、さらに北海道教育委員会の委員長。

＊安孫子賞
北海道の農業振興に尽力した安孫子孝次を顕彰する会によって、農業発展に寄与した人々の地道な業績に毎年贈られる。

＊アルテリ制
ソビエト連邦の集団農場、コルホーズの一形態（トーズ、アルテリ、コムーナ）でアルテリが基本形態とされている。

＊アルブレヒト・テーア
アルブレヒト・ダニエル・テーア　１７５２〜１８２８　ドイツの農学者。近代農学の始祖といわれる。初めは医学を学び、しだいに農業に関心をひかれる。ベルリン大学新設に際し、農学講座教授となる。『合理的農学の原理』は名著。

＊飯島安三郎（いいじま　やすさぶろう）
１８９４（明治27）年埼玉県生れ。日大卒業後、外交官となり中国などで活躍。１９２５年北京での日ソ基本条約では芳澤全権の右腕として中国語、英語、ロシア語などを駆使し会談のお膳立てをした。東京で弁護士資格をとる。昭和３年突然一等書記官の職を辞して、北海道下音更に入植。畑作や酪農に従事する傍ら、月刊の『無量光』を発行。昭和10年には帯広に移って弁護士を開業。正義感の強い弁護士として知れ渡った。

＊E.Howard（E・ハワード）
１８５０〜１９２８　「田園都市」を提唱した『明日の田園都市』の著者。その思想は、都市農村のよいところを兼ね備えた都市の建設。周囲を農業地帯によって取り囲まれ、健康的な住居、土地は公有化、開発利益は社会的に還元され、産業を持つ自立都市を目指した。彼の提唱した田園都市はレッチワースやウェルウィンのイギリスの都市が典型とされる。この思想は日本に明治末期輸入され、関東大震災後、田園調布などのまちづくりがなされた。

＊イールズ事件
占領軍総司令部民間情報教育局顧問Ｗ・Ｃ・イールズは文部省を通して全国20余の大学を巡回講演し、共産主義的思想を持つ教官を大学から追放すべしと主張、各所でトラブルを起していた。北大には１９５０年５月15日に来て講演をすませたが、翌日の公開懇談会で学生が質問を求めて止まず、さらに自由討論を要求したため会場を変更、車で移動しようとしたイールズは職員、学生に取り囲まれ、これをアメリカ軍ジープが包囲する混乱となり、懇談会は中止になった。このため北大実行委員10数人が警察署を通じＧＨＱに連行され、退学４人、無期停学４人、停学１年１人、譴責処分１人の処分が行われた。

＊池本喜三夫（いけもと　きさお）
１８９９〜１９８８　淡路島生れ。明治38年小学校入学と同時に親の開拓と一緒に大樹町生花苗に入植。大正２〜６年家の農業を手伝う。同６年空知農学校入学。卒業後同10年まで農業に従事し、同年東京農業大学に入学。同13年同大卒業とともに昭和６年までフランスに留学。昭和５年フランス国立ナンシー大学で農業経済学を学ぶ。同７年東京農大講師、同11年教授となる。又この間アフガニスタンの農政顧問兼カブール大学の教授に招へいされ、同12年東京農大辞職。カネボウに入社、農務課を創設した。同35年池田首相の農政顧問となり同40年（財）新農政研究所を設立。

＊石井鶴三（いしい　つるぞう）
１８８７〜１９７３　彫刻家。石井柏亭の末弟。新聞小説の挿絵で知られた。東京芸術大学教授。

＊石原莞爾（いしはら　かんじ）
１８８９〜１９４９　陸軍軍人。山形県に生れ、陸軍大学校を卒業して日蓮信仰に入り、陸大教官になると独自の世界最終戦論を

となえた。1928年関東軍参謀として旅順に着任。自論の最終戦の口火となる満州事変惹起のため準備をすすめ、満州国設立に主役を演じた。その後、産業の飛躍的発展、生産力の大拡充案を作成。その計画実現までは不戦、提携などの外交政策をとって最終戦に勝つこととし、日中戦争の不拡大を唱えるが容れられなかった。1941年予備役編入、この前後から東亜連盟運動に没頭した。

＊一燈園（いっとうえん）
西田天香が明治38年長浜愛染堂で断食中、乳児の泣声に無心の境を悟り、京都府鹿ヶ谷に開設した施設。懺悔生活を始め、〈おひかり〉による内面的救済を求め、無所有の共同生活をめざした。のちに京都山科に移り、本部光泉林、諸学校施設などをもち、多数世帯の大家族的生活が実践されている。

＊井手久登（いで　ひさと）
1936（昭和11）年生れ。東大大学院修了、同助教授を経て1984年教授。現在東京大学名誉教授、早稲田大学客員教授。専門は緑地計画。都市計画中央審議会専門委員などをつとめる。「景域」という概念を提唱するなど景観問題に早くからとり組む。

＊稲葉秀三（いなば　ひでぞう）
1907～1996　京都生れ。京大哲学科、東大経済学部卒。国民経済研究協会会長、経済調査会会長、経済安定官房次長、サンケイ新聞社長を経て産業研究所理事長。産業政策、エネルギー政策など戦後経済復興、安定に果たした評価は高い。

＊伊波普猷（いは　ふゆう）
1876～1947　琉球藩那覇西村（現・那覇市西本町）生れ。第三高等学校を経て、東京帝国大学文科大学文学科言語学専修を卒業、帰郷して県立沖縄図書館に勤務、大正10年館長となった。のち、再び上京して柳田国男や折口信夫などと親交をもちながら沖縄の歴史、民俗、言語、文学、芸能など幅広い研究を続け、沖縄研究の開拓者となった。「日琉同祖論」を主張、その学問は「沖縄学」と称されている。

＊違星北斗（いぼし　ほくと）
1902～1929　本名は瀧次郎。北海道余市郡余市町生れ。尋常小学校で担任の奈良直彌と出会い、終生指導と影響を受ける。卒業後は木材人夫や鰊漁場と出稼ぎの生活を送る。17歳の時、新聞の歌壇に掲載されたアイヌの生活を歌った短歌に憤慨し、アイヌの地位向上に目覚める。大正13年22歳の頃から句誌に俳句を投稿。この年西川の『自働道話』の読者であった奈良直彌に西川光二郎を紹介され、上京を促される。翌年上京、西川の推薦で高見沢清の東京府市場協会に勤める。在京中金田一京助博士の知遇を得てアイヌ研究の最新知識を吸収しえたものの、アイヌ民族復興の使命を痛感し、北海道に帰る。道内各地を回りアイヌの地位向上の運動を始める。昭和2年ジョン・バチェラーが開設した平取

の幼稚園を手伝いながら、土器発掘等のアイヌ研究に従事。アイヌ青年修養会をつくり機関誌『コタン』を発刊。10月には彼の短歌が小樽新聞に初めて掲載され、選者の並木凡平の高い評価を受ける。11月から木呂子敏彦の叔父小樽高商教授西田彰三が小樽新聞に余市フゴッペにおいて発見された洞窟の陰刻画が、アイヌの祖先に由来する文字であるとの説を連載した。これに対し12月並木凡平が文芸欄でアイヌ歌人違星北斗を紹介し、西田説にアイヌとして疑問を提出、近くその研究を発表すると予告。北斗は陰刻画はアイヌより以前の先住民族のもので、アイヌにはエカシシロシという氏族を示す宗教的な記号はあるが、文字はない。又アイヌは決して落書きなどしない。葬制も屈葬の風習はないとの持論を展開し反証した。論争の渦中でも、二人とも洞窟の保存を願ったが、鉄道用地のまま放置され風化した。現在の洞窟は昭和26年に別に発見されたもの。北斗はその後全道各地のコタンを回り、アイヌ研究に没頭するが、病を得て昭和4年27歳の若さで亡くなった。没後昭和5年後藤静香の希望社より遺稿集『コタン』が出版された。同29年木呂子敏彦が教育委員として二風谷小学校建設に関わったのを機に、アイヌの先駆者違星北斗を顕彰するため、『違星北斗遺稿集』を刊行、違星北斗歌碑建設を呼び掛けた。しかし、歌碑建設は当時地元の理解が得られず、昭和43年地元にてアイヌ文化、アイヌ語復興に尽力する萱野茂の活動もあって、ようやく実現した。

＊今西錦司（いまにし　きんじ）
1902〜1992　京都生れ。人類、生態、動物学者。昭和3年京都帝国大学農学部卒業。同29年より京大人文科学研究所員、34年に同所教授、37年京大理学部教授を併任。40年に退官後、岡山大学教授を経て岐阜大学総長を務めた。昭和8年頃のカゲロウの種間の比較観察による発見から、棲み分けの理論を唱え、種社会の概念を基礎とする生物社会構造の理論をたてた。戦後は、京大理学部と人文科学研究所においてニホンザル、チンパンジーなどの研究を進め、日本の霊長類社会学の礎を築いた。人類学、霊長類学にとどまらぬ広い分野にわたって多くの後進を育てた。近年は、西欧の生存競争を強調する進化論を批判し、種社会の主体性と共存の理論に立脚する独自の進化論を唱えた。登山家、探検家としても知られる。

＊今村繁三（いまむら　しげぞう）
1877〜1956　高等師範付属中学校卒業後英国に渡り、リース校を経てケンブリッジ大学に学び、明治35年に帰国後、今村銀行頭取に就任。中学同級生の中村春二の教育理念に共鳴し、同級生の岩崎小弥太とともに精神的・資金的な援助を惜しまず、中村春二は同45年4月、池袋に成蹊実務学校を創立。大正3年成蹊中学校、翌4年成蹊小学校、6年成蹊実業専門学校、成蹊女学校を開設し、今日の成蹊学園の基礎を確立。中村春二が大正13年に48歳で早逝後、その教育事業は岩崎小弥太、今村繁三に引き継がれ、所在地も武蔵野村吉祥寺の現在地に移転し、成蹊学園は戦後

の学制改革を経て、現在小学校から大学・大学院までの総合学園に発展。

＊いやさか音頭（弥栄音頭）
積丹半島を中心とする沿岸部の漁村で、盆踊り唄としてもうたわれ、ニシン魚場でニシンを揚げた後、網に産みつけられた数の子を棒で叩き落とす時にうたうので『子落とし音頭』ともいう。『鯵が沢甚句』に「イヤサカサッサ」のはやし言葉のついたものが、津軽人たちによって持ち込まれたものと思われている。

＊上野満（うえの　みつる）
１９０７〜１９８５　福岡県嘉穂町生れ。大正15年武者小路実篤提唱の新しき村運動に共鳴、宮崎県日向の新しき村に入村。昭和４年埼玉県霞ヶ関村（現・川越市）での孤耕瞑想の生活から協同農場創設。同13年渡満、肇州県立指導農場長、扶桑義勇隊開拓団長、終戦後シベリアに抑留される。同22年復員後、新利根開拓農業協同組合設立し組合長に就任、新平須協同農場を経営。同31年新利根協同農学塾創設、塾長。日本農業協同化普及協会を設立する。

＊ウケ
受口（ウケ）といい、木を倒す方の根元の中心部まで斧を打ち込む。

＊薄井清（うすい　きよし）
昭和24年に農業改良普及員として東京都に採用される。自転車に乗って農家廻り、休日もとらず「農業不休員」と云いながら農家とともに奮闘する。「農家と共に考える」の時代から、減反の頃には「行政と共に歩む普及員」にされていることに嫌気がさし42歳で退職、生れ故郷東京都町田市で帰農。

＊江渡狄嶺（えと　てきれい）
１８８０〜１９４４　近代日本の独創的思想家。青森県五戸村生れ。東京大学時代に「朝鮮半島論」を発表。日本の興論を圧倒していた朝鮮領有論に対して朝鮮永久中立論を主張。関東大震災時、３人の朝鮮人留学生を自宅に匿う。そのうち２人は朝鮮解放後、『コリア評論』を主宰して朝鮮中立化運動を行った金三奎氏とその兄であった。

＊えびす講
えびすは本来商業上の神。この神を信仰したのが講。道内ではこの講が漁業者を中心に10月20日に行われ、祭壇を設け関係者を招いて祝宴を張るが、祝い膳はサケ料理をもってし、棒飴15本ほどを引き物として持ち帰る風習があった。

＊エミール・フェンガー
デンマークから道庁の招きにより来道し、主畜農業経営を示した農家。道庁はゆきづまった北海道農業再編のため、ドイツとデン

マークから模範農家4戸を招いて営農、経営、家事を公開して道民に学ばせた。1913年から5ヵ年間、北海道農事試験場圃場（琴似村）に5ヘクタールの土地を与えられ、大型農機具を使い燕麦、馬鈴薯、家畜ビート、牧草、玉蜀黍を6年輪作し、耕馬2頭、乳牛6頭、犢6〜8頭、鶏15羽を飼育した。フェンガーはコペンハーゲン農業専門学校を卒業し、スプランゲラップ農学校の教師をするかたわら、10ヘクタールの自農場を経営しており、妻子をともない5人で来道した。

＊L・Migge
レーベリヒト・ミィジェ参照。

＊エルナ・マイヤア
小池新二が昭和12年に邦題『新興家事学』として翻訳した『ダスノイエ・ハウスハルト（新興家政）』の著者。

＊エントロピー
熱平衡にある系で準静的に加えられた熱量を絶対温度で割った値をエントロピーの増加分と定義する。熱学上の概念。情報理論などにも用いられる。

＊大木惇夫（おおき　あつお）
1895〜1954　広島県生れ。広島商業学校卒業、銀行に勤めながら詩作。上京して博文館に勤め、北原白秋について詩を学ぶ。『詩と音楽』や『近代風景』などに作品を発表。細かい抒情のとおった作風で小曲を書いたが、日本的伝統に傾き、また多くの軽妙な歌謡をつくった。

＊大藤時彦（おおとう　ときひこ）
1902〜1990　早稲田大学文学部社会学科中退。志願兵となったが、除隊後、柳田国男の知遇を得て昭和8年「民間伝承の会」同人となり、翌年「木曜会」に参加して幅広く民俗研究に従った。昭和23年民俗学研究所理事となり、翌年民間伝承の会を日本民俗学会と改称してその代表となった。柳田の蔵書などが成城大学に寄贈されたことを機に、同大学の文芸学部文化史コースが新設されて同教授に就任、民俗学の指導にあたった。

＊大間知篤三（おおまち　とくぞう）
1900〜1970　昭和2年東京帝国大学文学部独文学科を卒業。志願兵として入隊したが、三・一五事件に連坐、3年の刑に服役した。転向して柳田国男のもとで民俗学の研究を進め、昭和14年満州へ渡り建国大学の講師、助教授から教授となった。北アジア諸民族のシャーマニズムの調査研究に従事。戦後、富山高等学校の講師となり、柳田のもとで研究を再開する。民俗学研究所で柳田とともに『民俗学辞典』の編集、刊行、学会機関誌『民間伝承』の編集に従事など、日本民俗学の中心的存在であった。

＊尾崎喜八（おざき　きはち）
１８９２〜１９７４　詩人。東京生れ。詩集『空と樹木』など。語学堪能で訳詞も多い。

＊長田新（おさだ　あらた）
１８８７〜１９６１　長野県生れ。教育学者。日本におけるペスタロッチ研究の第一人者。京大哲学科卒。同大助手、ドイツ留学ののち、昭和５年広島文理大教授。同20年同大学長。「日本子どもを守る会」会長も務めた。

＊小田内通敏（おだうち　みちとし）
１８７５〜１９５４　日本の郷土学、郷土地理学を確立するために奮闘した在野の人文地理学者。郷土研究会、郷土会をとおして最も熱心な会員であり、終始一貫幹事役を務めた。大正７年『帝都と近郊』で東京西部近郊村落を取り上げ、３年間の実地調査に基づき、大都市の郊村が都市化されていく複雑な生態をみごとに叙述するとともに、将来の都市計画の樹立を促進しようという遠大な抱負を示した。小田内の目指す地理学は、「郷土地理学」を根拠に「地人の生きた関係」を求めようとするものであった。

＊折口信夫（おりくち　しのぶ）
１８８７〜１９５３　国文学者、民俗学者、詩人、小説家。大阪府西成郡木津村（現・大阪市浪速区鴎町）生れ。明治43年国学院大学国文科を卒業。大阪で中学の教員となったが、大正３年上京し、その翌年柳田国男に会い、民俗学の中に新しい学問の方途を見いだした。同11年国学院大学教授となり、昭和３年慶応義塾大学兼任の教授となる。その学問は国文学、民俗学、神道学、芸能史などの領域にわたり、広い視野と鋭い洞察力によって古典・古代の民俗学的研究に独自の業績を残した。一方、歌人・詩人としての釈迢空は、伊藤左千夫の門流で根岸派歌人として出発したが、大正13年歌人の集合誌『日光』が発刊されるや同人となった。

＊オルセン
１８０９年生れのアメリカの教育学者。カリフォルニア州立大学教授ほか。進歩的な学者12名による『学校と地域社会』の著者の一人で、生活中心の学校として地域社会学校をとらえた。この考えは、戦後の日本の地域教育に大きな影響を与えた。

＊カール・ベック
昭和26年、カール・エスター・ベック夫妻は、帯広市西７条南17丁目にメノナイトによる十勝開拓伝道の鍬を入れた。日本メノナイト教会第一号の宣教師館の建設工事は、地下室の根掘りとアッシュブロックの手造りによって始められ、６月に始まって９月に宣教師館の一部屋が出来上がりベック一家はそこに移った。

＊偕行社（かいこうしゃ）
旧日本陸軍の将校たちの親睦機関。明治10年創設。第二次世界大戦後解散。昭和27年、親睦会的組織として復活。

＊貝原益軒（かいばら　えっけん）
１６３０〜１７１４　筑前国福岡城内で右筆役寛斎の五男として生れる。幼少時に父の指導で薬の性質を知り、和算書を理解し、軍記物や実用向きの辞書である節用集などを愛読して、即事、即物的思考方法が養われた。18歳で江戸在勤となった父を手助けするため上府、林鵞峯の知遇を得て朱子学に向い、藩費による京都留学で山崎闇斎、松永尺五、木下順庵を知り、本草学者たちとも交際し、経験・実証主義的な学風を体得した。この頃から儒書の講議や藩政に参与する一方、『黒田家譜』や『筑前国続風土記』の編纂に従事する。『養生訓』『学道訓』『大和本草』そして『女大学』などが有名。主要著書のほとんどは50歳以後の業績である。

＊カウンティ・カレッジ
イギリスにおける教育制度の一つ。１９４４年の教育法は、15〜18歳の青年のうち、全日制の学校等に就学していない者のために、一般教育・体育・職業訓練を含み市民性を養う定時制教育のセンターとして、カウンティ・カレッジを設けることを県の教育当局に義務づけたが、財政上の理由から実施をみるに至らなかった。

＊賀川豊彦（かがわ　とよひこ）
１８８８〜１９６０　神戸生れ。４歳の時両親と死別。徳島中学在学中に宣教師マヤスによってキリスト教に入信。伝道者を志して明治44年神戸神学校を卒業。大正３年アメリカに留学、プリンストン大学で神学の他に心理学、生物学を学び同６年帰国。友愛会に加盟し、組合運動の第一線で活躍した。その後、労働組合運動から農民組合運動に転じた。関東大震災救援のため東京に移った頃から宗教活動を再開、昭和４年「神の国運動」の推進者となって全国伝道を行った。戦争中は反戦論を説いて官憲の圧迫を受け留置されたりしたが、戦後貴族院議員に勅撰された。日本社会党の結成や新日本建設キリスト教運動、世界連邦運動など活動範囲は広く、伝道も欧米諸国から東南アジア、南米にまで及んだ。

＊梶浦福督（かじうら　よしまさ）
１９１２〜２００１　明治45年、砂川市で農家の三男として生れる。小学２年の時父の移住で中札内村売買へ。高等小学卒業後は農家を手伝うがまもなく召集。日華事変で大陸を転戦。帰国後、青年学校教員の資格をとり昭和17年から23年まで弟子屈青年学校の教壇に立つ。23年中札内に戻って農業に精進し、たちまちリーダーとしての頭角を表わす。同28年には中札内農協の組合長に「中札内方式」と呼ばれる独特の農協経営に取り組んだ。北農連合会で役員も歴任。

＊加藤秀俊（かとう　ひでとし）
１９３０（昭和５）年生れ。１９５３年一橋大学（旧制）卒業。スタンフォード大学コミュニケーション研究所員、英国ケント大学客員教授、京都大学助教授、ハワイ大学東西コミュニケーション研究所主任研究員、学習院大学法学部教授、放送大学教授を経て、現在、文部省放送教育開発センター所長。

＊加藤善徳（かとう　よしのり）
１９０７～１９８７　福島県出身。福島師範卒業後、劇作家を志し上京。東洋大学在学中に岸田國士の弟子となる。後藤静香の希望社運動に参加。請われて『生活』の編集者となる。本間一夫の点字図書館運動にも深くかかわった。

＊加藤顕清（かとう　けんせい）
１８９４～１９６６　岐阜県生れ。北海道深川市に移住。大正２年旧制上川中学校（現旭川東高）卒業。中原悌二郎の影響を受け、大正４年東京美術学校彫刻科に入学、卒後油絵科に再入学、卒業。大正10年第３回帝展に「静寂」が初入選、昭和27年「人間像」で芸術院賞を受ける。昭和37年、日本芸術院会員。平櫛田中と共に、中原悌二郎の作品を旭川にもたらすため尽力し実現させた。旭川市内に数多くの作品が設置展示される。

＊金子智一（かねこ　ともかず）
１９１４～２００２　山形県遊佐町生れ。旧制酒田中学卒後、京都の里見日本文化研究所入所。木呂子敏彦とは17歳の時雑誌『青年』の「手紙の友会」というグループ活動で、同年齢５人１組の文通相手の一人として知り合い、昭和13年敏彦上京後初めて上野で対面する。同14年倉田百三の「生きんとての会」に参加、陸軍画報社入社。同17年陸軍報道班としてインドネシアに赴き、終戦時インドネシア独立運動に加担したことから、連合軍に逮捕され刑務所に収監される。翌年釈放され帰国。郷里に戻り、再度上京。同25年日本インドネシア協会設立、常務理事。翌26年（財）日本ユースホステル協会の設立に参加、常務理事就任、その後理事長、副会長、会長代行、常任顧問を歴任。49年「日本歩け歩け協会（現日本ウォーキング協会）」第２代会長に就任。58年に環境庁認可社団法人となるが、ボランティア精神による受益者負担と自助努力をモットーに、国庫補助は一切受けない「金子スピリット」で国際マーチングリーグ（ＩＭＬ）、日本マーチングリーグ（ＪＫＬ）を創設し、世界に楽しいウォーキングの普及を目指して積極的に事業を展開した。同63年インドネシア政府より最高功労勲章「ナラリア勲章」を授与される。

＊金子きみ（庄司きみ）
歌人、作家。大正４年下湧別村にハッカ農家の二女として生れる。旧姓庄司。中山正男夫人の妹。尋常小を終え口語短歌を始める。昭和14年歌集『草』を出版。昭和15年金子智一と結婚。『薮踏みならし』『一粒の自負』などの他『東京のロビンソン』『ザイルの端をつかんで』『枯れ草』で第11回平林たい子賞受賞。

＊叶芳和（かのう　よしかず）
１９４３（昭和18）年生れ。一橋大学院経済研究科終了。（財）国民経済研究協会理事長、会長を経て、現在拓殖大学国際開発学部教授、総合研究開発機構客員研究員。エコノミストとしては強気の経済見通しで知られる。昭和50年年代後半、農業は「競争原理を導入すれば、輸出産業になれる」との立場から発言、農業行

政のみならず、産業界にも波紋を起す。

＊上川離宮
明治18年、岩村通俊北海道庁長官が皇室の別宮を造営しようと「北京（ほっきょう）を上川におくの議」を建議。明治23年美瑛川と忠別川間の神楽岡が造営予定地となったが、政府内の争いなどにより実現しなかった。

＊上出松太郎（かみで　まつたろう）
1900〜1990　函館生れ。大正8年横須賀海兵団に五等機関士として入団。首席で卒業。戦艦「山城」に乗り込む。同14年、音更村で最初の民間飛行場が作られ、北海道飛行協会が設立。翌15年ここの機関士となる。昭和2年、二等飛行操縦士試験に合格。同9年、一等飛行操縦士となり北海タイムス社の札幌―旭川の定期郵便航空に活躍。同11年、同社の札幌―帯広間の定期郵便航空開始。同19年、霞ヶ浦海軍航空隊の教官となり、グライダーの操縦を教える。同21年、広島村中の里に入植。

＊亀井勝一郎（かめい　かついちろう）
1907〜1966　函館市生れ。東京帝国大学美術科入学後すぐにマルクス主義芸術研究会に入り労働運動に参加。昭和3年大学を自主退学し、三・一五事件のあと治安維持法違反で検挙され、転向して出所。1932年プロレタリア作家同盟に加わり評論家として活躍。保田与重郎らと『日本浪漫派』を創刊し日本の古美術、古典、仏教などに関心を深め『大和古寺風物誌』にまとめた。

＊茅誠司（かや　せいじ）
1898〜1978　神奈川県愛川町生れ。東北帝国大学を大正12年卒業。附属金属材料研究所助手となり、本多光太郎の指導で磁性体の研究に従事した。昭和3年ドイツに留学、ベルリン物理工学研究所でニッケル、マンガンの合金の磁性を研究し、帰国した同5年新設の北海道帝国大学理学部に赴任。翌6年教授となる。同17年東京帝国大学教授、同32年東京大学総長となり、2期その任にあった。

＊萱野茂（かやの　しげる）
1926〜2006　沙流郡二風谷で貝沢清太郎・はつめの三男として生れる。アイヌの民具や民話の収集を行い、自費で二風谷アイヌ文化資料館を開設。集めた民具は唯一文化庁の指定となる。昭和54年からアイヌ語教室を始め、アイヌ語普及に努める。平取町会議員、参議院議員を務めた。作品に『ウエペケレ集大成』『萱野茂のアイヌ神話集成』『アイヌの民具』『アイヌの碑』など。

＊カルチ・パッカー
整地、鎮圧のための農機具。耕起、砕土した後、残った土塊をさらに細かく粉砕するとともに、表土を圧迫することによってその保水力を高めて発芽を良好にするための鎮圧に使用する。ソロバン玉状の車輪を密接することにより破砕力を高め、風による水分

蒸発を防ぐ効果を大きくするよう作られている。

＊河井寛次郎（かわい　かんじろう）
１８９０〜１９６６　島根県生れ。東京高等工業学校窯業科卒業後、京都市陶磁器試験場の技師となり、大正９年独立。柳宗悦、浜田庄司らと民芸運動を提唱し、その実践者として陶芸を展開。昭和12年パリ万博、同32年ミラノ国際工芸展でグランプリをとるなど国際的評価も高い。

＊カン
鐶、材木の引き出し、吊り下げなどに用いる鉄鐶。

＊ガンタ
主に、造材現場で伐採した木を移動させたり回転させたりするために使用する道具で、トビの補助具として使用される。

＊菊芋（きくいも）
北米原産のキク科の植物。花は菊に似て、根はイモ状。ブタイモとも呼ばれ家畜の餌になった。ビタミン・ミネラル・酵素を含み、非常に生命力の強い植物。「天然のインシュリン」と呼ばれているイヌリンを多く含む。

＊菊池暁輝（きくち　あきてる）
１９０５〜１９８３　詩人。岩手県盛岡市生れ。１９３４年盛岡で宮沢賢治の会を創設し、機関紙『イーハトーヴォ』を発刊して、賢治精神の普及活動に情熱を燃やした。賢治子供会の結成と指導は全国的に賢治愛好者を広げた。詩集『木心居』

＊旭明社（きょくめいしゃ）
十勝旭明社のこと。大正11年、帯広町に十勝各地のアイヌ代表者が集まり、アイヌ民族の文化経済活動の指導、向上を目的に設立されたもので、理事社長に喜多章明、理事に中村要吉や伏根弘三らが就任した。北海道アイヌ協会の結成を主催するなど、先駆的な役割を果たした。

＊桐原葆見（きりはら　しげみ）
１８９２〜１９６８　広島県生れ。産業心理学者、文学博士。大正８年東京帝大心理学科卒業。労働科学研究所所長就任。その後、日本産業教育学会を創立し理事長。日本女子大学教授。日本の産業心理学の先駆者。

＊キリル文字
ギリシャ人宣教師キュリロスが福音書などのスラブ語訳のために考案したグラゴール文字をもとに、10世紀初めにブルガリアで作った文字。当時のギリシャ語が基礎で、現在のアルファベットはこれを改良したもの。

＊ギルドホール
イギリス・ロンドンのシティは中世当時から特権を有する独立自治区で、市庁をギルドホールという。これはギルド（同業組合）から生れたもので同業組合は全部で１００あり、そのうち12が大手同業組合（Great Companies）と呼ばれている。ギルドホールの大広間の天井近くにそのギルドの紋章の旗と盾がかかっている。

＊金太郎鉞（きんたろうまさかり）
柄の短いまさかり。

＊金田一京助（きんだいち　きょうすけ）
１８８２〜１９７１　岩手県仁王村（現・盛岡市土渕）生れ。明治37年東京帝国大学文学部に入学。上田万年、新村出の影響を受けて言語学を学び、同40年卒業、この頃北海道と樺太の旅行でアイヌ語研究を生涯の目標に定めたという。大正２年、柳田国男の知遇を得て雑誌『郷土研究』創刊に関わり、この年東京帝国大学の講師となった。以来、北海道や樺太各地のユーカラを採録。金成マツ、バチェラー八重子、知里幸恵らの協力を得て『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』を出版。国学院大学教授となった。戦後、27年国語審議会委員として現代かなづかいの制定に貢献。42年日本言語学会会長に就任。

＊草野心平（くさの　しんぺい）
１９０３〜１９８８　福島県石城郡上小川村（現・いわき市小川町）生れ。慶応義塾普通部を卒業し中国に渡り、広東の嶺南大学に学んだ。大正12年詩集『廃園の喇叭』を刊行、同14年同人雑誌『銅羅』を広東で創刊した。日本に帰り、昭和３年『学校』を創刊、同10年同人として詩誌『歴程』に参加したが、生活のためにさまざまな職業を経験した。詩風は雄大で、その感覚は異色であった。宮沢賢治や八木重吉の真価を明らかにし、また、高村光太郎に私淑していた。

＊クズネツォフ
１９０４〜１９７４　ソ連海軍軍人、ソ連邦海軍元師。１９３７年ソ連海軍総司令官（37歳）。１９４７年太平洋艦隊司令官に降等後、１９５１年再びソ連海軍総司令官に再帰。１９５５年ソ連邦海軍最初の元師となる。１９５６年ニキタ・フルシチョフに解任される。

＊久保栄（くぼ　さかえ）
１９００〜１９５８　札幌市生れ。大正12年東京帝国大学独文科選科に入学、昭和元年に卒業して築地小劇場文芸部に入り小山内薫に師事。ドイツのハウプマン、カイザーなどの自由主義、表現主義の戯曲を翻訳した。築地小劇場分裂後、新築地劇団に参加したが退団。同５年日本プロレタリア演劇同盟（プロット）に加わり、先進国の労働者演劇の研究、紹介をしながら演出。さらに脚本を創作。『新説国姓爺合戦』『中国湖南省』『五稜郭血書』『吉野

の盗賊』などを発表した。同9年プロットの解散、新協劇団の結成にあたっては文芸演出部を指導、旗揚げ公演『夜明け前』を演出。同13年初演の『火山灰地』は戦前におけるリアリズム戯曲の最高傑作と評価された。同15年劇団解散を強制され、主要メンバーと共に検挙された。戦後ただちに東京芸術劇場結成に参加、『林檎園日記』を発表。『日本の気象』演出後は入退院をくり返した。長編小説『のぼり窯』執筆中の昭和33年5月、自殺。

＊窪田空穂（くぼた　うつぼ）
1877～1967　松本中学から東京専門学校（現・早稲田大学）に入学。卒業後、新聞や雑誌の記者となって作歌にいそしんだ。明治33年『文庫』に投稿して与謝野鉄幹に認められ、『明星』創刊にあたっては客員の待遇をうけたが、ほどなくして離れた。同38年第一歌集『まひる野』を刊行。その後、国木田独歩や田山花袋らと交渉をもって『文章世界』などに小説を発表したが、大正3年『国民文学』を創刊して再び作歌に戻った。大正9年早稲田大学文学部国文学科の講師に招かれ、昭和元年教授となる。

＊窪田雅章（くぼた　まさあき）
倉田百三の「生きんとての会」会員、影山正治の大東塾の一員。倉田百三の日中戦争下の大陸旅行の案内役。戦後は国民外交協会を推進。

＊久保政夫（くぼ　まさお）
広島県の「砂谷酪農」、「砂谷牛乳」創業のリーダー。大正初期、文学を志し上京したものの、体調を崩したことにより健康回復のためによく口にした牛乳に注目して農業に転身、伊豆の八丈島において乳牛飼育を始めた。故郷に残る末妹の死を契機に、夫人と23頭の乳牛とともに帰郷し、昭和16年、砂谷の地で「乳流るる里」を夢みて久保農場を拓き、酪農を始める。「酪農とは、草を乳にかえる農業である」と唱え、賛同する周辺の農民は一人、二人と役牛を乳牛へと代え、砂谷酪農が育っていった。戦争が激しさを増す同19年には、68戸により砂谷酪農組合を結成。終戦間もない25年には他に先駆けて牛乳処理施設「広島ミルクプラント」を建設し、直販もすることによって生産から消費までを自らの手で行う礎を築いた。「酪聖」と尊称されたが、平成2年惜しくも没した。

＊熊田恭一（くまだ　きょういち）
1921～1988　茨城県日立市生れ。東京大学農学部農芸化学科卒。農学博士。元名古屋大学教授。専門は土壌学、土壌微生物学者。

＊倉田百三（くらた　ひゃくぞう）
1891～1943　広島県比婆郡庄原町（現・庄原市）生れ。第一高等学校に入学したが、西田哲学に深く影響を受け、病いも加わって大正2年退学、西田天香の一燈園に入り労働と喜捨による生活に入った。同5年千家元麿、犬養健らと同人雑誌『生命の

川』を発刊。翌６年戯曲「出家とその弟子」は非常な反響をよんだ。以来、宗教的、倫理的な主題のもとに清新な作風の戯曲を発表し、独自の劇作家となった。また、大正10年『愛と認識との出発』を刊行。多くの作品は病苦との闘いと、参籠、参禅によって生み出されたものであり、愛と信仰を説く人道主義評論家としても活躍した。

＊クリフ・ハウス
サンフランシスコの歴史的建物で、フィッシャーマンズワーフにある。もともとは、１８６３年馬車を運転して海に来るアメリカの大統領や名士を出迎えるためにあった。これは１８９４年焼失し、２代目のクリフハウスは８階建てで、展望室もあって人気が高かったがこれも１９０７年の火災で焼失。現在のものは１９０９年に建てられレストラン、パブ、お土産屋がある。

＊グレゴリオ音楽
グレゴリオ聖歌。ローマ・カトリック教会で修道士や聖歌隊によって歌われる単旋律の典礼聖歌。

＊黒澤酉蔵（くろさわ　とりぞう）
１８８５〜１９８２　茨城県世矢村（現常陸太田市）に生れる。14歳の時上京。神田に上野清が主宰する数学院の学僕として住み込む。16歳のとき、足尾鉱毒事件を知り、学生鉱毒救済会に加わり運動に参加、当局の弾圧を受け館林警察署に逮捕６ヵ月収監される。明治38年北海道に渡り宇都宮牧場の牧夫となる。同42年札幌メソジスト教会で洗礼。教会で山鼻のリンゴ園主佐藤全七と知り合い、佐藤の紹介で山鼻に5反歩の土地と牛2頭を借り黒沢牧場を興す。同38年再渡米した宇都宮仙太郎からデンマーク農業を教えられ、グルントビーが提唱した三愛精神を知る。又農民のことは農民自らの力と努力でやり遂げるための共同体精神を学ぶ。大正10年から同13年まで北海道庁長官を務めた宮尾舜治にデンマーク方式による北海道農業の振興を進言。実際の経営を5年間契約で実演して貰うためデンマークおよびドイツから酪農家5家族を呼ぶ。同12年末宇都宮を中心に北海道畜牛研究会を結成。同14年5月17日に北海道製酪販売組合を設立。会長宇都宮、常務佐藤、専務黒沢。酪連は後に北海道興農公社、北海道酪農協同会社になり雪印になる。「健土建民」（酪農は資源循環型農業の最たるものである）、「三愛精神」（人を愛し、神を愛し、土を愛す）は座右の銘。酪農学園大学、旧野幌機農高校・旧三愛女子高校（ともに現とわの森三愛高校）を創立。

＊黒田清隆（くろだ　きよたか）
１８４０〜１９００　薩摩藩士、政治家。文久3年薩英戦争のとき初めて実戦に参加。江戸の江川塾に入門。明治元年鳥羽伏見の戦いに参加、庄内藩の降伏後の処理にあたる。同2年青森口総督府参謀、蝦夷地榎本武揚軍追討参謀。五稜郭攻撃を行い敵将榎本から「海律全書」を託される。榎本の助命を主張、実現させた。凱旋後、外務権大丞、兵部大丞、同3年開拓次官、7年屯田兵を

創設、陸軍中将兼開拓次官、屯田憲兵事務総理のあと、参議兼開拓長官となる。樺太を放棄しても北海道経営に重点を置くことを有利として本衛を札幌に設け、ケプロン（開拓顧問）、クラーク（札幌農学校教頭）を招き、北海道開拓と教育の基礎をつくる。西南戦争では征討参軍。同21年内閣総理大臣、同28年枢密院議長。

＊ケロシンランプ
ケロシンは揮発温度の低い灯油で、灯火。

＊小池新二（こいけ　しんじ）
1901～1981　東京帝国大学卒業。デザイン評論家。昭和11年前川国男らと国策に沿った「日本工作文化連盟」を結成。戦後は建築デザインの評論を行う。同25年千葉大学教授。43年九州芸術工科大学初代学長。

＊甲田光雄（こうだ　みつお）
1924（大正13）年東大阪生れ。大阪大学医学部卒。日本総合医学会副会長、医学博士。中学以来病弱のためしばしば休学をくり返す。その間現代医学の治療を続けたが回復せず、これに絶望を感じて西式健康法、断食療法、生菜食健康法など自然医学の研究に向かい、腸内細菌の研究に従事。ユニークな療法で世界的な名声をはくしている。著書は多数。甲田医院院長。

＊耕土培養法
食糧その他農産物の生産の増進及び農業経営の安定を図るため、耕土培養（不良農地に石灰、鉄などを施用して土壌改良する）事業を行うことを目的に昭和27年に制定された法律。

＊河野常吉（こうの　つねきち）
1862～1930　松本師範学校卒業後、教職にあったが上京し明治14年慶応義塾に入り2年間学んだ。自由民権運動に参加の後、長野県庁、中央気象台に勤務したが、同27年北海道庁嘱託となり道内各地を調査して『北海道殖民状況報文』としてまとめた。同33年には道庁の北千島調査に参加する一方、『殖民公報』の編纂に従事。アイヌ研究と北海道研究を深めるが、その範囲は歴史学、考古学から地理、生物、気象にまで及んだ。大正4年開道50周年記念事業の『北海道史』の編纂主任となった。

＊江政敏（ごう　まさとし）
1851（嘉永4）年平藩に生れる。行商となり各地を回り、十勝国大津に転住し雑貨店を開く。そのかたわら漁場を営む。後に実業家として阿寒硫黄鉱山、釧路製紙会社を生む。

＊高良とみ（こうら　とみ）
1896～1993　富山県生れ。日本女子大英文学部卒。大正6年渡米。コロンビア大大学院を経て、ジョンホプキンス大学で学位授与。九州帝国大学医学部助手を経て昭和2年日本女子大家政学部教授。タゴールの『日本の精神』を翻訳。作家魯迅の友人。

同15年大政翼賛会中央協力議院として婦人局設置を提唱。同17年に財団法人戦時生活相談所の「標準生活費の研究」に学会側から参加、更に20年には「戦時国民生活基準に関する答申書」の作成にも参加。2期12年参議院議員。

＊五公五民
江戸時代の租税徴集の割合。収穫の半分を年貢として納め、残りの半分を農民のものとすること。

＊ゴスプラン
ソ連時代に国家計画委員会を創設。5ヵ年計画など経済計画を作成。

＊後藤静香（ごとう　せいこう）
1884～1969　大分県出身。大正・昭和にかけ青少年に大きな影響を与えた教育者・社会運動家。東京高等師範学校卒業後、長崎高等女学校に赴任。修養団運動に共鳴し修養団支部を結成。修養団に「女子部」を設けることを提言、大正7年修養団本部幹事長に迎えられる。修養団雑誌『向上』を通じ日本初の「家計調査」を実施。「女子修養団」組織の第一歩として雑誌『希望』を発刊。その後修養団から独立し、西大久保に希望社会館を建設。雑誌『希望』編集出版、読者100万人に達したという。アイヌ歌人違星北斗の活動支援、インド救らい運動、エスペラント普及、点訳奉仕運動の提唱、門人の加藤善徳らの努力により本間一夫の日本点字図書館として結実する。松下電工の帯広進出も当時の同社丹羽社長と木呂子敏彦が青年時代『希望』を通じ知己であった関係が大きい。著書『権威』は昭和4年100万部以上を出版。

＊後藤興善（ごとう　こうぜん）
1900～1986　早稲田大学文学部卒業。昭和16年から母校で国文学を講ずるかたわら、各種の辞書の編集にたずさわった。この間、フランスのA・V・ジェネップ『民俗学入門』を抄訳、昭和8年に柳田国男が自宅で始めた民間伝承の会の講議の内容を『民間伝承』としてまとめた。民間伝承の会を引き継ぐかたちで木曜会が創設され、郷土生活研究所が行った山村・漁村の調査において、その主要メンバーとして参加している。

＊小林達治（こばやし　みちはる）
1929（昭和4）年生れ。京都大学教授。著書『光合成細菌で環境保全』『「エコシステム農法」の奇跡』『根の活力と根菌微生物』。

＊ゴルバチョフ名簿
1991年4月16日、ゴルバチョフソ連大統領が来日した際に、第1回会談で確認された15の合意文書のうち、シベリア抑留問題の協定書に係る「抑留中の死亡者の名簿引き渡し」に基づくもの。

＊金野隆光（こんの　たかみつ）

１９３４（昭和９）年東京生れ。34年東京大学農学部農芸化学科修士過程修了、農学博士。農林水産省北海道農業試験場畑作部。畑地の地力増進技術の確立に関する研究に従事。農業環境技術研究所を経て、新潟大学農学部応用生物化学科教授を歴任。

＊犀川一夫（さいかわ　かずお）
１９１８（大正７）年生れ。沖縄県ハンセン病予防協会理事長。昭和37年那覇市に外来診療所を設置し、在宅治療を実施。44年には石垣市と平良市にも外来診療所を設置。

＊斎藤晶（さいとう　あきら）
１９２８（昭和３）年山形県生れ。昭和22年北海道の開拓団に加わり、単身旭川市神居町に入植する。耕作不適地と思われた笹薮の石山に挑み、再三挫折の体験を味わいながら体得した自然観と哲学を基に手探りで、牛１頭から酪農に転向し、蹄耕法による積雪寒冷の地で経営面積１３０ヘクタール、飼育頭数１３０頭の山地酪農を確立する。

＊佐上信一（さがみ　しんいち）
１８８２～１９４３　広島県生れ。東大卒業後、内務省に入り、若槻内閣時代に岡山県知事となる。長崎県知事などを経て、昭和６年10月～同11年４月まで北海道庁第21代長官。在任中、凶漁、水害、函館大火など天災・地災が相次ぎ「凶作長官」と呼ばれた。しかし主畜農業５ヵ年計画を立てるなど農業の建て直しに努力、また北海道の気候風土に適した甜菜、酪農への転換を提唱。特に根釧原野開発に貢献し、別海町では酪農の父として敬愛され胸像が建てられている。

＊坂本直行（さかもと　なおゆき）
１９０６～１９８２　山岳画家。坂本龍馬の直系で坂本直寛の婿養子弥太郎の次男。弥太郎は釧路で坂本商会（木材商）を営む。農業のかたわら自伝的小説『開墾の記』などを執筆。また山岳随筆なども多い。

＊桜田勝徳（さくらだ　かつのり）
１９０３～１９７８　民俗学者。仙台市生れ。兵庫県立第一中学を経て慶應大学文学部史学科を卒業。東京朝日新聞社に入社、調査部に在籍。柳田国男に師事していたことから昭和10年アチック・ミューゼアム（後の日本常民文化研究所）の研究員となり、同15年農林水産省水産局の嘱託で漁撈文化の調査、研究に従事、『漁人』を公刊した。同30年水産庁水産資料館の館長となる。

＊笹森儀助（ささもり　ぎすけ）
１８４５～１９１５　津軽藩士であったが、明治維新後みずから民間の実情を究めて国利をはかろうと千島・沖縄・台湾さらにはシベリアにいたる広大な地域の探検旅行をなし、克明な民俗誌的記録を残した。特に明治27年出版の『南島探検』は、沖縄全島の詳細な記録で、柳田国男など以降の沖縄研究を触発する著書とな

った。

＊サッテ鉞

主に、造材現場で使用される長柄の伐木マサカリのことで、立木の伐倒用。

＊佐藤朝山（さとう　ちょうざん）

１８８８（明治21）年福島県生れ。幼い時から宮彫師の父や伯父に木彫を習う。明治37年山崎朝雲の内弟子となり、大正３年再興日本美術院第１回展に「呪詛」などを出品。同人となり院展木彫の中心的存在となる。石井鶴三、中原悌二郎、戸張孤雁などを美術院に迎えるのに関わる。

＊佐藤新興生活館

昭和10年に石炭王佐藤慶太郎が、かねて親交のあった静岡県函南で農村塾主宰していた社会教育家山下信義や岸田軒造とともに、新興生活運動を展開するため、推進母体として個人財産寄付により設立した財団法人。事務所は当初丸ビルに仮事務所開設。購入済（８万円）の明治大学裏の高台・駿河台１丁目の敷地にヴォーリス建築事務所の設計により、６階建建物を建設（30万円）、同12年に完成、移転した。基本金１００万円、事業費50万円（現金60万円、有価証券90万円）。この建物は戦後ＧＨＱの接収解除後「山の上ホテル」となる。

＊佐藤慶太郎（さとう　けいたろう）

１８６８〜１９４０　福岡県志賀郡折尾町生れ。修猷館卒後上京。明治法律専門学校中退。若松の石炭販売業山下商店入社。明治33年独立し、佐藤商店設立。石炭販売の傍ら、その後炭鉱を買収して石炭王となる。大正６年にすべての営利事業から身を引き、同13年には関東大震災後に上野東京美術館建設を知り、建設費１００万円全額を一個人で寄付し世間を驚かせる。

＊里見岸雄（さとみ　きしお）

１８９７〜１９７４　仏教系宗教家田中智学の三男として東京に生れ、里見家の養子になる。日本国体の研究をすすめ、１９２４年里見日本文化学研究所を設立、１９３６年日本国体学会会長となる。月刊雑誌『国体文化』を刊行した。

＊サマーファロー

土壌の柔軟性を保ち、雑草を除去するために、夏の間、前作物を刈り取らずに耕地を耕しておくこと。夏休閑地。アメリカ中西部の乾燥地帯で伝統的に採用されている農法。３年２作、４年３作等のローテーションが組まれている。

＊産業組合青年連盟

農民の協同思想の始まりは、報徳社や先祖組合といわれるが、明治33年に産業組合法が制定され全国的に広がった。組合員は農林漁業者、商工業者、消費者などで、農漁民の没落を防ぎ、相互扶助の精神に支えられた信用組合。明治39年には販売、購買など他

事業の兼営が、同42年には中央会、連合会が認められ、低利融資や補助をテコに数が増えた。同43年には産業組合中央会が設立される。戦後は農業協同組合へと変遷する。青年連盟はその青年組織。農協青年部とは全く性質を異にする。

＊シーデング
播種。

＊四手井綱英（しでい　つなひで）
1911（明治44）年京都山科生れ。京大農学部卒。秋田営林局・林業試験場などを経て、1954年京大教授。日本モンキーセンター所長、京都府立大学学長など。里山の発見者にして森林生態学の創始者。今西錦司や桑原武夫と山に登り、京大探検部をつくった。「里山」は四手井氏が集落や都市の近くにあって人間が入ったり木の実を採ったり遊んだりできるところの山という意味で使いだした言葉。戦前は林野庁の技官として日本の山に入り、戦後は京大の教授として世界中の森を見てきた。自然保護にも力を尽くした。

＊篠原孝（しのはら　たかし）
1948（昭和23）年長野県中野市生れ。昭和48年、京都大学法学部卒業、農林省入省。帯広市清川町、佐藤松太郎牧場で実地研修。同51年、米国ワシントン大学海洋総合研究所及びカンサス州立大学農業経済学部留学。経済協力開発機構日本政府代表部参事官（パリ）、農林水産省水産庁企画課長などを歴任。農学博士。現衆議院議員。

＊シベリア抑留
昭和20年8月ソ連が参戦、敗戦により日本将兵が不当にシベリアに強制抑留された。公表されている抑留者53万9千余人、そのうち死亡者が9万2千余人にのぼっている。31年まで抑留された者もあり、この間、木材の伐採、採炭、鉄道敷設などの使役に酷使された。

＊下河辺淳（しもこうべ　あつし）
1923（大正12）年茨城県生れ。東大建築科卒業後、戦災復興院、建設省建築研究所を経て経済企画庁に移り、国土総合開発計画の立案に参画。「開発天皇」の異名をとるほどの開発プランナー。「地方の時代」の提唱者でもある。

＊下村湖人（しもむら　こじん）
1884～1955　教育家、小説家。佐賀県生れ。本名虎六郎。旧制台北高等学校校長を経て社会教育に尽力。自伝的な成長小説『次郎物語』は、その理想主義と自由主義的教育思想により多くの読者を得た。

＊シャウプ勧告
昭和24～25年、米国の財政学者C・S・シャウプを団長とする税

制調査団が、所得税（直接税）中心の税制、青色申告の導入のほか、地方自治確立のため独立税主義及び地方財政平衡交付金制度の導入を勧告し、ほぼそのまま実現した。

＊シューマッハー

エルンスト・フリードリッヒ・シューマッハー　１９１１〜１９７７　ボン生れ。思想家、実践家。ボン大学でシュンペーターに学び、英国オックスフォード大学でケインズに師事する。ナチス政権を嫌い、結婚を機にロンドン移住、大戦後英国籍を取得。戦後の「国際決済メカニズム」構想立案、ケインズから高い評価を受ける。１９５０年英国石炭公社の経済顧問に就任し、世界の資源問題と環境問題に取り組む。ガンジーや仏教の思想に共鳴し、１９５５年ビルマ政府の経済顧問。１９６２年インド経済計画委員会顧問。これを機に物質至上主義、巨大技術信仰を批判した仏教経済学と、等身大で生態系を壊さない地域資源に根ざした中間技術を提唱し、その思想を著した『スモール・イズ・ビューティフル』により、世界的な評価を受け、先進国をはじめ、開発途上国の経済開発に強い影響を及ぼす。

＊Schereber（シュレーバー）

１８０１〜１８６１　ドイツ・ライプチヒの医者、教育者。１９１９年のクラインガルテン（市民菜園）法が制定される以前に、19世紀半ばに保健と趣味の涵養を目的に「シュレーバーガルデン」を提唱。都市の中にある「貸農園」「小菜園地」を都市の厚生・レクリエーションの施設として普及させた。

＊上毛自由党（じょうもう　じゆうとう）

明治13年に群馬県の民権家が国会開設を求め上毛有志会を組織し、高崎市の覚法寺に有志２００人、傍聴者１０００人が集まり「上毛有志会決議案」を採択。国会開設請願の署名運動を行う。「国会ノ開設ヲ願望シ奉ル書」に県内８９８０人の有志が署名し、木呂子退蔵、長坂八郎を代表にこの請願書を太政官に提出。その後全国の代表67名が集まった国会期成同盟会会議に長坂八郎、木呂子退蔵、斎藤壬生雄、新井毫が代表として参加、これが上毛自由党の嚆矢となった。

＊ジョージ・ジーン法

アメリカ中等学校の職業教育への連邦補助法であるスミス・ヒューズ法に続く一連の諸法律のうち、州および準州での職業教育のいっそうの振興を図る補助金の増額を規定したもの。１９３６年成立。

＊殖民地区画

原野に入植するための区画のこと。明治期の北海道開拓では、明治23年の新十津川村の区画が最も古い。明治29年、殖民地区画施設規定が制定され、基線を設け、それに直交する基号線と平行に３００間ごとに区画道路を設定、これを6等分した１００間×１５０間、すなわち5町歩を小区画とし、普通農家の1戸分とした。また、予定地には道路、排水渠敷地、保存林のほか市街予定地を

設定、官公署、学校、病院、神社、寺院、公園、墓地などが予定された。アメリカの土地法一哩スケアに倣ったもの。

＊ショスタコービッチ
ロシアの作曲家、ピアノ奏者、レニングラード音楽院教授。多くの交響曲、弦楽四重奏曲などがある。

＊ジョン・バチェラー（John Batchelor）
１８５４〜１９４４　イギリス聖公会宣教師。東洋伝道を志し香港に渡ったが、健康を害したため郷里と気候の似た函館で静養。その折アイヌ伝道の必要性を悟り、一旦帰国して勉強を深めて再来道した。この後、胆振有珠、登別、日高平取を中心に伝道と福祉活動を続け、札幌に本拠を移してからも樺太アイヌへの伝道、病院設立に挺身した。一方、言語学、民族学研究を続け、英文又は和文で多数の著書論文を発表し、アイヌ語聖書やアイヌ・英・和対語辞典の編集を行った。１９４０年反英風潮の中帰国をよぎなくされたが、有珠にはバチェラー記念教会が現在も残っている。

＊白野夏雲（しらの　かうん）
１８２７〜１８９９　山梨県都留郡白野村生れ。黒船騒ぎで活躍した幕末の英傑・肥後守岩瀬忠震が嘉永２年（１８４９）甲府微典館の学頭の時、教えを受けたのがきっかけで、岩瀬が生涯の師となる。江戸詰、長崎奉行所などに用人として同行し、岩瀬の死後文久２年（１８６２）幕臣となる。維新後は静岡藩の十勝開業方として明治２年、一行14人と大津（現豊頃町）に移住。十勝を調査し「十勝州略志説」などを残した。廃藩置県後は明治５年北海道開拓使に採用され、明治政府の役人として開拓行政にたずさわった。後に内務省に移り地理局を経た後、鹿児島県の役人として転勤。「麑海魚譜」「南島方面巡回絵巻」など民俗学的研究を残した。後に再び北海道庁に戻り、札幌神社六代宮司となり、明治32年札幌でその波乱の生涯を終えた。

＊新村出（しんむら　いずる）
１８７６〜１９６７　明治32年東京帝国大学文科大学博言学科卒業。同35年東京高等師範学校教授となる。同40年京都帝国大学文科大学助教授となりイギリス、ドイツ、フランスに留学、同42年に帰国して教授となる。退官後は日本言語学会会長。国語学の権威で『辞苑』『言林』を編纂。

＊新谷弘美（しんや　ひろみ）
１９３５（昭和10）年福岡県柳川市生れ。順天堂大学医学部卒業後渡米。胃腸内視鏡学のパイオニアとして活躍。アルバート・アインシュタイン医科大学外科教授およびベス・イスラエル病院内視鏡部長。

＊水耕法
土を用いず、砂などの不活性な支持体と養分を溶かした水で植物を生育させること。植物は葉で光エネルギーを利用して二酸化炭

素と水より炭水化物を合成し、根で無機養分を吸収し、これらの光合成産物と無機養分を利用して植物体構成成分を合成し、生長・維持を行っている。

＊杉浦保吉（すぎうら　やすきち）
１８８４（明治17）年埼玉県生れ。明治39年農林省水産講習所漁撈科卒。福岡県水試技師、熊本県水試場長、愛知県水産課長、同水試場長、農商務技師、水産講習所教授を経て昭和７年水産講習所所長に就く。大日本水産会副会長。

＊杉浦健一（すぎうら　けんいち）
１９０５〜１９５４　東京帝国大学で宗教民族学を学んだ後、柳田国男のもとで山村の民俗調査に従事した。昭和13年日本の委任統治領であったミクロネシアの各地で土地制度や社会、経済を調査、我が国におけるミクロネシア研究の創始者となった。戦後はアイヌの親族組織の研究を行った。同28年東京大学教養学部の文化人類学教室の初代教授となった。

＊スキタイ族
ＢＣ６世紀〜ＢＣ３世紀黒海北岸の草原地帯に強大な遊牧国家を建設した民族。その文化は広く中国にも伝わり、大きな影響を与えた。

＊スタビレ
一定の長さに切って丸太を積み上げる。

＊スタンチョン
スタンチョンストールの略。牛の首の部分をはさんでつないでおく道具。

＊スミス・ヒューズ法
アメリカで１９１７年、大学レベル以下の職業教育に対する連邦の財政的援助を定めるため制定された法令。この法によって農業・家政・工業教育の教師の給料への連邦補助、ならびにそうした分野の教育養成への補助が可能となり、職業教育の在籍者は一挙に何倍にもふくれあがった。

＊セツルメント
宗教家や学生たちが、貧しい人々と生活をともにして生活環境の改善や教育文化の向上をはかる社会事業、又はその施設。愛隣、隣保事業とよばれる。

＊千家元麿（せんけ　もとまろ）
１８８８〜１９４８　詩人。東京生れ。父は出雲大社宮司から静岡県知事、東京府知事から司法大臣になった男爵千家尊福。複雑な家庭環境の中で学校の転退学をくり返したが、18歳頃から文学に関心をもち、俳句を佐藤紅緑に学び、和歌は窪田空穂、詩は河井酔茗に師事し銀箭峰と号した。大正元年同人誌『テラコッタ』を創刊。同誌を通じて武者小路実篤と親交をもち、白樺派の人々

との交わりを深めた。同7年第一詩集『自分は見た』を刊行、その写実的な描写とヒューマニスティックな詩風は多くの人々の支持を得た。

＊園部三郎（そのべ　さぶろう）
1906〜1980　東京都生れ。東京外国語学校（現東京外語大）仏語部中退。音楽評論家。進歩的な立場で社会的視野からの音楽評論が特色。著書に『音楽五十年』『音楽史の断章』など。

＊ソフィア音楽学校
ブルガリアの首都ソフィアにある音楽学校。

＊タイガ
シベリア地方に発達する針葉樹から成る大森林。地下に永久凍土層がある。

＊大工原銀太郎（だいくばら　ぎんたろう）
1868〜1934　明治-昭和期の農学者。長野県生れ。東京帝大農芸学科卒。明治28年農商務省農事試験場技師。東京帝大講師、特許局技師兼任を経て大正10年九州帝国大学教授。同15年総長。昭和5年同志社大学総長。酸性土壌の研究に業績を残した。

＊大東塾（だいとうじゅく）
国家主義団体。1936年影山正治ら神兵隊事件関係者の一部と国学院大学学生などにより維新寮が創設され、これが発展して1939年大東塾が設立された。大日本生産党と親しい関係にあり、政治家の暗殺計画、放火計画が発覚し塾生から逮捕者が出た。1945年8月25日留守をあずかる影山庄平（正治の父）と塾生13人が東京代々木練兵場で割腹自殺し、占領軍から解散命令を受けた。1954年再建を宣言し、1965年から財団法人大東会館となった。

＊太平洋画会研究所
美術団体。1901年小山正太郎、浅井忠が明治美術会を改称し結成。同年研究所を併設。中村不折、満谷国四郎などが指導。絵画、彫刻の指導を行い白馬会と対立した。1957年太平洋美術会と改称。

＊高岡熊雄（たかおか　くまお）
1871〜1961　島根県津和野に生れる。明治28年札幌農学校卒業後、恩師新渡戸稲造の下で研究生となり、講師となって、農業経済学を講義。ドイツに留学し、帰国後北海道帝国大学で農政学殖民学講座を担当し、図書館長を兼ねた。昭和8年農学部長から第三代北海道帝国大学総長に選ばれ、在任中、低温科学研究所、高山植物園、北方文化研究室、金属科学研究室などを新設した。

＊高倉新一郎（たかくら　しんいちろう）

１９０２〜１９９０　帯広町大通で雑穀商の安次郎の長男として生れる。双葉幼稚園、帯広尋常小学校、札幌一中、北大に進み、大正15年北大農学部を卒業、昭和21年農学部農業経済学科教授、同28年経済学部教授となった。その間、農学部長、附属図書館長を歴任、同41年北星学園大学教授、同43年北海学園大学学長、45年北海道開拓記念館長を務めた。また、同38年からは『新北海道史』（全９巻）の総編集長となり、『帯広市史』の監修者も務めた。研究分野は幅広く、歴史、経済、民族学など広汎にわたり、特に北海道史やアイヌ文化研究では第一人者となった。

＊高倉安次郎（たかくら　やすじろう）
１８７３〜１９３３　実業家。滋賀県土山村生れ。大阪市立商業学校卒業後、明治21年渡道。呉服商を営む伯父を助け業務を発展させ、日清戦争による戦争特需により新事業に進出したが失敗し帰郷。その後村費によって再び渡道し石狩、日高を経て十勝に入る。帯広町に雑貨店を開業。以来牧畜業、電燈、倉庫業を創設した。「十勝の開拓問題は道路、橋、港湾、鉄道その他拓地殖民にある」と説き、十勝開拓のために奔走。帯広町二級町村施行以来、町会議員として活躍した。

＊高橋延清（たかはし　のぶきよ）
１９１４〜２００２　岩手県沢内村出身。東大農学部林学科を卒業後、東大農学部付属北海道演習林（富良野市）に勤務。昭和17年から同演習林長を務めたが、在職中は「森が自分の教室」と、教壇には一度も立たず、泥まみれになって歩く姿から「どろ亀さん」と呼ばれた。「森と人との共存」を訴え、天然林育成の「林分施業法（りんぶんせぎょうほう）」は、自然保護派だけでなく行政当局からも高い評価を受けた。学識経験者とともに「緑の文明学会」を設立し、会長として鹿児島県屋久島の縄文杉の保護を訴えるなど、自然保護活動に取り組んだ。

＊高橋敏五郎（たかはし　としごろう）
１９０７〜１９８８　山形県東村山郡中山町生れ。札幌開発建設部長の任にあった昭和27〜28年に札幌―千歳間の通称「弾丸道路」を誕生させ、寒地における鋪装技術（凍上対策路盤工）を完成させた。北海道道路建設の功労者。

＊高見沢清（たかみざわ　きよし）
（財）東京府市場協会専務理事。大正14年に高見沢が求人相談に西川宅を訪れ、西川は違星北斗を推薦する。早速北斗は市場協会に採用され、周りの人の厚遇に支えられ、彼にとって生涯で一番生活が安定した時期を送る。北斗にとっては高見沢清、西川光二郎は恩人。

＊高村光太郎（たかむら　こうたろう）
１８８３〜１９５６　彫刻家・高村光雲を父として東京市下谷（現・台東区上野）に生れる。東京美術学校（現・東京芸術大学）彫塑科を卒業。在学中から与謝野鉄幹に歌を学び、『明星』に砕

雨と号して歌作を発表した。明治39年から4年間、彫刻研究の目的で欧米に留学。ロダンの芸術に強い影響を受けた。帰朝後は歌から詩に転じ、『スバル』『白樺』に作品を発表したが、人道主義、理想主義を主唱する白樺派の人々との交友によって影響を受け、大正3年第一詩集『道程』を刊行。そして「青踏社」の長沼智恵子と結婚した。昭和16年刊行の『智恵子抄』は、発狂した妻への美しい愛情をうたった第二詩集である。同20年4月の空襲でアトリエが焼け、敗戦後花巻郊外の山小屋に移り独居生活を始めた。肺結核が悪化し、31年4月71歳で生涯を閉じた。

＊高村光雲（たかむら　こううん）
1852〜1934　江戸下谷北清島町（現・台東区東上野）生れ。12歳の時仏師高村東雲に弟子入り。明治7年光雲の号を与えられ、東雲の姉の養子となって高村姓を継いだ。同10年第一回内国勧業博覧会に木彫の「白衣観音」を出品、最高賞を受賞。皇居造営に際して装飾の一部を担当する。同22年東京美術学校（現・東京芸術大学）雇、翌23年帝室技芸員、東京美術学校教授に任ぜられた。銅像の「楠公像」や「西郷隆盛像」を木彫の原型から完成。シカゴ万国博覧会に「老猿」を出品、受賞。木彫にこだわり、文展開設後は審査員を歴任。

＊高山英華（たかやま　えいか）
1910〜1999　東京生れ。東大工学部教授で、昭和37年都市工学科の新設に尽力。同48年（財）日本地域開発センター理事長に就任。八郎潟干拓、新産業都市計画、筑波研究学園都市、高蔵寺ニュータウンなど都市計画の主要局面にかかわってきた。

＊竹熊宜孝（たけくま　よしたか）
1934（昭和9）年熊本県山鹿市生れ。昭和40年、熊本大学大学院卒業。専攻は内科学・血液学。絶食療法を甲田光雄医師、東洋医学を韓国の鮮干基（ソンヌキ）医師に師事する。同50年、熊本県菊池郡の市町村が共同で公立菊池養生園診療所を開設。前年から、竹熊宜孝氏が熊本大学医学部付属病院講師を退官して開設準備にあたり、開設と共に所長に就任した。医食同源、身土不二を掲げて食と健康との関係を重視する予防医療の普及に努めている。

＊武田邦太郎（たけだ　くにたろう）
1912年沼隈郡鞆町（現福山市）生れ。福山誠之館中学修了、福岡高等学校、東京帝国大学文学部西洋史学科卒業。新農政研究所、「農政と平和」研究所を中心に活躍。参議院議員歴任。

＊太宰春台（だざい　しゅんだい）
1680〜1747　信濃飯田藩の家臣太宰言辰を父として生れる。15歳で武蔵岩槻藩主松平氏に仕えたが、21歳の時10年間他家への出仕禁止の処分を受け、京、大坂で窮乏生活を送った。禁錮が解けて32歳で江戸に帰り荻生徂徠の門に入った。下総生実藩主森川氏に仕えたが37歳で辞職。徂徠の後継者といわれているが、

性格は師の豪放、寛容とは反対で謹直、厳格、学問も師が人間性に対する信頼を基にしているのに対し、人間不信を基調とし、現実主義的な政治論を説いた。

＊田沢義鋪（たざわ　よしはる）
１８８５〜１９４４　佐賀県鹿島市出身。旧制五高、東京帝大卒。内務官僚となり、静岡県安倍郡郡長時代、「村造りは人造りより」として、蓮永寺に青年宿泊講習会を開き青年を指導。のちの「青年団」の礎を築く。明治神宮造営局総務課長、東京市助役を経て、大日本青年団理事長、協調会常務理事に就任。１９４４年には敗戦を公言する講演の最中に脳出血で倒れた。

＊田代安定（たしろ　あんてい）
１８５７〜１９２８　鹿児島市生れの南方植物の研究家。明治８年内務省、鹿児島県農商務省、沖縄県、台湾総督府などに勤務。この間にマキシモウィチ、サバチエ、ノルデンスキヨルドなどの世界の権威に学ぶ。明治18年沖縄八重山諸島の動植物、民俗の調査、同28年以降台湾でキナその他有用植物の研究と栽培に従事した。わが国熱帯植物の第一人者。

＊田中敏文（たなか　としふみ）
１９１１〜１９８２　戦後初の民選北海道知事として革新道政を担当した。九大農学部卒業後道庁入庁。１９４６年職員組合の初代委員長に選ばれたのがきっかけで、翌年春の知事選に立候補。決選投票の末当選し、35歳の全国最年少知事として話題になった。１９５２年には第一次北海道総合開発計画の策定を行った。

＊田中正造（たなか　しょうぞう）
１８４１〜１９１３　政治家、社会運動家。下野国（栃木県）の名主の家に生れ、江刺県（岩手県）の官吏になったが上役暗殺の嫌疑をかけられ投獄、無罪釈放後民権運動を志し、栃木県会議員となり１８８６年には議長に選ばれた。国会開設にともない第１回総選挙から衆議院議員に当選、立憲改進党に所属して第二議会で足尾銅山鉱毒問題につき政府に質問書を提出し、以後ほとんどこの問題に生涯をかけた。鉱毒処理のため谷中村に計画された貯水池に反対し、河川と治水、自然と人間の共生、人権と自治のあり方を問い続けた。

＊田辺元（たなべ　はじめ）
１８８５〜１９６２　東京生れ。哲学者。京大文学部教授。明治37年東京帝国大学数学科に入学、翌年同大学哲学科に転じ41年卒業。大正８年西田幾太郎に招かれて京都帝国大学文学部哲学科助教授となる。昭和２年西田のあとを継いで教授に就任。西田の影響下で絶対媒体の弁証法を、のち「種の論理」を提唱し、西田哲学の「場所の論理」を批判し、独自な哲学を築いた。

＊谷川徹三（たにかわ　てつぞう）
１８９５（明治28）年愛知県生れ。哲学者。詩人谷川俊太郎の

父。法政大学文学部長、同名誉教授、東京国立博物館次長。

＊田上義也（たのうえ　よしや）

１８９９〜１９９２　建築家。栃木県で生れ建築家を志し、Ｆ・ライトに師事し旧帝国ホテルの建築に加わる。１９２３年関東大震災を機に札幌に移り、田上建築制作事務所を経営した。北方の風土にマッチした斬新な設計で注目を集め、代表的な建築物として、札幌北一条教会（新旧）、網走郷土博物館、北海道銀行本店、札幌市教育文化会館等が知られる。文化活動でも広い分野に参画し、特に交響楽団を結成して正指揮者を務めたり、彫刻美術館理事長に就任した。

＊玉伐り

伐倒した木を一定の長さに切りそろえること。

＊玉野井芳郎（たまのい　よしろう）

１９１８〜１９８５　山口県生れ。東北大卒。昭和53年東大教授を退官し地域主義研究集談会代表世話人などをつとめる。沖縄国際大学教授。同55年には「平和をつくる沖縄百人委員会」を結成。地域主義の旗がしらとして活躍した。

＊田村勝太郎（たむら　かつたろう）

明治40年芽室太のアイヌ田村勝太郎が主唱して旧土人矯風会を組織。青年補習教育を目的として農学の実習、牧畜、養蚕、裁縫、家政、作法などを青年男女に授けた。又同族青年を虻田郡の実業補習学校に入学させ支援もした。

＊ダモイ

（ロシア語）「家へ、故郷へ、祖国へ」の意。第二次世界大戦後ソ連に抑留された日本人たちが、帰国・帰郷の合言葉として持ち帰り、流行した語。

＊タンニン

植物の木部・樹皮・種子などから抽出され加水分解によって水溶性多価フェノール酸を生じる混合物の総称。インク製造、なめし、革剤、媒染剤などに使用。

＊チェーン

鎖。

＊チゼルプラオ

不耕起栽培で播種前に土壌表層に溝を付ける装置。

＊チューネン・ブリンクマン

１７８３〜１８５０　ドイツの農業経済学者。土地利用の厳密な基礎理論であるチューネン理論を確立した『農業と国民経済に関する孤立国』は農業立地論の古典的名著。中央の大都市をとりまいて農業地帯が同心円状に分布するモデルを示した。これは都市との距離（運送コスト）によって農業の様態が変わるはずだという考えに基づいたもの。日本にチューネンを紹介したのは近藤康

夫（東京帝国大学教授）である。

＊超輪栽式農法

ヨーロッパ農業では、19世紀後半から近代的な輪栽式農法が採用された。大型の有輪犂と異なる小型、軽量の無輪犂が開発され、畜力条播機および中耕機も出現した。このような機械技術の導入とあいまって、耕作法も穀物だけの散播・無中耕農業から穀物以外に飼料作物、根菜類をも栽培する条播・中耕農業への転換が進んだ。これを輪栽式農法という。一方肥料や機械や圃場管理技術の高度化により、輪栽によらずとも農業生産を続けられるという考え方が表れ、これを「超輪栽式農法」という。又、農業構造近代化の過程で、畑作と畜産が経営的に専業化してきたが、個別経営の枠を越えて地域的に経営資源を交換する方法も「超輪栽式農法」といわれる。

＊樗牛賞（ちょぎゅうしょう）

文芸評論家、高山樗牛（1871～1902）を記念した文学賞。樗牛の著作に歴史小説『滝口入道』など。

＊地力増進法

耕土培養法を廃止し、新たに地力の減耗（微生物性の悪化を起因し、土壌の物質循環能を喪失した結果生じる）、連作障害に対する土壌保全対策として昭和54年に制定された法律。

＊チンチョ

ソリに積んだ材木の荷崩れを防ぐために、下方の材木に打ち込む。これに縄を通して反対側の材木までまわして、引き締め固定する。

＊槌田敦（つちだ　あつし）

1933（昭和8）年東京都生れ。東京都立大学理学部化学科卒。東大大学院修了。東大理学部助手。同41年理化学研究所研究員。同50年核融合研究ブームを批判して物質循環論に基づくエントロピー理論を展開。

＊土谷清（つちや　きよし）

1908～1991　札幌生れ。札幌市創成尋常小卒業後、浜田牛乳容器製作所入社し、昭和4年札幌で牛乳容器製作所開業。黒沢酉蔵から「これからの酪農は十勝と」と聞いて、十勝での事業を決意、同8年帯広に移る。同15年企業統合で雪印と合併。同18年北部軍海上機動隊兵団に入隊。同23年土谷特殊農機具製作所創立。日本発明協会副会長、帯広商工会議所副会頭、北海道機械工業会副会長など歴任。同35年西帯広工業団地建設に力を注ぎ、帯広工業団地協同組合理事長も勤めた。昭和50年米国デムース社と合弁するなど、技術力のある地場メーカーを育て上げた。

＊都留信也（つる　しんや）

1933（昭和8）年東京生れ。昭和36年北海道大学大学院農学研究科（農芸化学専攻）修了。同50年農林水産省農業技術研究所土壌微生物研究室長に就任。平成4年農林水産省を退官。現在は

（社）環境情報科学センター常務理事、（財）日本グラウンドワーク協会理事長、農業資材審議会農薬部会長、日本ユーラシア協会副会長の任にある。農林水産省時代に十勝農協連のノーキュライド種子生産事業の開始にあたり、経営的・技術的支援を施策化するために尽力した。

＊テーア
アルブレヒト・テーア参照。

＊デューイ
１８５９〜１９５２　アメリカの哲学者、教育学者。実験主義の立場からプラグマティズムの理論を集大成。教育学では生産活動を基礎とする労作学校を主張、実践。

＊暉峻義等（てるおか　ぎとう）
１８８９〜１９６６　兵庫県生れ。大正６年東京帝国大学医学部卒業。警視庁技師として細民街調査に従事。同８年大原社会問題研究所に招かれ、八王子で紡績業の女工、乳児死亡調査に従事した。同10年設置された倉敷労働科学研究所の所長に就任、労働生理学を基礎に労働者、農民、開拓民の生活と労働・栄養などを調査研究。戦中、産業報国会の理事、大政翼賛会国民運動局長となったため戦後、公職追放の処分を受けた。解除後の昭和27年アジア産業保健会議を結成、労働科学研究所顧問となった。

＊道路愛護組合
開拓が進み道路が整備されてくると、道路の保全が必要となる。このため各市町村では各生活体ごとに道路愛護組合を作り、砂利を敷くなど保全につとめた。

＊十勝興村連盟
昭和７年清水町下人舞での代用教員時代に、後年音更町長となる本家三郎氏、飯島弁護士らと農村青年を横でつなぐ組織「十勝興村連盟」を結成、青年相手の夜学を始めた。

＊十勝開墾合資会社
明治の実業家渋沢栄一が明治30年に３５００万坪の貸付を出願、資本金１００万円で設立した開墾会社。社長は渋沢喜作（北海道製麻会社社長）、農場長町村金弥。１５８０戸の入植者を入れ、３６００万坪の開墾と牛馬の繁殖を図る目的で、同31年４月、十勝川両岸のケネ、クマウシ、ニトマップ原野と札内川東岸の札内原野に２５５７万余坪の無償貸付を受けた。同40年に鉄道が開通したことから、経営は軌道に乗った。大正12年に経営権を明治製糖株式会社に委譲、昭和10年に農地を解放した。

＊ドクチャーエフ
Ｖ・Ｖ・ドクチャーエフ　１８４６〜１９０３　土壌学の父。土壌を独立した自然体ととらえる土壌学は、彼によって創始された。

＊ドッジ案
昭和24年ＧＨＱ（連合国最高指令官総司令部）の特別顧問ドッジが、日本経済の安定、自立のための諸政策を盛り込んで策定した案。インフレ抑制や国際収支の改善に実効を上げた。

＊ドベネックの養分樽
「植物の生育収量は、その植物に供給される各養分のうち、その量が最少である養分によって支配される」という関係が成り立っている。これはリービッヒの最少養分律と呼ばれている。この法則を樽板に例えたのが、ドベネックの養分樽として知られている。

＊トハチェフスキー
１８９３〜１９３７　ソ連邦陸軍最初の元師の一人。赤軍近代化の父として異才を認められたがスターリンの粛正の犠牲となり、悲劇的な死を遂げた。アレクサンドロフスキー士官学校卒業後、第一次世界大戦に参加。ドイツ軍に捕らえられ６度目で脱走に成功、十月革命とともに赤軍に身を投じ、軍司令官としてボルガ川沿岸地域を転戦。ウラル、シベリア、カフカス方面で反革命軍を撃破。大正十年クロンシュタットの水兵を中心とする大反乱やタンボフの３万をこす農民の暴動の鎮圧にあたる。

＊戸張孤雁（とばり　こがん）
１８８２〜１９２７　彫刻家。東京生れ。萩原守衛の影響を受け太平洋画会で学ぶ。版画に秀作が多い。

＊とび口
鳶のくちばしに似た形の鉄製の鉤をつけたもの。材木運搬の際にひっかけたりするのに用いる。

＊富田高慶（とみた　たかよし）
１８１４〜１８９０　陸奥国中村（現・福島県相馬市）に相馬藩士斎藤嘉隆の次男として生れる。天保10年二宮尊徳の門に入り、尊徳仕法を学び、相馬藩の財政再建と農村救済に従事。『報徳論』を著し、『報徳記』で報徳思想の普及と報徳社運動に影響を与えた。幕末・維新期には家老職として藩論を官軍帰順に導き、本領は安堵された。明治10年二宮尊親らと興復社を設立して社長となり、報徳社運動の指導者として活動した。

＊富山和子（とみやま　かずこ）
１９３３（昭和８）年群馬県生れ。評論家。早稲田大学文学部卒。現在、立正大学短期大学部教授。「水」問題の先駆的な著作を世に問うとともに、日本の環境保護議論がいかに本質を逸脱しているかを批判。

＊留岡清男（とめおか　きよお）
１８９８〜１９７７　留岡幸助の四男として東京に生れる。東京帝国大学卒業後法政大学などで教鞭をとるが、父の事業を継いで東京家庭学校遠軽分校とその教育農場の経営に当たる。城戸幡太

郎らと月刊雑誌『教育』（岩波書店）を編集し、「教育科学研究会」を組織して全国的規模の教育運動を展開する。第二次大戦後は遠軽の北海道家庭学校の再興に献身、父幸助の思想と実践を発展させた。社会福祉法人北海道家庭学校校長・理事長。北海道大学教育学部教授、旭川大学教授、北星学園女子短大学長等歴任。

＊トラキヤ
バルカン半島東部の地方。ほぼ今日のブルガリアにあたる。

＊虎舞い（とらまい）
母衣（ほろ）をつけた虎の頭や虎のぬいぐるみに人がはいり舞う民俗芸能。三陸沿岸地方や神奈川県横須賀市浦賀で行われる。

＊中島健蔵（なかじま　けんぞう）
１９０３〜１９９０　東京市生れ。昭和３年東京帝国大学文学部仏文科を卒業、研究室に残る。フランス近代文学、特にボードレール、バレリーを研究、その詩の翻訳を雑誌『作品』に発表、同人となり河上徹太郎、井伏鱒二、横光利一らと知り合う。同９年東京帝国大学文学部講師となるが、同37年の退官まで講師のままであった。外国文学、日本の近代文学の評論、社会評論まで範囲は広く、戦後の文化運動に尽した功績は大きい。

＊中嶋　常允（なかじま　とどむ）
１９２０（大正９）年熊本県生れ。昭和18年明治大学商科卒業。同33年農業科学研究所を設立、土壌分析、ミネラルの研究を開始。「有機農業とは生命科学的視野にたって、近代化学を最高度に利用し、病虫害の発生しない健康な作物が栽培できる安定性ある土壌環境を、全生命を尊重し、有機物を最大限に生かした農業にすること」という考え方にたつ中嶋農法の普及を勧め、全国に実践農家が広がっている。

＊長島愛生園（ながしまあいせいえん）
瀬戸内海の小豆島の北に位置し、日本最初の国立の癩療養所（全国に13施設の国立ハンセン氏病療養所がある）として、昭和５年に創立。岡山県南東部の邑久郡邑久町、瀬戸内海上の小島にある。昭和63年５月の邑久長島大橋の開通により隔離の島ではなくなっている。開園以来の70年間に亡くなられた入所者は３２００余名を超える。遺骨が納められた「万霊山　納骨堂」の前から供花と線香、静かな祈りが絶えない。入所者数５７６名（平成12年５月現在）。

＊中原悌二郎（なかはら　ていじろう）
１８８８〜１９２１　釧路生れ。札幌第一中学校に入学、洋画家林竹治郎に絵画の教えをうけた。明治38年画家を志して上京、白馬会研究所に学び、次いで太平洋画会研究所に移った。彫刻家荻原守衛とその作品に強烈な影響を受け、彼の死を契機にして彫刻に転じ、第４回文展に「老人の頭像」を出品した。大正５年再興された日本美術院研究所彫刻部に入って研修を積み、第３回院展

に「石井鶴三像」を出品、樗牛賞を受けた。同7年院展同人となった。忠実な自然観察と、堅牢な構築性を持つ作風で格調ある作品を生み出したが、自作への評価に厳しく作品は「乞食老人像」「若きカフカス人」「憩える女」など僅か11点のみである。旭川市は中原悌二郎賞を設け、毎年優れた業績を残した彫刻家を顕彰している。

＊中村彝（なかむら　つね）
1887～1924　画家。水戸生れ。中村不折、満谷国四郎に学ぶ。「エロシエンコ像」「老母像」など。

＊中村要吉（なかむら　ようきち）
1880～1939　アイヌ民族の先覚者、アイヌ名イペチカレ。十勝の上士幌町に生れ、少年の頃奉公に出てアイヌ民族と和人の風習の違いなどを知る。同族の中に改善の必要を感じ日本語と文字を学んだ。1901年音更に戸長役場が設置されたのを機に、アイヌコタン百数十名の戸籍の整備に協力し、全員の和名の名付け親となった。一方、旧土人給与地の拡張にも努力した。さらに小学校の設置に奔走、子弟の教育の場として1906年音更尋常小学校の開設に尽力した。

＊中山正男（なかやま　まさお）
1911～1969　北海道佐呂間町生れ。専修大学に進学したが中退し、平凡社の下中弥三郎に見い出されて雑誌『維新』や『陸軍画報』の編集に従事した。日中戦争に陸軍の嘱託として従軍、昭和14年『脇坂部隊』を刊行、同17年に自伝小説『北国』を著した。戦後、公職追放となり、解除されて事業を興す一方で同27年『馬喰一代』、翌28年『馬喰一代風雪篇』を出版、大映で映画化された。日本ユース・ホステル協会長、新理研映画社長を務めた。尾崎士郎の『春の原始林』のモデルである。夫人の妹が歌人金子きみ。

＊成田れん（なりた　れん）
1927～1959　歌人。筆名成田れん子。苫小牧市生れ。乾性肋膜の病床の中で作歌を続け、歌集『女王蜂誕生』『笛を吹く魚』を発刊。死を賭しての恋愛、結婚、出産の生涯とその作品は詩人浅野晃が「天上の炎」と高く評価した。没後歌友らによって歌集『哀郷のうた』が刊行された。

＊ニールス・ボーア
1885～1962　コペンハーゲン大学で水の表面張力の研究をし、1906年にデンマーク科学アカデミーの金メダルを受賞。1911年には金属中の電子の振る舞いを説明する理論で博士号を取得。1913年、プランクの発見したエネルギーの量子的不連続が、原子の内部にも存在することを発見。「ボーアの原子模型の理論」といわれている。1920年コペンハーゲンに設立された理論物理学研究所の所長に就任。翌年元素の周期律の理論を発表し、ノーベル物理学賞を受賞。1927年、相補性原理を発

表。この量子力学の解釈はアインシュタインなど多くの物理学者との論争を生み、何度も議論が繰り返されたことは有名。

＊西川光二郎（にしかわ　みつじろう）
1876〜1940　社会主義者、修養家。兵庫県淡路島で生れたが、開拓者を夢みて札幌農学校に進学。ここで新渡戸稲造と出会い社会主義に関心を持ち、札幌に用なしとして東京に移り、雑誌、新聞の編集を手伝い、1901年安部磯雄、片山潜、幸徳秋水等と社会民主党を創立。四度の入獄弾圧に会った。出獄後『心懐語』を書いて過去の運動を否定。松村介石の日本教会に入会し『道』や『道話』の編集に携わった後、1914年自ら自働道話社を興した。

＊西田天香（にしだ　てんこう）
1872〜1868　滋賀県長浜生れ。北海道で開墾事業に従事した後、大正2年京都市鹿ヶ谷に、宗教体験にもとづき「無我」と「離慾」と「懺悔」に徹する実践道場「一燈園」を開設した。思想の系譜は禅、トルストイ、アシジのフランシスコの影響を受け、実践は六万行願を中心として有縁の地に出向いて便所掃除などの奉仕、精神修養の行とする托鉢生活である。共鳴者が多くその中に倉田百三や谷口雅春がいた。大正9年「一燈園」を山科に移し、教育文化事業のほか生産事業を経営した。昭和22年参議院議員。

＊新田恒雄（にった　つねお）
農業水産省北海道農業試験場主任研究官（土壌微生物学専攻）、近畿中国四国農業研究センター企画調整部研究企画科長歴任後、現在農業・生物系特定産業技術研究機構東北農業研究センター畑地利用部長。

＊二宮尊親（にのみや　たかちか）
1855〜1922　現在の栃木県今市市で、二宮尊徳の子尊行の長男として出生。父尊行の死後、明治10年興復社を設立（尊親は副社長）、相馬地方農村立て直しを図る。しかし興復社の資金回収不能のため事業は困難となった。興復社再建のため同29年北海道開拓を決意。牛首別原野を事業地とし、翌30年第1期入植者15戸が入植。又本人も豊頃町茂岩に居住した。幾多の事業を続け東京にて病死した。

＊ノー・ティル農法（不耕起栽培）
不耕起栽培は畑を耕さずに栽培することであるが、環境と共生する継続可能な農業のための技術として注目され、根圏生物、根圏微生物、雑草との共生による栽培法が各種作物で研究されている。不耕起栽培を続けることにより、土は機械耕起より団粒化し、軟らかく、崩れにくくなる。アメリカでは大規模に不耕起栽培が行われているが、遺伝子組み換えによる除草農薬耐性種子との組み合わせで作業効率を高めている。

＊ノートルダム寺院
12世紀聖母マリア崇拝の気運が高まり、フランス各地に建立された寺院。「我が貴婦人」という意。

＊ノーフォーク農法
11〜13世紀の中部ヨーロッパは大開墾時代と呼ばれ、耕地が急速に拡大した。鉄製農具の普及、重量有輪犂の利用、役畜の繋駕法の改良、馬の蹄鉄の使用などが普及して深耕が可能になった。小麦畑（秋畑）のほか、役畜の飼料用作物としての燕麦栽培（春畑）、地味の回復をはかる休閑地による三圃制が取り入れられた。イギリスのノーフォーク地方では、地主階級による新農法の研究が盛んに行われカブ栽培、条播機の発明により、穀物に根菜類や牧草をまじえた四圃輪栽式が実施され、ノーフォーク農法として各地に広められた。刈取機や脱穀機などの農業機械も開発されて、イギリスは農業先進国としての地歩を固めた。

＊ハーグ条約
捕虜の取扱いに関する条約。１８９９年ハーグ平和会議での陸戦条約で規則が初めて成文化された。条約によれば、捕虜とは戦争で敵に捕らえられた場合、軍事的理由で自由を拘束される者をいい、国際法上殺人者として扱われることなく、一定の待遇が保証される。捕虜とは軍に帰属する者、軍に属さなくても軍の証明書によって従軍活動を許された者、軍事上または政治上重要な地位にある者（元首、大臣など）を含み、一般人民は拘留されても捕虜とされることはない。捕虜に対しては人道的取扱い、復仇措置の禁止、給養の義務、一定条件下での外部との通信、軍当局との交渉などを保障しなくてはならない。また、条約には捕虜情報局の設置、捕虜救恤協会の地位なども規定されている。

＊パーソントリップ調査
どのような人が、どのような目的で、どこからどこへ、どのような時間帯で、どのような交通手段で移動しているかを調べるもの。

＊バーナード・リーチ
１８８７〜１９７９　香港生れのイギリス人。１９０６年ロンドン美術学校に入学。１９０９年来日し、東京上野桜木町に居を構えてエッチングを教える。その後、陶芸に魅かれ六世乾山に師事し、七代乾山の皆伝目録を受ける。帰英後、セント・アイビスのリーチ窯を本拠として制作活動を続ける。

＊ハイデ
リューネブルガー・ハイデは、リューネブルグの南西地帯に広がる２００平方キロメートルの原野（＝ハイデ）の呼称。１９２０年ドイツで最初の自然保護区として指定される。保護区は自動車の進入禁止地区。８月の半ばから９月半ばに赤紫色のエリカ（荒野、湿地帯に生える低木で英語でヒースの名で知られる）で染まるハンブルグからハノーファー迄の10都市をつなぐエリア街道の

中に位置する。

＊葉隠

鍋島藩（佐賀県）藩士山本常朝の談話を田代陳基が筆録した『葉隠論語』。『鍋島論語』ともよばれる『葉隠聞書』全11巻。江戸中期の武士の修養書とされ、1716年（享保元年）にできた。

＊萩原朔太郎（はぎわら　さくたろう）

1886〜1942　詩人。群馬県生れ。室生犀星と『感情』を創刊。特異な感覚の新しい口語詩の世界を開いた「月に吠える」に始まり、虚無と倦怠「青猫」を経て文語詩「氷島」に至る詩業は、近代抒情詩の頂点といわれる。

＊橋川文三（はしかわ　ぶんぞう）

1922〜1983　思想史家、評論家。長野県生れ。東大法学部政治科卒、近代日本政治思想史を専攻。著書に『日本浪曼派批判序説』『歴史と体験』『順逆の思想』『昭和維新試論』など。

＊バチェラー

ジョン・バチェラー参照。

＊八田三郎（はった　さぶろう）

1865〜1935　肥後国熊本藩士中村家に生れ、国文学者八田知紀の養子となる。東京帝国大学理科大学動物学全科の選科に入学、明治24年卒業。同37年札幌農学校助教授、東北帝国大学農科大学（現・北海道大学）教授となる。専攻は動物学で大正2年に発表した「動物地理学上の北海道の位置」では日本の動物分布の境界線は宗谷海峡に置くべきであるとし、これが動物相の「八田線」といわれるようになった。

＊羽仁もと子（はに　もとこ）

1873〜1957　青森県三戸郡八戸町（現・八戸市）生れ。東京府立第一高等女学校から明治女学校高等科に進学し、明治25年八戸に帰り、八戸小学校の教師となった。同30年報知新聞社に入社、日本最初の婦人記者。同34年同僚の記者羽仁吉一と結婚した。家庭を変えることによって社会を改良しようと同36年雑誌『家庭之友』（後に『婦人之友』と改題）を創刊し、家庭の近代化、社会改良のための啓蒙活動を行った。また、キリスト教精神による家庭的な人格教育を理想として、大正10年文部省令によらない「自由学園」を創立した。昭和5年『婦人之友』の読者による「友の会」を結成、生活改善運動を展開した。

＊バム鉄道

バイカル＝アムールシベリア第二鉄道の通称。バイカル湖の西タイシュットから沿海州のソビエットスカヤガバニ（ソフガワニ）まで結ぶ鉄道。1986年全線開通。建設工事は困難を極め、日本人シベリア抑留者などが強制労働を強いられるなど悲惨な歴史が刻まれている。

＊パラトゥ
アイヌ語で広い沼、もしくは沼の入り口の意。

＊ハローイング
整地。

＊比嘉春潮（ひが　しゅんちょう）
１８８３〜１９７７　沖縄県中頭郡西原村字翁長（現・西原町）生れ。明治39年沖縄師範学校を卒業して教職に就いたのち、沖縄毎日新聞の記者となり、伊波普猷と知り合って影響を受ける。大正10年伊波を介して柳田国男と出会う。同12年上京。改造社に勤めながら柳田の主催する南島談話会に参加。青年時代におけるキリスト教、そして社会主義思想への傾斜、さらに社会主義運動への関心は、柳田らの研究者との巡り会いによって、沖縄の歴史や文化への関心に変わったのだという。昭和元年雑誌『民族』に「沖縄の神隠し」を発表、沖縄の民俗に関する論文や、『沖縄の歴史』で代表される歴史書を著している。

＊ピラ
二人挽鋸。巾1メートル。

＊平櫛田中（ひらくし　でんちゅう）
１８７２〜１９７９　木彫家。岡山県生れ。高村光雲等に学び、岡倉天心の影響を受けた。日本美術院同人、東京美術学校教授。

＊平田熙（ひらた　ひろし）
東京農工大学名誉教授。平田は施用された肥料燐酸の相当部分は、アロフェン粘土の一構成体であるアルミニウムと結合し、その存在比率は経年的に確実に増大していくが、その多くは作物に可給性であること、堆厩肥の投入はそれを促進すること、そしてその吸収過程に作物根圏に生息共生している土壌微生物の一種、菌根菌が重要な役割を果たしていると指摘。その有効化の機構解明によって、貴重な燐酸資源のリサイクルに根ざした作物生産に大きく貢献できるとしている。

＊フェスカ
マックス・フェスカ　１８４６〜１９１７　明治政府がドイツから招いた農林地質学者。農商務省地質調査書技師と駒場農学校教授を兼務。明治15年来日、同27年12年間の契約満期により帰国。国（県）別土性（土壌）図を作製。最初の甲斐（山梨）から、弟子に引き継がれ昭和24年の青森でようやく全国の土壌図を完成。

＊福本日南（ふくもと　にちなん）
１８５７〜１９２１　筑前国那珂郡地形下町（現・福岡市中央区地行）生れ。名は巴、のち誠、日南は号。明治9年司法省法学校に入学したが、同12年陸羯南、原敬らとともに退校処分を受けた。同14年から19年まで北海道で事業を試み、翌20年中国に渡るがいずれも失敗した。同21年陸とともに新聞『東京電報』、翌22年

『日本』を創刊して欧化主義に反対、国民主義を主張。日清戦争では戦地を視察して対外硬運動を展開した。フランス留学後の同38年『九州日報』第４代社長兼主筆となったが、同41年憲政本党所属で衆議院議員となった。同10年65歳で病没。安田巌城は日南の実弟。

＊不耕起栽培
ノー・ティル農法のこと。

＊伏根弘三（ふしね　こうぞう）
１８７４〜１９３８　明治７年、山惣乙名の家系であった父シャツナイ、母ベルプネの子として出生。アイヌ名ホテネ。和名安太郎、後に弘三となった。巨大な体格と風貌、義侠肌の性格から同族の信頼を得て、たちまちフシコアイヌの長となった。明治31年民族の団結、禁酒、教育の重要性を説くとともに、同34年私塾を開設。翌年伏古土人教育所とした。また自らキリスト教の洗礼をうけ、同族の青年２人を宣教師にそだてるべく函館に勉強させた。アイヌの地位向上のためしばしば上京。旧土人保護法の改正、アイヌ更生案の提出、大阪博覧会で見世物となった同族の奪還などの闘いを続けた。昭和13年65歳にて死去。

＊藤原嘉藤治（ふじわら　かとじ）
１８９６〜１９７７　岩手県生れ。花巻高等女学校教諭時に宮沢賢治と交流を深め、賢治の演劇や音楽的要素に影響を与えただけではなく、長年の友として思想や人生観、作品形成にも深く関わった。賢治没後は全集や童話集の編集に加わり、詳細な解説と註解は後の賢治研究の礎となっている。

＊プラウニング
耕起。

＊フランシス・シャブスー
フランスの植物病理学者。１９３３年から45年間国立農業研究所で作物防除の研究をやり、定年後は多くの著書を残した。

＊古田謙二（ふるた　けんじ）
違星北斗が尋常小学校に入学した時の担任の教員は奈良直彌で、同じ学校の訓導だったのが古田。教員のかたわら俳句活動を続け、俳誌『緋衣』の主宰者をつとめた。差別視に悩む北斗のよき相談相手となり俳句の手ほどきをし、心がたかぶる時は散策にさそい話しを聞いて気持ちを落ちつかせた。１９２８年12月10日の日記に「夕方古田謙二先生がお出でになって一時間半ばかり居て下さった」と書かれている。北斗の死後、その枕元にあったカバンの中の遺稿類をまとめたのも古田で、これを後藤静香のもとに送り、１９３０年遺稿集『コタン』出版の原動力となった。

＊ペスタロッチ
１７４６〜１８２７　スイスの教育家。ルソーの影響を受け、孤

児の教育、民衆教育の改善に尽した。人間性の陶冶の基礎は家庭および小学校教育にあるとし、児童の自発的活動を重視する直感的方法を唱導し、社会改革は教育によってなされると主張した。

＊ホイットマン
１８１９〜１８９２　アメリカの詩人。従来の詩の定型を破る「自由詩」を駆使して、自然や民衆の生活、平和などを歌い、アメリカ民主主義の代表的な詩人とされている。詩集『草の葉』、評論『民主主義展望』など。

＊ホームプロジェクト教育
20世紀初頭アメリカに起こった学習指導の一形態。実際上の仕事（作業）を中心として、児童・生徒らが自ら計画をたて問題を解沢する実践的な活動を重視した教育。

＊北信連事件
昭和31年当時、北信連から当別農協に対して１７００万円の融資が行われたが、この資金が札幌缶詰株式会社に渡っていたとする不正融資事件をいう。北信連の系統該融資に背任などの疑いがあると北海道警察の捜査の手が入った。

＊北海道畑作経営技術研究所
昭和34年、中札内村農業協同組合、中札内村、北海道大学農学部が提携して設立。寒冷地における農業経営基盤の強化を目的に、経営形態、生産基盤整備、栽培技術の向上等を研究。中札内村は同60年にはいち早く「有機農業の村」を宣言するが、そこに至る実践活動に理論的基盤を提供してきた役割には大きなものがある。59年には帯広畜産大学と提携し、中札内村畜産研究所を設立している。

＊北海道農民同盟
戦後、農民生活の向上を目的に作られた運動。農民解放令のエネルギーが広範な同志を求めることに成功した。当初は北海道農村建設連盟で発足し、昭和22年北海道農民同盟としての第一歩を踏み出した。農村民主化、農民の社会的地位向上が旗印。

＊北海道農業自立推進協議会
昭和20年から10年間、北海道は異常気象で農業は手痛い打撃をうけた。これに立ち向かうべく「人づくり、村づくり」を掲げて設立されたのが北海道農業自立推進協議会で、農業の共同化、法人化、営農集団なども進めてきた。又こうした実例を全国に学ぼうと「移動村づくり大学」を昭和34年から実施。農業にかかわりのある優れた人々の理論と実践を学んだ。２００３年解散。

＊渤海国
8〜10世紀中国北東部および朝鮮半島北部に起こった国。靺鞨族の首長大祚栄が建国。唐の文化の影響を受け栄え、わが国にもしばしば朝貢した。都は、上京竜泉府以下の五京にあった。

＊ポツダム宣言
１９４４年７月26日、ポツダムにおいて米、英、中三国の名で（のちソ連も対日参戦と同じ参加）発せられた日本に対する降伏勧告の宣言。日本の軍国主義の除去、軍事占領、主権の及ぶ範囲、戦争犯罪人の処罰などについて規定している。日本は８月14日これを受諾した。

＊穂積五一（ほづみ　ごいち）
１９０２〜１９８１　社会運動家。愛知県生れ。東京大学法学部を卒業後、学生の思想団体「七生社」の育成につとめ、その宿舎「至軒寮」の主監として留学生の面倒をみながら、アジア、民族運動にも参加。１９３６年皇道翼賛青年連盟不穏事件で反東条運動のため検挙された。太平洋戦争後は「アジア学生文化協会」「アジア文化会館」にかかわり、海外技術者研修協会の理事長に就き、国際交流基金奨励賞を受賞した。

＊ボトムプラオ
通常の反転板のついたプラオ。

＊捕虜通信
国際赤十字が間に入った往復はがきで「俘虜用郵便はがき」と印刷されていた。

＊ボルドー合剤
フランスのボルドー大学教授がブドウの盗難よけのため、硫酸銅と生石灰の混合液を散布したところ、産地で大発生していたベト病の被害がなかったことをヒントに試験を行い、明治18年にボルドー合剤を発表した。日本では同25年に初めて紹介され、同30年に茨城県のブドウ園で散布されたのが最初である。北海道では昭和初年代から硫酸銅と生石灰を調合して、手押し式の背負噴霧器で馬鈴薯・甜菜・水稲・果樹などの少数の作物に散布していた。十勝では特にテンサイの褐斑病防除に効果を発揮した。

＊本家三郎（ほんけ　さぶろう）
１９１０〜１９８８　石川県生れ。11歳の時渡道。昭和２年、音更町万年に移住し農業に従事、自作農運動に励む。同22年村会議員（４期）、同38年町長選に当選、同51年辞任するまで14年間務める。この間、音更農協組合長、十勝川温泉観光協会長、森林組合長、土地改良区理事長、十勝町村会副会長などの重責を担った。

＊本郷新（ほんごう　しん）
１９０５〜１９８０　札幌市生れ。東京高等工芸学校（現・千葉大学）彫刻部に入学。昭和２年卒業、この年の国画会第１回展に「女の首」を出品、初入選した。高村光太郎に師事して古典研究をなす一方で、ロダンやマイヨールなどの彫刻に刺激を受け、同14年佐藤忠良、山内壮夫ら七名で新制作派協会彫刻部を創設した。

戦後は平和運動に積極的に参画、同28年戦没学生記念像「わだつみのこえ」を制作、日本平和文化賞を受賞。代表作に「哭」があるが、「嵐の中の母子像」「風雪の群像」「太陽の讃歌」などは、北海道の牧歌的自然とキリスト教信仰を背景とする芸術思想の結晶といわれている。高村光太郎賞、中原悌二郎賞の選考委員となると共に、全道展の指導的立場にあった。

＊本名宗三郎（ほんな　そうさぶろう）
帯広町第一期の町会議員。帯広で呉服商を営み、明治40年大通南14丁目に三星木工場を開業。のちに本名木材となる。代議士本名武の祖父。

＊本間一夫（ほんま　かずお）
1915～2003　増毛町生れ。関西学院卒。5歳の時病で失明。昭和15年私費で日本初の点字図書館「日本盲人図書館」を開設。平成3年まで館長。点字図書15万冊、録音図書40万冊を完成。ヘレンケラー教育賞（昭和37年）など。

＊マキ牛
乳牛の繁殖法の一種である「マキ牛繁殖」は、種牛と雌牛を混牧することで、人工受精を用いることなく、牧野での自然交配によって種をつけることを意味している。放牧牛群中に放される雄牛のことをマキ牛という。この方法は日本では林間放牧とともに行われてきた。また、森で放牧される牛は、森林生態系の重要な一員として、下草を食み、ひづめで地面を耕し、排泄物で土壌を肥やし、森林の保続にも少なからぬ貢献をしていた。

＊牧野信之助（まきの　しんのすけ）
1884～1939　福井県生れ。明治36年武生中学校卒業後、代用教員を経て、京都42年京都大学史学科選科に入学、同45年に修了後、石川県立師範学校教諭となった。福井県史編纂掛主任、滋賀県史編纂主任を兼務し、以来、堺市史編纂長、北海道史編纂長、その後大津市史編纂監修など各地の郷土史編纂にたずさわった。昭和8年からは京都帝国大学文学部の講師となり、この間『弘法大師伝之研究』『武家時代社会の研究』などを著した。

＊増谷文雄（ますたに　ふみお）
1902～1987　福岡県小倉市（現・北九州市）生れ。大正14年東京帝国大学文学部教学科を卒業。昭和17年浜松高等工業学校教授、22年東京外事専門学校教授に転じ、東京外国語大学になるにともない、同大学外国語学部教授となった。専攻は仏教を中心にした幅広い宗教学、宗教史。停年退官後、大正大学文学部教授、都留文科大学長となった。

＊増田誠（ますだ　まこと）
1920～1989　山梨県都留市生れ。山梨師範卒業。陸軍中尉として釧路に駐屯。終戦後、十勝清水で帰農のかたわら看板業を営む。昭和25年上野山清貢に画業師事。昭和30年釧路に移る。

栗林氏の後援で貨物船でフランスに渡り画を修行。長くパリに身をおき制作に励んだ。

＊松毛虫
大型のガ類の幼虫を松毛虫という。マツ類の針葉を食べる。密度が少なければ古い針葉を選んで食べるが、大発生すると新葉を食べるようになり、アカマツやクロマツの成長を減退させる。マツの大植林とともに１９００年頃から日本の各地で発生が目立つ。

＊松宮春一郎（まつみや　しゅんいちろう）
１８７５（明治８）年三重県生れ。磐城電気、馬来護謨栽培等の会社経営にたずさわる一方、１９１８年世界文庫刊行会を創立して会主となり出版業に参入、金田一京助著『アイヌ聖典』『アイヌラックルの伝説』等の出版元となる。

＊マニュアスプレッダー
家畜糞やコンポストなどを牧草地に散布する装置。

＊真山青果（まやま　せいか）
１８７８〜１９４８　劇作家、小説家。宮城県仙台市生れ。上京して小栗風葉の門に入り『南小泉村』で一躍有名になる。大正期に劇作に転じ、歴史劇を発表、多くの名戯曲を世に送る。

＊マリツェフ
１８９５年ソ連生れ。クルガン州の農事試験場で農学者として働いていた当時、早ばつで収穫が失われたコルホーズの収穫を救ったことで名をなした。一度も正規の農学教育をうけたことはなかったが、実際的な理論で、土壌を破砕して水分の散逸を促す現代的な犁耕法をすすめた。１９５６年レーニン記念ソ連邦農業科学アカデミー名誉会員となった。

＊マンロー
１８６３〜１９４２　イギリス人医師、人類学者。明治25年来日。昭和５年からアイヌ調査のため平取村に入り、その後定住して調査研究にあたった。著書に『アイヌの信条と文化』がある。

＊三沢正男（みさわ　まさお）
音更町の酪農家。元道議会議員。洞爺丸台風で遭難。妻は清水町に在住したフリードリッヒ・コッホの娘。

＊宮沢清六（みやざわ　せいろく）
１９０４〜２００１　岩手県花巻市生れ。宮沢賢治の実弟。長男賢治にかわって家業の商業を継ぎ、賢治の作品群を広く世に紹介する活動に力を注いだ。数次に及ぶ賢治全集の編さんや発刊に尽力、宮沢賢治記念館建設時には約３５００点の賢治資料を花巻市へ寄贈した。

＊宮崎濁卑（みやざき　だくひ）

１８４８〜１９１７　富山県生れ。土人開墾事務所勧農指導員。明治12年渡道。同18年札幌県が伏古村に開設した土人開墾事務所に着任。退官後も伏古村に留まり、同地開墾の草分けとなった。また、多数の公職に付き、一生をアイヌの農業指導、生活指導、移住者への援助に捧げた。

＊宮本富次郎（みやもと　とみじろう）
明治17年和歌山生れ。明治36年帯広に移り、食料品店を始めたのを振り出しに、大正６年宮本精米所、帯広酒造合資会社、同12年醸造合資会社を設立した。その後多くの事業を手がけ、又組織の代表となるなど、帯広創成期の代表的経済人。

＊麦屋節
富山県五箇山から岐阜県白川郷一帯に行われる祝儀唄。三味線（二上がり）、胡弓、四ツ竹、鼓などの伴奏で明るく軽快に歌われる。この唄の発祥を平家の落人とする説もあるが明らかではない。またこの唄の源流は能登の輪島地方で歌われていた、そうめんづくりの仕事唄といわれている。

＊ムジーク
ロシアの帝国時代の農民。

＊ムッター・シューレ
古くからドイツにある「主婦学校」。18歳以上の志願者の婦人が共同生活の中で家事労務の実際を鍛練する一方、実社会で必要な育児、看護、経済、栄養、料理、公衆衛生などを学ぶ。

＊明治節
明治天皇の誕生日に当たる11月3日。四大節の一つ。１９２７年国家の祝日として制定、１９４８年廃止。

＊メノナイト教会
メノナイト教会は宗教革命の時代にオランダの宗教改革者メノ・シモンズの指導で生れ、アメリカで発展、無抵抗・非戦平和主義で知られている。日本での伝道は北海道から始まった。

＊モーア
牧草、雑草の刈り取りに使う農機具。トラクターに装着に草刈り作業をする。バリカン式、水平回転刃式のものがあり、フレール型のモーアは牧草の刈り取り、反転、ひろい上げにも利用できる。

＊モルドボールドプラオ
土を反転する時に、土が付着しないように樹脂板をつけたプラオ。

＊矢島武（やじま　たけし）
１９０９〜１９９２　旭川市生れ。北海道帝国大学農学部卒。北大助教授、教授、農学部長を経て昭和47年退官。名誉教授。旭川大学学長。中札内村の北海道畑作研究所の初代所長でもあった。

＊保田与重郎（やすだ　よじゅうろう）
1910～1981　文芸評論家。著書『万葉集の精神』など。

＊安田巌城（やすだ　がんじょう）
1863～1928　熊本県生れ。福本日南の実弟。郷土史、アイヌ文化研究者、歌人。明治31年渡道し、河西支庁第二課拓殖係となった。伏古コタン付近に住んでアイヌ調査に取り組み、『十勝地名解』『十勝史』などを執筆した。

＊柳田国男（やなぎだ　くにお）
1875～1962　兵庫県神東郡田原町（現・神崎郡福崎町）生れ。明治33年東京帝国大学法科大学政治科を卒業、農商務省農務局に勤務。その後、内閣書記官記録課長、貴族院書記官長を歴任し大正8年辞職。この間民俗学研究に興味をいだき、同43年『遠野物語』を刊行。大正2年最初の民俗雑誌『郷土研究』を創刊した。大正9年東京朝日新聞社客員を経て、同13年朝日新聞社編集局顧問論説担当となった。民俗学研究についての著作を次々と発表。昭和16年日本民俗学の建設と普及の功により、朝日文化賞を受賞。戦後枢密顧問官となったが、翌22年自宅に民俗学研究所を開設し、24年日本民俗学会を創設、初代会長に就任した。26年国学院大学大学院教授。その学問は各地を旅行し、特に庶民生活の中に伝わっている土俗、習慣、伝説をさぐり、歴史的関連を明らかにし、さらに口承文芸や方言などから古代生活の解明につとめた。民俗学のみでなく国語、国文学上の業績も極めて大きい。

＊柳宗悦（やなぎ　むねよし）
1889～1961　東京帝国大学哲学科に入学、『白樺』の創刊に加わり美術評論などを寄稿する一方、ブレイクやホイットマンに傾倒した。李朝の焼物に魅せられて大正5年朝鮮に旅行。美術の研究を通じて朝鮮への理解を深め、三・一独立運動に際して日本の朝鮮政策を批判した。民衆の信仰や生活道具の中にひそむ美を発掘しようとし、木喰上人の彫刻を手がかりに日本の美にも目を向け「民芸」の語を創出して民芸運動を展開した。昭和11年日本民芸館を開設。

＊山内壮夫（やまうち　たけお）
1907～1975　年北海道岩見沢生れ。東京高等工芸学校（現千葉大工学部）工芸彫刻部に入学。この頃本郷新を通じ高村光太郎に出会い彫刻家を決意。1937年国画会同人となる。1970年中原悌二郎賞の選考委員。

＊ユダヤ・シナゴーク
ユダヤ教の（集会）礼拝所。

＊横井時敬（よこい　ときよし）
1860～1927　明治初期から大正期における農学会および農政の指導的人物。熊本県出身。東京駒場農学校卒業。東京農業大学学長、東京帝国大学教授、実業教育会副会長、農業教育研究

会会長など、農業教育事業を中心に広く農業界に活躍。

＊横光利一（よこみつ　りいち）
１８９８〜１９４７　福島県生れ。土木請負業の父と各地を転々として早稲田大学高等予科に入学したが中退し作家を志す。１９２４年川端康成、片岡鉄兵、今東光らと『文芸時代』を創刊。新感覚派とよばれる。１９２５年プロレタリア文学を仮想敵とした「形式主義文学」論の先べんをつける。１９３５年純粋小説理論を打ち出した。その後ヨーロッパに滞在し東洋と西洋の本質的な異和の観念に根ざした作品を発表する。

＊横山正明（よこやま　まさあき）
１９０９〜１９６６　北海道鵡川町生れ。終戦時に穂別村に勤め１９４７年民選村長として当選、戦後荒廃期に画期的な地域振興施策を行った。全国で初めての村営スクールバスの運行や無月謝の村立高校、村立国保病院や公民館の開設などのほか、農村電化と産業開発を期して「穂別のＴＶＡ」構想に取り組む。宮沢賢治の理想を信奉し、詩人浅野晃らとの親交から生活文化活動にも献身した。

＊吉田巌（よしだ　いわお）
１８８２〜１９６３　福島県相馬郡中村町生れ。16歳の時姉の嫁ぎ先佐藤正信の養子となった。明治42年吉田姓に戻し、25歳から音更小、芽室毛根小、虻田小、日高町荷負の各土人学校の教員を勤め、大正12年から帯広の庁立日新小の訓導兼校長となる。昭和６年同小の廃校まで勤務し、その後も帯広に居住。アイヌ研究に没頭した。

＊吉田武彦（よしだ　たけひこ）
昭和５年大阪生れ。同27年東京大学農学部農芸化学科卒。農業技術研究所化学部作物栄養科第１研究室長を経て、北海道農業試験場に勤務。

＊吉田十四雄（よしだ　としお）
本名太郎。大正９年旧大正村に三重県から父と入植したのは14歳の時。一家の開拓は失敗し、吉田は農業技術者の道を進む。文筆活動も続け昭和15年『百姓記』第一部を東京・牧野書店から出版。その後も第二部、第三部と続け、１９８１年『人間の土地』として農文協から出版した。

＊吉田絃二郎（よしだ　げんじろう）
１８８６〜１９５６　明治38年早稲田大学英文学科に入学。卒業後逓信局の嘱託となり、合間をぬって『六合雑誌』の編集を手伝い寄稿した。大正３年『早稲田文学』に発表した「磯ごよみ」で注目され、同６年の「島の秋」で認められ早稲田大学講師として教壇に立つかたわら多くの小説を発表。その作品の底に流れるのはキリスト教的人道主義に基づくもので、多くの青年男女に愛読された。

＊吉村博（よしむら　ひろし）
１９１１〜１９７８　十勝池田町生れ。旧制帯広中学卒。内原国民高等学校中退後父の吉村木材に入社。同社専務。その後会社は倒産。帯広市公安委員長、公民館運営委員長、消防団副団長を経て昭和30年に社会党公認で帯広市長に初当選。以来5期つとめる。ユニークなマチづくりで吉村市政の名を全国にとどろかせた。

＊米村喜男衛（よねむら　きおえ）
１８９２〜１９８１　青森県南津軽郡生れ。青森尋常高等小学校高等科を中退、明治45年北海道に渡った。アイヌ、モヨロ貝塚の調査、保護運動に従事、昭和11年北見郷土館の主事となった。同16年北海道帝国大学の研究員となり、同21年網走郷土博物館の館長に。この博物館は、米村が永年調査研究し収集した考古、民族資料を基にしたもので、昭和23年網走市に移管された。

＊４Ｈクラブ
昭和23年、米国の４Ｈクラブに範をとり、農村青少年の農業的改良および生活改善の組織。全国組織が発足するなど目覚ましいものがあった。農村青少年の激減、高校進学者の急増で、会員は減少しているが、４Ｈクラブの呼称は存続している。

＊ラーゲル
ソ連の強制抑留者収容所。

＊ラートハウス
ドイツ語で役場のこと。

＊落葉病（らくようびょう）
アズキ落葉病は昭和40年代に十勝地方で大発生し、その後全道に広がった。現在でも輪作年数を長くするしか有効な防除法はなく、抵抗性品種の育成が必要である。糸状菌（カビ）による病害。９月上旬頃から発生し病葉は激しく落葉。早期落葉は果実の肥大不良や軟化の原因になる。

＊ラディノ・クローバー
クローバーは一般にシロツメクサのことを指す。本来は「三つの葉」という意味のTrifolium（シャジクソウ属）をまとめて呼ぶ言葉で、トランプの模様にもこの特徴が描かれている。まれにみられる四ツ葉のクローバーは、十字架に見立てられることから幸福のシンボルとして喜ばれる。ヨーロッパ原産のマメ科の多年草で、優秀な牧草として世界に広がっている。

＊リーパー
新墾や土層改良に使う機械。トラクターの後方に装着し、頑丈な破砕刃を油圧操作することにより、硬盤を砕いたり、地山を軟らかく（リッパ耕起）したり、石礫を除去したりする。従って急傾斜地、石礫地、切土地の耕起に用いることが多い。

＊リービッヒ
１８０３〜１８７３　ドイツの化学者。ダルムシュタットの薬屋の子として生れた。ボン・エルランゲン両大学に学び、パリに行ってゲイ・リュサックの指導を受け、帰国してギーセン大学の教授となった。ここで化学・薬学の研究室的な教室をつくり、それまでの化学教育の方式を一新して、実験室を中心とする教育法を確立した。１８５２年ミュンヘン大学教授となり、死去するまでそこに勤めた。１８３７年頃から発酵を中心とする生化学的研究に興味を持ち、生体内で生産される物質に注目し、植物の生育と養分の関係について、リービッヒの最小の法則を提唱し、農芸化学の父と仰がれるに至った。

＊リフキン
ジェレミー・リフキン　１９４５年生れ。現代アメリカを代表する文明批評家。現在、地球温暖化防止財団代表、経済動向研究所所長。米国では連邦政府の政策決定に最も影響を及ぼす人物の一人とされている。

＊リリエンソール
１８９９〜１９８１。アメリカの政治家。ルーズベルト大統領のニューデール政策の一環としてテネシー河流域開発が公社（ＴＶＡ）によって行われ、１９４１年理事長に。公共投資による総合的資源開発として成果を上げた。アメリカ原子力委員会初代委員長。

＊ルーサン
中央アジア原産、豆科の牧草種アルファルファの別名。タンパク質含量が高く、カルシウムなどのミネラルも豊富で、牛の嗜好性も高いことから「牧草の女王」と呼ばれている。北海道では明治７年七飯勧業試験場で初めて栽培された。本格的に栽培が広まったのは戦後の昭和30年頃からで、同61年には1万ヘクタールを越えたが、北海道の酪農の中心である十勝、根釧に適した品種がなかったため、その後ほとんど増えていない。

＊ルーズバーン
酪農における成牛舎の構造の一種。周囲を柵で囲むだけの、最も簡素な方式。単位面積当たり建築費が安い、家畜が自由に運動でき、蹄肢病の発生が少ない等の特徴がある。他に、ストールバーン方式（繋ぎ飼い）、フリーストール方式がある。

＊Leberecht・Migge（レーベリヒト・ミィジエ）
１８８１〜１９３５　ドイツの景観設計家。１９２５年にドイツ・ニーダザクセン州のツェレ市（ハノーファーとハンブルの中間に位置）のゲオルグガルデン住宅団地（Georgsgarten residential complex）を設計した。

＊レス土壌
細砂質の堆積物。砂漠や氷河末端から結ばされてきた風積土で、

東ヨーロッパ平原南部やミシシッピー流域ではレス、黄土高原では黄土と呼ばれている。

＊ローマクラブ
１９６８年に世界の科学者、経済学者などが集まって活動を始めた民間組織で、環境、人口問題等の地球的規模で想定される人類の危機をいかに回避するかを探ることを活動目的とした。１９７２年発表の「成長の限界」はマサチューセッツ工科大学のデニス・メドウズ助教授らとの研究をまとめたもの。世界中で大反響を生んだ。

＊碌山美術館
長野県南安曇郡穂高町。彫刻家・荻原碌山の事跡を顕彰するために昭和33年４月開館。碌山は本名守衛。ロダンに心酔し生命感のある彫刻を残して、日本の彫刻会に新風をもたらした。作品等は没後、新宿の生家で碌山館として公開されていたが、昭和28年頃から美術館設立の気運が高まり、地元と全国の厚志により開館した。収蔵品に彫刻、絵画、書簡、写真のほか、友人だった高村光太郎、影響を受けた戸張孤雁や中原悌二郎、あるいはその精神を受け継いだ作家などの彫刻、絵画、関係資料などがある。

＊渡辺巌（わたなべ　いわお）
１９３２（昭和７）年生れ。三重大学生物資源学部名誉教授、明治大学農学部非常勤講師、東京農業大学客員教授、農学博士。「合鴨、アゾラ（和名アカウキクサ）、水稲同時作」（アゾラとは空中チッソを同化できる現在有機水田農法でつかわれている水性シダで共生的空中窒素固定作用がある）を提唱。

木呂子敏彦年譜

年　月	本人記事
大正3年3月	中川郡川合村池田市街地にて父敬一・母ケフの長男として生れる
大正9年4月	川合尋常高等小学校
大正15年4月	庁立帯広中学校（第四期生）
昭和6年4月	上川郡清水村下人舞小学校代用教員
昭和8年4月	河西郡御影村上旭小学校準訓導
昭和9年4月	徴兵検査、甲種合格第二補充兵
昭和10年4月	庁立十勝農業学校研究科
昭和11年4月	十勝農業学校研究科助手
5月	北海道庁学務部学務課社会教育主事補任官並補職
	昭和天皇行幸事務取扱
	旭川・帯広・札幌・函館御親閲のため式場並御立台整備担当班長
昭和13年4月	東京駿河台佐藤新興生活館編集部
	日本大学高等師範部地理歴史科（夜間）入学
昭和15年11月	佐藤セツと結婚
昭和16年3月	高等師範部卒業
4月	日大法文学部史学科
8月	函館重砲兵連隊臨時召集　宗谷要塞重砲兵連隊第一中隊配属

昭和17年4月　甲種幹部候補生　陸軍重砲兵学校（横須賀）
10月　見習士官　宗谷要塞重砲兵連隊第二中隊（樺太）配属
昭和18年8月　陸軍少尉
昭和20年8月　敗戦　陸軍中尉
8月30日　ソ連軍上陸軍使として大泊港
9月20日　樺太将校団と共にウラジオストク収容所抑留生活始まる
12月25日　モスクワ南方四〇〇キロメートルソ連タンボフ州ラーダ収容所
昭和21年8月　ソ連タタール自治共和国エラブカ収容所
昭和22年12月　復員船大安丸にて函館港上陸
召集解除
昭和23年10月　北海道教育委員選挙当選（全道一区）
昭和25年10月　北海道教育委員第二回選挙当選
昭和31年10月　同右任期満了　北海道農業自立推進協議会常任理事（会長高橋雄之助）
昭和34年10月　自立推進協議会主催移動村づくり大学企画して発足せしめ、
第一回二十日間コーディネーターとして参加
昭和35年8月　帯広市役所経済厚生部長
昭和46年10月　帯広市助役
昭和49年7月　帯広市助役退任
昭和50年4月　キロコ地域研究所　旭川大学地域研究所特別研究員嘱託
昭和60年3月　旭川大学地域研究所特別研究員解嘱
平成10年7月　帯広畜産大学非常勤講師
平成11年7月　帯広畜産大学非常勤講師
平成12年7月　帯広畜産大学非常勤講師

執筆年譜

著作の掲載順は原則として年代順としましたが、執筆年月が定かでないものもあり、また編集上の都合で目次の順としました。＊印の原稿及び随想・独言独語の一部については他の重複もあり、著作集に収めませんでした。

昭和9年　『朝日輝やく』
昭和11年　『槲の木』
昭和23年　『千家元麿さんの死と思い出』
昭和27年　『白主通信（1号～6号）』＊
　　『教育の前進のために』
昭和29年　『教育断想』＊
昭和30年　『北斗を憶う』
　　『光を掲げた人』
昭和31年　『魂は歩む・若き建設者』＊
昭和32年　『技術革新と教育』
昭和33年　『定時制農業教育の進展』
　　『村づくりと教育』
昭和36年　『北海道の学校と建築』
　　『独言独語』始める
昭和37年　『五人の青年がはじめた協業養豚』＊
昭和38年　『水と空気は日本一』
昭和41年　『伯父西田彰三と風船爆弾』＊
昭和44年　『昭和初期の伏古』
　　『北海道開発二眼レフ論』
昭和46年　北海タイムス連載『四季の声』
　　『ヨーロッパの地域開発』
昭和48年　『チューリッヒから』
　　『土地を生かす農業』
昭和50年　『青少年の師父』
　　『農民的酪農経営を実現しよう』
昭和51年　『欠かせぬ道東圏の視点』＊
　　『江差追分や子叩き唄がブルガリアにあった』
　　『わが魂の中の山河』
　　『賢治記念館を建てよう』
昭和52年　『木呂子史話（第1集）』＊
　　『校歌制定の思い出』
　　『誰かこの「若者」中原悌二郎に惚れる者はいないか』
昭和53年　『地方自治と地域農業の発展』＊
　　『季節制農業教育を推進して』＊
　　『十勝から北海道を考える』
　　『はみだし先生の思い出記』
　　『街の中から電柱を追放できないのか』
　　『活力ある大地に起つ農業発展の道を』
昭和54年　『木呂子史話（第2集）』＊
　　『中札内農協・くみあい30年の歩み』＊
　　『〈宮沢賢治〉との出会い』

『「近代主義の精算」を指摘』
北海タイムス連載『随想』
昭和55年
『ブルガリア始末記』
『還らぬ岬の防人たち』＊
『鳥の眼・ミミズの目から』
昭和56年
『口は目ほどにモノをいい』
『私の土地利用「開眼」(1)』
『私の土地利用「開眼」(2)』
『石勝線への提言』
『森林の中に農場あり・東ドイツ農業と矢島理論』
昭和57年
『小規模な農協をめざして』
『弱肉強食の論理から棲み分けの論理へ』
『高倉新一郎ノート・木呂子鉞弥縦横談』＊
『帯広・水談義事始』＊
『土地の利用こそ大切』＊
昭和58年
『アメリカ農業の沿革を考える』
『農民なくして食べものなし』
『水資源と私達の生活』
昭和59年
『宮沢賢治の卒業研究』
『知事公館の椅子』
『女性は生産の根元』
昭和60年
『柳田国男・北海道の旅を追って(上)』
昭和63年
『カール・ベック邸について』
『柳田国男・北海道の旅を追って(中)』
『柳田国男・北海道の旅を追って(下)』
平成元年
『本音からの提言』＊
『もう一つの連絡橋』
『森が土を作り水を作る』
『仮説「北海道芸術工科大学」学長の誕生』
『大地のものは大地に返せ』＊
『水耕思想の土壌肥料学から地球に優しい土壌肥料学へ』
平成2年
『ソ連抑留について語る』
『至誠至純の人倉田百三先生』
『地霊』
平成3年
『賢治結縁』
『流転人生―私のなかの歴史』
『いのちの大地に、いのちの食べものを』
平成4年
『大正山法華寺史』＊
『人と地域にやさしい地域づくり』＊
平成5年
『生命力溢れる大地を』
平成6年
『ニュートン的思考からの脱出』＊
『シベリア墓参の記』＊
平成10年
『忘れ得ぬ農人前橋真八郎翁』
『西帯広工業団地について』
『至軒寮の人々』
平成15年

御礼のことば

明治から大正にかけてキリスト教の精神世界では綱島梁川に対し、仏教精神では清沢満之といわれた一時代がありました。

清沢満之先生のお弟子さんとして知られる暁烏敏師がいます。主著として歎異鈔講話はじめ全五十巻を全集として今も明達寺から刊行が続けられています。偉大な教学者でした。

昭和四年、暁烏先生をお迎えして大谷女学校で講演をされたことがあり、その機会に帯広中学校でも全校生徒を前に講演がありました。その時のお話の中でパスカルのパンセの一文の紹介があり、その時の一語が私の心底をうち九十歳の今日に至るまで感銘の言葉として私の心の支えとなっています。

それは『真理を求むるものは常に若い』という一語でした。以来、真理を求める者は常に若い―を求道の志として生き続けてきまして、この間に書いたり話したりしてきたものを、この度一冊の本にまとめようということになりました。

ところが、この仕事にとりかかって見ますと、ずい分と長い時間がかかり、いかにご苦労を皆様におかけすることになるかが分りました。この一年、刊行委員会の杉浦委員長はじめ委員の皆様方にお世話になりっ放しご迷惑をかけっ放しの始末で、

ただただ感謝申し上げるのみでございます。別して、編集担当の佐藤隆則さんには、丹念な行き届いたご苦心の数々をおかけいたし、心にしみて有難うございました。

一介の老耄にすぎない小生の過去の作物をおこがましくも「著作集」などと銘打って刊行して頂くことになり、まことに気恥ずかしい思いでいっぱいです。

今、このように立派な本にして頂くことができました。沢山の発起人の方々には、ご賛同頂いたばかりか、暖かい友情とご支援を頂きましたことを心から感謝と御礼を申し上げ、ご挨拶といたします。

二〇〇四年一月

木呂子敏彦

木呂子敏彦著作集刊行会

〈あいうえお順〉

相沢英之
青山貞一
赤嶋昌夫
赤本秋博
安宅一夫
編田照茂
荒木幸造
有田宏
飯島栄一郎
飯島貞一
飯島正久
池田正勝
池本柳次
石川英夫
石黒弘
磯崎育男
磯崎良誉

伊藤勤
伊藤好一
伊東捷夫
伊藤登
稲木徳男
井上壽
岩井照清
岩野洋一
上野達
内田祐一
浦島久
江藤圭一
大井英則
大石嘉映
黄倉良二
太田一良
太田修教

太田善繁
大塚宏明
大坪省三
大野美樹三
大場博義
大場道也
大脇敏武
岡野友行
沖田信
奥田幸子
奥山賢一
小黒正夫
小田徹
小原吉雄
折笠秀勝
貝沢耕一
海保進一

加地康紀
加藤勉
金沢耿
金清典広
金子きみ
鎌田昌市
上村一朗
上村武弘
神谷忠孝
萱野茂
河合哲郎
河合正満
川田章博
川田淳
北倉清
橘井己好
木戸宏

君尹彦
京谷睦人
木呂子セツ
木呂子欣二
木呂子佳代子
木呂子悦
木呂子元彦
木呂子亮子
木呂子猛彦
木呂子真弓
木呂子豊彦
木呂子礼子
木呂子真彦
木呂子美樹江
工藤賢資
久保和彦
久保嘉治

熊代弘法
倉内佐知子
桑木崇秀
郷守
郷昌
香内孝司
香内和枝
合田隆司
河野和雄
越沢幸三
小島慶三
小玉勝敏
小藤計
後藤秀彦
後藤重男
小林正義
小林英嗣

小林純幸
小林誠一郎
小林康雄
小針豊
小森政男
斉藤晶
斉藤実
齋藤節子
斉藤省三
斉藤征義
酒井孝幸
坂井誠司
坂本和昭
作間勝彦
佐々木寅雄
佐藤寛次
佐藤正人

佐藤隆則
佐藤光春
佐藤宥紹
佐野勝次郎
佐野まさの
七戸長生
篠原孝
釋真照
新村捷策
陶久富吉
菅訓章
菅原一晴
菅原紀子
杉浦壽
杉目正尚
杉本久子
杉山勝彦
鈴木善三
鈴木富夫
須藤隆昭
砂川敏文
関寛
関口好文
世木沢誠

世木沢洋介
妹尾英美
高沢京子
高野文彰
高橋英双
高橋和男
高橋千尋
高橋幹夫
高橋義雄
高山光正
竹内準
竹熊宣孝
田島重雄
只石幸夫
立原宏要
田中正夫
田中康雄
谷正三
谷口笑子
千田時雄
千葉章仁
塚本俶
辻秀子
土谷紀明

堤寛治
角田実
津端修一
寺井睦久
寺山憲二
東城敬司
時田則雄
所輝雄
富岡浩二
富田友夫
富山和子
永井信
中川収
中川利若
中川義雄
中沢由幸
中島常允
長沼透石
中野益男
中山広雄
長山小夜子
浪内一洋
浪波弘
西岡正

西佐古求
西田秀夫
西俣亘
野口希彦
野崎政一
野田尚
野原玲子
野原一行
萩山深良
橋本友子
畠山勝
早坂裕庸
林光繁
原一夫
原芳弘
原田幸一
板東優
樋口裕康
平林英明
廣田正
福岡吉和
福田恵理子
藤本長章
堀田誠嗣

堀達也
堀稔
本家宏通
本田廣一
本間クミ
前田正明
増田正雄
町山一郎
松岡義和
松田之志
松原良輝
松本恵右
松本哲夫
松本博之
松本結麻
丸谷金保
三上博
溝口富次
嶺野侑
宮沢雄造
宮嶋望
深山真喜子
村上等
村上弥生

村瀬章
村田和夫
村田博
村松徳彦
茂古沼満
桃野作次郎
森達郎
森田寿彦
森本正夫
安田勲
矢野泰教
山口武敏
山口正
山口昇
山崎多嘉子
山田辰春
山田哲
山田英和
山田富士夫
山根策雄
山花豊
山花禮
山本克郎
山本忠次

山本順子
由井真人
横田光俊
横谷優一
横山宏史
吉田英則
吉田勝
吉田真弓
吉田勇治
吉田武彦
米山喜久治
米山将治
若木佳則
和田民次郎
和田政司
渡辺和寛
渡辺喜代美
渡部春治
渡辺藤男
渡辺三重子

木呂子敏彦著作集
鳥の眼・みみずの目

著　者　木呂子　敏彦
発行日　２００４年２月19日

頒　価　８０００円（本体＋税）

編集・発行　木呂子敏彦著作集刊行会
代　表　杉浦　壽
事務局　帯広市南町南７線２６番地
ふるさと十勝
ＴＥＬ　０１５５（４８）０７０８
ＦＡＸ　０１５５（４８）０７８８

題字　松本博之（福島県浪江町）
画　熊代弘法
印刷・製本　株式会社アイワード

※無断複製を禁じます。　乱丁・落丁はお取り替え致します。